エターナルブライト

owata

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エターナルブライト

【Ｎコード】
Ｎ８３７２Ｖ

【作者名】
ｏｗａｔａ

【あらすじ】
突如、世界に現れた謎の鉱石『エターナルブライト』。
超高エネルギー体を持つその鉱石は、新たなエネルギー源として注目されていたが
それは、Ｅ．Ｂ．Ｂ（エターナルブライトビースト）という凶悪な異形を生み出してしまった。
地上はＥ．Ｂ．Ｂへと浸食されて行き、人類は成す術もなくその数を減らしていった。
だが、Ｅ．Ｂ．Ｂに対抗すべく同じ『エターナルブライト』を利用した兵器を人類は生み出した。

対E．B．B殲滅用人型兵器は、『ホープアームズ（HA）』と呼ばれその名の通り人類の希望となるべく立ち上がった。

HAが開発されてから数十年の歳月が経ち、人類はHAによるE．B．Bの殲滅活動やシェルターといった身を守る術を手に入れ、少しずつ元の生活を取り戻していく。

そんな中、パイロット候補生である『未乃（みない）　晶（あきら）』は、E．B．Bの襲撃へと巻き込まれてしまう。

クラスで落ちこぼれであった彼は、新型HA『ι（イオタ）・ブレード』に搭乗し、E．B．Bへと立ち向かうことになる。

『ι・ブレード』と晶を待ち受ける、戦いの先に待つ『真相』とは――

第1話　ι・ブレード、始動　？

許せない――
絶対に、許さない――

目の前に繰り広げられた光景は、まさに地獄絵図だった。
建物は破壊し尽され、突如湧き出した異形達がうじゃうじゃと街中を埋め尽くしている。

見覚えのある機体が、無残な姿に変わっていた。
数匹の異形が、エサに這い蹲る蟻達のように、
機体をグチャリ……グチャリと気味の悪い音を立てながら食している。
あれは間違いなく、学校が保有していた兵器だ。

人の姿はもうない、ずっと前に見たここの光景はたくさんの人で溢れかえっていたはず。
今となっては形すらわからない瓦礫の下に、埋もれてしまったんだ。

何故……こんな事態が起きてしまったのか。
わけもわからず、無我夢中になって機体に乗り込んで、
コックピット越しから広がる光景に、ただ絶望するだけかと思いきや
ふと、怒りに近い感情が湧き出した。

許せなかった。

まだこの世界に希望を持ち、平和に暮らしていた人々を巻き込んだことを奴らの事を――

平然と人の命を奪っていく、Ｅ．Ｂ．Ｂの存在を――

「……俺に力を貸してくれ、ι（イオタ）・ブレードっ！」

戦うことを決意した少年は、ただ力強くスロットルを押し込み、機体を前進させた。

西暦２０００年。

『アッシュベル・ランダー』という天才科学者から、『エターナルブライト』という名の未知なる鉱石が発表された。

紫色の奇妙な輝くを放つ鉱石は、一見ただの綺麗な石でしかない。

だが、エターナルブライトには謎の超高エネルギー体が含まれており、それは地球上には存在し得ないものだった。

少量で莫大なエネルギーを持つことから、世界中から注目を浴びていた。

日本の近くに存在する無人島から発見されたエターナルブライトは、その日を境に無人島以外からでも発見されるようになる。
まるで世界がエターナルブライトを生み出しているかのように。

エターナルブライトが発表されてから3年後、その年を境に世界は大きな変革を遂げてしまった。
各国でエターナルブライトの研究を行っていた際、突如凶暴化した野生動物が研究員を襲う事件が多発した。
ネズミのような小動物1匹ですらも、人を噛み殺すほどの強大な力を手にしてしまったという。

原因は、世界各国で出現し続けているエターナルブライトにあった。
何らかの理由で、小動物等がエターナルブライトを体内に取り込み、その結果『未知なる生命体』へ進化してしまったのだ。

それらの凶暴化を遂げた生命体を、総称して『ＥｔｅｒｎａｌＢｒｉｇｈｔＢｅａｓｔ（Ｅ．Ｂ．Ｂ）』と呼ばれるようになり
Ｅ．Ｂ．Ｂは日に日に数を増し、一部においては巨大化を遂げて国を滅亡にまで追い込んでしまうほど力を持った。
Ｅ．Ｂ．Ｂは人類に対して明らかに敵意を持ち、自らの意思で人類に無差別で襲い掛かっていた。
現代の兵器では太刀打ちする事ができずに、もはや人々に成す術はないと思われた。

そこで、メシアと呼ばれる組織が対Ｅ．Ｂ．Ｂ殲滅用人型兵器の開発に成功した。
『ホープアームズ（ＨＡ）』と名付けられた兵器は、『エターナルブライト』の持つ高エネルギー体を動力源とした対Ｅ．Ｂ．Ｂ用の兵器である。
人々はＨＡを使い、Ｅ．Ｂ．Ｂの殲滅を行おうと激しい戦いを繰り

広げ続けた。
やがて自らを守る術を手にし、今は技術を応用したシェルター等を設けてE．B．Bの襲撃を回避しながら生活を行えるほど技術が進んだ。

だが、E．B．Bの脅威だけは完全に消えたわけでもなく、E．B．Bと人類の戦いは15年近く経っても続いている。
人とE．B．Bの戦いは、いつ終わるのか。
もしかするとこの戦いには、終わりが永遠にないのかもしれない――

「つまり、我々はシェルターの中で生活をしている身ではあっても、世の中にはシェルターが実装されていない地域も多々存在する。その為にも、我が国ではHAの開発には積極的に取り込んでおり、E．B．Bの討伐も優先的に行っているわけだ」

教師から語られる話を退屈そうに聞いている少年の姿があった。
今更小学生でも知っているような歴史を、どうして聞かされなければならないのか。
退屈で仕方が無かった。

ボサボサな黒髪に黒い瞳、眠そうにしているせいか目付きは悪い。
だが、バッチリと目を開けば綺麗な瞳をしている。
本人は自覚も無く台無しにしていることにも気づいていない。

少年の名は『未乃（みない）　晶（あきら）』。　今年で高校3年生を迎え、そろそろ進路にも悩みだす時期だ。
だが、晶は高校に入る時から既に進路を決めていた。
そう、今世間で話題となっているＨＡのパイロットだ。

晶の住む『第４シェルター東地区』では、ＨＡの開発が進められているものの、住民はＥ．Ｂ．Ｂに対する関心が薄い。
シェルターが実装されてからは、驚くほどＥ．Ｂ．Ｂの襲撃はなくなり、住民からしてみれば世界が平和に戻ったのと同然であった。

晶が通う『第４東地区文京高等学校』には、東地区では唯一『パイロット専用コース』が特設されており、晶は迷わず入学を決め込んだ。
平和ボケしたこの地域では、パイロットを志願する者は少ないが、パイロットの需要は絶えない。
そのおかげもあってか、晶はすんなりと入学することに成功した。

キーンコーンカーンコーン

退屈な授業が終わりを告げた。

「今日の授業はここまでだ。　パイロット専攻の生徒はシミュレーター室へ移れ、すぐに試験を行うぞ」

歴史を担当していた先生は、晶のクラスの担任も兼ねていた。
今日は一ヶ月に一度だけ行うＨＡの適正試験実施日だ。
学生である彼らは、本物のＨＡに乗せてもらうことはできない。
代わりにシミュレーターでの訓練が基本カリキュラムとして組み込まれていた。

シミュレーターは限りなく本物に近い動作をする。
だから、実戦でもそこまで違和感無くＨＡを動かせるはずだ、といつも担任からは聞かされている。

「晶くん、今日こそ頑張ろうね？」

一人の女子生徒が、気怠そうにしていた晶にそう声をかけた。
黒髪を赤いリボンで束ねたポニーテールに、どこかおっとりとした雰囲気の少女だ。

彼女の名前は『早瀬（はやせ）　木葉（このは）』
昔から晶の面倒をよく見てくれている幼馴染だ。

「……ああ、頑張るさ」

何処かやる気を感じさせない返事を返した。
成績に関わる重大な試験を前にしているというのに、何故こうもやる気をだしていないのか。

元々晶は、最初からこうであったワケではない。
１年目は何事も一生懸命取り込み、クラスでも優秀な成績を収めて良い評価を貰えていた。
但し、それは通常の学生としての評価でしかない。
パイロットとしての晶は、間逆の結果を生み出していた。

どんなに一生懸命シミュレーターを動かしても、成績はいつも最下位で毎度毎度補修を受けていた。
１年目、２年目と最下位を取り続けているものの、通常の成績がよかった点と欠かさず補修を受けていたことから

何とか進級だけはさせて貰えている。
努力が報われない、いくら頑張ってもシミュレーターの成績がよくならない。
晶は悔しくて仕方が無かった。
誰が悪いわけでもない、自分があまりにも才能が無かったのだから。
次第に試験そのものにやる気を感じなくなっていき、いつしか脱力した日々を送るようになってしまっていた。

「ダメだよ、晶くん。　今日は大事な試験なんでしょ？　もっとはりきって受けないと、いい成績とれないよ？」

「……わかってるよ、俺は大丈夫だから心配しないでくれ」

「本当に大丈夫？　一緒にいってあげようか？」

「いや、いいって。　木葉は自分のことだけ考えてくれよ、俺のことで悩む必要もないさ」

木葉のお節介は毎度の事であるが、出来れば今は自身に関わってほしくないという思いがあった。
高校3年生は進路に関わる重大な時期でもあるし、そろそろ木葉には自分のことに専念してほしい。
今までも晶のことを考えて、高校まで一緒になってしまったのだから。
木葉は成績優秀で、もっとランクの高い高校だって狙えたはずなのに。
晶はそんな後ろめたい思いを、抱え込んでいた。

「じゃ、行ってくる」

「う、うん。　頑張ってね」

まだ何か言いたげな表情で、木葉が笑顔でそう告げる。
少しでも……良い成績を取って見せれば
木葉も自分のことに、集中できるはずだ。
晶は少しだけやる気を取り戻し、シミュレーター室へと移動をした。

シミュレーター室へ移動すると、既に晶以外の生徒は集まっていた。
……いや、一人だけ足りない。
クラスでも問題児とされている生徒だ。
授業にはほとんど顔も出さず、クラスメイトだって認識はあまりない。
だが、パイロット適正試験日だけは欠かさず姿を現すのだ。

何よりも気に食わないのは、シミュレーターの成績が常にトップであること。
自分自身がこんなに努力しても最下位だというのに、どうしてサボってばかりの奴に負けているのか。
晶は、その生徒の事がとても気に入らなかった。

「よう、晶。　どうした、遅かったじゃねぇか」

「まぁ、な」

親友である『高野　竜彦』が、真っ先の声をかけてくれた。
昔からいじめられやすい境遇にあった晶を支えてくれていて、今でも世話になっている。
木葉とも幼馴染であり、最近では減ってしまったが3人でつるむことは多かった。

「おいおいしっかりしろよ、これから試験始まるんだぞ？」

何処か力なく、晶は項垂れていた。

「どーせまた最下位で補修さ、あんまり気が乗らないんだよ」

「スコア自体は伸びてんだろ？　お前のペースで進めりゃいいさ
言っとくけど前回よりスコア落としやがったら昼飯奢って貰うからな」

シミュレーターでの成績は、最終的に表示される5桁の数字で決まる。
操縦・反応・視野の3分野をそれぞれ数値化して、総合結果として計算される仕組みだ。
ある者は、操縦だけはトップクラス……ある者は反応だけがトップクラスという例も少なくは無い。
残念ながら、晶はどの観点においても最下位であるのは変わらなかった。

「あ、ズルいだろそりゃ。　お前が同じ事を言って受けるか？」

「俺なら受けるね、悪いけど今度こそトップを狙える自信はあるさ」

「毎度同じ台詞を吐いて、結局2位じゃないか」

「ハッハッハッ、そうだったな。　ま、お前が元気出して安心したわ。　頑張れよ、適正試験」

竜彦は決して晶のことを落ちこぼれだとバカにすることはない。
ただ、一歩ずつ前進をしている晶を誉めてくれていた。
それは決して上から目線ではなく、共にパイロットとして……成長していく仲間として
自分の成長を一緒に、分かち合ってほしいという想いがあった。

昔から、晶は竜彦に何処か憧れを示してた。
ケンカは強いし、スポーツも万能。
困ったときはいつでも助けになってくれて、とても心強かった。
勿論、シミュレーターの成績からその才能はパイロットであっても発揮されている。

「……絶対に、俺も一人前のパイロットになってやるんだ」

竜彦のおかげで、晶はようやく試験のやる気を取り戻したところで、教師が訪れた。

「白柳（しらやなぎ）がまだきていないようだが、試験を始めるぞ。　全員席に着け」

試験実施の準備を行うため、シミュレーター機へと搭乗する。
ちなみに白柳とは例の問題生徒であり、試験に毎度遅れるのはいつものこと。
教師自身もあまり気にしていなかった。

シミュレーターは実際のＨＡコックピット内を再現しており、両端のスロットルから各スイッチまで全て本物と同様だという。
機械には専用のヘルメットが搭載されており、そこから臨場感のある映像が出力される仕組みだ。
まるで本当に戦場でいるかのようなバーチャル技術は他の分野でも採用されており、
ＨＡ技術の発展は世界に貢献しているという証明にも繋がる。

「はじめっ！」

教師の合図と共に、試験は実施された。
試験の内容は、制限事件内にランダムに出現するＥ．Ｂ．Ｂをひたすら倒し続けるといった内容だ。
自機が撃墜されてしまえば、その時点でシミュレートは強制終了。
時間が残っていようが関係なくそこまでの結果が点数となる。

Ｅ．Ｂ．Ｂは攻撃を仕掛けてくる上に行動パターンは数億を超え、同じ行動は二度としないと思っていい。
つまり、実際に何をしてくるかわからないＥ．Ｂ．Ｂをその場の判断で対処して倒すというのが基本だ。
シンプルながら、かなりの実践向けの試験であるとも言えるだろう。

……晶は試験開始１分後に、シミュレートが強制終了された。
一人だけ虚しくヘルメットが外され、画面には５桁にも満たない数字が出力される。

「またか……」

晶は、落胆してスコア確認画面を見ようとしなかった。

「未乃、スコアを報告しろ」

「……８６７０点です」

しぶしぶと、画面に出力された数字を読み上げる。

何故こうも上手くいかないのか、ここまで才能が無いのも重症ではないか？

自分がパイロットに向いていないのかもしれない、それほどまでに晶は落胆した。

「また補修だぞ、未乃。　このままだと軍に引き取ってもらえん、もっと真面目に取り組むんだ」

「……どーせ俺には才能ありませんよ」

赤点ラインとして定められている数値は『１００００』。

去年の今頃では確かスコアは『７０００』ぐらいであったし、あがってるというのは確実だ。

だが、意味が無い。　結局赤点なのだから。

ちなみにクラスの平均は７００００～８００００。　とてもじゃないが、話にならない。

「才能のせいにするな、命を懸けて戦うことを自覚しろ。　今のお前はただ何となくシミュレーターを動かしている一般生徒と大差がない。

お前に足りないのは気持ちだ、本気になっていないんだ。　もっと自覚をしろ、お前はシミュレーターで何度死んでいると思っている？」

「……はい、すみません」

「今日の放課後は残れ、早速補修に取り掛かる。　1日でも早く追いつくように努力しろ。
もはや他の生徒と同じ事をやっても追いつかないんだ、人の倍以上に訓練を積め……死ぬ気で訓練しろ」

毎度ながら、同じような事を言われている晶だが、自身では努力をしているつもりだった。
1年生のときは、毎晩遅くまでシミュレーターに没頭していた。
シミュレーター以外にも体作りにしっかり取り込んだ、持久走だって筋トレだって何もかも真面目に取り組んでいったはずだ。

それすらも、認めてもらえない。　努力が報われることが無い。
晶はただ、今の自分に落胆するばかりだった。

「悪い先生、遅れた」

「遅いぞ、試験はとっくに始まっている」

晶が席を立つと同時に、ガラガラと教室のドアを開ける生徒が目に飛び込んだ。
茶髪に赤い瞳の何処か奇妙な雰囲気を持つ少年、例の問題生徒である『白柳（しらやなぎ）　俊（しゅん）』だ。

「んじゃ、またハンデってことで」

教師にニカッと笑いかけながら、俊はシミュレーター席へと搭乗し早速試験を開始した。

既に3分ぐらいは経過しているはずではあるが、気にしてはいない。
毎度これくらいの時間を遅らせながらも、成績はトップを収めている。
普段からサボってばかりいるクセに、どうしてこうも成績がいいのかと考えると晶は腹立たしくて仕方が無かった。

数分後、全員が同時にヘルメットを外した。
途中で脱落したのは、晶だけ。
毎度ながらの光景であるといえど、晶にとっては辛い時間であることには変わりは無い。
その度に、自分のことが惨めだと感じてしまう。

「各自、スコアを報告しろ」

「７８０００です」

「俺は８００００だっ！」

「６５０００……クソッ、今日はダメだった」

各自がそれぞれ結果を報告している。
どれも晶にとっては遠すぎる数値であった。
これ以上聞きたくない、と晶は目を閉じて耳を塞ごうとした。

「先生ー、またカンストしちまってるみたいなんですけど」

晶はハッとして、その声の主に目を合わせる。
やはり、白柳　俊だった。

「……なんでだよ、クソッ！」

ガタンッと大きく音を立て、晶は立ち上がる。
暢気に座って、笑いながらスコアを報告してる俊に向かって歩みだした。

「……お前、何なんだよっ！」

「ん？　お、ビリッケツちゃんじゃないか。　どうしたー今日はスコア伸びたか？」

物凄い剣幕でやってきた晶に対して、まるで何も感じ取ってないかのようにそう返した。
その人をバカにするような態度、口調。
晶はその全てが、気に入らなかった。

「バカにしやがって――」

その顔面を殴り倒してやろうと大きく拳を振り上げた。
だが、ガシッと振り上げた手は押さえられてしまう。

「何だ、ケンカしたことねぇのか？　やめとけって、お前じゃ俺に絶対かてねーから」

「クッ……この野郎っ！」

頭に血が上りきった晶は、我慢ならなかった。
何が何でも、こいつを殴り飛ばさないと気がすまない。
この手で、殴ってやりたいと強く願っていた。

ただの嫉妬でしかないのかもしれない、だけど晶は俊を許せなかっ

た。
試験には毎度のように遅れて開始して、それなのに優秀な成績を収める彼のことを。
真面目に取り込んでいる竜彦が、こんな奴に負けてしまっていることが納得できなかった。

「どーせ不正でもしてんだろ、この機械に何かしてんだろっ！」

「はぁ？　何かと思ったら言いがかりかよ」

「お前みたいな奴が、こんな成績取れるわけ――」

「未乃、やめろ。　不正は無い、これは正真正銘の実力だ」

止めに入ったのは、教師だった。
二人の間に入り、晶自身にそう告げる。

頭の中では、そんな事はわかっていた。
この機械の技術は相当複雑な作りで、個人が不正を働かせるように細工をすることはまず不可能だ。
よほどシミュレーターに詳しくない限り、そんな事は実施できない。
それにシミュレーターは毎度ランダムだ、いつもピンポイントに自分の席だけに細工を行うなんて無理だった。

晶は、力なく拳を降ろした。
歯にギリギリと音を立てながら、血が滲み出るほど拳を強く握るだけだった。

「……なぁ、楽しくやろうぜ？　お前だって、楽しんでるだろ？
高得点とって仲間と競い合う試験なんて、楽しすぎてしょうがねー

だろ」

まるでゲームか何かと勘違いしてそうなその言葉に、ますます晶の怒りは膨らみ続けるばかりだ。

「悪いな白柳、晶はちと疲れてんだよ、試験前も調子悪かったみたいだからさ。　俺も後からアイツには言っとくぞ」

丁度隣に座っていた竜彦は、笑顔で俊にそう告げると「そうか」と満足そうに教室を出て行った。
何故ここまでバカにされて、竜彦は笑っていられるのだろうか。

「なぁ竜彦、お前は悔しくないのかよ。　その、あんなサボリ魔に負けちまってさ」

「んーまぁな、でもパイロットってのは何よりも実力が重視されるのさ。　性格に難があっても、あの腕なら間違いなくメシアに即採用だろうな」

メシアとはＨＡを用いてＥ．Ｂ．Ｂを討伐する軍の総称であり、パイロットコースの最終目標がその軍に採用してもらうことにある。
竜彦が言うには、白柳という男はもはや実戦に耐えうるだけの実力を持っているらしい。

「そんなに凄いのかよ、白柳って奴」

「あいつのシミュレーターの映像を見せてもらえば一目瞭然だ。
残念ながら、あいつは本物の天才さ」

「……そう、なのか」

親友の口から告げられるということは、事実なのは間違いない。
晶は眉間に皺を寄せながら、ただ頭を捻らすだけだった。
やはり、納得できるはずが無い。

ビーーーーーッ！

突如、学校中に警告音が鳴り渡った。

『東地区にE．B．Bが大量発生しました。　繰り返します、東地区にE．B．Bが大量発生しました。
これは訓練ではありません、直ちに全校生徒は避難してください。
繰り返します――』

誰かの悪戯かと思いきや、校内放送がそれを真実であると告げていた。

「E．B．Bの大量発生だって？　な、何を言ってるんだ？」

シェルターで完全に守られているこの地区に、E．B．Bが入り込めるはずが無い。
シェルター技術が導入されてから、約5年は経過するがそんな事態は一度も無かった。
シミュレーター室の生徒が、ざわつき始めた。

「落ち着け、勝手な行動はするんじゃないぞ。　私が今避難経路を確認する、各自は待機していろ」

教師は冷静に生徒達にそう告げると、部屋の通信機器を使って外部との連絡を取っていた。

だが、生徒が大人しくしているはずもない。
ざわざわと騒ぎ立てて、状況を理解できずにパニック状態に陥る者さえいた。

「晶、大丈夫か？」

「い、今ニュース確認してるよ」

晶はそこまで動揺しているわけでもなく、携帯を使って最新情報を確認していた。
丁度テレビでは、Ｅ．Ｂ．Ｂ襲撃に関する報道が取り上げられている。

『第４シェルター東地区にて、Ｅ．Ｂ．Ｂの襲撃っ！？』

太字のテロップで、そんなメッセージが出ていた。
学校の窓から外の様子を伺おうとしたが、別に異常は見受けられない。
まだ近くまでは来ていないようだ。

「何……そんなばかなっ！」

教師は突然、そう叫ぶと生徒は一瞬にして静まり返った。
表情は青ざめていた。

手に持った受話器を見つめ、そのまま目を閉じてたたき付ける様に電話を切る。
教師は数秒間その場から動かなかったが、やがて何かを決意したように振り返った。

「……お前達、政府からの出撃要請だ」

教師から告げられた一言を耳にし
晶を含む生徒達は、ただ呆然と立ち尽くすばかりだった。

ι・ブレード、始動　？

教師から告げられた衝撃的な言葉に、生徒達はただ呆然と立ち尽くすばかりだった。

「……どうした、怖気ついたのなら残れ。　そんな奴を戦場に出す気はない」

冗談を言っているようには聞こえない。
生徒達にそう告げる教師の目が、何よりの証拠だった。

「お前達も知っている通り、この地区には正式なメシア所属の人間はいない。　救護要請は行っているが、到着には時間がかかる。つまり、唯一ＨＡを所有しており、パイロット養成を行っている我々に政府から直々に討伐依頼が下された。
……怖気づいたのなら今すぐ学校を辞めろ。　お前達は、この日の為に訓練されてきた戦士だということを忘れるな」

ただでさえＥ．Ｂ．Ｂの出現で場が混乱しているのに、何故学生が討伐の為に出撃を要請されたのか。
こんな話は前代未聞で、他のシェルター地区ではそのような話は一切聞いたことが無い。
そもそもシェルターを破ってＥ．Ｂ．Ｂが進入したということ事態がイレギュラーだ、当然といえば当然であろう。

「死ぬ覚悟がある奴だけ、ついて来い」

教師はそう告げると、教室を静かに退室した。
まるで時が止まったかのような静けさが訪れる。
誰も、この場から動こうとしない。

それもそうだ、シミュレーターの経験しかない学生が、実戦で戦えなど無茶な話だ。
生徒達は生身でE．B．Bを見たことすらない。
本物を前にして、果たして恐怖心を抱かずにいられることができるのか？
あまりにも、無謀すぎる出撃要請であることは生徒自身も理解していた。

「……俺は、行くぜ」

そんな中、竜彦は一人動き出した。
顔は強張っており、手は小刻みに震えている。
未知なる生物に戦いを挑むことが、どれほどの恐怖なのかはこの場にいる全員がわかっている。
そうでありながらも、一番最初に名乗り出たのは、相当の覚悟がなければ出来ることではない。

だが、竜彦は成績優秀なパイロットだ。　教師からもメシアに間違いなく採用されると言われているほど。
そんな彼が、E．B．Bに立ち向かうのであれば……生徒達にとっては、とても心強かった。

「お、俺だって！」

「僕も行くぞ……」

「あいつに続けっ！！」

他の生徒達も、竜彦に続いて教室から出ようと歩みだした。
彼ならば他の者を引っ張っていけるだろう、候補生の中で一番リーダーに適正がある人物であることは確かだ。

だが、落ちこぼれの晶は思うように足が動かない。
自分が出撃しても、足を引っ張るだけかもしれない。
むしろすぐにやられて、死んでしまうのがオチだ。
今でさえ、こうやって恐怖心から動けずにいるのだから。

……だが、誰もが『死』を覚悟して出撃する決意をしたというのに自分だけ逃げるわけには行かない。
それに親友として、竜彦を一人で行かせたくもなかった。

「……やってやる、やってやるぞ」

ようやく、晶もその足を動かし教室の外へと出ようとした。
だが、それを待ち構えていたかのように教師がそこに立っていた。

チラリと、晶は横目で他の生徒達の後姿を目にする。
既に移動を開始しているようだ。
白柳　俊も、事態を察して場に戻ってきていたようだ。
一人だけ、楽しそうにヘラヘラ笑ってる姿が目に入った。

「未乃　晶、お前を出撃させるわけには行かない」

「……っ！」

教師から、衝撃的な一言が告げられた。

当然といえば当然だ。
シミュレーターですら満足のいく結果を出せないというのに、実戦で戦えるはずもない。
だが、晶は納得できなかった。

「俺だって……パイロットですよ」

「戦場に足手まといはいらん、他の生徒はメシアの基準値を満たしているからこそ許可をしている。
その基準値どころか、赤点ラインすら超えていない者を戦場に送るわけにはいかん。　どうせ、死ぬだけだ」

「でも、他の人だって皆同じだっ！　戦場に出たら死ぬかもしれないのは、同じだろっ！？」

「帰れ、未乃。　お前は戦力外だ、論外なんだよ。　悔しい気持ちはわかる、だが教師としてお前を出撃させるわけにはいかん」

「ふ、ふざけんな――」

バシンッ――

晶が拳を振り上げたと同時に、乾いた音が鳴り響く。
左頬に、強い衝撃が走り、晶は音もなく倒れた。

教師の平手打ちが強すぎたわけではない。
ただ、ショックだった。　悔しかった。
無力な自分を、今以上に憎んだことが今まであっただろうか？

「……クラスの者と合流しろ。　大人しく避難所へ向かうんだ」

晶はただ、横になったまま動かない。
教師は冷たい言葉を投げかけるだけで、静かにその場を立ち去っていく。

何故、出撃が許されないのか。
パイロット候補生の一人であるはずなのに、他の生徒は皆出撃するというのに。
全ては、自分の才能の無さだ。
努力は報われず、一向に上達することが無かった自信の腕のせいだ。

「……晶」

聞き覚えのある声が、耳に飛び込んでくる。
もはや顔を確認する気力すらない。
ただ、横になって俯いたまま。
悔しくて、涙した。

「一緒に戦えないのは、残念だと思うけどな。……木葉を、頼む。戦場に出てしまう俺は、あいつの傍にいてやれない。だから、お前が守ってやってくれ」

「……竜彦、お前」

晶は顔を起こし、目を合わせた。
しゃがみこんで、心配そうに晶の様子を伺っていた。
こんな惨めな姿を、見られたくは無かったのに。
……どうして、戻ってきたのか。

「やれるな？　お前なら、できるよな？」

木葉は晶の幼馴染であると同時に、竜彦の幼馴染でもある。
昔から三人でつるむことは多かった。
竜彦にとって木葉は妹みたいな存在であり、いつも大事そうにしていた。
晶のことも弟のように、可愛がってくれていた。
同じ年齢だというのに、何処かアニキを連想させるような存在だ。
そんな彼が、晶にこんな頼み事をするのは初めてだった。

「……わかった。　死ぬなよ、竜彦」

今は全てを忘れよう。
パイロットしての自分を、今だけは忘れるしかない。
晶は、すぐに木葉と合流すべく自分のクラスへと駆け出した。

廊下中にサイレンが鳴り続ける。
人影は無い、避難指示を待って待機しているのだろうか。

晶は携帯でニュースのチェックを行う。

E．B．Bの分布図が公開されていた。
丁度第４シェルター東地区の地図が映し出されている。
赤い点の数々が、E．B．Bの動向を示していたが……明らかにこの地域に進行していた。

「竜彦……頼むっ！」

出撃できない無念は、今だけは忘れよう。
仲間を信じて、自分は自分に出来ることをやる。

竜彦にはまた、救われた。
あのまま放置されていたら、晶は避難に遅れてE．B．Bに殺されていたかもしれない。
仮に助けがあっても、ただ現状に絶望していただけだろう。

丁度自分の教室前へと辿りつくと、教室からは生徒が一斉に出てきた。
避難が始まったようだ、このままでは木葉を見失ってしまう。

人だかりの中に、木葉の姿を確認した。
だが、あの距離では合流できそうに無い。
晶はこのタイミングで一緒に避難をして、後から木葉と合流しようと判断した。
ところが木葉もこちらに気づいており、どういう訳か流れに逆らい始めた。

「キャッ！？」

強引に突き飛ばされた木葉は、人だかりから放り出された。

「木葉っ！？」

晶は急いで駆け寄った。

幸い怪我はしていない、どうしてこんな無茶をしたのか。

「ここはもう危ないんだぞ？　何でこんな真似したんだ？」

「ごめんね、晶くんのことが心配で……。　試験、平気だった？」

「そんな場合じゃないだろ……さ、早く避難を――」

手を差し出すと、木葉は真っ白な両手でがっしりと晶の手を掴む。

とても非力で、驚くほど弱々しい。

竜彦が心配するのも、無理はないと感じた。

「キャーッ！」

すると、突如避難へと向かった生徒達の悲鳴があげられた。

信じられない光景を、目の当たりにしてしまった。

血しぶきをあげながら、一人の教師が串刺しにされて宙へと打ち上げられていた。

一瞬だけ、場が静まり返る。

容赦なく投げ出された生徒は、丁度避難中の生徒の上を乗り越えて行く。

引導役を務めていた教師が、無残な姿となって

晶達の前へ、落下した。

血がドクドクと流れだし、教師は既に息をしていない。

晶と木葉は、思わず声が出せなくなるほどの恐怖に押し殺され、二

人同時に腰を抜かした。

「うわあああああっ！！」

「逃げろおおおおっ！！」

場は一瞬にして大混乱に陥った。

誰もが混乱して、あっちだこっちだと必死に逃げ惑う。

「先生、先生が……」

ガクガクと体を震わせながら、晶に身を寄せて木葉は遺体と化した教師を指差す。

晶も知っている教師だった、ＨＡ開発の担当をしていたこともあり、ＨＡに関する授業もこの教師から教わっていた。

何故、こんなにも無残な姿となって……？

「君達、大丈夫かっ！？」

一人の男性が、身動きがとれずにいた晶と木葉にそう声をかけた。

迷彩服に武装している事から、学校に所属している自衛隊の一員だ。

ＨＡパイロットこそ存在しないが、あらゆる事態を想定して学校では自衛隊を所属させるのが義務だった。

数は少ないといえど、学校の中で最も頼りになる存在であるのは間違いない。

「こ、木葉……落ち着け。　大丈夫だ、助けが来たぞ」

「で、でも……先生が――」

初めて目の当たりにした死は、あまりにも衝撃的過ぎた。
木葉はショックを受けすぎて、その現実を受け止めきれずにいる。
それは、晶自身も同じであった。

「うわあああっ！！」

ガシャーンッ！

一人の男子生徒が突如、窓ガラスを突き破って外へと放り出された。
ここは４Ｆであって、生身で落とされてしまってはまず助からない――
木葉は、何が起きたのか理解できずに肩をすくめて怯えていた。
一体、この場で何が起きている……？

晶はふと、避難に向かった生徒達の方角を確認した。
そこには、地獄絵図が繰り広げられていた。
無数の気色悪い触手が、次々と避難している生徒を投げ払っている。
時にはその触手に貫かれ、殺されている生徒もいた――

「まさか、Ｅ．Ｂ．Ｂ……？」

「……君達、下がるんだ」

自衛隊の一人が、長銃を構えると後ろからもう一人の隊員が晶と木葉をかくまう様に盾を用意した。
次々と生徒が投げ飛ばされる中、その真ん中をゆっくりと歩み寄る人物の姿が見えてきた。
……いや、人と言っていいのだろうか。
サングラスで素顔を隠した紫髪の男は、明らかに異質だった。

「な、何だよ……あれ？」

晶は自分の目を疑った。
その人物の右腕はとてもじゃないが、人とは思えない『異形』だったのだ。
異形からは無数の触手が飛び出し、次々と生徒に襲い掛かっている。
植物とも言えなければ何かの生物とも言えない不気味なその右腕は資料上でしか見たことがないＥ．Ｂ．Ｂの姿に酷似していた。

「やむを得ない……発砲するっ！」

バンッ！

対Ｅ．Ｂ．Ｂに特化した戦闘用ライフルが発砲された。
男の体に直撃をしたが、何故か弾は弾かれてしまう。
何度も、何度も発砲をしたが、男の体には一切傷がつかなかった。

「バ、バケモノがっ！」

怯まず、隊員はライフルを発砲し続けるが効果が無い。
まるで体そのものが金属であるかのような硬さだ。
男は、その右腕で隊員の胸倉を掴み持ち上げた。

「こ、これ以上……生徒達に手を出すんじゃないっ！」

「ほう、この状況で生徒を優先するか。　気に入ったぞ」

胸倉を掴まれようと、隊員は決して怯まなかった。
それどころか決して手放さなかった銃を、逆に相手の顔面に突きつけて見せた。

「……バケモノがっ！」

グシャッ――

銃声ではない、生々しい音が耳に入り込んだ。

「えっ――」

ビシャッと、晶の顔に赤い液体がかかる。

生暖かい気色悪い感触を、その手で拭い去ると

晶はそれが人の血であることを認識した。

男は隊員の頭を掴み、そこから赤い槍のようなものが突き出していた。

その槍は、容赦なく隊員の脳を貫通した――

震えが止まらなかった。

人でもなく、E．B．Bでもない『バケモノ』に、ただ怯えるだけだった。

またしても、目の前で人が死んだ――

「う、うわあああああっ！！」

もう一人の隊員は、二人をおいて一目散に逃げ出してしまった。

隊員の人を決して責める気にはなれない、誰だって逃げ出したくなるだろうから。

男は、ゆっくりと歩み寄ってくる。

晶は身動きがとれずに、腰を抜かして、ただ震えるだけだったが

近くにいた木葉の手だけはしっかりと握り締めていた。

男は、ギロリと座り込んでいた晶と木葉を睨みつける。

「……」

何も語らず、男は静かに立ち去った。

晶が振り返ると、あの男にやられた生徒達が血を流して倒れていた。

まだ息をしている者もいるが、窓から放り出されたり既に死んでしまった生徒だっている。

アレは、人間なのか？

どうして、あんなバケモノが校内に存在するのか。

……殺される。

皆、殺されてしまう――

「……怖い、怖いよ……晶くん――」

恐怖に押し殺されそうになっていたのは、木葉も同じだった。

晶だけではない、誰もがあんなバケモノを目にしたら恐怖心を抱くに決まっている。

……何処か、安全な場所へ避難しなければ

しかし下手に校内を動き回って、あんなバケモノとまた遭遇してしまったら

今度こそ、命はないかもしれない――

「……いこう」

「ど、何処へ？」

ガクガクと足を震わせながらも、何とか晶は立ち上がろうとする。

木葉からは決して手を離そうとせず、ゆっくりと引き上げて木葉を立たせた。
晶自身も恐怖で足がすくんではいるが、男の意地だってある。
何とか木葉を支えようと、肩を貸した。

「あんなバケモノがいるんだ……下手に行動はできないだろ、だったらＨＡの中に逃げ込もう。
コックピットの中は安全だからさ、助けが来るまでひたすら待つんだ」

パイロット候補生である晶ならではの案と考えられるだろう。
中には非常食だって通信設備だって全て整っている。
三日ぐらいはコックピット内に篭ってられるはずだ。

本来であれば引導の教師に従って、避難するべきではあるが事態はＥ．Ｂ．Ｂだけの問題とは思えない。
だったらＨＡの中に逃げてしまって、隠れているほうが身の為だ。

「で、でも皆は……」

木葉は、先程の男にやられた生徒達を悲しそうに見つめた。
息をしていない男子生徒を抱きかかえて、泣き喚く女子生徒。
足を怪我して、ひたすら痛みで泣き叫ぶ生徒。
怪我をした者を一生懸命運ぼうとする生徒だっていた。

……皆、クラスメイトだ。
晶だって皆、知っている。
放っておくわけには、いかなかった。

「バ、バケモノだっ！！　み、皆逃げろ……逃げるんだっ！」

男子生徒の叫び声が聞こえた。
まさか、またあの男が戻ってきたというのか。
その瞬間――

「キシャァァァッ！！」

奇声をあげながら、クモのバケモノが一斉に廊下に押し寄せてきた。
明らかに通常のクモとは異なる、何処か異質さを感じる姿。
間違いなく、E・B・Bであった――
まさか、もうここまで侵攻してきたというのか？

「……ダメだ、逃げようっ！」

「あ、晶くんっ！？」

怪我をした生徒達に襲い掛かるE・B・B達。
晶には、その生徒を助ける力がなかった。
悔しいけど、もう助かりっこない。

せめて、自分達だけでも逃げるしかなかったんだ。
晶は自分にそう言い聞かせて、木葉を連れて走り出した。
無我夢中だった、後ろは絶対に振り返らない。

目を閉じて、ひたすら心を無にして走るだけだった。
クラスメイトを見殺しに、してしまった。
今更のように、罪悪感が晶に圧し掛かる。

だけど、足を止めるわけには行かない。
竜彦からの頼みだ。

木葉だけは、絶対に守ると誓ったのだから――

「はぁ……はぁ……つ、ついた……」

どれくらい走り続けたのかはわからない。
E．B．Bは校舎内に数多く存在した。
気づかれないように何度も何度も道を変えて、E．B．Bから逃れながらも
ひたすら校舎を駆け抜けて、格納庫へと向かっていた。

やっとの思いで、辿りついたのだ。
幸いE．B．Bもまだここまでは侵攻していない。

「はぁ……はぁ……も、もう……ダメ……」

普段から走り慣れていない木葉は、安心したのかヘナヘナと地べたへ尻をつく。
息も荒く、顔も青ざめていることから相当疲労しているようだ。
パイロットコースである晶は、体力作りもカリキュラムに組み込まれている為、そこまで疲労を見せてはいない。
ただでさえ虚弱体質である木葉に、無茶をさせすぎてしまったよう

だ。

「ごめん、大丈夫か？」

「ううん、平気だよ……ちょっと疲れただけ」

口ではそう言っているが、木葉の体力が限界に近いのは晶自身もよくわかっている。

早く安全なところへ連れて行かなければ――

学校には確か十機以上のＨＡを所持しているはず。

少なくともパイロットコースの生徒分は確保しているはずだから、つまり未出撃である晶のＨＡは存在するはずだ。

音を立てないように晶は静かに移動する。

本来なら格納庫は許可がなければ出入りをしてはいけない場所だ。

非常事態に校則を気にする必要もないが、あくまでも念のためだ。

「あった……」

奥へ進むと、晶の目の前には巨大なロボットが立ち尽くしていた。

深緑をした人型のフォルムは、最もポピュラーなＨＡ『ウィッシュ』だ。

戦況に応じて武装を容易に変更することができ、汎用性に優れていてメシアでも主力のＨＡだ。

パーツ自体も流用することが可能で、コストパフォーマンスにも優れている。

機体の色は特に決められてはいないが、一般的には深緑で塗りつぶされることが多い。

……本来なら、これが晶に支給されて戦場に出ていくはずだった。

「凄い……これ、本当に動くの？」

木葉は巨大なロボットを見上げて、思わずそう呟いた。
晶自身は、ＨＡを見るのはこれで２度目だ。
一度目は、授業の一環で一度だけ格納庫に入れてもらえた事がある。
そのときに、『ウィッシュ』を拝見したことがあった。
今見てもその大きさには驚かされる。

「見とれてる場合じゃないな……行こう、木葉」

コックピット内は一人用で窮屈かもしれないが、別に出撃をするわけではない。
二人でじっとしている分には、何も不便はしないはずだ。
晶は木葉を連れて、ウィッシュに乗り込もうとした。

だが、晶はウィッシュの他に奇妙なＨＡを見つけた。
ウィッシュとは明らかに形状が違い、小柄に見える。
白銀に細身のフォルムといい、明らかに貧相な外見だ。

頭部もまた特徴的で、ヘルメットのような被り物に額部にはウィッシュには存在しない触覚のようなモノがつけられていた。
更に背中には羽のような形をしたブースター。
ウィッシュには一つしか搭載されていないのに対して、どういう訳かこのＨＡには二つ搭載されていた。

そして何よりも驚いたのが、腰部分につけられている巨大な剣だ。
まるで侍が持つ刀を連想させるような長身の武器が、鞘に収められている。
……こんなＨＡ、見たことがない。

「よせ、一般人がまともに扱える機体ではないぞ」

「……なっ」

突如、格納庫から男の声が響いた。
しまった、見つかってしまったか？
しかし、ここに訪れたのはあくまでも非常事態であり、考えがあっての行動だと説明すればわかってもらえるかもしれない。
晶は隠れたりはせずに、両手を挙げて声の主が姿を現すのを待った。

赤髪の長身の青年が、姿を現した。
黒いランニングにジーンズ、頭には額当てとラフな格好をしている。
制服を着ていない為、学校の生徒ではないようだ。
かといって教師にしては若すぎる気もする、年齢は２０代前半だろうか。

「貴方は？」

「ゼノスだ。　メシア所属のゼノス・ブレイズ」

「メシアだって？」

晶は驚きを隠せずにいた。
何故、こんなところにメシアの隊員が存在するのか？
もしかすると、メシアの部隊は既に到着しているのだろうか。

「こんなところに何の用だ」

「避難してきたんです、別に出撃しようとは思ってません」

「コックピット内に隠れるつもりだったのか？」

晶は無言で頷いた。

ゼノスと名乗る男も、恐らく同じパイロットなのだろう。

晶の考えていることは、お見通しだったようだ。

「……何故、お前は出撃しない？」

「先生から止められたんだ、俺が出ても死ぬだけだって。

だから別に、ウィッシュで出ようだとかそんな事は考えてない」

あの時の、教師から告げられた言葉が脳裏を過ぎる。

体が震えだした、悔しくて歯を食いしばり、拳を握り締めた。

……今は、木葉を守ることだけを考えればいい。

心の中でそう呟き、晶は落ち着きを取り戻した。

「それよりあの白いＨＡは何ですか？　俺、資料でも見たことないですよ」

「知らないほうがいい、隠れるのなら好きにしろ」

「そんな言い方って――」

「いいから隠れろ、ここは危険だ」

ゼノスと名乗った男は、晶に銃を突きつけてそう告げた。

何故、メシアの人間に銃を向けられなければならないのか。

しかし下手に逆らって撃たれてしまっては元も子もない。

晶は無言で、両手を挙げた。

「待って、晶くんは何もしてないよ？　それよりも、皆を助けてあげて……
メシアなんでしょ？　人類を守るための、部隊なんだよね？」

木葉は、晶を庇おうと前に立ちゼノスにそう叫んだ。

「こ、木葉――」

危険を察した晶は、すぐに木葉を突き放そうと肩を掴んだ。

「……来たか」

「え？」

突如、ゼノスは何かを目にして呟いた。
ゆっくりと歩み寄ってくるシルエット……あの右腕の異形――

「まさか――」

晶は、驚きを隠せずにいた。
そこに姿を現したのは、目の前でクラスメイトや隊員を殺した張本人……あのバケモノが姿を現したのだから。

「久しいな、ゼノス。　こんな形で貴様と再会するとはな」

「馴れ合うつもりはない、お前達にコイツは渡さん」

二人は知り合い、なのだろうか。
それにしては妙だった、ゼノスは平然と銃を向けており

あの男もまた、それを見てニヤリと口の端を吊り上げるだけだ。

「ι（イオタ）・ブレード……渡してもらおうか」

男の口からは、『機体』の名が告げられた。

ι・ブレード、始動？

ι（イオタ）・ブレード。
晶はその名に、聞き覚えがあった。

父親はＨＡ（ホープアームズ）の開発を行っており、今はメシア専属の開発者である。
ＨＡの開発により、世界に貢献している父親を何処か尊敬しており
晶はいつしかＨＡに興味を抱き、パイロットの道を歩みだした。

しかし、父親はＨＡについて語ってくることは多くても機密事項には決して答えない。
当然であった、子供といえど軍の機密に関わる事項を漏らすわけにはいかないのだから。
だが、晶はどうしても父親が持つ機密事項が気になったのだ。
隙を見て、父親のデータを盗み見したことがあった。

その時に、『ι・ブレード』と呼ばれるＨＡに関するデータを少しだけ見たことがある。
当時は開発段階であり、実用化にはまだまだ時間がかかると言われていた。

開発コンセプトは『生きたＨＡ』。
つまり、機械が自主的に判断を行いＨＡを動かす『ＡＩ機能』の搭載を目的としていた。
しかし、どうもただの『ＡＩ』とは別物であり、文字通り機械に意思を持たせるという
奇妙なコンセプトであったことを晶は記憶している。
……あのＨＡを、父親が開発したというのだろうか。

「貴様に扱える代物ではない、速やかに立ち去れ」

「動かない機体なんて邪魔なだけだろう、俺が引き取ってやると言っているんだ」

バキュンッ！

ゼノスが銃を発砲させると、またしても男の体は銃弾を弾いた。

「警告はしたぞ、ガジェロス」

やはり、ゼノスはその男を知っているようだ。

「面白い、俺を本気で止められると思っているとはな」

ガジェロスと呼ばれた男は、例の右腕を天高く掲げて見せた。

右手からは、奇妙な赤い槍が飛び出し、無数の触手が飛び出す。

容赦なく、ゼノスに襲い掛かった。

「下がれっ！」

「うわぁっ！？」

呆然と立ち尽くす晶と木葉を突き飛ばし、ゼノスは高く飛び上がる。

「あ、晶くん……」

「だ、大丈夫だ……少なくともあのゼノスって奴は悪い人じゃないだろ」

木葉は晶に身を寄せて、小刻みに体を震わせていた。
何処へ逃げても怖い思いばかりしてしまう、木葉の負担は相当大きくなっていた。

晶自身もまた、あの男の姿を見てしまうと恐怖心に駆られてしまう。
どうしても、あの時の場面が頭に過ぎってしまい、足がすくんで動かなかった。

ふと、上を見上げるとそこにはあの男が生み出した触手が無防備のゼノスに襲い掛かろうとしていた。
――また、人が死ぬ？

「木葉……見ちゃダメだ――！」

だが、そんな不安とは裏腹に銃声が鳴り響く。
ゼノスは迫り来る触手を1本ずつ撃ち落して見せた。
あの身のこなしといい、メシア所属である事は嘘ではない。

それにしても、ゼノスという男は人間離れした動きだ。
あんな跳躍、普通の人間にできるはずがない。
あっという間に、ゼノスはガジェロスの背後を取った。
ゼノスの足は容赦なくガジェロスに襲い掛かろうとしたが、咄嗟に反応したガジェロスは例の右腕でそれを受け止めようとする。
すると――

ズガァンッ！

ゼノスの足が右腕に触れた途端、爆発が発生する。
何が起きたのか、理解できなかった。

今のは、明らかにゼノスという男の足から発生したようだ。
だが、二人には傷一つ見当たらない。
まるで爆発ことなど気にしていないようだ。

「な、何なんだよあの二人？」

木葉は、ただ晶にしがみつくだけでもはや言葉すら発する余裕すらない。
ここは一刻も早く、コックピットの中へ向かうべきだ。
その瞬間、目の前にゼノスが突き飛ばされてきた。
ガンッと壁に体を叩き付けられ、一瞬だけ顔が強張る。
だが、決して怯まずにガジェロスという男を睨み付けていた。

「……まだここにいるのか、守っている余裕はないぞ」

「あの男何なんだよ、ι・ブレードってあの機体のことだろ？　開発はもう終わってたのかよ？」

「何故、お前がι・ブレードのことを知っている？」

晶はしまった、と思い口を塞ぐがもう遅い。
うっかりと、父親のデータを盗み見した事を宣言してしまったようなものだ。

「よそ見をするとはいい度胸だな、ゼノスっ！」

「詳しく、話せ」

ガジェロスの右腕からは、赤い槍が突き出されていた。
真っ直ぐとゼノスへ伸びて行くが、それに構わずその場から動こう

としない。

「ま、待ってくれ……あ、あいつが――」

「話せ、と言っているんだ」

ゼノスは晶をその鋭い眼光で睨み付ける。
その気迫に押された晶は、ただ戸惑うばかりだった。

ズドンッ――!

鈍い音が響き渡る。
ゼノスの右手が、赤い槍に貫かれていた。
止め処なく溢れる血が、傷の深さを物語っている。

だが、ゼノスは表情一つ変えようとせずに晶から目を離そうとしなかった。
……この男が何を考えているかわからないが、今は正直に話すしかない。

「親父のデータを、見たんだ。未乃(みない)　健三(けんぞう)って、知ってるだろ」

「……お前が未乃　晶なのか？」

何故、この男が自分の名を知っているのか？
晶は驚きを隠せずにいた。
横目で、ガジェロスの様子を伺うと
今度は無数の触手がゼノスに襲い掛かろうとしていた。
このままでは、全滅してしまう――

「そうだよ、俺が息子だよっ！　もういいだろ、早くあいつを何とかしてくれっ！」

決死の思いで、晶は叫んだ。
だが、その叫びも虚しく……無数の触手は容赦なくゼノスに襲い掛かった。
ドスンドスンッと鈍い音を立てながら、体中に触手が突き刺さる。
体をよろけさせながらも、ゼノスはまだ晶から目を離そうとしなかった。

「……乗れ、ι（イオタ）に」

「え――！」

次にゼノスの口から告げられた言葉は、思わず耳を疑いたくなった。
あの機体に……乗れ？
この状況で、一体何を言い出しているんだ？

「ι・ブレードを動かした者はいない、だが……お前なら、動かせるかもしれん」

「な、何を言って――」

晶は、ただ混乱するばかりだった。
一番最初は逃げろと言われていたはずなのに
今度はどういうワケか、『あの機体』に乗れと言い出した。

「終わりだ、ゼノス……っ！」

その間にも、ガジェロスという男はゼノスに迫っていた。

この男、何を考えているのかさっぱりわからない。
あれだけの猛攻を受けながらも、何故晶にそれを告げたのか。
むしろこのままでは、ゼノス自身が危ないというのに。

「ι・ブレードを奪われるわけにはいかない、あれは正真正銘……お前の父親が開発したＨＡだ」

「……！」

父親が開発したＨＡ。
晶の父親は、ＨＡに関してはとても熱心だ。
開発した機体については、晶にも楽しそうに自慢をしていた。
まるで自分の息子を自慢する親のように。

そう、晶も自慢されたかった。
パイロットとして腕を上げて、父親が誇れる息子になってやろうと。
だからこそ、その道を歩んだ。
父親のＨＡに対する愛は、家族愛に等しい。
それをこんな得体の知れない男の手に、渡すわけにはいかない――

「……乗ればいいんだろっ！」

「よく言った、未乃　晶」

こうしている間にも、ガジェロスが目の前にまで迫り来る。
右腕のバケモノを大きく振りかぶり、その掌には鋭いキバを持つ巨大なバケモノの口があった。
今、まさにゼノスの頭を食いちぎろうとしていた――

ズドォンッ！

再び、爆発音が轟く。
晶と木葉は衝撃で吹き飛ばされ倒れた。

砂煙が晴れると、そこにはゼノスがガジェロスの顔面を殴り飛ばしている光景が目に入る。
サングラスは粉砕され、口からは血を吐出しながら宙へと舞い……
ドサッと地面に叩き付けられた。

「その娘は俺に任せろ、絶対に死なせはしない」

全身から生々しく血を流しているゼノスの姿は、とてもじゃないが直視できなかった。
……木葉を一緒に連れて行くわけにはいかない。
親友との約束を破る形にはなってしまうが、あのゼノスという男は信用できる。
木葉を任せても大丈夫だ、という安心感があった。

「行け、未乃　晶」

「……ああ、行ってやるさっ！」

晶は、必死でｲ・ブレードへ向かって走り出した。
階段を駆け上がり、コックピットに到着するまでひたすら走り続ける。
まだか、まだかと晶は息を切らしながらも長い階段を上り続けた。

「あのガキ……させるかぁっ！」

ガジェロスの叫び声が聞こえだした。
ふと、下を向くと赤い槍が猛スピードで晶に向けて前進していた。

鉄をも貫き、スピードを落とさずにグングンと距離を縮めていく。
コックピットまであと少し……飛べば何とか届くはずだ。
晶は思いっきり踏み切り、高く飛び上がる。
そしてコックピットへと飛び移ろうとした瞬間――
グシャリ、と赤い槍が右足を貫通した。
尋常ではない痛みが走った。
「うぐっ――――」
声にもならない激痛に苦しみながらも、何とかバランスを崩さずにコックピットの中に移りこむことは成功した。
ハッチをすぐに閉め、操縦席へと座る。
中はシミュレーターと大差はない、ＨＡのコックピットは共通的な作りではあるし、操作もほとんど変わらない。
「ごめん木葉……傍にいてやれなくて」
一言ぐらい、何か告げてから行くべきだったか。
今更ながら木葉の事を頭に浮かべていた。
「クッ……やっぱ、こんなんじゃ操縦に集中できねぇ――」
木葉のことだけではなく、ガジェロスに貫かれた右足からも容赦なく激痛が襲いかかる。
せめて止血ぐらいはするべきだと、晶は袖を引きちぎり包帯を巻こうとした。
『……パイロットを認証しました』

「え？」

突如、機械の音声がコックピット内から鳴り響いた。
おかしい、まだ起動どころかスイッチの類を何もいじっていない。
一体どうやってパイロットを認証したというのだろうか？

『パイロット適性診断、開始します』

機械的なアナウンスと共に、コックピット内からは無数のコードが出現した。

「な、なんだこれ――うわぁっ！？」

コードは一斉に晶に纏わりつき、何やら赤い光を放ち始めた。
コードの先は鋭利な金属となっており、晶の体内に直接突き刺さったが、不思議と痛みは感じない。
麻酔か何かかけられているのだろうか、それとも足の痛みのせいで感覚がなくなってしまっているのか？

『診断結果、E。　続いて、パイロットメンテナンスに移行します』

「……何の診断なんだ、これ？」

Eと聞くとあまりいい評価とは思えない。
もしや文字通りパイロットとしての腕を診断しているのだろうか。
そうだとしたら笑えない、教師のあの一言を思い出した。

『戦場に足手まといはいらん。　どうせ、死ぬだけだ』

体が小刻みに震えた。
ゼノスという男に言われるがままに、ι・ブレードに搭乗したものの落ちこぼれである晶が、このＨＡをうまく扱うことができるのだろうか？

奪われまいと、必死で乗り込んだものの……Ｅ．Ｂ．Ｂにやられてしまうのがオチではないか？
いや、外には仲間がたくさんいるはずだ。
いざとなったら合流して、事情を話せば力になってくれるだろう。

『パイロットメンテナンス終了しました』

機械のアナウンスと共に、無数のコードは晶から離れていった。
ようやく解放されたかと思うと、晶は胸をなでおろした。

体が妙な感じだ、それに何故か足の痛みも感じない。
晶は自らの足を確認すると、目を丸くして驚いた。

……傷が、治っている？
信じられない、どうしてあれほどの傷が一瞬で？

ズドンッ！！

「うわっ、な、なんだ？」

外から何か衝撃を感じた。
まさかあのガジェロスという男が生身で仕掛けているのだろうか。

……あのバケモノなら有り得なくはない、一刻も早くこの場から離れるのが得策だろう。

ι・ブレードの発信準備を行いながら、晶はコックピット内に置かれていたパイロットスーツを発見する。
晶はこれを見て、またしても胸をなでおろした。

パイロットスーツなしでＨＡに乗るのはリスクが高すぎる。
ＨＡ操縦の際はありとあらゆる衝撃が直接的に襲い掛かる上に、移動中はかなりのＧがかかるのだから。
いくら体を鍛えていると言えど、下手すると操縦中に気を失ってしまう恐れだってあった。
サイズはちょうど自分にぴったりだった、運が良かったと言えるだろう。

ズドンッ！

また、コックピット内が揺れた。
この衝撃だけでも、晶は内心ビクついていた。
戦場に出たらこんなものじゃすまない、それに直撃でもしてしまったらそれこそ終わりだ。
……本当に、大丈夫なのだろうか。

ガタンッ

今度はコックピットが小さく揺れだした。
これ揺れ方が、何か違う。
恐らく、リフトが動作したのだろう。
遠隔操作でも可能ではあるのだが、誰かが外部から操作したに違いない。

『リフト動作確認、最終チェックを開始します』

機械の自動チェックが開始された。
これはウィッシュにも搭載されている機体のメンテナンスシステムだ。
制御系等のチェックはすべて機械で行われており、異常をきたしていれば自動で修復される。
パイロットは診断結果を待つだけでいい。

『システムオールグリーン、出撃に問題ありません』

まだ一度も動いていないという情報から多少不安はあったが、どうやら無事動いてくれそうだ。

『メインカメラ映像、出力します』

アナウンスと共に、コックピットのモニターから外の映像が映し出された。
約２６０度を見渡せる広範囲のモニターは、まだ真っ暗なままだ。
リフトから地上にあがっている最中だ、決して故障ではない。

『ι・システム、起動します』

「い、ιシステム？」

ふと、聞きなれない単語がアナウンスされた。
何の事だかさっぱりわからない。

ズキンッ！

すると、突如晶の頭に頭痛が襲い掛かった。

「な、なん……だ、これ――」

ただの頭痛とは違う、頭の中から刺激されているような激しい痛みだ。

未知なる激痛に耐えきれず、晶は両手で髪を強く毟る。

だが、それで痛みが引くわけでもない。

それどころか頭痛は増して、全身から汗が噴き出すほど痛みが強まった。

「うぐあああああっ！！」

コックピット内に、晶の悲痛な叫びが響き渡る。

すると、その叫びが通じたのかピタリと頭痛が止んだ。

『ｉシステム、正常に起動しました』

「ハァ……ハァ……なんだったんだ、今の」

息を切らしながら、晶はぐったりと頭を下げた。

「……そ、そうだ。　まずは通信を」

仲間達と今のうちに連絡を取ろうと、晶は無線の周波数を合わせようとした。

『――た、――――か？』

「ん……？」

周波数を合わせている最中、ふと何かの音を拾い上げた。

気になった晶はその周波数に合わせて、その会話の内容を確認する。

『ι・ブレードは現在、地上に向けて逃走中。ガジェロス・G・ジェイローに追跡を任せている』

「これって……」

間違いない、ガジェロスの仲間の通信だろう。

晶は黙って、その内容に耳を傾けた。

『E．B．Bはどうだ、誘導できそうか？』

『問題ない、メシアの連中も片づけておいた。こいつならば、ι・ブレードといえど一筋縄ではいかないはずだ』

「E．B．Bの誘導だって……正気かっ！？」

その会話の内容は、あまりにも信じがたい内容だった。

そう、この二人は……E．B．Bを誘導しているというのだ。

それも、『ι・ブレード』を狙うために。

『一般人を巻き込んでるんだ、失敗は許されないぞ』

『ガジェロスなら上手くやるだろう、それにこんなシェルター地区一つぐらい大した被害ではない』

「な、何言ってんだこいつら……？」

思わず、耳を疑いたくなる内容だった。

誰かが悪戯で流しているんじゃないかと思いたくなるほどだ。

……まさか、E．B．Bはシェルターを破ってきたワケじゃないのか？

『そのガジェロスは一度失敗している、ここで逃がしたら始末書じゃすまないぞ』

『わかっているさ、証拠は全て消す。　そしてι・ブレードは……我々が回収しよう』

「ふざけんな……っ！」

ガンッと晶は拳を振り下ろした。
晶は知ってしまった、この騒動が事故ではないことを。
何者かに仕組まれた、『意図』して起こされた事故だということを。

許せなかった。
シェルターの人は、E．B．Bの恐怖から逃れてのびのびと生活していた。
なのに、その権利をこいつらが奪い取った。
『ι・ブレード』を盗むためだけに――

クラスメイトだって殺された、『あの男』に。
助けに来てくれた隊員だって――

ふと、コックピットに光が差した。
晶はふと、モニターを確認しようと顔を上げた。
……そして、言葉を失った。

高台に出された晶は、その位置から街の全貌を確認できた。
既に、知っている街の姿がなかった。

地上には大量発生したE．B．B。
逃げ惑う人々。
破壊しつくされた建物、燃え盛る火炎。

ただ、目の前に繰り広げられた地獄絵図に、絶望した。
ふと、目に留まったのは何かに群がるE．B．Bの姿だ。
そこには見覚えのある、濃緑色のカラーリングの機体が見えた。
……間違いなく、学校が保有するHAだ。

やられて、しまったのか。
一機だけではない、複数の機体が同じように無残な姿となっていた。
E．B．Bは蟻ように群がり、機体をグチャリ……グチャリと、音を立てながら食していた。

「まさか……そんな――」

全滅、したのか。
学校から出撃された他のHAは見当たらない。
あるのは変わり果てた姿のウィッシュだけ。
あの中には、親友である竜彦だって含まれていたはずだ。

「晶……晶なんだろ！？」

突如、コックピット内に通信が入った。

「た、竜彦……生きているのか？」

間違いなく竜彦の声だった。

「馬鹿野郎……何で出てきちまったんだ、木葉をどうしたんだっ！」

「……ご、ごめん竜彦、俺やることがあって……でも木葉は大丈夫だ、メシアの人にちゃんと保護された」

だが、竜彦は再会を喜ぶどころか晶にそう怒鳴り散らした。

晶は、ただ力なくそう返すだけだった。

「……悪い、怒鳴っちまって」

「それより何処にいるんだよ、え、援護にいくぞ……」

戦場に出てしまった以上、戦うしかない。

覚悟はしていた、晶は竜彦だけでも助けようとそう告げた。

近くにいるはずだが、竜彦のＨＡと思われる機体は見当たらない。

「無駄だ、晶」

プシュンッと、モニターに突如コックピット内部の映像が送信された。

「……っ！」

晶は、思わず目を背けた。

そこに映し出された映像は、無数のＥ．Ｂ．Ｂに這いつくばられた竜彦の姿が映し出されていたのだ。

そう、竜彦は既にＥ．Ｂ．Ｂにやられていたのだ。

恐らく、倒れているウィッシュのどれかなのは間違いない。

「……最後に、お前と逢えて嬉しかった」

「バカ野郎……今、今助けてやるからっ！」

「無駄だよ、もう俺は……助からない。　みんな、クモのバケモノにやられちまったんだ」

ブシャリッ、竜彦の体から次々と血が噴き出していく。
とてもじゃないが、直視できなかった。
晶は目を閉じて、ひたすら震えるだけだった……。

「……俺の分まで、木葉の事を頼んだぞ。　約束だぞ、晶――」

「た、竜彦……待てよ――」

プツンッ――

そこで、映像は途切れた。
通信はもう、繋がっていない。

……竜彦は死んでしまった。
あの状況では、助かるはずがない。
もう手遅れだった。

皆、成績優秀でメシアの基準値だって超えていた。
なのに、あの竜彦でさえも……簡単にＥ．Ｂ．Ｂに殺されてしまったというのか。
何故、どうしてこうも簡単に――

「……ふざけんなよっ！」

ぶつけようのない怒りを、晶は操縦桿にぶつけた。
ガンッガンッ！　と、強くコックピット内が揺れる。
両手で頭を抱え、ただ現状に絶望するだけだった。

どうしてこんなことが、起きてしまったんだ。
誰もが平和に過ごしていたはずなのに。
シェルターの住民は、Ｅ．Ｂ．Ｂの恐怖から逃れ、明るい未来を抱いていたはずだ。
……たった一機を奪う為だけに、これだけの人が犠牲になった。

クラスメイトが死んだ。
仲間だって死んだ。
親友も、死んでしまった――

許せない。
街を滅茶苦茶にした奴らを。
仲間を殺したＥ．Ｂ．Ｂも
何もかも、許せなかった。

ふと、コックピットの中に赤い光が灯った。
まるで、晶に同調するかのように点滅する。

「……俺に力を貸してくれ、ι・ブレードっ！」

応えるかのように、コックピットに光が点滅した。
もはや晶に恐れる心はない。
この地区を滅茶苦茶にしたＥ．Ｂ．Ｂを殲滅するため
そして、この事故を意図的に引き起こした奴らをこの手で倒すために

晶は、パイロットとして、戦士として立ち上がった。

ι・ブレード、始動？

「いっけぇぇぇっ！！」

力強く、両手のスロットルを押し込んだ。
高台から、近森へと向かって機体を発進させた。

グォンッと、強烈なGが襲い掛かる。
一瞬呼吸困難に陥るほどだ。
HA（ホープアームズ）に掛かるGは、晶の予想を遥かに超えている。
シミュレーターでも、ここまでのGは再現できていなかった。

あっという間に地面へと辿り着いた機体を、何とか制御して両足で立たせる。
周りには既に、何体ものE．B．Bがι（イオタ）・ブレードを取り囲んでいた。
人の何倍もの大きさであり、巨大化を遂げてしまったE．B．Bだ。
小型で気色が悪い、クモのような形をしている。
学校内でみたクモと、同じタイプだろう。

『戦闘モードへ移行、『ムラクモ』使用可能です』

「ムラクモ……？」

聞きなれない単語だ、画面には刀のような形状が記されている。
……もしかして、あの巨大な剣のことか？

「大丈夫だ、やれる……」

今はただ、目の前のE．B．Bを片づけることだけに集中すればいい。

「行けよ、ι・ブレードっ！」

晶の掛け声と共に、ι・ブレードは長身の武器を抜刀させる。

ズバンッ！

E．B．Bの返り血が舞った。
濃い紫色の、不気味な液体が白銀のボディを染めていく。
E．B．Bは一瞬にして真っ二つになって、消滅した。

姿を現した紫色の刀身、やはり資料でも見たことがないタイプだ。
モニター越しで晶はその切れ味に、ただ驚かされるだけだった。

ズキンッ――！

突如、頭痛が走った。
一瞬だけ晶は頭を抑えようととすると、突如視界に異変が起こる。

「な――」

一体何が起きたというのだろうか。
晶自身は身動きは取れず、視界が一方的に真っ白になっていく。
段々と、テレビの砂嵐のような映像が映し出されてきた。

音も何も感じない、一体自分の身に何が起きてしまっているのかわからない。

だが、砂嵐の映像は段々と中心を渦巻くように変わり果てた。
何処か見覚えのある機体が白黒の静止画として映し出された。

信じられないことに、これはι・ブレードの後ろ姿だ。
それだけじゃない、森へと着陸した今の地点と酷似しており、おまけにクモのE．B．Bすら確認できた。
……間違いなく、現状を映し出している。

一体何故、こんなものが？
やがて、静止画は静かに動き出した。
ι・ブレードの背後から、複数のE．B．Bが糸を吐き出している姿だ。
まさに今、ι・ブレードに直撃しようとしてした。

あんなものを食らってしまったら、機体の制御系に支障が出てしまう。
晶はスロットルを押し込もうとするが、身動きが取れずにいた。
動け、動いてくれっ！
願いは虚しく、ι・ブレードは白い糸に絡まれてしまった。

やがて、映像は音もなく消滅した――

「――はっ」

ふと、意識が我に返った感覚に陥る。
いつの間にか、目の前は通常通りのコックピットに戻っていた。
今の映像は一体――

晶は、不安に思いながらも機体を背後へ振り向かせた。
すると、まさに複数のE．B．Bが機体に向けて『糸』を発射させ

ていた。

「う、うわあああああっ！？」

急いで回避をしなければ
晶はグッとスロットルを押し込むと、機体は大きくステップをする。
だが咄嗟の操作でバーニアを大きく噴射させてしまい、勢いよく飛んでしまった。
シミュレーターでもよくやる失敗だ、これで何度落とされていることか。
その結果、ι・ブレードは大きく横転してしまった。

ズシンッとコックピットが揺れる。
その間にも、Ｅ．Ｂ．Ｂは容赦なく機体へと向かって集ってきた。

「……他の武器はっ！？」

『ブラックホーク、使用可能です』

今度は、銃が画面に出力される。
通常ＨＡで使われるライフルとは形状が違う、リボルバー形式の短銃に見えた。

「くっ……間に合えっ！」

短銃は二丁積まれていた。
晶は迷わず二丁構えて、迫りくるＥ．Ｂ．Ｂ達に照準を合わせる。
短銃なら連射性能に優れているはずだ、何発も打ち込めば一発ぐらいは当たるはずだ。

ズドンッ！　ズドンッ！

思った以上に強い衝撃が襲い掛かった。
弾はE．B．Bに目掛けて発射されたかと思えば、一瞬で2匹のE．B．Bが紫色の液体をぶちまけて破裂した。

「な、なんだこれ？」

どんなに小型といえど、シミュレーターのライフルですらE．B．Bが破裂することはなかったはずだ。
……見た目以上に、破壊力がある銃なのだろうか。
今は驚いている場合ではない、晶は怯まずに撃ち続けた。
何発かは見当違いの方向に飛ばされたが、迫りくるE．B．Bを何とかすべて撃ち落せた。

「ふ、ふぅ……危なかった」

意気込んで出撃したものの、やはり自分の実力不足は身に染みる。
今は機体が無傷なだけでも、幸運と言えた。

「今のうちに弾を補充しとかないと……」

予備の弾ならいくつか積んであるはずだ、E．B．Bの数が減った今を狙い補充した。
二丁合わせて16発、弾も限られているし無駄に撃ちすぎるワケにはいかない。

「見つけたぞ、ι・ブレード」

突如、コックピット内に通信が入った。

この声は、忘れるはずがない。

「……お前っ！」

この悲劇を引き起こした張本人……ガジェロスの声だ。
モニターには、濃い緑色のＨＡ……ウィッシュが映し出されていた。

「お前だけは……お前だけは絶対に、許さないっ！」

復讐すべき相手を前にして、晶は力強くそう叫んだ。
学校が保有するウィッシュではあるが、パイロットは学生ではない。
……あの時、目の前でクラスメイトを虐殺した張本人だ。

生身の時は、あの男からは逃げ続けることしかできなかった。
恐怖に陥れられ、ただ殺されないようにと願いながら震えるだけ。

だが、今は違う。
お互いが、ＨＡに乗り……平等な戦力を手にしているはずだ。

晶は、許せなかった。
ι・ブレードを奪う為に、無関係な人々を巻き込むやり方を
それを平然とやってのける、あの男を。
あの男のせいで、クラスメイトが死んだ。　仲間が死んだ。
親友が、死んだのだ。

「今すぐι（イオタ）から降りろ、ガキ」

「お前こそ出て行けよ……よくも俺達の地区を滅茶苦茶にしやがったな」

「知ったことか、全てはιを隠した政府の責任だ」

「勝手なこと言うんじゃねぇよっ！　何人が犠牲になったと思ってんだ？
よくも、よくも俺の仲間を……親友を殺したなっ！」

「素人が自惚れるな、殺すぞ」

「やってみろよ、バケモノがっ！！」

もはや晶の怒りが収まることはない。
感情に身を任せ、晶は機体を前進させた。
ムラクモを構えて、あのＨＡをぶった切ってやる――
そんな思いで、強くスロットルを押し倒した。

だが、突如モニターからウィッシュが姿を消した。

「なっ……」

晶は言葉を失うが、決して相手がその場から消えたわけではない。
瞬時に、視界外で移動したのだろう。
だが、咄嗟に晶は何処へ移動したのかを判断できなかった。

シミュレーターでのＥ．Ｂ．Ｂの動きとはワケが違う。
思えば実戦でＨＡ同士で戦うことは全く想定していなかった。
晶の対応が、まるで追いついていない――

「終わりだ」

ズキンッ――ー

再び、晶の頭が頭痛に襲われる。
同じように視界が真っ白になり、砂嵐が現れた。

……まただ、また同じ現象だ。
今度も、似たような光景が映し出されていた。
ι・ブレードの背後に迫る黒い影、敵のウィッシュだ。
背後から、『ロングサーベル』を振り下ろそうとしている瞬間だった。

「間に合え――」

映像を頼りに、晶はひたすら後退しようと片方のスロットルを限界まで引き、もう片方を強く押し込んだ。

ギュンッ――

またしても、晶の体に強いGが襲い掛かった。
一瞬だけ視界が揺れて、モニターから目を離してしまったが、すぐに目の前を確認する。
すると、どういうワケかあんなに近くにいたはずのウィッシュから大分距離が離されていた。

「……何だよ、このスピードは?」

異常だ、ウィッシュではここまで出力が上がることはない。
体に負担が掛かるGにも、晶は納得がいった。
やはりこの『ι・ブレード』……尋常ではない性能だと確信した。

「逃がすかっ!」

遅れて、相手のウィッシュがライフルを構えたまま前進してきた。
ババババと、銃が発砲される。
何とか反応できた晶は、機体を横転させるが一時凌ぎにしか過ぎない。

ズキンッ！

再び、頭痛が襲い掛かった。
今度は、無防備となって倒れていたι・ブレードにグレネードが投げられる瞬間だ。
そして、高く飛び上がった頭上の先には、待ち構えていたかのように剣を構えた『ウィッシュ』の姿があった――

……明らかに、この映像はこれから起こる出来事が映し出されている。
未来を予知しているのか？　とてもじゃないが、信じ難い。
だが、今まで2回映像を見た中で全て的中していた。
信憑性が高いのは、間違いない。

映像が終わった途端、晶の目の前にはグレネードが投げ込まれた。

「……動きがわかってれば、こっちからっ！」

晶はムラクモを構えて、天へと突きあげながら高く飛び上がった。
爆発と同時に視界が爆炎に包まれ、状況が確認できなくなった。
砂埃が上がり、自分が今何処にいるかすらも判断できない。

だが、晶はひたすらムラクモを突き立て、空高く飛び上がるだけだ。
あの映像が本物なら、確実に『アイツ』が姿を現すはず。

煙が晴れ、青い空が映し出された。
そこには、待ち構えていたかのように高く舞い上がった『ウィッシュ』の姿が、本当にあった。

「貫けぇぇぇっ！」

バキィンッ！

金属が砕け散るような、鈍い音が鳴り響く。
ムラクモは、ウィッシュの胴体を貫いていた。

「な、なんだと――」

通信機からは、相手が声を漏らしていた。
まるで現状が、信じられないかのように。

「くたばれぇっ！」

ガンッと、晶はウィッシュを地面へと向けて蹴り飛ばした。
勢いよく、ウィッシュは抵抗なく地面へと叩き付けられる。
動力部を貫いた、下手をすれば大爆発が起きる危険性もあった。
……パイロットも、無事じゃすまないだろう。

だが、罪悪感は何も感じなかった。
クラスメイトを、仲間を殺した奴だ。
そんなやつを、哀れむ必要なんてなかったのだから。

「貴様の力ではない……ιの力であることを忘れるなっ！」

通信機からは、あの男の叫びが響き渡る。
負け惜しみ……と、聞き流そうとしたができなかった。

晶は強く歯を食いしばった。
実力ではない、機体性能のおかげ。
否定できない自分が、悔しかった。

「しはお前の手に余る存在……だ、必ず……奪ってみせるぞ――――」

ズガァァンッ！！

森を巻き込む、大爆発が起きた。

「うわあああぁっ！？」

逃げ遅れた晶は、爆発に巻き込まれ吹き飛ばされてしまう。
何とか機体を制御しようと、必死でスロットルを操作し、無事着陸することができた。

……森は、火に包まれてしまっていた。
あの爆発では、助かるはずもない。
人を、殺してしまった。

晶は自分の手をまじまじと見つめた。
……後悔なんてしていない。
誰かがやらなければ、悲劇が繰り返されるだけだ。
自分にそう言い聞かせて、晶は無理やり自身を納得させた。

『ワーニング、大型E．B．Bを確認しました。速やかに迎撃態勢を整えてください』

「大型、だって？」

晶はレーダーを確認すると、無数に蠢く赤いマークの中に……確かに巨大なマークが存在した。
これは大型Ｅ．Ｂ．Ｂを現す表記だ。
通常より何十倍もの大きさを誇り、ウィッシュが１０体揃って討伐作戦を展開するほどだ。
……いくらι・ブレードの性能が高いと言えど、たった一機で敵う相手ではない。

モニターに、黒い影が姿を現した。
想像を遥かに超える大きさだ。
学校どころではない、まるで街全体を飲み込んでしまうんじゃないかと思うほどの
巨大なクモのＥ．Ｂ．Ｂだった。

あのＥ．Ｂ．Ｂが、この街を滅茶苦茶にした元凶……
恐らく、誘導されてきたＥ．Ｂ．Ｂである事は間違いない。
このまま放っておけば、東地区以外にも大きな被害を及ぼしてしまう――

「……俺が、やるんだ」

無謀であることは承知だ。
だが、許せなかった。

理不尽に人の命を奪い続けるＥ．Ｂ．Ｂを。
これ以上、街を好きにさせない。
そんな思いで、機体を発進させようとした。

「一旦退け、未乃　晶」

ふと、通信機から男の声が聞こえだした。

「あの時の……？」

間違いない、あの時のゼノスという男の声だ。
ゼノスもパイロットであるはずだ、もしかして援護に来てくれたのだろうか？
ふと振り返ると、土煙をあげながら猛スピードで近づいてくるＨＡを確認した。

……またしても、見たことがないタイプだ。
遠目からでも目立つ真っ赤なボディは、ウィッシュのような量産機には見えない。
かといって、ほかの汎用機にもあのような形に該当する機体はないはずだ。
段々と姿を露わにしたＨＡは、ι・ブレードに比べて遥かに大型だった。

両肩にはミサイルポットに背中には2連キャノン。
両手にはガトリング砲といい……かなり重装備のＨＡだ。
それだけでも十分すぎるほど武器が積まれているというのに、背中には足枷のように巨大な鉄球がつけられていた。

正直素人目から見てもかなり無茶な設計をしてるとしか思えないＨＡだ。
相当機動性を犠牲にしているに違いない。

「あの怪物を仕留めるぞ、できるな？」

「え？」

突如現れたかと思えば、いきなり何を言い出すのやら。
晶はゼノスの言葉に、思わずキョトンと目を丸くした。

「やれるかと、聞いているんだ」

「……で、でも2機でどうやって？」

「怖気づいたのなら見ていろ」

ゼノスの言葉を耳にして、晶は歯を食いしばる。
怖気づいてなんて、いない。
一人でも、あのバケモノに挑もうとしたんだ。
臆病者なんて、言わせたくはなかった。

「やりますよ、俺できます」

「よく言った、俺の指示に従え」

ゼノスがそう言い放つと、赤い機体は轟音と共に前進した。
背中越しからわかったが、ブースターが三つも積まれている。
あれだけの数がないと、動かすことができないのだろう。
やはり、あまりにも無茶苦茶な設計としか思えない。

晶も同じように、機体を前進させた。

「お前はなるべくアイツの注意を引け、かく乱させるんだ。

ιの運動性ならばそれぐらい容易いだろう。　ただ、無茶だけはするな。　危なくなったらすぐに引け」

「わ、わかった……っ！」

「行くぞっ！」

ゼノスは、赤い機体を大型Ｅ．Ｂ．Ｂへと向けて更に加速させた。
相手の注意を引く……ι・ブレードの機動性を生かして、かく乱するんだ。

「いっけぇっ！」

晶は強く、両手のスロットルを押し倒した。
すると、信じられないほど機体が跳躍した。
まるで空を飛んでいるかの感覚に襲われる。

あっという間に、Ｅ．Ｂ．Ｂの頭上へと辿り着いた。
バケモノの三つの赤い瞳は、明らかにι・ブレードに注目していた。

ズキンッ――

またしても、頭痛が走る。
バケモノの口からは、想像を超える範囲に糸が巻き散らかされる映像が映し出された。
どう回避する……ひとまずは、後退だ。
映像が終わるまで時間はない、晶は迷わずスロットルを引いた。

グォンッ！　と、猛スピードでι・ブレードが後退する。
すると、空へと向けて大型Ｅ．Ｂ．Ｂが糸を発射していた。

同時に、ズドンッ！　と銃声が響く。
二つの弾丸が、大型Ｅ．Ｂ．Ｂの頭部へと直撃した。

「ギシャァァァッ！！」

悍ましいバケモノの叫び声が、耳にキンッと響く。
思わず耳を塞ぎたくなるほどの、高音だった。

「脚を切れ、動きを止めろっ！」

「わ、わかったっ！」

ゼノスの指示に従い、晶はムラクモを使ってクモの脚を刻んだ。
いとも簡単に、脚は切断された。
またしても耳障りな叫び声が響き渡る。
怯まず、晶は次々と無数の脚を刻み続けた。
大丈夫だ、指示通り動けている……失敗はしていない。

ズキンッ！

再度、頭痛が発生した。
切断されたバケモノの脚が、一斉にｉ・ブレードに襲い掛かるとしている映像だ。
切り離されても動けるというのか、Ｅ．Ｂ．Ｂの生命力は底を知れない。

あの数では何処へ逃げても、脚の餌食になってしまう……。
一体どうすればいいのか、晶には考え付かなかった。

「ど、どうすりゃいいんだ――」

いくら先の行動が見えても、対処できなければ意味がない。
落ち着いて、考えてる時間はなかった。
虚しくも、映像が終わりを告げて意識は我に返る。

「……う、上だっ！」

とにかく、地面に転がっているはずの脚はここまで追ってはこれないはずだ。
晶は機体を空高く上昇させた。
すると、先程まで赤く灯っていたコックピット内が一瞬だけ青く灯った。

「な、なんだ？」

一瞬の変化に戸惑っていると、晶の目の前に突如『バケモノ』の足が出現する。

「なっ――」

反応しきれない――
上に逃げた先の行動までは、流石に読み取ることができなかった。
このままじゃ、やられる――
晶に成す術は、なかった。

「やられてたまるかぁぁぁっ！！」

力強く、晶は操縦桿を握ると、コックピット内が再び赤く灯った。

ガキィンッ！！

その瞬間、突如バケモノの脚が弾かれた。

この光……一体、何だというのか？

「な、なんだ？」

モニターを確認すると、自機が何やら赤色の光に包まれていた。

『ιフィールド・展開中　ιフィールド・展開中』

「ιフィールドだって……？　まさか、バリアまで搭載されてるのか？」

晶は驚きを隠せなかった。

バリア技術は、シェルターでしか採用されておらず、ＨＡへの実用化はまだまだ先だと言われていたはず。

だが、ι・ブレードにはその機能が搭載されていたのだ。

信じられなかった、まさにこの機体は最先端技術の塊なのだろう。

ババババッ！

無数の銃弾が、ι・ブレードを取り囲んでいた脚を撃ち落していった。

「大丈夫か、しっかりしろ」

「あ、ああ……平気だ」

「残骸は俺に任せろ、お前はあいつの注意を引きながら動きを止め

てくれ」

またしても、性能に助けられた。
自分の腕のなさに愕然とするが、今はそれどころではない。

晶はゼノスの指示通り、E・B・Bの注意を引き付けながら脚を刻んでいく。
何度も頭痛を引き起こしながら、相手の動きをギリギリで回避していき、脚を刻んでいくの繰り返しだった。
太くて切断しきれないと思われた個所も、『ムラクモ』ならいとも簡単に切り裂いて見せた。
尋常ではない切れ味だ。
シミュレーター上での知識でしかないと言えど、通常のサーベルでもここまで綺麗に切れることないはずだ。
あっという間に、E・B・Bの脚は切断されその場から動けなくなっていた。

「退け、晶。　ミサイルを撃ち込む」

「わ、わかった」

晶はゼノスの合図を確認すると、真っ先に飛び上がりE・B・Bから離れた。
すると、赤いHAの両肩にあるポットが蓋を開ける。
無数のミサイルが、一斉にバケモノへ向けて発射された。
ウィッシュでも一隻積むのがやっとだというのに、二つもミサイルポットを積むなんて無茶苦茶だ。
だが、ゼノスという男は難なくその機体を制御して見せている。

E・B・Bは、ミサイルを全弾あびた。

流石にあれだけの数をまともに受けてしまえば無事ではいられない。
そう思ったが、E．B．Bの生命力はやはり異常だ。

かなりのダメージは与えられたものの、まだまだ息をしていて悲鳴をあげ続けていた。
容赦なくガトリングをありったけ撃ち続けてもなお、E．B．Bは蠢き続けている。
それどころか、体から新たな脚を生やし始めていた。

「ブーストハンマー、射出っ！」

ゼノスの合図と共に、足枷のようにつけられていた鉄球がE．B．Bの頭部へと向けて発射された。
ブォンッ！　と轟音と共に、ハンマーは前進してゆく。

ただのハンマーではない、ハンマー自身にブーストが搭載されているのだ。
尋常ではない推進力を叩き出し、あの超重量なはずの赤い機体がハンマーへと引っ張られて動き出してしまうほどだった。
ハンマーは猛スピードで、E．B．Bの頭部へと目掛けて発射された。

グシャリッ

鈍い音を響かせながら、ハンマーは紫色の液体を散らしながら宙へと舞う。
だが、容赦なくブーストを発進させて、何度も何度もE．B．Bの頭部を狙い続けた。
段々と、E．B．Bの動きが鈍くなってきた。
その間にもガトリング砲と二連キャノンで、容赦なく赤い機体はE．

B．Bを撃ち込み続ける。

……圧倒的な火力だ。

とてもじゃないが、HA単機でここまでの火力を実現できるはずがない。

あの無茶な設計だからこそ、誇る火力としか言えなかった。

「コアは頭部にある、ムラクモで突き刺せっ！」

「と、頭部を？」

「できないのか？」

「……やってやるさっ！」

ただ呆然と現場を眺めていた晶に、ゼノスがそう指示を出した。

赤い機体が容赦なく集中砲火を浴びせていても、E．B．Bの再生は止まる気配を見せていない。

完全復活する前に、『コア』を破壊しなければE．B．Bが死滅することはないのだ。

今、あの位置で素早く『コア』を貫けるのは長身武器である『ムラクモ』と、圧倒的な機動性を誇る『ι・ブレード』だけだった。

ゼノスの判断は適格だ、後は晶自身がやれるかどうかだけだった。

ムラクモを構えて、晶は空高く舞った。

狙いはただ一つ、バケモノの頭部だけだ。

「ι・ブレード、頼むっ！！」

晶の意思に応えるかのように、コックピットが赤く灯った。

「いっけぇぇぇっ！！」

ムラクモを下に突き刺すように構え、晶は一気に機体を降下させた。
凄まじい勢いで、明確に頭部を目掛けて落下している。
ブーストハンマーも丁度動きを止めて、ι・ブレードへ道を譲った。
後はそのまま、急降下するだけだ――

ズドンッ――

強い衝撃と共に、コックピットが大きく揺れた。
ムラクモは、E．B．Bの頭部を見事突き刺している。
動きが止まった。

晶はムラクモを持ったまま、機体を高く飛び上がらせる。
ブシャーッと、噴水のように紫色の血が舞った。
辺り一面が、紫色の液体に浸食されていく。

大型E．B．Bは、その体を液体に溶かされていくかのように形を失っていた。
静かに、晶は機体を着陸させて……ムラクモを鞘に収めた。

「……上出来だな」

「俺が、やったのか？」

「ああ、お前の手柄だ」

消滅していくE．B．Bを目にして、晶はただ呆然と眺めるだけだ

った。
落ちこぼれである自分が、初陣で『大型E．B．B』を討伐した。
一人ではないと言えど、たった2機で仕留めたという事実が信じられなかった。

「……うっ」

急に、頭がフラつき晶はコックピット内で倒れてしまう。
疲れがドッときたのだろうか。

「皆……仇は、とったぞ――」

今は亡き友に、天に向けて勝利を告げた。
晶は微笑むと、そのまま気を失った――

ι・ブレード、始動　？（後書き）

２作品目となります。
壮大なロボットの戦いを書いてみたくて、勢いで書いてます。

第2話　メシアの遊撃部隊　？

辺りは、真っ白な空間だった。
自分以外の人間は、誰一人存在しない。
見渡す限り、無限に広がる真っ白な地。
歩いても歩いても、景色は変わらなかった。
常人ならば、こんなところを長時間歩いているだけでも気が狂ってしまいそうだ。

「よう、晶」

「……竜彦、なのか？」

突如、目の前に竜彦が姿を現した。
バカな、あの時確かに死んだはずだ。
竜彦が生きているはずがない。

「ああ、そうさ。　お前が助けてくれなかったから、Ｅ．Ｂ．Ｂに食われちまったのさ」

「え――――」

その一言で、晶は思わず言葉を失った。

「お前は僕の事も、見捨てて逃げて行った」

「私だって、あんなに助けてって叫んだのに」

「お前だけがＨＡに乗り、生き残った」

次々と、白い空間には死んでいったクラスメイト達が出現し始めた。
何がどうなっているのか、理解できない。

「……仕方が、なかったんだ。　生き残るためには、木葉を助ける為にはっ！」

「その木葉を守る事すら、放棄した」

「結局ＨＡに乗ってみたかっただけなんだろ？」

「Ｅ．Ｂ．Ｂを倒して俺カッコイイとか、思いたかっただけなんでしょ？」

クラスメイト達の言葉が、胸に突き刺さる。
あの時、多くの命が犠牲となった。
しかし、晶が動いていれば……ひょっとしたら助かった命もあったかもしれない。
それを、見殺しにしてしまったから、クラスメイトが怒っているんだ。

「違う、違う――俺は、正しいことを、したんだ――」

「違うよ、ただの自己満足さ」

「お前は人の命なんてこれっぽっちも考えてなかった」

「人命より、欲望を優先した」

「パイロットとして認められたくて、新型に手を出した」

「そして、人を殺した」

「やめろ、やめてくれっ！　俺は、俺は――」

これ以上、聞きたくない。

晶は耳を塞ぎ、その場で跪いた。

何故だ、どうしてこんな目に逢わなければいけないんだ。

仇はとったはずなのに、何故誰も喜んでくれない。

……何故、自分が責められるのか。

「うわあああああっ！！」

晶の悲痛な叫びが、真っ白な空間に響き渡った。

「はっ――」

ガバッ、と晶は起き上がった。
息は荒く、全身は汗だくだ。

……夢、だったのか。
それにしても悪夢だった、まるでクラスメイト達の怨念が籠っているかのように感じる。
今でも寒気がする、晶は自分の両手を見つめてただ震えるだけだった。

「E．B．Bにより莫大な被害を受けた第4シェルター東地区は、数十人の命が犠牲となりました。
なお、大型級の殲滅が完了したもののE．B．Bによる被害は後を絶たず、避難できていない住民も大勢おり――」

ふと、テレビのアナウンスを耳にして晶は顔を向ける。
そこには、自分が見た光景と同じ映像が映し出されていた。
……E．B．Bにより破壊しつくされた街の姿だ。

「……クソッ」

結局、誰一人救えていない。
あのE．B．Bを倒したからと言っても、決してE．B．Bの侵攻が止まるわけではなかった。
あれだけの数が押し寄せてしまえば、討伐には多くの時間を要する。
もはや逃げ遅れた住民の命は、ないと思っていい。
晶は、悔しかった。

「お、起きてんじゃねーか」

「……誰ですか？」

突如、ドア越しからガラの悪い声が聞こえた。
しかし、声のトーンからして男ではない。
よく見るとここは、どこかの病室のようだ。
恐らくメシアの人間に保護されたのだろう。

「ちーっす、未来のエースっ！」

「……へ？」

ガタンッとドアを開けてきたのは金髪ショートに青目の少女だった。
年齢的には同じぐらいに見える。
白いシャツに黒の短パンとスポーティな恰好をしていた。

「ふぅん？　随分と冴えないね、本当にぃ・ブレード動かしたパイロットなのかぁ？」

ジロジロと目を動かしながら見られていると、何だか気恥ずかしさを覚えてくる。
晶は慌てて少女を突き放した。

「……ここ、何処なんです？」

「ここはメシアが所有するアイゼン級の戦艦内さ。　フリーアイゼンって言うんだぜ、かっこいいだろ？」

「フリーアイゼン？　そういえば聞き覚えが……」

メシアが所有する戦艦には大きく分けて二つ存在する。

一つは大型戦艦である『レギス・アダマント級』
レギス級と略されることも多い、最高級クラスの戦艦だ。
ＨＡでは実現しきれない超高火力の主砲を持ち、大規模な討伐の際には必需品と言っていいだろう。

もう一つは、『アイゼン級』だ。
こちらは用途は様々で、輸送用の艦ですらも含まれる。
レギス級は数が少ないのに対して、アイゼン級はその数は莫大だ。
メシアの部隊は必ず、アイゼン級を使って１チームを組むと、授業で聞いたことがあった。

ここは艦の中だって？
晶は今一信じられずに、近くにあった窓から外の景色を覗いた。
……間違いなく、空を飛んでいた。

「フリーアイゼンは世界各地のＥ．Ｂ．Ｂ討伐を支援する事を目的としているのさ。
つまりアタシ達は、メシア直属の遊撃部隊っ！　ま、少し何でも屋に近い動きにはなってるんだけどね」

「あ、貴方もパイロットなんですか？」

「何よ、疑う気？　言っとくけど、アンタよりずっと早くパイロットしてんだからな？」

晶は信じられなかった。
この少女はどう見てもまだ同年齢に近いというのに、もう戦場に出ているというのか。
第４シェルター東地区では、そんなことは絶対にありえない。

「あ、そうそう。　アタシは『シリア・レイオン』だ、シリアって気楽に呼んでくれて構わない。　どーせアンタより年下さ」

「と、年下ぁっ！？」

「何だ、そんな驚くことないだろ？」

「はぁ、す、すみません」

シリアがずんずんと詰め寄ってくる中、晶は目を逸らしながらそう呟く。

木葉とは全く違うタイプで、どうもやり難い。

クラスメイトでもこんなタイプの子はいなかった。

「アンタ、歳は？」

「こ、今年で１８」

「チッ……同い年だったか」

何故か舌打ちをして、眉間に皺を寄せていた。

そんなに年下でありたかったのだろうか。

「しかし男の癖に何かぱっとしないねぇ、とりあえずアタシに敬語は禁止。

どーせ階級も何もないし、年齢も変わらないしね」

「……ああ、わ、わかった」

「それよりもどうやってι・ブレードを動かしたのさ？　ほら、あれって今まで誰が乗っても起動したことがなかったからさ」

誰が乗っても、起動しない？

晶はそれを聞いて不思議に感じた。

「乗った瞬間に、勝手に起動したんだよ。　何か変なコードが出てきて体中に絡みついて、メンテナンスがどうとか」

「うげ、随分と気色悪いんだな。　あ、アタシが乗った時に起動しなくてよかったよ……」

「詳しく聞かせろ」

シリアに当時の状況を説明していると、遅れて病室に入ってきた者がいた。

声から察するに、あの時の……ゼノスという男だろう。

ゼノスは無言で椅子に座り、足を組んで黙っていた。

「……相変わらず感じ悪いね、ゼノス」

「お前は戻れ、機体整備の手伝いでもしてろ」

「やだね、つまらないし」

「館長が黙ってないぞ」

「言わせとけばいいのさ、どーせ追い出されたりはしないよ」

べーと、舌を突き出すと、シリアがピョンッと身軽に病室の外へと

出て行った。

「また後で続きを聞かせてなー、んじゃ」

親指をグッと立てて、何とも輝かしいスマイルを見せるとシリアはその場を去って行った。

「……あの人、何なんです？」

「パイロットだ。　性格に難はあるが腕は一流だ、いざというときは頼りにしている」

ゼノスの腕を間近で拝見した晶ではあるが、あんな機体を扱っている辺り相当腕は高いはずだ。
その男からも高い評価を得ているということは、シリアも相当優秀なパイロットなのだろう。

「親父の事、知ってるんだろ。　今でも元気にしているのか？」

ふと、晶はゼノスにそう尋ねた。
高校へ入学して以来、晶は父親と逢う機会がほとんどなくなっている。
母親は昔、病気で亡くなってしまっていたし、肉親は父親だけだ。

中学校の頃までは、家に帰る日が多かったのだが高校以来はほとんど家に帰っていない。
最後に帰ってきたのは、高校2年の時の冬だろうか。
もっとも、今はその帰る家すらなくなってしまったのだが。

「悪いな、未乃　健三については詳しく聞かされていない」

「……そう、か」

何処か力なく、晶はそう呟いた。
わかりきっていた返答ではあったが、最近連絡も取れていないのが気がかりだ。
何かに巻き込まれていなければいいのだが……。

ふと、ゼノスが目の前に紙の束を差し出した。
何百枚とある資料に、晶は思わず嫌な顔をしてしまう。
まるで学校の宿題として出されたかのような感覚が蘇った。

「ι・ブレードについての調査結果だ」

「……俺が乗ったＨＡ、ですよね」

「ああ、単刀直入に言おう。　あれは今、お前以外に動かせない」

「な――ー」

一体どういうことなのだろうか。
先程シリアも似たようなことを言っていた。
ＨＡには特定のパイロットにしか動かないようにする制御といったものは存在しない。

あったとしてもハッチに鍵をかけるだけで、コックピット内に制御をすることはできないはずだ。
いや、仮に制御がしてあったとしても何故それを晶が動かすことができたのか。
一番の疑問は、そこだった。

「ι・ブレードは元々無人機を想定して設計されたＨＡだ。
そもそも人が乗るはずがないのに、コックピットが用意されているのがおかしい」

「無人機を想定ってのは確かにおかしいと思います、俺が乗った時は確かにパイロット適性診断ってのが働きましたから」

「……詳しく話せ」

晶は当時の状況をありのままに説明した。
搭乗した時のパイロット診断。
無数に出現した謎のコード。
コックピットの赤い光、そしてι・システム。

「……」

全てを聞き終えたゼノスは、目を閉じてひたすら黙り込んだ。
何か引っかかる事でもあるのだろうか。

「ιシステムは、無人機を実現するために設けられた『ＡＩ』……つまり人工知能の事を指す。
だが、お前が言うιシステムは俺の認識とは異なっている」

「……そうだっ！　俺、変な映像見たんですよ。　何か、これから起こることが白黒の映像になって見えたんです。
何というか、あれはモニター越しじゃなくて……本当に俺の視界が変わったような感覚でした」

「……っ！」

ゼノスは突然、表情を一変させた。
晶に手渡した資料を強引に奪い取り、雑に紙をめくり始めた。
そして、即座に資料の一部を抜き出し晶に突き付けて見せる。

「ιシステムの概要に、こんな記載がある。　ちょっと読んでみろ」

「は、はい」

恐る恐る晶は、ゼノスから資料を受け取るとそこの文書に目を通した。

『エターナルブライトは生命体である』

一部の学者による研究成果により、エターナルブライトが一種の生命体であるという仮説が続々と発表されている。
エターナルブライトには、一種の生命のようなエネルギーが含まれているのだ。
即ち、そのエネルギーこそがE．B．Bを生み出す原因になるのではないかと云われていた。
具体的には、無機質でありながらも生命体としての活動が確認されており、何らかの形で莫大なエネルギーを生み出しているとされる。
つまり、エターナルブライトは自らの意思で生きている、という仮説だ。
ιシステムはそんなエターナルブライトの特徴を利用して、機械による自主的な判断を可能とした人工知能だ。
何ができるかと言えば、例えば自らの身に危険が迫っているとしよう。

人であれば、誰かが後頭にを殴ろうとしたとき……人は身の危険を察するだろう。
エターナルブライトには、それの延長線上のような働きがあった。
つまり、あらゆる情報を元に自らに迫る危険を察して、その危険に対応した行動を取ることができる。
ここでは、『危険察知』と呼ばせてもらおう、そんな力が備わっているのだ。
もし、それを意図的に使わせることができれば、
機械がありとあらゆる環境情報から行動を予測し、その結果から自らの判断で危険を回避……といった判断をさせる。
そういった機能が実現されれば、将来はパイロットを使わずにE・B．Bの殲滅を行える可能性があった。

似ている、晶が体験した事象に似ていた。
いや、ここの記述は間違いなく、あの事象の事を指している。

「恐らく、エターナルブライトが持つ危険察知を利用してパイロットに映像を送るような機能が搭載されているんだろう」

「で、でもこの記述おかしくないですか？　どうしてただのエネルギー体が意思なんて持つんです？」

いくらエターナルブライトが未知なる力を秘めていると言えど、晶は信じることができなかった。
無機質なものがどうして、自らの意思を持つのか。
もし本当であれば、それはｉ・ブレードだけならず自然と他のＨＡにも搭載されても不思議なはいはずだ。

「仮説でしかないことは事実だ、だが証明はお前自身がしている。少なくとも、お前が嘘を言っているようには見えない上に……思い当たる節はある」

「思い当たる節？」

「ところどころ、お前はある程度相手の動きを読んで行動しているように見えた。
しかし、熟練のパイロットならともかく素人であるお前がそんなことをするのは不可能だ。
少なくとも、学校で調べさせてもらったお前の成績から見ても尚更だ」

耳が痛い話だが、確かに晶はその力のおかげで戦い抜けたといっても過言ではない。
もし、危険察知がなければ……どうなっていたことか。
仲間達と同じ運命を辿っていた可能性もあったのだから。

「……そうだ、木葉は？　木葉はどうしたんだよ？」

晶はふと、木葉の事を思い出した。
ι・ブレードに搭乗して以来、色んなことで頭がいっぱいになっていたせいで
完全に木葉の事が頭から抜けてしまっていた。

木葉を守ることは死んでしまった竜彦の頼みでもあるというのに
何やっているんだ、と自分に強く言い聞かせた。

「早瀬　木葉なら無事だ、少し休ませたら元気になったぞ」

「そ、そうか……よかった。　逢わせてくれないのか？」

「少しは自分の身を心配しろ、お前は二日も寝込んでいたんだ」

「なんだって――」

その一言に、晶は衝撃を受けた。
まさか自分が二日間も寝込んでいた、なんて信じられなかったのだから。
目を覚ました時に見たあの映像、二日前と何も変わっていない。
むしろ、状況が悪化しているようにすら見えた。
……もう、あの地区は駄目かもしれないと悟った。

「俺はそろそろ行く、何かあれば通信機を使え」

「あ、ああ」

ゼノスが指をさした先には、壁に掛けられている受話器があった。
それを確認すると、ゼノスは椅子から立ち上がり背中を向ける。
すると、ピタリと足を止めた。

「……最後に一つ、聞かせろ」

その場から微動だにせずに、晶に向けてそう言った。

「ここで、パイロットする気はないか？」

「……へっ！？」

晶は思わず、素っ頓狂な声をあげる。
落ちこぼれの自分が、パイロットに？
そんなことできるわけないだろ、と心の中で呟く。

「やるかやらないか、と聞いているんだ」

「……クッ」

歯を食いしばり、拳を強く握った。
願ってもいないチャンスだ、上手くいけばメシア直属の部隊に入れるかもしれない。
しかし、晶は戸惑った。

自分がクラスで最下位の落ちこぼれだった事。
教師からも出撃の許可をされずに、足手まといと宣言された事。
あのガジェロスという男が言っていた『機体の性能のおかげ』という言葉に
ゼノスが先程言っていた『危険察知』の事も。
こんな自分がパイロットをやっていいのか、自信を持てなかったのだ。

「撃墜Ｅ．Ｂ．Ｂ数１４、大型１、奪取されたＨＡ１機……更にはι・ブレードの保護遂行」

「へ？」

「お前の実績だ、十分に推奨できる数値だと言っている。　どうなんだ、未乃　晶」

認めてくれる、というのか。

例え機体の性能で勝利をしたと言えど、『実績』と認めてくれたのか。
一人のパイロットとして、戦ったことを。

晶はただ俯いて、掛け布団をギュッと両手で握りしめる。
歯も食いしばり、目を閉じて今までの自分を振り返った。

……父親に認めてもらうべく、入学した高校。
毎晩欠かさずシミュレーターで特訓を重ねた日々。
親友と成長を分かち合った日々。
まるで、晶を受け入れるかのように動いてくれた『父親のＨＡ』。
たった一人だけ、生き残ってしまった『パイロット候補生』である自分。

変えるんだ、パイロットとなれなかった候補生の無念を背負って。
正式なパイロットになって、世界中の人をＥ．Ｂ．Ｂの脅威から守るんだ。
父親に認められて、天国にいった親友にも変わった自分を見せてやろう。

あんな悲劇を意図的に起こした奴らも、絶対に許してはいけない。
木葉にも、二度とあんな怖いを想いをさせない為に
晶は、立ち上がる決意をした。

「ああ、やるさ。　俺にパイロット、やらせてくれっ！」

「いい返事だ、また会おう」

返事を確認すると、ゼノスは一言だけそう告げて退室していった。
立ち去ったのを確認すると、晶は肩の力を抜いてため息をつく。

こうして傷一つ負うことなく、無事に生還できたのはあくまでもι・ブレードの性能のおかげ。

決して自分の力ではないことは理解している。
だけど、あの力を使ってパイロットになれるのであれば。
認めてもらえるのであれば、ι・ブレードと共に世界を歩みたい。
共に戦い、人類に明るい未来を掴ませてやりたいという強い思いが芽生えていた。

「……そういや、話してなかったな」

ふと、自分の足を再度確認する。
やはり、ι・ブレードに乗ってから足の傷が完治していた。
これもまた、あの機体の機能なのだろうか。

例のιシステムが関わっていることは、間違いなさそうだ。
艦内を歩き回りたいが、勝手にここを出るわけにもいかない。
とにかく、今はι・ブレードに関する情報を集めよう。

晶はゼノスから渡された資料に目を通し始めた。

第2話　メシアの遊撃部隊　？（後書き）

拍手にてＨＡのサイズに関する質問がありましたのでこの場で回答させていただきます。

一般的なＨＡのサイズは全長（というべき？）１４～１５ｍとなります。
作中に出た機体であげますと

ウィッシュ　　：１５ｍ
ι・ブレード：１２ｍ
ゼノスの機体：１９ｍ

と、こんな感じになります。

ι・ブレードは、作中にあまり書いていませんが超軽量化を行い機動性を確保しようとしているため、比較的に小柄かつ軽いＨＡとなります。
対照的にゼノスの機体については、対大型Ｅ．Ｂ．Ｂ専用ＨＡとなり、武器を詰めるだけ積み込むスタンスです、その為必然的にサイズが大きいかつ重くなります。

ただ作中あんまり意識してなかったので、ひょっとしたら矛盾が生じてる可能性もあるかもしれません（今後は気を付けます。。。）
ちなみにゼノスの機体名は、そのうち出ますが作中にはまだ出してないので一応伏せました。（名称を出していないことに深い意味はありません）

拍手していただきありがとうございましたっ！

メシアの遊撃部隊　？

資料を読み続けると、ι・ブレードに秘められている最新技術が次々と明らかになった。
まずは装甲、圧倒的な機動性を実現する為に極限の軽量化が行われているようだ。
貧相な外見に見えるのは、この影響と思われる。

だが、装甲には聞き覚えのない金属が使用されていた。
まだウィッシュにも採用されていないと思われる『白紫輝合金（はくしきごうきん）』というらしい。
一般的にＨＡに使用されているのは『紫輝合金（しきごうきん）』と呼ばれるエターナルブライトを元に加工される代物だ。
それを採用することにより、装甲面と軽量化の両立が図られたと思うが、
まだまだ試作段階であり課題はいくつか残されているという。

羽根型のバーニアが二つ搭載されているのは、疑似的な飛行を可能とするため。
自在に飛び回ることはできないが、これによって空中でも高稼働を実現することができた。
晶がι・ブレードを動かしていた時に、直角に近い不自然な動きができたのも、あの羽根のおかげだ。

頭部につけられていた触覚のようなもの、ウィッシュ等からの無線通信の音を拾う為に設けられており
戦場において負傷を負ったパイロットを探し出すために、試験的に導入されたようだ。

晶の場合、偶然にもとんでもない会話を拾ってしまったのはこの機能のおかげである。

他にもι・ブレード専用武器として搭載された『ムラクモ』。
『白紫輝合金（はくしきごうきん）』を何十枚にも重ねて、刀作りの鍛冶のような手順で作られた。
その圧倒的な切れ味はもはや言うまでもない。

ιシステムについても、不完全なものを試作で導入したと思われる。
無人機を想定しておきながら、わざわざコックピットを用意したのも納得ができた。
ならば、パイロットが限定される理由は何か？
そもそも何故、晶にι・ブレードを起動できたのかどうか？
ただの実験機であれば、パイロットを限定する意味はないはずだ。

ゼノス自身もこの資料には目を通しているはず。
実験機とわかれば、晶自身にあんな質問を投げかけたりはしなかっただろう。

考えても仕方ない、と晶は資料を静かに棚へ置いた。
ふぅ、とため息をつくと横になって天井を眺めた。

……これから、自分はどうなってしまうのか。
本当にこのまま、パイロットとして採用されるのか。
もし、採用されなかったら？

生活はどうなる、学校どころか帰る家すら存在しない。
父親のもとへ向かうか、親戚に引き取ってもらうのか。
木葉はどうなる？　家族は無事なのか？
生き残った人々は、今後どうやって生活していけばいいのか。

晶は一人、不安を抱えた。

コンコン

「うわっ、ど、どうぞ」

突如、ノック音が響くと晶は慌てて返事をした。

「失礼しまーす」

ガチャリ、ドアを開けながら明るい声が飛び込んできた。
全身が驚くほどピンクな少女が、病室へとやってきた。

セミロングのピンク色の髪。
薄いピンク色の、多分ナース服。
片手にはカルテを持っている、もしかして看護師なのだろうか？
それにしても目が痛い、晶は思わず苦笑いをした。

「どうしたんですかー？　白衣の天使がやってきたんですよー、もっと喜んでくださいっ！」

「な、何ですか貴方？」

何処に白の要素があるのかと突っ込みたかったが、あえて晶は触れない。
看護師にしては随分と軽いノリだ。

「何言ってるんですかー、これから大事なパートナーになるかもしれないんですよ私達っ！」

「い、いやだから名前を……」

グッと晶の右手を両手で握りしめて、キラキラと目を輝かせながら少女はそう言った。
パートナーとは何のことなのか、どうもまた苦手なタイプの女の子が現れてしまったようだ。

「ハッ――、失礼しましたっ！　私、フリーアイゼンの医療班を務める『シラナギ・ソノ』ですっ！
主にパイロットの方々の健康管理、メンタルケアを担当しているのですっ！」

「い、医療班？」

言動からしても危なっかしいこの少女が、そんな役を務めているのか。
晶は途端にパイロットとして活動をすることに不安を覚えた。

「実はゼノスさんから、根暗で内向的で落ちこぼれなどうしようもない子がいると聞いたので駆けつけてきたのですっ！」

「だ、誰が根暗だっ！」

というかあのゼノスという人は、晶をそんな風に見ていたというのか。
途端に人間不信に陥りかけた。

「ちなみに私が9割ほど貴方の見た目から勝手に判断しました、です」

「よ、余計なお世話だっ！」

随分と失礼なことを平然と言う人だ。
こんなのがクルーで大丈夫なのだろうかと晶は不安に思う。

「でも、目覚めてくれてよかったです。　このまま起きなかったら、あの子に申し訳がなかったのです……」

突如、シラナギという少女はシュンと俯くとそんなことを呟く。
随分とテンションの差が激しい、疲れないのだろうか。

「……あの子って木葉のことですか？」

「大正解ーっ！　流石未来のパートナーね、息がぴったりじゃない？」

いちいち反応に疲れる。
どうもこの艦のクルーには、まともな女の子がいないように感じた。

「あ、あの。　木葉に、逢わせてもらえま……すか？」

「はいはい、私にまっかせてくださーい！　木葉ちゃんなんて3秒で召喚しちゃいまーすっ！」

晶はふと、木葉の様子が気になってシラナギにそう頼んだ。
すると、シラナギはいちいち軍隊のように両足を揃えて敬礼をするとマンガのようなグルグルダッシュで病室を出て行った。
まるで、嵐のような人だった。

数分後、3秒と宣言しておきながら3分かけて　（それでも早いが）

シラナギは木葉を連れて戻ってきた。
手を引かれて俯いたまま、木葉が病室へと入り込む。
何処か、様子がおかしい。

……無理もない、あの被害状況を見てしまえば笑顔でいることなんて無理だ。
それにあんな怖い思いをさせてしまった、晶はただ歯を食いしばるだけだった。

「木葉、無事だったんだな」

「あ、晶……くん？」

ハッと、晶の声に気づいて木葉は顔をあげる。
目には涙を浮かべていた。

「はいはい、この通り私の適切なケアのおかげで晶くんは不死鳥の如く蘇りましたーっ！　はい、拍手ーっ！」

この子はもう少し空気を読んでほしい、晶はシラナギと目を合わせてため息をつく。
そして、木葉ともう一度目を合わせた。
だが、晶から目を逸らしてしまう。

「……晶くんが無事で、本当に良かった」

「あ、ああ。　心配かけちまったな」

そう告げると、木葉は俯いたままコツコツと歩み寄り
近くの椅子へと腰を掛けた。

ずっと俯いたまま、晶と顔を合せなかった。

「あのね、晶くん。　よく、聞いてね」

「……ああ」

何となく、告げようとしていることは理解できた。

だが、晶はそれ以上は語らずにただ頷く。

「クラスメイトで生き残ったの、私達だけなんだって。　それだけじゃない、あの地区の人が……ほとんど逃げ遅れちゃったんだって」

木葉の口から告げられる一言が、胸の奥深くに突き刺さる。

晶はただ拳を強く握りしめるだけだった。

「……『アヴェンジャー』」

「へ？」

突如、木葉は単語を呟く。

何の事かわからず、晶は戸惑った。

「その人達が、第４シェルター東地区を……意図的に、襲撃したの」

「まさか――」

晶はあの時拾った通信を思い出した。

大型のＥ．Ｂ．Ｂをあの地区に誘導したという男二人の会話。

……ι・ブレードを狙った奴らだ。

何故だ、何故それだけのために無関係の人が巻き込まれなければな

らなかったのか。

「竜彦くんも……死んじゃった、んだよね」

「……ああ」

「どうして、かな……私達はただ、普通に暮らしていただけなのに何も悪いことなんて、してないのに――」

木葉は両手を顔で覆い、泣き崩れた。

隣で黙っていたシラナギも、ただ悲しい表情で二人の様子を伺うだけだった。

『アヴェンジャー』

復讐者を名乗る彼らは、一体どうして『ι・ブレード』をそこまでして奪おうとしたのか。

関係ない一般市民を巻き込んでまで、することだったのか？

人類の天敵である『E．B．B』を使ってまで。

同じ人間がやっていいことじゃない。

絶対に、許せない――

「木葉……俺、ここでパイロットになれるかもしれないんだ」

「……晶くん？」

ふと、木葉は顔をあげた。

涙や鼻水で、せっかくの綺麗な顔が台無しになっている。

晶は木葉と目を合わせた。

「俺一人でできることなんて、限られているかもしれない。
だけど、許せないんだ……E．B．Bも、その『アヴェンジャー』
って奴らもっ！
俺……悔しいよ、あんな奴らにクラスメイトが……親友の命が奪わ
れちまったことがっ！」

ただ、力強く晶はそう叫んだ。
手は震えていた、恐怖からじゃない。　ただ、悔しかった。
理不尽な襲撃にただ、ぶつけようのない怒りを抱いた。

「……わかった」

泣き止んだ木葉は、両腕で涙を拭きとろうとする。
さり気なく、シラナギがハンカチで涙をぬぐった。
涙と鼻水でグチャグチャになった顔を、優しくふき取る。
シラナギは木葉に微笑むと、木葉もまた笑顔で返した。

「晶くんの夢、だもんね。　私、応援するよ？　でも、約束してね。
絶対に、死なないで。　無茶だけは嫌だよ……もう、誰も失いたく
ないから――」

木葉の手は小刻みに震えていた。
本当は不安で仕方がないんだろう、晶がパイロットになることが。
昔から、木葉は晶に関してそんな不安を抱いていた。

パイロットは常に死と隣り合わせ、一瞬の油断で命が失われる事を
木葉は理解している。
戦場に出て行った『竜彦』が、いとも簡単に死んでしまったのだか
ら。
晶は、そっと震える手にそっと手を伸ばそうとした。

すると、横から真っ白な手が晶の視界に飛び込む。
ハッ、と晶は顔を向けるとそこにはシラナギの顔が視界に入った。
丁度目があった、一瞬固まったがシラナギは静かに微笑んだ。
その手で晶の手首を掴み、木葉の手をしっかりと握らせた。

「……ああ、約束する」

「……頑張ってね、晶くん」

木葉が微笑むと、晶も照れくさそうに微笑み返した。
……これ以上、木葉を悲しい目には合わせない。
晶は戦い抜く事を、改めて決意した。

「うん、思った以上にメンタル面は大丈夫そうじゃない。　よかったじゃない、これならパイロット審査も通りそうだよ」

ようやく喋る機会を得たと思ったのか、シラナギは晶の肩をポンポンと叩きながらそう言った。
しかし、意外な一面を見た気がする。
やはりメンタルケアを担当していることだけあって、しっかりしているところはあるようだ。
最初は不安ばかりだったが、晶は少しだけシラナギの事を頼りになる人だと感じた。

トゥルルルル

突如、電話の音が聞こえだした。
シラナギは手慣れた手つきで受話器を手にする。

「はいはいー、どうしましたー？」

何か逆じゃないか、それ。　と、心の中で突っ込みを入れる。

「うーん、大丈夫だと思いますよ。　思ってた以上に元気そうですし。

はいはい、わかりましたー連れて行きまーす」

ガチャリ、とシラナギは受話器を置く。

「はい、それじゃいきますよー晶くんっ！」

「ま、ままま待ってくださいっ！　い、いきなりなんですか？」

シラナギは何の説明もなしに、晶の腕を引っ張ると病室をそのまま出て行こうとする。

晶は慌てて、シラナギにそう尋ねた。

「あーそうだった。　ほら、艦長と面会？　何か直接話したいんだってー」

「か、艦長と？」

何故そんな大事なことを告げずに連れて行こうとするのか。

この人やっぱり、どこか抜けていると晶に再び不安が襲い掛かった。

「木葉ちゃんは部屋に戻っててていいからねー、それじゃレッツゴー」

「う、うわちょっと――」

有無も言わさず、晶は強引にベッドから引きずりだされる。
そのまま病室の外へと連れ出されるのであった。

シラナギに連れられ、数十分は歩き回っている。
流石に中・小型に分類される戦艦でも、とてつもない広さだ。
こうやって移動しているだけでもかなりの距離がある。

これからブリッジルームへ連れ行くと、と告げられて案内されているのだが
流石に二日も寝たきりだった体には堪える。
晶は少しだけ疲れを見せていた。

後からシラナギに聞かされた話では、どうやらこの部隊へ晶を採用させるかどうかを
艦長が直々に判断するといった話があったらしい。
その為に、どんなパイロットか確認するために呼び出されたという。

「あったあった、ここだよー」

シラナギはふと足を止めると、そこにはやたらひろい幅の階段があった。
その先には大きな扉、ロックはされているようだ。　左に暗証番号

を入れる為のキーロックが存在する。
ピョンピョンッと、一段抜かしでシラナギは階段を上って暗証番号を入力した。
ガーッと音を立てて、大きな扉が開かれる。

「じゃ、いこっかー」

「は、はい」

晶は戦艦に乗り込むことはもちろんの事、ブリッジルームに入る事自体も初めてだ。
壮大な扉があいた途端、緊張感が走った。
ゆっくりと階段を上り、扉の奥深くへと進む。

そこには巨大なスクリーンと数々の機器が広がっていた。
想像以上に広く映し出された空の映像に、ただ圧倒される。
丁度、高台に立つ男の後ろ姿が目に入った。
群青色のマントに焦げ茶色の短髪の男だ。

「来たか」

その男が、振り返った。
歳は若くないが、何処か近寄りがたいオーラを放つ風貌。
その鋭い目は、獣のように晶を捉えていた。

「私がフリーアイゼンの館長を務める『ゲン・マツキ』だ」

晶は、その場に立っているだけの艦長に圧倒された。
流石はメシアの軍隊を率いる艦長としか言いようがない。
ゼノスやシラナギと違い、風貌からして明らかに違うのがわかる。

今までどんな激戦でも乗り越えてきたベテランである雰囲気を、ヒシヒシと感じ取っていた。

「……未乃です。　未乃　晶です」

「艦長、この少年こそ俺が推奨する『ι・ブレード』のパイロット候補だ」

最初からそこにいたのか、ゼノスは立ち上がってそう言った。
ここでパイロットとして採用されるかどうかが決まる。
そう思うと、晶の中には更なる緊張感が走った。

「まだ子供ではないか、どう見ても戦闘慣れをしているよな目をしていない」

「しかし、素質はある。　アンタも報告は受けただろう？」

艦長だというのに、敬語も使わずにゼノスはそう告げる。

「まぐれの実績など、あてになるか」

しかし、艦長は聞く耳を持たなかった。

「貴様、まさか実力で成果を上げたと思っていないだろうな」

艦長は、晶を睨み付けながらそう告げる。
目を、逢わせることができなかった。

晶自身もわかっている、成果をあげれたのはあくまでも『ι・ブレード』の性能のおかげ。

とてもじゃないが、自分の実力だと胸を張ることができない。

「シミュレーターの結果が悪くとも、実戦に出してみれば基準値以上の活躍をするパイロットについてはよく聞く。
だが、貴様の成績は論外すぎる。　そんな腕でパイロットだと？
戦場を甘く見ているとしか思えんがな」

艦長から告げられる言葉に、晶はただ俯き、拳を握りしめるだけだった。
反論できるはずがない、事実だ。
……結局、パイロットなんて夢だったのか。

「ゼノス、貴様がこいつを推奨する理由はそれだけか？　実績が全てと言われても、私は認めんぞ。
死人を増やすだけだ、こいつが死ぬだけじゃない。　下手をすれば仲間を巻き込む危険性もあるんだぞ」

その通りだった。
例え晶自身に危険が及ぶ危険性があっても、それによって仲間の足を引っ張る事もあるはずだ。
だから戦場に足手まといはいらない、教師にも同じことを言われている。
否定することが、できなかった。
迂闊に『次も頑張ります』だとか、そんな事はとてもじゃないが口に出せなかった。

「確かにアンタの言う通りだ、こいつは『ι・ブレード』の性能で戦績を収めたのは言うまでもない」

ゼノスの口からも、その言葉が告げられてしまった。

晶はただ落胆するだけだった。
少しでも、認めてもらえたことを喜んでいたのに。
結局、ι・ブレードの性能でしかない。
……無理なんだ、自分ではパイロットなんて無理だったんだ。
晶はそう言い聞かせて、全てを諦めようとしていた。

「だが、勘違いするな。　こいつは機体の性能を上手く引き出して生き残ったんだ」

その言葉に、晶はハッとさせて顔を上げる。

「未乃　晶は初陣にも関わらず、『ι・ブレード』の持つ性能を即座に理解し、うまく利用したんだ。
こいつは情報もなしに新型ＨＡを扱い、見事Ｅ．Ｂ．Ｂの襲撃から逃れて戦果をあげた。
パイロットとしての腕はこの際おいておこう、だが機能を利用する面は間違いなく一流だ」

ゼノスが艦長にめがけて、無表情にそう訴えていた。

「ほう、ならば貴様は偶然ではなく……あくまでも実力で戦果をあげた、と主張するか」

「そうだ、それにこいつは的確に俺の指示に従った。　初陣でここまで的確に指示を聞ける奴は早々いないだろう。
一般の学生ならビビってしまって実力を発揮できずにいるか、パニックに陥ってまともに命令を聞けない。
少なくとも、冷静に状況を理解し、的確に判断をするだけの力はあるんだ」

「指示を、的確に？」

「まさか指示をすれば誰でもその通りに動ける、とは言わないだろうな。
少なくとも俺は、指示通りに行動する力も『パイロット』として必要な能力だと判断している」

もはや、ゼノスの言葉は屁理屈のように聞こえなくもない。
だが、晶にとっては嬉しかった。
学校で今まで、誰にも褒められたこともなくシミュレーターでも満足いく結果がだせずにいたのに。
初めて、自分を誉めてくれる人が現れたのだから。

「機体の性能を前提に話すのもいいが、ただの素人がそこまで的確に動かせたのは、性能だけではない。
だから俺は、こいつに『パイロット適性』があると言っている」

「だが、認めることはできん。　少なくとも、教育施設に送り込んで実戦向けの訓練を十分に積ませる必要がある。
悪いが今は、死ぬだけだ。　どんなに素質があろうと、この部隊のパイロットとして受け入れることはできん」

しかし、ゼノスの説得は虚しく艦長は晶を採用しなかった。
少なくとも、パイロットの腕に関する問題だけは認めてくれたようだが
だからといって採用するかしないかは別問題だ。

……しかし、夢に一歩前進したと思っていい。
これから、訓練所で成果を上げることができれば……メシアに採用されるのだって夢じゃないんだ。

ビーーーービーーー

突如、ブリッジルーム全体からサイレンが響く。
真っ赤な光が点灯され、緊急事態が発生したことを告げていた。

「艦長、政府からの要請です。　2時の方向にE．B．Bの群れを確認しました。
現在、四機のウィッシュが交戦中。　至急、援護をよこせとのことです」

オペレーターを担当している女性から、静かにそう告げられる。

「各員、戦闘配備につけ。　民間人は部屋から絶対出さないようにしろ、パイロットは至急、出撃準備をしろ」

艦長は冷静に、クルー達にそう告げた。
晶はどうしていいかわからずに、辺りをキョロキョロとするだけだ。

「未乃　晶、貴様の出撃は許可しない。　そこで戦況をずっと見ていろ」

「ι・ブレードはださないんです？」

「ならん」

シラナギが、艦長にそう告げると即座に首を横に振る。
晶は言われるがまま、その場を立ち尽くすだけだった。

「……悪いな、俺の力不足だった」

「え？」

すり違いざまに、ゼノスはそう告げた
謝る必要なんてないはずだ、艦長の判断は正しい。
未熟なパイロットを戦場に出すわけにはいかないのだから。

「ま、まだチャンスはあるかもしれませんよー？　そんなガッカリしないでくださいよ」

「……いえ、いいんです。　俺だってそう簡単にパイロットやれるって思ってませんでしたから」

「木葉ちゃんと約束したでしょ、パイロットになるって。
悔しくないの？　艦長に認められなかったことが」

「そんなこと、言われても――」

悔しいかどうか聞かれれば、悔しくて当たり前だ。
最初は散々認められなかった挙句、役立たずとはっきり明言されたのだから。

晶はただ、艦長の言葉を受け入れるしかできなかった。

緊急事態を告げるサイレンが響く中、ブリッジ内には緊迫した雰囲気が漂う。
慌ただしく動き回るクルー達に対して、ただ呆然と晶は立ち尽くすだけだ。
こんな場所にいていいのか？　と、晶は戸惑うばかりだった。

「味方機４機、複数のＥ．Ｂ．Ｂと交戦中。　うち２機は負傷。数は２０を超えています、場には霧が発生しており苦戦を強いられている、とのことです」

「視界状況は最悪か……パイロット達のフォローを頼むぞ、カイバラ」

カイバラと呼ばれた女性は、恐らくオペレーターを務めているのだろう。
こんな状況でも顔色一つ変えずに、冷静に状況を伝えていた。

「あの人はヤヨイさんよ、『ヤヨイ・カイバラ』っていうの。　近寄り難い人だけどすっごくいい人なんですよー」

シラナギが、例の女性オペレーターを指さしながらそう教えてくれた。

「……紹介はありがたいんですけど、いいんですか？　俺達こんなところにいても」

「いいじゃない、艦長も何も言ってこないし」

この人本当にこれでいいのか、とまた晶は不安に思う。

「しっかしさっきまで霧なんて発生してなかったけどな、これじゃ俺の出番もなさそうだぜ」

「そう言うな、彼女のサポートでもしてやるといい」

今度は二人の男が何やら話をしていた。

「あっちの軽そうな人が『リューテ・マインス』、主に操船を担当してるのでーす。
こっちの堅そうな人が『ライル・ラピード』、こっちはなんと武器管制担当なのでーすっ！！」

ジャジャーン、と口で効果音を立てながら、またしても空気を読まずに紹介をする。
シラナギの紹介通り、ライルという人はオレンジ色の短髪で何処か楽観的な人であろうというのは感じ取れた。
反対にリューテという青髪の男は、メガネをかけており何処か知的な雰囲気が漂う。
だがあくまでもシラナギの紹介だ、大きな偏見が含まれているのは間違いない。

「出撃準備は整ったか？」

「パイロット各位、ＨＡ（ホープアームズ）に搭乗を確認しました」

「ゼノフラムは出せるのか？」

「整備班からは異常なし、と報告を受けてます」

聞きなれない単語をふと耳にした。

「ゼノスさんのＨＡですよ、一緒に戦ったじゃないですかー。　あの機体、本当すごいんですよ。
メンテナンスだって大変ですし、パイロットさんも大変ですしっ！」

何も言わずともシラナギは親切に教えてくれた。
ありがたくは思うのだが、何処か不安が残る。

『こちらゼノス、いつでも出せるぞ』

『アタシもバッチリだよ、いつでも発進できるぜ』

「よし、発進させろ」

「了解、ハッチを開けます」

いよいよ、ゼノスとシリアが戦場へと駆り出される。
シミュレーターでも訓練でもない、実戦なのだ。
一度成り行きで実戦に出た身だとしても、晶は自分の事のように緊張してしまうのだった。

「小僧、よく見ておけ。　奴らと『戦う』というのは、どれ程危険が伴うのか」

「……はい」

艦長は晶に向けてそう告げる。
……もしかして、その為にブリッジへと残したというのか。

『ゼノフラム、発進する』

『イエローウィッシュ、出るぜっ！』

バシュンッ、と轟音を通信越しから耳にすると、ブリッジ内のモニターから2機のＨＡが一瞬だけ姿を見せた。
晶も見たことがある巨体なＨＡであるゼノフラム、巨体でありながらもその異常な推進力はモニター越しからでも伝わる。
あっという間に地上へと向けて飛び立った。

もう一機は黄色のウィッシュのように見えるが、何処か形状が異なる。
恐らくカスタマイズされたウィッシュだ。
汎用性の高いウィッシュは、パイロットによって独自にカスタマイズされることもある。
学校の授業で、そのカスタマイズについても習ったことがあった。

「……あれ、たったの二機なんですか？」

「そうなの、今フリーアイゼンは深刻な人手不足なのです」

「今までもずっとあの二人が戦って？」

「違います、他のパイロットは亡くなっていったのです……」

「え――」

悲しい表情を浮かべ、シラナギは静かにそう語る。
晶は思わず言葉を失った。
……戦場に出ることは常に危険と隣り合わせ。
メシアのようなベテラン部隊でも、いとも簡単に命が失われてしまうのか。
背筋にゾクゾクッと寒気が走った。
あの時、生きていられたのがどれだけ幸運だったのか。
艦長からあんなに厳しく言われるのも無理はない、と感じ取った。

「でも、あの二人は大丈夫です。　特にゼノスさんなんて何十回も死にかけてますから、あんな無茶な機体に乗ってるぐらいですからねー」

「そ、そうなんですか？」

「知らないんですか？　ゼノフラムは別名『パイロット殺し』とか言われてるんですよー」

「パ、パイロット殺し……？」

「積めるだけ積み込んで運動性を犠牲にしてますし、その癖爆発的な推進力でパイロットへの負担がすっごいんですよ。
おまけにあのハンマーを扱おうとしたら、振り回されてたいっへんなことになっちゃいますっ！　他にも常に熱に気を遣ったり――」

晶の素人目から見ても相当無茶な設計である事は理解していたがシラナギの話を聞いて改めてそれを認識した。
どうしてゼノスはあのＨＡに搭乗しているのだろうか。
ただでさえ戦場には危険が伴うというのに。

「シリア機、ポイントへ到達」

『ヤヨイ、映像を送ったから受信してくれ』

『了解、映像を受信します』

アナウンスと共に、巨大なスクリーンとは別に用意されていた小型のモニターに映像が出力された。
コックピット内からの映像と思われる。
フリーアイゼンから離れた個所である点と、霧が濃いせいで艦のカメラでは外の様子はほとんど見えなかった。

現地の映像は、パイロットの映像で確認するしかない。
しかしこれでは、敵機どころか味方機すら識別できないのではないか？
こんな状態で戦えるのだろうか、と晶は不安を抱いた。

「周囲に5機のE．B．Bを確認。　分析結果タイプは陸上四足型、多分元は虎です。
味方機が囲まれているようなので、速やかに救出してください。
くれぐれも味方を撃たないように」

『わかってるっつーの、すぐに片づけるさ』

シリアから通信が入った途端、映し出された映像は急速にグラグラと揺れだす。
見ているだけで酔いそうな映像ではあるが、晶は目を離さなかった。
2，3機のウィッシュの間を通り抜けるとその先には黒い獣がいた。
鋭い牙に赤い瞳、悍ましいその姿はもはやただの獣ではない。

正真正銘のE．B．Bだ。

『食らいなっ！』

ウィッシュの標準武装であるアサルトライフルを放つと、黒い獣は一瞬にして散開した。

『遅せぇっ！！』

コックピットの映像がぐるり、と急回転すると1匹のE．B．Bがロングサーベルで串刺しにされていた。
一瞬何が起こったのか理解できなかった。

レーダーの状況を確認すると中心に位置していたはずのシリア機が次々とE．B．Bのマークを消滅させていく様子が見える。
映像と照らし合わせると、近接武器で片っ端からE．B．Bを切り裂いているようだ。
……とてもじゃないが、晶にはこんな動きはできない。
あのシリアという少女は、若い年齢でありながらここまで戦えるのかと思うと、晶は自信を喪失していった。

『フリーアイゼン部隊か？　助かった、礼を言わせてもらおう』

「はい、我々が来たからにはもう安心です。　速やかに撤退してください」

別部隊からの通信が入った。
恐らく救援を要請したメシアの部隊だろう。
しかし、ウィッシュ四機が苦戦していたE．B．Bをいとも簡単に倒してしまうシリアの実力は想像以上だ。

もしかすると、この遊撃部隊はエリートの集団なのかもしれない。
……晶は改めて、採用されない理由を理解した。

『だが、敵はあの獣だけじゃねぇ。　俺達はもっと巨大なＥ．Ｂ．Ｂに襲われたんだ』

「巨大な？　しかし、レーダーには何も反応がありませんが」

『見たんだよ、恐ろしいバケモノだっ！　あんなタイプのＥ．Ｂ．Ｂみたことねぇ……助けてくれよっ！』

もう一人の隊員が乱心した状態で訴えていた。
確かにオペレーターの言う通り、レーダーにはＥ．Ｂ．Ｂを示す赤いマークした表示されていない。
それも次々とシリア機、ゼノス機が順調に殲滅していく様子がレーダーからでも伝わっているぐらいだ。

「カイバラ、すぐに大型Ｅ．Ｂ．Ｂの位置を確認しろ」

「しかし、今はレンジ外だと思われます。　一時退避して様子を見るべきかと」

「……状況は？」

「シリア機、ゼノス機共に１０機ずつ撃破。　敵影反応ロストしました」

「よし、パイロットを帰投させろ。　負傷機の回収も忘れるなよ」

もう、戦いが終わったのだろうか。

あまりにも呆気ない終わりに、晶は呆然とした。

……あんな霧の中でも戦いをしなければならないのか。

コックピットの映像を見ているだけでも、敵の姿を把握するだけで精一杯だ。

シミュレーターでも霧の再現までされることはなかった。

「パイロット各位、速やかに帰投してください。　なお、ゼノフラムは負傷機の回収をお願いします」

『ヘッ、チョロイもんだね。　もーちょい骨のある奴だと思ってたんだけどなぁ』

戦場に出ているというのにシリアはまるで恐怖を感じていないような素振りだ。

とてもじゃないが、晶には真似はできない。

ふと、晶はレーダーを目にすると……突如、何やら赤いマークが一瞬だけ点滅した。

「ん……？」

今の反応は一体……？

死骸となったE．B．Bに反応した、のだろうか。

「……これは？」

「どうした、カイバラ」

「E．B．Bを確認しました……が、すぐにロストしてしまったようです」

晶は艦長とオペレーターの会話を耳にして、何やら嫌な予感がした。

ガシャンッ！

突如モニター越しから激しい音が鳴り出すと、映像がプツンと途切れた。

シリア機の映像だ……一体何が？

「どうしました？　シリア機、応答願います。　シリア……？　シリアッ！」

「……っ！」

まさか、やられた？

晶はレーダーを確認するが、何も反応がない。

『こちらゼノスだ、大型E．B．Bを確認した。　シリア機が捕獲されている、今から救助活動へ移る』

「大型ですって？　そんな……レーダーに反応がなかったというの？」

『映像を送る、解析は任せるぞ』

真っ暗だったモニターに、再度映像が出力された。

「これは――――」

巨大な植物のようなE．B．Bだった。

中心には蕾があり、まるで生きているかのように蕾を咲かせては閉じていた。
数えきれないほどの根、触手が気味悪く蠢いていた。

「……E．B．Bってなんでもありかよ、植物までこんな姿に？」

あまりにも悍ましいその姿に圧倒されながらも、晶はふと黄色い機体を目に留めた。
無数に伸び続ける蔦が、イエローウィッシュが捕えていたのだ――

「主砲による援護はできるか？」

「いや、駄目っすね。　この霧じゃ照準合わせるのは無理ですよ」

「……ゼノス、いけるか？」

しばし無言となり、艦長はゼノスにそう告げる。

『やれるさ、その為のゼノフラムだ』

迷いなく、ゼノスは答えた。
一人で、大型E．B．Bに挑むというのか？

「……無理はするな、シリアの救出を優先しろ」

『承知した』

その途端、映像越しから無数のミサイルが発射された。
コックピットに伝わる振動は、映像から見ても凄まじいのがよくわかる。

ガトリングを発射し、イエローウィッシュの機体位置を確認しながら上手くＨＡを動かしていた。
その途端、無数の触手がゼノフラムに向けて発射される。
冷静にガトリングで撃ち続けるものの、触手の勢いが収まることはない。

『シリア、応答しろ。　聞こえるか？』

シリアに呼びかけるが反応がない。

「あの子……大丈夫なんですか？」

「……わかりませんよ、中の様子なんて見えないんですから」

シラナギは暗い表情をして、そう呟いた。
晶はただ映像を眺めて、拳を握りしめることしかできずにいた。

「コアの位置は蕾の中心です」

『だがこの蔦の数では近づくことができん、シリアの保護を優先するぞ』

ゼノフラムの猛攻が続く中、触手は数を減らすどころか次々と再生してしまう。
ミサイルは既に撃ち込んでしまい、流石に単機での戦闘継続は厳しいと、ゼノスは判断した。

『赤い機体を援護しろっ！』

『りょ、了解ですっ！！』

無傷のウィッシュ2機が、大型E．B．Bへ向けて発砲をし始めた。

『そこの2機、それ以上は近づくな。　仲間を連れて退避しろ』

ゼノスが2機に向けて、警告すると触手が容赦なくウィッシュへと向かって伸びて行く。

『チッ……』

舌打ちをしながら、ガトリングを触手へ向けて何とか撃ちとした。
弾は多く積んであるが無限ではない。
一刻も早くゼノスはシリアを救出する必要があった。

「……ゼノス、さん」

映像からでも伝わってくる緊迫感。
やはり大型E．B．Bは一筋縄ではいかない。
あのゼノスでさえも苦戦を強いられているのだから。

「他に援護は要請できないのか」

「できるのなら我々に依頼は来ません」

艦長は目を閉じて深く考え込む。
ブリッジルームが、一瞬だけ静まり返った。
やがて、その目を開いた。　あの目は、何かを決断した目だ。

「……退け、ゼノス。　一度立て直すぞ」

『駄目だ、シリアを助ける』

「命令だ」

『まだいける、何のための対大型Ｅ．Ｂ．Ｂ専用ＨＡだと思っている？』

「分が悪いと言っているんだ」

艦長の言うとおり、あのＥ．Ｂ．Ｂは触手を無限に再生させて、ゼノフラムの攻撃も一切通用していない。
最初に与えたミサイルのダメージでさえも、今や完全に回復しようとしてたのだ。

『やれるさ、ゼノフラムなら』

仲間の命を見捨てたくない。
その気持ちは晶には痛いほど伝わった。
あの時、クラスメイトを見捨てて逃げ出したこと。
とても、悔しかった。

どうして、救えるほどの力がなかったのか。
……このままでは、二人が危ない。
だが、どうすれば――

ふと、晶の左手が握られた。
横を振り返ると、シラナギが真っ白な両手で優しく微笑みながら晶の手を握っていたのだ。

「はいはいー、それじゃいっきますよーっ！」

「う、うわぁっ！？　ちょ、ちょっと――」

「何言ってるんですか、仲間のピンチですよっ！？　これはもう、晶くんの出番ですっ！
ι・ブレードであんな怪物やっつけちゃってくださいっ！」

「そ、そんな無茶だ……仮に俺が出ても――」

「木葉ちゃんと約束したじゃないですか、絶対にみんなを守るって！私、晶くんを信じますよ？　絶対に、このピンチ乗り越えてくれるって」

「……そ、それは」

晶は戸惑った。
あの映像を見ている最中に、確かに自分が出撃していればと何度も考えた。
だが、実戦に出る恐怖を再度認識してしまったのも事実。
また、あの時のように動けるとも限らないのだ――

「はいはい、迷ってる暇があったら動く動くっ！　それじゃ、いっきますよーっ！」

「ちょ、ちょっとまって――」

晶に有無も言わさずに、シラナギは強引にブリッジの外へと出て行った――

格納庫まではすぐだった。
5分もしないうちに到着すると、
そこには既に整備が完了されているι・ブレードの姿があった。

「はーい、それじゃ生きて帰ってきてくださいねー」

ドンッ、と晶は強く押し出される。
……艦長に黙って出撃なんていいのだろうか。
不安を抱えつつも、晶はι・ブレードのコックピットに搭乗した。

『パイロット認識。　身体状況に異常ありません』

前のように適性診断が行われることはなかった。
通常通り、ι・ブレードは晶を認識して起動してくれた。
しかし、今は考えてる暇はない。

『システムオールグリーン、異常ありません。　ι・システム……起動します』

また、あの頭痛か……と、晶はため息をつく。
例の激しい頭痛が、晶に襲い掛かった。

「……乗る度にこれはしんどいだろ」

『ハッチあけましたよー、今ブリッジ大騒ぎですっ！　ささ、今のうちにー』

全く緊迫感のないシラナギの通信がコックピット内に伝わってくる。

この人、本当やりたい放題だな、と晶は思った。

「また、よろしく頼むよ……『ι・ブレード』」

コックピット内で晶がそう呟くと、それに応えるかのように赤く点灯した。

ふと、『生きたＨＡ』という単語を思い浮かべる。

もしかして、本当に人語を理解して返事をしているのではないかと考えてしまった。

『じゃ、恰好良くセリフきめちゃいましょー』

「……ι・ブレード、でます」

『あーちょっとっ！？　せっかくセリフ準備してあげたのにーもーっ！』

この人と会話してるとやっぱ疲れる、晶はこれから戦場に出るというのに何処か気が抜けてしまっていた。

……だが、逆に言えば少しだけリラックスできているのだろう。

これから何かとシラナギには世話になりそうだな、と晶は感じ取った。

バシュンッ！

轟音と共に、ι・ブレードが発進された。
相変わらず息苦しくなるほどの激しいGが襲い掛かる。
何とかして晶はレーダーを確認した。

E．B．Bの反応はないが、味方機であればレーダーは移る。
晶は着実に位置を特定して、機体を動かした。

ズキンッ――

その途端、頭痛が起きた。
危険察知だ、晶は身構えて映し出される映像を息を呑んで待った。
霧の中から、突如無数の触手がι・ブレードに向けて放たれるシーンだ。
空中にいると言えど、ι・ブレードはある程度なら空中でも高稼働を保てるはずだ。
……いけるはずだ。

「いっけぇっ！！」

晶は触手を回避しようと、一気にスロットルを押し込んだ。
だが、勢い余ってバーニアを噴射させすぎてしまい直角に近い急降下をしてしまった。

「うわぁっ！？」

慌てて晶はスロットルを操作すると、今度はグォーンっと弧を描くようにι・ブレードが上昇する。
何とか触手は回避できたが、霧のせいで状況が全く見えない。
戦場で止まるのは危険だ、とにかく晶は機体を動かしながら下の様

子を伺った。

頭痛が起こる度に、下からは容赦なく触手が飛び交ってくる。
ギリギリになりながらも晶は何とか触手の回避を行い続けた。
そしてようやく地上へと降り立つことができた。

『……遅かったじゃないか、待ちくたびれたぞ』

「ゼノス……さん？」

突如、ι・ブレードにゼノスの通信が入った。

『シリアの救出を頼む、奴はまだ生きている』

そう言い放つと、ゼノフラムはガトリングと2連キャノンを放ちながら宙へと上昇していく。
そうはさせまいと、E・B・Bの触手が機体に絡みついた。
必死で振りほどこうとし、ゼノフラムは背中のブーストハンマーを宙へ向けて発射させた。
何十トンもする巨体が、爆発的な推進力と共に宙へと打ち上げられる。

「……シ、シリアさんはっ！？」

晶は必死で霧の中を探ると、黄色いＨＡの姿を確認した。
触手に絡まれており、腕や足のパーツが破損している。

「今、助ける……！」

必死でスロットルを押し込み、ムラクモを構えて次々と襲い掛かる

触手を薙ぎ払った。
徐々に黄色いＨＡとは距離を縮めていき、黄色いＨＡが捕えている触手を切り裂いた。

「う、うわっと――」

再度バーニアを噴かせすぎてしまい、機体がバランスを崩したが何とかシリア機を確保する事には成功する。

「シ、シリア機確保しましたよ、ゼノスさん――」

通信を入れた途端、晶はふと上空を見上げる。
先程、宙へと舞い上がったゼノフラムが
今度は蕾目掛けて、ハンマーを発射させている姿が目に入った。
ズドンッ！　ズドンッ！　と、容赦なくハンマーは蕾を打ち続けていくと次第に蕾は花を咲かせるかのように開いていく。
ゼノフラムはその中心へと立ち、２連キャノン砲を何度も、何度も打ち込んで見せた。

「す、凄い……あんな無茶なことするなんて」

重い機体をハンマーのブースターで浮かせて、強引にコアを狙いに行ったのだろう。
徐々にＥ．Ｂ．Ｂの動きが弱まり、触手の動きも鈍くなっていった。
ゼノスの思惑通り、このまま順調にいけばコアを破壊することができるかと思われた。

ズガンッ！
突如、ゼノフラムが爆発を引き起こした。

「ゼ、ゼノスさんっ！？」

『……チッ、出力を上げすぎたか』

オーバーヒートを引き起こしてしまったのだろう。
ゼノフラムは、かなりオーバーヒートを引き起こしやすい性質がある。
いつもは調整していたのだが、流石に無理をさせすぎたのだろう。

更に、大型E．B．Bの動きに異変が発生する。
突如無数の触手がゼノフラムに絡みつきはじめたのだ。
すると何やら緑色の液体のようなものが流れ出し、装甲面がジューッと音を立てていた。
……装甲が、溶け出していた。

『晶……こいつを逃すわけにはいかん。　レーダーに乗らない以上、野放しにしておくのは危険すぎる。
だから、ここでこいつを確実にしとめるぞ』

「で、でもゼノスさんっ！」

『何としてでもコアを破壊してみせる……俺が駄目だった時はお前がトドメをさせ』

「そんな――」

リスクを承知で、ゼノスは捨て身の特攻を持ちかけたというのか。
身動きもとれないでいる中、それでもゼノスは猛攻を続けていた。

「……黙って、見てられるか」

仲間を見殺しにはできない、助けるんだ。
あの時とは違う、今の晶には戦える力がある。
何の為に戦場へ足を運んだのか。
シラナギも言っていた、『晶』を信じると。

「行けよ、ι・ブレードっ！！」

晶はシリア機を抱えたまま、最大出力で大型Ｅ．Ｂ．Ｂの中心部へと向かった。
グングンとスピードを上げていくが、まだまだ力強くスロットルを押し倒す。
徐々にゼノスの機体への距離を縮めて行った。

いける、はずだ――
晶は迷わず、機体をそのまま直進させた。

ガキィィンッ！！

そのまま、触手に絡まれていたゼノフラムを強く押し出した。
小型のＨＡと言えど、あそこまで出力を上げた状態で体当たりをすれば
巨体のゼノフラムを吹き飛ばすことは容易だった。

「行けよっ！！」

力強く、晶は叫んだ。
片手でムラクモを下に向けて、蕾の中心部を刺す。
ブシュリ　と、どす黒い液体が飛び出した。

「消えろよ……この、バケモノがぁっ！」

ムラクモを突き刺したまま、晶はこれでもかと両手でスロットルを限界まで押し込んだ。

グッと、ムラクモが力強く押され……爆発的な推進力で前進した。

黒い液体を飛び散らせながら、大型Ｅ．Ｂ．Ｂの胴体を切り裂いていく――

晶は限界まで出力を上げ、空高く上昇した。

巨大な植物のＥ．Ｂ．Ｂは、ぐったりと触手を地面へと降ろし黒い液体と化して、消滅していった――

大型E．B．Bは消滅し、晶は二度に渡って戦果をあげた。
しかし、今回の戦闘により被害は莫大だ。

フリーアイゼンの主力機2機の損傷。
幸いイエローウィッシュは艦内の設備ですぐに修復可能であったが、ゼノフラムはそうもいかない。
特殊な素材を惜しみなく使われているので、艦内のパーツだけでは修復することができなかった。

パイロット両名は、シリアは意識を失っているものの命に別状はない。
ゼノスも奇跡的に、大した怪我を負わずにいた。

晶と救護された2機のウィッシュが共同で損傷した機体達を艦内へと運んだ。
コックピットから降りると、そこにはキャッキャッと両手を上げて飛び上がっているシラナギの姿があった。
その隣では、心配そうな顔を見せている木葉もいる。

「さっすが私が見込んだ男ですねーこのこのーっ！
必ずやってくれると思ってましたよー、何せあのゼノスさんが見込んでるぐらいですからっ！」

相変わらず騒がしい人だな、と晶は再びため息をつく。
シラナギを無視して、晶は隣の木葉の前へと立った。

「あ……」

「あー……えーっと」

何故だかお互いに目を逸らしてしまう。

何て声をかけようかな、と考えているだけだというのに。

「か、帰ったぞ……ちゃんと」

頭を掻きながら、晶はぶっきらぼうにそう告げる。

「……おかえり、晶くん」

木葉は笑顔で、そう答えた。

「そうだ、ゼノスさんとシリアさんは大丈夫ですか？」

「うーん、シリアはまだ目を覚ましてないけどゼノスなら全然大丈夫。よかったら見に行ってみる？」

「お願いします」

シリアの事も心配だが、ゼノス自身も機体を損傷させてしまい、おまけにあの爆発に巻き込まれているはず。

そうでなくてもι・ブレードで突き飛ばしてしまった事も含めて、晶は心配していたのだ。

「はいはいー、じゃあ木葉ちゃんも一緒にーっ！」

例の如く、シラナギは晶と木葉を連れてダッシュで医療室へと向かうのであった――

医療室へ向かうと、そこには二つのベッドと数々の医療器具が配置されていた。
晶の部屋とは違い、ここは治療を行うための部屋と言える。
片方のベッドではシリアが倒れたまま、目を閉じていた。

「……シリア、さん」

「大丈夫ですよー、寝てるだけですから」

目を閉じたまま動かないシリアを心配すると、シラナギはそう告げる。
よく聞くと確かに寝息が聞こえてきた。

「それじゃ、ゼノスとご対面でーすっ！」

シラナギはジャジャジャーンと効果音を口で鳴らすと、カーテンを開けた。
そこには、体の一部に包帯を巻いたゼノスの姿と、見慣れない医者の姿があった。

金髪で青眼のメガネでちょっと鼻が高い、白衣を身に纏っているから恐らく医者だ。

「シラナギくん、いつも言っているだろう。　せめて診療所ぐらいでは静かにしてくれと」

「えー、それじゃつまらないです」

「そういう問題じゃなくてだな」

「気にしなくていい、傷に響くわけでもあるまい。　どーセシリアも起きないだろう」

ゼノスは表情一つ変えずに、そう呟く。
あれだけの爆発に巻き込まれたというのに、思っていた以上に怪我は酷くなさそうだ。
流石は熟練の戦士と言えるだろう、生命力の高さも伝わってくる。

「君が晶くんかい？　私は船医の『Ｄｒ．ミケイル』さ」

「あ、よろしく……お願いします」

ミケイルから丁寧に挨拶されると、晶もそれに答えて頭を下げる。

「あの、ゼノスさん大丈夫……なん、でしょうか」

晶の後ろに隠れていた木葉が、恐る恐るミケイルに向かってそう尋ねた。

「大したことないさ、傷もそれほどひどくないからね。　それより

もシラナギくん……君、また仕事をサボったね？」

「何の事ですか？　私、ずっと晶くんに付きっ切りでしたよっ！」

「誰もそんな話をしていないだろう、君にはやってもらうことがたくさんあるんだよ。　ほら、ちょっとこっちに」

「いーやですっ！晶くんは私を求めてるんでーすーっ！　ちょっと離してくださいー噛みますよー！　ガブッて！」

「それじゃ、ごゆっくり」

ミケイルは騒ぐシラナギを無理やり連れて、外へと出て行ってしまった。

……あの二人、いつもあんな感じなのだろうか。

木葉なんて苦笑いをしていた。

「あの時、まさか突き飛ばされるとは思わなかったぞ」

「……あ、いや、その、えっと」

晶は慌てふためいて必死で言い訳を探すが、何も言葉が出てこない。

だが、ゼノスは別に晶を責めたりはしない。

「お前には助けられたな、すまない」

表情を変えないまま、そう答える。

面と向かって礼を告げられると、晶はただ戸惑うだけだった。

「……なんであんな無茶を？」

あの時ゼノスは、何が何でもあのE．B．Bを仕留めようとしていた。
それも、自分の命を危険に晒してまで。

「今までに例のないE．B．Bだ、ジャミングならともかく……レーダーから反応をなくすなんて前代未聞だからな。
レーダーに反応しないE．B．Bの恐怖は、お前も映像越しでわかっただろう」

「それは……その通り、ですね」

シリアの映像を見ていた時、突如映像が途切れたことを思い出す。
あれはレーダー上にE．B．Bの反応がなかった点と、霧が発生していたことによって発見が遅れてしまった。
その結果、シリアの機体は捕らわれてしまったのだ。

「詳しくは原因はわからんが……あれは今ＨＡ技術で開発が進められている『ステルス』と呼ばれる現象に近い」

「姿を消していたということですか？」

ステルスとは、背景等に同化しレーダーから反応を消すような技術を指している。
ＨＡには正式に採用されていないが、今は研究が進められており、試作機もいくつか作り出されていた。

「そうだ、あの霧の中と言えど……至近距離まで気づかないというのはおかしい
いくら油断していたと言えど、シリアがあんな失態を犯すはずがな

かったんだ」

「で、でもどうして……E．B．Bがそんな力を？」

「……意図的に誰が仕込んだか、或いは『自ら』身に着けたかいずれにせよ、このことは後で艦長に話す必要があるな」

晶は言葉を失った。

もしかしたら、あのE．B．Bは『アヴェンジャー』とか言う奴らが用意したのではないか、と思ったからだ。

ι・ブレードを奪う為にE．B．Bを利用する連中だ、有り得なくはない。

「……あの、ゼノスさん」

ふと、木葉が手を上げて小さな声で呟いた。

「また……『アヴェンジャー』の、仕業なんでしょうか？」

同じことを、考えていたようだ。

それもそうだ、二人とも被害者なのだから。

『アヴェンジャー』と名乗る者に、故郷を奪われ友人を奪われた。

相手のやり口も全て知っている。

この目で、悲劇を目の当たりにしたんだ。

「可能性は高いが、腑に落ちない点もある。『アヴェンジャー』の奴らが姿を全く現していなかったからな。

あいつらが白とは言わん。だが俺は……あれは別物だと考えている」

「別物……？」

一体何の事を言っているのだろうか。
晶はゼノスの言葉に疑問を抱いた。

「はいはい、晶くーん！　お時間ですよー、いきましょーうっ！」

突如明るい声がすると、カーテンがバッと開かれて晶の手が掴まれた。
Ｄｒ．ミケイルは何をしていたんだろうか、結局彼女に逃げられているではないか。
と、晶はため息をついた。

「ま、待ってくださいっ！　な、なんですか？」

「艦長から呼び出しですよー、早くいきましょうっ！」

「ちょ、ちょっと――」

相変わらずシラナギは強引だ、有無も言わさず晶をその場から連れ出そうとする。

「晶、後はお前次第だ。　……お前を歓迎する準備はいつでもできているからな」

「ゼノス……さん」

艦長からの呼び出しに緊張したが、ゼノスのその言葉で少し落ち着きを取り戻した。
……勝手な行動に出てしまったが、後悔はしていない。
自分の力で、確かに二人の命を助けたのだから。

「しかし困ったですねー艦長カンカンですよ、もう鬼みたいな顔してました。　どうしましょうかー？」

「そ、そうですか……」

途端に晶は肩を落としてため息をつく。

艦長の許可なく勝手に出撃をしてしまったというのは、明らかな命令違反だ。

そんな違反を犯すような奴は軍隊として認められない、すぐに出直してこい。

と、一蹴されてしまうんじゃないかと不安になった。

「ま、大丈夫ですよ。　何故なら、私がいますからっ！」

「た、頼りにしてます」

口ではそう言いながらも、頼りにできそうにないというのが本音だ。

晶は再び肩の力を落とし、とぼとぼとブリッジルームへ向かっていった――

「……み、未乃　晶。　只今、帰投しました」

巨大な扉を潜ると、同じ位置で群青色のマントを見せたままの館長の姿が目に入った。
恐る恐る晶は名乗ったが、艦長は何も答えようとしない。
無言のプレッシャーというものか、シラナギの言うとおり艦長が怒っているというのは事実のようだ。

「何故、出撃した？」

「……」

背中を向けたまま、艦長がそう尋ねると晶はそれだけで体をビクつかせた。
顔を俯かせて、何て言えばいいんだと頭の中でグルグルと言葉を探す。
だが、一向に言葉が出てこなかった。

「艦長ー仲間のピンチですよ？　そりゃー駆け出したくなるに決まってるじゃないですかっ！」

シラナギがフォローのつもりなのか、晶の代わりにそう言った。
その瞬間、晶は体をビクッとさせる。
下手すると今の言葉で、怒鳴られるんじゃないかと思ったぐらいだ。

「私は『未乃　晶』に訪ねている、どうなんだ」

ひしひしと伝わるプレッシャーに、晶は思わず押しつぶされそうだった。
とにかく、何か言うしかない。

「俺に、誰かを救える力があるのなら、目の前で救いを求めてる人達を放っておけない……と思ったんです」

「……貴様は危険な状況であるにも関わらずに、無謀にも単機であの場へ向かったんだぞ。
死ぬ気だったとしか思えん……メシアにはそういう命知らずは、不要だぞ」

「……っ！」

艦長の言葉が、重く突き刺さった。
自分の命すら大事にできない人間が、誰かを守れるはずがない。
艦長はそう告げたいのだろう。
晶は、言葉を返すことができなかった。

「やはり、貴様を軍に入れることはできん」

冷たく、そう言い放たれた。
結果的に戦果を上げたとしても、パイロットとしては無茶な判断であったことは間違いない。
艦長に言われても仕方がない、当然のことだったのだから。

「艦長っ！　言い過ぎです、晶くんは二人の命を救ったんですよ？
もっと褒めてあげてくださいっ！」

「シラナギ、戦場はお前が思うほど甘い場所ではないのだよ」

「……艦長っ！」

シラナギは必死で食い下がるが、晶は俯いたまま何も答えない。

もういいんだ、やれることは全てやった。
1から出直そう、またパイロット候補生から始めればいい。
それで、いいんだ。　と、自分を納得させた。

「……だが、二人の命は確かに救われた」

突如、艦長がこちらを振り向き、静かにそう告げる。

「あの時、貴様の援護がなければ……二人の命はどうなっていたことか。
お前のおかげで……我々が救われたのもまた事実だ、そこは礼を言わせてもらおう。　ありがとう……」

その場で帽子を外し、艦長は頭を下げた。

「え……ちょ、ちょっと――」

晶はただ慌てふためいた。
そんな艦長に頭を下げられるような事をしたわけでもないはずなのに。

「だが、貴様にはやはり訓練が必要なのは確かだ」

すぐに帽子をかぶりなおすと、艦長は再び背中を向けた。

「命の尊さを知れ、いかに自分の身を守るか考えろ。
誰かを守るというのは、自分を守ることができる奴だからこそできることだ」

「……はい」

再び晶は顔を俯かせると、静かにそう返事をする。
せっかく夢を手にするチャンスではあったが、ここまでか。
諦めて、晶は自らブリッジを出て行こうとした。

「我が部隊で学べ。　貴様のようなバカを他の施設に任せる気にはならん」

「……へ？」

一瞬、耳を疑った。
今、なんて……？
晶は足を止めて、そっと後ろを振り向く。

「聞こえなかったか、試用期間で雇ってやると言っているんだ」

「……で、でも」

「返事はどうした、まさか怖気づいたのか？」

「――いえ、やりますっ！」

艦長は振り向いて、晶に目を合わせてそう告げると
晶は力強く、そう答えた。
……採用、されたのか？
メシアのパイロットに？

「今回の出撃の件は、貴様がただの訓練生として学校のＨＡに乗ったに過ぎない。　今回は水に流してやろう。
ただし、二度目はないと思え。　いいな？」

「は、はいっ！」

「やったぁぁっ！！　晶くーん、パイロットだよー正式なパイロットーっ！！」

二度目の返事をすると、シラナギが横から飛び込んできた。
まるで自分の事のように喜んでいたが、晶にはイマイチ実感がわかない。
本当に、パイロットとして採用された。

あの艦長は認めてくれた、ということなのだろうか？
嘘ではない、夢では……ない。
晶は自分の両手をまじまじと見つめるだけだった――

第3話　アヴェンジャー　？

第４シェルター東地区。
数日前に起きたＥ．Ｂ．Ｂ襲撃の事故により、莫大な被害を受けた地区だ。
１０万以上を占める人口の９割は死亡・失踪。
残りの１割はメシアにより救護を受け、避難地区へと移動した。
建物は半壊し、今ではＥ．Ｂ．Ｂの住処と化していた姿は全世界へと報道された。
Ｅ．Ｂ．Ｂは、改めて世界を震恐させたのだった。
シェルターの住民であれば、必ずしも安全ではないということが証明されてしまったのだ。

だが、この事件は意図的に引き起こされたということを知る者は一部しかいない。

『アヴェンジャー』

彼らは以前から、ＨＡを奪う活動を続けていた。
襲撃を受けたメシアの施設は数知れず、いくつものＨＡが巧妙な手口によって奪い取られている。
目的は一切不明、ただ自らを『アヴェンジャー』と名乗り、兵器を集め続けるだけだ。
メシアもＥ．Ｂ．Ｂ殲滅活動の他に、対アヴェンジャーの対策にも追われていた。

特に今回の『ι・ブレード』を狙った大規模な動きは、今までにも例がない程の被害を生み出してしまったのだ。

もはや、E．B．Bと同様……『世界の敵』と言っても過言ではない。
どんな理由であれ、人道に外れた行為を続けてきたのは事実なのだから。

そんな変わり果てた第4シェルター東地区に、一機のウィッシュが現れた。
住民の捜索活動が継続されていると言えど、たったの1機がこの地区へと現れるのは妙だ。
大型E．B．Bが退治されたと言えど、まだまだその数を減らすことはない。
救護活動が目的であれば、複数の部隊となって訪れるはずだ。

無数に蠢いていたクモのE．B．Bは、一斉にウィッシュへと注目する。
コックピットの中から、その様子をニヤニヤとしながら観察する男がいた。
大量のE．B．Bに囲まれているというのに、恐怖心を一切抱いていない。
むしろ、この状況を楽しんでいるようにも思えるぐらいだ。

「ったくよ、今更ここに戻れだなんて……あんたら性格悪いよな」

『そりゃそうだ、ここにはまともな人間なんていないのさ。貴様も含めてな』

コックピットからは男の声が聞こえてくる。
仲間と通信をしているのだろうか。

「へいへい、そりゃどーも。どーせ俺もそんな気にしちゃいねー

さ。　で、殺っちまっていいよな？」

『やれるもんならな』

「なめんなっつーの」

男はスロットルを押し込み、機体を急発進させる。
速度を示すメーターはあっという間に限界まで達した。
その瞬間、クモのE．B．Bが一斉にウィッシュを囲い込んだ。

「何だこいつら？　シミュレーターより随分バカだな」

肉眼でE．B．Bの動きを捕えながら、男は思わずそんなことを呟く。
速度を全く落とさずに、ライフルを構えて発砲させた。
バンッ！　と、銃声が響くと1匹のE．B．Bが紫色の血を吹き出し消滅する。
続けて、2発……次々と正面のE．B．Bが一撃で仕留められていった。

「仕上げだ」

男はスロットルをひねると、機体はくるりと180度回転した。
速度は最大を維持したまま、グレネードランチャーを構える。
狙い通り、E．B．Bは上手い具合に一か所へ集っていた。

「つっまんねぇな」

またしてもそんなことを呟き、男はトリガーを引いた。
弾が直進していく様子を、後退したまま確認すると

多量のE．B．Bを巻き込み、ズガァァンっと大爆発が発生した。

「あら、シミュレーターだともっと派手なエフェクトだったけどな」

スロットルを戻し、ようやく機体を減速させた。

すると、背後から複数のE．B．Bがウィッシュに襲い掛かろうと飛び掛かる。

今にも糸を吐き出そうとした瞬間

スパンッ――

ウィッシュのロングサーベルが、E．B．Bをまとめて切り裂いた。

「んだよ、仕留め損ねたか？　まだいるなんて聞いてねぇぞ」

『見事だな、その腕ならメシアでも買われているだろうに』

「何だよ、俺にメシアへ行ってほしいってか？」

『貴様を敵に回すと面倒だ、それは勘弁だな』

「そりゃありがたい褒め言葉だな。……にしても、今更ここに何の用なんだ？

ι・ブレードなんて、もうここにありゃしないだろ？」

周囲にE．B．Bが存在しないことを確認すると、男は大欠伸で伸びをする。

いつ命を落としてもおかしくはない戦場にいるというのに、まるで緊張感がなかった。

『興味深いモノが見つかったらしい、お前にはその回収を手伝って

もらうだけだ』

「面白くねぇな」

『安心しろ、いずれ『ι・ブレード』奪取の際に出てもらうさ』

「あー……あれね、あの『ビリッケツ』が乗ってるＨＡね」

『はっきり言えば、貴様程の腕があったとしても『ι・ブレード』には勝てん。
あの機体の性能を我々の想像を遥かに超えているのだからな』

「へぇ……面白そうじゃねぇか。　ιの相手、今すぐ俺にやらせろよ」

『勝手な行動は許さんぞ』

「ケッ、そうかよ。　なら、勝手にやらせてもらうか」

『待て、貴様――』

男は通信を強引に切った。
再び顔をニヤつけさせると、スロットルを強く握りしめる。

「いいね……出撃禁止まで受けたビリッケツちゃんがＨＡに？
面白そうじゃねぇか、お互い生き残っちまった者同士……仲良くケンカでもしようぜ」

第４シェルター東地区にて出撃したウィッシュは、９機全てが全滅したかと思われていた。

だが、実際は違った。
1機だけが、あの混乱した戦場の中を駆け抜け、生き残ったのだ。
その生き残ってしまったパイロットは、再び悪夢の地へと足を運んでいたこの少年
『白柳（しらやなぎ）　俊（しゅん）』であった。

「さあ、たっぷり食って次の訓練に備えろよな」

「……はい」

目の前には山盛りのカツ丼が二つ並べられている。
晶は思わずその量を見ただけで、テーブルに突っ伏した。

「どうした、食わないと持たないぞ？」

豪快にカツ丼を平らげながら、シリアは晶にそう告げる。
よくもまぁ、細い体でそんなに食べ物が入るな、と細い目で晶は見ていた。

フリーアイゼンの入隊が正式に決まり、晶はシリアが用意した新人

パイロット用の訓練メニューを受けている最中だ。
午前中から体力づくりの為にと、艦内のトレーニングルームへ案内された。
ランニング用のグラウンドに、筋トレ用具の数々……勿論、数台のシミュレーターが用意されている。
早速一周４００mとあるグラウンドを晶は４０週近くさせられ、その後に腕立て２００回腹筋１００回等……と、鬼のようなメニューをこなしていった。
学校でのメニューとは比較的にならないほどの厳しさだ。

いくら慣れているとは言えど、あれだけの量を一気にこなそうとするとすぐに体が限界に達してしまっていた。
今は、昼休みということで食堂へ連れて行かれたのだが、ここでもまた一つ訓練がある。
ただでさえ体が疲れていて食事にありつけないというのに、目の前にこのカツ丼。　しかも2杯。
通常時でも食いきれないというのに、とてもじゃないが手を付ける気力がなかった。

「む……もしやカツ丼が苦手だったか？　大丈夫だ、味は保障するぞ。
アタシもカツ丼は苦手だったんだけど、ここで食べてみたらもう好きになっちゃってね。
今では朝カツ丼昼カツ丼夜カツ丼なんて、当たり前なんだ」

ということは、これから毎日このカツ丼を食わされるのだろうか。
晶は再び突っ伏し、その場から動けなくなっていた。

「あ、晶くんっ！？　だ、大丈夫？」

「ん――」

ふと、木葉の声に気づいた晶は顔をあげた。
偶然食堂へと足を運んでいた木葉が、心配そうに晶の顔を覗き込んでいる。

「訓練受けてたって聞いたんだけど……もしかして、具合悪いの？」

「あ、いや……そんな、ことは」

この程度で限界に達してしまっていた事が悟られると、パイロット採用の話がなくなってしまうかもしれない。
どんな厳しい訓練も受けると決めていたんだ、と晶は再度自分に言い聞かせた。

「なんだ、そうだったのか？　いやぁ、全然根をあげないからまだまだ余裕あると思ってたぜー」

「い、いやいやだ、だだだ大丈夫ですっ！　俺、まだいけますっ！　カツ丼だって食べますからっ！」

晶は目の前のどんぶりを手にして、一気に箸で口の中へかきこんだ。

「うっ――」

途端に、嘔吐感が襲い掛かり晶は立ち上がり口を抑え込んだ。

「あ、晶くん？　だ、大丈夫？」

「おいおい、飯でも詰まったか？　ほら、水飲め水っ！」

他にもクルーが食事の為に集っているというのに、こんなところでぶちまけるわけにもいかない。
晶は急いでその場から駆け出し、トイレへと一直線へ走り出した。

「……なんだぁ？　まだ元気あるじゃないか」

「ちょっと、違うような」

木葉は苦笑いしながら、晶の後ろ姿を見守るだけだった。

結局午後は、シミュレーターによる訓練が中心となった。
本来なら午前中のメニューを更に増した形のを行う予定だったらしい。
中止になってくれて本当によかった、と安心する反面……
今となってはトラウマに等しい存在である、シミュレーターの目の前に立っていた。

思えばパイロット候補生となってから、嫌な思い出しか存在しない。
何度やっても自機は撃墜され、スコアも思うように伸びなかったから。

「それじゃまず、座って動かしてみて。　アタシが見てやるから」

「は、はい」

「そんな緊張しなくてもいいって、なんたってアンタは未来のエースなんだからさ」

ニカッと笑うシリアの顔が眩しい、とてもじゃないが直視はできない。
そもそもシリアは晶が落ちこぼれのパイロットであることを知っているのだろうか。
もしも知らなくて、シミュレーターでの結果を見てしまえば幻滅される可能性もある。
しかし、隠していてもしょうがない。
今は少しでもスコアをあげれる努力をするだけだ。

「それじゃ、実際の試験に沿った形でやるぞ。　3・2・1……はじめ」

シミュレーターが開始された。
しかし、晶は以前と違って実戦での戦いを2回も経験している。
その経験を生かせれば、もしかすれば赤点ラインぐらいは超えられるんじゃないか？
そんな期待もあったのだが、結果はほとんど変わらず。
虚しくも1分近くでシミュレーターは終了してしまった。

「うーん、やっぱ基本はある程度できてるんだけど周囲への注意が足りてないな。　後、慌てすぎなところもある。
もう少し冷静に状況を見極めて、かつ丁寧に操作する事だ」

表示されているスコアに関しては何も触れない。
やはり知っていたのだろうか。

「どうしたんだ？」

「へ？　あ、いや……」

「大丈夫さ、所詮スコアなんて飾りだからさ。　アンタが実戦で証明しただろ？
あくまでも練習さ、ここは学校と違ってスコアに左右何てされないし、何よりもアタシ達はプロさ。
学校の胡散臭い実技訓練よりも、もっと本格的なメニューをさせてやるよ」

「あ、ありがとうございます……」

シリアの言葉は、晶の励みとなった。
学校では成績が全てだった、晶がいくらスコアを伸ばしたとしてもその努力は認められずに虚しく赤点をもらい補修を受ける。
そんな事が繰り返されていたが、ここでは違う。
あくまでもシミュレーターは技術の練習として使う、些細な違いかもしれないが晶にとっては大きく違った。

「じゃ、まずは複数のE．B．Bに囲まれた時のデータパターンをインプットするか、んで実際に対処してもらおう」

「は、はい。　頑張りますっ！」

「……おっかしいな、前敬語禁止っつったんだけどな」

「あ、ご、ごめん」

そういえばそんな話があったな、と晶は一言謝った。

「ま、今はアタシが上官だし、いっか。　そっちのほうが気分出るだろ？」

「え、そ、そうです、ね」

「じゃ、それでいこう。　あ、もちろんプライベートでは敬語なしなっ！」

「わ、わかり……ました」

何だかやり難い、と感じつつも晶は再びシミュレーターを再開させた。

「はい、これでもう自由ですよー」

「ああ、いつもすまないなシラナギ」

ようやくゼノスは身動きが取れるようになり、艦内での自由行動が許可された。
シリアも先日辺りから復帰をして、晶の訓練を行うとはりきっていたところだ。
これで、あの戦いでは無事パイロットが生還されたということになる。

「いえいえ、パイロット管理が私の務めですからっ！　それにゼノスが毎度無茶するのはいつものことですし」

「ゼノフラムの修復は無理か、艦長から何か聞いてないか？」

「今近くのメシア基地へ向かっているみたいですよ、そろそろ補給しないと危ないですしね」

「そうか、ならブリッジへと向かう」

「はいはーい、いってらっしゃいですー」

ゼノスはそのままの足で、病室を出ていく。
久々に歩いたが、体にはそれほど違和感はない。
普段から鍛え抜いているおかげかはわからないが、これなら数日で体の調子も元に戻るはずだ。

晶は今頃訓練を受けているはず、全部シリアに任せればいい。
その間にゼノスは、ゼノフラム修復の件はもちろんの事……例のE・B・Bについて艦長へ報告する必要があった。
それだけじゃない、ι・ブレードを狙う『アヴェンジャー』についても無視はできない。
このまま ι・ブレードを所有したままであれば、しつこく付き纏わ

れる可能性があった。

ゼノスは無言でブリッジの中へと入っていく。
オペレーターのヤヨイと操船担当のリューテ以外は席を外している。
映像モニターには無限に広がる空の映像。
艦長は黙ってそのモニターを見つめていた。

「艦長、話がある」

「ゼノフラムの件ならシラナギに伝言を頼んだはずだ」

「違う、E．B．Bとアヴェンジャーの件だ」

「……場所を変えよう。　カイバラ、何かあったら連絡をよこせ」

「了解しました」

そう告げると、艦長はブリッジの外へと出ていく。
ゼノスはその後ろを黙ってついて行った。

「未乃　晶はどうしている」

「シリアに訓練を任せている、状況については知らされていない」

「そうか」

長く続く廊下を通りながら、二人は黙々と歩き続ける。
すると、とある一室の部屋の前へと辿り着いた。

そこは艦長の私室だ。

ゼノスから報告を受けるときは、決まってこの場所へと案内される。
社長室や校長室といったものを連想しそうな外観だ。
高級そうな机に高級な黒い椅子。
艦長はそこに座ると、ゼノスはその前に立つ。

「いいぞ、話せ」

「まずはE．B．Bについてだ。　あいつにはステルス……もしくはそれに類似した力が備わっていたと推測される」

「一時報告で受けた件だな……根拠は？」

「レーダーだ。　どのHAでも、フリーアイゼンのレーダーにもあのE．B．Bの存在を認知することができなかった。
あの霧もE．B．Bが発生させたものだろう、意図的に人が不利な環境を作り出したとしか思えん」

「新たな力を持ったE．B．B……そう言いたいんだな？」

ギロリ、と睨み付けるように艦長はゼノスにそう告げる。
だが、ゼノスは目を逸らさなかった。

「ああ、そうだ」

「……E．B．Bが知能を働かせて、さらに新たな力を身に着けるか。　今までに例がないな」

「人間がE．B．Bの対策を進めている中、奴らも更に力を身に着けた……と考えるのが自然だろう」

「ι・ブレードを狙う……『アヴェンジャー』の仕業という線はないのか？」

「なくはない、E．B．Bを利用する連中だ。その可能性は否定できん」

確かに艦長の言うとおり、アヴェンジャーが何らかの手段でE．B．Bを利用した、と考えることはできなくもない。

だが、問題は多数存在した。

まずはアヴェンジャーの手に最新技術があるということ、ステルスについてはメシアの最新技術であり、まだまだ普及はされていない。

それが、非公式な所属であるアヴェンジャーの手に渡っているとは考えにくい。

襲われた施設の中でも、まだステルスに関する研究が行われた施設はなかった。

仮にステルス技術を持っていたとしても、E．B．Bにその機能を搭載させるのは簡単ではない。

まず捕獲をし、何らかの手段で体内等にその機能を搭載させなければならないのだから。

いくらなんでもそこまでの技術を身に着けているとは思えなかった。

それに第4シェルター東地区にて誘導された大型E．B．Bについても、その手の技術は使われていなかったのだ。

ゼノスはその点を、艦長に説明した。

「……いずれにせよ、ι・ブレードを狙っているという事実は変わらない。

奴らが動き出す前に、活動拠点を叩く必要がある」

「つまり、人類同士でありながらも戦うというのだな？」

ゼノスは艦長に進言すると、再び鋭い目で睨み付けられる。
だが、迷いはなかった。
これ以上、あのシェルターのような被害を起こさないためにも。
彼らとの戦いは決して、避けられない。

「判断はアンタに任せる。　報告は以上だ」

「……ゼノス」

艦長は退室しようとするゼノスを、静かに呼び止めた。

「未乃　晶は、彼らと戦えるかね」

「戦う、だろうな。　奪われたＨＡを迷いなく破壊した奴だ」

「悲しいな、人類同士で戦わなければならないとは。　今の我々には共通の敵が存在するというのに」

艦長はどこかアヴェンジャーと戦うことを躊躇っているように見えた。
確かに今は人類同士で争っている場合ではない。
ゼノスもそのことは承知していた。
だが、アヴェンジャーの行為はもはや限度を超えている。
とてもじゃないが、野放しにすることはできなかった。

「……戦う覚悟はできている、時が来たらいつでも命令してくれ」

「ああ、わかっている」

ゼノスはそう告げると、静かに艦長室を後にした。

シミュレーターを使った訓練は、夜遅くまで休憩なしで続けられた。
シミュレーター自体には慣れていると言えど、シリアの訓練メニューは厳しいものばかりだ。
いつも以上に神経を使い、集中し続ける晶への負担は大きい。

だが、訓練というのは厳しいものでありこれくらい乗り越えなければE．B．Bと戦えるはずがない。
晶は絶対に音をあげたりはしなかった。

「おつかれーい、んじゃ飯でも食いに行こうか」

「は、はい」

「おい、今はプライベートだぞ。　口には気をつけろ」

「あ、ごめん」

何か怒られ方が間違っていないか？　と、晶は心の中で突っ込みを入れる。
シリアと二人で食堂へと向かった。

窓からは外の景色が見える。
砂漠地帯らしいが、その永遠に広がる砂地に何処か晶は惹かれていた。
夜のうちは航海はせずに、艦は離陸しているのだ。
この地はE．B．Bがあまり生息しておらず、比較的に安全地帯だという。

もっとも、警戒を怠ることはできないが。

「そういえばここってシェルターの外なんだよな……それなのに、こんな大自然が広がってるのってちょっと不思議だ」

「地球と言えど広いからね、E．B．Bは人があまり住まないところには生息しないのさ」

「やっぱり本当なのか……E．B．Bが意図的に人類を狙っているって話」

「うーん、確かに否定できないな。　でもE．B．Bだって元々はただの地球上の生物なのさ。
エターナルブライトによって、あんなバケモノになっちまってるだけで。
そう考えると、元の生物だって立派な被害者なんだよなぁ」

「……何だか辛いな、そういう話を聞くと。　結局お互い、無意味に殺し合ってるみたいで……」

E．B．Bは世界の敵、人類の敵。
晶は生まれた時から、そのように教えられてきた。
だが、今のシリアの話を聞くと、途端に晶はE．B．Bを殲滅することに疑問を感じる。
勿論、自らの故郷がE．B．Bによって壊滅させられたのも事実ではあるし、許せないことだ。
晶にとっては憎むべき対象でもあるし、人類が何もしなければ、ただ滅びを待つだけ。

「悩むのもいいけどな、それで戦うことに迷いが生じたら話になん

ねーぞ。
どんな理由であれ、アタシ達はあいつらと戦わなきゃいけねぇんだ、それだけは君の命じとけよ」

「ああ……大丈夫だ、あんな悲劇を二度と起こさないためにも……俺は戦える」

E．B．Bには故郷も奪われ、親友もクラスメイトも奪われた。
そんな奴らに同情する気はない、だが少しだけ疑問に感じたのも事実だ。
今はシリアの言う通り、余計なことを考えないでいい。
親友との約束を果たす為……木葉を守り続ける為に、パイロットを続ければそれでよかった。

「うんうん、それでこそ未来のエースっ！　さ、今日の締めはカツ丼特盛で行こうじゃないかっ！」

「そ、それはちょっと――」

「さー、腹いっぱい食うぞー明日に備えるんだーっ！」

昼間より更に増した量を食わされるというのか。
これからの生活を考えると、晶は愕然とした。

「お？　シリアと新入りじゃねぇか」

ふと、背後から男の声が聞こえた。
後ろへ振り向くと、そこにはオレンジ色の短髪の男の姿があった。
耳にはピアスをしている割には、工事現場の作業服を身に纏っておりオシャレとは言い難い外見だ。

以前、ブリッジに訪れた時にシラナギが言っていた武器管制担当の『ライル・ラピード』という男だ。

「おお、ライルじゃねぇか。　元気にしてっか？」

「相変わらず口が悪いな、ちっとは女らしくしろってんだ。　ただでさえ華がすくねぇんだからさ、この艦は」

「ほっとけよ、アタシに色気を求めること自体が間違ってるのさ」

「自分で言うかぁ？　それ。　んで、そっちの新入り……なんつったっけ」

シリアの返しに呆れていると、ライルは晶の事を指さしてそう言った。

「み、未乃　晶です」

「そんな緊張しなくてもいいぜ、そこのライルってのはただのバカだからさ」

「バッカ、お前……もうちっとマシな紹介してくれてもいいだろ」

「何だぁ？　じゃあロリコンってことも暴露しちまうぞ？」

「だ、誰がロリコンだっ！」

仲がいいというべきなのだろうか。
二人は晶をそっちのけてケンカを始めていた。
当分の間収まりそうもない、どうしたものかと考えていると

今度は青い髪の男がスタスタと歩み寄ってきた。
ライルとは打って変わって、メシアの制服をバッチリと決めている。
長身にメガネと美形には見えるが、何処か近寄り難い雰囲気が漂っていた。
同じくシラナギから紹介があった、操船担当の『リューテ・マインス』だ。

「何だ、ライルはまた子供と遊んでいるのか」

「あ、遊んでいるっていうんですか」

「そうだ、いつものことだし気にすることはない。　お前は食事はまだなのか？」

「はい、これからシリアと一緒に行く予定だったんですけど」

「ならば私とどうだ、どーせあの二人はしばらく遊んだままだろう」

「は、はい」

いいのかな、と内面思いつつもカツ丼を避けることができて晶は内心喜んでいた。
シリアには悪いが、リューテと先に食堂へ向かうことにする。

数分後、丁度二人はお互いに別々のメニューを頼んで無言で一緒の席へと座る。
見た目通り、やはり口数の少ない人だった。
どうして自分なんかを誘ったんだろう、と晶は疑問に感じたぐらいだ。

ちなみにリューテもまたカツ丼を頼んでいた、もしや食堂の一番人気メニューなんだろうか？
晶はカツ丼はもう見たくなかったのでカレーを頼んでいた。

「どうだ、艦には少し慣れてきたか」

「え？　は、はい。　みんな良くしてくれますし、特にシラナギさんにはお世話になりっぱなしですから」

「ハハッ、彼女は口うるさくて君は参るんじゃないか？」

「うるさいというレベルなんですかね、あれ……」

シラナギには、恐らく一番世話になっているのは事実ではある。
だが、あの無駄なハイテンションだけは何とかしてほしいという願いはあった。
若干失礼なことを口走りながらも、晶はカレーを頬張った。

「だが、時には彼女に癒されることがあるのも事実さ」

「……そう、なんですかね」

目を泳がせながら晶はそう呟く。
あれに慣れたら慣れたで、まだ別な問題が起きそうな気もしなくはない。

「あら、随分珍しい組み合わせじゃない」

黒髪をまとめた女性が、食事を持ちながら歩み寄ってきた。

オペレーターの『ヤヨイ・カイバラ』だ。
常に冷静さを保ち、的確に状況を伝える力はとてもじゃないが晶には真似できない。
やはり彼女のようなオペレーターは艦には欠かせないのだろう。

「なぁに、ちょっと新人くんの様子が心配になってね。　彼の経緯は私だって聞いているからね」

「彼なら心配いらないでしょう、何せあの艦長が認めてますからね」

ヤヨイは席へついて、静かにご飯を口へと運んだ。
ちなみに、やはりメニューはカツ丼だった。
もはや今はブームの真っ最中なのかもしれないと晶は感じた。

「困ったときは私に相談なさい、シリアの訓練メニューが厳しすぎるとかでもいいのよ？」

「い、いえ。　訓練は厳しくて当然ですから、これぐらいで音はあげませんよ」

見た目とは裏腹に、優しい言葉をかけられたが、晶の意思はその程度では揺らがない。
訓練をメニューに関しては、決して軽減を要求するつもりはなかった。

「ほら、やっぱり頼もしいじゃない彼」

「確かに、頼もしい限りだ。　シリアの言う通り、未来のエースというのは夢じゃないかもしれんな」

「そ、そんなことはないですよ」

面と向かって、色んな人から褒められるのは気恥ずかしい。
今までは怒られてばかりの毎日で、教師には一切認めてもらうことなんてできなかったのに。
前までの境遇と今の境遇があまりにも違いすぎて、戸惑いが隠せなかった。

「皆、君に期待しているのさ」

「そうよ、貴方は守るべきものを守った。　もっと胸を張りなさい」

皆に期待されている。
守るべきものを、守った。
とてもじゃないが、今の自分には勿体ない言葉と感じる。
だが、言われると心地が良いのも確かだ。
どんな形であれ、皆晶をパイロットとして認めてくれている。
もう、自分は落ちこぼれなんかじゃないんだ。

「俺……もっと頑張ります、必ず皆の期待に応えますから」

晶からは、自然と笑みがこぼれた。

食事を終えて、晶は自室へ戻ろうとしたときに、ふと窓の景色を眺めた。
先程も見た砂漠の光景、やはり綺麗だ。
過酷な環境の地であると言えど、大自然であることには変わりがない。
E．B．Bに怪我されていない、綺麗な大地だ。

「外、でてみたいな」

ぼーっと窓を眺めながら、晶は呟く。
少しだけでも艦の外へ出してもらえないだろうか。
別に遠くへ行かなくてもいい、甲板でもいいので外へ出てみたいという気持ちがあった。

「何だ、出たいのか？」

「うわっ！？」

ふと、ゼノスが背後から声をかけてきて晶は大げさに驚く。

「E．B．Bの反応は確認されていない、艦長には話を通しておこう」

「い、いいのか？　外でても」

「ああ、但し緊急時以外はＨＡを使うなよ。　甲板に出るぐらいな

ら許可が下りるだろうからな」

「あ、ありがとう……」

「あの娘も連れて行ったらどうだ、お前の事を心配しているようだったぞ」

「こ、木葉ですか？」

思えばここのところ、木葉とはまともに話をしていない。
訓練で忙しいというのもあったが、そうでなくともシラナギに振り回されていた日々もあったのだ。
ただでさえ木葉は帰る場所を失って、辛い思いをしているというのに……。
晶が支えてやらなければならないというのに、自分は何をしているのか。

「……そうですね、木葉を誘ってきます」

こうしてはいられない、と晶は急ぎ足で木葉の部屋へと駆け出した。

「いつまでも、木葉が艦にいられるとは限らないからな。今のうちに、傍にいてやるんだ」

もうその場にいない晶に向けて、ゼノスは静かに呟いた。

ゼノスの提案もあり、無事に許可をもらった晶はフリーアイゼンの甲板へと出る。
ブワッと冷たい風を感じた。
外は想像以上に肌寒い。
だが、そこから見渡す景色は綺麗だった。
窓越しで見た時よりもとても鮮明で、綺麗な夜の砂漠が広がっている。

「寒いな……大丈夫か、木葉？」

「へ、平気だよ」

口ではそう言いながら、肩をすくめて手を小刻みに震えさせていた。
もっと暖かい服装で来るべきだったな、と少し後悔した。

「……凄い、本当にシェルターの外なの？」

「そうだよ、ビックリだよな。　教科書で見た外の世界には、こんな綺麗な光景はなかったのに」

学校で習ったときは、世界各地がまさにE．B．Bが巣食っている写真ばかりが乗せられていた。
大自然に潜む異形はもちろんの事、崩壊しつくされた建物、海の中に潜むE．B．B。
一部では海が紫色に変色してしまっている場所まであると言われている。

ここは唯一、E．B．Bの被害を受けていないのだろう。
元が砂漠であることもあって、生物自体が少ないという理由もあるのだが。

「座ろうか」

「う、うん……」

晶は風景を見渡せる位置に座ると、その隣をちょこんと木葉が座った。
寒いせいかお互いに身を寄せている。
少し気恥ずかしかった。

「……晶くん、ついにパイロットになったんだよね」

「ああ、そうだよ。　……竜彦の奴、ビックリするだろうな」

空を見上げると、無数の星が輝いていた。
シェルター地区では、シェルターの影響でここまではっきりと見えることはない。
とても、新鮮な光景だ。

「これから、私達を守るために……一生懸命、戦うんだよね」

「そうだ、俺は戦うんだ……もう、ただの落ちこぼれなんかじゃない」

「……よかった、晶くんの夢が叶って」

ふと、木葉は目に涙を浮かべながらそう呟いた。

晶は慌てて、ハンカチを手にして涙を拭き取って見せる。

「ど、どうしたんだよ？」

「ううん、凄く……よかったなって思って。　今まで、晶くんは一生懸命頑張っていたのに……誰にも認めてもらえないで、凄く辛そうだった。
私が励ましても、何処か遠い目をしていて……今にも、パイロットになることを辞めちゃうんじゃないかって心配だったの」

確かに晶は、シミュレーターを繰り返していくうちに自分の腕のなさに絶望することが多々あった。
次第には試験のやる気もなくし、時には木葉や竜彦に強く当たってしまうことも。

だけど、今は違う。
メシアの一員として、パイロットとして採用されたのだ。

「私、これからもずっと……晶くんのこと応援するよ？
亡くなった竜彦くんの分まで……頑張ってくれるって、期待してるからね？」

「……ありがとう、木葉」

結局、木葉に励まされてしまった。
本当は木葉を不安にさせないために誘ったというのに。
晶自身からも、木葉にかけられる言葉は何かないのか。
一生懸命、頭の中をグルグルとさせた。

「手、握って……いいかな」

「へ？」

「だ、駄目かな？」

「い、いや……構わないけど」

木葉の急な言葉に驚かせながらも、晶は目を逸らしながら頷く。
すると、木葉の真っ白な手が晶の右手を握りしめた。
驚くほど冷たい手だ。
寒さで冷えすぎてしまっているのだろうか。

「凄く、温かい……あのね、晶くんの傍にいると……凄くホッとするの。
今までの辛い事、全部忘れられちゃいそうなぐらい」

「だけどね、やっぱり死んじゃったみんなの事は忘れちゃいけないと思うの。
私ね、毎日毎日お祈りをしているんだ。　生き残っちゃった代わりに、皆の分まで幸せに生きるからねっていつもみんなに言ってるの」

「木葉……」

晶が想像する以上に、木葉は強かった。
あれだけ怖い目に逢いながらも、全てを受け入れることができているのか。
晶の場合は、夢にまで出てきて責められ続けたというのに。
自分が情けない、晶は強くそう感じた。

「だからね、私は全然平気だよ。　晶くんは、一生懸命パイロット

を務めてね。　これも、死んでいったみんなのためなんだよ？」

「……木葉、俺はもう大丈夫だ。　心配しなくても、やっていけるよ。　それよりも、もっと自分を大事にしてくれ。辛かったら……いつでも、俺が相談に乗るからさ」

無理をしているのを、ヒシヒシと感じた。
木葉は確かに強いが、か弱い女の子である事には変わりはない。
助けを求めているはずなんだ。
晶は、少しでも木葉の力になれないかと考えていた。

「大丈夫だよ、故郷も失って家族も友達もみんないなくなっちゃったけど……
それでも今、晶くんがパイロットに慣れたことが凄く嬉しいと思うの。
まるでね、自分の事みたいに思えて……本当なら私も、シラナギさんみたいにはしゃぎたいぐらいに思ってるんだから」

「……木葉」

何処まで他人の事を思ってくれるのだろうか。
晶は木葉の優しさに感動する反面、木葉自身の事がますます不安に感じた。
本当に、大丈夫なのだろうか。
無理をしていなければいいのだけど、と願うだけだ。

「……？」

ふと、晶は砂漠の景色を眺めていると
一か所だけ不自然に砂埃が舞っていた。

肉眼ではよく見えないが、何かがこちらに向かってきている……。
あれは一体――

晶はふと、携帯を確認する。
メシアに渡された最新式であるが、実はレーダー機能が搭載されていた。
レーダーを確認すると、確かに正面の方角から何かの反応がある事を確認できた。

E．B．Bではない……HAの反応だ。
しかもたったの一機だ、晶は妙に感じた。

「……木葉、中に戻ろう」

「え？　どうしたの？」

「何かが来ているんだ、みんなに知らせないと」

「う、うん……わかった」

晶は木葉を連れて、急いで艦内へと戻る。
ふと、携帯が鳴った。
慌てて着信すると、そこからはゼノスの声が聞こえた。

『出撃準備をしろ、ウィッシュが一機こちらへ接近している』

「ウィッシュ……？　味方機じゃないんですか？」

『……そのウィッシュだが、所属コードがお前の学校を示している』

「なっ――」

晶は言葉を失った。
まさか、あの9機の中に生き残りが？
そんな馬鹿な、あの場で全滅したのではなかったのか。
一体誰が生き残ったというのか？

「で、でも敵じゃないですよね？　出撃ってどういうことですか？」

『相手が一方的に通信を受け入れようとしていない。　その上、単機でこちらに向かってくるのは妙だ。
……もしかすると、アヴェンジャーの奴らかもしれん』

「アヴェンジャー……っ！」

第4シェルター東地区を襲撃した張本人だ。
まさか、このタイミングでその名を耳にすることになるとは、晶は驚きを隠せなかった。

『俺とシリアも後から向かう、お前は先に出撃してくれ。　命令があるまでは決して仕掛けるなよ』

「わ、わかりました……」

通信はそこで途切れた。
まさかアヴェンジャーの人間が、機体を奪取したとでもいうのか。
ますます許せない……晶の怒りは込みあがってくるばかりだった。

「晶くん、出撃するの？」

「ああ……どうやら『アヴェンジャー』が仕掛けてきたらしいんだ」

「……無茶だけは、しないでね」

「大丈夫……俺にはι・ブレードがあるから」

危険察知さえあれば、最悪死ぬことはない。
単機での出撃は心細くはあるが、命令であれば受け入れるしかない。
これも、艦長が晶をパイロットとして認めているからこその指示なのだろう。

「待ってろよ、アヴェンジャーっ！」

晶は、格納庫へと駆け出した――

アヴェンジャー？

広大な夜の砂漠に向けて、晶はι・ブレードを発進させた。
レーダーで確認したウィッシュは、フリーアイゼンの目前にまで迫っている。
一体何が目的なのか、本当にアヴェンジャーの一員なのか？

『晶、異常はないか？　すぐに俺達も出撃する、そのまま待機していろ』

「……了解」

コックピットの中で、スロットルを強く握りしめたまま、晶は額に汗を垂らす。

『見つけたぜぇ……ι・ブレードっ！』

突如、聞き覚えのある声が通信機から聞こえた。
この声は、まさか――

ズキンッ――

その途端、晶は頭痛に襲われた。
危険察知が働いたのだろう、目の前にはライフルを構えたウィッシュがι・ブレードに向けて発砲してくる映像が見える。

「やっぱり、仕掛けてくるのかよっ！」

晶はスロットルを押し込み、機体を大きく前進させる。

ギュンッと高く跳躍すると、迫ってくるウィッシュを飛び越して背後へと着地をした。

連続して、晶に頭痛が襲い掛かる。
着地した途端に、ウィッシュが１８０度回転してライフルを発砲させる映像だ。
そう簡単に背後を取ることはできない、だが危険察知に頼れば反撃チャンスはいくらでもあるはず。

今日の訓練内容を思い出し、晶は冷静に状況を分析した。
映像が終わった途端、晶は即座に左方向へ機体を移動させる。
以前のようにバーニアを噴かせすぎる失敗を、今回はしなかった。
こんなにも早く訓練の効果が出ているというのだろうか。
しかし、実感をしている場合ではない。
晶は即座にブラックホークを装着し、ウィッシュへと向けて発砲させた。

バンッ！

強い衝撃がコックピットに伝わると、再び晶に頭痛が襲い掛かった。
今後はグレネードが投げられ、周囲が砂埃に覆われて視界が奪われている。
その背後に、ウィッシュがロングサーベルでι・ブレードの背後を切り裂こうとしていた。

以前にも似たような手を使われたことがある、まさか同じパイロットでは？
しかし、何かが違うと晶は感じ取っていた。
映像の通り、ブラックホークの弾はいとも簡単に避けられ即座にグレネードが投げ込まれる。

急いで後退ものの、爆発から遠ざかることはできずに周囲の視界が奪われてしまった。

『いいねぇ……いいねぇっ！　本当にお前、ビリッケツちゃんかぁ？』

「ビリッケ……ツ……？」

聞き覚えのあるこの声。
そして、告げられた一言。
まさか、本当に――

いや、今は考えるな。
晶は背後からやってくるであろう、ウィッシュを待ち構える。
ムラクモを構えて、姿を現した瞬間に斬ってみせる。
大丈夫だ、できるはずだ。
晶はそう自分に言い聞かせた。

再度、晶に頭痛が襲い掛かった。
何度目だ、まだ戦いが始まってから数分経過していないというのに。
おまけに敵はまだ姿すら現していなかった。
これは一体どういうことなのか、今まで危険察知は例外なく映像通りの出来事が発生したというのに。
まさか直前に、相手が行動を変更したとでもいうのだろうか？

しかし、映し出されたのは、ほぼ同じだった。
砂埃の中、背後に出現したウィッシュがｉ・ブレードを切り裂く映像だ。

『何だお前、俺の事見えてんのか？』

「……っ！」

この時、晶は気づいた。
間違いない、相手が直前で行動を変えたんだ。
だから、危険察知が二度も連続で働いた。

迂闊に先読みをしては相手に気づかれてしまう、そうすると危険察知が無効化されてしまうのだろう。
ならば、本当に直前まで動かない以外方法はない。
晶の反応速度で、そこまで対処することができるのか？
だが、やるしかない。

危険察知の映像通りの結果が導き出されるのは、そう遠い未来ではない。
ならば、少しだけ反応を遅らせるだけで大丈夫なはずだ。
熟練のパイロットであれば、ＨＡの駆動音等で判断はできるかもしれない。
しかし、今の晶にはとてもじゃないがそんなことはできなかった。
頼れるのは、『危険察知』しかないのだ。

「今だ――」

タイミングを計って、振り向いた瞬間……
再び、危険察知が働いた。
また、タイミングが早すぎたのか？
これではきりがない、晶は一旦機体を前進させようとスロットルを思い切り押し込んだ。

その途端――

ふと、コックピット内が青く点滅した。
以前にもみたこの青い光。
これは、一体――

ズガンッ！

突如、コックピットが大きく揺れた。

「うわぁっ！？」

何だ、何が起きたというのか？

『左腕、被弾しました。　左腕、被弾しました』

「被弾……だって？」

そんな馬鹿な。
晶は機械のアナウンスを聞いて、驚きを隠せなかった。
先程の危険察知の映像では、ウィッシュが何度も何度も斬りつける映像ばかりが繰り返されたというのに。
予想が……外れた？

『晶、どうした？　応答しろ』

「……」

通信機から聞こえるゼノスの声に、反応を示さなかった。
それよりも、今ここで起きた事実にただ呆然とするだけだったのだ。

『ようやく、捕まえたぜぇ……しっかしなんてＨＡ乗ってんだお前

……なんで傷一つついてねぇんだよ？』

「……白柳　俊？」

その声を聞く度に、晶の推測は確信へと変化した。
あの男なら、クラスメイトを置き去りにして一人で生き残るなんて、平然とやってのけるに違いない。
……何故、今になって目の前に姿を現したのか。

『おお？　覚えててくれた？　どうだ、今猛烈に楽しくねぇか？　かつてのビリッケツと成績トップが、こうやってＨＡ同士で戦うなんてよ？』

「……クラスメイトは、竜彦は死んだんだぞ……お前はどうして生きてんだよ、皆を助けなかったのかっ！？」

晶は、感情的になって俊に向かって叫んだ。
もし、見捨てたというのなら
絶対に……許せない――

『ああ？　ちげぇよ、俺が待てっつってんのに全員勝手に出撃しやがった。　ったく、命知らずが多いよな。
特に竜彦何てあいつら助ける為にわざわざ追いかけやがったんだ……バカヤロウだよ、命を投げ出したんだぜあいつ？』

「竜彦を、侮辱するなっ！！」

怒り任せに、晶は強くスロットルを押し込んだ。
ウィッシュに向けてムラクモを、無我夢中に振り回した。
こいつは、仲間を見捨てたんだ。

見捨てるどころか、竜彦の事まで侮辱をした。
絶対に、許すわけにはいかない。
気が付いたら晶は、怒りに捕らわれて我を忘れていた。

『侮辱してねーっつーの、ったくめんどくせー奴だな』

晶はウィッシュの姿を捕え、力任せにムラクモを振り回す。
だが、ウィッシュはギュンッと駆動音を立てて視界から姿を消した。

同時に、危険察知が発動した。
ι・ブレードの背後から、大振りでロングサーベルを振り下ろすウィッシュの姿があった。
これなら反撃は可能だ、晶は迷わず機体を反転させる。

「そこだぁぁっ！！」

映像を頼りに、晶は力任せにムラクモを振り回した。
だが、再びコックピットが青く点滅する。
その途端、ウィッシュは背を低くしてロングサーベルを脚部へ向けて振り下ろしていた。。

ズガァンッ！

先程よりも、より大きい振動がコックピット内に伝わった。

『脚部損傷率２０％、脚部損傷率２０％、戦闘継続可能です』

「ま、また……？」

またしても、危険察知が発動しなかった。

今のウィッシュの動きは、明らかに映像の時とは異なっている。
一体何が起きているのか、理解できなかった。

『おいおいどうしたぁ？　さっきより動きが鈍くなってんじゃねぇか？
にしてもかってぇな、おい。　ウィッシュだったら脚ぶっ壊れてもおかしくねーだろ、これ』

「……どうして、だ？」

あの時確かに、危険察知は発動したはずなのに。
予想が外れることが、あるというのか？
それともまた、別の原因があるというのか？

『晶、おい晶っ！』

「……なんで、だよっ！」

ゼノスの通信を無視して、晶はスロットルを強く押し込んだ。
あんな奴に……負けたくない。
竜彦を侮辱した奴に、絶対に負けたくない――

「許せないんだ……あいつは親友を侮辱しやがったんだ……頼む、力を貸してくれよっ！」

晶が力強く叫ぶと、ふとコックピットに赤い光が灯る。

「次こそ脚をへし折ってやるぜぇ、ι・ブレードぉっ！」

ロングサーベルを構え、ウィッシュが最大速度で迫ってくる。

晶も負けまいと、力強くスロットルを限界まで押し込んだ。

「行けよ、ι・ブレードおおっ！！」

コックピット内の赤い光が、更に強い輝きを示した。

ガキィンッ！

目の前で、ウィッシュのロングサーベルが動きを止めた。

何処かで見た赤色の光……あの時の、フィールドだ。

『な、何だぁ？　この光――！』

「今だっ！」

フィールドが解除された途端、ι・ブレードは両手でムラクモを振り下ろした。

バキィンッ！

鈍い金属音と共に、ウィッシュの右腕とロングサーベルが宙へと舞う。

やった――

その時、晶は勝利を確信した。

だが……

同時に、コックピット内が青く灯った。

相手のウィッシュの左腕に、ロングサーベルが握られている。

晶はそれに気づき、必死でスロットルを戻して後退しようとした。

だが、相手のほうが早い。
晶がスロットルを握るよりも早く、動き出していたのだ。

ガタァンッ！
更なる衝撃が、コックピット内を襲い掛かった。

『損傷率４０％　損傷率４０％　自己修復機能、作動中』

アナウンスが虚しくも、機体が損傷を受けたことを知らせていた。

「な、何なんだよ……何者だよ、あいつ――」

ι・ブレードに搭乗しているというのに、まるで歯が立たない。
やっとの思いで腕１本を取ったというのに、思わぬ反撃を受けてしまう始末だ。

おまけに、何故か危険察知が働かない事態まで起きてしまっている。
……実力が、違いすぎるのか。
晶は、ただ悔しくてスロットルを強く握りしめるだけだった。

「まだ、戦いは終わってねぇよ……腕の１本とったぐらいで図に乗ってんじゃねぇぞ？
さっさとιを降りちまえよ、ビリッケツちゃんよぉっ！」

相手は、腕を一本失っても戦意を喪失することはなかった。
勇敢なのか、無謀なのか。
再びι・ブレードへと迫ってきた。

あんな奴に、勝てるのか？
こんな実力で……勝てる、のか？

晶は次第に、戦意を失っていった。
手が震えだし、迫りくる一機のＨＡにただ恐怖する。

『動きが鈍くなったな、ぃぁっ！　面白くねぇぞ……もっと楽しませろよ、最高に楽しいゲームしてんじゃねぇか俺達よぉ？
なぁ、もっと楽しくさせろよ……何とかいえよ、ビリッケツっ！』

再び、頭痛が襲い掛かる。
迫りくるウィッシュが、ライフルを片手に何度も何度も発砲を繰り返してきた。
映像を頼りに、晶は必死でスロットルを動かす。
だが、再びコックピット内が青く灯った。

弾を辛うじて何発か避けることはできたが、一発だけ被弾をしてしまう。
……最後の一発だけ、映像とは明らかに違っていた。
何故だ、何故危険察知が外れてしまう？
一体、どうすれば――

『さっさとくたばっちまえよ、ぃ・ブレードっ！！』

ウィッシュが空高く舞い、ロングソードを片手に襲い掛かってきた。
またしても、危険察知が発動しない。
晶は、混乱したまま反応することができなかった。
そのまま呆然と立ち、ウィッシュが到着するのをただ黙ってみていることしかできなかった――

バァンッ！

突如、銃声が響いた。

その途端、降下を続けていたウィッシュは吹き飛ばされた。

「ハッ――」

我を取り戻した晶は、レーダーを確認する。

味方を識別するマークが2機……？

『……無事だったか、晶』

「ゼノス……さん？」

通信越しから、ゼノスの声が聞こえた。

レーダーを頼りに機体を確認すると、そこには赤いウィッシュと黄色いウィッシュの2機が土煙をあげながら向かってきていた。

『何も反応を示さないからやられたかと思ったじゃないか、あまりアタシを心配させんじゃないぞ？』

『……捕えるぞ、シリア』

『ああ、任せろっ！』

晶が呆然と立ち尽くす中、2機のウィッシュは敵機へと向かっていく。

『チッ……流石に3対1は厳しいな、クソッ。　続きはまた今度な、ビリッケツ。

……次はもうちと、楽しませろよな？』

俊は晶にそう言い残すと、全速力でフリーアイゼンから離れて行っ

た。

『あちゃー……逃げられたか』

『深追いはするな。　全機、直ちに帰還しろ』

『了解っ』

どうして、危険察知が発動しなかったのか。
単純に機械の故障とは思えない、少なくともｕシステムは正常に稼働していた。
相手が予想と違う動きをした？
しかし、そうであればあの時のようにもう一度危険察知が作動するはずだ。
だとすれば……『危険察知』が、追いつかなかったのだろうか？

『晶、聞こえたか』

「……あ、ああ」

晶は力なく、ゼノスの通信にそう答える。

『白柳　俊』……竜彦も教師も、腕は本物だと認めていた。

まさか、ここまで実力差があったとは。
晶はただ、悔しかった。
自分の腕のなさで、ｕを傷つけてしまった事。
あれだけの性能差がありながらも、自身が負けそうになってしまったことが。

いや、もはや敗北と思ってもいい。
それだけ、相手の力量は晶を遥かに上回っていたのだから。

「クッ……」

静かにスロットルを握りしめ、晶はフリーアイゼンへと帰還をした
――

戦闘を終えた後、格納庫へ戻ると晶はゼノスに呼び出された。
いつも無表情であるゼノスではあるが、この時の顔はいつもと違う。
鋭い目で、晶を睨み付けていた。

「ＨＡと交戦状態になった件については咎めるつもりはない、だが……何故、通信を返さなかった」

「……」

「答えるんだ」

「……あのウィッシュには、俺のクラスメイトが乗っていたんだ」

あの時、晶はウィッシュのパイロットに気づいてしまい、結果的にゼノスの通信を無視してしまっていた。
ただ混乱すると同時に、怒りを覚えて……無我夢中だった。
その言葉を聞いて、ゼノスは表情を一変させた。

「やはり、お前の知り合いだったのか」

「ああ……成績が一番優秀な奴で……一番大嫌いな奴、だ」

俯きながら、晶はそう呟く。
今思い返しても実に腹立たしい。
試験の度に毎度遅れている癖に、いつも成績は1位を収めていた。
更には晶の事をビリッケツとバカにしていたことも。
そしてあの時、死んでいったクラスメイト……そして竜彦の事を侮辱したのが、許せなかった。

「奴は何故、お前を狙った？」

「……多分、ι・ブレードを狙ってた。　はっきりとした目的はわからないけど、俺との戦いを楽しんでるようにも……見えたんだ」

「ι・ブレードの事を、知っていたんだな？」

晶は無言で、頷いた。

「……恐らく、奴は『アヴェンジャー』の一員だ」

「なっ――」

「今のところ『ι・ブレード』の存在を知るのはメシアの一部とフリーアイゼン部隊の俺達、そしてアヴェンジャーの奴らだけだ。あくまでも可能性の話だが、フリーアイゼンの位置を特定したことから……可能性としては十分高い」

晶は、言葉を失った。
まさか……どうして？
あいつらは故郷を襲った張本人だというのに。

「なんで、だよ。　なんであいつは、『アヴェンジャー』に？
あいつ、自分達の故郷潰されて何とも思わないのかよっ！？」

「奴らの目的は一切不明だ……だが、必要以上にι・ブレードを奪取しようとしている。
……俺たちはいずれ、奴らと戦わなければならん」

「……クソッ、クソッ！　どうしてだ……どうして、なんだよ」

晶は、悔しかった。
ι・ブレードに搭乗しても、歯が立たなかったことが。
親友を侮辱されたのに、敗北してしまった自分を。
何よりも、自らの故障を壊した『アヴェンジャー』の一員となった奴に、負けてしまったことが許せなかった。

「今日は寝ろ、明日に備えるんだ」

ゼノスは無言で、その場を立ち去った。
晶は俯いたまま、拳を強く握りしめる。

誰もいない場所で、ただ悔しくてその場で涙した。
親友を侮辱され、無様にも負けた。
その現実を、認めたくなかった――

アヴェンジャー　？（後書き）

拍手にてフリーアイゼンがどうやって空飛んでいるんだろう的なコメントがあったので、この場で補足させていただきます。（描写の仕方も悪く、飛んでいることに気づかなかった方も多いかと思われますが……）

まずはロケットの打ち上げのように、莫大なエネルギーを噴射させて艦全体を浮かせます。
その時に動力源であるエターナルブライトが、特殊なフィールドを展開します。
フィールドが展開されている間、上にある物体を上昇させる力の向きが発生し
結果的に巨体な戦艦を浮かせることが出来ます。

また、力場の大きさによって高度の調整が可能で、
大きくすれば力が増して戦艦は上昇し、小さくすれば下降します。
下降しすぎると上昇が難しくなり、一度着陸してもう一度打ち上げなおす必要があるため、この作業の担当である航海士は、非常に神経を使う役割となっております。

一応こんな感じの設定にしてあります。
また、拍手での感想ありがとうございました。

第４話　束の間の休息　？

フリーアイゼン内のとある一室。
薄暗い部屋には山のように積んである資料の数々と、最新の情報端末やデータ媒体が乱雑されていた。
電気はつけられておらず、唯一モニターから出力されている映像だけが明かりとなっている。
資料の山に囲まれながら、ゼノスはその映像に釘付けだった。

フリーアイゼンの外部カメラ、ι・ブレードのメインカメラの映像データから、昨日の戦いの様子をじっと観察し続けている。
ι・ブレードには危険察知が備わっているはずなのに、相手のウィッシュは何度か攻撃に成功しているのだ。
昨日、晶は戦意を喪失しているように見えたが……始めはかつてのクラスメイトとの思わぬ再会にショックを受けていると思っていた。
だが、映像を確認すると……それ以外の理由が確実に存在していることがわかる。
この映像が、全てを物語っていた。

……ここまで一方的に押されてしまっては、あの晶の事だ。
かつて落ちこぼれだった自分を引きずり、当時のトラウマを蘇らせてしまうことも考えられる。
しかもその相手は、学園内で成績トップを誇っていたというのだから。

はっきり言えば、ウィッシュ単機でι・ブレードを相手にするのはゼノスでさえも厳しい。
正直ここまで戦えるのは相当熟練したパイロットか、文字通り天才

のどちらかしか有り得ないだろう。
だが、おかげでι・ブレードの持つ危険察知の『制約』が存在することが判明した。
その制約を明確にする為に、ゼノスは一人で何度も何度も映像を見直している最中だったのだ。

「ゼノス―、こんなところにいたんですかー？」

「……用がないなら帰れ、今はお前の相手をしている暇はない」

ふと、シラナギの声を聞きとるとゼノスは間髪入れずにそう返す。

「あーひどいですっ！　私が暇だからとりあえずゼノスにかまってほしいだとか、そんなこと考えてると思ったんですかー？　違います、断じてっ！　何故ならば晶くんが助けを求めているからなのでーすっ！」

「要は晶に追い出されてきたんだな」

「はいー、正解です……彼、凄く元気なくなってましたよ」

ゼノスに図星をつかれると、シラナギは声のトーンを落としてそう呟く。
大方、いつものテンションで行ったら追い出されたんだろう。
晶がシラナギを追い出す様子が、ゼノスの頭の中では自然とイメージできた。

「ってことで、助けてくださいっ！」

「お前が俺に泣き付いてどうすんだ、パイロットのカウンセリング

もお前が担当じゃなかったか？」

キラキラと目を輝かせながら、シラナギは訴えるが冷たくゼノスはそう言い放つ。

「そんな言い方しないでくださいよ、まるで義務でやってるみたいじゃないですか。
私、本当に晶くんのことが心配なんですよ？」

シラナギの声にはいつものような元気の良さがなかった。
どうやら晶に追い出されたのがよほど効いたらしい。
顔を俯かせながら、何処か悲しげな眼をしている。
別に今回が初めてということではない。
以前にもシリアに怒鳴り散らされてゼノスに泣きついてきたことがあったぐらいだ。

「もうすぐメシアの基地に到着するだろ、あそこには多少だが商店街やら娯楽施設が存在する。
気分転換に、晶でも連れて行ったらどうだ？　艦長も休暇を出すと話していただろ」

「ほほー、なるほどっ！　要は白衣の天使である私とのデート権をプレゼントってことですねっ！」

「少しは年を考えろ」

「あーっ！　ダメ、ダメですっ！　年齢は絶対に言っちゃいけないですよっ！」

シラナギは顔を真っ赤にさせながら慌てているが、ゼノスはまるで

見向きもしていない。
話しながらもやはり、映像に映し出されているウィッシュとぃ・ブレードの戦いに着目し続けていた。
いつもなら強引に追い出すが、シラナギといえど落ち込んでいる相手にそんなマネはできない。
だが、声の様子で多少でも元気を取り戻してきたのを感じ取れた。

「そうだ、せっかくだし木葉ちゃんも誘っちゃいましょうっ！　両手に花なんて男の子ならきっと憧れますよっ！
私なんだかメラメラしてきましたね、ここはやはり晶くんに不死鳥の如く復活を遂げてもらいましょうっ！
さー今すぐプランを立てますよーっ！」

すっかり元通りになったシラナギは、例の如くマンガのようなグルグルダッシュで部屋の外へと走り出していった。
相変わらず、嵐のような奴だと、ゼノスはため息をつく。

「相変わらず、マイペースな奴だ」

ゼノスは黙々と、映像の解析を続けた。

真っ白な壁と天井にベッドが一つ。
フリーアイゼンの一室に、殺風景な部屋が存在した。
空き室だった部屋を、晶が私室として使っていたが、家具の類はほとんど置いていない。
あるのはι・ブレードに関する資料と、フリーアイゼン内の地図、そして訓練のスケジュールだ。

昨日の夜の戦いの影響か、午前中の訓練は中止となった。
晶はベッドの上で横になり、呆然と天井を眺めていた。
昨日の戦いを振り返った。
ι・ブレードの危険察知があったというのに、ほぼ一方的にやられてしまった事。
実力の差を見せつけられたことに、ショックを受けていた。
やはり成績トップは嘘ではなかった、本当に成績通りの腕をしていたのだ。
それも、十分実戦で通用するクラスであった。

もし、俊が本当にアヴェンジャーの一員となったのであれば、再びι・ブレードの目の前に現れるだろう。
あんな非道な連中に、ι・ブレードを渡すわけにはいかない。
戦えるのか？　あんな連中と。
圧倒的な実力差は、機体の性能差だけでは埋められない。
今度もまた単機で来るとは限らない、仲間を連れてくる可能性だってあった。

「どうすりゃ、いいんだよ」

コンコン

ふと、控えめなノック音が聞こえた。
シラナギではない、先程強引に入ってきて追い出してきたばかりだ。

「どうぞ」

ガチャリ、と晶の合図と共に木葉が入ってきた。
今はできる限り、独りでいたかったのだが、そうもいかないようだ。

「……昨日、平気だった？」

「……」

晶は何も答えない。
今はできる限り触れないでほしかった。
ただでさえ昨日の出来事を思い出して、こうやって苦しんでいたというのに。

「あのね、晶くん……私、もう少ししたら船から降りないといけないの」

「え？」

晶は思わず声を漏らした。

「晶くんは正式なパイロットになったけれど、私はメシアに保護されているだけだもんね。
いつまでも危ない艦に乗せたままにしてはおけないんだって」

「ど、どうするんだよ、これから？」

「避難地区で引き取られるみたいなの、手続きのほうは全部メシアがしてくれるみたいなんだけど」

「……そう、なのか」

木葉が艦を降りる、あまり考えたことがない事態だった。
冷静に考えれば当然だろう、晶だってパイロットでなければ同様の扱いをされているはず。

「大丈夫だよ、寂しくなんてないんだから。　晶くんがいっぱいいっぱいメシアで活躍してくれることを、応援するからね？」

「あ、ああ……」

笑顔で木葉はそう告げるが、本当は寂しく思っているはずだ。
いや、それだけじゃない。　誰も知らない土地に一人で生活することになるのだから。
たくさんの不安を抱えているはずなのに、どうしてそんなに笑っていられるのか。

「いいのかよ、木葉はそれで。独りは不安じゃないのか？」

「不安じゃないと言ったら、嘘になる。　でも、だからといって私はここに留まれないし、晶くんの邪魔だけはしたくないの」

「邪魔ってなんだよ、俺は……近くにいてくれたほうが嬉しいよ」

「ううん、違うの。　私がワガママを言って、晶くんに迷惑をかけたくないだけだよ。
せっかくパイロットになれたんだもの、一生懸命頑張ってほしいの」

「木葉……」

相変わらず、自分よりも他人を優先したがる。
木葉のいいところでもあり、悪いところでもあった。
今まで当たり前のように二人は近くにいた。
少し前までは、竜彦だってそこにいたというのに。
あの襲撃で、大きく日常が変化してしまった。
このままでは、木葉は本当に不幸になってしまうんじゃないか。
いや、既にもう不幸は始まっているのかもしれない。

……最後の竜彦の言葉を、思い出す。
木葉を守ってやれ、と。
それはE．B．Bやアヴェンジャーから、木葉の身を守れという意味ではない。
純粋に、木葉の助けにやってやれという、意味も含まれていた。
だが、現実はどうか。
晶は何一つ、木葉の力になれなかった。
何も言葉をかけてやれずに、木葉が決めたことにただ頷くだけ。

「ごめんね、大変な時にこんな話しちゃって。私、もう部屋に戻るね」

「あ……いや、気に……しないでくれ」

木葉は、とても寂しそうな表情をしていた。
何か励ましの言葉をかけたいが、何も言葉が浮かばない。
何を言っても、笑顔で誤魔化されそうな気がした。
一言も告げることないまま、木葉は静かに部屋を立ち去った。
晶は歯を食いしばり、拳を強く握りしめる。

「……竜彦、悪い」

親友との約束を果てそうにない。

ただ、悔しさを抱きながら晶はその場で横になるだけだった。

格納庫では、整備班が数人がかりでι・ブレードのチェックを行っていた。

昨夜の戦いで受けた傷は大して大きいものではなく、異常な高度を誇る装甲に驚かされている。

昨日の戦闘については、シリアもデータを確認していた。

危険察知が発動しているにも関わらず、ιがダメージを負ってしまっていた。

晶が危険察知を過信していたといえど、万が一ιに故障があった可能性もある。

その為、シリアは格納庫へと足を運んで様子を、退屈そうに伺っていた。

「で、どうなんだよエイト。　ι・ブレードどっか故障してっか？」

「わかるわけないだろ、ιシステムの設計はブラックボックスだし俺らで解析できるもんじゃねぇさ。
少なくとも外傷はなく、システムに異常がないぐらいしか判断できねぇさ」

頭にバンダナを巻いた作業服の緑髪の男が、シリアにそう告げた。
彼はフリーアイゼンの整備班チーフを務める『エイト・クリスト』だ。
フリーアイゼン内の全４機のＨＡを整備している。

一つはι・ブレードに二つ目はゼノフラム、三つ目はイエローウィッシュに四つ目はレッドウィッシュだ。
ウィッシュに関しては整備が比較的に楽だが、ι・ブレードやゼノフラムはそうもいかない。
特にゼノフラムは複雑な設計構造であり、メンテナンス性が非常に悪く整備にはものすごく時間がかかる。
今はパーツの関係上、修理が行えないため、整備がされてない状態ではあった。

「役立たない奴だなー、ちゃんと解析しろよ」

「あんだとぉ？　テメェも少しは整備手伝いやがれっ！　ただでさえこっちは人手不足で参ってんだっ！」

「嫌だね、アタシはめんどくさいのは嫌いさ」

「ったくよー……もうじき可変機の新型だって支給されるかもしれねぇんだぞ。

そしたらこっちの仕事が更に増えちまうぜ……」

ガクリ、と頭を垂れ下げながらエイトはシリアに愚痴った。

「新型だって？　どうしてアタシ達の部隊に支給されるのさ？」

「細かい話はしらん、多分試験機のテストをしてほしいんだろ。
ったくよ、ι・ブレード保護の件と言い
俺達を何でも屋だと勘違いしやがる奴らがいるからな」

「へぇ……パイロット決まってんのか？」

新型と聞き、シリアは思わず顔をにやけさせた。

「そこまで聞いてねーさ、ただ機体だけよこしてもパイロットはたりねーしなぁ」

「いいね、もし情報が確定したらアタシに教えてくれよ」

「あ？　なんでだよ？」

「新型の可変機っつったら、飛行可能なんだろ？　アタシね、ＨＡで空飛んでみたいって思ってたのさ。
ワクワクしてきたなー、なぁエイトからもアタシを勧めてくれよー」

「夢みてんじゃねぇよガキ」

「け、つまんねー男だな」

シリアは残念そうな表情を見せる。

もし、新型支給の話が本当であれば是非乗ってみたいと願っていた。
可変機とは、状況に応じて機体を変形させて陸と空の両方に特化した戦いを実現しようとしたＨＡの構想だ。
始めは空のＥ．Ｂ．Ｂに関してはＨＡは射撃で応戦するしか対応手段がなく、残りは戦艦での砲撃でカバーし続けていた。
飛行可能なＨＡが開発されれば、Ｅ．Ｂ．Ｂ退治の効率化も図られて最近では注目されている技術だという。
何よりもシリアはＨＡが空を飛ぶことにロマンを感じていた。

「ま、ｉについてはよろしく頼むよな」

「ああ、任せとけ。　俺を誰だと思ってやがんだ」

「天才機械オタクだろ？」

「機械オタク言うなっ！」

「冗談冗談、んじゃさっきの話頼むだぞー」

「ヘイヘイ、どーせ話が来るころにはパイロット決まってるだろうけどなっ！」

シリアはご新型に夢を見ながら格納庫を後にするのだった。

ブリッジルーム。
砂漠地帯を向けて、間もなく目的地であるメシアの基地が目前に迫っていた。
モニターからも施設の姿が見えてきているほどだ。

「いやっほぅっ！　久々にのんびりできるぜぇっ！」

「ライル、まだ勤務中だぞ」

「細かい事気にすんなって、今回は艦長からもちゃーんと休暇が出されんだからよぉ」

ライルは大きく伸びをしながら、久々に訪れる休暇に胸を躍らせていた。
フリーアイゼン部隊は、ここのところ仕事が立て続けに発生しており、数か月ほど休む暇もなく航海を続けていたのだ。
艦内のクルーは疲労を見せていて、補給ついでに休暇を取らせたのは艦長の正しい判断と思われる。

「休暇が出ると言えど補給作業には人員が必要ですからね、ライルにはしっかりと手伝ってもらいますよ」

「おいおいそりゃねーぜ、ヤヨイさんよぉ……」

後ろから冷たく言い放つヤヨイの言葉に、ライルは愕然とした。

「いいじゃないですか、みんなでやればすぐ終わりますよ」
「お前も手伝うんだよな？」
「私には別の仕事がありますので、それに力仕事は男の人のほうが向いてますから」
「ケッ、都合のいい時だけ男使いやがってよー」
口をすぼめながら、ライルはぶつぶつを文句を垂れた。
「そう言うな、我が部隊も人員不足だからな」
「わかったわかった、やればいいんだろ」
せっかくの休暇だというのに、重労働が待っていると考えるとやはり納得がいかない。
しぶしぶ、ライルは了解するだけだった。
「あれ？　艦長どこいってんだ？」
「一度私室へ戻っているようですが」
「おいおい、艦長すっかり休暇モードかよぉぉ……そりゃねーぜ」
「艦長だって多忙な身だ、むしろあの人こそ休ませるべきだろう」
「そりゃ、そーだけどよ」
文句を垂れながらも、リューテの言うことは事実だ。

人手不足のこの艦で、艦長は様々な仕事を全て一人でこなしていた。艦が着艦している間も、他所からの通信でやり取りを行ったり、書類を片づけたりと仕事漬けである様子を何度も見ている。

「そろそろ着陸準備を進めてください、私は基地内の者と連絡を取ります」

「了解、これよりフィールドの調整に入る」

「ドカンッとミスったりすんじゃねーぞ」

「お前とは違うさ」

「チッ、おもしろくねぇ奴だ」

フリーアイゼンは、間もなくメシアの基地に向けて着陸準備を進めるのだった。

束の間の休息　？

フリーアイゼン内に存在する艦長室。
一応私室ではあるが、大半が作業場として使用されていた。
仕事が山積みとなった場合は、この部屋に籠りっきりで作業することも多い。
今回もまた、ι・ブレードに関する報告資料を艦長自らが作成していた。

ι・ブレードの回収任務が指示されたのは、数週間ほど前だ。
優秀な遊撃部隊として名高いフリーアイゼンに、ι・ブレード回収の指示が上層部より出された。
しかし、フリーアイゼンの部隊内にι・ブレードを知る者はいなかった。
艦長クラスでさえも、その名については初めて聞かされるほどだ。
そこまで秘密裏に開発されていたＨＡが、何故一般的な教育施設に眠らされていたのか。

そして、アヴェンジャーはどうやってι・ブレードの存在を知ったのか。
謎は深まるばかりだが、今はこれからもι・ブレードを狙ってくるであろうアヴェンジャーの対策は必須だ。
いつか大規模な戦闘に発展することも十分あり得る。
アヴェンジャーは全世界で、もはやテロ行為としか思えないほど非道な行為を行い続けた。
特に今回のＥ．Ｂ．Ｂを襲撃に利用したアヴェンジャーの手口は、あまりにも衝撃的過ぎた。
彼らとの戦いは、避けることはできないだろう。

ピピピピピッ

突如、静かな部屋に電子音が響き渡る。
どうやら、外部からの通信のようだ。

「……私だ」

『久しいな、松木君』

「失礼、何方だろうか？」

『私だよ、わからないかね？』

艦長はディスプレイを確認すると、そこにはシルエットが移されているだけで相手の外見は確認できなかった。
しかし、声自体には聞き覚えがある。

「……アッシュベルか」

『ご名答、いかにも私が『アッシュベル・ランダー』だ』

アッシュベル・ランダー。
それは全世界に向けてエターナルブライトの存在を公にした世界一有名な科学者だ。
彼が発表するエターナルブライトの研究成果は、実に耳を疑いたくなるような内容だった。

『私は名も無き無人島で不思議な鉱石を発見した。　その鉱石には未知なるエネルギーが含まれている。

それは人類に新たな可能性を示すものだ。　たった少しのかけらから生み出されるエネルギーは莫大なものだ、次世代のエネルギーとして成り立つのは間違いない。
だが、このエネルギーはただのエネルギーではない……まさに、人類に輝かしい未来を約束させる力を持つのだ。

鉱石に含まれるエネルギーは、何と生命体に異常な治癒能力を与えることのだ。　頭が砕かれようと、足が切断されようと……体を元に戻す力。
それだけではない、今まで不治の病と呼ばれた病気でさえも、最初から健康体だったかのように完治させてしまうのだ。

私はこの鉱石の力を、是非人類に役立てたいと考えている。　しかし、使い方を誤れば恐ろしい鉱石として化けることも事実、場合によっては『不老不死』も夢ではないのだ。
私は世界の良心を信じている、人類はこの鉱石により輝かしい未来を手にする事であろうと。

まさに、人類の為に『永遠に輝き続ける』だろうと、信じているっ！
人類よ、今こそ進化の時だっ！　我々は、『エターナルブライト』により、革新を迎える時がやってきたのだっ！』

当時の者なら、誰でも印象に残る演説だった。
常人であれば笑い者にされてもおかしくはない内容だ。
初めは、誰もが信じなかった。
そんな夢のような鉱石が、存在するはずがないと。

だが、エターナルブライトが実在することが証明されてから、世界は大きく変わってしまった。
それは、アッシュベルが望んだ世界の形ではなく……アッシュベル

が想定した『最悪』の形となってしまったのだ。
今ではアッシュベルは、メシアの一員としてＨＡ開発の研究を行っているという。
そんな人物から、何故フリーアイゼンの艦長である『ゲン・マツキ』に通信が入ったのだろうか？

「私に何の用だ」

『うむ、君達の部隊が『ι・ブレード』を預かっていると聞いてね。是非、ιの性能について聞かせてもらおうと思ったのだが』

「やはりιか、その研究熱心なところは相変わらずだな。報告資料なら今作成している、時期にメシア上層部から展開されろうだろう」

『それを承知の上だ、私は今すぐに知りたいのだよ。『ι』の名を使うＨＡが気になって仕方がないのだ……これも研究者の性なのかね』

「あくまでも機密事項だ、私自ら通信で報告することはできんよ」

『残念だよ……君に頼めばすぐにでも知れると思ったのだがね』

メシアの最先端技術をすべて掌握しているアッシュベルでさえも、ιについて知らされていないことには驚かされた。
あのＨＡは、やはり『未乃　健三』が独自で開発を続けていたのは事実らしい。
しかし、メシアの上層部だけがその正体を握ったいたと考えられる。
ますます、謎が深まるばかりだった。

『ところで君は……今の世界に、満足しているかね？』

「……私はかつての平和な世界を取り戻すために戦っているさ」

『それは私も同感だ、どっかの阿呆共が勝手なことをしてくれたおかげで『Ｅ．Ｂ．Ｂ』が生まれてしまったのだからな。
だが、私はある意味この世界も悪くないと思っているのだよ、どういう意味かわかるかね？』

「私は凡人でね、天才の言うことは理解できないさ」

『うむ、それもまた正しい回答と言えるだろう。　私は、これを機に人類は『新たな進化』を遂げると考えているのだよ。
確かにＥ．Ｂ．Ｂによって失われた命はあまりにも多すぎた、悲しいことに……。
しかし、何も悲観する事ばかりではない。　そのおかげで、人類は『ＨＡ』という新たな力を手にしたのだから。
これもある意味では、『進化』をしたと言えるだろう？　だから私は、人類がこの試練を乗り越えた時に……新たな進化を遂げると考えているのだよ』

小難しいことを、アッシュベルは長々と語っていた。
傍から見れば不謹慎な言葉としか思えないほどの極論だ。
しかし、昔からアッシュベルと馴染みが深い艦長にとっては、この手の話は聞きなれている。
昔から『進化』という言葉に拘っていた男だ。
こんな事で気分を害してはキリがない。

「私は進化よりも、幸せを望むがね」

『ふむ、では進化が必ずしも幸せに繋がることがないと？　確かに進化の先に人類の不死が確立されてしまえば、倫理的概念そのものが破壊されてしまう可能性もあるだろう。
しかし、逆に言えば新たな概念が生まれるということにもなるのだよ。　つまり、今の我々から不幸せと思える事項が、進化の先では幸せになるのかもしれない、ということだ』

相変わらず、論理的にアッシュベルは回答を返す。
しかし、艦長はその言葉を聞いてニヤけた。

「ハハッ、その鬱陶しい口調を聞くのも本当久しぶりだな。　元気そうで安心したぞ、アッシュベル」

『始めは私に気づかなかった癖によく言う、しかし君も相変わらずだな松木君。
さて、残念ではあるが私は新型ＨＡの開発に追われているのでね、失礼させてもらうとしよう』

アッシュベルはそう言い残すと、即座に通信を切ってしまった。
艦長は、アッシュベルとは昔からの付き合いだった。
初めて逢ったのは、あの衝撃的な演説を行った後だ。
一方的に世界から批難を浴び続けていたアッシュベルは、いつしか日陰者と成り果てていた。

エターナルブライトの存在が公になり、初めて研究施設へ足を運んだ時、アッシュベルは偶然そこにいた。
かつて天才科学者と名高かったが、当時の彼は世間からのはみ出し者と化かしていた。
そんな有名な人物に、興味を持って声をかけたのだ。

それがきっかけとなり、艦長はアッシュベルに絡まれるようになった。
始めははっきり言って迷惑だった、わけのわからない主張を繰り返され続けていたのだから。
顔を合わせる度に、『世界』がどうこうや『人類に進化』等熱心に話す人物は、はっきり言えば危ない人物以外何でもない。
だが、彼に毒されたのかわからないが、次第にその話に興味を持ち、純粋に面白いと感じてきてしまったのだ。
それ以降、息がすっかり合ってしまって今では古き友人の一人となっていたのだ。

「少し、気が楽になったな」

様々な問題を抱えていた艦長は、久しき友人との再会に少しだけ気が楽になった。

正午を過ぎた頃、晶は訓練を受ける為にフリーアイゼン内を移動していた。
気が付けば、フリーアイゼンは何処かの施設に着艦しているようだ。
やたらと廊下ですれ違う人が多いのも、それが理由だろうか。

あまり気分は乗らないが、訓練を受けるのはパイロットの義務。
昨日の事は、訓練中の時だけでも忘れるべきだ。
晶はそう意気込んで、訓練所へと向かっていた。

「あー、やっと見つけましたよ晶くんっ！」

「げ……」

出来れば逢いたくない人物と遭遇してしまった。
今まさに、遠くから大きく手を振りながらピョンピョンと飛び上がっているシラナギの姿が見える。
せっかく午前中は切り抜けたというのに。
流石に訓練があると言えば見逃してもらえるだろう。

「さあー、レッツゴーですっ！」

例の如く、シラナギは強引に両手で晶の手を握る。
いつものダッシュで、晶を強引に連れ出そうとした。

「ちょ、ちょっとシラナギさんっ！」

「何ですか？　これから晶くんは私とお出かけに行ってもらうんです、木葉ちゃんも一緒ですよ？」

「い、いや俺訓練があるんで――」

「えーっ！？　せっかくの休めるチャンスなのに訓練ですかーっ！？　ダメですよ、ちゃんと休んでくださいっ！
シリアがやるっていったんですか？　私、文句言ってきますっ！」

「いや、あの……その」

「大丈夫です、パイロットの健康管理は私の仕事ですっ！　過度な訓練は絶対に許しませんからっ！！」

この様子だと話を聞いてもらえそうもない。
むしろ、このまま強引に連れてかれたらシリアやゼノスに怒られるんじゃないかという不安が生まれた。
相変わらずの強引っぷりに、晶は思わずため息をついた。

「じゃ、一緒に行きましょうっ！　シリアをブッ飛ばす勢いでっ！
あ、もちろん晶くんがですよ？」

無理、絶対に返り討ちにあう。
と、心の中で即答するが晶は強引にシラナギに連れて行かれるのであった。
手を引かれながら、あっという間に訓練所までたどり着く。

一応、ここに連れてこられたのは救いか。
後はシリアがちゃんと止めてくれるのを願おう。
訓練所では、既にシリアが待機をしていた。
何処か浮かれた表情を見せている、何かいい事でもあったのだろうか。

「シリア、聞きましたよ。　皆休んでる時に訓練なんてひどいじゃないですか、晶くんは私とデートの約束があったんですよっ！？」

「へ？」

突如シラナギから出た『デート』という単語に、思わず晶は声をあ

げてしまう。
いや、そんな話初耳だ。
いつデートの約束をしたのかさっぱり記憶にない。

「おお？　なんだよ、いつの間にかお前らそんな関係だったのか？」

「はいそうで――」

「ち、違いますからっ！　俺、ちゃんと訓練しますってっ！」

これ以上話をややこしくされてはたまらない。
晶は必死になって間に割り込んで、シリアにそう主張した。

「いいーんだよ、そういうことならアタシは目を瞑ってやるさ。だーいじょうぶ、シラナギは家事も大得意だしいいお嫁さんになるぜ？」

「そ、そういう問題じゃないですって！」

なんでこの人は真に受けているんだ、と晶はため息をつく。

「ってことで、今日は中止で遊びましょうっ！　さあ、こうしてはいられませんよっ！　時間は待ってくれないのですからっ！」

「ちょ、ちょっと――」

「さあ、次は木葉ちゃん探しますよーっ！」

「あの、だから訓練――」

晶の主張も虚しく、再びシラナギに連れて行かれるのであった。

午後を迎えても、ゼノスは昼も取らずに部屋へ籠りっきりだった。
同じ映像を何度も流し、ただ解析を続けている。
しかし、疲れを全く見せていなかった。
昔、ゼノフラムの設計に関わっていたこともあり、この手の作業には慣れている。

『ゼノス、応答しろ』

「……艦長か、どうした」

部屋内に直接、通信が入った。

『昨日の戦闘データの解析を続けていると聞いた、何か分かったことはあるか？』

「ιシステムには制約が存在する、詳しくは現在解析中だ」

『すまないな、お前には世話になりっぱなしだ』

「それはお互い様だ、それに解析は個人的に興味がわいただけだ。
別にアンタのためじゃない」

『未乃　晶の様子は、どうだ』

「不安定な状態にあるとシラナギから聞いている」

午前中の話を聞く限りでは、晶はやはり昨日の事を引きずっているように思える。
艦長もそのことを察していたのだろう。

『そうか……』

「アンタが心配する事ないさ、シラナギが何とかしてくれるだろう」

『お前自身はどうだ、少しは休んだらどうだ』

「まさかアンタに言われるとはな。　俺の心配より自分の心配をしろ」

『……無茶だけは、するなよ』

通信は、そこで途切れた。
自分が多忙な身でもあるにも関わらず、クルーへの考慮は忘れない。
だが、クルーの者にとっては休暇をしっかりとってほしいと思う者がほとんどだ。
少しでも艦長の負荷を抑えるためにも、最近では作業を分担してきてはいるが、まだまだ解決には程遠い。

「アンタこそ、無茶しすぎてるんじゃないのか」

通信は繋がっていないが、ゼノスは静かに呟いた。

メシア基地の近くに存在する街。
そこには商店街が作られており、人でかなり賑わっていた。
様々な店が並べられており、とても基地の近くにあるような街とは思えない。
シェルターのない街は、通常ここまで活気に溢れておらず、人気も少ないのだ。
しかし、緊急時には全体に警報が鳴らされて地下シェルターに逃げ込むことができる。
おまけに基地が近くにあるのでメシアの一員がE．B．B討伐をすぐに行ってくれる。
そういった理由から、安全性が比較的に高い場所であるのは間違いない。

そんな街中を、シリアは一人ぶらついていた。

「ったくよー、物資運びなんて手伝ってられっかってーの」

艦の外へ出ようとしたときに、クルー全員が物資運びを手伝ってい

る光景を目にしたが
シリアはこっそりと逃げ出してきたようだ。

「しかしすっげー活気だなおい、やっぱメシアが近くにいると違うもんだなー」

溢れかえる人と、店の数々を並べながら独り言を呟いているととある赤髪の少女と目があった。
髪を赤いリボンで束ねており、綺麗な青い瞳の少女。
少女は、ニコニコとしながらシリアに寄って来る。
何処からどう見ても普通の少女ではあるか、何処か気味の悪さが漂っていた。

「ねぇねぇ、お姉さんお姉さん。　もしかして、パイロット？」

「な、なんだよ。　よくわかったな、お前」

突如笑顔でそう尋ねられると、シリアは顔を引きつかせながらそう答える。
何故、パイロットだとわかったのだろうか。

「アハハ、腕すっごく太い。　鍛えてるんだね、もしかして、強い？」

「ん、まぁね。　腕になら自信あるよ」

「アッハッハッ、じゃあ強かったら愛してあげようか？」

「は？」

シリアは思わず顔をポカーンとさせた。
いきなり何を言い出すのだろうか、この少女は。

「アハハハハ、楽しみだね。　メシアの人？　もしかしてフリーアイゼンの人？」

何者なのだろうか、この少女は。
一見純粋にメシアのパイロットに質問をしてきているように見えるが、何かが違う。
そもそも、どうしてフリーアイゼンの名を知っているのだろうか。
別にメシアの主力艦の名前ぐらい一般人が知っていてもおかしくはないのだが、何かが引っかかる。

「アンタ、何者だ？」

「私？　フィミア・アミネス。　私もね、パイロットなの。　ウヒヒ、お姉さんと一緒だよ」

「パイロットだって？　アンタが？」

「バカにした？　今、私をバカにした？　そんな事しちゃうと、愛してあげないよ」

「何言ってんだアンタ？」

随分と変な奴に絡まれてしまった。
適当なタイミングで繰り上げるべきか、とシリアはタイミングを計っていた。

「ねぇ、好きって言って。　私も、大好きって返してあげるから」

「なんでアンタみたいなわけわからない奴に言わなきゃいけないんだよ」

「だって強いんでしょ？　私も強い、お姉さんも強い。　強い人、大好き。　もう、殺しちゃいたいぐらい愛してあげたいの」

その時、シリアの背筋にゾクリと寒気が走る。
今、フィミアと名乗る少女から物凄い殺気を感じ取ったからだ。
冗談を言っていない……一体、何者なのだろうか？

「わかるよ、戦わなくても。　お姉さん絶対に強いもの、決めた……次は貴方を愛してあげるね。
今度、ＨＡ同士で逢おうね、お姉さんっ！」

フィミアは軽くおじぎをすると、笑顔でその場を去って行った。

「な……何なのさ、あの子」

何処か異質な雰囲気を感じ取ったが、まさにその通りだった。
あの少女は、危険な人物であるのは間違いない。

「こりゃ、厄介なのに絡まれちゃったな」

頭を掻きながら、物資の手伝いをサボッて外に出てきてしまったことを後悔する。

「ま、気にしなくていいか。　世の中にはいろんな人がいるってことで」

どーせ名前も所属もバレてはいない、もう二度と出会うこともないだろう。
シリアはそう願って、大人しく艦へと戻っていくのだった。

束の間の休息　？

「さあ、買い物の定番と言えばお洋服ですよっ！　まずはバッチリとオシャレをしてフリーアイゼンのアイドルを目指しましょうっ！」

商店街に存在する洋服店に、晶は強引に連れてこられていた。
木葉も同様に引っ張られてきたが、午前中の件もあってかあまり元気がない。
やはり口では大丈夫だと言っていても、不安があるのだろう。
だが、晶は相変わらずどんな言葉をかけてあげればいいのかと戸惑うばかりで、結局一言も会話を交わせずにいた。

「ボサッとしてちゃダメですよーはい、まずはこれを試着してくださいっ！」

シラナギが片っ端から何着もの服を抱えて、ボーッと立っていた木葉を引っ張っていった。
相変わらずの強引っぷりだ、本当にリューテが言っていたように癒しになるのかと疑問に感じる。
周りを見渡す限り、訪れている客層はほとんどが女性。
家族連れ等はそんなにいないようだ。
このような平和な光景を見ていると、襲撃前の故郷の事を思い出してしまう。
いつも見慣れているはずの光景なのに、どこか懐かしさを感じた。

「お兄さん、独り？」

「ん？」

ふと、晶が携帯に手をかけようとしたとき、赤髪の少女から声をかけられた。
面識はない、フリーアイゼンのクルーにはこのような子はいなかったはず。

「ちょっと、見てほしいの」

「へ？」

晶が返事をする暇もなく、少女は晶の腕を引っ張り出す。
小さい体の癖にやたらと引っ張る力だけはあった。

「これ見て、これ」

「な、なんだよ……」

わけもわからず連れてこられると、少女は二着の服を手にしている。
両手で見やすいように、持ち上げてニコニコとしていた。
一体何だというのか？

「どっちが、いい？」

「え、選べって言ってるのか？」

「アハハッ、そうだよ」

突然連れてこられたと思えば、まさか服を選ばされることになるとは。
晶は思わずため息をついてしまった。

「なんで俺に選ばせるんだよ」

「ウヒヒ……実はね、好きな人がいるの。　とってもとっても大好きな人」

奇妙な笑い方をしながら、少女はそう言った。
どうやら、服選びに付き合わされてしまったようだ。
好きな子ができたから気を引こうと一生懸命なのだろう。
これぞ青春というものか。

しかし、だからといって見知らぬ男に服を選ばさせるのはどういうことなのだろうか。
悩むぐらいだったら身内でも連れてくれば良かっただろうに。
だが、断れそうにもない空気だったので晶は仕方なく服を選んだ。

「そっちの、赤いのがいいんじゃないか？」

晶は少女が持っていた真っ赤なドレスを指さした。
この子なら、赤はきっと狙うだろうという直感でしかないが。

「お兄さんいいね、私と趣味が合ってる。　私もこっちがいいと思ってた、アッハッハッハッハッハッ！」

少女は、狂ったかのように大声で笑いだす。
晶は思わず顔を引きつかせてしまった。

「ありがとうお兄さん、愛してあげられないけどちょっとだけ好きでいてあげる。　また、戦場で逢おうね」

「戦場……？」

少女が口にした『戦場』という単語で、晶は表情を一変させる。
既に少女の姿はなかった。

メシアの関係者とも思えない。
一体何者だったのか、晶は気味の悪さを感じた。

「ダメですよー晶くん、他の女の子をナンパするなんてっ！」

「え？　ナ、ナンパ？」

背後を振り返ると、シラナギが頬を膨らませていた。
どうやら一部始終を見られてしまったらしい。

「あれ、違いますよ。　あっちから勝手に――」

「言い訳は駄目です、男らしくありませんっ。　ということで、大人しくこっちきてくださいっ！」

またズルズルとシラナギに引っ張られていく。
今日はやたらと引っ張られる回数が多い。　とはいっても、晶を引っ張っていたのはシラナギとさっきの少女だけだが。

「じゃじゃーん、見てください一発目から素晴らしい掘り出し物ですよっ！！」

晶が連れてこられた先には、木葉の姿があった。
真っ白なワンピースに麦わら帽子、束ねていた髪をほどいている夏を感じさせる服装。
木葉の白い肌と見事にマッチしていて、似合っていた。

恥ずかしそうに頬を紅潮させている姿を見ると、晶まで気恥ずかしさを覚える。
髪型と服装を変えただけで、ここまで変わってしまう者なのだろうか。
晶はいつも違う雰囲気の木葉に驚かされた。

「に、似合ってるかな」

「あ、ああ……似合ってる、だろ」

「晶くん、ここは正面からはっきりと言ってあげないとダメですよっ！　男の子なら堂々とですっ！」

背後からドンッと押されると、晶は木葉の前へと立たされた。
そうは言われても、一体何を求めるというのか。
木葉もただ、恥ずかしそうにもじもじとするだけであった。

「に、似合ってるぞ」

「……あ、ありが……とう」

改めて言い直すと、木葉は顔を真っ赤にさせてそう呟いた。
その仕草を見て、純粋にかわいいと思ってしまう。
ただ外見を変えただけでここまで木葉を意識してしまうとは思ってもいなかった。

「それじゃ、これはお買い上げですね。　あ、大丈夫です私のお金で買ってあげますからっ！
さあ次はボーリングでも楽しんじゃいましょう、その後は喫茶店で

おいしいデザートを平らげるんですっ！」

目をキラキラとさせながら、シラナギはそう言った。

少しだけモヤモヤしていた気分が晴れてはきたが、さっきの女の子が気になってしまう。

彼女の言った『戦場』とは、何を示しているのか。

……何か、嫌な予感がする。

「ほら、ボサッとしないでください。　時間は待ってくれないんですからっ！」

「う、うわちょっと――」

またしてもシラナギに掴まれた晶と木葉は、そのまま強引に外へと連れ出されていくのだった。

「さあ、仕上げはこのジャンボチョコレートイチゴデラックスパフェを平らげて笑顔になりましょうねっ！」

ボーリングを楽しんだ後、晶と木葉は喫茶店へと連れてかれた。

目の前には、目線と同じぐらいを位置するサイズのとてつもなく巨大なパフェがあった。
器が大きい上にイチゴが１０個ぐらい山積みにされており、これを食べるだけでも一食分に値すると思えるほどだ。

「しっかし晶くん、ものすごくボーリング下手だったんですねー。
木葉ちゃんだって凄くスコアよかったのに」

「や、やったことないんだよ……そんなに」

晶はシミュレーターの訓練や勉強に時間を費やしていた為、友達と外で遊ぶといった機会はあまりなかった。
ボーリングなんて数える程しか行ったことがない。

「駄目ですよー、木葉ちゃんの前で恥かいちゃうなんて幻滅しちゃいます。　男の子はもっと逞しくあるべきですっ！」

「そ、そうですね、はぁ」

ビシッとスプーンを突きつけられて、晶はため息をつく。
やはり今日は無理にでも訓練をするべきだったと、後悔するだけだ。
木葉はボーリング中はそこそこ楽しそうにしていたものの、やはり元気がない。
いつもと違って、悲しそうな表情を浮かべているだけだった。

「そうだ、晶くん。　聞きました？　木葉ちゃん、もうすぐ艦から降りることになっちゃうみたいなんですよ」

晶はピタリ、と固まった。
ここでその話をするかこの人は、と心の中で叫んだ。

チラリと、木葉に目線をやると更に辛そうな表情を見せてる。

「え、ええ、聞いてます……けど」

「寂しいですよねー……せっかく幼馴染同士生き残れたというのに、こんな形で離れ離れになってしまうのは。
避難地区には同じ境遇の人は多いとは言えど、やっぱりその年で一人というのはまだまだ不安があると思うんですよ」

シラナギの言葉に反応して、木葉は顔を上げた。
何故か、晶の事をジッと見つめている。
何か伝えたいことでもあるのだろうか。

「……俺だって木葉とは一緒にいたいですよ、でもワガママなんて言ってられませんから」

「うんうん、流石は晶くん。　やっぱり木葉ちゃんとは離れたくないですよねー？」

「そ、そりゃ木葉にはお世話になって……いるし」

本人の目の前では言いづらい事ではあるが、やはり本音としては木葉と離れ離れになりたくないという思いはある。
あの襲撃以来、日常はすっかりと変わってしまったのだが、木葉だけは唯一晶の日常を保ってくれていた。
それすらもなくなってしまうのは、とても悲しい事だった。

「よかったですねー木葉ちゃんっ！　やっぱり私が言った通りですよ、晶くんは木葉ちゃんのことしっかり考えているんですっ！」

「へ？」

一体何の事を言っているんだろう、と晶は木葉へと目線を向ける。
すると木葉が慌ただしく立ち上がった。

「ち、ちちち違うのっ！　そ、そんなつもりはなかったの、えっと、その――」

「……な、何の話？」

「木葉ちゃん、ちょっと寂しがってたんですよー。　さっきチラッと私に晶くんが構ってくれないとか言ってたんですからー」

「ち、ちちちち違いますっ！！」

木葉は顔を真っ赤にさせながら否定するが、正直何の話をしているかわからない。
一旦詳しく話を聞いてみると、どうやら午前中に木葉とシラナギが晶について話していたらしい。
その時に木葉が

『晶くんがパイロットに集中する為には、私はいない方がいいんです。
晶くんだってきっと、私が艦内に居続けると迷惑しちゃいます』

とか、そんなことを話していたようだ。
全然違うじゃないか、シラナギさん。　と、心の中で突っ込んだ。

「全く素直じゃないですねーこの二人は。　だったらこうしましょう、木葉ちゃんを正式なクルーの一員にしますっ！」

「へ？」

「え？」

晶と木葉は、ほぼ同時に声をあげた。

一体この人は何を言い出すんだろうか。

「実はヤヨイさんがもう一人補助してくれる人がほしいだとか言っていたんですよー。

木葉ちゃんならきっと優秀なオペレーターさんになってくれるはずです」

「で、でも木葉は――」

「なんなら医療班として私の配下に入ってもらう事だってできます、艦内にはたっくさんの仕事があるんですからっ！

私に任せてくれれば、仕事ぐらいくらでも提供できるんですよ？

こうしちゃいられません、すぐにでも取り掛かりましょうっ！！」

「ま、ままま待ってくださいっ！」

立ち上がって今すぐにでも走り出しそうなシラナギを、晶が強引に止めた。

「そ、そんなことできるんですか？」

「晶くんだってパイロット研修生として採用されてるんですよ、木葉ちゃんもなんとかしてくれるはずですっ！」

それとこれとは話が全く違うんじゃないか、と突っ込みたいが強くは言えない。
それに木葉自身がそれでいいのかもわからない。
彼女は晶と違ってパイロットを目指したりメシアの部隊に入ろうとしていたわけではないのだから。
本当はもっとやりたいことだって、たくさんあるはずなのに。

「……や、やります。　私、頑張りますっ！」

「え？　こ、木葉？」

木葉の意外な反応に、晶は思わず耳を疑った。
あの木葉がここまで、力強く返事をしたことは聞いたことがない。
本当に、それでいいのだろうか。

「フフフ、やはりそうではないといけませんね。　大丈夫です、私にすべて任せてくれれば強引にでも艦長に『うん』と言わせますからっ！」

「そ、それはそれで問題があるような……」

相変わらず思い切りの強い人だ、と呆れはするが今回ばかりは心強く感じる。
なんだかんだで、パイロットとして認められたのはシラナギの強引さがあってのことだ。
ひょっとしたら、木葉がフリーアイゼン内で採用されるのも夢ではないとさえ思ってしまう。

「さあさあ木葉ちゃん、今日から忙しくなりますよー。　次の避難地までに何としてでも採用してもらわなければなりませんからねっ

！」

「は、はいっ！　が、頑張りますっ！」

すっかり木葉もやる気になってしまっている。

気が付けば、木葉には自然と笑っていた。

「……が、頑張れよ。　こ、木葉」

「う、うん。　頑張る、よ」

晶が一言告げると、木葉も短くそう返す。

たった二言ぐらいではあるが、お互いの意思確認はできた。

「それじゃ、まずパフェを食べちゃいましょうねっ！」

ちゃっかり、パフェの存在を忘れていないシラナギに思わず呆れてしまう。

先程は無視してまで立ち去ろうとしていたというのに。

その後、３人は楽しく雑談をしながらパフェを平らげるのであった。

話し込んでしまって気が付いたら、日が落ちていた。
すっかり暗くなってしまっており、3人はそのままの足でフリーアイゼンへと戻る。
夕飯はそんなに食べれる気がしない、あれだけのパフェを平らげてしまえば。
しかし明日からの訓練を考えると、やはりちゃんとした食事をとっておきたい。
晶は一人で食堂へと足を運んでいた。

「戻ったか、晶」

「ゼノスさん？」

食堂へ向かう途中、ゼノスとばったり出会った。

「今すぐ格納庫へ来い、ιを発進させろ」

「へ？」

まさかE．B．Bが？
晶はそう思って、形態のレーダーを確認するが何も表示されていない。
それに艦内もそれほど騒がれている様子はなかった。

「行くぞ」

「は、はい」

理由はわからないが、前回のようにレーダーに感知されないE．B．Bの存在もある。

晶は急ぎ足で、格納庫へと向けて走り出した。
格納庫へ着くと、整備が完了しているι・ブレードのコックピットへと向かう。
ゼノスもレッドウィッシュへと乗り込んでいた。
ιシステムを起動させ、準備を整わせてから機体を発進させた。
基地の外には広い砂漠地帯が広がっている。
前も見た光景ではあるが、何度見ても美しいと感じた。

『俺についてこい』

「あ、ああ」

モニター越しから移るレッドウィッシュの姿と、レーダーを確認すると晶はスロットルを押し込む。
ギュンッと加速させて、砂漠の上を移動し続けた。

『ここでいい』

ゼノスの通信音声を確認すると、晶は機体を停止させる。
辺りを見渡しても、そこにはただの砂漠地帯が広がり続けるだけだ。
どこにも敵のようなものは見当たらない。
一体、何を始める気なのだろうか？
すると、レッドウィッシュが両手にライフルを構えてι・ブレードへと向けた。

ズキンッ――
その時、危険察知が発動した。

「え？」

晶は一瞬状況を理解できなかったが、映像の情報を元にライフルの弾を器用に避ける。
更にまた、危険察知が発動した。
わけもわからず、晶は危険察知を元に攻撃を避け続ける。
レッドウィッシュは距離を縮めようと、ιへ向けて突撃してきた。
両手の銃を捨てると、今度は剣を構える。
そして背中に装着させていたキャノン砲を発射させた。

間髪入れずに発動され続けた映像を元に避け続けると
突如、コックピット内が青く点滅した。
前にも見たこの青い光。
嫌な予感がした。

晶は機体を避けさせようとすると、背後にはレッドウィッシュが迫っていた。
容赦なく、剣が振り下ろされるとコックピット内に強い振動が伝わる。
言うまでもなく、機械のアナウンスが機体が損傷したことを告げた。

また、危険察知が発動しなかった。
……相手は俊ではない、ゼノスだというのに。

「……ゼ、ゼノスさんっ！　どういうつもりですかっ！？」

何故、自分にいきなり攻撃を仕掛けてくるのか？
それも手抜きではない、明らかに本気だ。
晶は理解できずに、ただゼノスに向けて力強く叫んだ。

『最後の一撃、見えていたのか？』

「え？」

『見えたのか、と聞いている』

ゼノスは突如、そのようなことを言い出した。
今はお互いに止まっており、仕掛けてくる様子もない。

「いえ、危険察知は作動しませんでした」

『やはりな……俺の推測は正しかったようだ』

「な、何のことですか？」

『ιシステムの制約だ。　最初、俺は間隔を上手く調整しながらお前に仕掛けた。
その時、お前の動きは晶に敵の動きを理解しているかのように動けていた。
だが、最後にはお前の避ける位置を誘導させて……間隔がほぼ開かないように、攻撃を仕掛けた』

「せ、制約……？」

突然攻撃を仕掛けてきたかと思いきや、次にはゼノスはそのようなことを語りだす。
ιシステムの制約……もしや、コックピットの青い光と関係があるのだろうか？

『ιシステムの危険察知には、約1秒の時間が必要とされる。　恐

らくパイロットに伝えるまで、それほどの時間が要するのだろう。
だから、計算中に全く別の危険が身に迫った場合は、それを察知できない。　いや、正確には察知することができないのだろう』

「い、1秒だって？」

ふと、あの時の事を振り返ると、ゼノスの言う通りかもしれない。
危険察知が発動されない時は、決まって映像通りに攻撃を避けた直後……。
コックピットが青い光が灯り、間髪入れずに衝撃が襲い掛かってきたのだから。

『その穴は、どうしてもパイロット自身が埋めなければならない。
ならば、自身の危険察知を身につけろ。　俺の攻撃を予測して、受け止めて見せろ』

「……わかり、ました」

ゼノスが突如、ここへと呼び出した理由を何となく推測できた。
恐らく、体でιシステムの『制約』について叩き込もうとしているのだろう。
シリアではなく、ゼノスが直々に実践向けの訓練プランを用意したのだ。

しかし、ゼノスは明らかに手を抜いていない。
このまま一方的にやられ続けたら、いくら圧倒的な装甲を誇るι・ブレードでも持たない可能性があった。

『いくぞ』

「はいっ！」

晶はレッドウィッシュの動きを観察する、その途端に危険察知が発動した。

映像の通りに、弾を避け続けていると早くもレッドウィッシュが懐へと入り込んだ。

再び危険察知が発動すると、晶はその通りに攻撃を避けようとする。

その瞬間に、コックピットに青い光が灯った。

「どこ、だ――」

ズガンッ！　再度、コックピットに強い振動が伝わった。

早い……早すぎる。

レッドウィッシュは素早く死角へと入り込み、ι・ブレードを斬りつけた。

あまりにも考える時間がなかった。

とてもじゃないが人間が反応できるレベルを超えている。

あんな攻撃を、危険察知なしで受け止めることができるのだろうか？

『制約に気づけば、ιを対処することは容易い。　奴らも恐らく、この制約に気づいてしまえばお前は簡単にやられてしまう。

だが、それはお前がいつまでも『未熟なパイロット』であったの話だ』

「……無理に、決まっているじゃないですか」

『無理は承知だ、だがやって見せろ。　本来ＨＡパイロットは、自身の危険察知のみで戦うものだからな』

「どうせ、俺は……落ちこぼれですから」

晶は愕然として、力なくそう呟く。
結局、ιのような高性能に乗っていても『自身の能力』が足を引っ張ってしまっている。
ゼノスの言葉でまさにそれが、証明されてしまった。

やはり、自分にはパイロットは無理だったのだ。
あの俊という男に、このままでは勝てるはずがない。
無残にも、ιを奪われる結末が待っているだけだ。

『だったら降りるか？　パイロットの夢を、捨てるか？』

「……もし、誰かの足を引っ張るというのなら……降りますよ」

『他人のことはいい、お前自身がどうしたいかを聞いているんだ』

ゼノスの言葉は深く胸に突き刺さる。
昔、竜彦にも似たようなことを言われたことがあった。
いつまでも最下位であったことに嫌気がさして、学校を辞めたいと思ったことも何度かあった。
その時に、晶はいつも木葉や竜彦に迷惑をかけたくない、と口癖のように言っていた。

『お前自身が続ける気が、あるのかどうかだ。　夢を全て投げ出して、逃げ出すのか……少しでも夢に近づくために、努力を続けるのか俺は別にお前が続けるというなら協力はするし、お前をバカにしたりはしない。　それでももう、限界が近いというのなら……俺に言えることは、もうないさ』

その後は結局、学校を辞めずに勉強を続けてシミュレーターも動かし続けた。
あの日から、何一つ成長をしていないのか。

『お前は確かに落ちこぼれだったかもしれん、だが……それがどうした？
いつまでも過去を引きずっていては前へは進めないぞ。　お前には間違いなく、パイロットとしての素質が備わっているんだ。
操縦センスだって悪くない、ただ状況判断能力に欠けているだけだ。
だからお前は、ιを上手く扱えたんだ』

「……でも、俺は負けたんだ。　アイツに――」

『一度の敗北を引きずってどうするんだ、最後に勝てばいいだけの話だ。　あの男は、必ずもう一度お前の前に姿を現す。
見返してやれ、成長したお前を見せつけろ。　そうでもしなければ、ιを守ることもフリーアイゼンを守ることもできん』

「ιを……守る？」

『ιはパイロットであるお前を、危険察知で守ってくれている。
しかし、それにも限界があった。
なら、残りの穴はお前自身でカバーしろ。　お前の父親が開発したHAに、傷をつけたくはないだろう？』

ιを守る。
そのような発想は、晶の頭の中にまるでなかった。
確かに晶は、危険察知によって身を守り続けた。
それは言い換えれば、確かに『ι・ブレード』によって守られ続けていたようなもの。

こんなところでも、守られていたのか。
このままではいけない、パイロットになった以上……『守る立場』になることを望んだはずだ。

「……やります、もう一度来てください。　守って見せますよ、『ι』を」

『いい返事だ、それでこそメシアの一員だ』

ゼノスは機体を大きく後退させる。
晶は両手のスロットルを強く握りしめて、深呼吸をした。

「……悪い、頼りっぱなしだったよな。　俺も、ちゃんとお前を守ってやるから」

その時、コックピット内が赤く灯った。
……本当に、言葉を理解しているように見える。
やはり、ι・ブレードは意思を持っているのだろうか？
レッドウィッシュが、動き出した。

通常通り危険察知が発動され、映像通りに動き出す。
ゼノスが先程口にした言葉を頭に過ぎらせた。

『最後にはお前の避ける位置を誘導させて……間隔がほぼ開かないように、攻撃を仕掛けた』

ならばゼノス自身も、決して動きを読み切れているわけではない。
そうさせるように、晶を動かしたのだ。
見てから反応しようとするのは不可能かもしれない。
だが……こちらも『予測』する事ならできるはずだ。

「やってやるよ……俺だってっ！」

銃撃が終わると、ゼノスは機体を前進させて距離を縮めてくる。
その間にも危険察知は発動された。
映像で出たものが全てではない、映像から相手の動きを更に予測することだってできる。

もっと、危険察知を活用するんだ。
徐々にゼノスが距離を縮めて、ついに接近戦の間合いまで迫りこんだ。
来るならこのタイミングだ……。

ズキンッ！

頭痛が襲い掛かり、危険察知が発動した。
ゼノスが近距離で銃を放つ映像だ。

この時、ゼノスは晶をどう動かそうとする。
銃で相手を避けさせようとしたときに、避けた方向の死角へ入り込んで仕掛ける。
危険察知にここまで映像化されないのは、ゼノスが晶の避ける方向を確認してから動くからのはず。
死角となり得る場所は、背後のはずだ。

つまり避けた瞬間に背後へと向けてムラクモで、攻撃を受け止めればいい。
……だが、反応できるだろうか。
ゼノスはそれを短期間でやってのける、やることがわかっていても晶の腕ではそこまでできるかどうかがわからない。

方法はそれしかない。
映像が終わった途端、晶は機体を右へスライドさせる。
その瞬間に、コックピット内が青く灯った。
これは恐らく、危険察知に失敗した合図なのだろう。
だが、それでも『危険察知』として成り立っている。
同時に自分の予想が正しいという確証にもつながった。

晶は瞬時に、機体を背後へと向けた。

「……！」

だが、赤いウィッシュの姿はなかった。
もしかしたら、正面をそのまま突っ切ってきたのか？

晶は咄嗟に機体を振り向かせると、レッドウィッシュの姿があった。
既に剣を大きく振り上げており、今にもι・ブレードに直撃しそうな位置だった。
……裏の裏をかかれてしまったのか。

だが、晶は諦めなかった。
まだ防ぐ方法はあるはずだ。
あの時のように、『フィールド』を出せれば――

「ι・フィールドぉぉぉっ！！」

力任せに、晶は強く叫んだ。
コックピットが、赤く灯った。
その瞬間に、ι・ブレードの前に赤い光の壁が出現する。

レッドウィッシュは、フィールドに弾かれて横転した。
……やはり、出てくれた。

『……気づいていたか、『ι・フィールド』はお前の意思で好きなタイミングで展開することができる。
そのトリガーについては、俺自身からはわからないが……お前は、理解できたようだな』

「……まだ、はっきりして、ませんけど」

初めてフィールドを発動させたとき、晶は力強く叫んだ。
『やられてたまるか』、と。
それは、この程度で死んでたまるかという強い感情が晶の中に芽生えた時だ。

もう一つは……昨日の出来事。
圧倒的に力を押されていた時に、最後の突進時に晶は強く叫んだ。
そう、お互いに『強い意志』を示した時に、ιフィールドが展開されていたのだ。

晶の感情が高ぶった時に、何かしらの理由で発動ができたとしか思えない。
まだはっきりとはしていないが、晶はι・フィールドを意図的に展開させることに成功した。
そして……ゼノスの攻撃を見事防ぎきって見せた。

『今日の訓練は、ここまでだ。　よく乗り越えたな、晶』

「……ゼノスさん、ありがとうございます。　俺、ちゃんと次は絶対アイツに負けません」

『いい返事だな、期待しているぞ』

晶の中でモヤモヤしていたものが、全て取り除かされた。
圧倒的な実力差を前に絶望をしていたが、大丈夫だ。
まだ戦える、立ち向かえる。
もう、諦めたりするものか。
晶は自分の中に、そう言い聞かせていた。

第5話　黒き反逆者　？

翌日、格納庫には整備班が集結していた。
これからゼノフラムの改修作業が行われるためだ。
現場にはパイロットであるゼノスも訪れている。

元々ゼノフラムの設計に携わっていた為、フリーアイゼンの中では一番ゼノフラムに詳しいと言っていい。
むしろ、ゼノスの指示がなければ作業を行うことができない程だ。

「ったくよ、何度も何度もよくもまぁぶっ壊すよな」

「毎度すまないな」

チーフを務めるエイトは、何度目かわからないゼノフラムの大改修に呆れていた。
過去にゼノスは機体を大破させてしまっていることが多い。
あれだけリスクの多い機体であるのだから、仕方ない事ではあった。
その割には、ゼノス自身は未だに重傷を負ったことがないのだからまさに『パイロット殺し』には相応しい『不死身のパイロット』と言えるだろう。

「まぁゼノフラムに関しては目を瞑ってやるよ……あの余計な2機の損傷は、何だよコラ。
お前が余計な作業を増やすと俺達の休みが削られるんだっつーのっ！
ったく、他の奴は呑気に休暇を楽しんでるってのによー」

歯ぎしりを立てながら、しかめっ面でエイトは文句を垂れる。
口は悪いが、なんだかんだで作業はしっかり行ってくれるし腕はい

い。
ゼノスが信頼している整備士の一人だ。
「大した損傷ではない、問題はないだろう」
「そういう問題じゃねぇよっ！　弾だって使い切りやがってよ、それだけでどんだけ費用かかると思ってやがんだっての。ゼノフラムだけで火の車だっつーのに、艦長も頭を悩ませちまうぜ」
「やはり改善点の多いＨＡではあるな、せめてコスト面だけでも改善したいものだが」
「ゼノフラムの話をしてるんじゃねぇよっ！　お前、ワザとだろ絶対」
「ιには自己修復機能が搭載されているようだが、あれを採用できないか？」
「人の話聞けよっ！」
エイトは力任せに叫ぶが、ゼノスは一人でブツブツと呟きながら去ってしまった。
「ったく、無駄に体力使っちまうじゃねぇか……」
一度考え込んだゼノスは、しばらくの間は何を話しても無駄だろう。
エイトは深くため息をついた。
「チーフッ！　備品の移動完了しましたぜ」

「おう、早かったな。　早速作業に取り掛かるぞ……っつっても、ゼノスがあの様子だとなぁ」

ゼノスは呑気に椅子へ腰を掛けて、深く考え込んでいる。
その様子を見て、エイトはまたしてもため息をついた。

「……わかった、何とかしてくっからちょっと待機してろ」

「了解しましたっ！」

仕方なく、エイトはゼノスの元へと向かっていくのであった。

午前中の訓練を終えて、ヘトヘトになった晶はシリアと共に食堂へと訪れた。
前回と同様に、特盛のカツ丼を二つ出されて再び机に突っ伏す。

「なんだ、もう疲れてるのか？　だらしないぞ、午後もしっかり訓練するんだからな、食っとけよ」

「い、いえ……だ、大丈夫ですよ」

疲れ切った体でこんなもの食べたくはないが、そうも言ってられな

い。
これもまた修行のひとつとして、晶は少しずつ箸をつけて行った。

「おー、晶くん意外と食べるんですねー。　流石はパイロット、食べる量も違いますっ！」

余計なところに、シラナギが現れてしまった。

「まぁな、こんぐらい食べないと訓練なんてやってられないんだよ。午後は午前中の2倍ぐらいはやるからな」

「あらー大変ですねー、頑張ってくださいね晶くんっ！」

「が、がんばり……ます」

食べた後も、さらに過酷な訓練が待ち受けているかと思うと、晶は顔が青ざめた。
今日を無事に乗り越えられることを願うだけだった。

「……そういえば、木葉どうしてますか？」

「木葉ちゃんですかー？　やっぱり気になりますよねー、今は私がヤヨイさんと相談をしているのですっ！
でも、やっぱりただの学生であった木葉ちゃんを即採用というわけにはいかないようです。
木葉ちゃんは晶くんと違ってパイロットコース等ではなく普通科コースでしたからねー中々悩みどころですよ」

「そ、そうなんです……か」

やはりあまり期待はできないのだろうか。
せっかく木葉がここに残るチャンスができたというのに。
晶自身もｉに乗った点と、たまたまそれを上手く扱えた点が運よく評価されて採用された身だ。
木葉は学校の成績が良くても、それがメシアの部隊に役立つかどうかはまた別の話。

「そんな顔しないでくださいよ、前にも言いましたけどフリーアイゼンは人手不足ですからね。
ちょっとでも優秀なところを見せれば、即採用かもしれませんっ！
ということで、木葉ちゃんにはいろいろ勉強してもらって実際に仕事を経験してもらいましょうっ！」

「へ？」

「それじゃ、いってきますねーっ！」

ふと、シラナギは頭に電球マークを浮かべながらグルグルダッシュで食堂を後にする。
……木葉が振り回されなければいいのだが、と晶は心配になった。

「なんだぁ？　あの子、部隊に入ろうとしてるのか？」

「え、ええ、まぁ」

「ライル辺りが喜びそうだな、あいつ木葉の事可愛いとか言っていたんだ、すっげー鼻の下伸ばしてさ」

「ラ、ライルさんですか」

まだ一度きりしか会話を交わしたことがない人を思い出す。
あの時シリアがロリコンやらと騒いでいたのは、もしやそのことが起因なのか。
……あまり、木葉を近づけさせないようにしようと心の中で誓うのだった。

「そういえば面白い話を入手したんだ」

「面白い話？」

「そうそう、何とフリーアイゼンに新型の可変機が配給されるんだってさっ！
ついにＨＡが空を飛べる時代がやってきたんだなー、アタシすっごく楽しみだよ」

「か、可変機……？」

晶も学校の授業で設計思想については聞いてはいた。
要は状況に応じて、形態を変形させる事ができるＨＡだ。
一機の汎用性を更に高めようという思想が来ているとか。
しかし、まだまだ技術的な問題点が多く実現はされていないと聞く。

「試作機か何かでも来るんでしょうか？」

「もっちろん、まぁパイロットも未定だしひょっとしたら誰か追加で入ってくるかもしれんけどね。
その時はアンタがちゃんと先輩やるんだぞ」

「お、俺が？」

「そうそう、だから今のうちにミッチリ鍛えてやるからなー」

入隊して早々、後輩ができるというのか。

晶のような落ちこぼれは、まだまだ下を持つには早いんじゃないかと思う。

それに晶は学生だ、パイロットが補充されるにしても年上かつ経験豊富な人に決まっている。

そんな人の上になると考えたら、絶対に言うこと聞いてくれないんじゃないかと不安に思った。

「本当はアタシが乗りたいんだけどねー、エイトにも頼んどいたんだけどさ。

やっぱ空を自由に飛び回れたらものっすごく気持ちいと思うんだよねー……あー早く来ないかなー、新型」

シリアは子供のように目を輝かせていた。

晶にとっては、空を飛ぶなんて更にリスクが増えそうで怖いと感じたが、、シリアはそうでもないようだ。

昔から戦闘機の類に憧れていたということもあり、何かと空を飛びたがっていると前ゼノスに聞いたことがある。

一度ιに乗ろうとしたのも、疑似的な飛行が可能と聞いたから搭乗してみたらしい。

「アンタはιで満足？　まぁ当然だよなぁ、あんだけいい性能の乗ってれば。　それにアンタの親父が設計したんでしょ、あれ？」

「ιは俺のパートナーですから。　あいつに守ってもらう代わりに、俺もあいつを守ってやるって決めたんです」

「やっぱり思い入れが違うねぇ、アタシとイエローウィッシュにも

そんぐらいの熱さがほしいもんだね」

ＨＡの事を話すシリアはとても生き生きとしている。
純粋に、ＨＡが好きでパイロットをやっているんだろうというのが伝わってきた。
その上に凄腕のパイロットだというのだから、まさに天職なのだろう。

『シリア・レイオン、未乃　晶。　パイロット両名、ブリッジルームまで集合してください。　繰り返します――』

突如、フリーアイゼン内でアナウンスが聞こえた。
丁度、シリアと晶の二人が呼び出されているようだ。

「あちゃー……こりゃ何か事件かな？」

「事件？」

「今日の訓練は中止だ、んじゃ敬語終わりね」

「え？　は、はい……」

「グズグズしてんじゃないよ、さっさといくよ」

「わ、わかりました」

「返事が違うっ！」

「わ、わかったよ」

そういうと、シリアは一気にカツ丼を平らげて見せて立ち上がった。
晶は呆然とするが、流石にあんな食べ方はできない。
仕方なくその場でカツ丼を残したまま、立ち上がろうとした。

「残すんじゃないと、食べながら行くよ」

「そんな無茶な……」

晶は仕方なく片方のカツ丼を一生懸命かきこんだ。
もう1杯は流石に厳しいと思い、やむを得ず手に持って駆け出すのであった――

「それで、ご飯を片手にブリッジに来るとはどういうことですか？」

「だって勿体ないだろ？　アンタらが勝手に呼び出すのが悪いんじゃないか」

やはり、怒られてしまった。
ブリッジルームへ入ろうとした直前、二人はヤヨイと遭遇した。
晶が何故か丼を片手に持っていたことから、シリアを睨み付けて今の状況に至っている。

「とにかく、食べてからにしてください。　艦長が激怒しても知りませんよ？」

「ったくーめんどくせーなー、じゃあ晶さっさと食ってくれよ」

「……は、はい」

結局こうなるのか、だったらあの場で無理にでもかきこむべきだったと晶は後悔する。
しかし、食べた直後に走ってきたので食の進みが遅い。

「あーもう、じれったいんだから。　貸してっ！」

シリアはチマチマと箸を進めていた晶から丼を奪う。
そして目にも留まらぬ早食いで、一気に丼を空にして見せた。

「これでいいだろ、早く通しな」

「頬のご飯粒、ちゃんととってください」

ふぅ、とため息をつくとヤヨイは道を譲った。
シリアは頬についたご飯粒を取り払って、中へと入る。
晶も恐る恐るブリッジへと訪れた。

中には艦長以外、人はいない。
一体何が始まるのだろうか、晶は身構えていた。

「来たか……緊急指令だ、よく聞け」

シリアの言った通りだった。

もしや、出撃命令が出されるのだろうか。
晶は身構えて、生唾をゴクリと飲み込んだ。

「砂漠地帯の中心部に、大型E．B．Bが発生したようだ。ゼノスは今回、ゼノフラムの改修作業で手が馳せない。
そこでお前たち二人に討伐へと向かってほしいんだ」

「大型……ですか」

艦長から下されたのは大型E．B．Bの討伐命令だった。
晶は過去に二度討伐任務にあたっているものの、ゼノフラムなしで討伐任務に参加するのは初めてだ。

「面白そうだね、アタシ達に任せな。すぐに終わらせてやるよ」

「うむ、既に部隊の者が準備を進めているようだ。お前達も準備を整え次第、部隊と共に出発をしておくれ。
なお、フリーアイゼンは現状この場を動くことができん。援護射撃も期待できないことを留意しておけ」

「うへぇ、厳しそうじゃないか。本当にいけるのか？」

「3台のロングレンジキャノンが支給されるようだ、主砲代わりにはなるだろう」

ロングレンジキャノンとは、超距離に特化した火力重視の装備の事を指す。
弾倉に超圧縮されたエターナルブライトを詰め込み、発火させる事により生み出される莫大な熱エネルギーを利用した兵器だ。
弾の軌道には紫色の光が生じ、破壊力は凄まじく一般的なHAをい

とも簡単に破壊してしまう程。
数は少なく、莫大なエネルギーの量と凄まじい威力を誇ることから、使用時にはメシアの上層部から承認が必要とされていた。
晶自身もその兵器については、聞かされていたことがある。
いわゆる、ビーム兵器と呼ばれる現代兵器の一つだ。

「ロングレンジキャノン利用なんて随分大げさじゃないか」

「決して楽な任務にはならないだろうな、健闘を祈るぞ」

「了解、アタシ達に任せな」

「今回ターゲットとなるE．B．Bの資料だ、目を通しておけ」

艦長は二人に、E．B．Bに関する資料を渡した。
晶はその資料に目を通す。

今回のE．B．Bには、砂漠地帯に存在する極めて危険性の高いE．B．Bと分類する。
砂漠地帯の中心部に巨大なくぼみを作り、その中心部よりHAの装甲を溶かす液体を吐き出す。
また、くぼみは常に中心部に砂が流され続けており、一度でも踏み込んでしまえばE．B．Bの餌食となってしまう。

「これって……」

名前こそ出てはいないが、まさにアリジゴクのことを指していた。
E．B．Bは種族問わずに、生物であれば異形へと進化を遂げてしまう。
前回のクモといい、何故か植物までもが狂暴化してしまうことに晶

は恐ろしさを感じていた。
エターナルブライトがなければ、どれもこれも無害な生物だったはずなのに。

「指揮は私がとろう、カイバラも補佐を頼むぞ」

「了解しました」

「アンタの指揮なら安心だね、それじゃ準備してくるぜー」

シリアは資料を観点に目を通すと、ブリッジを後にした。
晶も慌ててシリアの後を追い、駆け出した。

格納庫では、ゼノスを中心としてゼノフラムの改修作業が行われていた。
とてもじゃないが、あの忙しさには声をかける暇もない。
ι・ブレードの整備は既に終わっているようだ。

たった二人の出撃は心細いが、今回はこの基地に配属されている複

数のウィッシュ部隊も同行だ。
それに事前にE．B．Bの情報だって手に入っている、後は無事に討伐を行うだけだ。

『どうだ、緊張するか？』

晶がι・ブレードに乗り込んだ途端、シリアから通信が入った。

「流石に出撃自体には慣れてきました、ただιシステム発動する時の頭痛は……あんまり慣れないです」

『ハッハッハッ！　アタイには関係ない話だな、そりゃ。　ま、それも時期に慣れてくるだろ』

「……今回ってＬＲＣを使った討伐になるんですか？」

『そうだな、上手くコアをぶち抜ければ即終了。　いつもみたいにムラクモでグサッとできないから気をつけろよ
一度でも砂にはまってしまえば、ホバーリングだってすることはできないんだ』

資料に書いてある通り、E．B．Bの作った砂のくぼみは、常に激しく砂が中心部に流れ込んでおり、捕まってしまえば砂に捕らわれてE．B．Bの餌食となってしまう。
迂闊に近づかないように、気を付けなければ。

「心配しなくていいさ、どーせ全員で遠距離から集中砲火でおしまいさ。
高台だって用意していくみたいだし、よほどバカしない限りはまらないよ」

「そ、そうです……ね」

それでも何かの拍子ではまってしまいそうなことに不安を覚える。

「それじゃ、出発するぞ。　アタシにちゃんとついてこいよ」

「りょ、了解っ！」

晶はスロットルを握りしめて、深呼吸をした。

「いくぞ、ι・ブレード……」

コックピットに、赤い光が灯された。
まるで、任せろとでも言っているようだ。
晶は笑みを浮かべながら、スロットルを強く押し込み、機体を発進させた。

移動する事1時間、複数体のウィッシュが既に集合していた。
上空から狙撃をするために用意された高台が三つ、その一番上には例のロングレンジキャノンが搭載されている。

移動中にシリアから聞いた話によると、3体が上空からの狙撃を行い、その間に地上にE．B．Bが発生した際は残りのHAが片づける役割だ。

大型E．B．Bには仲間を生産する力があり、必ずと言っていいほど小型のE．B．Bが大量出現するはずだ。
また、あの高台を破壊されては上空からの狙撃は難しくなり、討伐そのものが中止となりかねない。

晶はレーダーを確認すると、そこには大型E．B．Bを示す反応が一つ。
モニターと照らして確認すると、確かにそこには大きな穴が存在した。

『君達がフリーアイゼン部隊からの増援か？』

「は、はい。　ι・ブレードのパイロットを務める『未乃　晶』です」

『驚いたね、本当に学生が乗っているのか？』

「ま、まだ見習いですけど」

既に到着していた部隊の隊長だろうか、晶は通信に応えた。
しかし、まさか全く無関係な人にまで自分の存在が知れ渡っていたことに驚く。
やはり学生のうちから試用期間といえどパイロットに採用されるのは、イレギュラーなケースなのだろう。

『そんなに緊張しなくてもいい、君の腕なら艦長から聞いてはいる

よ。
君は今回の狙撃主を担当してもらうからね、作戦前からそんな調子ではいけないよ』

「え……」

狙撃主だって？
まさか自分がその役割に回るとは想像もしていなかった。
艦長の判断なのだろうか、確かにｉには精密射撃にも対応した機能はついてはいるが……。

『任せときなって、何と言ってもウチの未来のエースさ。　へマなんてしないよ』

更にシリアは隊長に向かって、そんなことを言い出した。
精密射撃なんてシミュレーターでもやったことがないというのに――

「ちょ、ちょっとまってくださ――」

『それじゃ、期待しているよ』

晶が抗議をしようとしたが、虚しくも通信は切断される。
まさかこんな大役を任されるとは。

「な、何で俺なんですか？」

『まぁ、単純なｉの性能ってのもあるけど……アンタが信頼されてるからなんじゃない？』

「だ、だからといって……」

『気にするなって、どーせ3台もあるんだ。　アンタ1機が失敗しても誰も咎めやしないよ』

「そ、それは問題ありますって！」

むしろそれが一番嫌だ、と晶は心の中で叫んだ。
本当に自分が担当してしまったもいいのだろうかと、不安に思った。

『未乃　晶、ιの射撃性能を見せてもらうぞ』

今度は艦長より直に通信が入った。

「い、いいんですか……俺、失敗するかもしれませんよ」

『最初からその調子では成功するものもしないぞ、少しは自信をつけろ』

「は、はい……」

やはり断れそうにない、やるしかないだろうと晶は腹をくくった。
高台には既に2機のウィッシュがスタンバイしている。
大型E．B．Bの反応はあるが、姿は現していないようだ。

顔を出した瞬間に……集中砲火を浴びせる。
シンプルそうに見える作戦だが、不安がよぎるのも事実だ。

「……悪い、また頼っちまうけどよろしくな」

コックピット内で晶は、ιにそう告げると赤く光が灯った。

相棒がこんなに優秀だというのに自分は情けないな、と晶はため息をつく。
すると、何も話していないのにコックピットが再び赤く点灯した。

「……わ、わかったよ。　もうちょっとしっかりするさ」

晶は気を取り直して、高台へと移動をする。
台に固定されているロングレンジキャノンは、莫大な電力を使用するらしく、数十本もの配線が繋がれていた。
蓄電器の電力は限られているため、あまり無駄撃ちはできないだろう。

シリアからロングレンジキャノンのマニュアルが送付された。
一通り目を通しておけということなのだろう。
晶はマニュアルを確認した。

『作戦開始時刻は１４時３０分だ、後２０分しかないからちゃんと読んでおけよ』

「は、はい」

『使い方自体はシンプルなはずだから、アンタにもすぐわかるはずさ。　それじゃ、健闘を祈るよ』

「……はぁ」

晶の中では、不安が増すばかりだった。

黒き反逆者　？

机の上に散乱された教材の数々。
フリーアイゼンの中にあったものを片っ端から集めだした。
メシア入隊にはありとあらゆる知識が要求される。

求められる知識は、それこそ配属先によって異なるが、
ＨＡの知識は、たとえパイロット志望でなくとも必須ではあるし、
Ｅ．Ｂ．Ｂについても同様。
最低限の時事知識は求められるうえに、健康管理やコミュニケーション能力までありとあらゆるものが要求された。
晶のように、パイロットとして実績で腕を示した例とは違い、やはり木葉の入隊には壁が多すぎるのも事実だ。

専門的なコースで知識を得たわけでもなく、ただの学生だ。
学校での成績は確かに優秀だったものの、それがメシアにて通用とするとは限らない。
だが、木葉はそれでも一生懸命メシア入隊に向けた勉強を始めていた。

「さあさあ、木葉ちゃんっ！　何としてでも戦況オペレーターの地位を狙いますよーっ！
なんといっても、晶くんのためですからねーっ！」

「すみません、なんだかずっと付きっ切りで見てもらって。　シラナギさんも忙しいはずなのに……」

「とんでもないでーす、今クルーは休暇期間なんですよっ！
まぁ、あのうるさい男からは仕事押しつけられましたけどサボって

きましたから大丈夫です」

「サ、サボっちゃったんですか？」

「いいのいいの、今はあんなどうでもいい雑用より木葉ちゃんのほうが大事だからっ！」

本当にいいのだろうか、と思いつつも木葉は教材を手に取る。
ウィッシュが表紙となっているこの教材、晶が学校で使っていたものと同じだ。
何度か木葉も見せてもらったことがあり、嬉しそうに解説していたことを思い出す。
その時だけ、晶は生き生きとしていたように見えた。
なんだかんだで、ＨＡが好きなのだろう。
人類を守るために開発された巨大ロボット、男の子なら誰もが憧れるはずだ。

「そうだそうだ、せっかく女同士なんですし色々と聞いちゃいますかー」

「え？」

シラナギが頭に電球マークを浮かべながら、何故だかニヤニヤと木葉に詰め寄ってくる。

「どうです？　晶くんとはキスぐらいまではしちゃってますかー？
それともその先まで……？」

耳元でシラナギにそう囁かれると、木葉は顔を真っ赤にさせた。

「な、ななな何言ってるんですかぁっ！？　そ、そんなんじゃ……ないですよ、私……達」

「あれー？　違ったんですか？　おっかしいですねぇ、ここまで親密な関係でありながら全く進展がないと？
全く最近の若い子はダメダメですねぇ……思えば確かに晶くんは鈍そうですから……やっぱり木葉ちゃんから攻めて行かないと」

「せ、せめ……だ、あ、あの――」

シラナギが追い打ちをかけると、木葉は更に顔を真っ赤にさせて口をパクパクとさせる。
ついにはピークに達して頭から煙を上げてしまう始末だ。

「でも羨ましいです、私はその年の時に好きな子なんていませんでしたからね」

「え？」

ふと、木葉はシラナギの言葉に違和感を覚える。
どうみても外見は自分と同じぐらいの年齢だというのに。

「……シラナギさんって、いくつなんですか？」

「乙女の秘密、なのです。　晶くんには絶対余計なこと言っちゃダメですよ、夢を壊しちゃいますからっ！」

「わ、わかりましたっ！」

あっさりと受け流されてしまった。

しかし反応から見てもやはり同い年ではなかったようだ。
一つぐらい年上だと思っていたというのに。

「あれ、木葉ちゃんそれなんです？」

「あ……」

シラナギは、ふと木葉の白いブラウスの内側から細長い四角のでっぱりを指さす。
よくみると首の紐から繋がっているようだが、それにしても妙だ。
アクセサリーであれば、普通は見えるように表に出すはずなのに。

「……」

木葉は俯いたまま、何も答えない。
ブラウス越しから、その四角い物体をギュッを握りしめるだけった。

「ペンダントですかー？　みせてくださいよー」

「あ、ま……まままって――」

「いいじゃないですかー、ほらほらー」

シラナギは強引に木葉の胸元に手を突っ込んで例のアクセサリーを取り出した。
表に出してみると、それはアクセサリーと呼べるような代物ではなかった。
黒い柄に少し丸みを帯びた木造のカバー。

「え？　これって」

不思議に思ったシラナギは、黒い柄をゆっくりと引っ張り出してみる。
すると、そこからが銀色の刃が徐々に姿を現していった。
……アクセサリーだと思っていたものは、ナイフだった。

「……」

「ど、どうしたんですこれ？」

流石のシラナギも目を丸くして驚きを隠せなかった。
どうして木葉がナイフを持ち歩いているのだろう。
木葉は俯いたまま、何も語ろうとしない。

「……大切なもの、なんですよね？　大事にしてくださいね」

シラナギは静かにナイフを木造のカバーに戻し、木葉に返した。
木葉は両手で、ギュッと木造の飾りに戻ったナイフを握りしめる。

「これは、晶くんを守るために持っているの」

「晶くんをですか？」

「ただ、持ってるだけでいいの。　きっと、この子も一生使われないことを望んでいると思うから」

そう呟きながら、木葉はナイフをブラウスの内側へと戻した。
その瞳は悲しそうというよりも、何処か思いつめた表情に見える。
シラナギはただ、木葉を心配そうに見つめることしかできなかった。

砂漠の中心地。
全部で２０機近くのＨＡが集結していた。
大型Ｅ・Ｂ・Ｂ討伐の際には何が起こるかわからない。
出来る限りＨＡが多く設置されるのが基本だった。
今はレーダーを見ても静かだが、あの大型が地上に顔を出した瞬間に仲間が集まってくる可能性も否定はできない。
むしろ、地中奥深くに眠っている小型が今レーダーに反応していないだけの可能性だってあるのだ。

作戦開始の合図は、砂のくぼみにグレネードが投げ込まれた瞬間だ。
その音に驚き、大型Ｅ・Ｂ・Ｂが顔を見せるはず。
狙撃主の３機は、その瞬間を狙ってコアの狙い撃ちを行う予定だ。
晶はじっとレーダーを見つめる。

まだ、大型Ｅ・Ｂ・Ｂの反応が一つ。
このまま、何も起こらなければいいがと願う。
モニターに目を移すと、そこからは地上で待機するたくさんのウィッシュを見渡せた。
高い位置へいると、ι・ブレードを初めて発進させたときのことが

脳裏に過ぎる。

最悪な光景だった。

街が破壊しつくされ、味方のＨＡがボロボロにされて、人々が逃げ惑っている姿だってはっきりと見えたのだから。

「ん……？」

突如、レーダーに赤い点がポツポツと出現し始めた。

Ｅ．Ｂ．Ｂを示す反応だ。

しかし、肉眼で確認をしてもＥ．Ｂ．Ｂの姿はない。

『地中だ、地中から来るぞっ！』

「まさか――」

晶が地上を確認すると、地中から一斉にＥ．Ｂ．Ｂが姿を現した。

黄土色のボディと尾に巨大な針を持つ姿、間違いなくスコーピオンだ。

だがやはり、Ｅ．Ｂ．Ｂ独特の禍々しい外見は健在だ。

体の一部が紫色に変色しており、背中はもはや原型を留めておらずイソギンチャクのようなものがウネウネと蠢いていた。

「シリアさんっ！」

『わかってるっつーのっ！　アンタは絶対そこから動くんじゃないよ』

地上のウィッシュが、一斉にＥ．Ｂ．Ｂの討伐を開始した。

無駄のない動きで次々とＥ．Ｂ．Ｂが消滅されていく光景は、流石

はメシアの部隊と言わざるを得ない。
晶はその姿を見て、自分の未熟さを思い知った。

しかし、レーダーの反応は増える一方だ。
このままでは埒が明かない、晶も援護へ向かおうと思うが狙撃主は待機を命じられている。
歯痒い思いで、晶は地上のウィッシュが戦っている様子を見守る事しかできなかった。

『大型E．B．Bから小型E．B．Bの反応を確認。　どうやら、生み出されているようです』

『大型E．B．Bを炙り出せ、ボムを投入しろ』

通信機から艦長の指示とヤヨイのオペレーションが聞こえた。
それに伴い、数機のウィッシュが砂のくぼみへと向けてグレネードを投入する。
もうすぐ大型が姿を現す……晶は身構えて待った。

コアの位置は資料を目に通して把握している。
分析結果、頭部そのものがコアであるようだ。
的は小さいが、ιの精密射撃を信じるしかない。
それにまだ、2機の狙撃主だって存在するのだ。

『狙撃主各位、私の合図で一斉に狙撃を開始しろ』

「了解……やるぞ、ι」

『精密射撃モードに、移行します』

コックピットが赤く点灯すると、晶の頭上から精密射撃用のスコープが出現する。
ιの武装にはロングレンジキャノンのような長距離射撃武器は存在しなかったが、開発時点では想定していたのだろう。
晶はスコープを装着して、照準を砂地のくぼみへと合わせた。
その瞬間、一斉に投げ込まれたグレネードが爆破する。

「くるっ！」

一瞬、煙で周辺が見えなくなるが、大型E．B．Bの姿はすぐに確認できた。
巨大なハサミを全開にしながら、砂をかぶった本体が姿を現す。

「やれるか？」

ピピピピ、と電子音と共に晶は照準を大型E．B．Bの頭部へと合わせる。
地上へ姿を現したが、動きは鈍いようだ。
これならば、狙撃をすることは容易い。
機械による誤差計算が始まり、徐々に照準は合わさっていく。

「動くなよ……」

ピー、電子音が変わった。
全ての計算が終わり、照準が赤色に変化した。
狙撃可能を告げる合図だ。

『各位、撃てっ！』

「え……？」

晶は艦長の合図と同時に、大型E．B．Bに生じた変化に気づく。
何やら、紫色の光のようなものが浮かび上がっていた。

バシュンッ！！

先行して、他の2機がロングレンジキャノンを発射させた。

「しまった……い、いけっ！！」

遅れて晶は、トリガーを強く引いた。
凄まじい轟音と共に、コックピット内が強く揺れだす。
僅かに遅れたが、三つの紫色の光は見事、大型E．B．Bへと直撃した。

「……やれた、のか？」

棒立ちする大型E．B．Bは、その場で動きを止めている。
だが、妙だ。
肉眼で見る限りでは、大型E．B．Bは傷一つ負っているように見えない。
確かに直撃したはずなのだが。

『生体反応あります、目標活動継続中です。　いえ……むしろ、狙撃が通っていません』

狙撃が、通っていない？
その時晶は、大型E．B．Bが見せた紫色の光を思い出す。
あれは、何処か『ιフィールド』と似ていた。

『カイバラ、解析しろ。　狙撃主は再狙撃に備えろ』

『はい、目標周辺にエターナルブライトの反応を確認。　恐らく、フィールドが発生したと思われます』

『……まさか、ロングレンジキャノンを防ぐとはな。　奴ら、新たな力を身に着けたようだな』

「そんな……どうすんだよ、あれ」

これまでに大型E．B．Bにおいて、ロングレンジキャノンが通用しない相手が現れたことはなかった。
前回の『レーダー』から身を隠すE．B．Bといい、やはりゼノスの言う通り『進化』をしている可能性が高い。

「い、ι・ブレードのムラクモならコアを貫けますっ！　俺にやらせてくださいっ！」

晶は艦長に向けて力強く叫んだ。
今までも例外なく、ムラクモは大型E．B．Bのコアを貫いてきた。
ならば、ιが直接大型E．B．Bの懐に入るしかないと考えたのだ。

『ダメだ、あの砂地の中へ足を運んだら終わりだ。　指示があるまで待機をしていろ』

「クッ……わ、わかりました」

待っていることしかできないのか、と晶は悔しさのあまりスロットルを握りしめる。
ιには多少の飛行機能が搭載されているとしても、所詮疑似的なも

のにすぎない。
万が一あの穴へと突き落とされてしまえば、命はないだろう。
晶が上手くやれれば別だが、パイロットにリスクの高い真似はさせたくない。

『――ι――ロングレンジキャノン――』

「……？」

ふと、ι・ブレードが不思議な通信を拾った。
ここの部隊の人間ではない……メシア基地からの音声を拾ったのだろうか？

『我々の力……見せ付けてやろう』

「な、なんだこの通信？」

男の声から、そんな単語が聞こえた。
一体何の事を指すのだろうか。
何か嫌な予感を感じる。

『おい晶、どうしたんだ？　あの大型ちっとも効いてないみたいだぞ？』

「……あ、ど、どうやらエターナルブライトによるフィールドが展開されてるみたいなんです」

『なんだって？　ロングレンジキャノンでぶち抜けばいいじゃねぇか、そんぐらい』

「そ、それが弾かれたみたいで……」

『チッ、こりゃ出直しか？』

レーダーを確認すると、Ｅ．Ｂ．Ｂの反応は増えていくばかりだ。
このままでは埒が明かない。
すると、突如レーダーに乱れが発生した。

「ん……？」

気のせいかと思って、レーダーを凝視していると、徐々に乱れが強まっていく。
Ｅ．Ｂ．Ｂの位置情報も、乱れのせいでまともに確認することができなくなってしまった。

「な、なんだよこれ……壊れたか？」

晶は目線をモニターへ向けると
丁度大型Ｅ．Ｂ．Ｂの向こう側に、何やら黒い影が見えだした。
ＨＡのように見える。
遠目から見て、その形がウィッシュとは違うＨＡである事がわかった。
だが、方向は基地とは明らかに真逆だ。
増援……とは考えにくい。

『こちら？８、レーダーに異常が発生した』

『こちらＮｏ２、同様にレーダーの異常を検知した』

通信を確認する限り、現象はｉのレーダーだけではないようだ。

各機からレーダーの異常が次々と告げられていた。
……晶はふと、先程拾った通信を思い出す。

そして目の前に迫る黒い影。
連想するものは、一つだった。

「あいつら……っ！！」

砂漠地帯の中心地に、メシアの部隊が集結していた。
複数のＨＡが大型Ｅ．Ｂ．Ｂと交戦中だ。
黒いＨＡに搭乗している、赤髪の少女はその様子をニヤニヤとしながら眺めていた。

『ιが出撃していることを確認、またロングレンジキャノンの所持をしていることも確認した』

『Ｅ．Ｂ．Ｂは無視をする、目標はιとロングレンジキャノンのみだ』

通信からは明らかにιを狙う旨が告げられていた。
……そう、彼らは『アヴェンジャー』の部隊だ。

彼らにとっては作戦行動中にメシアはまさに恰好のエサ。
当然、騒ぎに嗅ぎ付けて兵器の類を奪いに来たのだろう。

「アッハッハッハッ！　アッハッハッハッハッ！！」

コックピット内から聞こえる仲間の通信を耳にして、少女は狂ったかのように笑い出す。

「ι？　ロングレンジキャノン？　そんなもの、どうでもいいの。
ウヒヒ、今日はあのお姉さんに告白するんだ……
私達の愛を、確かめ合うんだからぁ……アーッハッハッハッハッハッハッ！！！」

奇声に近い声をあげながら、少女……『フィミア・アミネス』は笑い続けていた。

「ウヒヒ、お姉さんこの子と私の強さに惚れちゃうかなぁ？　あまりに興奮しすぎて失禁しちゃったりしてぇっ！！」

フィミアの眼は血走っており、もはや基地内でみたフィミアとはまるで別人のようだ。
おまけに奇妙なことに、彼女はパイロットスーツではなく『真っ赤なドレス』を身に纏っている。
普通に考えれば自殺行為に近いのだが、フィミアに常識という概念は存在しない。
ただ、己の欲望に素直に従うだけだったのだ。

「ウヒヒィッ！　楽しみ楽しみ楽しみぃぃ……アーッハッハッハッハッハァッ！！」

ガンガンガンッと叩き付けるようにフィミアはスロットルを押し込み続けた。
グングンと加速を続けていく『黒いＨＡ』は、一人列を乱して先陣を切っていった。

黒き反逆者　？

フリーアイゼンブリッジルーム。
モニターには、砂漠の中心部の様子が映し出されていた。
艦長はここから現場の様子を確認して指示を出していたが、黒いＨＡを目の当たりにして表情を一変させる。

「カイバラ、情報を報告しろ」

「はい、砂漠地帯を中心に広範囲にわたるジャミングを確認しました」

「あのＨＡの所属は？　メシアには存在しないタイプだぞ」

「所属不明機です……ι・ブレードのように非公開で開発された機体かと思われます」

「……まさか、『アヴェンジャー』が独自でＨＡを開発したとでも？」

「現に彼らは我が部隊に攻撃行動を開始しております、否定はできませんね」

「何てことだ……」

艦長の表情が青ざめた。
恐れていた事態が発生してしまったのだ。
アヴェンジャーがメシアから奪ったＨＡを元に、独自のＨＡを開発してしまったのだ。

つまり、彼らにはＨＡを生産する技術がある事が証明されたことになる。
即ち……『メシア』から奪ったＨＡ以外にも、兵器を所持していることになるのだ。

「奴らは戦争でもする気なのかね、我々と」

「だとしたら、ヒドイ話ですね」

ヤヨイは顔を伏せて寂しそうに呟く。
艦長も同じ思いだろう、目の前には人類の敵である『Ｅ．Ｂ．Ｂ』が存在するというのに
彼らはそれを無視して、同じ人類であるメシアを迷わず襲撃しているのだから。
何故、人類同士が争わなければならないのか。
今や人類は、意思を統一させなければならないというのに。

「敵の数が見えない以上、長期に渡った交戦は危険です。　艦長……ご判断を」

「……立て直すぞ、撤退だ」

大型Ｅ．Ｂ．Ｂにロングレンジキャノンは、通用しなかった。
それに小型のＥ．Ｂ．Ｂも数を無限に増やしていき、それだけでも消耗は激しい。
更に謎のアヴェンジャーの新型襲撃となれば……艦長の下す判断はそれしかなかった。

砂漠地帯に姿を見せた謎のＨＡ。
所属は不明、メシアの機体ではない。

「なんだ、あいつら……？」

モニター越しに、シリアは不気味な雰囲気を漂わせるＨＡを見て言葉を失った。
漆黒のボディを持つＨＡは、何処か禍々しさを感じる。
ウィッシュよりも一回り小さく、細身のボディ。
ヘッドには赤い瞳のような光が不気味に輝いていた。

「キシャァァァァッ！！」

「うぉっと――」

コックピット内にまで響くＥ．Ｂ．Ｂの奇声に一瞬怯むがシリアはスロットルを華麗な手捌きで扱い、あっという間に複数体のＥ．Ｂ．Ｂを切り裂いて見せた。
２本のソードが、紫色の血で染められていく。

だが、それでも敵は数を減らさない。
次から次へと、地中から姿を現し続けた。
中には地中に捕らわれ、砂の中へと引きずり込まれようとしている

ＨＡまで出てくる始末だ。

『た、たすけてくれぇぇっ！　うわあああああっ！？』

仲間の悲痛な叫びが聞こえてくる。

シリアは歯を強く食いしばった。

「今、助けるぞ――」

Ｅ．Ｂ．Ｂに襲われている仲間を助けようと、スロットルを押し込もうとした。

その瞬間、目の前に黒いＨＡが姿を現す。

片手に持つ、巨大な鉄の棍棒を力任せに振り下ろそうとした――

「なっ――」

咄嗟にシリアは、２本のソードで黒いＨＡの一撃を受け止める。

ガキィィンッ！　と、金属音が響くと共にコックピットが強く揺れだした。

「……やっぱり、仕掛けてきたなっ！」

バシンッとシリアは両手で棍棒を弾くと

即座に敵ＨＡの懐に飛び込み、胴体を切り刻んだ。

ガコンッ！　と鈍い音がすると、黒いＨＡはその場にガクンと膝をついて動きを停止させた。

すると、別方向から銃声を聞きとるとシリアはすぐに後退をする。

ギリギリ、銃弾を交わすことに成功した。

「チッ……どうしてもアタシ達の邪魔をしようっていうのかい？」

正体不明のＨＡだが、おおよそ見当はつく。

……アヴェンジャーの機体だ。

既に何機もの黒いＨＡが戦場に入り乱れ、味方機のウィッシュは次々と損傷を負っていく。

ただでさえＥ．Ｂ．Ｂで精一杯だというのに、このままでは全滅する恐れがあった。

ピピピピピピ

ふと、外部からの通信を告げる音がした。

「……通信？」

シリアは通信を受信した。

すると、サブモニターから……どこかで見覚えのある少女の姿が映し出された。

中身はどうみてもコックピットの中だというのに、

何故か真っ赤な可愛らしいデザインのドレスを着ている。

『お姉さん、みっけ』

「お、お前――」

間違いない、通信先の少女は……メシア基地の街でたまたま遭遇した少女だったのだ。

何故、あの少女から通信が？　それに、コックピットに座っているということは――

その瞬間、シリアは背後から殺気を感じ取った。

振り向いた先には、上空から猛スピードで突進してくる『黒いＨＡ』

の姿があった。

「グッ……っ！！」

ガキィンッ！

シリアは両手のソードを利用して、一撃を何とか防ぎ切った。
だが、衝撃を抑えきれずに機体がかなりの勢いで押されてしまう。
……明らかにウィッシュ以上の出力であることが体感できた。

『逢いたかったよ、私の愛しの人。　ねぇ、私可愛い？　美人？
ドレス、似合ってる？』

「……アンタ、本当にパイロットだったのかっ！？」

『ウヒヒ、惚れた？　私とレブルペインに、惚れちゃった？』

「レブルペイン？」

『そう、そうそうそう……この子の名前だよ、お姉さん。　ウヒ、
ウヒヒヒヒっ！』

黒いＨＡは、どうやら『レブルペイン』という名がつけられているようだ。
やはり名を聞いても、メシアには該当するＨＡは存在しない。
一体、この機体は何なのだろうか？

『各位、撤退しろ。　立て直すぞ』

「チッ……やっぱり撤退命令かよ、悪いけどアンタと遊んでる暇は

ないねっ！」

艦長の通信を確認すると、シリアはソードで敵機を弾き飛ばし、後退する。

『だぁぁめ……今日は逃がさないんだからぁっ！！　アッハッハッハッハッハァッ！！！』

奇声と共に、イエローウィッシュの真横に黒いＨＡがついてきていた。

イエローウィッシュはウィッシュをカスタマイズされたものであり、出力・機動性共に通常よりも遥かに上昇されているはずだ。

それに追いついてきたこのＨＡは、少なくともイエローウィッシュと同等かそれ以上の力を持つと言える。

「……なんちゅう機体乗ってやがんだっ！」

『ねぇねぇ、好きって言ってよ。　大好きって、愛してるって』

「キモイんだよ、どっか行けっ！！」

シリアは速度を保ったまま、真横に並び続ける黒いＨＡに向けて、ライフルを構える。

迷わず、ゼロ距離で発砲させた。

バァンッ！　銃声と共に、黒いＨＡが吹き飛ばされていく。

今のうちに距離を離そうと、シリアは限界までスロットルを押し込んだ。

『アハハ、アッハッハッハッハァッ！　面白い、面白いお姉さんっ！　これなら、私も本気で愛していいよね？

だってこんなに愛してくれるんだもの、大好きだよお姉さんっ！』

「くっそ……何だこの気持ち悪い奴はっ！」

あまりにも狂気に満ちた少女……フィミアの少女を目にして、シリアは通信を切断させた。

プツン、と切断を確認するとようやく奇声から解放されて胸をなでおろす。

すると、コックピットが突如大きく揺れだした。

「な、なんだぁっ！？」

イエローウィッシュが何かに捕らわれ、前進することができなくなってしまった。

砂にでもはまってしまったのか、しかしこの感覚は足がはまったというよりも何かに強く引っ張られている感覚と思える。

『アッハッハッハァッ！　私とお姉さんは運命のあかぁぁい糸で結ばれてるの、そう簡単に逃がしてあげないんだからぁぁっ！』

「通信？　テ、テメェ……何しやがった？」

『お姉さんの機体、色々と調べさせてもらったの。　これで、ずっとずぅーっと一緒だね？』

「……チッ」

何らかの手段で強制的に通信を繋いでいるというのか、だとしたらとんでもないことだ。

シリアは再びスロットルを押し出すが、やはり機体の自由が利かな

い。
ＨＡのヘッド部を器用に動かすと、右足に何やら赤いワイヤーが絡みついているのを確認した。
……このせいで、身動きが取れないのだろう。

『シリアさん……っ！　あいつら、ロングレンジキャノンを狙ってますよっ！？』

晶からの通信が入った。
やはりあの兵器を奪おうとしていたか。
だが、今はそれどころではない。

「どうした、撤退命令は出ているぞ……アンタも早く下がるんだっ！」

『仲間がやられてんだ、黙って見過ごせるかっ！　俺も戦いますっ！』

「いいから下がれ、艦長命令は絶対だぞ」

『シリアさんだって戦っているじゃないですかっ！』

「アタシのことはいい、さっさと退くんだよっ！」

ロングレンジキャノンとｉ・ブレードが奴らの手に渡ってしまえば、取り返しのつかないことになるだろう。
現に奪われたウィッシュから、とんでもないＨＡを開発するような連中だ。
黒いＨＡだけでも破壊すべきか、だがそれにはまず目の前のＨＡを何とかしなければならない。

シリアは腹を括った。

「……アンタを倒すしか、なさそうだね」

『アッハッハッハァッ！　ようやく、私と愛し合ってくれる気になったぁぁ？
ウヒヒ、楽しみ楽しみぃぃ……どんな風に愛でてくれるのぉ？』

「アンタみたいな女、例えアタシが男だとしてもお断りだねっ！」

シリアはライフルを発砲させた。
だが、敵機は俊敏な動きで弾を交わし前進してくる。

『嫌い？　嫌いなの？　私の事、大嫌い？』

「そうだよ、だからさっさと消えてくれっ！」

『アーーーッハッハッハッハッハァッ！！』

2本のソードを手に、シリアは黒いＨＡを切り裂こうとする。
ガキィンッ！！
だが、瞬時に2本のソードは弾き飛ばされてしまった。

「なっ――」

一瞬で、シリアは無防備となってしまう。
危険を察して後退をするが、ワイヤーのせいで行動が制限されてシリアは自由に行動できずにいた。

『嫌いなんて、ウソウソッ！　照れなくていいの、私達ちゃーんと

繋がってるんだからぁぁっ！！
今度は、私の番だね。　たっぷり、たぁぁぁっぷり愛してあげるんだからぁぁっ！』

黒いＨＡはソードを片手に、突進をしてきた。
瞬時に両手で受け止めてみせたが、コックピット内に激しく揺れる。
腕の損傷は予想以上に大きい、そう何度も受け止めていては両腕が壊れてしまう恐れがあった。

「クッ……」

距離を離そうとしても、ワイヤーが邪魔をして上手く機体を制御できない。
その条件は相手も同じであるはずなのに、敵機は平然と動き回っていた。

『アッハッハァッ！　ねぇ、好きって言ってよ？　大好きなんだよね、嫌いなんてウソでしょ？
ほらほら、いっぱい愛してあげるんだからっ！！　愛してるって言ってよぉぉっ！』

俊敏な動きでソードを振り下ろし、ギリギリのタイミングでシリアは避ける。
だが、何度も避け続けることは難しく、一撃を腕で何度も受け止めていた。
コックピット内には警告を告げる機械音が響く。
このままでは、やられてしまう――

『こんなに愛しているのに……どうして、わかってくれないの？』

「……一方的な愛は、『暴力』にしかならないっつーのっ！」

黒いＨＡが動くを鈍らせた隙に、シリアはライフルを一発ぶち込んだ。

ズガンッと、鈍い一撃と共に弾丸は、黒いＨＡの胴体部を見事貫いた。

『アッハッハッハッハッ！　やっぱり、やーっぱりわかってくれない……

だぁぁぁれも、私を愛してくれない……愛してくれない人、私、いらないー―』

ググッ、とイエローウィッシュが強い力で引っ張り出された。

「ま、まだ動くのか？」

『いらない、いらないいらないいらない……愛してくれない人はゴミ、ゴミなの。

ゴミは、ゴミ箱に、捨てないと。　お姉さん、大好きだったよ、ありがとう、幸せにね』

「な、なんだ……？」

フィミアの一言一言に、シリアは寒気を感じた。

その度に、引っ張る力が強まっていき……徐々に機体が引きずられていく。

突如、黒いＨＡの背中のバーニアが信じられない程吹き上がった。

黒いＨＡからは紫色の煙が吹き出し、装甲が徐々に剥がれ落ちていく。

イエローウィッシュは強い力で、砂漠の上を引きずられた。

「クッ、なんだってんだ――」

ふと、イエローウィッシュが宙へと浮いていたことに気づく。
モニター越しからは、赤いワイヤーが黒いＨＡから外された瞬間を確認した。
その後ろには、巨大なＥ．Ｂ．Ｂの姿が映る。

『アッハッハッハァッ！　バイバイ、お姉さんっ！！』

黒いＨＡは、その身をボロボロにさせながら撤退していく。
ワイヤーから解放されたイエローウィッシュは、そのまま成す術もなく落ちて行った。
地面に叩き付けられたと思ったら、思ってた以上に衝撃が少ない。
砂漠の為、クッション代わりになったのだろうか。
だが、モニターを確認すると……シリアは自分が置かれた状況に早くも気づいた。

「……あちゃー、やられちゃったなこりゃ」

流され続ける砂の中心地には、巨大なＥ．Ｂ．Ｂの姿があった。
そう、ここは一度入ったら脱出不可能である……大型Ｅ．Ｂ．Ｂの巣穴だった――

高台の上から広がる光景が、まさに地獄絵図だった。
小型のE．B．Bが入り乱れ、黒いHAがウィッシュに向けて発砲を繰り返し、攻撃を仕掛け続ける。
撤退命令が下された今でも、味方機は黒いHAのせいで退くことができずにいた。

「クソッ……離れろよっ！」

晶は高台からブラックホークで、何度も何度も小型E．B．Bを撃ちぬく。
だが、その数は減ることはない。
1機のウィッシュが無事、戦場から脱出をしたかと思えば地中から発生したE．B．Bへと囲まれてしまった。

「……誰も、死なせないからなっ！」

コックピットが赤く点滅すると、晶はブラックホークで見事数匹のE．B．Bを撃破した。
しかし、その混乱に乗じて2機の黒いHAが、2台のロングレンジキャノンに目掛けて向かっている姿を確認する。

「渡してたまるかよっ！」

晶はスロットルを押し込み、黒いHAへと向けて全力でιを発進させる。

「行けよ、ι・ブレードっ！」

瞬時にムラクモを抜刀させ、２機の間を高速ですり抜けた。
バキィンッ！　と、鈍い音が響くと、２機の黒いＨＡは煙を上げて地上へと墜落していく。

「や、やれたのか？」

ズキンッ――

その瞬間、危険察知が発動した。
２機の黒いＨＡが、ιに向けてライフルを発砲させる瞬間だった。

「う、うわっ！？」

慌てて晶は、スロットルを戻して後退させる。
だが、上手く高台へと戻れなかった晶は虚しくも地上へ向けて落下を始めてしまった。
その間に、残りの黒いＨＡが一気に二つのロングレンジキャノンを狙って飛び掛かっていく。

「こ、このっ！」

晶はブラックホークを発砲させるが、流石に数が多すぎて全てに命中させることができなかった。
２機の黒いＨＡがロングレンジキャノンの配線を強引にちぎり、運んでいく姿を捕える。
だが、同時に危険察知が発動し、晶が黒いＨＡ３機に囲まれるという映像が出された。
相手の狙いは勿論、晶のウィッシュを奪取することも含まれている。
落とされるわけには、いかない――

「ι、頼むっ！」

コックピットが赤く光を放つと、ι・ブレードの周りにフィールドが展開された。
３機のＨＡは、一斉に弾かれていく。
その間に晶は、ロングレンジキャノンを追いかけようとするものの、再び危険察知が発動する。
地中から複数のＥ．Ｂ．Ｂが姿を現し、一気に襲い掛かってきた。

「退け、退いてくれっ！」

晶はムラクモを振り回し、地中から出てきたＥ．Ｂ．Ｂを一刀両断させる。
怯まずに、スロットルを押し込み続けた。
だが、目の前に移った大型Ｅ．Ｂ．Ｂの姿を確認し、晶はスロットルを戻す。
……巨大なくぼみ、大型Ｅ．Ｂ．Ｂの巣穴が広がっていた。

黒いＨＡは上手くそれらを避けて、どんどん距離を離していく。
今からでも再度発進させようとするが、大型Ｅ．Ｂ．Ｂが暴れだして道を妨げてしまった。

「クッ……奪われ、ちまった」

せめて残りだけでも死守しようと、晶は後退しようとした。

『晶、聞こえるかっ！？』

「シ、シリア……さん？」

その時、通信が入った。
シリアの声であったが、何処か緊迫した様子だ。

『アヴェンジャーの奴らにはめられた、悪いけど手伝ってくれ』

「はめられたって……ど、何処にいるんですか？」

『お前の目の前だ、見えるだろ？』

晶はモニターを確認すると、そこには大型E．B．Bの姿しかない。
後は絶対に近づくなと言われた例の巣穴――
そこで、晶は気づいた。
黄色いHAが、砂に流されて行く姿を捕えてしまったのだ。

「そ、そんな――い、今助け――」

『来るな、アンタまで巻き込まれちまうだろ。　アタシに策があるんだ……頼む、ロングレンジキャノンを運んできてくれっ！』

「え、ロングレンジキャノン……ですか？」

『そうだ、今すぐだっ！　配線は千切るなよ……使える状態で持ってきてくれっ！』

シリアの通信から聞こえてきたのは、とんでもなく無茶な依頼だった。
ロングレンジキャノンは元々持ち運びは容易ではなく、ここまで運ぶのにも時間がかかってしまう。
一体何に使うのかはわからないが、断るわけにもいかなかった。

「わ、わかりました……待っててください」

迷っている暇はない、晶はすぐに後退して残りのロングレンジキャノンの元へと向かう。

辺りには何機かのウィッシュの残骸が散らばっていた。

E．B．Bにやられたのか、黒いHAにやられたのかわからない。

……また、あの時と同じ悲劇が起きてしまっているのか。

既に残りの2台については、他の黒いHAが運び出そうとしていた。

この状況でありながら、何故E．B．Bを無視できるのか。

どうして、同じ人類を助けようと思わないのか？

「あいつら、絶対に許さない――」

晶は、スロットルを強く押し込んだ。

ギュンッ！　と加速させると、あっという間にロングレンジキャノンへと辿り着く。

「いい加減にしろよっ！！」

力任せに、ι・ブレードはムラクモを振り下ろした。

ズバァンッ！　と、黒いHAは真っ二つに切断された。

「メシアが何したってんだよ……人類を守るために、戦ってんだぞ……お前達だって、守られてんだろうがっ！！」

1機、また1機と晶は次々とに黒いHAを切り裂く。

機体は次々と、大破していった。

中には人が乗っている……人の命を、奪ってしまっている。

そんなことは、理解していた。

だけど、こんな非道な連中を放っておくわけにもいかない。
晶は、容赦なく……残りの黒いＨＡを全機大破させた。

「はぁ……はぁ……」

両手をまじまじと見つめ、今自分が行った行為を思い返す。
Ｅ．Ｂ．Ｂは平然と殺せるのに、同じ人となるとここまで違うものか。
今は余計なことを考えなくていい、晶は一刻も早くロングレンジキャノンをシリアへ届ける必要があった。

巨大な砲台を一機で持ち上げて、不安定になりながらも運んだ。
黒いＨＡが全滅した後は、他のウィッシュも徐々に後退を始めていく。
何機かやられてしまったが、やはりあのＨＡが場を混乱させたせいで後退できずにいた味方機が多かったようだ。

『少年、それをどうするつもりだ？』

部隊長から通信が入った。
ＨＡ一機でこんな砲台を運んでいれば、怪しまれても当然だろう。

「シリア機が砂に捕まってしまっているみたいなんです、これを運んで来いって頼まれまして」

『なんだと……？　ロングレンジキャノンなんてどうするつもりだ？　危ないから下がるんだ、救護は我々の手で行おう』

「た、多分何か策があってだと思います……す、すぐ戻りますんでっ！」

シリアは何を狙っているかはわからないが、あまり話している時間もない。
晶はスロットルを押し込み、最大速で大型E．B．Bの巣へと向かった。
幸いコードは長めに設定されており、E．B．Bの巣まで届いたようだ。

「つきましたよ、シリアさんっ！　どうすればいいんですか？」

『……アタシに向かって、投げろっ！』

「はい？」

『いいから、投げるんだっ！』

「わ、わかりました」

思わず素っ頓狂な声をあげてしまったが、シリアの必死な声に答えて晶は力いっぱいロングレンジキャノンを投げ込んだ。
まさかこのコードを使って登ってこようとしているのだろうか？
そんな無茶苦茶な発想は、何故かシリアならありそうだなと考えてしまった。
しかし、既にシリア機は奥まで機体が流されており、とてもじゃないがロングレンジキャノンはそこまで届くことがなかった。

『クッ……届けっ！』

シリアは機体の背に向けてグレネードを投げ込んだ。
すると、大爆発が発生すると共に機体が爆風で飛ばされる。

何とか、ロングレンジキャノンにしがみついた。

『ありがとな、流石ウチのエースだよ』

「ど、どうするんですか？」

『爆風だけじゃ足りないって思ってね……動いてくれるだろうな』

シリア機は、ロングレンジキャノンを操作して巣穴に向けてセットをする。

「ま、まさか――」

シリアがやろうとしていたことに気づいて、晶は思わず呆れた。
策も何もないじゃないか。
……シリアは、ロングレンジキャノンの反動を使って巣穴を脱出しようとしているのだ。

『アタシはまだ、死ぬつもりはないんでね……行くよ』

シリアがそう言った途端、バシュンッ！　という音と共に、銃口から紫色の光が放たれた。
反動で、シリアはロングレンジキャノンと共に強く上空へと打ち上げられる。
だが、大きな音に気付いた大型Ｅ．Ｂ．Ｂがシリア機をギロリと睨み付けていた。

「……当たれっ！」

ババンッ！　晶は二丁のブラックホークを、大型Ｅ．Ｂ．Ｂの頭部

へ向けて発砲させる。
奇声をあげたE．B．Bはハサミを大きく開いて、もがき苦しんだ。

『サンキューッ！』

「は、早く逃げましょうっ！」

晶はシリア機が無事に巣穴を脱出したことを確認すると、機体を後退させた。
砂漠には無数のE．B．Bの残骸と、敵味方を含むウィッシュの残骸だけが残された――

モニターからの映像は途絶えた。
メシアの部隊が撤退した合図でもある。
……全機、無事に帰還とはいかなかった。

「状況を報告しろ、カイバラ」

「はい、ジャミングからレーダーが復帰しました。　味方機は全２２機中１６機は戦域からの離脱に成功しています。
残りの機体は負傷、もしくは撃墜されたものと思われます。　黒いＨＡについてですが、残骸が確認されました。
恐らく何機かは撃墜されたと思われます
また……ロングレンジキャノンが１台奪取されたと報告がありました」

「……またしても、犠牲者が出てしまったというのか」

「はい……酷なことではありますが、事実です。　あの黒いＨＡの襲撃が主な原因と言えるでしょう」

ヤヨイは浮かない顔をしながら、呟いた。
艦長はそれ以上は語らず、黙っている。
確かにアヴェンジャーの手により、予想以上に被害を受けてはいるが今は彼らの対応については、後回しにするべきだ、と判断したからだ。

「大型Ｅ．Ｂ．Ｂはどうだ？」

「現在も活動中、小型E．B．Bについても周囲に反応を確認しております」

「……フリーアイゼンを出航させる、クルーを集めてくれ」

「整備がまだ不完全と聞きますが」

「急がせろ、あの怪物を野放しにするつもりはない」

「了解しました」

ロングレンジキャノンが通用しないとなれば、残された手段はただ一つだ。

フリーアイゼンによる主砲による討伐。

ロングレンジキャノンは、あくまでもHA用に設計された兵器であり、出力は戦艦の主砲より落とされて設計されていた。

これまでに何匹もの大型を撃ちぬいてきたフリーアイゼンの主砲ならば、あのフィールドを破れる可能性がある。

「フリーアイゼンの力を、見せ付けてやろうではないか」

艦長は高々と、中心地に待つ大型E．B．Bに向けて宣言をした。

撤退命令が下された部隊が基地へと戻ると、すぐに次なる作戦が指示された。
何機ものＨＡが格納され、整備班総出の緊急整備が行われていた。

次の作戦はフリーアイゼンの主砲を使い、直接大型Ｅ．Ｂ．Ｂを叩く事。
小型Ｅ．Ｂ．Ｂの討伐は戦艦による主砲での掃討が難しいため、ＨＡの利用が中心となる。
本来であれば、最初からこの形で討伐を行えれば理想ではあったのだが
フリーアイゼンが整備作業中にあり、出航することができない状態にあった。

代替案として用意されたロングレンジキャノンが通用しなかった以上、
フリーアイゼンの主砲に頼らざるを得ない状況へと至ってしまったのだ。

作戦内容は全パイロットに告げられた。
討伐部隊は撤退後、休み暇もなくフリーアイゼンの格納庫へと乗り込む事となった。
メシア基地からも整備班が増員され、ＨＡの緊急整備が始められていた。

「……」

その様子を、晶が黙って見つめていた。
大型Ｅ．Ｂ．Ｂに手も足も出せなかったことは仕方がない。
だが、それに追い打ちをかけるかのように例の黒いＨＡが出現をし

た。
あの状況を見ていながらも、どうして『人類同士』で争うのか。
晶はただ悔しくて、歯を食いしばった。

「晶、無事だったか」

「ゼ、ゼノスさん？」

ふと、背後からゼノスに声をかけられた。

「すまないな、ゼノフラムの整備で討伐に参加することができなかった。
……アヴェンジャーが現れたらしいな」

「あいつら、黒いＨＡに乗ってた。　あれはウィッシュなんかじゃない……多分、違うタイプのＨＡだ」

「独自の兵器を生み出したか、いよいよ奴らも本気を出したということか」

「レブルペインって言うらしい、あのイカれた女がそんな事言ってたさ」

ゼノスの横からは今度はシリアが顔を出す。
表情には疲れが見えている、あれだけ窮地に立たされたのだから仕方ないことだとは思うが。

「お前もよく無事だったな」

「ったくよ……妙な女に絡まれちまったんだ。　愛だのなんだのギ

ャーギャー騒ぎやがってさ。
あーやだやだ、当分愛って単語を聞きたくないぐらいだね、元々恋愛だの愛だのなんて興味ねーけどさ」

深くため息をつきながら、シリアは愚痴をこぼした。
晶は既に話を聞いていたが、聞けば聞くほど恐ろしいパイロットだ。
もし自分が同じ相手に目をつけられていたかと思うと、思わず背筋をゾッとさせてしまう。

「で、ゼノフラムは出せるのか？」

「不完全ではあるが、動かせる状態にはある。　だが、足場が悪いからな。　出撃は断念せざるを得ないだろう」

あの大型E．B．Bの巣穴を見てしまえば、確かに対大型E．B．Bを想定したゼノフラムでも思う存分にその力を発揮することはできないだろう。

「次は俺も出撃する、奴らが再度狙ってくる可能性もあり得なくはないからな」

「……あいつら、何が目的なんでしょうか」

「さあな、何が目的であっても奴らの行動は限度を超えているのも事実だ。　俺たちの手で、討たなければならない」

「そう、ですよね……俺達は仲間、殺されてるんですから」

口ではそう言っているが、晶はどこか思いつめた表情をしている。
確かにアヴェンジャーの行うことは非道であり、許されることでは

ない。
故郷のシェルターだってやられたし、そのせいでクラスメイトも死んでしまった。
だが、晶は何処かで人類同士で争うことに疑問を抱いており、少しだけ迷いが生じている。
……やらなければやられる。　仲間が失われる。
今は自分にそう言い聞かせ、自分を納得させようと必死だった。

辺りは既に日が傾き始めていた。
大型E．B．Bの活動は活発化しており、砂漠の中心地から小型E．B．Bが徐々にその数を増やし続けている。
一刻も早く大型E．B．Bを討伐しなければ、メシア基地の住宅街にまで被害が及んでしまう。
作戦は、夜を迎えようとしても決行された。
フリーアイゼンがその巨体を浮かせ、砂漠の中心地へと訪れた。
大型E．B．Bは巣穴から顔をだし、直立状態でハサミを大きく開いている。

「各位、状況を報告しろ」

「大型E．B．Bは現在もなお活動中、例のジャミングはありません、レーダーも正常です。
また、パイロット各位の出撃準備も整っています」

「主砲の準備はバッチリだ、いつでも指示してくれ。　あーあ、こんな時に現れやがってよE．B．B、せっかく休日を楽しんでたってのによ」

「作戦中だ、私語は慎め。　こちらリューテ、フィールドの状態に少々難があるが、作戦に支障はない」

「ケッ、真面目な奴」

ライルは不満げな表情を見せながら、モニターの前に存在する大型E．B．Bの姿を確認する。
すると、突如赤いE．B．Bから赤い光が出現し始めた。
あれが、ロングレンジキャノンの一撃を防いだ例の『フィールド』だろう。

「主砲発射後、パイロット各位を降下させろ」

「了解しました。　主砲のカウントダウン、始めます」

「よっしゃ、きたっ！」

ヤヨイの合図を確認すると、ライルは目の前の機械を使い、照準を整える。
目標は大型E．B．Bの頭部……コアを一撃で貫けば戦いは一瞬で終わるはずだ。

「１０、９、８、７、６……」

「ん……？」

ライルはふと、大型Ｅ．Ｂ．Ｂの頭部に赤い光が集っている光景を目の当たりにする。

ヤヨイもそれに気づき、カウントを中断させた。

「目標に高エネルギー反応を確認、カウントを中止します」

「おい、リューテっ！」

「わかっているっ！」

操縦桿を握りしめ、フリーアイゼンを大きく旋回させた。

その瞬間、大型Ｅ．Ｂ．Ｂから『赤い光』が発射された。

ズガァァンッ！　艦内が激しく揺れ、ブリッジ内からは警告音が鳴り響く。

「クッ……どうした？」

「左舷ブロックに被弾しました、直撃は免れたようですが……」

「ＨＡ部隊を発進させろ、目標の注意を引きつかせるんだっ！」

「了解しました、各位出撃してください」

フリーアイゼンから、一斉にＨＡ部隊が降下を始めた。

その間にも大型Ｅ．Ｂ．Ｂは第２射に備えて赤い光を集わせている。

Ｅ．Ｂ．Ｂから放たれたビームは、明らかにロングレンジキャノン

と性質が近いものだ。
直撃を受けてしまえば、いくらフリーアイゼンと言えど無事では済まない――

「奴め……こんな力まで隠し持っていたとはな」

「冗談じゃねぇぞ……なんちゅうもん持ちやがるんだ、E．B．Bの奴はっ！」

モニター越しから強く大型E．B．Bを睨み付けて、ライツはそう叫んだ。

「ライル、主砲は発射できないのか？」

「やっているっ！　それよりお前、ヘマすんじゃねぇぞっ！」

「承知の上だ」

その瞬間、第2射が大型E．B．Bから放たれる。
大きく船体を傾かせ、何とか避けることには成功した。
だが、タイミングはギリギリだ。
何度も撃たれ続けていては、リューテの腕があったとしてもいつかは直撃をしてしまう。

『艦長、ゼノフラムを出すぞ。　長距離でなら、戦えるはずだ』

「……許可をする、くれぐれも無茶だけはするな」

『了解』

ゼノスから通信が入ると、艦長は迷わずに答えた。
今は少しでも隙を作る手段が必要だ。
ゼノフラムの力を借りざるを得ないだろう。

『俺も手伝いますっ！　ブラックホークなら、あの大型にだって通用しますからっ！』

「すまない、主砲が発射されるまでの間何としてでも時間を作ってくれ」

「すっかり逞しくなったじゃねぇか、あの新人っ！」

「私語は慎めと言ったはずだ、ライル」

「いいじゃねぇか、ちょっとぐらいよ」

窮地な状況に立たされているにも関わらず、ライルは相変わらず呑気なことを口走る。
その間に、大型Ｅ．Ｂ．Ｂに向けて大量のミサイルが発射された。
ゼノフラムの一撃であろう。
大型Ｅ．Ｂ．Ｂは怯み、艦内にまで響き渡る奇声を上げた。

「よし今だっ！　発射させるぞっ！」

「カウントダウン開始します。　１０、９、９、７、６……」

フリーアイゼンの船体に存在する巨大な銃口から、紫色の光が集い始める。
同時に、大型Ｅ．Ｂ．Ｂの周りに赤いフィールドが出現し始めた。

「いいぜ、いい感じに出力があがってるぜっ！　これなら、ぶち抜けるかもしれねぇっ！」

「5、4、3、2、1……」

カウントダウンが終わりを告げようとした途端、大型E．B．Bに再び赤い光が集いだす。
頭部には激しく砲撃が続けられているが、一向に光が消える気配はなかった。

「……撃て、撃つんだっ！」

「了解、やられる前に……やっちまうぞっ！！」

ライルは迷わず、トリガーを引いた。
すると、フリーアイゼンの船体から巨大な紫色の光が直線状に発射された。
ズドォォンッ！　と激しい音と共に、船体が大きく揺れた。
発射後のタイミングを計って、瞬時にリューテが大きく旋回したが……やはり、回避には間に合わなかったようだ。

「左舷ブロックに直撃しましたっ！　フィールドのバランスが崩れかけていますっ！」

「私の方で何とか調整するっ！　それよりも、目標はどうなっている！？」

リューテはフィールドの状態を整えながらも、そう叫んだ。

「……生体反応、まだありますっ！」

モニターには、まだ蠢いているE．B．Bの姿がはっきりと映し出された。
だが、フィールドは貫通されているのは確かだ。
大型E．B．Bの動きが鈍くなっていることから、その効力に間違いはない。
やはり、フリーアイゼンの主砲は伊達ではなかった。

「もう一発必要か？」

「だが、今の一撃でフィールドが不安定だ。　今主砲を使うと船体が傾いて、墜落するぞ」

フリーアイゼンはエターナルブライトを動力源としており、そのエネルギーからフィールドを生成して巨体を浮かせている。
そのフィールドのバランスが崩れてしまった今、下手に主砲でエネルギーを使ってしまえばその状態を悪化させる危険性があったのだ。

「……構わん、撃て」

「艦長っ！？　ほ、本気ですか？」

ヤヨイは思わず耳を疑ってそう尋ねる。
まさかそれほどのリスクを負ってまで、このE．B．Bを倒そうというのか？

「何としてでもあの大型E．B．Bを止めなければならん……確かに弱まってはいるが、万が一もある。
ここは確実に我が艦の主砲で仕留めるぞ。　それが我々の使命だ」

「どうなっても知りませんよ？」

「艦長も思い切ったこと言いやがるな……いいぜ、乗ってやるよ」

「私も力の限り、サポートをするまでです」

全員の意思は統一された。

今まで何度も窮地を乗り越えてきた艦長だ。

その言葉は絶対であり、いつでもその判断は正しかった。

だからこそ、クルーは艦長の事を信頼しているのだ。

「カウントダウン開始します。　１０―、９、８、７……」

大型Ｅ．Ｂ．Ｂは赤いフィールドも展開する様子はない。

どうやら弱っているのは確実なようだ。

「６、５、４、３、２、１――」

「やっちまうからな、覚悟しろよっ！！」

ライルは再び、トリガーを強く引いた。

ズドォォンッ！　と、轟音と共に紫色の光が発射される。

同時に、艦が大きく傾き始めた。

フィールドのバランスが崩れてしまった証拠だ。

「フリーアイゼン、フィールド出力が低下中……ダメです、保てませんっ！」

「これ以上の維持は困難です、船体を不時着させますっ！」

大きく傾いたフリーアイゼンのバランスを整えつつ、船体はゆっくりと降下していく。
ズシィンッ！　と、大きく艦内が揺れると、フリーアイゼンは砂漠地で停止した。

「フリーアイゼン、不時着しました」

「目標は？」

「大型E．B．B生体反応……ありません」

モニターには、ぐったりと真っ黒な姿になった大型E．B．Bの姿があった。
頭部は完全に吹き飛ばされており、もう動くことはないだろう。

「どうやら、やれたようだな。　パイロット各位に告げろ、小型E．B．Bの討伐を継続させろとな」

「了解しました」

艦長はヤヨイにそう告げると、ふぅと一息ついた。
大型E．B．Bの新たな力に脅威を感じたが、無事に討伐されたことに心の底から安心する。
幸い現時点では死人も出ていない、もっとも残った小型E．B．B殲滅が完了するまでは油断はできないが。

「全く無茶なことしますね、リューテじゃなかったら船体ひっくり返って大変なことになってましたよ」

「ああ。　よくやってくれたな、お前達」

ライルは艦長にそう告げると、艦長は笑顔でそう告げた。
滅多に見せない表情を見せられて、ライルは驚きを隠せずにいた。

『おい、大丈夫かよっ！？』

慌ててシリアが通信を入れてきた。
フリーアイゼンが突如不時着してしまえば無理もない。

「少なくともクルーは無事だ、今整備班の者に状況を確認してもらっている」

『かぁー……アタシ達の家なんだから無茶だけはさせないでくれよな』

「肝に銘じておこう」

『どうやら無茶をしたようだな』

『だ、大丈夫ですかっ！？』

続いて、ゼノスと晶がほぼ同時に通信を入れてきた。
艦長は静かにその問いに答えていた。

まだ小型E．B．Bの殲滅は終わっていないが、ブリッジルームは驚くほど静かだ。
パイロットによる小型E．B．Bの殲滅は順調に行われている。
幸い、アヴェンジャーも仕掛けてくる様子はなかった。
窮地を乗り越えた者達には、ほんの少しの間だけ休息が与えられた
――

黒き反逆者　？（後書き）

ＬＲＣをロングレンジキャノンに直しました。
誤字修正と共に反映させました。

第6話　奪われた『G3』　？

第S級汚染区域。
それは、シェルター等の普及が間に合わずにE．B．Bの侵攻が深刻化している地域を指す。
階級はメシアが定めた危険度であり、S～Dまでの5段階で選定されていた。
代表的にあげられるのは旧名でアフリカ大陸と呼ばれていた場所であり、自然に溢れかえっていた地が仇となり
最も多くのE．B．Bが発生し、深刻な被害に遭った地帯であった。

汚染区域にも、メシアの基地といったものは存在しており、E．B．Bの討伐活動は繰り広げられている。
その地に配属されたメシア部隊は、D支部と呼ばれる支部を中心に活動を続けていた。
メシアは他にも世界各地に支部を設けて、活れぞれの管轄地域で活動を行っている。

D支部では、E．B．Bの活動が活発である事から、激しい戦闘行動が繰り返し行われ続けている。
第S級汚染区域では、特に被害が酷く今や一般人がとても住める状態ではない。
そんな中、メシアの技術班が直接現場へ配属されてとあるHAの開発を進めていたことがあった。

第S級汚染区域用に作られた『大量破壊兵器』をコンセプトとした世にも恐ろしいHAだ。
大量破壊というものの、あくまでも対E．B．Bに特化した意味で

あり、毒ガスや爆発の類ではない。
熱源探知機と呼ばれるものを利用し、付近のE．B．Bを自動的に殲滅する『サマールプラント』と呼ばれる武装が採用されていた。

汚染区域におけるE．B．B討伐活動には、本部からも大きく期待されていた。
『G3（ジースリー）』と名付けられたHAは試作機が完成された時点で稼働実験が行われたが、
その時に悲惨な事件を引き起こしてしまった。

熱源探知機が制御できず、サマールプラントが暴走をしてしまったのだ。
ありとあらゆる『生命体』を鋭いコード状の槍で貫き、多くの人が犠牲となってしまった。
槍はコックピット内のパイロットを突き刺し、残虐な大量殺人兵器へと化してしまったのだ。
その姿はまさしくE．B．Bと酷似しており、人々を恐怖に陥れる結果をなった。

それ以来、G3は開発の中止を余儀なくされてD支部に封印をされていたという。
自然溢れるジャングル地帯では、いくつもの異形が蠢いていた。
獣から植物といったものが、禍々しさを漂わせている。
そんな中、3機のウィッシュがE．B．Bの討伐活動を行っていた。
無駄のない動作で次々とE．B．Bを仕留めていくが、それでも数が減る様子はない。

「状況は？」

「マシにはなりましたけど、まだまだいますよ」

「大型E．B．Bの反応は？」

「この付近にはいないようです、引き続き捜索を続けましょう」

D支部からの部隊である彼らは、汚染区域内での見回りを行っていた。

E．B．Bの状況を確認し、大型E．B．Bが出現していれば仲間を集結させて討伐を行う。

そんな日々を繰り返し送っていた。

いつまでたっても数を減らすことのないE．B．Bとの戦いは、想像を超える厳しさだ。

彼らは日々、この汚染区域で激闘を繰り広げているのであった。

「……ん、なんだこれは？」

隊長機は、ふとレーダーに目をやると突如レーダーがまともに動作しなくなってしまった。

「隊長っ！　レーダーに異常を感知しましたっ！」

故障かと思ったが、他の隊員も同じような現象が起きている。

E．B．Bの新たな力だろうか？

「クッ……一度支部へ戻るぞ。　このままでは探索の続行は不可能だ」

「了解しました」

3機のウィッシュは一度支部へ戻ろうと、やむを得ず後退をした。

その時――

バシュンッ！　と、ライフルの一撃が一機のウィッシュの動力部を貫いた。

「なっ――」

ズガァァンッ！　突如、味方機が何者かの一撃を受けて破壊された。

もう一発、銃声が響き渡るとウィッシュが貫かれ倒れる。

何が、起きているのか？

今の銃声は、Ｅ．Ｂ．Ｂの仕業とは思えない。

ＨＡ……なのだろうか。

「……あれは？」

ふと、モニターから黒い影を確認する。

ＨＡのように見えるが、見たことのないタイプだ。

「こちらＤ支部、第０３部隊だ。　そこのＨＡ、所属を名乗れ」

通信で呼びかけるが反応がない。

一体どこのＨＡだというのか。

その時、黒いＨＡがライフルを構えて、発砲した。

「クッ……仕掛けてきた、だと？」

隊長機は辛うじて一撃を避けたが、その後に懐へと飛び込まれる。

ゼロ距離からライフルを放たれて、音もなく倒れ……爆発した。

ギロリ、と黒いＨＡの背後に赤い光が無数に出現した。
数十機を超えるＨＡが、そこに集結していたのだ。

Ｄ基地支部付近。
Ｅ．Ｂ．Ｂの襲撃に備え、厳重な警備がされていた。
外には見張り用のウィッシュが複数機配属されている。
基地内にあるオペレーティングルームでは、汚染区域各地の状況を監視できるようになっていた。

部隊の者が何かしら異常を知らせると、支部全体にサイレンが鳴らされる。
例えば大型Ｅ．Ｂ．Ｂの発見等がそれにあたった。
今回もまた、支部全体にサイレンが鳴らされた。

「こちらＤ支部だ、０３部隊、応答しろ」

Ｄ支部の司令官が、部隊からの連絡を受けてそう告げる。
第０３部隊からの合図だったが、通信で連絡を取ることができない。
まさかＥ．Ｂ．Ｂにやられてしまったのか、と映像とレーダーを確認しようとした。

送られてきた映像データには、黒いＨＡの影が映っている。
それに、レーダーに異常が確認され現在どのＨＡでもまともに使え

ない状態となっていた。

「０３部隊からの応答がない、誰か現場を確認しに行けるか？」

「既に０６部隊を向かわせています……通信、入りましたっ！」

『こちら０６部隊、未確認ＨＡを確認した。　Ｄ支部のものではない、我々に仕掛けてきている、至急応援をよこしてくれ』

「未確認ＨＡだと？　まさかこいつが……」

０３部隊から渡された黒いＨＡの映像を確認する。
Ｄ支部ではこのようなＨＡは扱っていない。
かといってメシアのデータベースには、このようなＨＡは存在しなかった。

ビービービービーッ！
再び、支部全体にサイレンが鳴り響いた。

「どうした、状況を報告しろっ！」

『な、謎の集団が支部内へ潜入っ！　ア、アヴェンジャーですっ！　間違いありませんっ！』

「ア、アヴェンジャーだと……？　まさか、狙いは『Ｇ３』かっ！？」

『お、終わりだ……あれを奴らに渡したら――』

プツン

突如、通信が途切れてしまった。

「どうした、応答しろ……おいっ！　……総員っ！　格納庫へ迎え、何としてでも奴らを食い止めろっ！」

『こちら０４部隊、現在黒ずくめの集団と交戦中。　中にバケモノが一人混じっている……かなり危険だ』

「バケモノだと？　まさかＥ．Ｂ．Ｂも潜入したというのか？」

『違う、明らかに人間だが――』

プツン――

またしても、通信が途切れてしまった。

「一体……何が起きているというのだ？」

状況が理解できずに、司令官はただ混乱するばかりだ。

『こちら０１部隊っ！　０４部隊が……全滅していますっ！』

「なんだと……殺されたというのか！？」

「お、恐らくは……」

思わず耳を疑った。

支部内では、Ｅ．Ｂ．Ｂの襲撃に備えて武装をすることを義務づけられているはずだ。

何十回ともあったＥ．Ｂ．Ｂとの死闘を繰り広げてきた部隊が、いとも簡単に殺されてしまうことなど考えられなかった。

「……クソッ！」

司令官は成す術もなく、ただ虚しく通信機に向けて拳を振り下ろすだけだった。

D支部内格納庫。

黒ずくめの集団が、まとめてその中へと潜入した。

一人の男が先陣を切り、例のＨＡへの元へ歩みだす。

「バ、バケモノがっ！！」

バァンッ！　と、対Ｅ．Ｂ．Ｂ用ライフルを隊員が放った。

男はバケモノのような右腕をさらけ出し、銃弾を弾き飛ばす。

隊員は、腰を抜かしてただその男に怯えるだけだった。

男の目の前には、巨大な緑色のＨＡが聳え立っていた。

何十枚にも重ねられた装甲に、ウィッシュよりも一回りも二回りも大きい外観だ。

「コイツで借りは返すぞ……『ι・ブレード』」

黒ずくめのマントの下には、全身に包帯が巻かれた『ガジェロス・

G・ジェイロー』の姿があった。
かつて晶のクラスメイトを目の前で虐殺して見せた、あの男だった
――

メシア本部内。
１０席の椅子だけが用意された殺風景な部屋に、各支部の代表が集められた。
白一色で統一された、とてつもなく気味の悪い部屋だった。
世間を騒がせている『アヴェンジャー』に対する対応方針について、まさに今検討されている最中だ。
本部の方針により、メシアの活動方針が定められる。
ここで、アヴェンジャーに対しての対応が決まれば、それはメシア全体の意志となる。

「アヴェンジャーの非道な活動は現在もなお継続されている。　日に日に活動の過激さは増しており、もはや無視はできないレベルであろう」

「第1にあげられるのは、旧日本列島のシェルター地区襲撃の件だろう。　たかがHA一つの為に、シェルターの住民を犠牲にするのは限度を超えている」

「また、メシアの各支部でもE．B．B討伐による支障が発生しており、被害者が増す一方だ。
D支部の『G3』も奪われてしまった以上、このまま野放しにすることはできん」

各支部の代表が集まり、それぞれアヴェンジャーに対する意見を述べていた。
全員の意見はほぼ合致しており、アヴェンジャーの行為がいかに非道なものであるかを認識させた。

「君達、待ちたまえ」

突如、初老の男が会議の場へと姿を現す。
赤い瞳に白髪で白衣を纏った長身の男、世界で知らぬ者はほとんどいない。
かの天才科学者、アッシュベル・ランダーだ。

「貴様、どうやってここへ侵入した？」

「アッシュベル・ランダー、メシア内において君はただの技術者だぞ。　こんなところまで足を運ぶとは何事だね？」

「また世界の革新をここで宣言するか？　アッシュベルよ」

「ふ、貴様らのような凡人には私の思想は理解できぬだろう……だ

が、私はそんなことを告げにわざわざこの場へ訪れたわけではない」
無表情で代表達に非難されようが、アッシュベルは一切怯まなかった。

「……聞こう」

「うむ、是非心して聞け。　確かにアヴェンジャーの行為は目に余る……非人道的であり、もはや完全な『テロリスト』だ。
だが、元々彼らは我々メシアから兵器を取り上げているのが何故か？　彼らが我々の技術を求める理由がわかるかね？」

「彼らにはE．B．Bと戦う意思はない。　考えられるとすれば、我々と争うことを考えているようにしか思えん」

「その通りだ、でなければ兵器を集め続ける理由が不明確すぎる。
自衛の為であれば、あそこまで過激な行動はとらないだろう」

アッシュベルは各代表の意見を耳にして、うむうむと頷き続ける。

「なるほど、凡人にしてはいい線ではある。　だが、そもそも人類を守っているはずの我々が何故兵器を奪われるのか？　疑問に思わないかね？」

「それはメシアの技術力がほしいだけだろう、ＨＡの技術に関しては事実上独占状態にある」

「うむ。　そう、私が言いたいのはそれだ。　彼らは、我々が技術を独占しているのが気に入らないのだよ」

「どういうことだ？」

「何故我々がＨＡの技術を握っていることが気に入らないと？」

ニヤリとアッシュベルは笑みを浮かべた。

予想通りの反応すぎて、思わず甲高い笑いをあげたくなるほどだ。

「我々が不必要に力を持ちすぎているのだよ、各国では最近ＨＡの開発ペースが急速に早まっている、技術面の進歩は素晴らしいとしか言えないがね。

だが、現状を考えればＥ．Ｂ．Ｂを討伐するにはウィッシュレベルで間に合っているはずだ。

なのに、人は技術を求め上を目指したがる……その結果、必要以上にＨＡが生み出されてしまっているのだよ。

例えば『Ｇ３』はいい例だろう、あれは行き過ぎた我々の技術によって最悪の殺人マシーンへと化けてしまったのだよ、諸君」

「何が言いたい、アッシュベル」

「我々が道を誤っていると言いたいのだよ、このままアヴェンジャーと交戦状態に入れば確実に『Ｇ３』のような兵器が生み出されてしまう。

勿論それはアヴェンジャーの奴らにも言えるだろう……お互いの技術力を出し合い、力尽きるまでＨＡ同士で戦い続ける……それは我々にとっては、不本意なことではないか？」

「しかし奴らを野放しにはできん、策があるというのか？」

「我々が兵器を放棄する……もしくは、圧倒的な力でアヴェンジャーを掃討するしか手はないと言っているのだよ」

「バカな、メシアがＨＡを手放すなど有り得ない。　世界中のＥ．Ｂ．Ｂは誰が討伐すると？」

「勿論、現状を考えればそれは不可能だ。　だからこそ、私自身はアヴェンジャーを徹底的に叩き潰すことに関しては同意なのだよ。だが、忘れないでほしい……我々のＨＡは決して人類同士で争う為に開発されたものではない、世界の為に、『希望』となるべく立ち上がったのだから」

「……貴様の告げたいことはよくわかった、もう出て行け」

「フフッ、私の話に耳を傾けてもらえたのは感謝しよう。　では、私も忙しい身でな。　失礼するとしよう」

不気味な笑いを浮かべながら、アッシュベルは静かにその場を去っていく。

「行き過ぎた技術は自らを滅ぼす、メシアの無能共はそれを理解しているのかね？」

アッシュベルは静かに、そう呟いた。

砂漠地帯で起きた大規模なE．B．B討伐から一週間近くが経過した。
フリーアイゼンの修理により、予定以上に基地へと滞在してしまったがようやく出航できた。
襲撃してきたレブルペインについては、既に艦長を通じて本部へと通達された。
どうやらレブルペインは世界各地にその姿を現したようだ。
同時期に、各支部が謎のＨＡによる襲撃を受けたと報告が絶えない。

フリーアイゼンは引き続き、遊撃部隊として活動を続ける。
次なる目的地は、日本地区の近くにある『メシア避難区域』だ。
晶や木葉のように故郷を失った者は、避難区域へ移住する権利を持つことができる。
メシアを通じれば手続きは簡単に済むので、移住には苦労することはない。
基本的に行動の自由を許されているフリーアイゼンだからこそ、避難区域へ人を運ぶ行為が許されているのだ。

だが、実際木葉は避難区域へ移住する事よりも艦内へ残る意志が強い。
今でも必死で入隊へ向けた勉強を艦内で続けていた。
晶もまた、パイロットとして日々厳しい訓練を耐え続けている。

「木葉、いるか？」

「あ、晶くん？」

少しだけ休憩時間をもらえた晶は、数日ぶりに木葉の元へ訪れた。
自室で山積みにされた資料に囲まれて、木葉は一生懸命勉強をしている。

「大丈夫、なのか？」

「うん、シラナギさんが資格とっちゃえばこっちのもんだって言ってたの。
だから今、メシア部隊向けの資格試験を受ける為に勉強しているの」

「た、大変だな……俺なんてこんな試験受けなかったのに」

「ううん、そんなことないよ。　晶くんは命をかけて戦っているけれど、私は違うから」

「でも一緒に戦ってくれんだろ、頑張ろうな」

「う、うん……頑張る」

木葉は顔を赤くさせながらそう呟いた。
色々と不安はあったが、木葉も新たな目標の為に頑張っている姿を見るとほっとする。
その時、晶の携帯が鳴った。

「はい」

『俺だ、すぐにブリッジへ来い』

「ど、どうしたんですか？」

電話の先はゼノスだった。
声からして緊迫した様子が伝わってくる。
まさかE・B・Bの襲撃があったのだろうか？
それとも、アヴェンジャー絡みか。

『詳しくはブリッジで話す、今はとにかく来てくれ』

「わ、わかりました」

ゼノスはそう告げると、通信を切った。

「お仕事？」

「あ、うん。　わかんねーけどさ、何か呼び出されたみたいで」

「応援してる、頑張ってね」

「ああ、木葉もその……頑張れ、よ」

晶は照れくさそうにそう告げると、急ぎ足でブリッジルームへと向かっていった――

奪われた『G3』　？

晶がブリッジルームへ訪れると、既にゼノスとシリアの姿がそこにあった。
何やら艦長と話し込んでいるようだが、深刻な表情を浮かべている。
その様子から見ても緊急事態が発生してしまったのは確実だ。
晶は恐る恐る、艦長の元へと訪れた。

「来たか、晶」

「な、何かあったんですか？」

「メシア本部から直に依頼が来たらしい、今回の任務は今までとは違うぞ」

「今までと、違う？」

やはりゼノスの表情は重い。
これまでいくつかE．B．Bの襲撃による討伐活動を繰り返してきてはいたが、こんな表情は見たことがない。
いつもなら無表情に近いゼノスの表情には、何処か『不安』や『焦り』を感じさせられた。

「我々に課せられた任務は『G3』の破壊、だ」

艦長が重い口を開き、晶にそう告げた。

「G3？　な、なんでしょうかそれは」

「第S級汚染区域にて開発が進められていたHAだ。　正式名称がつけられる前に開発中止となったのだがな」

「汚染区域……ですか。　ど、どうして中止に？」

「……G3は、殺人兵器と成り果ててしまったのだよ」

「さ、殺人――」

晶の表情は一瞬にして青ざめた。
艦長の口から告げられた一言はあまりにも衝撃的過ぎる。
どうして、対E．B．Bを想定したHAが『殺人兵器』となってしまったのか？

「熱源探知による、E．B．Bの自動追尾機能が『人』にも影響を及ぼしたんだ。　その結果、大勢の人がHAに殺されてしまった。過去に例のない、最低最悪な事件を引き起こしてしまったんだ」

ゼノスが口を開き、晶に事件について詳しく告げた。

「そ、そんな兵器がメシアで開発されていたんですか……。　そ、それの破壊ということは――」

「そういうこった、アヴェンジャーの奴らにそいつが奪われちまったのさ。
アタシ達はその『殺人兵器』を相手にしなきゃならなくなったらしい」

シリアから告げられた一言で、晶は事の重大さをようやく理解した。
まさかE．B．Bではなく、人が作り上げてしまった『殺人兵器』

の破壊命令が下されるとは、誰が想像できたのだろうか。

「現在『Ｇ３』の捜索については、メシア全部隊で行われている。
本部内の意向では、『Ｇ３』はＥ．Ｂ．Ｂとして処理をする方針として決まった。
作戦行動については後程知らせよう……やれるかね、君達は」

「今まで何度もＥ．Ｂ．Ｂ相手に命を懸けて戦ってきた。今更殺人兵器程度に恐れることはない」

「アタシもやるさ、アヴェンジャーの奴らは最近調子に乗ってるしな。この前の借りもキッチリ返してやらないと気が済まないよ」

ゼノス、シリアの両名は迷わず艦長にそう告げる。

「君はどうだ、未乃　晶」

「……俺だってパイロットですよ、そんな危険なＨＡ……ｕで破壊してみせます」

声が震えていたが、晶は艦長にそう告げた。
今まで大型Ｅ．Ｂ．Ｂ等を相手にし続けて、命を懸けて戦ってきたのも事実ではある。
だが、今回は『人』が作り出した兵器なのだ。
危険を考えればＥ．Ｂ．Ｂと大差はないはずだというのに、晶の中ではこれまで以上に恐怖心が高まっていた。

「検討を祈るぞ」

艦長はそう告げると、静かにブリッジルームを立ち去って行く。

「人類が生み出した負の遺産『Ｇ３』……まさか奴らにその情報が渡っていたとはな」

「ど、どういうことですか？」

ゼノスは晶に向けて、そう呟いたが晶は何の事だかさっぱりわからなかった。

「元々メシア内では、『Ｇ３』については箝口令が敷かれていたんだ

「隠そうとしたんですか？　ど、どうして？」

「意図的でなくとも殺人兵器として化してしまったＨＡの存在を世に知られてみろ、世界におけるメシアへの信頼は一気にガタ落ちだ。もしメシアが信頼を失ってしまえば、世界中の人々は何を信じればいい？　下手すれば、アヴェンジャーのような奴らが増加し続けて世界は大混乱に陥るだろう。
だからこそメシアは全世界の希望であり続けなければならない、時には事実を隠すことも重要なのさ」

「……そ、そうなんですか」

「まぁ、バレたときはそれはそれでもっと問題になるんだろうけどね。　実際メシア内にもその事実は知れ渡って入るし、完全に隠すのは無理さ。
アタシもちょっと、そういう事実を隠すのには納得がいってないんだけどね」

「メシアにも、色々と事情があるんですね」

内部事情を知ってしまうと、晶は複雑そうな表情を浮かべる。

「問題は一刻も早くG3の行方を突き止めないと……お前の故郷のような悲劇が再び引き起こされるかもしれんということだ」

「そうだな、あいつらの行方が掴めない以上どうすることもできない。　何か手を打っておきたいところだけどねぇ」

「……あいつら、まだιを狙っているんですよね。　俺達に仕掛けてくる可能性だって、あるんじゃないんですか？」

これまでのアヴェンジャーの行動を振り返ると、ι・ブレードが今もなお狙われているのは事実だ。

あんな大規模な事件まで引き起こして、今更諦めるとも思えない。

もしそうであれば、フリーアイゼンに仕掛けてくる可能性があるのではないか？　と考えたのだ。

「だろうな、本部の奴らもそれを理解した上で俺達に命じたんだろう。

ιの危険察知があれば、『G3』にも対応できると考えた可能性も否定できないが」

「ま、今は他の連中が探し回ってるしさ。　アタシらは報告を待っているしかないよ。

今日の訓練は中止にすっから、戦いに備えて体を休めとけよ」

「わ、わかりました」

シリアはそう告げると、ブリッジルームを立ち去っていく。

「俺はG3について調べてみる、確か艦内には映像データも存在するはずだからな」

「は、はい」

続いてゼノスもそう告げると、同じようにブリッジルームを去って行った。

晶は一人残され、呆然と立ち尽くす。

G3と呼ばれた機体、一体どのような恐ろしい兵器なのだろうか。

ゼノスやシリアが見せていた表情の重さからして、やはりただのHAではないことは推測できる。

……勝てるのだろうか、そんな『殺人兵器』に。

「……やるしか、ないだろ」

自分にそう言い聞かせ、晶は静かにその場を立ち去った――

アヴェンジャーが行ったG3の奪取により、メシア本部もようやく重い腰をあげて『対アヴェンジャー』に向けての活動に乗り出した。

だが、内部では人類同士で争う必要はないと、対アヴェンジャーに向けた活動を否定する者も少なくはない。

事実上、アヴェンジャーに向けた対策というのは『戦争』する、と同じ意味なのだから。

ゼノスは一人、その事を考えながら廊下を歩き続けていた。
未だにアヴェンジャーの目的については、不明。
今はただ、兵器を片っ端から集めるテロリストである認識でしかない。
だが、それ以上の疑問点は、アヴェンジャーの情報源だ。

ι・ブレードや、G3等といった情報は通常メシア外部の人間に入手できるようなものではない。
やはり、メシア内部で『アヴェンジャー』と繋がっている者が存在する、と考えるのが自然だ。

それを裏付けさせたのが、ι・ブレードを回収した後に奇襲を仕掛けてきた『一機のHA』……
通常、フリーアイゼンの位置情報を知り得るのは艦内の人間かそれを管轄する本部の人間だけだ。
砂漠地帯での襲撃も、偶然ではなく事前情報を持っての意図された活動だ。
何者かが、意図的にメシアを崩そうと企んでいるのか。
それとも、また『別の目的』が存在するのか。
どちらにせよ、人類にとって大きなメリットを感じられない行動であるのは事実だ。

考え事をしているうちに、ゼノスは倉庫室へと辿り着いた。
倉庫といっているものの、実際はゼノスの私室に近く、調べ物をするときは、ここに籠って作業をしている。
ガチャリ、とドアを開くと……そこにはゴソゴソと蠢く人影があった。

ゴチャゴチャと積まれた機材の中に、頭を突っ込んで探し物をしているように見える。
この間抜けな後ろ姿が誰なのかは、ピンク色のナース服を見てしまえばいとも簡単に想像できた。

「……何をしている、シラナギ」

「わわっ!?　ゼ、ゼノスですかっ!?」

ゼノスの声に驚き、バッとシラナギが立ち上がった。

「脅かさないでくださいよ、ビックリしたじゃないですかー」

「脅かしたつもりはない、お前が背後を気にしないのが悪いだろう」

「私はゼノスと違って一般人です、一緒にしないでくださいっ！」

シラナギは頬を膨らませながら文句を告げる。
そんなシラナギの横を素通りして、資料が並べられている本棚の前へと立つ。
ずっしりと並べられた本からG3に関する資料を探そうとすると、シラナギが興味津々にゼノスの隣へと立った。

「ほほーう、また調べ物ですか？　本当よくここにきますよね、ゼノスは」

「まぁな、お前は何か探していたのか？」

「そーです、あのうるさいおっさんから頼まれたんです。　何やら、エターナルブライトに関する調査記録がほしいだとか」

「それならここにあるぞ」

ゼノスは手慣れた手付きで、資料を片っ端から手に取ってシラナギの両手へと置いた。

「わわっ、お、重たいですっ！　流石ゼノスですね、すぐ見つけてくれるなんてっ！」

「お前が見当違いなところを探し続けてただけだ、機材の山に資料を置いておくわけがないだろう」

「それもそうですね、じゃあ私はこれさっさと渡してきますっ！　あ、ダジャレじゃないですよ？」

「待て」

シラナギが立ち去ろうとしたところを、ゼノスは呼び止めた。

「な、なんですか？　もしかして、親父ギャグになってた事に、気づいてませんでした？」

「Ｄｒ．ミケイルが何故、エターナルブライトに関する資料を？」

「うーん？　どうしてでしょうね？」

どうやらシラナギは何も疑問を抱いていないようだ。

少なくとも、医者である彼には無縁であるものだと思っていたのだが。

「他にも頼み事は何度かあったのか？」

「雑用なんていつも頼まれてますけど、大半放置しているんでよく覚えてないですよ。　あ、もしかして勝手に持ち出すのまずかったですか？」

「……いや、なんでもない」

「ならよかったです、じゃあ借りていきますからねー」

両手で資料を大事そうに抱えて、シラナギは立ち去って行った。

「……今は、『Ｇ３』について調べるべきだな」

ゼノスは手に取った資料に目を通した。

Ｇ３には、ゼノフラム開発において採用された技術が流用されているようだ。

公式では開発中止となったゼノフラムでも、いくつかの技術は認められており最新のＨＡに取り込まれているのは珍しくはない。

超重装甲を実現した『紫輝合金』を何十枚にも重ねたものは、ゼノフラムでも採用されているがその分機動性を大きく犠牲にしている。

大型のＨＡでなければ採用自体はされない事から、Ｇ３はゼノフラムと同様の大型ＨＤである事が容易に想像できる。

そして問題となった熱源探知機を利用した『サマールプラント』。

開発当時は、自動的にＥ．Ｂ．Ｂを追尾してコアを貫く『槍状』のコードであったが……実際には人体そのものに反応をしてしまった。

その結果、味方機のウィッシュや基地内の人間は全てサマールプラントにより串刺しにされてしまったのだ。

パイロット自身には、プラントキャンセラーという機能が搭載されており、唯一サマールプラントからの熱源探知を無効化する機能が搭載されている。
これにより、パイロットの命だけは助かってしまったという話は聞いたこともある。

だが、見境なく人間に襲い掛かるなんて欠陥は開発段階で気づかれてもおかしくないはずだ。
何故、直前までこの事実を誰も知らなかったのかも気になる。
やはり、ゼノスから見ればこの事件は意図的に引き起こされたとしか思えなかった。

「もう少し、調べてみるとするか」

ゼノスは引き続き、『G3』の調査を進めた。

晶は自室へ戻ると、一人ベッドの上で考え事をしていた。
入隊してから大分日が経ち、少しずつではあるが訓練を通じて上達を実感できるようにはなってきている。
だが、やはり『危険察知』に頼ってばかりでウィッシュ等の一般的なHAに搭乗すれば、自分はあそこまでの活躍はできないだろう。
E・B・Bの襲撃を受け、全てを失った結果……新たに『し』という力を手にして、念願のメシアへの入隊を果たせた。
本当は喜ぶべきことなのだろうが、そうもいかない。

第４シェルター東地区が襲われた時の事は、今思い返しても背筋がゾッとするほどの恐怖だ。
目の前で……『あの男』にクラスメイトを虐殺された。
忘れもしない、あれはまさしく『バケモノ』としか言いようがなかったのだから。
だが、日が経つにつれて木葉も大分ショックから立ち直ってきてはいる。
少しずつだが、新たな日常は手にできていた。

「親父は、襲撃の事も……俺がメシアへ入隊したことを知っているんだろうか」

未だに晶の父親からは、連絡が全く取れずにいる。
今となっては父親が何処で何をしているかも一切わからない。
父親は、何度か実家に帰ってくることはあったが、今はその実家そのものが消え去ってしまった。
帰ってきてから、初めて事実に気づくのだろうか。

コンコン
突如、ノック音が響いた。

「木葉だろ、入っていいよ」

多分木葉だろう、と晶は通した。

「あ、晶くん……」

何処か不安げな表情を見せて、木葉が扉を開ける。
例の殺人兵器について聞かされたのだろうか。

「シリアさんから聞いたの、新しい任務がきたって」

「心配しなくて大丈夫さ、Ｅ．Ｂ．Ｂ退治の時点で命懸けて戦ってんだからさ」

「そ、そうだけど……ちょっと、心配かなって」

木葉は俯きながら、そう呟いた。

やはり『殺人兵器』という言葉は、誰もが恐怖を抱く単語だ。

ある意味では『Ｅ．Ｂ．Ｂ』よりもよほど恐ろしい。

「木葉は自分の事で精一杯だろ？　俺なら大丈夫さ、こっちにはιの危険察知だってあるんだ。　必ず、生きて帰って見せる」

「う、うん……そう、だね」

心配させまいと、晶は強がってみせるが木葉の表情を曇ったままだ。

「ι・ブレードって、晶くんのお父さんが作ったんだよね？」

「あ、ああ……そうらしいけれど」

「だから、晶くんを守ってくれているのかな？」

「ど、どういう意味だよ」

「だってお父さんとお母さんって、子供の事はとても心配になるでしょ？　ＨＡが大好きなお父さんなら、子供を守るためのＨＡを作っちゃうんじゃないかなって」

「そんな馬鹿な話、あるわけないだろ。　あんなに最新技術を詰め込んでいるというのに、たかが俺なんかの……為、に？」

ふと、木葉の言葉を耳にしてある疑問について思い返す。
かつて、ι・ブレードは晶以外の人物が動かせたことがなかった。
そのι・ブレードが何故か晶の学園に保管されていたという事実。
そして父親が秘密裏に開発を進めていたという点。
何かの偶然が重なった、にしてはあまりにも揃いすぎていないだろうか？
それにどうして、そんな誰も乗れないはずの『ι・ブレード』を、アヴェンジャーがほしがっているのか？

「どうしたの、晶くん？」

「――あ、いや」

深く考えても答えは出ない、今は忘れよう。

「と、とにかく俺は……大丈夫だからさ、心配するなよ」

「……うん」

木葉は、ギュッ晶の手を握りしめて頷いた。

「絶対、死なないでね。　もう、私には……晶くんしかいない、から」

目尻に涙を浮かべながら、力弱く木葉は呟く。
木葉は、Ｅ．Ｂ．Ｂの襲撃によって全てを失った。

家も、家族も、親友もクラスメイトも何もかも。
晶もその苦しみはよくわかるし、同じ境遇ではある。
やはり、木葉自身はまだ乗り越えられていないのだ。
いつもは平然としているが、小刻みに震える手を見ると未だに何かを失う恐怖に怯えているのが伝わってきた。
今の木葉には支えが必要だ。晶自身が、少しでも支えにならねければ――

「俺は死なない、木葉もみんなも、この手で守って見せるよ」

かつての親友の願いも込めて、晶は力強く木葉に伝えた。
握られた手を強く握り返して、少しでも木葉を安心させようとする。
晶と木葉の目線が逢って、二人は一瞬だけ目を逸らした。
その後、木葉は笑顔になって、頷いた。

「信じてるからね、晶くん」

とある廃墟に、3機のHAが存在した。
2機のHAは……例のアヴェンジャーが開発した『レブルペイン』だ。
そしてもう1機は、奪われた『G3』の姿だ。
何故こんな廃墟地に、3機のHAが待機しているのか。

コックピット内で、大欠伸しながらマンガを読んでいる少年の姿があった。
かつて晶のクラスメイトであった、『白柳　俊』である。

「いつになったら行動開始すんだよ、リーダーさんよ」

『少なくとも夜を待たなければフリーアイゼンに仕掛けることはできん。　大人しく待機していろ』

「へいへい……あー退屈だな、さっさとぃとやらせてほしいのによぉ」

通信越しから聞こえる男の声を軽く聞き流しながら、再び俊は大欠伸をした。
彼らはアヴェンジャーとして、『ぃ・ブレード』の奪取を命じられた小部隊だ。
今は作戦に備えて待機中であった。

『ウヒヒッ、ぃなんてどうでもいいじゃない。　あのお姉さん、生きているんでしょ？　私再会するのがすっごく、楽しみなの』

「その笑い方やめろって、お前可愛いのに勿体ないだろ？」

今度は少女の声が通信で届いてきた。
いつ聞いても気味の悪い笑い声は、味方であったとしても恐怖心を煽られる。
だが、俊にとってはただの気持ち悪い少女であるだけだった。

『君は強いけど、愛してあげられないの。　だって戦うと、凄く怒られちゃうし。　だからね、嫉妬はしちゃダメだよ？』

「誰が嫉妬なんてするんだよ、全くとんでもねぇ女だな……顔は可愛いくせによ」

『言ったはずだ、アヴェンジャーには貴様を含めてまともな人間はいないと』

「ハハッ、違いねぇ。　俺は唯一まともでありたかったけどな」

マンガを読みながらも俊は、ちらりとモニターから見える『G3』の姿を確認する。
緑色の巨体は、一見何の変哲もないHAに見えた。
だが、この中に『サマールプラント』と呼ばれる殺人武装が存在するのだ。

「殺人兵器、ねぇ……こんなものに頼らねぇとぃを殺れねぇのか？　なっさけねぇな」

『ぃを奪うのは最優先の任務だ、このサマールプラントがあれば奴の危険察知にも容易に対応できるはずだろう。
かつて貴様が、偶然にも『ぃ』の危険察知に対応した時のようにな』

「だから、必要ねぇっつってんだよ。　そんなもんハンデの一つぐらいに思えばいいのによ、あー3人掛かりとかつまんねぇ任務になりそうだ」

『任務とは、貴様が楽しむために存在するものではない』

「いいだろうが、ちゃんとこなせばよ。　てか、その兵器って俺達にグサッと来るんじゃねぇだろうな？　ま、そしたら俺はテメェを

破壊してやるけどよ」

『その心配はない、既にお前たちのコックピットにはプラントキャンセラーが搭載されている。　サマールプラントの餌食になることはないだろう』

「ハッ、そうかよ？　全く、つまんねぇなクソッ。　そのG3ってやらを破壊する方が、よほど楽しそうだったのによ」

再び大欠伸をすると、俊はマンガ本をぽいっと投げ飛ばした。

「もー限界だ、寝ちまっていいよな？」

『好きにしろ』

「んじゃ、お言葉に甘えて」

俊は呑気にコックピット内で、昼寝を始めるのであった――

奪われた『G3』　？

夜が訪れ、フリーアイゼンは荒れ地の中心へ着艦した。
この地帯は、汚染区域程ではないが多くのE．B．Bが生息している。
艦内では夜間における万全の警備体制が敷かれていた。
E．B．Bを警戒するという意味が強いのは勿論だが、それ以上に危険視しているのは『G3』の存在だ。

アヴェンジャーがG3を使って、ιの鹵獲を狙っている可能性が非常に高い。
ブリッジルームにはいつでもフリーアイゼンを出せるようにライルとリューテの両名……そしてカイバラと艦長が待機をしていた。

「レーダーには注意しろ、以前奴らのHAが現れた時は異常を見せたはずだ」

「今のところ問題ありません、E．B．Bの反応すら出ていない状態ですから」

「しっかしG3ってのが本当にでてきたらどうすんだ？　相手は殺人兵器と恐れられるHAなんだろ？」

退屈そうにしていたライルが、艦長に向けてそう尋ねた。

「私達は毎日E．B．Bと戦っているというのに人間の兵器に怖がるなんておかしな話ですね、気持ちはわからなくもないですが」

「人間が作り上げたらこそ、やばいんだろ？　E．B．Bには人間

ほど賢い頭脳がないのさ、俺は殺人兵器を手にした人間のほうが怖いね」

「私語は慎めと言っている、ライル」

「チッ、そこのヤヨイさーんだって反応しただろうに」

ライルは口をとがらせて文句を垂れる。

「……これは？」

「どうした、カイバラ」

「新たにE．B．Bの反応を確認しました……数は少ないようですが」

ヤヨイは眉間に皺を寄せながら、報告した。

突如、全く別の方角からE．B．Bの出現を確認したのだ。

それだけであれば珍しくはないが、何かがおかしい。

レーダーからは、通常ある程度E．B．Bの種類やサイズが特定できるのだが――

「……ｕｎｋｎｏｗｎ、です」

不安げに、ヤヨイはそう呟いた。

突如現れたE．B．Bは、ｕｎｋｎｏｗｎを示していた。

HAならともかく、E．B．Bでこの表記が出されることは非常に稀なパターンである。

E．B．Bとは生物が異形に変化した形であり、レーダーはその生体反応を感知して情報化しているに過ぎない。

つまり、このレーダーが意味するのは『ここにいるのはE．B．Bかもしれないし、そうじゃないかもしれない』という中途半端な情報だったのだ。

『艦長、俺が偵察に行きますっ！』

ブリッジルームの会話を聞いていたのか、晶が通信を入れてきた。

「……くれぐれも気を付けるんだぞ、アヴェンジャーが絡んでいる可能性もある」

『ιには危険察知もあるんだ、何とかして見せます』

「わかった、健闘を祈る」

「艦長……いいのですか？」

何処か不安げな表情を浮かべ、ヤヨイは艦長に訪ねた。

確かに未知なるE．B．B反応を前に、晶を単機で向かわせるのは危険すぎる。

だが、リスクを恐れていてはフリーアイゼンの艦長なぞ務まらない。

メシア内で最優先すべき事項は、E．B．Bの殲滅なのだから。

「……シリア、ιのサポートを頼むぞ」

『言われなくても行くさ、安心してそこで待ってな』

ι・ブレードに続き、イエローウィッシュが現場へと向けて発進された――

晶はレーダーの反応を頼りに機体を進めさせる。
確実に反応へと近づいてはいるが、いくらモニターで確認してもE.B.Bの姿はそこにはない。
闇に染まった荒れ地をιのライトが照らしても……乾いた地面と瓦礫の山が続くだけだ。

レーダーの誤動作、とも思えない。
まさか、目に見えないE.B.Bだというのだろうか。
丁度、反応が一番強い位置へと晶は訪れ、ιを着陸させた。

ズキンッ――――

その途端、頭に激しい頭痛が走った。
危険察知が発動したのだ。

見えてきたのは、突如地面から無数の触手が出現する光景だった。
E.B.Bが地中に存在する可能性が高い。
晶は迷わず、ιを上空へと向けて高く飛ばした。
すると地面を突き破り、無数の触手が天高く伸びあがった。

「き、危険察知がなかったら危なかった……」

間一髪で避けた晶は、ホッとしていたが……触手がその場で留まることない。

無数の触手が、上空へと逃げたι・ブレードを目掛けて襲い掛かってきた。

「し、下だっ！」

晶はスロットルを押し込み、触手を潜り抜けようと急降下させる。
襲い掛かるGを堪えながらも、必死で晶は降下を続けた。
その時、再び危険察知が発動する。
地上から、明らかに『ＨＡ』による砲撃と思われる弾丸を確認した。

「アヴェンジャーかっ！」

間違いなく、アヴェンジャーの仕業であると晶は確信した。
急降下させ続けたιの軌道を強引に曲げて弾丸を辛うじて回避させる。
想像以上にGが襲い掛かるが、それでも何とか耐えて見せた。

ようやく地上へ降り立つと、休み暇もなく危険察知が働く。
無数の触手が容赦なくιに襲い掛かろうとしていた。
晶はひたすら触手から逃れようと機体を前進させるが、その時……
コックピットの『青い光』を感知する。

「まずい――」

ズガァンッ！
コックピットを大きく揺らす、重い一撃が晶に襲い掛かった。

「うわぁっ！？　ちょ、直撃した……？」

今のは明らかに正面から狙撃されたとしか思えなかったが、モニタ

ーで確認しても敵影は見当たらない。
レーダーを確認すると、既にジャミングの影響でレーダーは使い物にならくなっていた。
これで確信した、アヴェンジャーのＨＡが近くに存在すると。

再度、危険察知が働く。
触手がしつこく、ιを追い続けてきた。
その映像は何度見ても、ιのコックピットを貫いている。
晶は、ここでようやくその『触手』の正体に気が付いた。
これはＥ．Ｂ．Ｂなんかではない。

「まさか、Ｇ３……！？」

ゼノスから、ある程度概要を聞いていた。
Ｇ３の主力武装は熱源探知機を利用した『サマールプラント』。
それは生命体の持つ熱に反応を示し、一度ターゲットにしたら死ぬまで追い続けるといった代物だ。
だからこそ、大量殺人という悪夢を生み出した。

バシュンッ！　バシュンッ！
銃声が響くと、ι・ブレードの後ろを追っていた触手がまとめて撃ち落される。
背後を振り返ると、イエローウィッシュの姿があった。

『大丈夫か！？　アヴェンジャーの奴ら現れたんだろ？』

シリアが声を荒げて通信を入れてきた。

「だけど、まだ敵の姿が――」

そう言いかけると、再び危険察知が発動する。
再度、ＨＡによる狙撃がιに向けられた。
晶はその映像を凝視する。
僅かに、砲口のようなものを確認できた。

「あいつか……っ！」

迷わず、晶はムラクモを構えて狙撃を確認した位置へと機体を前進させた。
そして、闇夜に紛れていたＨＡの姿をようやく捕える。
ライトで照らされた『緑色』の巨体が、晒された。

「やるぞ、ι・ブレードっ！」

晶は勢いを殺さずに、ムラクモでＧ３を切り裂いた。
ガキィィンッ！　と、コックピットまでに響く金属音が響く。
ビリビリと伝わる振動に一瞬だけ目を閉じたが、すぐにモニターを確認する。

目の前の光景に、思わず目を疑った
ムラクモは、頑丈な胴体部をほんの少しだけ傷つけただけだった。
今までどんなＥ．Ｂ．Ｂもいとも簡単に切り裂いてきたムラクモでも、傷つくことのない装甲。
晶の背筋には、ゾクリと寒気が走った。

同時に危険察知が発動される。
Ｇ３の中心部から、ウジャウジャと触手が出てきた。
よく見ると、一部の触手が地面へと埋まっている。
最初に見たＥ．Ｂ．Ｂの反応は、この触手のようなコード状の槍……『サマールプラント』の反応だったのだ。

「く、くそっ……」

やむを得ず、晶は一度Ｇ３から離れた。

『大丈夫か、晶っ！？　今ゼノフラムも出撃する、一旦退くんだっ！』

「りょ、了解しました――」

シリアの通信に応えて、晶は一度後退しようとする。

すると、突如ιに通信が入れられた。

……Ｇ３のパイロットからだ。

『久しぶりだな、ιのパイロット』

「……こ、この、声――」

ドクン――

晶の心音が、高まった。

まさか、そんなはずがない。

あの男は確かに、ι・ブレードで……ウィッシュもろとも爆発に巻き込まれてはずだ。

生きているはずがない。

だが、この声を忘れるはずがなかった。

聞き間違える、はずもない――

『この前の借りは、キッチリと返させてもらうぞっ！』

G3から2連砲と無数の触手がまとめてιに襲い掛かっていった。
危険察知を駆使しつつ、晶は何とか攻撃を避け続ける。

「まだ……まだ殺したりないのかよ、そんなに人殺しがしたいのかよっ！？」

『目的には手段を選ばん、それが俺たちのやり方だ』

「黙れよ……俺は必ず倒す、アンタをっ！　もう二度と、あの悲劇は起こさせないっ！」

『そいつは無理な話だ』

ズキンッ――

ふと、聞き覚えのあるもう一人の男の声と共に危険察知が発動した。
目にも留まらぬスピードで、一機の黒いＨＡが切りかかってくる映像。
その速さは、以前に見たウィッシュとは比べ物にならなかった。

「ι・フィールド展開っ！」

咄嗟に晶は、ιフィールドを展開させる。
ガキィンッ！　と、複数の触手と一機のＨＡが弾かれた。

『よう、ビリッケツ。　ワリィな、本当はサシでケリつけてぇんだけどよぉ』

「……お前っ！」

間違いなく『白柳　俊』の声だった

『何だよ、もう1機いやがったのかっ！』

シリアは、レブルペインに向けて発砲する。
だが、無駄のない動きで弾は避けられ、あっという間に距離を縮められていく。
咄嗟に、シリアは2本のソードで敵の重い一撃を受け止めた。

『へぇ、メシア部隊は伊達じゃねぇってか？』

『あんまりアタシをなめんじゃないよ……っ！』

ドンッ、とイエローウィッシュはレブルペインに蹴りを一撃かますと、相手は抵抗なく引きさがっていく。

「シリアさん、大丈夫ですかっ！？」

『バカ野郎、自分の心配だけしてろっ！』

シリアの怒声に耳を傷めながらも、無事であったことに安心した。

『アッハッハッハッハッ！　ウヒヒヒィィッ！！』

突如コックピット内に、思わず耳を塞ぎたくなるような奇声が響き渡る。
どうやら、ιが何かの音声を拾ったようだが……この笑い方、正気とは思えない。
もう1機のＨＡが、イエローウィッシュへと目掛けて飛び込んできたのだ。

シリアは咄嗟に2本のソードで攻撃を受け止める
そしてその機体から逃げるように距離を置いた。

『クッソ、またテメェかよっ！』

『お姉さん、すっごーい。　どうして生き残ったの？　ねぇ、教えて教えて。　私に、逢いたかったから？　私の為に、死ねなかったの？
ウヒヒ、私もお姉さんが生きてて凄く嬉しい。　嬉しくて嬉しくて、凄く興奮して、ウヒヒ……アッハッハッハッハッハッ！！』

「な、何ですかこの人!?」

『知るかっ！　何でアタシが狙われなきゃならないんだよっ！』

シリアは謎のＨＡの襲撃により、ιから遠く離れて行ってしまう。

『残念だなービリッケツちゃんよぉ……俺としては不本意なんだがねぇ、こっちも色々とめんどくせぇんだわ』

『痛い目に逢う前に、大人しく投降しろ』

ただでさえＧ３を意識することで精一杯なのに、それに加えて俊の乗るレブルペインにマークをされる。
頼みのシリアは、もう1機やってきたＨＡの襲撃を受けて引きはがされてしまった。
とてもじゃないが、晶一人では勝ち目は薄い。

その時、背後から『ガトリング』の銃声が聞こえた。
新手の攻撃かと思われたその銃声は、決して晶を襲う事は無く

今まさに攻撃を仕掛けようとしていたＧ３とレブルペインへと降り注ぐ。

『その機体で俺の邪魔をするか……ゼノス』

『悪いが逃がすつもりはない、Ｇ３と共に眠らせるぞ』

ゼノフラムが、ι・ブレードの背後から姿を現した。

「ゼノスさんっ！」

『悪いな、出撃に手間取った。　Ｇ３を逃がすわけにはいかん……戦うぞ』

「ああ……やってやるっ！」

ゼノスの到着を機に、晶は反撃を仕掛けようとするが、その瞬間に危険察知が働いた。

再び、サマールプラントがι目掛けて襲い掛かる。

晶は即上空へと飛び込むと、ゼノスは同時に背後へ後退しながらガトリング砲でサマールプラントを撃ち落していった。

その瞬間、コックピットが青く灯った。

『待ってました、ιちゃんよぉっ！！』

「ぐっ……！」

真正面から直下してきたレブルペインを、ムラクモで何とか受け止める。

反応はできたが……危険察知が発動した。

今度は動きを止めたことにより、サマールプラントがレブレードに襲い掛かろうとしていた。

「何なんだよ、これっ！」

晶は強引にレブルペインを退き、ブラックホークでサマールプラントを撃ち落しながら逃げ回る。

だが、何度も落としても無数の触手は次々とG3が生み出され、キリがない。

『いやぁ、楽しそうだなぁビリッケツよぉ……できれば俺はそっち側になりたかったね、絶体絶命の状況ってすっげー楽しそうじゃねぇか』

「ふざけんなよ……HAを玩具だと思いやがってっ！」

逃げ続けながらも、晶は隙を見つけてレブルペインに斬りかかろうとする。

だが、瞬時に動きを見切られてしまい、逆に死角へ回り込まれてしまうだけだった。

危険察知で何とか回避はできているが、かなりギリギリのラインだ。

一瞬でもミスをしたら……やられてしまう。

ズガァンッ！

突如、轟音が響き渡った。

ゼノフラムのブーストハンマーが、G3へと直撃していたのだ。

だが、G3は少し装甲をへこませるだけだ。

流石に最先端技術者が集まる場所で開発されたHAと言えるだろう。

ゼノフラムであっても、ここまでの装甲を実現するはできなかったというのに。

『晶、目標はG3だけだ。　もう1機のHAは無視しろ』

「でも、振り切るの難しいですよっ！」

『いいからやれ……俺の合図で、『G3』を貫いてくれ』

「……わ、わかりました」

ゼノスの合図を待ち、晶はひたすらG3のサマールプラントとレブルペインの猛攻を避け続ける。
何度も繰り返す危険察知に頭を痛めながらも、死にもの狂いで晶は機体を操作し続けた。
ガンッ！　ガンッ！　と、何度もハンマーがぶつかる金属音を耳にしながら晶はまだか、まだかとゼノスの合図を待つ。

チラリ、とゼノフラムの様子を見ると……そこには目を疑いたくなるような光景が広がっていた。
ゼノフラムに次々とサマールプラントが撃ち込まれ続けていたのだ。
幸い装甲のおかげでコックピットまでに到達はしていないようだが、それでも危険な状態には変わらない。
そこまでしながらもゼノスは、G3にひたすら猛攻を続けていたのだ。

『おいおい、いい加減楽になっちまおうぜ？　お前が大人しく投降すりゃ、もうこんなに苦しまなくたっていいんだぞ？』

「だ、誰が投降なんて――」

危険察知が発動し、晶は攻撃を避けようとする。

だが、その時コックピット内が青く灯った。

「しまった――」

ガァンッ！　と、重い衝撃がコックピットに伝わる。
レブルペインによるソードの一撃を、思い切り受けてしまった。

「ほらよ、俺が本気出せばこんなもんだぜおい？　まぁ、もうお前死んだかもな」

俊がそう告げると、無数のサマールプラントが今にもぃに飛び掛かろうと集まってきた。
コックピットの強い衝撃で、晶はそれに全く気付けずにいる。
触手がコックピット目掛けて、まとめて襲い掛かろうとした――

『晶ぁぁぁぁっ！！』

バシュンッ！　バシュンッ！　と、後方から銃声が響き渡る。
レブルペインに追われながら、イエローウィッシュがぃに襲い掛かろうとした触手を全て撃ち落して見せたのだ。

「――ハッ……シ、シリアさん……た、助かりましたっ！」

『礼は後にしてくれ、さっさとG3を潰すぞっ！』

シリアは全力で背後をしつこく付き纏うレブルペインから逃れようとしていた。

『アッハッハッハッ！　お姉さん、どうして逃げるの？　照れているの？　ねぇ、ねぇってば。　私を愛して、くれないの？』

『しっつけぇんだよっ！！』

シリアは高く飛び上がり、後ろを永延とついてくるレブルペインを思いっきり蹴飛ばして見せる。

『よっしゃ、あっちのストーカーも任せなっ！』

続けてシリアは晶の近くを付き纏うレブルペインに向けて発砲する。だが、俊敏な動きで避けられてしまった。

『晶、今だっ！　Ｇ３の頭部をムラクモで貫けっ！』

「わ、わかりましたっ！」

晶は一瞬だけ自由になった機会を逃さず、空を高く飛び上がる。地上の様子を見ると、ゼノフラムが強引にＧ３の動きを止めている光景を目にした。

決死の思いでＧ３の動きを止めているのだ、ここで仕留めなければゼノフラムが持たない可能性だってある――

「行くぞ、ι・ブレードっ！！」

必ず、勝つ。

その思いを胸に、晶はムラクモをＧ３に向けて、急降下を始めた。

無数の触手が追ってくるが、危険察知は発動しない。

つまり、あの触手がι・ブレードを貫くことは、ない。

俊の乗るレブルペインはシリアによって動きが止められている。

邪魔者はいない。

サマールプラント……恐ろしい兵器だった。
振り切っても振り切っても、しつこく迫ってくるのはある意味Ｅ・Ｂ．Ｂとにた恐怖がある。
……こんな兵器、存在してはいけない。
人間が開発しては、いけなかったのだ。

「消えちまえよっ！！」

晶はスロットルとペダルを全力で押し込み、最大速度で落下をし続けた。
だが、その時――
危険察知が発動した。

Ｇ３から無数のサマールプラントが、襲い掛かってくる。
背後からも追われており、回避するには強引に軌道を変えるしかない。

「クッ……たの、むっ――」

何とか晶はサマールプラントを回避しようと、機体を傾ける。
僅かに軌道をずらし、晶はＧ３の頭上付近へと無事に辿りつけた。
だが、同時にコックピット内に青い光が灯る――

ズガンッ！
コックピットが大きく揺れて、ι・ブレードの動きが止まった。
一体、何が起きたというのか？
晶がモニターから確認できたのはＧ３を前にして、ιが動きを止めてしまった程度にしか過ぎない。

だが、負傷を告げる機械のアナウンスと警告音がコックピット内に

響き渡る。

「え――」

同時に、晶の目の前に無数のサマールプラントが襲い掛かってきた――

G3と睨み合ったまま、ゼノスは晶のι・ブレードに全てをかけていた。

いくら重装甲と言えど、ムラクモで頭部を一突きにしてしまえば、その機能を失うはず。

それにはG3の動きをどうしても、拘束する必要があった。

ゼノフラムの装甲であれば、サマールプラントの攻撃を耐え続けることはできる。

だが、それは決して長時間持つわけではない。

G3も何もせずにサマールプラントだけで攻撃を続けているわけではなかった。

何度もゼノフラムを砲撃し、直接腕で殴り掛かったりとし続けていた。

だが、それも乗り越え……ようやくゼノスはG3を捕えたのだ。

「……終わりだ、ガジェロス」

『終わり、だと？　笑わせるな、この程度でＧ３を拘束したつもりか？』

「例えゼノフラムが破壊されようと、この手を放すつもりはない」

ゼノスは強く、Ｇ３を睨み続けながらそう呟いた。

『詰めが甘いぞ、ゼノス……お前らしく、ないな』

「何？」

ゼノフラムはＧ３の両手を力強く捕えている。
流石のＧ３でも、ゼノフラムの力をそう簡単に振りほどくことはできない。
サマールプラントで串刺しにしようが、銃で撃ち続けようがこの両手を離さない限りは、動きが抑えられているも同然だ。
おまけに足には足枷のようにブーストハンマーを巻きつけてある。
飛び上がろうともすれば、ブーストハンマーの重さで機体バランスを失う可能性も高い上にリスクは高いが、最悪推進力を使って相手を強引に地上へ呼び戻すことだってできる。

『Ｇ３の力……甘く見すぎだ』

バキバキ、と音を立て……ゼノフラムの両腕に異常がきたした。
ゼノフラムの腕がもう長く持たない、そう悟ったゼノスは未だに上空にいる晶の到着を願う。
だが、距離はそう遠くはない。
もうひと踏ん張りで、Ｇ３は最期を迎えるはずだった。
その瞬間――ゼノフラムの両手が砕かれた。

『残念だったな、ゼノス……』

G3の両腕が自由になった途端、既に頭上にはιの姿があった。
だが、G3は瞬時に背中の巨大な槍を取り出し……ι・ブレードを貫いた。
ズガンッ！　と、鈍い音が響き渡る。
一瞬だけ、時が止まったかのような静けさが訪れた。
その後、無数のサマールプラントがιの元へ集う。

「……晶、返事をしろ。　晶っ！」

間に合わない、そうわかっていながらもゼノスはガトリングを構えた。
だが、既に時は遅かった。
サマールプラントは容赦なく、ι・ブレードに襲い掛かる――

「晶ぁぁっ！！！」

いつも冷静を装っていたゼノスが、取り乱した。
滅多に出すことのない悲痛の叫びが、鮮明に響き渡った――

第7話　それぞれの決意　？

フリーアイゼンは、夜が明けても出航をしなかった。
早朝からブリッジルームに、クルーが集められる。
驚くほど、静かで重たい空気だった。
誰もが暗い表情を見せ、何一つ言葉を交わそうとしない。

そこに、艦長が姿を現した。
いつも指揮を執る位置へと歩み寄り、整列したクルー達と目を合わせる。
重苦しい表情のまま、艦長は口を開いた。

「諸君、フリーアイゼンからまた一人、優秀なパイロットが失われた。
彼はまだ学生だった、若くしてパイロットを務め……ここで戦死をしてしまった。
これまでフリーアイゼンでは、数多くのパイロットが命を落としてきたが……その中でも、一番重みのある命であったといえよう。
彼はこれからの世の中心となるべく若者だった、何故若者が命を落とさねばならぬのか。
それもE．B．Bではない……人に手により、その命は奪われたのだっ！
これ以上被害者を出してはいけない、私は『アヴェンジャー』の行為を決して許さん。
例え相手が同じ人類であろうと、もはや迷ってはいられれん。
これ以上『未乃　晶』のような優秀な若者を、失わない為にも……
我々は戦うしかあるまい、『アヴェンジャー』と」

ブリッジルームがざわついた。
中には未だに、アヴェンジャーと戦うことを反対する者はいる。
だが、これまでの悪行を考えれば……何一つ、許されていいことはないのだ。
例えどんな理由を抱えていようと、彼らは立派な『テロリスト』であり、『E．B．B』以上の脅威となりつつあった。

「……私はこの意向を本部へと伝える。　異議があれば申し立ててくれ、私とて独断で艦を動かそうとはせん」

艦長は一言、そう告げるが誰一人異議を申し立てる者はいなかった。
賛同した、という意思表示なのか。
それとも場の空気がそれを許さなかったのか。

「以上、解散だ」

静かにそう告げて、艦長はブリッジルームを立ち去った。

「……晶、くん」

本当に、死んでしまったのか。
木葉は未だに信じ切れずにいた。

昨日の夜、ゼノスとシリアがフリーアイゼンに帰ってきた。
そこに晶の姿がなかった。

ι・ブレードが奪われた。

最初に聞いたのが、その言葉だ。
コックピットがサマールプラントにより貫かれ、動かなくなったι

をG3に鹵獲されてしまった。
ボロボロになっていたゼノフラムは、G3を追うことができず
イエローウィッシュもまた、2機のレブルペインを前にしてやむを
得ず撤退した。

誰もが直接死を確認したワケではない。
だが、あの状態ではパイロットが助かるはずがないのだ。
無数の触手に串刺しにされたコックピットは、G3が起こした悲劇
を再現した図だった。
その日、例外なくウィッシュのパイロットは死んだ。

木葉は目の前でその光景を見たわけではなかった。
だからこそ、晶が奇跡的に生きているんじゃないかと、心のどこか
で願っていたのかもしれない。
死なないでほしい。　約束をしたから、絶対生きて帰ると。

もしくは、晶がいなくなってしまったら……もう自分には何も残さ
れていない。
そんな願いから来たが、ただの現実逃避なのかもしれない――
紐で括りつけたナイフを、木葉はギュッと握りしめる。
木葉は静かに、自室へと足を運んだ。

ブリッジルームには、パイロット両名とブリッジルーム滞在のクル
ー達だけが残された。
艦長の言葉を耳にして、晶の死という現実に直面した。

「……クッソッ！何で、何でアイツが死んじまうんだよっ！！」

ガンッ！　と、シリアは壁に蹴りを入れて叫んだ。
どうすることもできなかったのか、晶を危険に晒さない方法なんて、いくらでもあったはずなのに。
Ｇ３は殺人兵器だ、もっと警戒を強めていくべきだった……だが、後悔しても遅い。

「何とか言ったらどうだゼノスっ！　アンタがしっかりしねぇから、晶が殺されたんだぞっ！？」

怒りに身を任せたシリアが、ゼノスの胸倉を掴み叫んだ。
ゼノフラムがしっかりＧ３を抑えていれば、晶は死なずにすんだ。
死ななかった、はずなのに――

「よせ、シリアっ！」

止めに入ったのは、ライルだった。

「なんだよ……離せっ！」

「仲間割れなんてしている場合かよ……そんな事しても、死人は帰ってこねぇぞ……」

「うるせぇっ！　コイツがもっと、しっかりしてりゃ――」

「目を覚ませバカ野郎っ！」

バシンッ――
乾いた音がブリッジルームに響く。

ライルの平手打ちが、シリアの右頬を直撃した。

「お前も確かに辛いだろうがよ……一番辛いのはゼノス自身だろうがよっ！
あいつが一番近くにいながら、晶を守れなかったんだ。　お前だけが、辛いんじゃねぇよっ！！」

普段お調子者である彼が、こんなことを口にするとは思わなかった。
そこにはヘラヘラとしたライルの姿は何処にもない、真剣な眼差しでシリアと目を合わせている。
シリアは思わず、自分が情けないと感じた。

「……悪い、ゼノス」

「気にするな、お前の気持ちは痛いほどわかる」

表情一つ変えずに、ゼノスはそう告げた。
だが、あの時ゼノスの詰めが甘かったのも事実だ。
もう少し手段を考えれば、あの悲劇は起きなかったのかもしれない。
――今更考えたところで、もう遅いのだ。

「部屋に戻る」

ゼノスは一言告げると、ゆっくりと歩みだす。
哀愁の漂った男の背中を、クルー達は見送った。

「……人の死とは、何度遭遇しても慣れないものですね」

ヤヨイは悲しそうにそう呟いた。

「慣れてしまったらおしまいさ」

「辛いけどな、俺達は乗り越えなきゃいけねぇんだよな……身近な死って奴をさ」

リューテは静かに自分のポジションへとつく。
いつでもフリーアイゼンが発進できるように、準備を始めた。

「……アタシは、トレーニングでもして頭を冷やすさ」

冷静になったシリアは、先程のような気迫は何処かへ消えてしまっていた。
意気消沈した状態で、トボトボとブリッジルームの外へ出て行くのだった。

木葉は自室へと戻っていた。
窓から見える光景は、何処か寂しげに見える。
自分の心情を現しているのか、わからない。

晶は死んでいない、生きているに決まっている。
約束したから、絶対に死なないと。
何度も何度も約束を頭に過ぎらせていたが
もしも……万が一に、晶が死んでしまっていたとしたら?

想像したくもなかった。
E・B・B襲撃によって家族を失い、クラスメイトも何もかも失った。
唯一生き残ったのが、晶だけだったというのに。

晶は昔からの幼馴染だ。
期間だけで考えれば、ほぼ家族と同じぐらいの付き合いであり
お互いに欠かせない存在だった。
昔から木葉は、自分の事よりも晶の事を心配ばかりしていた。
竜彦からも怒られることは多かった、少しは自分の事を心配しろと。
困ったときは相談に乗ってやる、と言って何度も相談に乗ってもらった。

ほとんど晶の事ばかりで、よく笑われていた。
あいつのこと、好きなのか？
そんなことも何度か言われたけど、肯定も否定もしなかった。
少しでも意識してしまえば今の関係が崩れてしまうんじゃないかと。
だから、恋愛的な感情は持たないようにしてきた。

晶の傍にいたい、力になってあげたい。
だが、晶がいなくなってしまえば
傍にもいれないし、力にもなってあげられない。
そんなのは、嫌だった。

木葉は無意識のうちに、ナイフを取り出していた。
ギラリと銀色の刃が怪しく煌めく。
晶を守る為、とずっと持っていたナイフ。
だけど、今のままでは晶の為には役立てそうにもない。

ならば――

木葉はそっと、右手首にナイフの刃を当てた――

「な、何してるんですか木葉ちゃんっ！？」

慌ただしく、シラナギが木葉からナイフを取り上げた。

「あ――」

木葉は我に返ると、自分の手首をまじまじと見つめていた。

幸い、ナイフで傷をつけることはなかった。

……今、私は何をしようと？

「……シラナギ、さん。　私、今何を？」

「しっかりしてくださいっ！」

「あ……」

シラナギは、優しく木葉を抱きしめた。

「――お願いです、生きてくださいっ！！

晶くんは死にません、あの程度で死ぬような男じゃないですよっ！

私、絶対生きてるって信じてますっ！　だから、一緒に信じてくださいっ！」

晶の死によって、木葉が混乱していると思ったのだろう。

以前にあのナイフを見てしまっては、シラナギが心配で様子を見に来るのも無理はない。

木葉を落ち着かせようと、必死だった。

木葉はただ呆然とするだけで、何も語ろうとしない。
ただ、自分が今しようとした行為に驚くだけで。
シラナギの言葉は、耳に入らなかった――

目の前は、真っ暗だった。
意識が朦朧としている、今自分がどうなっているかが正常に判断できない。
暗闇にうっすらと光が差し込むと、少しだけ意識がはっきりとする。

……気絶、してしまっていたのか。
ぼんやりと瞳を開いていくと、視界が定まらずに目に映る光景が全てぼかされて見える。
とてもじゃないが、ここが何処なのか判別はできなかった。
少しずつ感覚を取り戻していくと、ズキンッと全身に痛みが走った。

無理に腕を動かそうとすると、更にズキズキと体中の痛みが激しくなるだけだ。
痛みによって戻された意識によって、ようやく自分が今横になっていることに気づかされた。

今度は尋常ではない頭の痛みに襲われる。

まるでιシステムを起動したときのような痛みが持続的に続いていた。
ここは、一体どこだ。
自分は、どうしてしまったんだ？

少し前に起きた状況を、一度頭に思い返す。
晶はι・ブレードに乗って、戦っていた。
ゼノフラムが、Ｇ３の動きを止めている間に……上空からムラクモで突き刺そうと飛び上がった。
だが、それは失敗したんだ。
はっきりとは覚えていないが、それは紛れもない事実だとわかっていた。
その後は、どうしたか？

コックピットが激しく揺れ、モニターからは無数のサマールプラントが襲い掛かってくるのをこの目で見た。
危険察知は発動しなかった、いや、発動したとしてもどうすることもできなかったのだろう。
その時点の晶では、目の前に移ったものが何なのか、自分の身に一体何が起きたのかまるで理解できていなかったのだから。
視界が歪み、バキバキィッ！　と、金属製の壁がぶち抜かれていく音が聞こえた。
コックピットの中に、何かが突き進んでいる。
何となくだが、そこまでの状況は記憶に残っている。

その後視界が真っ赤な光に包まれた。
これまでに灯っていた、コックピットの赤い光とは違う。
もっともっと、強い輝きだった。
何処か安らぎを感じるような輝きに、包まれた。

記憶にあるのは、ここまでだ。

「目を覚ましたか、ιのパイロット」

ふと、男の声が耳に飛び込んだ。
まだ意識がはっきりとしていないせいで、声だけではその人物が誰なのかがわからない。
もしかすると、まったく知らない人の可能性もある。

誰かが通信でも入れた、かと考えたが……違う。
今のは明らかに、コックピット内じゃないことは理解できていた。

バシャンッ！
ふと、顔に冷水がひっかけられた。
身も凍りつくような冷たさに体は驚かされて、ここでようやく晶の意識ははっきりと戻した。
ようやく正常となった視界で確認したのは、出来れば二度と逢いたくなかった人物の姿が映し出された。
一瞬まだ視界がおかしいのかと疑ってしまうほど、信じ難い事だった。

紫色の短髪に、サングラスに軍服。
右腕全体にグルグルと巻きつけられている包帯。
あの時見た、バケモノと同じ姿だった。

ガジェロス・G・ジェイロー。
晶のクラスメイト達を目の前で虐殺していった張本人だ。

「飯の時間だ、食っとけ」

ガジェロスが片手に持っていたのは、何処からどう見ても平凡な和食だ。
焼き魚に味噌汁にご飯、漬物までもつけられている。

「な、何でお前がっ！？」

意識がはっきりしていないせいもあるが、晶はこの状況に混乱していた。
普通に考えれば有り得ない、アヴェンジャーの人間とこんな形で対面している状況など。

「毒は盛っていない、安心して食うんだな」

「ふざけんなよ……お前、自分がしてきた事をわかっているのかっ！？」

「一度狂っちまった人生だ、今更何をしようが関係ねぇ」

「何人が犠牲になったと思ってんだよ……お前達さえ来なければ、竜彦は――」

この男の姿を見るだけで、あの時の悪夢がよみがえる。
目の前で虐殺され続けたクラスメイト達。
強制的に出撃させられていったパイロット候補生達。
そして……E．B．Bに食われていった竜彦の姿を――

「その口を閉じろ、ガキ。　テメェが今どんな状況下にいるか、きっちり教えてやろう」

ガジェロスは、銃を持ち出して晶の額へと突きつけた。

背筋をビクリとさせ、晶はガクガクと体を震わせる。
こいつは迷いもなく人を殺せる。
下手なことをすれば、額を撃ちぬかれて殺されてしまう――

「テメェは負けたんだ、G3と俺にな。　敗北したお前は、ιと共に……連れてこられたワケだ、これが何を意味するかわかるか？」

「――まさか」

嫌な予感がしていたが、どうやら予感は確信へと変わってしまった。
晶は、捕虜にされてしまったのだ。
『アヴェンジャー』の奴らの――

「だが、上層部の意向で手荒な真似をするつもりはない。　ιを使えるのがテメェだけだからな。
だが少しでも妙な真似をしてみせろ……その時は、殺す」

「……！」

ギロリ、とサングラス越しから晶は睨まれた。
殺される――
この短期間で何度、そんな単語を過ぎらせたか。

「う……」

再び、晶に激しい頭痛が襲い掛かる。
晶は強く頭を抱えて、苦痛な声を上げた。

「ιシステムの後遺症か？　あれだけ危険察知を繰り返せば、脳の負担も高いだろう。　脳が壊されなかっただけ有難いと思うんだな」

「クッ……ど、どうして俺を……生かすん、だ」

「決まっている、テメェをアヴェンジャーの一員に迎える為だ。俺としてはテメェみたいな青臭いガキなんてお断りだがな」

「俺を……アヴェンジャー、に？」

そんなことは、絶対あってはいけない。

晶は強く否定しようとするが、頭痛のせいでまともに言葉を交わすことが出来ない。

それ以上に、下手なことを口走るとこの男に殺されてしまう恐怖というのもあった。

「しかし……あれだけコックピットを串刺しにしてやったのによくもまぁ無事だったもんだ。

もっとも、生きていてくれた方がこっちとしては有難かっただが」

「……何で、メシアの邪魔ばかり――」

晶は頭痛に苦しみながらも、必死で声を振り絞っていた。

本心では恐怖心を抱きながらも、敵から情報を探ろうと必死だったのだ。

「飯食って寝ていろ、ガキ」

ガジェロスは乱暴に食事を置くと、そのまま重い鉄格子の扉を開いて外へと出ていく。

ガシャンッと扉が閉まる音がした。

「クソッ……どうにかして、にげない……と――」

晶はふと意識を失い、その場で気絶をした――

それぞれの決意　？

再び薄暗い中で目を覚まし、身体を起こした晶に襲い掛かったのは目眩だった。
足に上手く力が入らず、パタリと床へ倒れこむ。
食事もろくに摂っていないせいもあるだろう。
幸いなことに、体の痛みと忌々しい頭痛は消え去っていった。
順調に回復はしているようだが……万全の状態ではない。
そんな時、再びガジェロスが監獄へと足を踏み入れてきた。

「飯も食わずに寝ているからだ、バカ野郎が」

「……」

地べたに這いつくばりながらも、晶はガジェロスを睨んだ。

「どうした、俺は別にお前を殺そうとは思っていない。　こう見えても、必要のない殺しはしないのさ」

「嘘を、つくな――」

あれだけ大勢の生徒を殺したガジェロスが、そんな言葉を口にする資格はない。
冗談としても笑えない一言だ。

「アンタは殺した……何人も、何十人もの人をっ！」

「だったらどうする、俺を殺すか？　面白い、やってみろ」

ニヤリ、と笑みを浮かべてガジェロスは銃を手にする。
すると、倒れている晶の両手にしっかりと握らせ、それを自らの額へと当てた。

「お前の仇は目の前にいる、今その引き金を引けば……俺の額は鉛の塊に脳天をぶち抜かれるわけだ」

「……」

「どうした、やれるものならやってみろ……お前如きでは、俺を殺すことはできねぇ」

何を意図しているのかは、わからない。
晶は不用意に近づいてきたガジェロスを、少し不気味に感じた。

手がガチガチと震え続けている。
この引き金を引けば、一人の命が消される。
それで本当に、いいのか。
だが、それ以上に『恨み』という感情が今にも爆発しかけていた。
虐殺された生徒や住民、助けに来てくれた自衛隊の隊員。
無様にもE．B．Bによって命を落としたパイロット候補生……そして竜彦。
許せるはずが、なかった。

バァンッ！

晶は、迷わず引き金を引いた。
ガジェロスは勢いよく吹き飛ばされた……が、血が一切飛び散らな

い。
ほぼ密着した状態で、発砲したにも関わらず。
弾が軌道を外れるはずがない。
空砲だった可能性も考えたが、それも違う。
今の手ごたえからも、微かに聞こえた銃弾が弾ける音からも……直撃したのは間違いなかった。
だが、ガジェロスは立ち上がった。

「……わかったか、未乃　晶」

右腕の包帯をゆっくりと解く。
以前にも見た、まるでE．B．Bのような異形の右腕が姿を晒した。

「俺はもう、人じゃねぇ。　正真正銘の、バケモノなんだよ」

ガジェロスの言葉に、嘘偽りはない。
現に真正面から銃を撃たれても、額が撃ちぬがれることはなかった。
いや、そんなことしなくとも……あの右腕を見てしまえば誰もが信じるだろう。
もはや、右腕は人とは思えない異形……E．B．Bそのものだったのだ。

「俺は好き好んでこの腕……いや、この体を手にしたわけじゃねぇ。
意図的に、この体にされちまったのさ」

「され、た？」

「何もエターナルブライトを通じて異形になったのは、そこらの動物だけじゃねぇ……人間だって、その一部だってことさ」

「人間……エターナル、ブライト？」

「俺は、『改造』された。　エターナルブライトの実験体として、使い捨てにされたのさ」

「なっ――」

ガジェロスの言葉を耳にして、晶は驚きを隠せなかった。

人体実験……

まさか、エターナルブライトで人体実験が行われていたというのか？

一体、何の為に？

「この体にされた当時は、ひどかったもんさ。　俺の右腕が俺の意識と関係なく、片っ端から人の命を奪っていった。

まさにあの、Ｇ３のサマールプラントのようにな」

晶の頭の中で、あの悲劇が再生される。

無数の触手がクラスメイトを襲い、虐殺し続けてたあの悪夢を。

……それと同じことを、過去に何度もやってきているというのか。

「そのうち知り合いまでも殺し、家族にまで手をかけた。　俺の意思とは関係なく、人の命がゴミのように失われていったのさ」

ガジェロスは、その異形と化した右腕で晶の胸倉をつかんだ。

「今こうしている間にも、俺の右腕がテメェを串刺しにするかもしれねぇ。　だが、最早この腕が誰を殺そうが、関係ねぇ」

「……アンタは、それでいいのかよ」

「さあな、もはや考えることすら放棄した。　今でこそ昔ほど暴走しなくなったと言えど、俺は人の命を何とも思っちゃいない。……アヴェンジャーには、そういう過去を持つ奴が、集っているのさ」

晶を開放すると、ガジェロスはその右腕に包帯を巻きなおす。
晶はその様子を、ただ眺めているだけだった。

「俺達は、俺達の人生を狂わせた野郎に復讐したいだけなのさ。その為には、どうしても力が必要だ。例え俺達が滅ぼうとも、『アヴェンジャー』のような組織は必ず現れる。　あの男を、止めない限りな」

「あの、男……？」

「そうだ……かの天才科学者……『アッシュベル・ランダー』をな」

「アッシュベル・ランダー……だって？」

「ついてこい、俺が語るよりも……もっと信用できる奴の話を聞いた方がいい。
その方がテメェも……目を覚ますだろうがよ」

倒れたまま呆然とする晶を、ガジェロスは左手で引き上げる。
晶は抵抗もなく、ガジェロスに連れられていく。
それは決して抵抗を諦めただとか、そんな理由ではなく。
ただ、今聞かされた話の衝撃が大きすぎた……それだけだった。

延々と暗い廊下が続く中、ガジェロスと晶は静かに歩み続ける。
ガジェロスは特に危害を加えようとしない、それは事実のようだ。
手で強引に引かれながらも、晶はそのおかげで何とか歩き続けることはできた。
命を狙っていないというのは信じていいのかもしれない。
だが、やはりこの男が危険であるというのは変わりがない。
敵の施設にいる以上、安心できる保証などないのだから。

「……入れ」

ふと、ガジェロスは立ち止まると扉を開く。
暗い廊下に明かりが差し込み、少し眩しかった。
ここで立ち止まっていても仕方がない、晶は恐る恐る開いた扉の中を潜る。

カタカタと、タイピングの音が耳に入った。
そこにはメシアでも見るような最新の機器が一通り揃っている。
何かの開発室、なのだろうか。
白衣を着た男の背中が目に留まる。
何処か見覚えのある背中だった。
だが、晶はその懐かしさの正体をすぐ知る事となる。

「……よく無事でいてくれたな、晶」

「え――」

晶の頭の中に、電撃のような衝撃が走った。
まさか、いやそんなはずはない。

頭の中で否定し続けるが、何度見てもその人物が姿を変えるはずがない。
……その男の正体は、晶の正真正銘の父親

『未乃　健三』だった。

「ガジェロス、君は下がっていてくれ」

「……ああ」

健三の一言で、ガジェロスはすんなり部屋の外へと出ていく。
有り得ない、あの男が何故素直に引き下がる？
父親はメシア所属の開発者。
決して、アヴェンジャーという組織に属しているはずがないというのに。
何故、ここにいる？

「信じられないか、私がここにいることが」

「親父……何、やってんだよ」

「いずれ、お前がここに訪れることを待っていた。　色々と予定が狂ってしまったが、お前と再会できて嬉しく思うよ」

「……何してんだよっ！」

晶が口にした言葉は、父親との再会を喜ぶような言葉ではない。
ただ、目の前に突き付けられた現実を前にし、力強く叫んだ。

「隠す必要もあるまい。　今の私は、アヴェンジャー所属の開発者

だ」

嘘だと、言ってほしかった。
何かの間違い、晶の勘違いであってほしかった。
だが、現実だった。
未乃　健三は……アヴェンジャーの一員だったのだ。

「何も我々は、メシアに危害を加えようとしているわけではない。
アッシュベル・ランダーを止めること、それが我々の目的だ」

「何言ってんだよ……本気、なのか？」

「これを見ろ、晶」

天井からスクリーンが降ろされると、プロジェクター越しに1枚の写真が映し出される。
病室で眠る、弱々しい少女の写真だった。

「彼女は不治の病を抱えていた。　生まれた頃から病気を抱え、現代の医学では治すことは不可能だった。
その時、アッシュベルがこの少女の病気を治せると言った。　少女は喜んで、奴の治療を受けた。
……騙されているとも、知らずにな」

健三がそう語ると、スクリーンには次の写真が映し出された。

「っ！」

晶は思わず、目を逸らした。
映し出された写真に、綺麗な少女の姿はない。

あるのは、上半身のほとんどが異形と化した少女の変わり果てた姿だ。
まるでE．B．Bのような禍々しいその姿は、とても人とは思えなかった。

「……何だよ、これ」

「あくまでも、アッシュベルが行ってきた行為の一部にしかすぎん。
この少女は、エターナルブライトの実験体にされた。
確かに病気は完治した、健康体と言われるまでに……。だが、その結果……彼女は『人』ではなくなった」

父親の口にする言葉で、晶はガジェロスの右腕を思い出す。
まさか……あれもエターナルブライトの影響で――

「被害者は一人や二人ではない、何百人もの人が犠牲になっているのだ。
人の弱みに付け込み、アッシュベルは非人道的なエターナルブライトの実験を繰り返した。
その結果、『改造』された人間は皆……『不幸』となった」

父親の言葉を耳にして、晶は背筋をゾクッとさせる。
まさかこの写真のような少女が……ガジェロスのような人間が、何百人と存在するのか。
アッシュベル・ランダーといえば、全世界に『人類の革新』を告げたきり表舞台から姿を消した人物だ。
その後はメシアでＨＡ開発に携わっていると聞いたが……まさか、裏でそんな非人道的な実験を繰り返していたなど信じられなかった。
E．B．Bが生み出された原因に、動物を使った実験が事が切っ掛けとまで言われているのに。

何故、こんな行為を――

「アッシュベルが生きている限り、この非人道的な実験は繰り返され続けるだろう。
奴は秘密裏に、メシアにいながらこのような行為を今もなお繰り返し続けている。
……誰かがやらねば、ならないのだ。　その為には、我々には『力』が必要だった」

「力？」

「そうだ、アッシュベルは腐ってもメシア所属の身であり……優秀な科学者だ。
奴の命を狙うということは、『メシア』との敵対を意味する。　だが、我々とて『メシア』との戦いにメリットは感じていない。
あくまでも、アッシュベル個人を『抹殺』できればいい」

「抹殺、だって……？」

まさか、本当に人一人に復讐する為だけにこの組織は動いているというのだろうか。
晶は未だに信じられずにいた。

「その先陣を切ったのが『ι・ブレード』の開発だ。　本来ならばそのまま……お前をパイロットとしてアヴェンジャーに迎え入れるはずだった」

「な――」

最初から、晶が乗る事が想定されていたというのか？

信じられない、晶は決して成績優秀だったわけではない。
何故、晶が選ばれたのだろうか？

「しかし、上層部が秘密裏に開発していた『ι・ブレード』の情報を別のルートから入手した。
その結果、ι・ブレードがメシアの手に渡ってしまったのだよ」

もし、健三の話が真実であれば……あの学校にιが存在した理由は――
晶がそこにいたから、アヴェンジャーに迎える為に置かれた……？

「……共に戦え、晶。　アッシュベルを倒さねば、人類に未来はない。
確かに我々は『復讐』の為に集められた……だが、私は違う。
これ以上犠牲者を増やさないためにも、『奴』が動き出す前に……
止めなければならない」

冗談を言っているようには聞こえない。
健三は、本気でアッシュベルを止める為にアヴェンジャーに所属した。
その為に、ι・ブレードを開発したのだ。
名も知らぬ少女の件、ガジェロスの件を聞くだけでもアッシュベルの非道さは十分に伝わった。
何百人もの人が、あのアッシュベルの手によって……『被害者』となってしまったというのか。

だが――

「ふざけんなよ……っ！！」

晶は叫んだ。

「お前達のせいで、俺は故郷を失ったんだぞ……人が死んだんだ、たくさんの人がっ！
シェルターでE．B．Bから必死で逃れて、ようやく平和を掴めてたのにっ！
こんなの、間違っているだろうがっ！！」

「……すまない、晶」

「謝って済むのかよ……自分達が被害者だから、無関係な奴を巻き込んでもいいっていうのかよ？
お前達の行為は、ただ悪戯に世界を滅茶苦茶にしているだけじゃねぇかっ！」

晶の怒りが収まる事はなかった。
確かにアッシュベルは非人道的な行為を繰り返した。
その結果、アヴェンジャーという組織が生まれてしまった。

だからといって彼らの行動には正当性がない。
たった一人に復讐する為に、何千……何万もの命が失われてしまったんだ。
何よりも、自分の父親がこんな犯罪組織に力を貸していたという事実が、一番許せなかった。

「俺はそんな目的の為に力を貸さない……ｌに乗らないっ！
こんなの間違ってんだろ……アンタも、気づいてんだろうがっ！」

「私は本気だ、晶。　だが、アッシュベルを放置しておけば取り返しのつかない事となる。

……奴はエターナルブライトの人体実験を通じて、何かを企んでいるのも事実だ」

「だからといって、無関係の人間を巻き込むのかよ？　こんなやり方、俺は絶対に認めない……」

「やはり、そう簡単に応じてはくれんか。　何もすぐに返事をよこせとは言わん。
しばらくここにいて、じっくりと考えてくれ」

「……見損なったぞ、アンタを」

怒りに身を任せた晶は、もはや父親の事を父と見なかった。
純粋なＨＡ開発者だったあの父親はもういないのだ。
何の為に、パイロットを目指したのか。
ιに乗った時の決意とは、一体何だったのか――
晶は悔しさを抱き、部屋の外へと出ていく。

「何処へ行く、未乃　晶。　貴様に施設内を自由に歩き回る権利はないぞ」

ガジェロスの右腕に捕まれた晶は、背筋をゾクッとさせる。
このまま振り切って逃げようとも考えたが、体の調子も万全ではない。
すぐに捕まるオチは見えていた。

「……連れてけよ」

抵抗もなく、晶は監獄へと連れ戻されていった。

「よ、ビリッケツ」

監獄へ戻されると、できれば二度と逢いたくなかった人物がそこにいた。

白柳　俊、晶と木葉以外に唯一生き残ったクラスメイトだ。

ガジェロスは既にこの場にいない。

俊を晶の監視役としておいたのだろう。

「……その呼び名、やめろよ」

「ん、晶っつったっけ？　おいおい、そんな怖い顔すんなっつーの」

何故この男は、こんなにもヘラヘラとしていられるのだ。

アヴェンジャーがどのような組織かを知っているのか？

自分達の故郷を襲った者が誰なのかを、本当に知っているのだろうか？

「お前は……何で、こんなとこ入ったんだよ」

「お前と同じさ、俺は元々アヴェンジャーに入れられる予定だったらしい」

「な、何でだよ……？」

「ん、俺が強いからだろそりゃ」

そんなの常識だろ、と言わんばかりの表情で俊は答える。
この自信過剰な性格と、人を見下すような態度が気に入らない。
不真面目なくせに、実際に実力は？1である点も、晶は更に気に食わなかった。

「何とも思わないのかよ……クラスメイトはあいつらに全員殺されたんだ。
それだけじゃない、第４シェルター東地区は――」

「知っている、それがどうした？　俺には関係ないね、自分以外の命がどうなろうが」

「……お前っ！」

今の一言で頭に血が上った晶は、俊に殴りかかろうとした。
だが、同時に立ち眩みが生じてフラリと足を踏み外す。
バタンッと横転してしまい、なんとも間抜けな姿を晒す結果となってしまった。

「いいじゃねぇか、自分さえ生きてりゃさ。　もっと肩の力を抜いて生きようぜ？」

「俺はお前とは違う……」

「世の中強い奴が生き残る。　俺とお前は強かっただけの話。　同じだろ、何が違う？」

「……このっ！」

再び晶は立ち上がろうとするが、ガンッ！　と突如視界がひっくり返る。
何が起きたかわからなかったが、次第に左頬がズキズキと痛み始めた。
俊に顔を、蹴られたのだ。

「訂正訂正、お前やっぱよえーわ。　ιに乗ってようやく俺と並べるぐらい、だろ？」

「クッ……この――」

「おいおいやめようぜ、俺も弱いものイジメしたくねぇしな。　別にお前とケンカしてぇわけじゃねぇんだよ。
ただ、お前色んなもん抱えてんだろ？　めんどくせーだろ、そんなもんいろいろ抱えてると。　だから、たまには力抜けってことさ」

「黙れよ……お前に親友の命が奪われた痛みがわかるのかよ？　木葉が家族を失った気持ちが、わかるのかよっ！？」

「ああ、わからねぇ。　俺には元々家族ってもんがいねぇんだよ。
姉貴がずっと俺の世話してくれてたぐらいでな。
だがその姉貴も行方不明になっちまってるのさ」

「……寂しく、ないのか？」

「いちいち気にしてたら人生面白くなくなるっつーの。　俺はもう赤ん坊じゃねぇし、ある程度大人になれば人は一人でも生きていけるしな」

俊はヘラヘラと笑いながら、そう語る。
まさか俊がそのような環境にいたとは、想像もしていなかった。
思えば学校にいた時、ここまで俊と話したことはない。
こうやってまともに会話を交わすというのは、実は初めてだった。

「でも正直お前が羨ましいぜ、最初からι・ブレードって奴のパイロットに決まってたんだろ？　あんだけビリッケツのお前がなんで選ばれたか知らんけどよ。
あのまま黙って卒業すりゃアヴェンジャーの仲間入り、そして思う存分戦いを楽しむとか……最高の人生じゃねぇか」

「……俺は、アヴェンジャーでは戦わない」

「はぁ？　何言ってんのお前」

「本当に何とも思わないのかよ……『ι・ブレード』一機の為に、シェルター地区が一つ消されたんだぞ？」

「何度でも言うさ、他の奴の命なんてどうでもいいんだよ……俺は自分さえ楽しけりゃ、それで満足さ」

俊は迷わずに、晶にそう返した。
もはや晶は、怒りを通り越して呆れてしまった。
まるで開き直っているとしか思えない思考。
白柳　俊、やはり晶は好きになれそうにない。

「さあて……そろそろ行くかね」

「……どこにだよ」

「決まってんだろ、今度はゼノフラムを奪ってやるのさ」

「なっ――」

フリーアイゼンが、狙われる？

ι・ブレードはもう、いないというのに――

「いやぁ、上層部の奴らがどうもι以外にもＨＡを欲しがっててねぇ。　とりあえず、ゼノフラムってのも目玉ではあるだろ？　あの火力は魅力的だわー、俺もあんな派手な機体にのってみてぇもんだな」

「やめろ……っ！　お前達はιを奪うだけで十分じゃなかったのかよ……フリーアイゼンには木葉だっているんだっ！」

「別に艦を襲うとは言ってねぇだろ？　ま、そのうちフリーアイゼンを奪えとか言い出すんじゃね？　先行してあれを落とすのも面白そうだな、なぁビリッケツよ？」

ニヤリ、と挑発するかのような笑いに晶の怒りは今にも爆発しかけた。

だが、ここで爆発させても意味がない。

「ま、その気があれば……止めてみろよ、この俺をよ」

かかってこい、といわんばかりに俊はファイティングポーズを取る。

だが、晶は立ち向かわなかった。

どうせ結果は見えている、無駄な体力を使う気はない。

だが……この場に留まっていても、どうしようもないのも事実だ。

「チッ、面白くねぇ奴だ。　じゃあな、ビリッケツ……次はお仲間さんができてるかもしれねぇぜ？」

逃げる算段を考えていては、フリーアイゼンがやられてしまう。
やはり、今すぐにでも動くしかない。
幸い相手はあのガジェロスではなく、俊だ。
ケンカは強くても、あくまでも一般人だ。
脱出チャンスは、今しかない――

「うおおおぉぉぉっ！！」

力任せに、晶は体当たりをした。
だが、俊に軽々しく避けられてしまう。
その瞬間、腹部に強い衝撃が伝う。
ゴスンッと鈍い音共に、晶は蹴り飛ばされた。

「そこで寝てろ、ザコ。　ま、帰ったらまたゆっくり話そうぜ、じゃあな」

ヘラヘラと笑いながら、俊は外へと出ていく。
晶は気を失いかけたが、僅かに分厚い扉が開けられているのを目にする。
あの俊の事だ、扉を完全に閉めるのをめんどくさがった可能性が高い。

フラフラになりながらも立ち上がり、扉を力任せに押した。
ギギギ、と音を立てて入口が完全に開かれた。
扉の先は真っ暗な廊下……もはや俊がどっちへ向かったかすらもわからない。

「……逃げるぞっ！」

この場に留まっていても何も始まらない。

晶は闇に向かって、全力で駆け出した――

それぞれの決意　？

メシア本部内の会議室に、再度各国の代表が集められた。
アヴェンジャーの手にι・ブレードが渡った件について、緊急招集がかけられたのだ。
秘密裏に開発されていたι・ブレードの存在は、今となってはメシア内で知らない者はいない。
フリーアイゼン部隊艦長『ゲン・マツキ』から報告された資料からも、ι・ブレードの驚異的な性能には誰もが驚かされていた。
そんな代物がアヴェンジャーというテロ組織に渡ってしまえば、メシアで騒ぎとなるのも無理はない。

「G3に続きι・ブレードまで手にしたアヴェンジャーは、もはやただのテロリストでは済まされん。
彼らの行為はエスカレートしていくばかりだ。　これを機にメシア本部へ影響を及ぼすかもしれん。
至急、メシア総動員で奴らの拠点を叩き潰すべきだ」

「しかし、連中が手にしたι・ブレードは『未乃　晶』以外の者は動かすことが出来ん。　パイロットが死亡した事が事実であれば、奴らは使えないのではないかね？」

「アヴェンジャーがι・ブレードを扱えないという根拠は何処にもない、たまたま『未乃　晶』だけが扱えた可能性も十分あり得るだろう。
我々とてι・ブレードを完全に解析できているわけではない。　それにこれほどの機体を秘密裏に開発されていた理由も不明のままだ」

「ふむ、なるほど。　それで、この天才科学者である私をこの場に呼び出したということかね？」

各国の代表が議論を重ねる中、一人白衣を身に纏った男が会場へと足を踏み入れる。

アッシュベル・ランダーは、メシア内ではただのＨＡ開発者にしかすぎない。

だが、天才科学者というのは事実ではあり、メシア内でも彼の発言力は他の技術者に比べれば遥かに高い。

今回のようにＨＡ関連の知識が求められる場合は、この場に招かれる例は決して珍しくはなかった。

「貴様の知るι・ブレードの知識を、聞かせてもらおう」

「私とてι・ブレードの存在はつい最近まで知らなかったのだよ、君達の知る知識と大差はないと思うがね？」

「ならば単刀直入に聞く、アヴェンジャーはι・ブレードを使えるかね？」

回りくどい前置きはおいて、代表の一人がアッシュベルへ訪ねた。

始めから素直にそう聞いていればいいものの、とアッシュベルはニヤリと笑う。

「結論から言おう、ゲン・マツキも含めて……君達は結論を急ぎすぎている。

パイロットが死亡したというのは、あくまでも状況的判断にすぎないのだよ、現場の人間も含め……誰も死体を確認したわけではない」

「パイロットが生きている、それが貴様の主張か？」

「うむ、その通りだ。　まず、ι・ブレードについての報告資料を思い出してほしい。
君達も知っての通り、ι・ブレードというＨＡは現状、特定のパイロットにしか扱えない設計になっているのだよ。
つまり、特定のパイロットの条件がはっきりしないのだよ。　現状『未乃　晶』以外はι・ブレードを扱えない、と見ていい」

「前置きはいい、さっさと結論だけ話したまえ」

「ふむ、結論なら既に語ったはずなのだがな。　物事には順序というのがあるのだよ。　結論だけがわかっても、その過程を理解しなければ物事の本質は見えてこない。
私が言いたいのはその特定パイロットの条件ではない。　アヴェンジャーもその程度の認識しかないのではないか？　ということなのだよ」

アッシュベルはところどころため息をつきながらも、説明を続けた。

「どういう事だ？」

「君達もわかっているのではないかね？　メシア内でさえ秘密裏に開発された機体の情報を、何故アヴェンジャーという外部組織が知っていたのか？
これはメシア内部から情報が漏れている、とみるしかないのだよ」

「メシアの内部に裏切り者が存在すると？」

「うむ、そういう解釈のほうが手っ取り早いだろう。　ι・ブレー

ドがメシア内で開発されていた以上、彼らが情報を入手するにはメシアで得るしかない」

「貴様の言う通り、我々もメシア内部から情報が漏れたと考える者が大半を占めている」

「だったら話が早い、アヴェンジャーは我々と同じ程度の知識しか持っていないという前提で話を進めさせてもらおう」

各国代表は、アッシュベルの話に黙って頷く。
ここで反論一つもないとは……と、アッシュベルは物足りなさを感じた。

「アヴェンジャーはメシア内からＨＡを奪い取り、自らの『力』とする為に活動し続けている。　つまり、ι・ブレードも戦力として加えたいはずなのだよ。
だったら、彼らが『パイロット』が限定されるという条件を知らないはずもない。　パイロットと共に捕らえる必要があったのだよ」

「だが、ι・ブレードのパイロットは死亡した。　Ｇ３のサマールプラントによりコックピットを串刺しにされている映像も我々は確認しているのだぞ」

「だから君達は結論を急ぎすぎている、というのだよ。　誰がパイロットが死んだと確認したのかね？　君達はこの目で、はっきりとパイロットの死亡を確認したと？
私ならこう考えるね、一つ目は『パイロット』が死んでもいい理由があった。　だから、機体だけ奪えれば目的は果たせる。
だが、私はそう思わない。　パイロットが死んでもいい理由があるとすれば既に代理が用意されているということだ、彼らが我々より

先にι・ブレードのパイロット条件を知っているのはあり得ない。ι・ブレードを元にＨＡを開発する……という線もなくはないが、それでも結果的にι・ブレードはただの粗大ゴミになりかねん、彼らもあの機体を奪うにはリスクを負っているはずだ、そんな使い方はあり得ないのだよ」

「ならば貴様はこう主張するのか？　サマールプラントは『パイロット』を殺さなかった、とでも？」

「ふむ、君達にしては中々いい線をついてくるではないか。　だが、私ならこう考えるね。

ι・ブレードを開発した人間が、意図的にパイロットを限定させているのであれば……パイロット保護を優先されるはずだと。

ι・ブレードに搭載されているιシステムには、危険察知と呼ばれる機能が搭載されているだろう？

あれこそ、パイロット保護の機能であることは十分に証明できるはずだがね？」

「報告資料にもあった通り、危険察知には制約が設けられている。

それに危険察知はあくまでも身に迫る危険を知らせるにしかすぎん。

パイロットが自らに迫る危険を目に見えていたとしても、その危機を回避できなければ何も意味はあるまい」

ニヤリ、とアッシュベルは笑みを浮かべる。

やっとまともな反論をする者が現れたか、と心の底から喜んでいた。

「その通りだ、君は素晴らしい。　私の助手として欲しいぐらい素晴らしい回答だな。　だが、思い出してほしい。　我々にとっても

ι・ブレードは未知なるＨＡなのだよ。
ι・ブレードのιシステムは、まだまだ解析できていない機能が多数存在する。　例をあげればι・フィールドもその一つだ。
危険察知以外に身を守る手段の一つであるだろう。　アヴェンジャーもその点に気づいているはずだ、そう簡単に『パイロット』が死なない仕組みになっていることぐらい」

「貴様は、パイロットがιシステムによって保護されたと、主張する気か？」

「うむ、アヴェンジャーが何の迷いもなくιにＧ３を投入した以上……パイロットが殺されるリスクを考えないはずがない。
だが、私はこの行為に違和感を覚えて仕方がないのだよ。　私でさえ、ι・ブレードにパイロット保護機能が多数存在するというのはあくまでも推測でしかない。　つまり、彼らがそれを前提に動くにしてはあまりにもリスクが高すぎるであろう？」

「……何が言いたい？」

アッシュベルは、再び口元をニヤリとさせる。
ここまで来た以上、代表の一部もアッシュベルが言わんとしているか想像できている者もいるはずだ。
ならば躊躇う必要もない、アッシュベルが導き出した結論を……そのまま口にした。

「ι・ブレードの開発者である『未乃　健三』、或いは有識者が『アヴェンジャー』に存在する。　それしか、考えられんよ」

フリーアイゼンの一室。
いつものように、最新機材に埋もれる中、ゼノスが一人映像の解析を行っていた。
今となっては、トラウマに近い『ι・ブレード』が串刺しにされる映像。
もう何時間籠っているかはわからない、機械的にただ映像を繰り返し、Ｇ３の解析を続けた。

「また解析ですかぁ？」

心配そうな表情で、シラナギが横から声をかける。
ゼノスは短く、「ああ」と返事するだけだ。

「……どうして、こんな辛い映像をずっと眺めてるんです？」

「さあな、一種の現実逃避かもしれん」

「現実逃避？」

「ι・ブレードにはパイロットを保護する機能が多数存在する。もしかすると、晶が生きているかもしれないと……解析を続けているだけだ。
だが、映像を見るだけでは中の様子はわからん。　この目で死体を確認していない以上、どうしても生きていることを期待したくなるのさ」

無表情のまま、ゼノスはそう語った。

「……私は晶くんが生きてるって信じたいです。　でも、こんな映像見てしまうと……とても辛くて、耐えられないですよ」

「俺が好きでやっていることだ、お前が付き合う義理もあるまい」

「私の事はいいんです、それよりも木葉ちゃんが心配で……。　あの子、自分の手首切ろうとしたんです。
正直私、どうしたらいいかわかりません……」

「カウンセラーも務めるお前が弱音を吐いてどうすんだ。　彼女は正式なクルーではないが、お前が支えてやらなくてどうする？」

「相変わらず厳しいですね、ゼノスは」

シラナギは今にも泣きそうな表情を見せながら、そう呟く。
晶が死んでしまったという事実を、未だに信じきれない者は多数存在する。
誰もが現実を受け止めきれずに、心のどこかで生きていることを期待してしまっていた。
ゼノスでさえも、このように映像の解析を続けてしまうほどなのだ。

「ところで何のためにここへ来たんだ？」

「ゼノスを探してたのですよ、木葉ちゃんの事で相談したかったんです……」

「難しい相談だな。　今はお前が支えになってやるしかないんじゃないか？」

「あんまり自信がないです、私自身がショックを受けていますし」

「大人がそれでどうするんだ、辛いかもしれんが真っ先に乗り越えらなきゃならないのは俺達だ」

「頭ではわかっているんですけど――」

ビーーーッ！

突如、サイレンの音が鳴り響いた。

部屋は真っ赤なランプに照らされ、パイロット招集を告げるアナウンスが聞こえだす。

E．B．Bの出現……だろうか。

ι・ブレードが奪われた以上、アヴェンジャーがこれ以上フリーアイゼンに仕掛けてくるはずもない。

「仕事、だな」

ゼノスは端末の電源を落とし、部屋を出て行こうとする。

「……無茶だけはしないでくださいね、ゼノスは何度も危険な目に逢っているんですから」

「ああ、わかっているさ」

戦場へと赴くゼノスの背中を見つめ、シラナギは不安になりながらもゼノスを見送った。

延々と続く暗がりの一本道を、晶はひたすら突き進む。
この施設の何処かに収納されているはずのｉ・ブレードを求め走り続ける。
そうして、何度、曲がり角をま立っただろうか。
ふと、晶は歩みを止めた。

一か所だけ明かりで灯されており、一人の兵士が見張りとして立たされていた。
ここに来る間にいくつか扉を見かけたが、別段警備が敷かれているなどということはなかった。
外へ通じる出口が、ここにあるのかもしれない。

幸いなことに見張りはたったの一人。
不意打ちでも仕掛けられれば、喧嘩に自信のない晶でも、何とかなるはずだ。
気づかれないように晶は、音を立てないように慎重に忍び寄る。

ガンッ！
後頭部を狙うと、見張りの兵士は呆気なく気絶をした。
晶はすかさず扉を開こうとしたがロックがかかっているようだ。
カードキーを通さないと開かないタイプらしい。

どうしたものかと考え込むが、晶は見張りの兵士の持ち物を確認した。
カードキーで閉じられた部屋に見張りがいるのは不自然だ。
考えられるのは、より厳重な警備の為か……一部の者しかカードキ

ーを持たなかったか。
どちらにせよ、晶の予測が正しければ『カードキー』の類を持っていても不思議ではない。

……やはり、カードキーが存在した。
試しに通してみると、機械はロック解除を告げる「ＯＫ」の文字が浮かび上がった。
ゴクリ、と生唾を飲み込み……晶は扉を開いた。

その先には、いくつものＨＡ格納スペースが用意されている。
ほとんどが出撃された状態ではあるが、ここが格納庫である事は間違いないようだ。
晶は慎重に辺りを見渡すと、そこにはι・ブレードの姿があった。

「……よしっ！」

ι・ブレードを目の前にして、晶は全力で駆け出す。

「そこまでだ、晶」

「――っ！」

ふと、背後から男の声が耳に入る。
恐る恐る振り返ると、そこには父親の姿があった。
右手には銃が握られており、銃口は晶に向けられていた――

「どうしても、我々に逆らうというのか？」

「……息子相手にも容赦なしなのかよ。　それでも親か、アンタはっ！？」

「手段を選ぶつもりはない、どんな手を使ってでもアッシュベルを止める……それが我々の正義だ」

「そんな正義あってたまるかよ、もっと他にもやり方があるはずだっ！　今のやり方じゃ、誰も救われないだろ……」

銃を向けられても、晶は怯まなかった。
メシアから兵器を奪い続け、世界を混乱させるやり方が決して正しいとは思わない。
これ以上、第４シェルター東地区のような悲劇を起こしてはならない。
アヴェンジャーの行為を、許すわけにはいかなかった。

「最後のチャンスだ、晶。　私と共に……戦え、アッシュベルを止めるんだ」

銃口を向けたまま、父親はゆっくりと晶に告げる。
父親の目は本気だ、もし否定でもすれば……撃たれる可能性だってあった。
だけど、晶はアヴェンジャーを行為を許せなかった。

「……アヴェンジャーのせいで、どれだけの人が不幸になったと思っているんだ。
お前達のせいで、木葉だって――」

「木葉……？」

父親の表情が一変した。
知らないはずがない、息子の幼馴染である木葉の存在を。

「木葉は家族を失ったんだ……もう、誰も残されてねぇんだよ。
それだけじゃねぇっ！　クラスメイトだって、お世話になってた教師だってお前らに殺されたっ！
アンタもよく知っている……『竜彦』だって、死んじまったんだっ！！」

晶の手は震えていた。
あの日、クラスメイトを虐殺された時の恐怖。
出撃していったパイロット候補生達の、変わり果てた姿。
目の前で親友を助けられなかった悔しさ。
その全てを、今でも昨日の事のように覚えていた。

「竜彦はな……俺の目の前で……E．B．Bに食われていった。
でも、そんな目に逢いながらもあいつ……怖いだとかそんな事言わなかった。
逆に俺に怒鳴りつけたりもしやがったっ！　あいつ、死に際に……『木葉』を頼むって、俺に告げたんだよっ！」

父親は銃を下さず、晶の話を黙って聞くだけだった。

「だから俺は、アヴェンジャーを許さないっ！　もうあんな悲劇を起こしちゃいけないんだよっ！　守るんだ……俺が、メシアが人類をっ！
例えアヴェンジャーの行為が正しかったとしても、俺は認めないっ！　いや、正しいはずがないっ！
誰が罪のない人間を不幸にするやり方が、正しいって言うんだよっ！？」

「……それがお前の、戦う理由か」

「俺が銃で脅されようが何をしようが、お前達に屈しないっ！」

晶はι・ブレードに向かって駆け出した。
同時にバンッ！　と、銃声が響く。
体に痛みはない、弾は外れてくれたようだ。
後ろを確認する暇もなく、晶はひたすら階段を駆け上がる。

コックピットにたどり着くまでは、あっという間だった。
晶は飛び乗ろうとした際に、一瞬だけ地上の父親の姿を目にした。
父親は酷く悲しい顔を見せており、知らぬ間に銃を下していた。

無事、コックピットへ乗り込む事に成功した。
中は綺麗に整備されている。
アヴェンジャーの整備班が行ったのだろう。
乗り込んだ途端に、コックピットが赤く灯る。

ι・ブレードが勝手に起動した。
その光はまるでおかえり、とでも告げているようだった。
発進準備を行いながらも、パイロットスーツへと着替えを済ませる。
その間に例の頭痛が襲い掛かったが、何処かその痛みに懐かしさを覚えた。

「……やれるよな、ι」

晶が声をかけると、コックピットが再び灯った。
やはり、人の言葉を理解している。
或いは、晶の意思が通じているとでもいうのか。

「皆を助けるぞ……っ！」

スロットルを深く押し込み、晶はι・ブレードを発進させた。
ギュンッ！　と、いつも以上に強いGが襲い掛かる。

「なんだ、これ……出力あがってないか？」

加速を示すメーターを確認すると、やはり今までのιの限界速度を超えている。
まさか、アヴェンジャーの手によって更に『強化』されたというのだろうか？

バシュンッ！
あっという間に、拠点の外へと出ることが出来た。
多くの緑に囲まれたこの箇所は、どうやら汚染区域付近であることは間違いない。
こんな危険なところを活動拠点にしていたとは、驚きを隠せなかった。

『よう、ビリッケツ。　遅かったじゃねぇかよ』

「お前――っ！」

突如通信が入ったかと思えば、その声は俊であった。
フリーアイゼンへと向けて出発した彼が、何故この場に？

『もうちと待って出てこなかったら行っちまおうかと思ってたぜぇ。
やっぱり脱出してきたなぁ、お前よぉ』

「……邪魔するなよ、フリーアイゼンを助けるんだっ！」

『無理無理、お前一人じゃ無理。　レブルペインが何機向かったと思ってんだぁ？　Ｇ３だって混ざってるんだぜ？
こんだけ戦力向かわせてりゃ、こりゃ本当に『艦』が手に入っちまうかもなぁ？』

「ιを手に入れても、まだこんな行為を続けるのかよ……これ以上、お前らの好きにはさせねぇからなっ！」

『へぇ……じゃあ』

ズキンッ！
ι・ブレードの、危険察知が発動した。
巨大な木々の間から、黒き獣の如くＨＡが飛び出す。
白柳　俊の操る、レブルペインだった。

「くっ……！」

ムラクモを構え、晶は奇襲を凌いだ。
ガキィンッ！　と敵機を弾き飛ばすと、お互いのＨＡが睨み合ったまま静止する。

『なぁ、今度こそテメェの『ι』とやらの実力、思う存分発揮して見せろよ？
俺が、徹底的に叩きのめしてやるからよぉっ！！』

「……ああ、やってやるっ！　俺はもう、お前なんかに負けねぇっ！！」

それぞれの決意　？

汚染区域に指定されていると思われるこの森林地帯。
第何級かまでは判断できないが、これだけの自然に囲まれた地帯であれば、Ｅ．Ｂ．Ｂの浸食は相当進んでいると思われる。
晶が相手にしなければならないのは一機のＨＡだけではない。
戦いの最中に影から襲い掛かるＥ．Ｂ．Ｂにも対応しなければならなかった。

つまり、ここでの撃墜が意味することはほぼ死に直結する。
群がるＥ．Ｂ．Ｂから逃げる手段がなければ、あの時の親友達のように食い殺される――
晶は負ける訳にはいかなかった。
これ以上、アヴェンジャーの好きにさせない為にも。
自分を『パイロット』として受け入れてくれた、フリーアイゼンの為にも――

ガキィンッ！
レブルペインの２本のソードと、ｕ・ブレードのムラクモが火花を散らす。
小刻みな振動がコックピット越しにまで伝わると、すぐにレブルペインは視界から姿を消した。
多くの木々と、レブルペインの彩色が味方をして敵の姿を目視で確認するのは晶では難しかった。
おまけにレーダーはレブルペインのジャミングの影響で使い物にならない状態だ。

頼りになるのは、危険察知しか存在しない。

こうしている間にも、危険察知が発動した。
ι・ブレードの死角から射撃が放たれる瞬間だった。

「クソッ、隠れんなよっ！」

晶は映像を頼りに弾の軌道を読み、上手く避けながらブラックホークを放つ。
だが、その前に黒い影が上空へと飛び上がっていった。
空へ向けてブラックホークを放とうとするが、またしても危険察知が発動する。

相手から射撃の嵐が襲い掛かり、晶はやむを得ず機体を回避させた。
その時、コックピットに青い光が灯った――

「クッ……何処だっ！？」

相手が上空にいる以上、上だけを意識すればいい……だが、万が一E．B．Bの襲撃という可能性もある。
晶は出来る限り全方位に意識を集中させようとしたが、それが仇となってしまった。

『何処見てんだよ、クソがっ！！』

「うわっ！？」

文字通り、上空から直進してきたレブルペインがι・ブレードに飛び蹴りを決めた。
コックピットが大きく揺れたが、幸い大きなダメージには繋がらなかったようだ。

『なぁ、本気出せよ？　そんな隙だらけじゃ、こっちも攻撃する気失せるっつーの』

「黙れよ……戦いを遊びと思ってるやつなんかに、言われたくないっ！」

『俺は真面目に遊んでんだっつーの、お前も真面目にやらねぇと死ぬぞ？』

「この、屁理屈野郎がっ！」

わざと隙を見せていたレブルペインに斬りかかろうとするが、あっさりと避けられてしまう。
それどころか、再び死角へ潜り込まれて危険察知が発動する状況に至ってしまった。
幸いにも敵の攻撃を避けたところで、再びレブルペインは静止したままだった。

『いいねぇ、ちょっと吠えるようになったじゃねぇか。　やっぱお前、ＨＡ乗ってる方が面白れぇ奴だな』

「クソッ……言わせておけ、ば――」

晶はふと、ι・ブレードの動きを止めた。
隙だらけのレブルペインに、力任せに攻撃したところでは軽々と回避されてしまう。
これは俊の策略だ、相手を言動で惑わせて行動そのものを単調化させようとしている事に晶は気づいた。
ゼノスとの訓練を思い出すんだ。

焦るな、惑わされるな。
あの時のように、神経を研ぎ澄ませれば……道は切り開けるはずだ。

『……おっと、もう学習したか？　そうでなきゃ面白くねぇ、次はどうしてみる？　隠れるか？　不意打ちか？
何でもきやがれよ、何処から仕掛けてこようが叩きのめしてやるからよ？』

かといって、このまま俊が静止状態を保ってくれるはずもない。
この地形を利用して不意打ちを仕掛ける等、いくらでも仕掛けるチャンスが確かに存在する。
だが、相手が口で言ってくる以上、少なくとも何処から仕掛けてきても『全て防げる』という自信の表れとして聞こえた。
ハッタリの可能性もあるが、前回の俊の戦いが晶の頭から離れることはない。
ならば、相手が仕掛けるのを待ち危険察知を元に対応するか……或いは、確実に俊が動けない状況を作り出すのが鍵だ。

だが、どう作り出せばいい？
その、瞬間――危険察知が発動した。
仕掛けたのは俊ではない。　晶の勘がそう告げた。
予想通り、地中から無数のE．B．Bが飛び出す映像が映し出された。
ミミズともヘビとも言える長い巨体をさらけ出し、上空へと向けて吠えていた。

この瞬間を、利用するしかない――
映像では敵機の動きまでは映し出されていなかった。
だが、少なくとも今の位置より大きく変わることはない。
ならば大方予想はつく、レブルペインがどの方向へ逃げてどんな行

動をしようとするのか。
そして自身が動く方向から、確実にレブルペインに仕掛けられるタイミングがないか？

……短時間で、ここまでの事を処理しきれる自信はなかった。
危険察知の映像も追え、間もなく地中からE．B．Bが出現する。
敵側に悟られないよう、晶はいかにも襲撃に気づいていないかのように装った。
その瞬間、一瞬だけ地震のような揺れを感知する。
同時にレブルペインは、後方へと下がっていった。

「間に合えっ！」

逃げるレブルペインを追いかけるように、晶はブラックホークを放った。
その後、スロットルを限界まで押し込み最大速度で空高く上昇する。
甲高い奇声を放ちつつ、地中から巨大なE．B．Bが姿を現した。
地上の木々は滅茶苦茶にされ、土煙が舞い上がる。
上空から晶はブラックホークをひたすら放ち続けた。

逃げた方向はある程度わかっているが、手ごたえは感じない。
だが、空にいれば敵側から飛び込んでくるのは間違いない。

ズキンッ――
その時、危険察知が発動した。
地上からのレブルペインの襲撃かと思いきや、大型E．B．Bの追撃であった。

ι・ブレードそのものを丸呑みしてしまうほどの巨大な大口を開き、襲い掛かってきたのだ。

何とか振り切ろうと、晶は高度を下げてE・B・Bの襲撃をやり過ごす。
追い打ちのように、危険察知が発動した。
今度こそ地上から猛スピードで突進してくる『レブルペイン』が姿を現した。

あの速さでは小回りは効かないはず、晶は突進を交わして横からブラックホークを放とうとする。
だが、その瞬間コックピットが青く灯った。
突如レブルペイン付近に爆発が発生し、その爆風によって『軌道』が強引に変更されたのだ。
あまりにも一瞬過ぎて、何が起きているかは理解できなかった。
だが、身の危険が迫っている以上……レブルペインが何かを仕掛けてくるところまでは読めた。

「……フィールド展開っ！」

咄嗟に、晶はιフィールドを展開させた。
ガキィンッ！
レブルペインのソードが弾かれる音が響き渡る。

やっと、捕えた――

すぐに晶はムラクモを構えて、レブルペインを斬りつけようとした。

「――ミサイルっ！？」

フィールドを解除した途端、晶の目の前には二つの小型ミサイルが飛ばされていた。
咄嗟の事で反応することもできなかった。

ズガァァンッ！
コックピットが大きく揺れ、警告音を響き渡る。
直撃を受けたι・ブレードは、そのままバランスを失って地へと吸い込まれて行く。

『おいおい、その程度かぁ？　ま、地上じゃお前に勝ち目は確かになかった。
ったく、ι・ブレードも大したことねぇな……所詮、何に乗ってもテメェはただのビリッケツにすぎねぇってことさ』

「……まだ終わってねぇよ、ιがこの程度で沈むものかっ！」

『へぇ、まだやる気か？　まぁお前根性ありそうだしな、3年間もずっとビリッケツの座を守り続けてた奴だ、そこだけは認めてやってもいいぜ？』

「誰がお前なんかに――！」

その瞬間、危険察知が発動した。
レブルペインが、ι・ブレードの目の前に姿を晒したのだ。

『確かにιってのはしぶてぇらしいからな。弱い奴が生きるのもめんどくせーだろ、そろそろ楽にしてやるよ』

「そうやって、お前は人を見下してっ！！」

斬りかかってくるレブルペインの攻撃を交わした途端、再びコックピットが青く灯された。
ズガンッ！
今度はフィールドを展開させる暇もなく、晶は地へと突き落とされ

た。
コックピットに伝う衝撃が強すぎて、身体が完全に回復しきっていない晶にとってはかなり堪えてしまっている。
息が荒く汗がにじみ出る中、操縦桿だけは手放さないようにしっかりと握りしめた。
機体の損傷率は４０％、これからフリーアイゼンの元へ駆け抜けるにはこれ以上機体の傷を負わせるわけにはいかない。
『立てよ、まだやれんだろ？　それともタダのハッタリだったのか？　最先端の機体と言えど、万能にできちゃいねぇんだな』
怯まずに晶はブラックホークを構えて発砲しようとする。
カチッ……と、間抜けな音がした。
「弾切れかよ……」
予備のマガジンならいくつか積んであるはず、補充すれば問題はないが……問題は相手がそれを許すかどうか。
その時、危険察知が発動した。
先程の大型Ｅ．Ｂ．Ｂが再びι・ブレードに襲い掛かってきたのだ。
どういう訳か、何故か必要以上にι・ブレードが狙われている。
晶はふと、その事に疑問を感じた。
Ｅ．Ｂ．Ｂは基本的に『人間』という生命体をピンポイントで狙うはず。
だが、何故はこのＥ．Ｂ．Ｂはιばかりを狙っているように見えた。
レブルペインだって、人が操るＨＡだ。
パイロットの白柳　俊も、人間であり襲われる対象となってもおかしくはない。

……砂漠の戦いでも、そうだった。
アヴェンジャーの機体はE．B．Bの襲撃に紛れて、メシアの部隊に襲撃を仕掛けた。
その時、アヴェンジャーの部隊はE．B．Bに狙われていただろうか？

レブルペインとι・ブレードやウィッシュの違い……。
色や形、性能ではない……もっと決定的な違いがあるはずだ。
あの機体の何かが『E．B．B』を避ける仕掛けが施されている、そう考えるしかない。

「レーダー……そうだ、何でレーダーだけが？」

その間にも危険察知が発動した。
レブルペインの攻撃を必死に避けて、晶はひたすら考えた。

『おいおい、ボサッとしてんじゃねぇよ……戦意喪失でもしちまったか？』

「気が散る……話しかけるなっ！！」

晶は強引にレブルペインを引き離そうと、ムラクモを闇雲に振り回した。
当然ながら軽々と避けられてしまい、死角へと回り込まれる。
だが、今度は死角へ回り込むことを先読みして晶はムラクモを突き立てた。

『うぉっと、流石に二度も三度も同じ手は通用しないってか？　面白くなってきたじぇねぇか……』

「……クソッ、邪魔すんなっ！」

レブルペインに隠された秘密は何だ。
このレーダーの乱れは、決して『ジャミング』何かではない。
もし、本当にその類であれば音声通信にも異常をきたすはずだ。
今まで、このＨＡが登場してきた中で……そんな事象が起きたことはない。
レーダーだけが、異常をきたしていたのだ。

それは……まるであの時、レーダーから姿を消していた大型Ｅ．Ｂ．Ｂの時と同じではないか。
危険察知が発動する。
またしても大型Ｅ．Ｂ．Ｂがιに襲い掛かった。
やはり、レブルペインには見向きもしない。
その間にもレブルペインは、ひたすらι・ブレードに攻撃を仕掛け続けた。
コックピットが青く照らされても、晶では反応できずにダメージは徐々に蓄積されていく。
もう少し……もう少しで、あの機体の秘密が解けそうだというのに。
このまま、やられるしかないのか。

『おいおい、さっきから逃げてばかりで何もしてねぇじゃねぇかよ……テメェ何企んでやがる？
それとも、本当に手も足もだせねぇってか？』

「……お前のその態度、ずっと気に入らなかったんだよ。　努力も何もしてねぇ奴が……どうして、そんなに強いんだよ」

『考えるまでもねぇ、生まれながらの才能だろうがよ？　世の中に

無能はいらねぇ、一握りの天才だけが生き残りゃいい、そういう社会にしちまえば楽だろ？』

「大切なのは互いに支え合う事だろうがっ！！」

人を見下し、弱き者を蹴落としていく。
白柳　俊とは、そういう男だ。
だが、晶はそんな考え方を認められなかった。
自分自身がたくさんの仲間に支えられ、あの絶望的な状況からここまで生きてこられた。
俊の言うことは、それを全否定しているのだ。
だったら、認めさせるしかない。
この手で、自分が見下した人物が、天才と名高いパイロットを打ち破る事で――

「頼むぞぃ……もう少しでいいんだ、持ってくれっ！」

コックピットは赤く灯された。
まだいける、と返事をしているように聞こえる。
晶はレブルペインを睨み付けた。
その時……ふと、レブルペインの持つ違和感に気づいた。

ι・ブレードやゼノフラム、そしてウィッシュにはなくて……レブルペインにだけ存在するのモノ。
そう、あのＨＡは何処か『Ｅ．Ｂ．Ｂ』と似た雰囲気が感じ取れるのだ。
今まで感じた禍々しさは、恐らくそれが原因であろう。
しかし、ＨＡの動力源はお互いに共通した『エターナルブライト』だ。

E．B．Bを生み出す切っ掛けとなった『同じ動力源』を使いながら、どうしてここまで違いが出ているのか？
レブルペインのヘッド部に潜む、怪しい赤い輝き――
そう、晶はその光で『違和感』の正体に気づいたのだ。

『あーあ、またつまんねぇことで熱くなりやがって……わかったわかった、俺がテメェに希望を持たせちまったのが悪かったな。
……次で、本当に終わらせてやるよ』

「……！」

俊の声色が、突如変わった。
先程までのチャラけた様子とは違う。
ドスをきかせたその声だけで、思わず背筋がゾクッとなってしまう程だった。
……やはり、今までは遊んでいたのだろう。
戦いそのものを楽しむ為に、わざと相手をいたぶっていたという事、なのか――

『ったく、ウザってぇんだよ。　お前みたいに仲間だの親友だのとかホザいてる奴が、一番大嫌いなんだよっ！
弱いくせに調子に乗るんじゃねぇよ……テメェの何に価値があるんだ？　周りに迷惑かけてるって、いい加減気づけよ？』

「俺は……今まで俺を支えてきてくれた人達の為にも、アヴェンジャーを討つっ！　フリーアイゼンを、助け出して見せるんだっ！」

『ああ、やってみろよビリッケツちゃんがよぉっ！！』

ズキンッ――

晶が身構えた瞬間に、危険察知が発動した。
映像は単純に、レブルペインが正面から突撃するだけだ。
しかし、あの俊が正直に正面を突っ切るはずがない。
かといって、先程のように素直に死角へ潜り込んでくるとも考えられない。

もっと、確実な手段で『ι・ブレード』を潰しにかかるはずだ。
晶は全神経を集中させ、レブルペインの動きにだけ注目した。
危険察知は役に立たないと思え、自分の感覚だけで戦うしかない。

だが、できるのか。
クラスで落ちこぼれだった晶に、そんな『俊』のような行動が取れるのか？
いや、やらなければならない。
やらなければ、敗北が待つだけだ――

映像の通りに動くレブルペインの一撃を交わすと、コックピットが青く灯った。
既にモニターからは姿を消している、だがギリギリまで目で追っていた晶は潜り込んだ方向を見逃さなかった。

「いけよっ！！」

晶は咄嗟に、逃げた方向へと向けてムラクモを突き刺した。
だが、そこにもレブルペインの姿はない。

『はいはい、よくできましたっと』

「なっ――」

ふと、地面に影が見えたことを確認した。
上空からだ……っ！

この距離では避けることはできない、晶はフィールドを展開させて凌ごうするが
だが、そのフィールド発生すらも間に合わなかった――

ズガァンッ！
鈍い音が響き渡り、コックピット内は警告を告げる赤い光と警告音が鳴り響く。
モニターを確認する暇もなく、晶はただ揺れるコックピット内でスロットルを握りしめることだけで精一杯だった。

「クッ……流石にもう、やばいか？」

コックピット内は必死で応えるように点滅するように赤く灯った。
やはり先程のミサイルが相当響いているようだ、いくらｉ・ブレードと言えどミサイルをまともに受けてしまえば無事では済まない。
ウィッシュ等の通常ＨＡであれば、既に撃墜されてしまっていてもおかしくはなかった。
だが、それだけで俊の猛攻が終わる事はない。

危険察知が発動し、レブルペインの姿が確認できた。
ただ正面から蹴り飛ばされる映像だったのだが、映像の最中に襲い掛かる頭痛が突如激しさを増した。
頭痛は徐々に大きくなり、晶は映像どころではなく思わず頭を抱えて叫び声をあげる。
その時、再び機体が大きく揺れた。

『さぁて、問題だ。　お前が吹き飛ばされた先には、何がいるでし

ょう？　答えがわかったら、助かるかもしれねぇぜ？』

何を、言っているんだ――

と、晶はその時『奇声』のようなものを耳にした。

これは、あの『Ｅ．Ｂ．Ｂ』の奇声だ。

激しい頭痛のせいか、危険察知は発動しなかった。

しかし、晶には俊の言葉の意味をすぐ理解できた。

ι・ブレードの装甲は底知れず、自己修復機能まで搭載されている。

その為、レブルペイン一機では完全に機能停止に追い込むことは難しいと判断したのだろう。

だからこそ、『利用』したのだ。

あの『大型Ｅ．Ｂ．Ｂ』を――

後ろには、ι・ブレードを丸ごと飲み込もうと大口を開けて襲い掛かる大型Ｅ．Ｂ．Ｂが存在する。

激しい頭痛で意識が朦朧としているが、今置かれた状況だけは理解できた。

……何か、手はないのか。

この状況をひっくり返す手段は。

ι・ブレードを全力で加速させれば、この状況を抜けることは容易いかもしれない。

だが、俊から逃れることはできるのか？

おまけに危険察知が、まともに働かない状況でだ。

仮に発動したとしても、毎度この頭痛に襲われていては、冷静に状況の分析を繰り返すことはできない。

「……ここで、死ぬわけには――」

霞んでいく視界の中、晶は必死で操縦桿を握りしめこの状況を打破する方法を考えた。
だが、時間が足りなさすぎる。
E．B．Bの黒い影が背後から迫り、ιを覆っていた。
ふと、コックピット内に電子音が響き渡る。
サブモニターに『ムラクモ』を示す画像が出力されていた。

『ムラクモを『解放』してください』

解放……？
晶は、何の事かはさっぱりわからなかった。
だが、ι・ブレードはあの拠点へ訪れて以来……何かしらの改修がされているのはわかっている。
全体的にあげられた出力、疑似飛行時間の延長。
ただ、相手が相手なだけにその性能を実感出来ずにいただけだ。
……何を意味するかわからないが、今はそれにかけるしかない。
システム音声に従うまま、ι・ブレードはムラクモを手にした。

「俺は……諦めないっ！」

コックピット内の赤い光が、急速に強まった。
不思議と襲い掛かっていた頭痛も、ピタリと止んだ。
モニターからも、眩しいぐらい強い赤い光が差しかかる。
これは……『ムラクモ』が赤く光っているというのか？

「うわあああああああっ！！！」

晶は力任せに、ムラクモを大型E．B．Bに向けて振り下ろした。

ブォンッ！　と、強烈な風圧が周りの木々を次々となぎ倒していく。
大型Ｅ．Ｂ．Ｂの中心に、縦一直線の赤き閃光が走る。
その時、時間が静止したかのように大型Ｅ．Ｂ．Ｂの動きは止まった。
同時に、ムラクモからの赤い輝きは失われた。
晶はモニターを見ずに、ただ下を向いたまま目を閉じていた。

キシャァァァッ！
耳が痛くなるほどの奇声と共に、大型Ｅ．Ｂ．Ｂは真っ二つに切断されて行く――
丁度中心部にあったコアとされるものも、見事真っ二つにされていた。
大型Ｅ．Ｂ．Ｂは砂のように崩れていき、その形を徐々に失っていった。

『なっ……テメェ、何して……っ！？』

流石の俊もι・ブレードが成し遂げた行為を見て、驚きを隠せなかった。
それも当然だ、たった一機のＨＡが剣一本で大型Ｅ．Ｂ．Ｂを一刀両断にしてしまったのだから。

「……や、やったのか？」

晶は改めてモニターを確認すると、既に大型Ｅ．Ｂ．Ｂの姿はなかった。

『どんな仕掛けだぁ、今のはよぉ？』

あの俊から、動揺を感じさせるような言動を耳にするとは。

晶はすかさずブラックホークの弾を補充した。

「くたばっちまえよっ！！」

バンッ！　バンッ！

2発、弾丸は静止するレブルペインのヘッドを目掛けて放たれた。

ズガァンッ！！

『なっ……しまったっ！？』

見事、晶の思惑通りレブルペインのヘッド部が破壊される。

すると不思議なことに、ι・ブレードのレーダーが正常な状態へと戻された。

『チッ……テメェ、許さねぇっ！！』

ヘッド部を破壊されても、まだι・ブレードに向かおうとするのか。

だが、俊とはそういう男だ。　二度も戦えば、晶は驚きもしない。

ヘッド部のメインカメラが破壊されてしまっても、臨時用カメラを使えば視界は復活する。

しかし、それ程性能がいいカメラは積まれているケースは珍しくなく、通常であれば戦闘を行うのは困難だ。

普通は退却を行うためのカメラとして割り切られてはいたが、この男にはそんなことは関係ない。

ただ、自分を傷つけられたことが許せない。　やられたらやり返す、徹底的に。

白柳　俊とは、そういう男なのだ。

「もう、終わりだっ！」

『終わっちゃいねぇっ！！』

上空に浮かぶι・ブレードへ向けて、レブルペインはその勢いを止めようとしない。

その時、複数のE．B．Bがレブルペインへと目掛けて襲い掛かった。

『邪魔すんな、クソがっ！！』

華麗な剣捌きで、レブルペインはあっという間に複数のE．B．Bを切り刻んだ。

『どうなってやがる……何で俺がE．B．Bに襲われてんだっ！？』

晶はヘッド部の赤い光を見て、E．B．Bのコアを思い出した。

あの赤い光とコアの色が酷似していたのだ。

コアはエターナルブライトとは別ではあるが、何らかの効力を持っていても不思議ではない。

学校の授業でも、E．B．Bコアの効力について学習したことはあり、HAへの採用も考えられているという話も聞いたことがあった。

過去に出現したE．B．Bでも、レーダーから姿を消すタイプは存在した。

あれはE．B．Bが進化の過程で身に着けた『E．B．B自身の力』だ。

……その力がコアに宿っていると考えれば、HAに搭載させることは不可能ではないかもしれない。

おまけにそのコアによって、E．B．Bが『人』と判別する前に『仲間』として判別するかもしれない。

全ては推測でしかないが、最終的に晶の予想が正しかったのは『レーダー』を見れば一目瞭然だ。

俊が狙われているこの隙を狙えば、あのレブルペインを落とすことはできるかもしれない。

だが、相手はそれ程甘くはない。

あのような男は、執念だけで勝利を掴むタイプだ。

深手を負っている以上……これ以上、俊と戦うことは危険だと悟った。

「……もう、十分だ」

晶はι・ブレードを加速させ、全力でその場を離れて行った。

『待ちやがれ……逃げんのかクソ野郎がっ！！』

「……これ以上戦って、何の意味があるんだよっ！？」

『テメェを叩き潰すまで……俺の戦いは終わらねぇっ！！』

「付き合ってられないって言ってんだよ……俺は行く、フリーアイゼンを助けにっ！！」

『クソがっ！　テメェ……覚えてろよ、まぐれで頭吹き飛ばしたぐらいで調子に乗ってんじゃねぇぞ？』

これ以上戯言を聞いている暇はない、晶は強引に通信を切った。

機体に傷を負いすぎてしまった。

弾薬も燃料もそんなに多く残されていない……だが、今更拠点に戻ったところで補給ができるはずはなかった。

それでも行くしかない。
フリーアイゼンを助ける為に――

「行くぞ、ι・ブレード……っ！」

晶は、空高く舞い……フリーアイゼンの元へと飛び立って行った――

第8話　絶体絶命　？

ι・ブレードが拠点を飛び出し、数時間が経過しようとしていた。
アヴェンジャー内では、既に何人かはι・ブレードの追跡に出されたが、レブルペインは既に全機出撃している。
残されたウィッシュだけでは、ι・ブレードの足取りを追うことは困難だ。

拠点の制御室には、無数の監視カメラ映像がリアルタイムで映し出されている。
その映像の一部には、明らかにＨＡ同士が争った形跡も残されていた。
映像を辿れば、ι・ブレードの姿も映し出されるだろう。
健三はι・ブレードが争った跡地を、眺めていた。

「どうやら、息子に逃げられてしまったようですな」

「……貴方は？」

ふと、監視室に足を運んだ老人がいた。
白髭に覆われた顔とその長身に合わさって威圧感があった。
だが、見た目とは打って変わって、まるで執事のような振る舞いで老人は健三の元へと歩み寄った。
ただの老人ではない、健三はそれを理解していた。

「何故、この拠点に貴方がいるのです？」

「ほう、私が現場に足を運ぶことがおかしなことですかな？」

老人は微笑みながら尋ねるが、健三の表情は強張っている。
健三が驚くのも無理はない、この老人は『アヴェンジャー』の首謀者である『ジエンス・イェスタン』なのだ。
何故首謀者である彼が、こんなところに足を運んできたのか？

「子供に信頼されない親とは、貴方には同情せざるを得ません。
少し、メシアで泳がせる期間が長すぎたのではないですかな？」

「ι・ブレードがなくとも、我々はアッシュベルを討つまでです」

「ほほう……ならば、ι・ブレードは不要と？　だから、逃がしたというのですかな？」

ギロリ、と老人は健三を睨み付けた。
だが、健三は何も語らずに黙り込んだ。

「私は咎めるつもりはございません、あの様子では貴方の息子は何らかの手段でアヴェンジャーから脱出するのはわかりきっていますからね。
そんないつ裏切るかわからないι・ブレードを使い続けるより……いっそ逃がしてしまうのはある意味正しい判断かもしれませんな。
この件については、我々二人と、かのパイロットの秘密……という事で、よろしいですかな？」

「……申し訳ございません、責任は私が取ります」

「流石に呑み込みが早いですな。　ιを失った穴は埋めてもらわねばなりません。
どうですかな、例のＨＡを貴方の手で改修してみては？」

「あの機体、ですか」

以前にアヴェンジャーが『第４シェルター地区』の調査を行った際に、奇妙なＨＡが発見されたという報告があった。
健三が秘密裏にι・ブレードの開発を進めていた機関とは別に開発されていた機体と推測はされている。
その機体の特徴は何処かι・ブレードに似せており、詳しく解析はされていないがιを元に開発されているのは明らかだ。
だが、アヴェンジャーの襲撃により、今となってはその真相は闇に包まれてしまった。

アヴェンジャー内ではそのＨＡは『ブラックベリタス』という名で呼ばれている。
だが、幸いにもメシアの手ではなくアヴェンジャーの手にそのＨＡは渡っていた。

「我々に必要なのは力ですよ、メシアを圧倒できるほどの力を手に入れなければならない。
メシアも我々を黙って見過ごすはずもない、いずれ『ι・ブレード』が敵として現れるかもしれませんな」

「……わかりました、引き受けましょう」

「よろしい、では私は失礼するかね」

コツコツ、と足音を響かせながら老人は監視室を出て行った。
何故このタイミングでブラックベリタスの改修を行うのか。
ι・ブレードはアッシュベルを討つには必然的な存在、と健三は考えている。

ジエンス・イェスタンは……既にι・ブレードへの興味をなくしているように見えた。

「読めない男、だ」

老人の後ろ姿を見送ると、健三はそう呟いた。

ブリッジルームでは、今までにない程の緊張感が漂っていた。
鳴り続ける警報と赤いランプが艦に訪れる危険を告げている。

「E．B．Bの反応、１００体を超えています。　また、大型E．B．Bと思われる反応も確認っ！」

ヤヨイはレーダーを確認し、深刻そうな表情で状況を告げた。
別にこれだけの数のE．B．Bが集まる事は珍しくもない。
だが、今回はフリーアイゼンだけでこれだけの数を相手にしなくてはならないのだ。
例え主砲があったとしても、大型E．B．Bが確認されている以上……死闘を繰り広げることになるのは間違いない。

「チッ……これだけの数は俺達で相手しろってか？　冗談じゃねぇぞっ！」

フリーアイゼンのモニターからでも、異常な数のE．B．Bは確認できた。
思わずライルも顔を真っ青にさせてしまうほどの光景だった。

しかし、これだけの数のE．B．Bを放っておくわけにもいかない。
この辺りにはシェルターで保護されていない地域もいくつか存在するはずだ。
ここで背を向けて逃げてしまえば、その地域の人々を見捨てる事となる。
たった一隻と2機のHAだけで、食い止めるしかない。

「主砲発射準備をしろ、パイロット各位は残りを叩けっ！　応援が来るまで何とか持ち応えて見せるんだ」

『了解した』

『任せときな。　晶の分まで……しっかり働いてやるさっ！』

ゼノスとシリアは、通信機から返事をした。

「主砲準備OKだぜ、カウント始めてくれっ！」

「了解しました、カウント始めます。　10、9、8……」

「……何としてでも、奴らを食い止めて見せろ。　我々は人類の希望でなければならん、強くなければいかん……
これぐらいの窮地、乗り越えて見せろっ！」

艦長は、クルー達に向けて力強く叫んだ。

「簡単に言ってくれますね、どうなっても知りませんよ」

「いいじゃねぇか、そういう熱い艦長が好きだぜ俺はっ！」

トリガーを力強く握りしめながら、ライルはそう呟く。
こんな時でも緊張感がないな、とリューテは呆れていた。

「3、2、1――」

「主砲、撃てっ！！」

「まとめて蹴散らしてやるよぉっ！！」

ライルがトリガーを引くと共に、艦内に大きな振動が伝った。
凄まじく巨大な紫色の光が、目の前のE．B．B軍団へと向けて発射される。
その主砲が、フリーアイゼンの長き戦いが開幕を告げた――

フリーアイゼン内の私室で、木葉は一人静かにナイフを握りしめていた。
先程、このナイフで自分は何をしようとしていたか。
無意識のうちに行った行動に、恐怖を覚えていた。

だが、そんなに深く考えなくとも……その理由は明確だ。
ただでさえ故郷で全てを失ったというのに、それにトドメをさすかのように『晶』の死が告げられた。
信じられないが、事実として受け止めるしかない。
だけど、心のどこかで生きていると願う自分もいる。
表向きでは、晶が生きていることを願って振り切っているつもりで

あった。

現実は違った、何処かで晶の死を悟っていたのだろう。
もう自分には何も残されていない、生きている意味がない。
そう感じたから、自殺を図ろうとしてしまったんだ。

「……」

再び木葉は、ナイフのカバーを外した。
銀色の刃が怪しく煌めき、木葉の顔を映し出す。
自分でも驚くほど、生気が宿っていない瞳をしていた。

まさか、ここまで自分が思いつめていたとは想像もしていなかった。
廊下にはずっと警告音が鳴り続けており、フリーアイゼンが戦闘体制に入っていることはわかっている。
警報が鳴っている間は、原則部屋から出ることは許されない。
……今なら、邪魔は来ないはずだ。

晶という支えまで失ってしまっては、とてもじゃないが希望を見出すことはできない。
木葉は決意をして、ナイフを強く握りしめた。
その時――

ゴォォンッ！！

室内が大きく揺れた。

「キャッ！？」

木葉は体を大きく飛ばされ、ナイフも乾いた音共に床へと落ちてい

く。
艦が被弾でもしたのだろうか、とにかく大きい揺れだった。
だが、外で何が起きていようが関係ない。
ゆっくりと体を起き上がらせて、木葉はナイフの元へと向かう。

「木葉ちゃん、無事ですかっ！？」

その時、シラナギが部屋へと訪れた。

「あ……」

木葉は力なく、言葉を漏らした。
シラナギは、床に落ちているナイフに目を留める。

「木葉ちゃん……？」

木葉は何も語らない。
誰とも話したくはなかった。
全てを失った自分の気持ちをわかる人なんて、いない。
これ以上苦しみたくはない。
早く天国へ待つ家族やクラスメイト、そして晶に逢いたいと願っていた。

「駄目ですよ……しっかり生きてくださいっ！　どうして、自殺なんて……」

「……もういいの、シラナギさん。　私ね、晶くんに助けられてここまで生きることが出来たの。　みんなみんな、あの時の襲撃で死んじゃったけど
晶くんが命がけで私を守ってくれて、私の為にここまで戦い抜いて

くれたの。　それだけで、私は幸せだったよ？」

「まだ晶くんは死んだって決まってませんよ、生きている可能性だってあるんですっ！」

力強くシラナギは訴えるが、もはやその声は届かない。
晶が生きているはずがない、無事であるはずがない。
それでも無事を願うなんて、まさに現実逃避に等しき行為としか思えなかった。

「晶くんは唯一の私の希望だった、全てを失った私を支えてくれる人だったの。
……でももう、晶くんはいないんだよ？　生きてるわけ……ないのっ！！　私、晶くんのＨＡがどんな状況になっていたか知っているんだからっ！」

「私は信じますよ……絶対に、晶くんは生きて帰ってきますっ！」

「口でなら簡単に言えるのっ！　もう、帰ってこない。　晶くんは帰ってこないのっ！！
私にはもう何も残されていない……もうやだよ……こんな辛い思い、もうたくさんなのっ！」

「木葉ちゃん……っ！」

パシンッ！
乾いた音が、室内に響き渡る。
シラナギが目に涙を浮かべながら、手を振りかざしていた。

「皆辛いんですよ……木葉ちゃんだけじゃありません。　シリアは

ゼノスを責める程荒れていたみたいですし……
ゼノスも部屋に籠ってずっとｉ・ブレードの映像を解析してました。
　今、この艦の状況わかってますか？
E．B．Bがたくさん出現したんです……皆、晶くんのことで頭がいっぱいでありながらも、一生懸命戦ってるんですよ？」

「……でも、私は――」

「私だって、凄く辛いんです……木葉ちゃんが苦しんでる姿を見ているのも辛いんですっ！
木葉ちゃんまで死んでしまったら、皆もっと辛い思いをしてしまいます。
それでも、皆は悲しみを乗り越えて必死で戦わなければならないんです……今だって、私達を守るために命懸け戦ってるんですっ！
だから……私達も乗り越えなければならないんですっ！」

「……シ、シラナギ……さん」

木葉は俯いたまま、ただそう呟くだけだった。
頭ではわかっていたつもりなのかもしれない。
あの映像を見て、死亡と判断した艦長も……立場上、認めざるを得なかったから下した判断だった。
ゼノスやシリアは一緒に戦っていながら、その最後を目の当たりにしてしまっている。

辛くないはずがない、晶を失ったことが。
だが、心のどこかで自分だけが特別に辛い、そんな事を過ぎらせていた。

「ただ、一つだけ訂正させてください。　私は、あくまでも晶くん

が生きていることを信じてます。
根拠なんてありません、ゼノスみたいに理論的に解説もできません。
ただ、生きていることは間違いないって思ってます。
だから……一緒に信じてみませんか？　まだ諦めるには、早すぎると思いますしね？」

シラナギは、微笑みながら手を差し伸べた。
木葉は俯いたまま、恐る恐る手を差し伸べようとする。
フリーアイゼンのクルー達は、晶を失った悲しみに包まれながらも……戦わなければならない。
今も、世界の人々を守るために戦いを繰り広げている。
メシアには、いつまでも悲しんでる暇もないのだ。

「シラナギさん、私のわがまま聞いてくれますか？」

「無茶すぎなければ、何でも聞きますよ？」

「……私を、ブリッジへ連れてってください」

シラナギの手をガッシリと握りしめ、木葉は顔を上げた。
その瞳は、何処か一つの決意に溢れていた。

「……わかりました、揺れには気を付けてくださいね？」

木葉はシラナギに連れられて、ブリッジルームへと向かった。

E．B．B襲撃を告げる警告が鳴らされ、すぐにパイロット2名は格納庫へと集まった。

「準備はバッチリだぜ、だがE．B．Bの数が相当多いらしいからな。　お前ら、死ぬんじゃねーぞ」

作業を終えたエイトが、集まった二人に対してそう言った。

「ああ、これ以上死人は出さん」

「アタシも簡単に死ぬ気はないさ」

二人は一言ずつ告げると、黙ってコックピットへと乗り込んだ。
大型E．B．Bの出現も推測されることから、ゼノフラムの出撃が要請されている。
ゼノスはゼノフラムに搭乗し、最終的な機体の調整を始めた。

『なぁ、ゼノス。　ちょっと聞いていいか？』

すると、コックピット内にシリアの通信が入った。

「なんだ」

『晶の事、本気で生きてるって思ってるのか？』

「……さあな、俺の都合のいい解釈かもしれん。　ただ、ιがパイロットを限定させているならば……と、考えただけだ」

『そうか……じゃあ、あんま期待しない方がいいよな』

何処かガッカリした声で、シリアはそう呟く。
やはりシリアも認めたくはないのだろう、晶の死を。
それはゼノス自身も同じなのだから。

『あいつさ、いい子だったよな。　アタシは弟が出来た気分で、凄く嬉しかったんだ。　ちょっと真面目すぎるのがあれだったけどな』

「……ああ、そうだな」

『あ、悪い。　戦闘前に話すような事、じゃないよな。　大丈夫さ、アタシだって立派な軍人。　私情に左右されずに戦えるさ』

「そうでなければ困る、俺達は世界の希望だからな」

最終調整を終え、一息をついたゼノスはそう返した。
今回の戦闘は、E．B．Bの数と大型E．B．Bの出現を考えると規模は大きい。
正直ゼノフラムやフリーアイゼンの主砲があったとしても、苦戦が強いられるほどだ。

更にゼノスには懸念があった。
ι・ブレードを失った今となっても、アヴェンジャーが襲撃を仕掛けてくる可能性はゼロではない。
シリアの扱うイエローウィッシュも、通常のウィッシュに比べれば飛び抜けた性能を誇るのは間違いなかった。
そして、対大型E．B．Bをコンセプトとして開発された機体である『ゼノフラム』
無茶な設計であれど、アヴェンジャーのターゲットとしては十分過ぎる程の性能を持ち合わせている。
……アヴェンジャーの襲撃が、これで潰えるはずがない、と考えた。

「シリア、出来る限り消費は抑えて戦え。　このタイミングでアヴェンジャーが仕掛ける可能性は十分にあるはずだ」

『……やっぱり？　アタシもそう思ってたんだよね。　しかし、E.B.　B相手に全力を出さないなんて、随分無茶な事を言ってくれるね……』

「何とかしなければならん……最悪G3の奴が訪れる可能性もある」

生き残るには、常に最悪の事態を想定しながら戦うことにある。

今時点での最悪な事態として考えられるのは、G3の再来であろう。

ι・ブレードはパイロットが不在と考えれば、敵として現れる可能性は薄い。

……もし、現れてしまった場合はとてもじゃないが討つ術はないだろう。

『主砲発射準備をしろ、パイロット各位は残りを叩けっ！　応援が来るまで何とか持ち応えて見せるんだ』

『……だとさ、考える暇もないみたいだね』

「……G3についてはある程度分析はしてある。　その時がきたら、相手は俺に任せてくれ」

『わかったよ、アンタに期待するさ』

ゼノスは目を閉じて、深呼吸をした。

「了解した」

短く返事をし、出撃の合図を静かに待つ。
既にカウントダウンも始まっていた。
静かにその時を待つと、格納庫が大きき揺れだす。
グラグラと伝う振動の中、ゼノスはスロットルを握りしめる。

「ゼノフラム、出るぞっ！」

ゼノスはスロットルを限界まで押し込み、ゼノフラムを発進させた

――

絶体絶命　？

ゼノフラムとイエローウィッシュの2機が、戦場となる地へと降り立った。
瓦礫の数々から、昔この地は街であったことが物語られている。
地面が抉られたかのような穴が一直線に広がっていた。
フリーアイゼンによる主砲の一撃の後だ。

これだけの破壊力があれば、大半のE．B．Bは一掃されたはず。
レーダーを確認する限りでは、E．B．Bの反応もかなり減少している。
大型E．B．Bの反応を確認し、モニター越しでその姿を捕えた。

黒く細長い、不気味な塔のようなものが聳え立っている。
一見ただの建物のようにしか見えないが、よく観察するとところどころ蠢いていた。
根本は地面に完全に埋まっているが、周囲には地面が抉られたかのような後が続いていることから決して移動ができないワケではない。

事前に分析されたデータと比較すると、どうやら頂上を位置する個所にコアが存在するようだ。
だが、コアのようなものは外見からは見えない……内部に隠されていると考えるのが自然であろう。

その時……E．B．Bがゼノフラムに飛び掛かってきた。
咄嗟にガトリングを放つと、あっという間にE．B．Bは地へと落とされ消滅する。
同時に、次々とバッタのようなE．B．Bが地中から出現し始めた。

『ぼさっとすんなよ。　とにかく雑魚を片づけるぞ』

「ああ、わかっている」

イエローウィッシュが、先陣を突っ切って次々とE．B．Bを切り裂いて行く。
その後に続き、ゼノフラムは次々とE．B．Bをガトリングで撃ち抜いた。
大型E．B．Bに近づいていくと、突如大型E．B．Bが奇妙な動きを見せ始める。
すると、表面上からボコボコッと黒い塊がまるで生えてきたかのように出現した。

「まずい……退け、シリアっ！！」

キシャアアッ！！
奇声と共に無数の黒い塊が一斉に飛ばされた。
豪速で飛ばされてきた黒い塊は、凄まじい破壊力で地を抉っていく。
まさにE．B．B式の『大砲』に相応しい破壊力だ。

「クッ……っ！」

動きを肉眼で捕えたゼノスは、二つの黒い塊をゼノフラムの素手で掴み取る。
とてつもない衝撃が襲い掛かり、ゼノフラムの巨体でさえも数センチほど退かされた。
手にした黒い塊を確認すると、少し紫色に帯びた謎の物体は……恐らく鉄の塊であろうと推測される。
周囲の瓦礫の山から、E．B．Bが生成したとでもいうのだろうか。

だが、砲丸の雨はそれだけで終わることはない。
ゼノフラムに向けて大量の砲丸が降り注いだ。
ゼノスはガトリングを発砲すると、砲丸は全弾地へと砕け散っていった。

「無事か？　シリア」

『ああ、ビックリしたぜ。　鉛の雨なんて異常気象だよ』

「あれでは迂闊に近づけん、主砲で隙を作るぞ」

『わかった、一旦退くよ』

ゼノフラムとイエローウィッシュの2機は、一旦フリーアイゼンの後方へ向けて発進させる。
その時……突如、レーダーが異常をきたした。

「……シリア」

『ああ、奴らが来たみたいだね』

機体を停止させ、周囲の様子を注意深く見渡す。
すると、黒い影の集団を確認した。
あれは間違いなく……アヴェンジャーだ。

「奴らの目的は恐らく俺達だ……引き付けるぞ」

『チッ、相変わらず面倒な奴らだね』

ゼノスは黒い影の位置へ向けて、機体を前進させる。
限界まで加速させ、土煙を舞い上げながら突き進んだ。
段々と敵の姿がはっきりしていくと……ふと、ゼノスは機体を急停止させる。
ギィィィッ！　と、耳を塞ぎたくなるような音が響き渡った。

だが、それどころではない。
ゼノスは、モニターに映された映像を前に、思わず目を疑った。
目視で確認するだけでも、５０機を超えるレブルペインを確認した。

それだけではない、恐らくアヴェンジャーが奪ったと思われるウィッシュだって含まれている。
敵機のＨＡの数が、想像以上に多すぎる。
いくらゼノフラムやイエローウィッシュを奪う為と言えど、これほどの数を用意するのは異常だ。
かつて、ι・ブレードを狙った際と規模が違いすぎる。
いよいよ本格的に軍事力を身に着けたか……或いは、別の目的があるか。

『我々の優先すべき事項はＥ．Ｂ．Ｂの殲滅だ』

艦長が、二人のパイロットにそう告げた。
Ｅ．Ｂ．Ｂでさえ手を焼いているというのに、流石にアヴェンジャーの相手まではできない。
最悪大型Ｅ．Ｂ．Ｂさえ仕留めることが出来れば、Ｅ．Ｂ．Ｂによる被害はかなり抑えることはできる。
それを考慮したうえでの、艦長の判断だろう。

「……了解した」

『主砲発射します、パイロット各位はレンジ外へ移動してください』

ゼノフラムとイエローウィッシュは、一旦引き返して大型E．B．Bの元へと向かう。

「シリア、大型E．B．Bは俺一人でやる」

『は？　なんで？』

「二手に分かれるぞ、奴らが混じってしまえばE．B．B殲滅に支障をきたす。
俺があの大型E．B．Bを仕留めるまで、なるべく敵を引き付けてくれ」

『随分無茶な注文してくれるね……アタシにあの大軍を相手にしろと？』

「やれるか？」

『アタシを誰だと思ってるのさ』

「頼りにしているぞ、シリア。　というワケだ、艦長」

『……お前達の事だ、どうせ止めても無駄だろう。　好きにしろ』

二人の会話を耳にした艦長は、一言そう告げるだけだった。
今までたった2機で修羅場を超えてきた二人の腕は誰よりも理解している。
E．B．Bの数は１００を超えており、とてもじゃないがゼノフラム一機でどうにかなるような相手ではない。

ただでさえ味方の数が不足しているというのに、それを分散してしまうのは無謀としか思えない行為だ。
だが、この二人ならやってのけるかもしれない。
そんな信頼関係が、いつの間にか築かれていたのだ。

「行くぞっ！」

『あいよっ！』

ゼノスは、スロットルを最大まで押し込んだ。
ガタガタとコックピットが揺れ、尋常ではない振動が伝うがそれでもスピードを緩めない。

ズガァァァンッ！！
背後からフリーアイゼンによる、主砲を確認する。
黒く聳え立つ大型E．B．Bに、紫色の光が一直線に走った。
表面が焼かれ、溶かされた内部からはグチャグチャと気色の悪い臓器のようなものが飛び出していく。

主砲の効果はあるようだが、それ以外に目立った外傷はない。
ゼノスは、露出された内面に向けてガトリングを撃ち込んだ。
その瞬間、突如露出していた内部が元の黒いツルツルの表面へと変化していった。
いや、変化ではない。　恐らく、再生だ。
E．B．Bには再生能力があるが、この大型E．B．Bは特にその力が優れていると思われる。

やはり、一筋縄でいくような相手ではなかった。
再び、ゼノフラムに向けて砲弾の雨が降り注ぐ。
ガトリングで全てを撃ち砕きながら、ゼノフラムは大型E．B．B

への距離を徐々に縮めて行った。
もっと火力の高い武装で攻めない限り、本体のダメージを与えることはできない。
ならば、さっさとコアを破壊するしかないが……ゼノフラムでは大型E．B．Bの頂上までたどり着けそうにはなかった。

「……へし折るまで、か」

先程の塞がれた傷、あの地点が恐らく大型E．B．Bの脆い部分だろう。
フリーアイゼンの主砲発射にはまだ時間はかかる、それまでにやれることはただ一つ――

「ブーストハンマー、射出っ！」

大量の砲丸が降り注ぐ中、ゼノスは怯むことなくハンマーを射出させて潜り抜けて行く。
目標は、先程大型E．B．Bが傷を再生させた箇所だ。
ブーストハンマーの爆発的な推進力により、ゼノフラムは引きずられるように宙へと浮いた。
何度か砲丸が直撃しかけたが全てガトリングで破壊をしてやり過ごしていく。
あっという間に、大型E．B．Bの目の前までたどり着いた。

砲丸は容赦なく生産され続け、ゼノフラムに向けて降り注ぎ続ける。
更には周りに集っていたE．B．B達が一斉に襲い掛かってきた。
だが、砲丸は敵味方関係なく無差別攻撃そのものであった。
集っていたE．B．B達のほとんどが砲丸の餌食となり、次々と潰されていった。

ズガァンッ！
コックピットが激しく揺れた。
ゼノフラムが砲丸の直撃を受けてしまった。
近距離になるにつれて、ゼノスの反応が追い付かなくなってきたのだ。

「……だが、退くつもりはない」

ゼノスはブーストハンマーを射出し、大型E．B．Bへと向かっていく。
ガンッ！　ガンッ！！　と、火花を散らしながら容赦なくハンマーは大型E．B．Bへと突進していった。
だが、表面に少し傷が入るだけでダメージが通っているようには思えない。
ゼノスは何度も、何度もブーストハンマーをぶつけ続けた。

その間にも砲丸は止むことはない。
ブーストハンマーに引かれているせいか、機体の制御は思った通りにはいかなかった。
避けるきるのが無理だと分かったのか、ゼノスは砲丸からのダメージを最小限に抑えるよう直撃を避けながら受け続ける。
このままダメージが蓄積されれば、ゼノフラムと言えど無事ではすまされない。
その時、ゼノフラムの目の前からボコッと砲丸が作り上げられた。
この距離から発射されれば、流石のゼノスも反応しきることはできない。

「チィッ！」

舌打ちをするとゼノスはブーストハンマーをぶつけて、その砲丸を

破壊して見せた。
更に、ボコボコッと砲丸が次々と生産されていく。
発射させる前に、キャノンとガトリングを全力で浴びせ続け、何とか砲丸の発射を防ぐことはできた。
すると、周囲の黒い表面が薄くなっていきうっすらとだが先程見えた内部が顔を見せ始めた。
ゼノフラムはブーストハンマーでその個所を打ち続けると、バリンッ！　と、ガラスのように黒い表面が崩れ去っていく。
更にブーストハンマーでその個所を抉るように、容赦なく発射させ続けた。

「主砲はいけるかっ！？」

ブリッジルームに向けて、ゼノスは叫んだ。

『はい、準備はできました。　レンジ外へ避難してください』

「そんな暇はない、俺に構わず撃てっ！」

『で、ですが……』

「撃つんだっ！」

『……わかりました』

ヤヨイは不安げな声であったが、了解をしてくれた。
発射準備が整ったことを確認すると、ゼノフラムは肩からミサイルを全弾発射させる。
ズガァァンッ！！　と、ミサイルの爆発によってゼノフラム自身が吹き飛ばされてしまった。

だが、ゼノスは何とか操縦桿を握りしめ地面へと着地させた。
……大型E．B．Bには、まるで抉られたかのような大きな傷跡が残されたままだった。

その時、紫色の光が一直線に大型E．B．Bを貫いていく。
ゼノフラムは間一髪で、主砲の一撃を避けきった。
その途端、砲丸の雨がピタリと止んだ。

ゼノスが切り開いた内部に主砲の一撃が重なったことにより、大型E．B．Bはその巨体を支えるバランスを失った。
ギギギ、とその巨体を地面へと向けて倒していく。
ゼノフラムは巻き込まれないようにと、全力でその場を離れて行った。
ガトリングの弾薬は尽き、ミサイルも全て打ち切った。
残された武装だけでコアを破壊しなければならない。

「だが、やるしかあるまい」

フリーアイゼンの主砲がなければ、こう簡単に事が運ぶこともなかった。
やはり、HA単機で大型E．B．Bを討伐することは難しい事なのだろうか。
ふと、ゼノスはフリーアイゼンへ目を向けた。
その時――

「なっ――！」

2本の紫色の光が、フリーアイゼンを貫いていた――

迫り来るアヴェンジャーの部隊へ向けて、シリアは機体を前進させ続けた。
あの数とまともにやりあう気はない、要はゼノスが大型E．B．Bを何とかするまで時間を稼ぐのが目的だ。
イエローウィッシュの機動性であれば、相手を錯乱させることも容易であろう。

「できれば大人しく、E．B．Bの相手をしていたいんだけどねぇ」

敵軍との距離は徐々に縮まっていく。
そろそろ仕掛けるか、とシリアはグレネードを敵に向けて投げ飛ばした。
ズガァァンッ！　と、派手な爆発と共に砂埃が発生する。
イエローウィッシュは砂埃の中へと入り込んでいった。
視界が悪い中、HAの影を確認するとイエローウィッシュは2本のサーベルを抜刀した。

「まず、一機っ！」

バシュンッ！　と、バーニアを吹かすと目にも留まらぬ速さでイエローウィッシュは一機のレブルペインを切り裂いた。
レブルペインは膝を地へつかせ、ガタンッと倒れていく。
すると、2方向からババババッ！　と、ライフルが発砲された。
難なく回避を行うと、イエローウィッシュはライフルを構えて音を頼りに一発ずつ発砲する。

ガンッ！　と金属音を確認すると、サーベルを手にギュンッと機体を前進させた。
怯んでいるレブルペインの姿を確認し、イエローウィッシュは鮮やかな剣裁きで切り裂いた。

「どうしたどうした、たった一機に手こずってるのかい？」

敵を挑発するもの、砂埃の中にいつまでもいるつもりはない。
シリアは一旦その場を退いた。
中ではバババッとライフルで撃ち合う音だけが聞こえていた。

「これで同士討ちしてくれりゃ、かなり楽なんだけどねぇ」

と、ため息交じりで呟くと現実は甘くないと言わんばかりに2機のレブルペインがシリアを追い姿を晒す。
2機のレブルペインは、一斉にライフルを放つとイエローウィッシュは華麗なる動きで避けきった。

「アタシを、なめんなっ！」

ガキィンッ！　と金属音を響かせると、2機のレブルペインは両腕を切り落とされていた。
だが、それでもイエローウィッシュへと2機のレブルペインは飛び掛かっていく。
その状態ではできることが限られており、突進しか選択肢はない。
シリアは冷静にライフルで2機のヘッドを撃ち抜いて見せる。
2機のレブルペインは地へと足をつき、そのまま倒れて行った。

『図に乗るなよ、貴様』

『アハハ、お姉さんまた逢えたねっ！』

「……テメェらっ！！」

砂埃の中から、２機のＨＡが姿を現す。

今となっては忌々しき深緑色の巨体、ι・ブレードを打ち破った『Ｇ３』。

もう１機は、レブルペインではあるが、問題はそのパイロットにある。

過去に何度も戦った際に、尋常ではないしつこさでシリアを追いかけまわした『フィミア』だ。

『大人しく投降しろ、今なら命だけは助けてやるぞ』

『ウヒヒ、お姉さんこっち来ない？』

「ざけんなよ……テメェらみたいな迷惑野郎と一緒になるぐらいならここで死ぬことを選ぶね」

『ならば、死ね』

Ｇ３から無数のサマールプラントが飛び出した。

シリアはスロットルを限界まで押し込み、サマールプラントを振り切ろうとする。

『アハハッ、やっぱりお姉さんと私は相性抜群だねっ！』

すると、イエローウィッシュの前を先回りし、レブルペインがサーベルを片手に襲い掛かってきた。

「だから、アンタなんてお断りだっつーのっ！！」

シリアは強引に2本のサーベルで、レブルペインを弾き飛ばす。
ガキィンッ！　と、鈍い音共にコックピットが大きく揺れる。
わずかに停止したイエローウィッシュに数本のサーマルプラントが突き刺さったのだ。

「チッ！」

再び最大速度まで加速させるが、サマールプラントは逃げても逃げてもイエローウィッシュを追い続ける。
その間にも徐々にアヴェンジャーの本体が合流を果たし、数機のＨＡからライフルで狙われ始めた。
バシュンッ！　バシュンッ！　と、四方八方から飛んでくる弾丸を辛うじて避けながらも、イエローウィッシュはそのスピードを緩めない。

「クッソ、相変わらず厄介な武器だねあれはっ！」

シリアは敵機の2機の敵ＨＡが発砲している姿を確認し、そのポイントへ向けて機体を前進させた。
敵ＨＡは怯むことなく、ライフルを発砲し続けるが全て避けて見せる。
このままサーベルで切り付ける、かと思いきやイエローウィッシュは敵のレブルペインの裏側へと回った。
ズガァンッ！　と、サマールプラントがレブルペインを容赦なく串刺しした。

「ふぅ……ようやく止まってくれたな」

ホッと一息をつく間もなく、突如上空からレブルペインが斬りかかってきた。
ガキィンッ！　と、サーベル同士がぶつかり合い火花が散る。
『ねぇねぇ、今日はどんな愛し方してくれるの？　すっごく激しい方が好きだよ？』
「キモいんだよ、クソっ！！」
ガンッ！　と、レブルペインを蹴り飛ばすと再びサマールプラントがイエローウィッシュへと向けて襲い掛かる。
シリアは咄嗟にサーベルでサマールプラントを切り裂くと、できるだけ遠くに離れようと一旦退避をしていく。
ようやくシリアが起こした砂埃が収まろうとしている中、敵軍の姿が再度肉眼を捕えることが出来た。
「……あ、あれは？」
敵軍の後方に、２機のレブルペインが長身の銃を両手で構えている姿を捕えた。
……いや、あれはただの狙撃銃ではない。
あの形状と言い、シリアは同じようなものを見たことがあった。
「ロングレンジキャノン……っ！！」
そう、間違いなくレブルペインが手にしているものは『ロングレンジキャノン』だった。
照準はシリアではなく、明らかに『フリーアイゼン』へと向けられている。

急いで狙撃を止めなければ、取り返しのつかないことになる。
だが、あの敵軍のど真ん中へ単機で突っ込むのはあまりに無謀すぎた。

「……黙ってみてられるかっ！」

迷わず、シリアは敵陣の中を突っ切っていく。
目標はロングレンジキャノンの動力源。
発射には大量の電気を使用する為、あれさえ潰してしまえば狙撃を防ぐことはできるはず。
最悪ケーブルさえ千切る事さえできればいい。

「間に合ってくれっ！」

スロットルを限界まで押し込み、機体は最大速度まで達する。
一斉にライフルで狙われるが、この速度であれば当てられる心配はない。
ロングレンジキャノンの機能を停止させて、すぐに戻れば生還はできるはずだ。

だが、既にロングレンジキャノンのチャージは始まっている。
動力源を狙っていては間に合わない……ならばケーブルを切断するしかない。
シリアはケーブルに向けて、ライフルを発砲させようとした。

ズガァンッ！！
突如、コックピット内が大きく揺れ始めた。
警告音が響き、イエローウィッシュはガタンッと敵陣のど真ん中で動きを止めてしまった。

「ど、どうした？　う、動かない？」

ウソだろ？　と言わんばかりに、シリアはスロットルを押し込んだり引いたり、操縦桿をガチャガチャと動かすがイエローウィッシュはビクともしなかった。

よほど当たり所が、悪かったようだ……。

『アッハッハッハッ！！　駄目だよお姉さん……もっともっと私と愛し合ってくれないとぉっ！！』

「クソッ……動けっ！！」

あのフィミアが、ライフルで動きを止めたというのか。

操縦桿を叩き付けるものの、イエローウィッシュは機能停止にまで追い込まれてしまっていた。

徐々にアヴェンジャーのＨＡへと囲まれ、イエローウィッシュは包囲されていく。

「……参ったね、こりゃ」

流石に成す術がないと、シリアは力なく呟いた。

その時、一機のレブルペインが全速力でイエローウィッシュの元へと近づいてきていた。

……恐らくは、フィミアの操るＨＡだ。

『アハハ、アッハッハッハァッ！　お姉さん、お姉さぁぁぁんっ！』

「あんのバカっ！　アタシを殺す気かっ！？」

シリアがいくら操縦桿を叩き付けようがスロットルをガチャガチャ

と押し込もうがイエローウィッシュの反応はなかった。

『ウヒヒィ……私と、一つになってよぉぉっ！！』

「やめろ、おい――」

ガキィィンッ！！

シリアの叫びも虚しく、レブルペインのサーベルはイエローウィッシュの胴体を貫いた。

「……チッ、じゃあな、相棒――」

覚悟を決めたシリアは、脱出ボタンを叩き付けるように押した。

ズガァァァンッ！！

同時に、イエローウィッシュは大爆発と共に大破していった――

『アハハハッ！　アッハッハッハァッ！！　一つになっちゃった、お姉さんと一つにぃぃっ！！』

大爆発の中、フィミアの奇声に近い笑い声だけが響き渡る。

それと同時に、２機のレブルペインからロングレンジキャノンが発射されていく。

バシュゥゥンッ！！

轟音と共に、２本の紫色の光が発射された。

２本の紫色の光は、フリーアイゼンを貫いていった――

絶体絶命　？

シラナギに案内され、木葉はブリッジルームの入口へと辿り着く。
戦闘中は、本来であれば一般人は立ち入り禁止であるはずだが、シラナギの手に掛かればどうってことはない。

「さあ、行きますよ木葉ちゃんっ！」

「は、はい……」

シラナギが扉を開こうとすると――
ズガァァンッ！　と、派手な音と共に艦内が大きく揺れた。

「きゃっ！？」

「木葉ちゃんっ！？」

木葉はバランスを崩して、思い切り尻餅をついてしまう。
幸い、怪我をすることはなかったが、やはり戦闘中の艦内が危険なことに変わりはない。

「い、今の揺れは……？」

「大丈夫です、今のは主砲の反動です。　物凄く強力過ぎるから、その分反動も強いんですよー。　全く、迷惑ですよねぇ」

呑気そうに語るシラナギを見ると、不安になって震えている自分がバカバカしく思えてくる。

木葉はシラナギを見習い、心の中で怖くない怖くないと、念仏のように唱えていた。
改めて、木葉はブリッジルームへと足を運ぶ。
そこには、想像以上の重たい空気が圧し掛かった。

「敵の状況は？」

「大型Ｅ．Ｂ．Ｂにダメージはありましたが、すぐに再生されてしまいます。　現在、ゼノフラムが大型Ｅ．Ｂ．Ｂと交戦状態。
同時にイエローウィッシュはアヴェンジャーと交戦状態に入ったようです」

「主砲はどうなっている？」

「へいへい、準備してますよ。　しっかし気持ち悪いなおい、思いっきり臓器見ちまったぞ……」

「呑気な事を言っている場合か、少しは真面目にやれ」

「やってるっつーの。　というか、お前も気を抜いて艦の調整ミスんじゃねぇぞ？」

木葉は、必死でＥ．Ｂ．Ｂ達と戦うクルーの姿を見つめていた。
自分は何もせずに、ただ晶がいなくなってしまっていた事に絶望をしていた。
だが、彼らは違う。　仲間の死を告げられても、目の前に現れた敵に立ち向かっている。
悲しむ暇もなく、生き残るために必死で戦い続けているのだ。

巨大なモニターには、不気味な塔が映し出されている。

黒い塔からは、黒い塊のようなものが次々と周囲に巻き散らかされていた。

「……見てくださいよ、あれもE．B．Bなんですよ？」

「え？　ほ、本当ですか？」

木葉は驚きを隠せなかった。　あの塔みたいなE．B．B、どう見ても生物のようには見えないのに。

そこに、一機の赤いHAが立ち向かっている姿が見えた。

木葉もあの機体は知っている、『ゼノフラム』だ。

E．B．Bと比べて、ゼノフラムはまるで豆粒のように小さかった。

あんな小さな機体で、巨大な怪物と戦っている姿を見ると、木葉は胸を痛めた。

「あれだけじゃないんです、他にも小さいE．B．Bはたくさんいますし、アヴェンジャーという悪い奴も襲い掛かってきてるんですよ。

正直に言いますと、今とってもピンチなんです。　でも、皆逃げずに戦ってるんですよ？」

「……みんな辛いはずなのに、どうして戦えるの？」

「メシアは人類の希望ですからね、何が何でもE．B．Bを倒す使命があるんです。　じゃないと、たくさんの人が死んじゃいますから。

更なる悲劇を生み出さない為にも、一生懸命悪に立ち向かうんです」

「……立派なんですね」

必死で戦い続けるクルー達の姿を見て、木葉はそう呟く。
どんなに悲しい事が起きようとも、私情に左右されずに使命を全うするだけの強い心を持っている。
とてもじゃないが、今の木葉には真似ができないことだった。
木葉には胸を張れるような使命もない、皆が持つ守るべきものも全て失っていた。
かといって、晶のようにパイロットとして戦う覚悟を持っているワケでも、技術を持っているわけでもない。
シェルターが襲われてから、木葉はずっと晶に守られっぱなしだった。

「あんまり思いつめちゃダメですよ？　木葉ちゃんは一般人なんですからね」

シラナギの言う通り、木葉は何の力を持たない一般人だ。
本来であれば、こんな場所へ立ち入る事すらも許されない、戦いに全く縁がないはずだった。
だが、あの襲撃を受けて以来フリーアイゼンに留まる事になり、世界とE．B．Bの関係、そしてアヴェンジャーといった組織を知った。
シェルターの外では想像を絶する戦いが繰り広げられていて、木葉はそれを怖く感じた。
晶はそんな世界を目の当たりにしても、パイロットとして戦い続けて、木葉を守り続けてくれたのだ。

「……晶、くん」

やっぱり、駄目だった。
ここに来れば、何かが変わると思った。
皆が戦っている姿に刺激されて、僅かな希望を取り戻せると信じて

いたが、無駄に終わってしまった。
どうしても、この悲しみを絶つことが出来ない。
何故、晶が死ななければならなかったのか。
死ぬのは、私ならばよかったのに、と強く感じていた。

「……木葉ちゃん」

今にも泣きだしそうな木葉を、シラナギは優しく抱きしめた。
とても暖かくて、まるで母親のような温もりを感じる。
木葉は次第に心に落ち着きを取り戻していった。

ズドォォォンッ!!
突如、艦内から爆発音が響き渡った。
同時に、今までにないぐらい艦内が激しく揺れる。
バタンッ!と、木葉とシラナギは、地面に叩き付けられるかのように倒れた。

「状況を報告しろ」

「はい、アヴェンジャー部隊より高エネルギー体を確認しました……これは、ロングレンジキャノンの反応です……!」

「ロングレンジキャノンだと？　奴らめ、早速奪った兵器を我々に向けたか……フィールド状態はどうだ？」

「辛うじて維持はできていますが、あまり長く持ちそうにありません」

ブリッジ内に、更なる緊迫感が広がった。
木葉は立ち上がると、ブリッジ内の騒々しさに、戸惑っていた。

「な、何……？　何が起きたの？」

「……木葉ちゃん、危ないからじっとしててくださいね」

事態の深刻さを察したシラナギからは、自然と笑みが消えていた。
ただ、ひたすら木葉を安心させようと静かに抱きしめる。

「大丈夫です、安心して、ください……」

逆に木葉を不安にさせる程の、力のない声だった。

「……？　そんな」

「どうした、カイバラ」

「イエローウィッシュが、撃墜されました……」

「……っ！」

艦長の顔が、青ざめていた。
いや、艦長だけではない。他のクルー達も、同じような表情を見せていた。
木葉もただ、その事実を耳にして顔をハッとあげる。
……イエローウィッシュと言えば、シリアが搭乗するＨＡだ。
それが撃墜された、という言葉が意味することは――

「いや、いやぁぁぁっ！！！」

思わず、木葉は泣き叫んだ。

晶に続いて、シリアまで……死んでしまったというのか。
どうして、こんな事に……？

「……脱出ポッドの確認を急げ」

「駄目です、ジャミングの影響で確認できません……」

「クッソッ……あいつら許さねぇっ！！」

ライルはガンッ！　と、強く机に拳を叩き付けた。
すると、艦長の許可を待たずにアヴェンジャーに主砲を向け始めた。

「待て、ライルっ！　大型E．B．Bを優先しろっ！！」

「んな事言ってる場合かっ！　艦だって狙われてんだぞ、クソがっ！！」

「ライル……っ！」

「止めんなリューテっ！　あいつら一人じゃ飽き足らず二人も俺達の仲間を奪ってったんだぞ……っ！」

「……だが」

「命令違反だろうが何だろうが関係ねぇ……あいつら消し飛ばしてやる……っ！」

ライルの怒りは収まる事はない。
アヴェンジャーの行為によって、理不尽に二人の命が奪われた。
各地を混乱させるだけ混乱させて、悪戯に命を奪っていくアヴェン

ジャーの行為を許すわけにはいかない。
もはや『E．B．B』よりも遥かに残酷で、恐ろしい組織と成り果てた。

「……第2射、来ますっ！」

「何だと？　クッ……回避しろっ！」

「やってますよ……っ！　ですが、このままだとバランス失って落ちる……っ！」

「……ゼノスっ！　アヴェンジャーの持つロングレンジキャノンを破壊しろっ！」

『了解した。　すぐに向かう』

聞こえてくる会話だけでも、事態の深刻さが伝ってくる。
木葉は体を震えさせて、しゃがみこんだまま動けなかった。
このままだと、皆やられてしまう。
どうすればいいのかもわからず、ひたすら怯える事しかできなかった

ズガァァンッ！！　再度、艦内が大きき揺れる。
バタンッと、木葉は床へ倒れた。

「状況はっ！？」

「左舷部に被弾を確認しましたが、直撃は免れたようです」

「畜生っ！　これじゃ、主砲も使えねぇぞっ！？」

「クッ……援軍はまだなんですか！？」

ジャミングのせいもあり、メシアの援軍の到着は大幅に遅れている。
だが、このままフリーアイゼンとゼノフラム一機で戦うことは困難だ。
イエローウィッシュも失っている以上……これ以上、犠牲を出すわけにもいかない。
幸い大型E．B．Bの足止めにも成功している……当分の間は、身動きは取れないはずだ。

「……各位、撤退だ。　ゼノス、戻れっ！」

『無理だ』

「何……？」

『……アヴェンジャーの奴らは、どうしても俺達が邪魔らしいな。
どうやら、囲まれているらしい』

ゼノスからの通信を確認し、艦長はカイバラと目を合わせる。
艦内のカメラをフル活用し、周りの状況を確認していくと……ゼノスの言う通りだった。
フリーアイゼンを囲むように『アヴェンジャー』の部隊が待ち構えていたのだ。

『フリーアイゼンの艦長に告ぐ、我々に艦を明け渡せ』

突如、艦内に通信が入った。
交渉をしようというのか、今はアヴェンジャーの攻撃は止まっている。

「……断る」

『断れば貴様らに命はない。　勿論、周囲の民間人も無事で済むとは思わないことだな』

「艦長……」

ヤヨイは、深刻な表情で艦長の名を呟く。
艦を明け渡したところで、クルーの命が保証できるわけではない。
下手すれば全員この地に降ろされて、素手であのE．B．Bから逃げなければならない事も十分に有り得る。
かといって、抵抗をしようにもアヴェンジャーの部隊に囲まれている状態だ。
全方面からロングレンジキャノンの影が見えている、もし同時に放たれたらフリーアイゼンと言えど持つはずがない。

「……カイバラ」

「はい」

「敵の守りが薄いところは何処だ？」

「……東ですが、あちらには大型E．B．BとE．B．Bが存在します。　他は同じぐらい、と思っていいです」

丁度、フリーアイゼンが向いている方角だ。
ロングレンジキャノンが二つあると言えど、確かに敵兵の数は少なく見える。
他の方角に旋回するとしても、その間にロングレンジキャノンによ

って狙い撃ちにされる可能性は高い。
……ならば、迷うことはない。

「リューテ、全速力で進め。　できるだけ遠くへ逃げるんだっ！」

「ほ、本気ですか？」

「ライル、主砲を発射させろっ！　ミサイルもありったけぶちかましてやれっ！」

「お、きたねきたね。　ま、何もしないで死ぬより全然マシだろ」

「この程度で我々を包囲した気でいるとは……我々を見縊ってもらっては困るっ！」

艦長に命じられるまま、リューテはフリーアイゼンを最大速度で前進させ始めた。
その間に主砲のチャージを行い、ライルは主砲を発射させる。
更にはありったけのミサイルと機関銃を発車させ、周りにまとわりつくＥ．Ｂ．Ｂを蹴散らしていく。

「ロングレンジキャノン、来ますっ！！」

「怯むな、突き進めっ！！」

その時、フリーアイゼンのモニターが紫色の光に包まれる。
ズガァァン、ズガァァンッ！　と、次々とロングレンジキャノンが襲い掛かった。
艦内は激しく揺れ、警告音が鳴り続ける。
バランスを失ったフリーアイゼンは、地へと向けて墜落していった。

「クッ……まだ、動けるか？」

「無理です、このまま不時着しますっ！」

「……まだだ、我々はまだ戦えるはずだっ！」

決死の特攻も虚しく、失敗に終わった。
幸い全弾浴びる事がなかったのが救いか、艦はまだ形を保っている。
当分の間は飛ぶことはできないだろう。

「大型Ｅ．Ｂ．Ｂが活動を再開……っ！」

『艦長、こいつは俺が止める。　アンタは生き残る事だけを考えろ』

この状況になっても、ゼノスは諦めてはいなかった。
それは艦長も同じ思いでいた。
しかし、アヴェンジャーの攻撃は止むことがない。
停止したフリーアイゼンに向けて、次々とロングレンジキャノンが発射され続ける。
艦内が激しく揺れ続け、フリーアイゼンの装甲が徐々に破壊されて行く。
もはや限界は近い、いつ大破してもおかしくない状況にまで追い込まれてしまっていた。

「艦長、これ以上持ちません……っ！」

「……主砲は、撃てるか？」

「いや、無理だな。　破壊されちまってるし、こりゃ白旗あげるか

？」

「……すまんな、今回ばかりは奇跡は起きなかったようだ」

「この艦をアヴェンジャーの奴らに渡すより全然マシです」

結果はわかりきっていた、このまま無謀に突っ込んでも落とされる事は誰でも理解できていた。

だが、それでも艦長は……アヴェンジャーに艦を渡す事だけは避けようと考えていたのだ。

勿論、艦長としてはクルーの命を守る事を優先しなければならない。

しかし、あの状況で脱出をしたところで生き残れる保証もなければ、アヴェンジャーに引き渡したところで助かる保証もなかった。

……艦長らしからず、奇跡を起こすしかなかったのだ。

もっと早くアヴェンジャーの狙いに気づいていれば、素直に退くべきだったのかもしれない。

今更後悔しても、何もかも遅かった。

そんな状況を目の当たりにして、木葉は言葉を失っていた。

皆寂しい気持ちを堪えて、一生懸命戦っていたというのに、こんな結末はあまりにも残酷すぎる。

酷い、酷すぎる。　アヴェンジャーにそう訴えながら、木葉はひたすら涙を流し続けた。

モニター越しから、2機のレブルペインがロングレンジキャノンを構えている。

ゼノスは大型E．B．Bの相手を続けていて、あの2機までに手は回らない。

仮にあの2機を優先していたとしても、動き出した大型E．B．Bがフリーアイゼンを狙う恐れもあった。

木葉は目を閉じて、静かに願った。

誰か、助けて。
フリーアイゼンを、助けて。
このままじゃ皆、報われないから。
こんな結末、認めたくない。
だから、起こして。　奇跡を。

「――――晶くん、帰ってきてよっ！」

木葉の悲痛な叫びが、艦内に響き渡った。

「こ、これは……？」

「どうした、カイバラ？」

「ロ、ロングレンジキャノンが、次々と破壊されていますっ！」

「何……？　まさか、援軍が来たのかっ！？」

木葉は、ハッと顔を上げた。
何処か、懐かしさを感じる。
だが、こうしている間にも目の前のレブルペイン2機のロングレンジキャノンのチャージは完了していた。
今の状態であの一撃を受けてしまえば、今度こそ終わりだ。
艦長は成す術もなく、ただ力強く拳を握りしめるだけだった。

バシュンッ――
その時、モニター越しから何かが高速で動いている姿を捕えた。
紫色の綺麗な弧が描かれると、レブルペインは音もなく真っ二つに切断されていく。

そこには、紫色の長い刀を持つ白いＨＡの姿があった。
既に激しい戦闘を乗り越えてきたのか、傷だらけであった。
多少形を変えようと、見間違えるはずもない。

「い、ι……ι・ブレードですっ！」

「な、何……？　誰が乗っているんだ、まさか敵じゃないだろうな！？」

艦長は警戒をしていたが、木葉はそんなものを全く抱かなかった。
何故なら、今の動きは間違いなくフリーアイゼンを救ってくれたから。

『遅くなってごめん……助けに、きたぞ』

「晶……晶だと？　本当かっ！？」

艦長は声を荒げてそう言った。
まさか、あの状況で生きたというのか。
信じられない、艦長は晶との再会を喜ぶよりも先に生きている事に驚きを隠せなかった。

『話は後だろ……まだＧ３の奴も大型Ｅ．Ｂ．Ｂだっていやがる。……全部、俺が片づけてやる』

間違いなく、晶の声だった。
木葉は嬉しさのあまりに、その場で泣き崩れていた。

「……ほら、諦めるのは早かったんですよ。　言ったじゃないですか、信じましょうって」

「あ、晶くん……よかったぁ、よかったよぉ……」

木葉の涙が止まる事はなかった。
それは先程までの悲痛な涙とは違う。
もっと暖かい、嬉しさに溢れた涙だった。

絶体絶命　？

アヴェンジャーによる包囲網に捕らわれたフリーアイゼンに、もはや打つ手はない。
四方に配置されたロングレンジキャノンの集中砲火により、フリーアイゼンは今にも落とされようとしていた。
たった一機で無謀にも挑んできたシリアのイエローウィッシュは、既に大破している。
残りのゼノフラムと言えば、大型Ｅ．Ｂ．Ｂの相手に手こずっており、アヴェンジャーの相手をしている暇はない。
その様子を、Ｇ３の中でガジェロスは見物していた。

『ねぇねぇ、いいの？　あの艦、貰っちゃうんじゃなかったの？』

「そうだな、今の状態であれば制圧だって簡単だろうよ。　こいつを奪うなり落とすなりしちまえばメシアの連中は黙っちゃいねぇ。
いよいよ、俺達は本格的にメシアと戦争する事になるだろうな」

『アハハッ、それ楽しそう。　私の新しい恋も、始まりそうだね？』

「しかしどういうつもりなんだろうな、いくらιを手にしたからと言えど動きが過激すぎるぞ。　ウチのトップは何を考えてんだろうな……ま、テメェに言ったところでまともな答えは返ってこねぇか」

『ウヒヒ、いいの。　私は恋さえできれば、満足だから』

通信機から聞こえてくるフィミアの声を聞き、ガジェロスは呆れた。
彼女は昔はまともな人格だったのだが、ある日突然……人が変わっ

たかのように『愛』に固執するようになったと聞く。
だが、アヴェンジャーの部隊にはそのような過去を持つ者は別に珍しくはない。
その全ての原因に、あの『アッシュベル・ランダー』が関わっているのだ。

ズガァァンッ！！
突如、後方より謎の爆発が発生した。

「……何の騒ぎだ？」

シリアの可能性はない、あの爆発では例え脱出に成功したとしても『戦える』はずがない。
フリーアイゼンによる砲撃も考えられない……そうなれば、メシアの援軍が辿り着いたと考えるのが自然だ。

「今更助けが来たって遅い……既にフリーアイゼンは虫の息だ」

『メシアのＨＡが高速で接近中……っ！　信じられない速度ですっ！！』

『狙撃主が2機やられました、至急の迎撃をっ！！』

「……たった、一機だと？」

南に配属された別部隊から、ガジェロスの元に通信が入った。
すると、確かにガジェロスは肉眼で南部隊のＨＡが撃破されている姿を目撃した。
……信じられない、南の部隊とは相当の距離があるはずだ。
とてもじゃないが、ＨＡが出せる速度とは考えられない。

仮にそこまでの速度を出せたとしても、パイロットの負荷が尋常ではないはずだ。
それにメシアの援軍にしては妙だ、例え最新型だとしても単独で行動するとは考えにくい。

『……ιです、ι・ブレードが接近してきましたっ！』

「ι……ι、だと？」

ガジェロスは思わず耳を疑った。
晶はアヴェンジャーの施設に監禁されているはずだ。
いくら見張りが少ないタイミングであっても……一般学生が簡単に脱出できるはずがない。

「……しかし、バカな奴だ。　そのまま逃げ回っていればいいものの……『G3』の恐怖を、忘れたとは言わせねぇぞ」

ガジェロスがこうしている間にも、次々と味方のレブルペインは大破されていく。
だが、以前のιでは、あそこまでの速度を出すことが出来なかったはずだ。
恐らく、未乃　健三が何かしら手を加えたと考えられる。

『アッハッハッハッ！　ιだってっ！　でも私、あの子は好きになれないかも。　残念だけど、好きになって、あげられない』

「ゴチャゴチャ言ってる暇があれば手伝うんだな……ここでιを逃がしちまうと後が面倒だ」

『ウヒヒ、しょうがないから愛してあげる』

G3とレブルペインは、ι・ブレードを追うように土煙を上げて発進していった。

俊との死闘を繰り広げた晶は、ようやくフリーアイゼンの元へと辿り着く。

……だが、既に手遅れと言っても過言ではない。

もはや、フリーアイゼンはその場から動くことが出来なかった。

咄嗟の判断で、狙撃主を全て仕留めたからといってフリーアイゼンが救われたワケではない。

……E．B．Bとアヴェンジャーをどうにかしない限り、助ける事は出来なかった。

「……クソッ、なんでだよ。　何で、こんなボロボロなんだよ……っ！！」

晶は悔しさのあまりに、操縦桿に拳を叩き付けた。

もっと早く、俊をどうにかできていれば……位置を特定できていれば……。

だが、悔やんでいる暇もない。

ここには『G3』の姿もあったのだから。

万全な状態ではないι・ブレードでは、勝機は薄い。

だけど、フリーアイゼンは最後まで諦めずに戦い続けていた。

その変わり果てた姿を見せ付けられて、晶は痛感した。

落ちこぼれのパイロットを受け入れてくれたフリーアイゼン……故郷を失った晶にとって、第2の故郷と言っても過言ではない。護るんだ……無茶だとわかっていても、やりきるしかないんだ。

……全て、ι・ブレードで片づける。

『……随分遅かったな、晶』

「ゼノスさん……俺――」

『話は後だ、まずはあの厄介な大型E．B．Bをどうにかする。手伝ってくれるな？』

「……ああっ！」

晶はモニター越しから見える巨大なE．B．Bに注目する。

一見ただの建物のようにしか見えないが、よく見ると表面上がドクンドクンと動いていた。

何故か横たわっているが、大型E．B．Bのその黒い表面は槍のような形に形状を変えてゼノフラムに襲い掛かっていた。

まるでサマールプラントのように見える……もしや、『同じ』なのか？

「コアは何処なんだっ！？」

『ここから真っ直ぐ迎え、先端にコアが存在する。　だが、奴の頑丈な皮膚をどうにかしなければコアを絶つことはできん』

「わ、わかった、とにかく向かうっ！」

ムラクモの解放を使えば、そんな皮膚を貫いて仕留める事が出来るかもしれない。
しかし、どのタイミングで使えるようになるかもわからない以上…
…迂闊にあの一撃に頼る事は出来なかった。

その時、危険察知が発動した。
大型E．B．Bの表面上から、巨大な黒い人の手が作り出されて、ι・ブレードに襲い掛かる映像……
何故、E．B．Bが人の手を？
考えている暇はない、晶はその手を避けながらコアの待つ先端部へと向かい続ける。
大型E．B．Bが作り出されるのは手だけではない、ゼノフラムを襲う『槍』や『剣』といった武器に形状を変えて襲い掛かった。
どれも人に関わるモノだ……晶は気色悪さを感じた。

『ブーストハンマーを使う……ブラックホークで援護してくれ』

「ムラクモは使わないでいいのか？」

『奴の表面を削るだけだ……いいか、コアが見えた瞬間に『ムラクモ』で突き刺せ』

「……わかりました」

大型E．B．Bによる猛攻を潜り抜け、ι・ブレードとゼノフラムはほぼ同時刻に先端へと到着した。
ゼノスの言う通り、先端部だけ不自然なほど膨れ上がっている。
周囲の黒い表面を、集めるだけ集めたのだろうか？
ゼノフラムからブーストハンマーが射出される。

ガンッ！　ガンッ！！　と、激しくぶつかるが大型E．B．Bにダメージはない。
晶も応戦しようとするが、その時危険察知が発動した。
大型E．B．Bから、黒い塊が一斉に飛び出したのだ。

「クッ……！」

無我夢中にムラクモを振り回し、晶は襲い掛かる黒い塊を弾いていく。
だが、ゼノフラムは黒い塊が降り注ごうと攻撃の手を緩めなかった。

「ゼノスさ――」

『構うな、ゼノフラムはまだ持つ……っ！』

あの黒い塊は信じられない程の高速で飛ばされている。
いくらゼノフラムの装甲と言えど、そう長く持つはずはない。
それだけではない、ゼノスは晶が訪れる前もたった1機でこの大型E．B．Bを相手にしていたはずだ。
もはやゼノフラムの限界は近いようにしか見えなかった。

ズキンッ――
またしても頭痛が襲い掛かる。
今度は……見覚えのある『赤い槍』が見えた。
――間違いない、『G3』がついに現れたのだ。

『やれやれ、手間のかかるガキだな。　今更テメェ一人が訪れたところで、戦況が変わるとでも思ったのか？』

「……クッ」

晶は唇を噛みしめて、黙り込んだ。
何も返す言葉はない、確かに晶が訪れた事で全てを救えたわけではない。
……ただ、少しだけフリーアイゼンの寿命が延びただけだ。
このままでは誰も救えない、皆……やられてしまう――
再度、危険察知が発動した。
レブルペインが猛スピードで飛び掛かってくる姿だ。
悩んでる暇はない、今は目の前にいる敵を討つしかない――

「いけよぉぉぉっ！！！」

晶はスロットルを限界まで押し込み、レブルペインに斬りかかった。
だが、呆気なく避けられてしまい、コックピットに青い光が灯る……。

『アハハ、動きがたーんじゅん、だよ』

ガァァンッ！！
レブルペインの蹴りを受けて、コックピット内は激しく揺れた。
たった一撃を受けただけだというのに、早くもι・ブレードからは警告音が鳴り響く。
その間にも容赦なく危険察知が発動し、サマールプラントはιを追い続けていた。

『晶、待っていろ……っ！！』

やむを得ず、ゼノスはゼノフラムを動かし『Ｇ３』の元へと向かう。
ダメージを受け続けてはいたが、まだ辛うじて動く。
ブーストハンマーを、Ｇ３へと目掛けて放った。

だが、G3は巨体とは思えぬ身軽なステップで軽々と避けていく。
更にはブーストハンマーに引かれて、行動が制限されているゼノフラムをキャノン砲で容赦なく撃ち続けた。

「ゼノスさんっ！！」

一瞬ゼノスに気を取られてしまったが、危険察知が発動し晶はレブルペインの襲撃を辛うじて避けきる。
しかし、レブルペインはあまり攻撃を仕掛けてこない。
今の晶を相手にするのであれば、いくらでもチャンスはあるというのに。

『……アハハ、ごめんね、君は愛せないの』

「愛せない……？　何を言っているんだ？」

『お姉さんはもっと強かった、でも君は弱い……誰かに支えられてないと、生きていけない、可哀想な人』

「お姉さん？　まさか、シリアさんにしつこく付き纏ってたパイロットかっ！？」

だが、それにしては以前とは様子が異なる。
あんなに発狂していたフィミアは、今は驚くほど冷静だった。

「そうだ……シリアさんは、何処へ！？」

『お姉さんなら、私と一つになったよ……アハハ、アッハッハッハッハッハァッ！！』

「一つ……？　ど、どういう意味だ――」

ズガァァンッ！！

突如爆発音が耳に飛び込んだ。

音の正体を確認すると……ゼノフラムが黒い煙を上げていた。

「ゼノスさんっ！？」

前に見たオーバーヒートと、同じだ。

すぐにでも助けに入ろうとするが、またしても危険察知に邪魔される。

大型Ｅ．Ｂ．Ｂの黒い塊が、またしても全体にばらまかれ始めた。

『何度もテメェは窮地に陥っているが、今度こそ終わりだな』

『この程度で、ゼノフラムが終わるとでも思ったか？』

Ｇ３はもはやまともに身動きが取れないゼノフラムに、巨大な槍を向けていた。

「クソ……クソッ！！」

何とかしてＧ３を突き放そうと試みるが、レブルペインが常に先回りをしてｲの動きを抑え続けていた。

『アハハ、させないよ』

「退けよ……っ！」

『あの人も、死んじゃうのかな？』

「あの人、も？　……まさか、シリアさんは――」

その時、晶は悪寒を感じ取った。
フィミアの放つ言葉の意味は、よくわからない事だらけだ。
だが、晶はこの短いやり取りの中で一つの仮説に辿り着いてしまった。

『ウヒヒ……お姉さんは、もういないよ。　アハハ、アッハッハッハッハッハァッ！！』

「なっ――――」

晶の辿り着いた答えが、確信へと変わった。
信じられなかった。
まさか、あのシリアがやられてしまったというのか？

「シリアさん……嘘、だろ……？　どうして、だよ……っ！！」

悔しかった。
せっかくフリーアイゼンを助けに来たのに、既にシリアが犠牲になっていたことが。
それだけじゃない、ここへ訪れた今の状況から見ても……既に『手遅れ』としか言いようがない状態なのだ。
何故、人同士がこんな争いをしなければならないのか？
本当の敵を目の前にしても……無意味に争いを生み出すアヴェンジャーを、許せなかった。

『アハハ、お姉さんはもっと強かった。　君は弱い、とてつもなく弱い。　だから、愛してあげられない』

「……許さない」

その時、コックピット内が赤い光が包まれた。
晶の高ぶる感情に反応するかのように、徐々にその光が強まっていく。

「メシアは……フリーアイゼンは世界の為にE．B．Bと戦い続けていただけなのに……シリアさんだって、命懸けでE．B．Bと戦い続けていただろうがっ！！
何でだよ……何で、同じ人間にやられなきゃならねぇんだよっ！
おかしいだろ、そんなの……無意味に人が殺され続けても、お前達は自分が正しいと思ってるのかよっ！？」

『アハハ、そんなに構ってほしいの？　だけど、君はどうしても愛せな――』

「退けよ……っ！！」

バシュンッ！
その時、レブルペインの右腕が切断された。

『……あれぇ？』

呑気にフィミアは、切り離された右腕を眺めていた。

「うおおぉぉぉっ！！」

ようやくレブルペインを突破した晶は、ようやくG3の姿を捕える。
そしてムラクモを構えて、G3へと斬りかかった。

ガキィィンッ！！

激しく衝突した瞬間、激しい金属音が響いた。
刃が装甲を切り裂くことはなかったが、尋常ではない出力でｉ・ブレードは
巨体であるＧ３を数十メートルに渡って押し出し続ける。

『晶……気をつけろっ！』

ゼノスの通信が入った途端、危険察知が発動する。
すると、大型Ｅ．Ｂ．Ｂがついに本体自らｉ・ブレードへ向けて突進してきたのだ。
今までは表面上の皮膚を使用していたというのに、何故今になってこのような行動を？
晶は上空へと飛び出し、大型Ｅ．Ｂ．Ｂの奇襲を何とか凌いでみせる。
同時にＧ３が大型Ｅ．Ｂ．Ｂの登場によって、僅かに隙を見せていたのを見逃さなかった。

「当たれぇぇっ！！」

その隙を逃すまいと、ブラックホークをＧ３の持つ武装へと向けて放つ。
バキィンッ！！　見事、Ｇ３の巨大な槍とキャノン砲を破壊して見せた。

『チィ……なめた真似をっ！！』

「よくも……よくもフリーアイゼンを……シリアさんをっ！！」

もう一度晶は、Ｇ３へと向けて機体を前進させようとする。
だが、危険察知にて再び大型Ｅ．Ｂ．Ｂが動き出したのを確認するとやむを得ず、一度場所を離れた。
その時に……コックピット内が青く灯った。
Ｇ３のサマールプラントが、ι に向けて襲い掛かったのだ。

『捕えたぞ……ιっ！！』

「クソッ……」

警告音が鳴り響いているが、ι・ブレードはまだ動きを止めていない。
……諦めてたまるか、晶はムラクモで纏わりつくサマールプラントを切り裂こうとする。
だが、こうしている間にも危険察知が発動し、更なるサマールプラントがι へと向けて襲い掛かってきた。
必死でスロットルを押し込み、強引にもサマールプラントから逃れようとした。

その時……サブモニターに『ムラクモ』の画像が出力されていた。
これは、あの時の――
ズキンッ……同時に危険察知が発動した。
サマールプラントを容赦なく放ち続けるＧ３の背後に、大型Ｅ．Ｂ．Ｂがι へと向けて突進してくる姿を捕える。
……大型Ｅ．Ｂ．ＢとＧ３が、一直線に並んだ。
願ってもいないチャンスが、ついに訪れた――

「……行けよ、ιぁぁぁぁっ！！！」

ムラクモが赤い輝くに包まれた。

『あの光――っ！！』

バシュンッ――――

その瞬間、Ｇ３と大型Ｅ．Ｂ．Ｂに縦一直線の赤い閃光が走った。

一瞬にして大型Ｅ．Ｂ．Ｂのコアがむき出しにされ、切断されていく。

キシャァァッ！！　奇声をあげた大型Ｅ．Ｂ．Ｂは、身の回りの黒い塊をまき散らしながら徐々に形を失っていった。

「はぁ……はぁ……うっ――」

突如、晶は激しい頭痛に襲われた。

ι・ブレードはバランスを失い、そのまま地へと倒れてしまう。

……まだ、敵は残っているというのに、

こんなところで、倒れる訳には――

『……まさかι・ブレードに、そんな秘められた力があったとはな』

「なっ――」

その時、晶は思わず目を疑った。

……Ｇ３が、無傷だったのだ。

『あと少し反応が遅れていたら……Ｇ３と言えど、持たなかっただろうな』

「そん、な――」

まさか、あれを回避したというのか。
またしても、Ｇ３を仕留められずに終わってしまう……？
認めたくない、まだ戦えるはずだ。
だが、晶は頭痛のせいで戦いに集中することが出来ない。

『さあ、大人しく戻ってもらうぞ……二度と変な気を起こさせないように、他の奴らは皆殺しにしといてやるよ』

『アハハ、腕取られちゃったときはビックリしちゃった。　でも、もうおしまいみたいね？』

「……クソッ」

晶は、残り一発だけ残されているブラックホークを向けた。
この銃だけでは、あのＧ３を仕留められるとは思わない。
だが、破壊力は凄まじい。　少なくともＧ３の持つ兵器を破壊するほどの力だ。
激しい頭痛で上手く照準が定まらない、幸いＧ３は動きを止めたままであった。
……このまま連れていかれるぐらいなら、最後まで抵抗をしてやる。
迷わず、晶はトリガーを引いた。

バキュンッ！　ガァンッ！！
ブラックホークの弾は、Ｇ３の中心部へと見事に当たった。
予想通り、ブラックホークの威力は凄まじかった。
あのＧ３の装甲に、弾がめり込んでいた。
……だが、その傷が致命傷となる事はない。

『……チッ、まだ抵抗するとはな。　だが、この程度でＧ３を潰せると思ったら大間違いだ』

『それは、どうだろうな』

「え……？」

その時、ゼノスの声が晶の耳に入った。

バカな、あのゼノフラムが身動きを取れるはずがない。

まだ……まだ戦うというのか？

ビュンッ――

ι・ブレードの目の前を、ゼノフラムが通り過ぎた。

……ブーストハンマーを使い、無理やりその巨体を動かしていたのだ。

ブーストハンマーはハンマー自身に専用のドライブが詰め込まれているため、ゼノフラムがオーバーヒートを起こそうと問題なく動作する。

しかし、ハンマーの推進力だけでは機体の制御が上手くいくはずがない。

はっきりいって、その状態で戦うのは無謀としか思えなかった。

『相変わらずしつこい奴だ……ゼノフラム、今度こそ終わりだっ！』

『終わるのはお前だ、ガジェロス・G・ジェイロー』

ゼノスはハンマーの勢いに乗ったまま、G3へと向けて突進していった。

ガコォォンッ！！　目の前に張り付いたゼノフラムは、先程晶が放った個所へ右腕をぶち込んだ。

『……テメェっ！！』

G3からはサマールプラントが一斉に出現し、容赦なくゼノフラムへと向けて突き刺されていく。

「ゼノスさんっ！！　こ、これ以上は――」

『まだやる気か？　もうテメェに打つ手は残されていねぇだろ？』

『……俺の、勝ちだ』

ゼノスがそう呟いた瞬間、ゼノフラムからは更に黒い煙がもくもくと上がり続ける。

ズガァンッ！　ズガァンッ！！　と、激しい爆発が容赦なく発生し始めた。

「な、何をするんだよ……？」

『貴様、まさか――死ぬ気か？』

『俺は、死なない』

ゼノフラムから突如、紫色の輝きが発生する。

一体、何が起ころうとしているのか？

晶はただ、その光景を見届ける事しかできなかった。

その瞬間――

ズガァァァァンッ！！！

凄まじい爆発が発生し、辺り一面が紫色の光に包まれた。

「ゼノス、さん……？　ゼノスさんっ！？」

いくら晶が呼びかけても、反応はなかった。
激しい爆発が発生し、辺りは砂埃が巻き散らかされて視界を奪われた。

「嘘、だろ……返事しろよ……ゼノスさんっ！！」

気が付けば紫色の光が消滅していた。
次第に砂埃も晴れて行き、視界がはっきりとしてくる。
……そこには、上半身を吹き飛ばしたゼノフラムの姿と、ボロボロに傷ついたＧ３の姿があった――

「……ゼノスさん、ゼノスさぁぁんっ！！！」

晶は叫んだ。
どうして、人類同士が戦わなければならないのか。
あまりにも理不尽な結末に、思わず涙を流した。

絶体絶命　？

ブリッジルームは、驚くほど静かだった。
警告音が響き渡る中、モニターから映し出された映像に誰もが言葉を失っていた。
ゼノフラムが、爆発したのだ。
今までパイロット殺しと呼ばれるＨＡを乗り続けてたゼノスは、どんな窮地に陥っても生き残り続けた。
だが、今回ばかりはいくら不死身と名高いと言えど……無事ではすまない。

「……どうして、どうして？」

木葉はカクンと膝をついた。
せっかく晶がι・ブレードと共に帰ってきたのに……またしても命が失われたというのか。
力なく項垂れて、木葉は泣き崩れた。

「……状況を報告しろ、カイバラ」

「はい……Ｇ３、ι・ブレード共に沈黙。　ゼノフラムは……大破しました。
なお、Ｅ．Ｂ．Ｂは大規模な移動を開始しました。　恐らくは……近くの街を侵攻しにいったかと」

誰もが顔を青ざめさせた。
せっかくゼノフラムやι・ブレードが決死の思いで大型Ｅ．Ｂ．Ｂを倒したというのに……侵攻を防げなかったのだ。

このままE．B．Bを街に向かわせれば、あのシェルターのような悲劇が生まれる。
この状況ではどうすることもできない。
打つ手はもう、残されていないのだ。

「アヴェンジャーはどうしている？」

「今もなお、フリーアイゼンを包囲しております。……しかし、仕掛けてくる様子はありません。
警告に伴いクルー達の避難が既に始まっておりますが……この状況で無事脱出できるかどうかは……」

更にはアヴェンジャーの手により、フリーアイゼンが窮地に立たされていた。
ロングレンジキャノンの破壊により、何とか撃墜される事だけは逃れたが……結局のところ逃れる術を持ち合わせていない。
このままアヴェンジャーに、フリーアイゼンを乗っ取られてしまうのか。
もはや、逃れる事は……できないのか？

「……武器を取れ、アヴェンジャーを迎え撃つぞ」

艦長は護身用に手にしていた拳銃を手にし、静かにそう呟いた。

「なっ――無茶だ、そんな拳銃だけであいつらとやりあうのかよっ！？」

「奴らが仕掛けてこない以上、恐らくは艦を制圧しにくるはずだ。
戦えぬ者は脱出ポッドを使え、敵部隊が侵入すれば多少外はマシになるだろう」

「で、でもよ艦長……っ！」

「……パイロット達が我々を命懸けで我々を守ったのだぞ、だからこそフリーアイゼンは生きている。
ならば、我々が諦めていてはならない。　彼らに応えるのだ、必ず生きて帰るとっ！！」

艦長は、諦めていなかった。
現状に絶望せずに、まだ生きた瞳をしている。
その瞳には、揺るぎない決意が灯されていた。
他の者のほとんどが諦めてしまっている中、ただ一人道を示そうと立ち上がったのだ。
ライルは、そんな艦長の瞳に心を打たれた。

「……畜生っ！　そんな武器じゃ無理に決まってんだろうがっ！！　確か倉庫にちっとマシな武器が積んであったはずだ。
万が一の時にしか使わないからってメンテがされてねぇけどなっ！！　急いでメンテすりゃ俺と艦長の分ぐらいは何とか使える状態に出来るはずだっ！」

「何を言っている、私も数に含めないかライル」

「リューテ？　テメェ、そんなひょろっちい体で戦えるのかよ？」

「伊達に訓練は受けていないんでね、銃の扱いには慣れているのさ」

一度諦めかけたクルー達が、再び立ち上がる瞬間だった。

「……カイバラ、お前は艦内に避難警告を通達しろ。　そしてシラ

ナギとその子を連れて逃げるんだ」

「いえ、お供します」

「正気か？」

「私のセリフですよ、それ。　ですが、嫌いではありません」

平常を装っているように見えたが、ヤヨイの手は震えていた。
本当はこの場から逃げ出したい気持ちがあるのだろう。
しかし、外に出たところで確実に生き残れる保証もない。
また、艦長が自ら戦うというのに、このまま逃げてしまうなんて真似はできなかった。

「おいおい、いいのか？」

「ええ、私が決めた事なので」

ヤヨイの言葉に迷いはなかった。
……死を覚悟しての、判断なのだろう。
逃れられないと知り、せめて抗おうとクルー達は再び立ち上がったのだ。

だが、木葉はそうはいかない。
ただでさえゼノフラムの爆発にショックを受け、絶望的な状況に置かれてひたすら泣き崩れている。

「……木葉ちゃん」

シラナギはそんな木葉の様子を、ただ複雑そうに眺めていた。

晶が帰ってくるという奇跡は起きたが、現状は変わらなかった。
もはや、これ以上の奇跡は起こらない。
アヴェンジャーの部隊は、正式ではないと言えどテロリストとしてメシアの各地を制圧してきた兵だ。
とてもじゃないが、実戦経験のないクルー達が敵うはずがない。
木葉に何て声をかけてあげればいいか、わからなかったのだ。

「……すまんな、この私がいながらクルーをこんな危険な目に逢わせて」

「今更だろ、艦長」

「艦なんてしょっちゅう落ちてますからね」

「まぁ、無茶しない艦長なんて艦長じゃありませんから」

皮肉のようにそれぞれが艦長に対してそう告げるが、悪くはない。
むしろ心地よい言葉のように、艦長には届いた。

「武器の準備を頼むぞ、ライル。　リューテとカイバラは避難状況の確認を急げ」

長期に渡る、無謀ともいえる戦いに備えて、艦長はクルー達にそう告げた。
その時――
フリーアイゼンに、一つの通信が入った。

「通信……だと？」

艦長は急いで通信先を確認する。

アヴェンジャーの連中ではない、このコードは――

「……まさかっ！」

その時、フリーアイゼンは僅かな希望が芽生えた。

モニター越しに移るのは、上半身が吹き飛ばされたゼノフラムと動きを止めたＧ３だった。

晶は俯いたまま、スロットルを握りしめたまま動かなかった。

こうしている間にも頭痛の激しさは増していく。

だが、それ以上に目の前に起きた悲劇に絶望していた。

……あの時、晶がＧ３を確実に仕留められていれば。

ムラクモの一撃さえ外していなければ、ゼノスはあんな行動に出なかったというのに。

何故、止められなかった。

どうして、Ｇ３をこの手で倒すことが出来なかったのか？

悔やんでも悔やんでも、悔やみきれなかった。

晶はふと、顔を上げると

その時、思わず言葉を失った。

Ｇ３がまだ、動いているのだ。

僅かにではあるが、確かに……動いている。
あれでも……まだ倒せないのか。
だが、激しい頭痛のせいでまともに機体を制御することはできない。
やらなければ……あのG3を、仕留めなければ。
ゼノスが刺し違えてでも破壊しようとした、人の手で作られた悪夢の兵器。
この手で、壊さなければ――

『残念だったなぃ……G3のサマールプラントはまだ生きている。
動けねぇテメェを仕留めるぐらい……楽勝なんだよ』

「お、俺の親友だけじゃ飽き足らず……ゼノス、までも……っ！！」

『……あの男が死ぬはずがないだろうが、この俺があの爆発で、死ななかったようにな』

「な……何だって……？」

ガジェロスから、信じられない言葉が告げられた。
……ゼノスが、死ぬはずがない？
勿論、敵が惑わそうとしているだけの可能性もあった。
だが、今更こんな状況で……そんな事をする意味はあるのか？

『……本当に、何もしらねぇガキなんだな。　まぁいい、単機じゃないと言えどG3をここまで追い込んだことは褒めてやるよ。
……だが、それも終わりだ。　安心しろ、お前の大事な仲間達は殺さずに生け捕りにしてやるよ。
そして、テメェの目の前で一人ずつ殺してやる……二度とお前が、外へ帰りたいと思わねぇようにな……』

「……そうは、させな――」

バタンッ――

突如、激しい目眩が発生し晶は倒れた。

コックピットから赤い光が灯され続ける。

だが、もはや立ち上がる事すらままならない。

――晶

誰かが呼ぶ声が聞こえる。

女性の声、だろうか。

不思議な事に、頭の中に直接声をかけられているかのような感覚だった。

何処か懐かしさは感じるが……聞き覚えのない声。

この声は、一体……？

その時、いつか見た赤き優しい光が灯されていた。

不思議と心が落ち着いた。

何処か懐かしくて、安らぎをもたらしてくれる光。

……ιが守ってくれようとしているのか。

――今は、眠って

再び、声が聞こえた。

こんな時に、眠ってられるか。

まだ、戦える……晶は必死で立ち上がろうとするが体が言う事を聞かない。

それどころか、たちまち眠気に襲われてしまった。

「ク……ソ――」

サブモニターには、何かの通信をキャッチした形跡が残されていた。
晶の知らない間に……何かがシステムで、操作されている。
そんな事に気づかずに晶は、気を失ってしまった――

ι・ブレードは、もはや動く気配はない。
このまま拠点へ連れ戻す事はできるだろうが、万が一パイロットが動けるようになっても困る。
流石に傷ついたG3では、ι・ブレードに太刀打ちできるはずがないのだから。
ゼノフラム……相変わらず、忌々しい機体とパイロットだ。
ガジェロスは上半身を吹き飛ばしたゼノフラムを見て、舌打ちをした。

「……ガキはこれだから、めんどくせぇんだよな」

どうやって脱出をしたか知らないが、まさかこれほどまでに追い込まれるとは夢に思っていなかった。
それに、ι・ブレードは確実にパワーアップしている。
全体的な性能向上は勿論……あの、謎の巨大な光の刃。
何処か主砲の原理と似ている……しかも、大型E・B・Bですら切断する恐ろしい一撃だった。

……たった一機のＨＡが、これほどまでの力を備えているとは。
ι・ブレードを必死になって追い続ける理由を、今更になってガジェロスは思い知らされた。

「……ま、終わりだ」

ガジェロスはサマールプラントを射出させようとした。

ドガァァンッ！！
その時、コックピットのハッチが突如爆発し始めた。
バカな、もう動ける敵は残っていないはず……。
ガジェロスは後ろを振り向いた。

「なっ――」

そこに姿を現したのは、体中から血を流しているゼノスの姿だったのだ――
ハッチは原型を留めていない、ゼノス自らがその血だらけの拳で破壊したのだろう。
何処までもしつこく追ってくるゼノスに、思わず寒気すら感じてしまった。

「……今すぐＧ３から降りろ」

「そんな体で俺と生身で戦う気か？　万全のお前にならまだしても、今のテメェに俺の『Ｇ』が抑えられるはずがねぇぞ？」

「聞こえなかったか？　降りろ……と言っている」

「チッ……まずはテメェを――」

ガァンッ！！
目にも留まらぬ速さで、ゼノスの拳はガジェロスの顔面を捕える。
サングラスが粉々に砕け散ったが、ガジェロス自身にダメージはない。

ガンッ！　ガンッ！　ガンッ！！
まるで、鉄でも殴っているかのような音が響き続ける。
それでもゼノスは、殴るのを辞めなかった。

「……テメェ、一体俺のサングラスをいくつ割るつもりだっ！？」

「サングラスなぞ辞めてしまえばいい、貴様には似合っていない」

「余計なお世話だっ！」

ガジェロスはバケモノと化した右腕を使い、ゼノスを思いっきり吹き飛ばした。
だが、ハッチの寸前でゼノスはその場で留まる。
そこから追い打ちをかけるように、ガジェロスは右腕で鳩尾を狙った。

「……グッ！」

「テメェが降りろ……人様のコックピットに殴りこむパイロットが何処にいるんだ？　この非常識な野郎がよ？」

「非常識なのは貴様だ……ただ一人の男に復讐をする為、罪のない人々の命を奪い続ける……それで誰が、救われる？」

ゼノスは何度も何度もガジェロスに殴られようと、その場にひたすら留まり続ける。
決して落とされまいとしがみついたまま、ガジェロスを睨み続けた。

「貴様にはわかるまい……俺の持つ『復讐』の深さをな。　もはや俺が生きる理由を持つには、『復讐』しかねぇんだよっ！！」

「復讐は新たな復讐の芽を生む、復讐は人を不幸にするだけだ……その先に幸福、救いはない」

ゼノスは力任せに、ガジェロスの胸倉をつかんだ。
ガァンッ！！
そのまま片手で、力任せにガジェロスを壁へと叩き付ける。

「テメェだって、薄汚い人間だろうが。　いくら綺麗事を並べようと、お前と俺に大差はねぇっ！」

「復讐に執着する貴様と一緒にするな。　だからこそ、俺はお前を裏切った」

「その口閉じろ……テメェの綺麗事を耳にすると虫唾が走るんだよ」

「なら、すぐ楽にしてやる」

その瞬間、ゼノスはガジェロスの頭に思い切り頭突きをかます。
強引に後ろへと回り込んで両手で思い切りガジェロスをハッチの外へと突き出した。

「ゼノス……っ！！」

ガジェロスの右腕から、無数の触手と赤い槍が飛び出す。
ゼノスはそれを避けようと、高く飛び上がった。

「そこで、寝てろっ！」

そのまま勢い良く、ゼノスはガジェロスに目掛けて蹴りをかました。
ズガァァンッ！！
激しい爆発と共に、ガジェロスは地へと向けて落下していく。

「……後は、Ｇ３だけか」

あの一撃でガジェロスが死んだとは思えない。
再びコックピットへ上がってくる前に、ゼノスは何とかしてＧ３を処分しようと考えた。
かつて事故で多くの味方機を奪ったＨＡ。
ＨＡは、人の命を奪う兵器ではない。
人を守る為に作られた、人類の希望となるべき存在なのだ。
……アヴェンジャーの使い方は、間違っている。
こんな兵器を生み出してしまったメシアも、何処か道を踏み外してしまったのだ。

『アッハッハッハァッ！！　生身で戦うなんて、バッカみたいっ！！　でも、そういうの大好きっ！！
ウヒヒ、私お兄さんなら愛してあげてもいいよぉぉぉっ！！！』

「……なっ！？」

コックピットへ戻った途端、ゼノスはＧ３に向けてレブルペインが攻め込んでくる姿を捕えた。
それだけではない、既に無数のレブルペインがフリーアイゼンの元

へと集っていたのだ。

「グズグズしている暇はない……一刻も早く、艦へっ！！」

G3の破壊は後回しだ、とゼノスはG3を動かそうとした。

だが、まともに動く気配はない。

流石にあの爆発のダメージは尋常ではなかった。

本当に、辛うじて歩くことができるのとサマールプラントを使うことが出来る、だけだったのだ。

『ウヒヒ、そうだそうだ。　お兄さん、あの子とっても大事なんだよね。　ならさ、あの子倒しちゃえば本気出してくれる？』

「何……？」

レブルペインの先には、今は沈黙し続けている『ι・ブレード』の姿だった。

『鬼ごっこしようよ、アハハ。　早く私を捕まえてごらんなさーい、そしたら大好きって言ってあげるからぁぁっ！！　アッハッハッハッハッハッハァッ！！』

「クッ……っ！」

何か使える武装はないのか。

バルカンは距離が足りない、サマールプラントはι・ブレードを傷つける恐れがある。

かと言ってキャノン砲も破壊されていれば、槍も既に大破していた。

駄目だ、どうする事も出来ない――

「晶……逃げろ、晶ぁぁぁっ！！！」

ゼノスの悲痛の叫びが、響き渡った瞬間――

バシュンッ！！

突如、２本の紫色の閃光が走る。

レブルペインが両足が、一瞬にして破壊された。

「何だ、あの光……？」

一体何が起きたのか、理解できなかった。

その時、ゼノスの目の前に空飛ぶＨＡの姿が目に入った。

黄色を中心としたカラーリングの戦闘機だ。

左右には２本のライフルが備えられており、翼の先は何処か鋭く見えた。

「あの機体、まさか――」

黄色いＨＡは、尋常ではない速度で空を駆け巡っていた。

空から勢いよく地上へと降下すると、信じられない事に……戦闘機が一瞬にして人型のＨＡへと姿を変えた。

人型へと姿を変えたＨＡは両手にサーベルを持ち、華麗なる動きで周囲のレベルペインを一瞬にして切り裂く。

更に襲い掛かってきたＥ．Ｂ．Ｂの残党の攻撃を素早く避けると、二本のサーベルは合体し、突如巨大なソードへと変化した。

圧倒的なリーチを誇るソードで、あっという間に周囲に群がるＥ．Ｂ．ＢとレブルペインをＢ全滅させてみせた。

「……間違いない、メシアが開発していた可変型ＨＡ『レビンフラ

ックス』だ……パイロットは誰だ？」

『あら、敵さんのＨＡから懐かしい声がしますね？』

「……ラティアなのか？　まさか、『ソルセブン』かっ！？」

『その通りだよ、ゼノス君』

その時、空から無数のウィッシュ軍団が訪れた。

いや、ただのウィッシュではない……スカイパーツを用いた飛行可能となった『スカイウィッシュ』だ。

ここ数年で、ようやく実現されたＨＡ技術の一つである。

そしてその後ろを続くように現れたのが……巨大な赤い戦艦だった。

フリーアイゼンと比べても、圧倒的な大きさを誇るその艦はメシア内でも有数の『レギス・アダマント級』

赤きボディとその圧倒的な存在感から、『ソルセブン』と名付けられている大規模な戦闘の際に使用される戦艦だ。

「やはりイリュードか……！」

『すまないな、助けに来るのが遅くなってしまったよ。　ところで君、何故Ｇ３に搭乗している？』

ようやく、逆転の兆しが見えてきた。

メシアの主力艦が援軍に来てくれれば、もはや敵はない。

何百以上ものＨＡを格納できる大型艦だ。

この状況をひっくり返すのは、十分すぎる程の戦力である。

「話は後だ、それよりラティア……このＧ３を破壊してくれ」

『あら、いいのかしら？　遠慮なく行きますよ』

「奴が戻ってくる前に急いでくれっ！」

ゼノスはそう告げると、急いでＧ３から脱出を計った。
その後、猛スピードで移動してきたレビンフラックスが巨大なソードでＧ３を切り裂いて見せた。

ズガァァァンッ！！
激しい爆発と共に、Ｇ３は木端微塵になった。
代償が大きすぎたが、何とかＧ３を破壊する事に成功した。
気が付けばガジェロスの姿は近くにない。
……爆発に巻き込まれた可能性もあるが、ガジェロスはその程度では死なない。

またいつか、敵として目の前に現れるだろう。
スカイウィッシュの一機が、ゼノスの元へと近づいてきた。
コックピットからロープを降ろされると、ゼノスはそれに捕まってよじ登る。

同時にι・ブレードも、２機のウィッシュによって回収されているのを確認した。
それを見届けると、ゼノスはようやくロープを上りきった。

「……っ！？　な、なんて酷い怪我を……よ、よくロープで上ってこれたものだ……」

「気にするな、この程度の傷……慣れている」

「は、はぁ……わかりました。　アヴェンジャーとＥ．Ｂ．Ｂにつ

いては我々スカイウィッシュ部隊にお任せください」

「ああ、頼んだ」

長き辛い戦いに、ようやく終わりが訪れた。
まさかこれほどまで強力な助っ人が来るとは、夢にも思っていなかったのだ。
フリーアイゼンの部隊というのは、メシアにはそれほどの価値があると考えられているのか。
はたまた別の理由があるのかがわからない。
とにかく、援軍が来てくれた事で……形勢が逆転した。

今頃、アヴェンジャーの奴らは顔を真っ青にしているだろう。
そう考えていると、ゼノスは気を失った――

第9話　激戦の代償　？

晶が捕らわれていたアヴェンジャーの施設では、撤退の準備が始まっていた。
元々破棄する予定だったのか、またはι・ブレードが逃げてしまった事に対する対策なのか。
施設内の人員は慌しく動き回っていた。
だが、監視室にあたる部屋に二人の人物の影があった。
一人は、未乃　健三……もう一人は、ジエンス・イェスタンだった。

「ほう……それはそれは、貴方も大変でしたでしょうね」

自慢の長い髭を片手でいじくりまわしながら、ジエンスは何者かと通信としている。
相手は健三にも知らせていない、一体誰と通信しているというのか。

「おや、貴方のような方が死ぬかと思ったと？　またまたご冗談を……貴方様なら、あの段階でも脱出するぐらい容易い事……いえいえ、私も貴方様には死なれては困りますが……まぁ、信頼の証とでも思っておいてください」

会話の内容から察するに……恐らく、例の人物だろう。
健三はある程度、通信先の人物に見当がついた。

「なるほどなるほど……わかりました、引き続き任務の遂行をよろしくお願いしますよ」

通信を終えたのか、ジエンスは重い腰を上げて立ち上がる。

「……おや、何時からいらしたのですか？」

「冗談はよしてください、貴方ならとっくに気づいていたんでしょうから」

「いえいえ、私も年を取りましてな。　昔のようには行かないのですよ……ホホホ。　ところで、何か御用でしたかな？」

「……フリーアイゼンの件は、ご存知ですか？」

「勿論ですとも、おかげで我が部隊は大打撃を受けてしまいました。ああ、困りましたね、私とあろう者がこんな失態を晒してしまうなんて」

「……何を、狙っているんですか？」

「ほほう？　私が何かを狙っている、と？　これはこれは、驚きですね……」

ジエンスの口調は何処か畏まり、首謀者でありながらも威厳のようなものも感じない。

だが、その言葉の奥深くに存在する『本性』を健三は知っている。

今目の前に存在する『ジエンス・イェスタン』という人格は、偽りの姿に過ぎない事を。

「貴方は最初からフリーアイゼンを奪えなくても、破壊できなくても……結果的にはよかったんではないんですか？」

「なるほど、それはとても興味深い見解ですな」

「艦がほしいのであればわざわざフリーアイゼンを狙う必要もありません、それに我々の今の技術力であればこの手で作れますよ」

「素晴らしい……そこまで理解しているのであれば、私も正直にお答えするしかありませんな」

ジエンスはそう答えると、優しく微笑んで見せた。

だが、健三の顔は強張っている。

偽りの笑顔の奥深くにある『真の表情』を、知っているのだから。

「ですが、貴方にはもっと重要な任務がございます。我々には圧倒的な力が必要だと、何度も申し上げてるとは思いますが。ブラックベリタスも、その一つなのですよ。わかっておられますね？」

「……わかっております」

「よろしい……では、この話はまたの機会にしましょう」

ジエンスはそう告げると、静かに監視室を出ていく。

健三はその姿を見送り、ただ黙り込んだまま立ち尽くしていた。

世界各地には、メシアの支部がいくつか存在する。
支部は番号で管理されており、本部から0～30までの支部、そして汚染区域に存在するD支部と各種基地等でメシアは成り立っていた。
第7支部には、ソルセブンが現在停泊していた。
ボロボロとなったフリーアイゼン及びι・ブレード、半壊したゼノフラムと大破したイエローウィッシュ。
それらの姿は、フリーアイゼンはいかに死闘を繰り広げていたかを物語っている。
現在は第7支部で管理されており、改修作業が大至急行われる予定だ。
一度、状況の整理を行う為に第7支部に、艦の代表が集った。

ソルセブンの艦長『イリュード・ブラッシュ』。
メシア内で最も若い艦長であるが、そのカリスマ性と圧倒的な才能は誰もが認めている。
数々の大規模なE．B．B討伐において、どんな窮地もその知恵と戦略で救ってきた人物だ。
続いて、新型機の開発に携わった『フラム・ヴェルケード』。
メシアでも名高いHA技術者の一人で、最新のHA開発にはほとんど携わっている。
フリーアイゼンで運用されていた『ゼノフラム』の開発を企画したのも、彼女であった。
対して、フリーアイゼン側から集められたのはマツキ艦長、Drミケイルの2名だ。

「イリュード艦長、この度は我が部隊の救援活動に感謝する。　貴方が気付いてくれなければ、我々は今頃無事ではすまなかったでし

ょう」

「我々は当然のことを行ったまでだ。　それに、貴方に頭を下げられると少しやり難い。
かつての俺は、貴方に叱られていた立場だったのでな」

赤色長髪の男……イリュードは、ゲンに対してそう告げる。

「……すまない」

ゲンとイリュードは、昔は上司と部下の関係にあった事もあり、二人は多少なりとも立場に気を使っている様子だ。
昔は部下だった者が、今では艦長を務めているのは喜ばしい事だ。
しかし、この場では上司と部下の関係は既に存在しない、同じ艦長同士である。
ゲンもその事をわきまえていた。

「それじゃ、本題だ。　まずアヴェンジャー、こいつらは当分動かないだろう。　あれだけ派手に動いてた部隊を、徹底的に叩きのめしてやったからな。
所詮俺達の兵器をチマチマと奪っていく奴らだ、そんなに多くの戦力を保有しているとは思えない」

「それについては私も同感だ。　彼らの要求はフリーアイゼンだった、あれだけの数を用意した上にロングレンジキャノンの使用……いかに本気だったかが十分に伝わる」

「逆に言えば、今が攻め時とも取れる。　本部からの正式な通達はまで来ていないが……恐らくは、アヴェンジャーの件は我々に一任されるだろう」

「……ついに、戦うのかね」

「ここまでやられたんですよ、まだ迷うのです？」

「……私も一度は覚悟した、異論はない」

口ではそう告げるが、ゲンは何処か浮かない表情を見せる。
やはり人類同士で戦うことに抵抗があるのも事実だ。
しかし、このまま彼らを野放しにしておけない。
かつての『第４シェルター地区』のような悲劇、そして今回のようなＥ．Ｂ．Ｂを使った大規模な動きがあればＥ．Ｂ．Ｂによって、またしても多くの命が奪われてしまうことになる。

「フリーアイゼンの修理は第７支部で責任もって改修が行われる。
ι・ブレードについても、何とかなるそうだ。
だが……問題はゼノフラムとイエローウィッシュだな」

「……フラム博士、といったか。　２機の修復は可能なのかね？」

ゲンは、白衣を身に纏った目付きの悪い女性に向けてそう告げる。
焦げ茶色の長い髪を束ねている綺麗な女性ではあるが、何処か近寄り難い雰囲気が漂っていた。

「……イエローウィッシュは復元する事はできない。　あれを復元するぐらいなら、新たなＨＡでも開発してしまったほうが早い。
それと、ゼノフラムは悪いが……パスだ」

「どういう事だ？」

「アンタも知っているだろう……ゼノフラムは正式なメシアのＨＡじゃない、どっかのアホが勝手に持ち去って運用していただけさ」

「しかし、かつてのι・ブレードのように秘密裏に開発されていたＨＡの例もあるだろう。何とかできないかね……あの機体は、何度も我々の窮地を救ってきたのだよ」

「断る、私にできる事は新型ＨＡの提供ぐらいさ」

ゼノスはパイロット殺しと呼ばれるＨＡを、命懸けで操作しながらも何度も大型Ｅ．Ｂ．Ｂに立ち向かい戦い続けていた。実運用に耐えられない設計でありながらも操縦をし続けてきたゼノスを知っているからこそ、ゲンはフラムに改修を頼んだ。

しかし、その願いも虚しく終わった。

「それよりも、パイロットの問題もあるだろう……どうなんだい、そこの胡散臭そうなおっさん」

「やれやれ、私はどうもおっさんと呼ばれる事が多いようだな」

「悪いなＤｒ．ミケイル。　彼女は誰に対してもこんな感じだ、察してくれ」

イリュードは、フラムをフォローするようにＤｒ．ミケイルにそう告げた。

「ι・ブレードのパイロットは外傷はないが、ιシステムの反動か

未だに目を覚ましていないようだ。
今のところ命に別状はないと言えど、油断はできない状態だよ。
それと、ゼノスは……かなりの重傷だったが、流石の回復力……というべきか。
シリアは脱出ポッドが発見されたけど……ι・ブレードのパイロットと同様、意識不明の重体ってところだね。　……正直、色々と厳しいよ」

「……全員無事だっただけでも、幸運と思うべきか」

あれだけ激しい戦いを繰り広げてきたパイロット達だ、死人がでてもおかしくはない。
しかし、晶を含めて全員無事に生還してくれた。
晶はG3のサマールプラントにやられ、誰もが諦めていたところ……無事、生きた姿で帰還を果たし、フリーアイゼンのピンチを救ってくれた。
ゼノスはあの爆発の中を生き残り、シリアも撃墜されながらも無事脱出ポッドで生き残れていたのだ。
それだけでも、奇跡と言えるだろう。

「フリーアイゼンが動けない分は、俺達がカバーをするさ。　だからしばらくは、休んでてくれ。
アヴェンジャーの拠点特定はこっちでも急いでいる。　近いうちに、決着をつける日が来るかもな」

「……その時は、我々も同行するぞ」

「……貴方がいると、心強いよ」

かつて憧れだった上司と共に戦えるのは、イリュードにとっては嬉

しい限りだ。
敵はE．B．Bではなく、『人』である『アヴェンジャー』ではあるが
誰かが、彼らを討たねばならない。
アヴェンジャーの非道な行いを許すことが出来ないのだから。

「それじゃ、一週間後に各自状況の報告を頼む。　今回は、以上だ」

イリュードはそう告げると、一斉に参加者が全員立ち上がり、会議室を静かに去っていった。

第7支部の病室。
ゼノスはほぼ全身に包帯を巻かれて、ベッドで横になっていた。
あれだけの爆発に巻き込まれていたのだから、無事で済むはずがない。
通常の人間であれば、まず生きている事すら有り得ないはずだ。
だが、ゼノスは平然としていた。
まるで怪我等、何とも感じていないように。

「もう……本当に本当に本当にっ！！　ゼノスはどうしていつもこうなんですかぁっ！？」

「……」

ベッドの隣では、シラナギが相変わらず一人で騒いでいた。

「どうしてこんな無茶ばっかりするんです？　これじゃ、身体がいくつあっても足りませんよ？」

「ああ、悪いな」

「……もう、心配したんですからね？」

「お前もそれどころじゃなかっただろう、俺の心配している暇はあったのか？」

「あったんですっ！　木葉ちゃんも泣き崩れちゃうし……私も泣きそうでしたよ……」

しんみりとした表情で、シラナギはそう呟く。

「……すまなかったな」

「わかればいいんです……それよりも、晶くんですよっ！　心のどこかで生きているって思ってたんです……やっぱり、やっぱりちゃんと帰ってきてくれましたねっ！！」

急に暗くなったり明るくなったりと、テンションの差が激しいシラナギと話していると何処か疲れてしまう。

だが、別に嫌いではない。

それがシラナギの長所でもあり短所でもある。

無表情ではありながらも、ゼノスはそんな事を感じ取っていた。

「……だが、詳しく話を聞く必要はありそうだな」

「どういうことです？」

「晶がどうやって生き残ったのか……そして、恐らく晶は……アヴェンジャーの拠点へと連れて行かれている可能性が高い」

「え、え？　どうしてです？」

「最後にG3に連れて行かれたからだ。　まぁ、奴らの事だ。　拠点をころころと移し替えていたり、複数持っている可能性も十分考えられる。
だが、そこに奴らがいた痕跡が残されているかもしれん。　まずはその位置だけでも調べる必要があるだろう」

「……ちょっと、ゼノスっ！」

バシンッ！！
突如、シラナギはゼノスの肩を思いっきり叩く。
思いっきり傷が残っている場所を叩いていたが、ゼノスは特に気にする様子もない。
むしろ、ズキズキと痛みが走っているはずなのに顔色一つ変えずに堪えていた。

「いきなりどうした？」

「もー、どうした？　じゃありませんよっ！　まだ怪我が完治していないんですし、少しぐらい仕事の事は忘れてくださいよ。
今はゆっくり休むべきですよ？　難しい事ばかり考えてないで、ほら私みたいな可愛い子がせっかくいるんですから♪」

「……それも、そうだな」

シラナギの言うことも一理ある。
この体では当分無茶をすることはできないし、無理に焦る必要もない。
アヴェンジャーも大打撃を受けているはずなのだから、当分大きな動きを見せる事はないはずだ。
それに、不安定な晶の事だ。
下手にアヴェンジャーの事に触れるのはよした方がいいだろう。

「おいっ！　シリアが目を覚ましたぞっ！！」

突如、ガタンっと大袈裟に扉が開かれたと思ったら、そこにはライルの姿があった。

「ほ、本当ですか？」

「……シリアも生きていたか、安心したぞ」

「こうしちゃいられませんね、私すぐ見てきますよっ！！　あ、絶対安静にしててくださいね、あのおっさんに怒られる前に私がプンスカ怒りますからねっ！」

シラナギはライルと共に、シリアの病室へと向かっていく。
ゼノスはその様子を微笑ましく見守ると、そのまま目を閉じて眠りに入った……。

「いやぁ、悪いな心配かけてさー」

「よかったですよっ！　シリアがこのまま寝たきりだったらどうしようかと思ってましたからっ！！」

病室には上半身を起こしたシリアが元気そうにシラナギと話していた。

「お前がやられてる間、こっちも酷かったんだぜ……ま、なんだかんだで全員助かったけどさ」

「そうですよー、後晶くんも帰ってきたんですよっ！！　喜んでください、めっちゃくちゃかっこよかったんですからっ！」

「それなら真っ先にライルから聞いたよ。　……アイツ、よく無事だったな。　まさか生きているなんて、夢に思わなかったさ」

お互いが無事を確認し合い、生きている事に喜びを感じていた。

「しかし、アタシのＨＡ……どうなっちまうんだろうなぁ、イエローウィッシュってもう駄目だろ？」

「詳しい話は聞いてねぇけど、何か新型が支給されるんじゃねぇか？　エイトの奴が前、可変機がどうこうとか言ってたしな。
丁度いいじゃねぇか、お前がそいつのパイロットになっちまえよ」

「そうだな、相方を失ったのは悲しいけど……そいつさえあれば、アタシの念願の空がついに――」

シリアは昔から空に憧れており、いつかはＨＡで空を飛ぶことを願っていた。

可変機には飛行形態が存在すると聞いている……間違いなく、空を飛ぶことが出来る。

まだ、正式にパイロットが自分に決まったわけではないが、シリアは何処か心を躍らせていた。

「しかし、目を覚ましたばかりだというのに随分元気ですよねー、これならすぐにでも退院できるんじゃないんですか？」

「そうだそうだ、さっさと怪我治して訓練しろってんだっ！　近いうちにアヴェンジャーと戦うって噂もあるらしいからな、頼りにしてんぞっ！」

ライルはシリアの肩をぽんっと叩きながらそう言った。

「駄目ですよ、ライルっ！　仮にもシリアは怪我人なんですからっ！」

「いやいや、大丈夫だって。　アタシなら平気平気、ほら身体だって――」

「先生を呼んで検査してもらいましょうよ、　あのおっさん会議でてるらしいからどーせ来ないでしょうし」

「おう、そうだな。　俺としたことがうっかりしちまってたぜ」

ライルは病室内にあるインターフォンで連絡を入れようと手にする。
だが、その時シリアの表情が一変しているのが目に入った。

「……どうした、シリア？」

様子が尋常ではない、目を完全に開かせ、体を小刻みに震わせている。
先程までの笑顔とは打って変わって……何処か切羽詰まった表情だった。

「シリア？　どうしたんです？　何か変なものでも見たんですか？」

「……あ、ああ――」

シリアは自分の両手をまじまじと見つめて、拳を作り、開く動作を繰り返す。
その時、シラナギもシリアに起きた『異常事態』を察してしまった。

「ま、まさかシリア……っ！？」

両手で髪を鷲掴みにし、シリアは俯いた。

「……動かない」

「……な――」

その一言で、ライルもようやく気付いた。
どうしてシリアの様子が急変したのかに。
……嘘であってほしい、勘違いであってほしい。
むしろ夢であってほしい、シリアはそう何度も願った。

だが、願ったところで事実は何も変わらない。
これは、現実だった。
認めたくないが、現実なのだ。

「足が、動かない――――」

空への夢が、潰えてた瞬間だった――――

激戦の代償　？

気が付くと、辺り一面は真っ暗な空間だった。
自分が何処にいるのか、立っているのかどうかすらわからない空間。
ここは一体、何処なのだろうか？
ふと、あの激しい頭痛が綺麗に消え去っている事に気づく。
頭の中が締め付けられるような、激しい頭痛。
晶が意識を失う寸前まで、その痛みは続いていた。

その時、何度も誰かの声が聞こえていた。
空耳、だったのか。
それとも、誰かの通信……或いはι・ブレードが全く別の通信を拾ってしまっていたのかはわからない。

「私と共に戦え、晶」

突如、何もない空間から父親が姿を現した。
ふざけるなっ！
心の底からそう叫びたかったが、声は出なかった。
一人の男に復讐を果たす為、罪のない人々を大勢巻き込んでいくアヴェンジャー。
何故父親は、そんな組織に身を置いているのか理解できない。

父親は、純粋なＨＡ開発者だった。
人類の未来の為に、ＨＡの開発を進めて、その技術を子供である晶に自慢げに話してくれてていたのに。
その技術を、アッシュベル・ランダーへの復讐の為に使っているのだ。

ザーーーッ……
すると、目の前がテレビの砂嵐の映像のように乱れだした。
何処か、ιシステムにおける危険察知発動時と似ている。
次に映し出された光景は、病室だった。

ベッドには、黒い髪の女性が窓を眺めている。
顔ははっきりと見えない……だが、何処か懐かしさを感じる姿だ。
窓を眺めていた女性は、ふとこちらに気づいたのかゆっくりと振り返った。

――――っ！

晶は、言葉を失った。
女性の顔は、既に人間ではなかった。
何度も見てきた、あの悍ましいE．B．Bの姿に酷似していたのだ。
……この人も、アッシュベル・ランダーの被害者、なのだろう。
グチャリ……気味の悪い音を立てて、女性の体は徐々にその形をバケモノへと変えていく。
メキメキと、体の内部を突き破り昆虫のような長い脚が生えだし腕が二つに分かれたかと思うと、刃物のように鋭さが増し、肌の色も紫色へと変化を遂げた。
思わず晶は腰を抜かした。

人が……E．B．Bへと変化する瞬間を、見てしまった。
これは現実なのか、それとも幻なのか？
今の晶にそれを判断する術はなかった。
だが、今は目の前に起きたことに恐怖するだけだ。
バケモノへと姿を変えた女性は、ゆっくりと晶へ歩み寄ってくる。
晶は逃げようとするが、腰を抜かして思うように体が動かせない。
徐々に距離を縮めていき、バケモノは晶の首にその鋭い刃物と化した腕を突きつけた。

「やめろぉぉぉっ！！！！」

「きゃっ！？」

ふと、晶は体を起こし上半身を起こした。
……目の前には目を丸くして驚いている木葉の姿があった。

「……ここ、は？」

さっきのバケモノ……いや、E．B．Bは何処へ消えてしまった？
よく見ると、さっきの病室とは少し異なっている。
おまけに何故か自分はベッドで寝ていたようだ。
ズキッ――――

「う……なんだ、この痛み――」

「あ、晶くん？　だ、大丈夫っ？」

またしても、例の頭痛に晶は襲われる。
激しい痛みに耐えきれず、片手で頭を押さえた。
だが、そんな事をしても痛みは和らがない。
慌てて木葉は倒れそうになった晶を支えてくれた。
アヴェンジャーの拠点で目を覚ました時も、同じだった。

あの時確か、ガジェロスがｉシステムの後遺症だと言っていたことを思い出す。

「……あ、ああ、何とか……なる、さ」

木葉のおかげかわからないが、少しだけ頭痛が収まってきたのは確かだ。

「も、もう大丈夫だ」

「あ、う、うん」

木葉は少しだけ顔を赤くさせて頷いた。
すると、木葉は無言で晶の事をギュッと抱きしめた。

「……木葉？」

「……よかった、晶くんが生きててくれて……本当に、よかった」

その一言を聞き、晶は表情をハッとさせる。
ずっと晶の身を案じててくれていたのだろうか。
木葉はそのまま泣き崩れて、晶から離れようとしなかった。

晶はあの時Ｇ３に負けて、拠点へと連れて行かれた。
そしてそこから脱出を計り、無事フリーアイゼンの元まで戻ってきたのだ。
そこまでの空白期間で、どれだけ木葉が心配していたのかが痛いほど伝わってくる。

「心配……かけちまったな。　ごめん……俺、全然木葉を守ってや

れなくて……」

「……いいの、無事帰ってきてくれたのなら。　もう、死んじゃったのかと思ってた。　二度と、逢えないと思ってた……」

「他の皆は、どうしているんだ？　――そうだ、アヴェンジャーはっ！？　それにE．B．Bもっ！？」

晶はようやく、状況を思い出したかのように叫んだ。

「目を覚ましていたか、晶」

「よく生きて帰ってきてくれたわね」

すると、リューテとヤヨイが病室へと入ってきた。

「リューテさんにヤヨイさん……？　フリーアイゼンは、どうなったんです？」

「それについては私から説明しよう」

「その前に、お邪魔だったかしら？」

「へ？」

晶が間抜けの声をあげると、木葉が顔を真っ赤にさせて晶から離れた。

「あ、い、いや違いますっ！！　こ、これはその、あのっ！」

「若いものね、いいじゃないそんなに否定しなくても」

ようやく晶は意味に気づいたのか、顔を真っ赤にさせて否定する。
ヤヨイは微笑みながら、そう言った。

「……では、始めさせてもらうよ」

「お、お願いします……」

この様子を見る限りでは、あの激戦を何とか切り抜けたと考えていい。
とにかく、現状がわからなければどうしようもない。
後でこちらも、知っている限りの情報を共有する必要があるだろう。
アヴェンジャーの活動目的……未乃　健三の存在。
今後の活動にキーになる事は間違いないだろう。
ひとまず晶は、リューテの話に耳を傾けた。

シリアの病室の前に、軍服を身に纏った金髪の長い髪の女性が立っていた。
青い瞳で、何処か寂しげな表情で扉を見つめている。
この先には、シリアが眠っている。
激しい戦いの中、脱出ポッドで何とか生き残ることが出来た。
その姿を一目だけでも確認しようと、ここまで歩んできた。

「おう、なんだお前？　シリアの知り合いかぁ？」

「貴方は？」

「俺はエイト。　フリーアイゼンのメカニック担当さ。　お前は？」

「私はスカイウィッシュ部隊隊長を務める『ラティア・レイオン』です、今後ともよろしくお願いします」

「おおう？　ラティア・レイオン……？」

エイトはうーんと、その場で考え込んだ。
ラティアの表情は重い、このまま察してしまうのも時間の問題だろう。

「……私の事は、シリアには黙っていてください」

「あーっ！　わかったわかった、お前もしかして家族かぁ？　シリアのファミリーネームって確かレイオンだろ？」

「……絶対に、言わないでくださいね」

「何だよ、家族なら逢えばいいだろ？」

「ごめんなさいね、失礼するわ」

ラティアはそう告げると、静かにその場を立ち去ろうとする。
シリアはラティアの実の妹だ。
６年前に家を飛び出して以来、一度も顔を合わせていない。

その空白期間もあってか、シリアと逢うことに戸惑っていた。
その時――バタンッ、と病室の扉が開いた。

「ん、ライルか？　どうした――」

「エイトかッ！！　……クソ、クソッ！！」

突然出てきたかと思えば、ライルはエイトの両肩を掴んだ。
その様子は尋常ではない、もしやシリアの身に何か起きたのではないかとエイトは感づいた。

「どうしたんだ？」

「……シリアの、シリアの足が……動かねぇらしいんだ」

「なっ――マ、マジなのかっ！？」

「――っ！？」

立ち去ろうと歩いていたラティアが、足を止めた。

「あの子の……足が……？」

まさか、そんな事が――
気が付くとラティアは、駆け出していた。

「あの子……どうしていますか？」

「な、なんだ？　誰だ？」

「ああ、何かシリアの家族らしいぜ？　よくしらねぇけど、姉か何かだと思うけど」

「……教えてください」

「家族なら直接逢ったほうがいいんじゃねぇか？　……多分、見たほうが早い」

ライルは顔を俯かせながら、病室の扉を開けようとする。
だが、ラティアはライルの腕を掴んだ。

「待って……開けないで」

「何言ってんだ？　アンタ家族だろ？　今、あいつには支えが必要だ……実の家族に逢えれば、あいつの気持ちが少し――」

「……ごめんなさい、失礼するわ」

尚更、今シリアと逢う訳にはいかない。
少し間を置くと、ラティアは扉の先を確認せずに立ち去っていく。
ライルは引き留めようと手を伸ばしたが、エイトに止められた。

「な、なんだよ……どうして、逢わないんだ？」

「俺が聞きてぇさ……とりあえず、あいつシリアに逢いたくねぇっぽいからさ。　事情は知らんけど、黙っててくれって言われたんだ」

「シリアの家族か……でもあいつ、Ｅ．Ｂ．Ｂで家族亡くしたんじゃなかったのか？」

「とにかく、今はシリアの様子見たほうがいいだろ。　ライルはどこ行こうとしたんだよ」

「ああ、医者がおせぇから連れ出してこようと思ってな。　今はシラナギが付きっ切りで見てる……」

「……俺も中へ入る。　お前はさっさと呼び出して来いよ」

「ああ、わかった」

一体シリアが今どうしているかなんて、想像もつかない。
足が動かなくなったシリア……もし、今の医学で治せないとするのであればパイロットとしての復帰は、絶望的だろう。
二度と、ＨＡを操縦できる体ではなくなる。

シリアはＨＡが大好きだ。
長い付き合いとなるエイトには、よくわかる。
自分専用のウィッシュがほしいと、エイトに相談を持ちかけられたこともあり
自らを示す黄色のカラーリングに自分用にカスタマイズした『イエローウィッシュ』が完成された。
その時の嬉しそうなシリアの表情は、今でもはっきりと覚えている。
イエローウィッシュを失った事にショックを受けるかもしれない、とエイトは考えていた。
だが、事態は想像以上に深刻だったのだ。

「全く……そんな体で生きちまった事が、逆に辛いだろうな、アイツ」

エイトは、扉を開き静かに病室へと入っていった。

支部内の医務室にて、Ｄｒ．ミケイルの姿があった。
端末を操作して、何か調べ事をしているようだ。
その内容は……『エターナルブライト』についての資料であった。
エターナルブライトの流通ルートが、はっきりとそこに記されている。
世界各地には、エターナルブライトはまだまだ出現をし続け、世界中に流出され続けている。
今となっては、Ｅ．Ｂ．Ｂに対抗する為にはエターナルブライトの存在は必須。
メシアの各地では、Ｅ．Ｂ．Ｂの発生を防ぐためにもエターナルブライトの回収が頻繁に行われているのだ。

「……なるほど」

資料を目に通して、Ｄｒミケイルは頷いた。

「さて、あまり長居していては気づかれてしまうな」

必要な情報だけ抜き出すと、Ｄｒミケイルは端末の電源を落とす。

「全く……何故私がこんな面倒事を頼まれてしまうのか。　どーせ

ならシラナギくんを利用するべきだったな、何だかんだで彼女は単純だし」

ため息をつきながら、Ｄｒミケイルは静かに医務室を後にした。

激戦の代償　？

晶が目を覚まし三日程経過した。
目を覚ましてからはしばらく激しい頭痛が続いたものの、医者からの検査には身体的な問題も見つからずに、すぐに退院することが出来た。
その後、晶はすぐに艦長に呼び出され第7支部へと足を運んだ。

リューテを通じて晶は、自分がアヴェンジャーに捕らわれた事を伝えていた。
その件について、艦長にまで話が届いたのだろう。
いずれ自ら艦長に報告するつもりだった、アヴェンジャーの目的について。
……特に、父親の存在とアッシュベル・ランダーについては、早急に伝えなければならないと考えた。
作戦会議などに使われる会議室、一般パイロットである晶にはほとんど縁がない場所ではある。
この扉の前に立つと、シラナギに連れられて初めてブリッジルームの扉の前に立ったことを思い出した。
緊張感が高まり、晶は深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。
そして、ゆっくりとその扉を開いた。

その先には、いつも見慣れているフリーアイゼンの艦長……ゲン・マツキと
フリーアイゼンを助けてくれたソルセブンのイリュード・ブラッシュが座っていた。

「来たか、未乃　晶」

「ほう……彼が例のパイロットか。　悪いな、まだ体も本調子じゃないだろうに」

「……いえ、それよりも早急に伝えなければならないことがあるので」

「そこまで固くなることもあるまい、そこに座るといい」

イリュードに指示を受けて、晶は静かに椅子へと腰を掛ける。
流石にメシアの艦長二人を前にしたプレッシャーは尋常ではない。
とてもじゃないが、平常心を保てという方が難しいだろう。

「まず、よく生きて帰ってきた。　正直あの状況で君が生きていたことは奇跡としか思えんよ」

「俺も、よくわからないんです。　どうして、生き延びたのか……」

G3にやられた時の記憶は、未だにはっきりとしていない。
覚えているのは赤い光に包まれた事と、誰かの声が聞こえた事だ。
……あの声、フリーアイゼンを助けに行ったときにも聞こえていた。
ιシステムに関連する事なのか、それともただの幻聴なのか――

「アヴェンジャーの拠点については、我が部隊で捜索を行った。
結果、第S級に値する汚染区域にメシア所有のものではない施設が発見されたよ。
お前を逃したことにより、奴らが我々の動きを先読みしたのだろう。
　だが、何も手掛かりが残されていないわけではない、奴らの尻尾は必ず我が部隊を掴んで見せよう」

「すまないな、イリュード艦長。　本来であれば我々が行うべきであっただろうに」

「アヴェンジャーはもはや我々共通の敵だ、今は本来の役割等言っている場合ではない事態だろう」

「うむ、その通りだ。　晶……すまないが、知っている事を全て我々に話してくれないか。　我々としても彼らの目的がわかればアヴェンジャーの動きも掴みやすくなるはずだ」

「……わかり、ました」

より一層、空気の重さを感じた。
このまま正直にアヴェンジャーの目的を話してしまうと、どうなるだろうか。
今までは、早急に伝えなければならないという思いでいたが、ここで一つ……嫌な結論を頭に思い浮かべてしまった。

アヴェンジャーの狙いは、あくまでもアッシュベル・ランダーという個人一人。
昔は偉大な科学者と世界的に名を上げていたが、今となってはエターナルブライトの出現により、天才から奇人という評価に代わってしまった人物だ。
それでもＨＡ開発者としてメシア内では活躍を続け、本部においてもその発言力の強さは健在ではあるが
……考えたくない事だが、一人の命でアヴェンジャーの無意味な争いが止まるというのであれば、アッシュベルの命を差し出すというメシアの方針も、有り得てしまうのではないかと考えた。
メシアに限っては、そんな事がないと考えたい。
人類の希望となるべく組織が、そんな方法で世界の平和を保とうな

んてするはずがないだろう、と信じたい。
だが、万が一という事もある……以前にゼノスから聞いたように、G3のような殺人兵器を隠してしまうという裏の顔も知ってしまった。
そんな方法をメシアがとってしまったら……結果的に、アヴェンジャーとやっている事が変わらない――

「……どうした、晶」

「いえ……何でもないです」

疑うな、信じろ。
少なくとも、艦長はそんな悪い人ではないはずだ。
晶はようやくその重い口を開いた。

「アヴェンジャーの人達は……ある一人の男に復讐する為に集われた組織だと聞きました。
G3のパイロットである男から聞いたので、間違いはないと思います」

「一人の男？　たったそれだけの為に、これほどまでのテロ行為を？」

「その男とは？」

「……アッシュベル・ランダーです」

「なんだと……？」

その時、ゲンは表情を一変させる。

「自分もそこまで詳しい話は聞けていません……ただ、あの人は右腕がE．B．Bのように変化していました。
それはアッシュベル・ランダーの手によってエターナルブライトの実験台にされた、と告げられました」

「エターナルブライトによる人体実験……っ！？」

「……あの男が、そのような事を？」

二人は驚きを隠せずにいた。
メシア内では、今までエターナルブライトによる人体実験に関する記録は一切残されていない。
有り得るとするのであれば、それはι・ブレードのように秘密裏で行われたという事実につながってしまう。
だが、何の為にそのような実験が行われたのか？
エターナルブライトによる影響は既に世に知れ渡っているはずだ。
あらゆる生命体をE．B．Bに変化させ、E．B．Bは例外なく人類に襲い掛かる。
……そのような代物を、人間に使うという発想自体が有り得なかった。

「アッシュベルは、かつての私の友だ。　彼は確かに奇人ではあるが、決してそのような非人道的な行為を行うような人間ではない。
何かの間違いである……と、信じたいが」

「いや、俺は噂程度には聞いたことがある。　アッシュベル・ランダーは裏で何をしているかよくわからないと、陰で言われ続けている人物だ。
メシアの本部内でも彼を危険視する人物は例外なく存在していた。

……しかし、確証はないがな」

「……私が、彼に尋ねよう。　それに敵の言葉である事も事実だ、全てを鵜呑みにするわけにもいかん」

ゲンはその真実を受け止めきれずにいた。
かつての友が、そのような事を手を出していたとはとてもじゃないが考えたくはない。
もし、その事が事実であれば……今すぐにでもその行為を辞めさせるべきだ。
友として、友人の過ちを正さねばならなかった。

「少なくとも……右腕がバケモノになった男と、写真ではありますがE．B．Bのように姿を変えた少女を……この目で確認しています。
人体実験が行われていたという事実は、間違いない……と思います」

晶はあの時、父親に見せられた画像を頭に過ぎらせると思わず背筋をゾッとさせた。
それだけではない、あのE．B．Bと化した少女の画像のせいで……夢にまで出て来てしまったのだから。

「しかし、妙な話だな。　何故一人の男に復讐する為に、メシアの兵器を奪う必要がある？
アッシュベルを敵に回すとしても、何もメシア全体を敵に回すわけではあるまい。　俺ならば、暗殺といった手段をとるがな」

「何か他にも狙いがあるとも考えられる。　それこそ、メシアを敵に回さねばならないほどのな」

晶の心配はどうやら無駄に終わったようだ。
言われてみれば、確かに個人に復讐する為にここまで大規模な活動をするのもおかしい。
感情的になりすぎて、そんな肝心なところが抜けてしまっていた。

やはり、艦長は冷静に、的確に状況を判断出来る人物だ。
例え味方の言葉であろうと、それを鵜呑みにして過激な行動に移ったりはしない。
艦長達なら信用できる、だから話してもいい。
晶は覚悟を決めて、父親の事についても明かした。

「……それと、アヴェンジャーには……俺の父親もいました」

「未乃　健三が？　どういう事だ、彼はメシア所属の開発者のはずだぞ」

「まさか……裏でアヴェンジャーと繋がりを持っていたというのか？」

「わかりません……父親は、ι・ブレードをアッシュベルに対抗するために開発されたと言っていました。
そして、最初からパイロットは俺が選ばれる事になっていたみたいなんです」

ありのままに、晶は艦長達に伝えた。
あの時、アヴェンジャーを抜け出した時点で父親と敵対する事は目に見えていた。
……いずれ、戦うことになるのかもしれない。
だが、それでもやはり肉親の相手は辛い。
出来れば戦いを避けたいというのが、晶の本音であった。

「やはり、メシア内部にアヴェンジャーと通ずる者がいたか」

「認めたくはないが、事実のようだな。　まさか、未乃　健三がテロ組織に力を貸すとは……」

二人はやはり、複雑そうな表情を見せていた。

メシア内部から、アヴェンジャーと通ずる人物が現れたという事実だけでも衝撃的だというのに

優秀な技術者である未乃　健三が、そのような組織に力を貸しているという事実が信じられなかった。

「晶、父親の事を話すのは辛かったであろう。　だが、よくぞ我々に話してくれた」

「……俺、大丈夫です。　父親を敵に回す覚悟は、ちゃんと出来てますから」

何処か、不安が籠った一言ではあったが、目はしっかりと艦長と合わせていた。

今の父親は、間違っている。

どんな理由であれど、アヴェンジャーの行為は許すわけにはいかない。

今はそうやって、自分を納得させることしかできなかった。

「俺から話せる事は、以上です」

「わかった、戻ってゆっくり体を休めるといい」

晶は立ち上がると、艦長二人に一礼をして静かに会議室を後にする。

……恐らく、これからはアヴェンジャーとの戦いになるのだろう。
もはや、アヴェンジャーの存在は無視できるようなレベルではない。
話し合いで解決しない以上、屈服させるしか手段はないのだ。
複雑な気持ちになりながらも、晶は会議室を後にした。

支部内にある休憩室に、晶は足を運んだ。
自販機で飲み物を購入し、ソファーへと腰を掛ける。
現状、フリーアイゼンは改修作業に入っていて身動きが取れないとリューテから聞いてはいた。
その為、当分の間はソルセブンの元で晶はパイロットとして働く事となる。
フリーアイゼン以外の艦の元で働くのは、少し不安に感じた。
今までι・ブレードで数々の戦果を上げている以上、その評価に値する行動をしなければならない。
それだけで晶には相当のプレッシャーがかかっていた。

ゼノスはゼノフラムが大破した以上、当分の間はレッドウィッシュで活動を行うと聞いている。
あの爆発で生き残れたという話を聞いた時は、思わず耳を疑った。
しかもその回復力を凄まじく、今となっては怪我もほぼ完治しているらしいがまだ病室で寝かされていると聞く。
正直信じられない話だ、人の事を言えないがゼノスは一体どうやっ

て生き残ったのだろうと疑問に感じていた。
だが、最も深刻な事態と言えるのはシリアの事だろう。
激しい戦いの中、何とか生き延びたのだが……足が動かなくなってしまった。
それはもう、二度とＨＡに搭乗できない体となってしまったという事だ。

この三日間は絶対安静と言われて、病室から出る事はなかった。
だからゼノスにも、シリアにもまだ逢っていない。
今頃、シリアはどうしているのだろうか。
正直晶は、病室へ足を運ぶのに戸惑っていた。
シリアに何て声をかければいいのか、わからない。
いくら気が強いシリアでも、この事実をそう簡単に受け止められるとは思わなかった。
少なくとも、晶であれば絶望に陥って誰とも話したくない、と感じるはずだ。

「……行こう」

悩んでいても仕方がない、晶は自販機の前へと向かい追加で炭酸飲料水を購入する。
よく、シリアが好んでいた飲み物だ。
こんなもので気を紛らわす事が出来るとは思わないが、せめてもの気持ちだ。
手ぶらで向かうよりかはいいだろうと、晶は購入した。

数分ほど歩くと、シリアの病室の前まで辿り着く。
晶がゆっくりと扉を開くと、ベッドで上半身だけを起こすシリアの姿が目に入った。
何処か悲しげな表情で、空を眺めている。

……やはり、あの様子だとショックは相当大きいだろう。
今は行かない方がいいのではないか、と考えた。
シリアにしてやれることなんて、何もない。

逆に無神経なことを言って、傷つけてしまう可能性もあった。
……だが、いつまでも距離を置くわけにもいかない。
晶は勇気を振り絞って、病室へと足を運んだ。

「お、来てくれたのか晶」

「は、はい……」

「今はプライベートだぞ、口には気をつけろよ」

「え、あ。　そ、そうだった、な」

何処かぎこちなく、晶は話す。
何故か緊張してしまって、うまく言葉が出なかった。

「お、差し入れか？　流石アタシの部下だよ、ありがとな」

晶が手に持っていた飲み物に気づき、シリアは手を伸ばした。
まるで猛獣にエサを与えるような手つきで、晶は飲み物を渡す。

「どうした？　アタシの顔に何かついてるか？」

「い、いや……何も」

「……ま、座ってくれよ」

シリアは近くにある椅子を指さしてそう言う。
晶は無言で、椅子に腰を掛けた。

「フリーアイゼン、護ってくれたんだよな。　ありがとな、晶がいなけりゃ今頃皆死んじまってたよ」

「……でも――」

「どうしたんだよ、もっと誇っていいんだぞ。　皆晶には感謝してるよ、よく頑張ったじゃないか」

「あ、ああ……」

シリアは気丈に振る舞っていた。
晶の目から見ても、無理をしているのは痛いほど伝わってくる。
だからこそ、言葉が上手く出てこない。
一体、何の為にここへ来たのだろうと思ってしまうほど……本当に、何を言えばいいかわからなかった。

「アタシさ……足、感覚ないんだよね。　笑っちゃうよな、意気込んでアヴェンジャー相手にしてたら呆気なくやられちまって……このザマだよ」

「……な、治るの、か？」

晶はそう口にした後に、表情をハッとさせた。
今、物凄く自分の口にした言葉に後悔した。
何でこんなことを聞いてしまったのだろう、恐らく一番触れてはいけない部分だったはずなのに。

「検査の結果聞いてさ、ほぼ絶望的なんだってさ。　もうパイロットは諦めろとも、言われたよ」

「……」

晶は言葉を失った。
恐らく医者から告げられたのだろう、少し考えればそんなことはわかるはずだったのに。
かけるべき言葉が、全く見つからなかった。
下手に励ますことも、今の状況について語る事も、何を話してもシリアを傷つけてしまう。
一生懸命かける言葉をグルグルさせても、何も出てくることはなかった。

「……晶はさ、何でパイロットに志願したんだ？」

「え？」

「ほら、学生の時は成績は常にビリで落ちこぼれだって自ら言ってたじゃないか、それでも続けてた理由って何だ？」

「……親父がさ、ＨＡの技術者だったんだ。　それで、ＨＡに興味を持って親友と一緒に親父が認める程のパイロットになってやろうと思って」

「へぇ……きっかけは木葉だと思ってたんだけどなぁ。　ちょっと意外だったよ」

「その時は、そんなに人類だとかＥ．Ｂ．Ｂだとかは……意識してなかったからさ」

その当時は確かに、人類を守るだとかは意識をしたことはそんなにない。
ただ、父親がＨＡ技術者という事に憧れて、自分はパイロットを目指そうとしただけの事。
そんな単純な理由であったが、今では木葉を守る為……人類の為に戦おうといった志で動いている。

「アタシも似たようなもんさ。　昔姉貴がパイロットになるっていって家を飛び出して行ってね……アタシは姉の後を追ってパイロットになったんだよ」

「お、お姉さんがいるのか？」

「まぁね……ただ、姉に憧れたとか、そんな理由じゃないんだけどさ。　……アタシさ、昔Ｅ．Ｂ．Ｂの襲撃で家族を失ってるんだ」

「え――」

晶はまたしても言葉を失った。
……まさか、シリアにそんな過去があったとは想像もつかなかったからだ。

「変な話だけどさ、どうして人類守る為に飛び出した姉が、アタシらを守ってくれなかったんだって思っちゃってさ。
家を飛び出して以来……ずっと顔も見せずに、アタシらが襲われた時も……その後も、ずっと顔を見せてくれなかった。
だからちょっと、姉が嫌いなんだよ。　だからね、姉が役立たないなら……アタシがパイロットになって、姉以上に活躍してやるって意気込んでたんだ」

「……そう、だったのか」

「後はそうだね……昔からちょっと、飛行機とかにも憧れててさ。ＨＡで空に飛びたいなって気持ちもあったんだけどさ。姉貴の影響で結構、ＨＡについての知識は豊富だったから、可変機の試作だとかフライトパーツがどうこうとか、そんな資料を目を輝かせて読んでたよアタシ」

「あ、ああ……その気持ち、よく、わかる――」

シリアは楽しそうに自分の事を語るが、晶はやはりぎこちない。慎重に言葉を選んでしまっているせいか、いつもの通りに話せていなかった。

「……アタシなら、大丈夫だからさ。こんな体になっちまっても、何とか戦場に復帰できないか一生懸命方法を探すよ。だからさ……晶が、アタシの分まで頑張ってくれよ。何度もフリーアイゼンのピンチを救ってきた晶になら、安心して任せられるからさ」

シリアは、笑顔で晶にそう告げる。

だが、晶は頷くことが出来なかった。

とてもじゃないが、シリアのその思いを背負って戦うことは……できない。

深く考えてしまい、ただ黙って俯くだけだった。

「ほら、しっかりしな。　アタシを気にして晶までが落ち込むことはないだろ？　なぁに、心配ないさ。　アタシを誰だと思ってるのさ？」

「……シリア、さん」

「だーかーら、いつまで『さん』付けをするんだと……あーもう、どうして晶はそうなのかねー、別にアタシを友達だと思って喋ってもいいんだぞ？」

「……ご、ごめん」

晶はシリアを励ますどころか、逆にシリアに励まされてしまっていた。

これでは、本当に何のために来たのかわからない。

何か、何か言わなくてはと必死で思考をグルグルと回転させた。

「……上手く、言えないけどさ。　シリアの足をどうにかする事、一緒に考えるよ。　医者は絶望的だって言っているけれど……治らないとは言ってないしさ」

なんて無責任な事を口走っているのだろう。

だけど、晶はそんな言葉しか口に出すことが出来なかった。

ひょっとしたらシリアを余計に傷つけてしまうかもしれないというのに。

「おいおい、言うんだったらもっと自信満々に言えよ。　でも、気持ちは嬉しいよ。　ありがとな、晶」

「……あ、わ、悪い」

怒られてしまったが、結果的にはシリアは笑ってくれた。

……少しでも、気を和らげることはできたのだろうか。

「アタシはもういいからさ、木葉の事ちゃんと見てやれよ。……シラナギから、話聞いてないか？」

「シラナギさんから？　何の話ですか？」

「……いや、聞いていないならいい。　とにかく、木葉の支えこそ晶しかいないんだからな。　今まで心配かけた分、一緒にいてやれよ？」

「そ、そうだな……わかったよ」

「ほら、早くいったいったっ！」

晶はシリアに言われるがままに、病室の外へと出ていく。
最後に少しだけシリアの表情を確認すると、やはりどこか寂しい表情を見せていた。
……思った通りだ、やはり辛いのだろう。
こんな形で、パイロットとしての生命を絶たれてしまえば……納得できるはずがない。
そんな姿を見送って、晶は病室を後にした。

ガンッ！！
誰もいないなった事を確認し、シリアは壁に思いっきり拳を叩き付ける。
シリアは俯いたまま、もう一度拳を叩き付けた。

「動け、動けよ……アタシの足。　こんなところで、終わりたくねぇよ……アタシ、まだまだパイロット……やりたいんだよ……もっと、パイロットさせてくれよ――」

両手を顔に覆い、シリアはそう呟いた。
あまりにも理不尽な結末を受け入れる事が出来ずに、何処にもぶつける事の出来ない悔しい思いを今まで抑え続けていた。
誰にも当たらずに、自分の中で封じ込め続けて、物にあたる事で解消させようしたが、それでも振りきれない。
頬を伝って、ポタリポタリと水滴が一つずつ垂れていた。
……晶の前で決して見せなかった、悔し涙。
仲間に余計な心配をかけさせまいと、気丈に振る舞っていたがそう長続きはしないだろう。
だが……そうしなければ、仲間は皆自分の事を心配する。
特に晶のようなタイプは余計に神経を使わせてしまうことを、シリアはよくわかっていた。
だからこそ、誰もいないときを見計らってこの思いを発散するしかない。
しばらくは、そうやって乗り越えていくしかなかったのだった――

第１０話　ゼノフラムの意味　？

フリーアイゼンとアヴェンジャーの激戦から、五日ほど経過した。
フリーアイゼンの改修は、まだまだ時間がかかるようだ。
第７支部が総動員で修理を行っているものの、ロングレンジキャノンを数十発受けた傷は大きい。
いつ落とされてもおかしくなかった艦が、こうやって形を保っている事だけでも奇跡と言えた。

同時にＨＡの修理も進められている。
その中でも、いち早くｉ・ブレードは復活を遂げた。
だが、他の２機はそうもいかない。
大破したイエローウィッシュは、もはや復元はできない。
ゼノフラムも同様に、元通りにすることは難しいだろう。

アヴェンジャーの行方も未だに掴むことが出来ていないが、あれから大きな動きに出ていない。
各地でのＨＡを狙った活動は相変わらず続いているが、最近はメシアの警備体制が強化されたことにより、被害は徐々に減っていった。
だが、このままアヴェンジャーが大人しくしているはずもない。
メシアでは第７支部を中心にアヴェンジャーの拠点捜索が続けられた。

ｉ・ブレードの修復完了の知らせを受けた晶は、それを機にゼノスの病室へと向かっていた。
ここ最近艦長に呼び出されたり、シリアの件で悩んだりと中々ゼノスと逢う機会がなかった。
何日ぶりの再会となるだろうか。

あの戦い以来、五日という日々が過ぎている。
晶が捕らわれていた期間を合わせれば、恐らくもっと日が開いているはずだ。

ふと、晶は足を止めた。
目の前から、綺麗な顔立ちをした白衣の女性が歩いてきた。
医者……ではない、何となくだがＨＡの技術者である事はわかる。
何処か近寄り難い雰囲気ではあった。

「……人の顔をジロジロ見るな」

「うわっ！？　あ、いや、ごめんなさい……」

突如女性は足を止めて、こちらへ振り向く。
思わず晶は驚いてしまった。

「誰かと思えば君は、侍のパイロットか」

「さ、侍？」

「あんな立派な刀を持っているのだから、侍でいいだろう。　今度私がちょんまげをつけてやってもいいぞ、喜べ」

もしかして、ι・ブレードの事だろうか。
まさかι・ブレードを侍と呼ぶなんて、晶は思わず口をポカーンとさせた。

「君の侍については色々と調べさせてもらったよ……ιシステムは実に興味深い。　あれは、まさに人間に近いＨＡと言えるだろう」

「人間に、近い？」

「そうだ、人間という生き物は普段は本気を出さずにダラダラとしているのだよ。　だが、ここぞって場面で１００％……いや、それ以上の力を発揮する事がある。
君の侍は、まさにιシステムでその制御を実現しているのだよ」

突然語りだした女性に思わず、たじたじとなったが、言っている事には心当たりはある。
例えば危機的状況に陥った時に出現する『ιフィールド』
確かにあれは晶の感情が高ぶった時にしか発動しないバリアだ。
そして……あのとんでもない力を生み出すムラクモの『解放』も、それの一つなのだろう。

「……君はゼノスの下で働いていると聞いたが」

「は、はい。　そうですけれど……ゼノフラムが大破してしまったらしくて」

「全く……相変わらず無茶をする男だな。　……まだ、その名を使っていたのか」

「その名？」

「いや、忘れてくれ。　おっと、もうこんな時間ではないか。　そろそろ戻らなければな、失礼するよ」

白衣の女性は晶にそう言い残すと、立ち去ろうとした。

「はい……あ、な、名前教えてくださいよ。　俺、未乃　晶ですっ

！」

「やれやれ、私の名も知らないで話していたのか。　まぁいい、覚えろ。　フラム・ヴェルケードさ」

「フラム？」

フラムは名を伝えると、後ろ姿を見せながら左手を振って立ち去った。

晶は何処か、その名に引っかかった。

別に何の変哲もない名ではあるが。

「ゼノフラム……フラム……まさか？」

あの女性は、ゼノフラムの開発者？

晶の頭の中に、一つの結論が導き出された。

ゼノスの病室へ訪れると、既にベッドにはゼノスの姿はない。

空いているスペースを利用して腕立てをしているゼノスの姿が真っ先に目に入った。

「晶か、よくきたな」

「……怪我人が何してるんだ？」

まだ包帯が取れていないというのに、そんなに体を動かして大丈夫なんだろうか。
何処か不安に思ったが、ゼノスは腕立てを中断してベッドへ腰を掛ける。

「既に完治している、医者からも問題がないと言われていた。　だが、Ｄｒ．ミケイルが俺をここへ留めたのさ」

「船医の人……だっけか、やっぱりあれだけの爆発だったし……検査もしっかりした方が」

「心配ない、俺は戦える」

晶が心配そうな表情を見せるが、相変わらずの無表情でゼノスは言い切った。
この様子を見る限り、余計な心配をする必要はなさそうだ。

「艦長から話は聞いたか？　明日からお前は、ソルセブンのＥ．Ｂ．Ｂ討伐活動に協力してもらう件だ」

「あ、ああ……なんだ、知っていたのか」

「それと、シリアの件だが……やはり、復帰は難しいらしい。　アイツが抜けた分は、俺達がしっかりカバーするぞ」

「……そう、だな」

認めたくはないが、シリアは二度とパイロットとして戦えない体となってしまった。

もし、晶が二度とι・ブレードに乗れない体となってしまったら、相当ショックを受けるだろう。
シリアのように、あんな風に振る舞える自信はない。
これから、シリアはどうなってしまうのだろうかと考えると不安で仕方がなかった。

「明日は俺も同行するぞ、ゼノフラムはまだ使えないがレッドウィッシュでなら出撃はできる」

ゼノスのその言葉を聞いて、晶は安心した。
正直見知らぬ部隊で一人で参加するのには抵抗がいる。
ただでさえ、特殊な扱いでフリーアイゼンの一員となっているというのに。
だが、それ以上に晶はゼノフラムについて気になっていた。

「でも、ゼノフラムって直せるのか？　ほとんど大破しちゃってるって聞いたけど……」

「俺が直す。　ここであいつの夢を、終わらせない」

「あいつの、夢？」

晶ふと、先程逢ったフラムという名の女性を思い出す。
もしかすると、ゼノスの知り合いなのだろうか。

「あの、さっきフラムっていう人に逢ったんだけど……知り合い？」

「……フラムは、ゼノフラムの開発者だった。　今はそうではないがな」

「何か、あったのか？」

「まぁ、な」

歯切れが悪そうに、ゼノスはそう答える。

思えば晶は、ゼノスの過去について何も知らない。

シリアの時だって、あの時に初めてシリアが抱える過去を初めて知った。

ゼノフラムは別名パイロット殺しと恐れられている。

なのにゼノスは危険を冒してまで、そのＨＡに搭乗し続け、Ｅ．Ｂ．Ｂと戦い続けているのだ。

一体何が、ここまでゼノスを動かしているのだろうか。

「今のうちに体を慣らしておけ。　激戦続きだったと言えど、ここまで休んでしまえば腕も訛ってしまうだろう」

「あ、ああ……そうだな。　ちょっと、シミュレーターでもいじってくるよ」

確かに最近は訓練もろくに行っておらず、明日からいきなり実戦復帰というのには不安がある。

第７支部にもシミュレーターは存在するので、せめて触っておくだけでもマシになるだろうと考えた。

相変わらず、シミュレーターは学校でのトラウマもあり苦手ではあるが、感覚を掴むには一番手っ取り早かった。

「それじゃ、俺行くよ」

「ああ」

晶はそう言って、ゼノスの病室を後にした。

「……フラムか」

ゼノスはそう呟き、窓辺の外を眺める。
5年前の、フラムと初めて逢った時の事
そして、ゼノフラムとの出会いがふと、蘇った――――

5年前、ゼノスは第7支部のE．B．B討伐部隊の一員だった。
まだ1年目の新人ではあるが、その実力はベテランの兵を上回るほど凄まじい。
ゼノスが操るウィッシュは、通常のウィッシュとは異なりまるで別HAのようなバケモノじみた動きを見せる。
だが、その動きを実現する為にウィッシュへかなり負荷をかけており、彼が操る機体は毎度ながら『自ら』故障させてしまっている。
それでも、数々のE．B．Bを倒し続けて、実績を伸ばし続けていく腕は、もやはメシア中に広まっていった。
ついには、その実力を認められ、ゼノスは当時メシア内で開発が進められていた新型HAのテストパイロットに選ばれた。

コンセプトは『単機で戦艦クラス』の力を持つHA……つまり、HA単機で大型E．B．Bを討伐する事が出来るHAという話だ。

メシア内でも名高いＨＡ技術者である『フラム・ヴェルケード』が設計を考案し、メシアを通じて正式な開発の許可が降りた。
もし、本当にそんなものが実現できれば大型Ｅ．Ｂ．Ｂの討伐にて戦艦とウィッシュ部隊による大規模な作戦展開は不要となる。
この試作機が評価されれば、近いうちにウィッシュに次ぐ次世代量産機の一つとなることは間違いない。
まさに話を聞くだけでは、夢のようなＨＡである事は間違いなかった。

だが、現実的に考えれば本当にそんなＨＡが開発できるかどうかも怪しい。
実際はＨＡ単機に戦艦クラスの火力を持たせることに繋がる上に、コスト面の問題も大きいだろう。
どうにも胡散臭い話ではあったが、ゼノスはそのＨＡに興味を持ち、引き受けた。
ゼノスは第７支部の開発室へと呼ばれ、そこに足を運んだ。

「ここ、か」

開発室の目の前に立ち、ゼノスは足を止める。
新型ＨＡについての話はある程度聞いているが、正直かなり無茶な設計であった。
パイロットへの負荷はまるで考えられておらず、使われる部品等も希少な品ばかり。
とてもじゃないが、あまり実戦向けの機体であるとは思えない。

そんな事を頭に過ぎらせながらも、ゼノスはその扉を開いた。
扉を開けると、そこは真っ暗な部屋だった。
だが、カシャカシャと聞こえてくるタイプ音からして人がいるのは間違いない。

奥には端末の光に照らされた、白衣を身に纏うメガネの女性の姿があった。

「お前が、フラム博士か」

「……私は今忙しい、気安く声をかけるな」

黙々とほぼ画面の近くに顔を寄せながら、フラムはタイピングを続ける。

そんな事をしていれば目を悪くするのは当然だろうな、とゼノスは呆れていた。

「アンタの提案、よくメシアの了承が降りたな」

「どういう意味だ？」

ギロリ、とフラムはゼノスを睨んだ。

ようやくこっちを向いてくれたか、とゼノスはため息をつく。

「俺は開発に関しては素人だがな、そんな俺の目から見てもあの新型は無茶すぎる設計だ、本気で作る気か？」

「当たり前だ、私の対大型Ｅ．Ｂ．Ｂ専用ＨＡ……ＯｖｅｒＨｏｐｅＡｒｍｓに死角はない」

「どうだかな、死人が出ても不思議ではないぞ」

「……君、随分と生意気な口を聞いてくれるね」

チッと舌打ちをしながら、フラムはそう呟いた。

「だが、アンタの設計……嫌いじゃない」

「どういう意味だ？」

「ここまで盛大にパイロット負荷が無視され、対Ｅ．Ｂ．Ｂに向けた性能だけを限りなく伸ばした設計……まさに、俺が求めていたＨＡだ」

「……何だ、君もどうやら私の思想を理解していたようだね。　気に入ったよ……名を聞かせろ」

「ゼノスだ、ゼノス・ブレイズ」

「そうか、よろしく頼むぞ……ゼノス」

それがフラムとの、出会いであった。

ゼノフラムの意味　？

当時、ＨＡの技術は発展途上にあり、メシアで行われている事は主力機である『ウィッシュ』の改良が中心となっていた。
その中でも、新たなＨＡの開発に試みる者は少なかった。
特にフラムのような発想は斬新であり、フラムの今までの実績から評価されメシア内では最も注目されている。
フラムはこれまでに汎用機の改良に携わっており、メシアのＨＡ技術発展に貢献してきた人物の一人だ。
対大型Ｅ．Ｂ．Ｂ専用ＯｖｅｒＨｏｐｅＡｒｍｓの開発は、ＯＨＡプロジェクトとしてチームが立ち上げられ、本格的な開発が進められていった。

開発室では、ＯＨＡ開発に向けてのフラムとゼノスの激しい討議が繰り広げられている。
どういう訳か、ゼノスはフラムにちょくちょくと呼び出されて、様々な案について意見を求められるようになっていた。
ゼノスは技術者としては素人ではあるが、パイロットとしては、もはやベテランの域に達している。
優秀なパイロット視点からの意見も参考程度に聞いておきたいらしい。
だが、実際話を聞いてみると……

「私はね、ロケットパンチという武器は実に有用的だと考えているのだよ、あれはライフルの発展と考えてもいいね。
君はどう思う？　ＯＨＡに実装するのもありだと思わないか？」

「悪いが、賛同できないな」

「どうしてだ？　君はどうもわかっていないようだね、やはりロボットと言えばロケットパンチは必須なのだよ。　まさにロマンの塊ではないか？
後はそうだな、やはり目からビームも出るようにするべきだろう。
　どうだね、プラズマを利用すればそれっぽいのが出せるんじゃないか？」

「お前は一体、何を目指しているんだ？」

「ならばミサイルはどうだ？　しかし普通に搭載するのも面白くはない……ロボットにも色気を持たせるというのはどうだろうか、名付けてお――」

「……それ以上はやめろ」

「つれないな、君は。　中々私の天才的な発想に賛同をしてくれないようだね？」

楽しそうに語るフラムの姿を見て、ゼノスはどこか呆れていた。
突然呼び出されたかと思えば、その内容はまるでロボットに憧れた少年と話しているように錯覚する。
だが、彼女は決してふざけてはいない。
大真面目に、ゼノスに語っているのだ。
今までの話を、間違って肯定でもしてしまえば、その武装が実現してしまうほどの技術力を持っているのだから。
彼女は自分が実現可能な事しか話さない、そういう人間だという事はゼノスは理解できていた。

「やはり大型Ｅ．Ｂ．Ｂを相手にするには、ありったけの武装を積

み込む必要があるだろう。
いっそミサイルポッドを積むのはどうだ？　他の武装をほぼ諦める事になるかもしれないが」

「なるほど、やはり君と私の発想は似ているな。　私もその案は既に考えているのだよ、両肩を全てミサイルポッドを積んでしまおうという案だがな。
両肩を開いてミサイルを全弾当てれば、圧倒的な火力を誇るのは間違いないぞ」

「しかしミサイルポッドを積むだけならウィッシュにだって可能だ。
現にウィッシュ１０体使って、ミサイルを一斉射撃して大型を倒した記録も存在する」

「君は甘いね、私の予定では武装はこれだけ積む予定なのだよ」

フラムはゼノスに紙を突きつけてそう言う。
無言でゼノスは髪に目を通すと、思わず目を疑った。

「ミサイルポッドにキャノン砲にガトリング砲？　それに、なんだ……このブーストハンマーというのは」

「それが目玉なのだよ、先程のロケットパンチで思いついたんだがね、鉄球に超出力のドライブを搭載するのさ。
チェーンで繋ぐ事によって、圧倒的かつ凶悪な飛び道具に化ける…
…というわけだ、もちろんＥ．Ｂ．Ｂの装甲なぞいとも簡単にぶち破ってくれるだろう」

まさかこれだけの武装を全部積もうというのか、ミサイルだけでも相当負荷が大きいというのに。

武器の数に驚かされているが、それ以上に目に留まった兵器がそこに記載されていた。

「……更にここに書いてある『反エネルギー圧縮砲』、これはなんだ？」

「ふ、それこそ対Ｅ．Ｂ．Ｂにおける究極武装……つまり、ＯＨＡの切り札というわけだな。　通常、主砲……いわゆるビーム兵器と呼ばれるものはエターナルブライトを圧縮した時に生み出される超エネルギーを一気に射出させている。
だが、エターナルブライトの超圧縮を行う装置は凄まじく大がかりな装置が必要となり小型化が出来ない代物なのだ、それ故主砲というのは戦艦ではないと搭載はできなかったのだよ。
しかし、この武装はその常識を覆す素晴らしい代物なのだよ」

「素人の俺でもその辺りはわかる、だが一体どうやってＨＡクラスで実現させるつもりだ？」

「やれやれ、君はパイロットの癖に技術面の知識もあるときたか。
これでは説明している側も面白くないね」

フラムはため息をつきながら、ゼノスにそう言った。

「……悪かったから続けてくれ、俺もその先までは想像つかん」

「そ、そうか。　ならば続きを話すぞ？」

何故だか勝ち誇った顔を見せるフラムを見ると、今度はゼノスがため息をつく。
そんな事はお構いなしに、フラムは説明を続けた。

「実はかなり強引にエターナルブライトを圧縮させる方法があるのだよ。　通常、ビーム兵器は動力源となるエターナルブライトと圧縮装置の二つで成り立つ。　だが、私は両方ともエターナルブライトを使う方法を編み出したのだよ。
エターナルブライトを研究している技術者から、エターナルブライト同士のエネルギー反発について一度聞いたことがあってな、そのエネルギーを使ってエターナルブライトを圧縮させようと考えたのだよ。
どうもエターナルブライトは、個体によってエネルギーの大きさが異なるのだが、実はエネルギーの蓄積を行うことができるらしい。
　実際一部の戦艦ではエネルギーを蓄積させた物を使って、より強力な主砲を放つ技術が採用されていると聞く。
だが、その状態でエネルギーが蓄積されていないエターナルブライトにエネルギーが十分に蓄積させたエターナルブライトを触れさせると、互いのエターナルブライトがエネルギーを均等に分けようとする働きが発生する。　いわゆる熱平衡みたいなものだな。
その時に、凄まじいエネルギーを移動させるせいかはわからないが『更に超エネルギー』が生み出されるのだよ、わかるかね？
つまり私は、そのエネルギーを圧縮に使えるのではないかと考えたのだよ」

「……その話は聞いたことがあるな。　だが、そんな都合よくエネルギーの圧縮はできるとは思わん」

「その通りだ、第一エネルギーの移動が発生する際は凄まじい爆発が起き続けているようなものだ、普通の使い方をしていてはＨＡが大破するどころの話ではない。
そこを、実現可能にさせるのが私の仕事さ……だが、安心したまえ。
　エネルギー圧縮の時間を抑えられれば何とかできるかもしれん。

……ま、これがもし実現してしまえば……ＯＨＡは戦艦クラスの活躍が可能となるわけだ、素晴らしいと思わんかね？」

相変わらず、無茶苦茶な事を平然と言っているフラムには驚かされた。

しかし、これを本気でやり遂げようとするフラムの姿勢には感心する。

いや、彼女なら実現してしまうのだろう。

ゼノスはそんな事を感じ取っていた。

「……やはりお前には、驚かされるな」

「今更私の凄さに気づいたか、愚かだな君は……私はＯＨＡでこの世界を変えて見せよう。

こいつがメシアの次期主力に採用されれば、今までのＥ．Ｂ．Ｂ討伐の常識がひっくり返るぞ。

わざわざ戦艦を用意して大規模な戦闘を展開する必要もない……楽しい未来が待っているさ」

「歴史を動かすＨＡ……か。　どうせならちゃんと名前でも付けてやったらどうだ、記念になるんじゃないか？」

「ふむ、私としてはＯＨＡで十分だと思うが……確かにありかもしれないな。　ちょっと待て、私が考えよう」

ふとフラムが天井を見上げて、しばらく考え込んだ。

冗談で言ったつもりだったのだが、どうやら本気にしてしまったらしい。

「……太郎だ」

「太郎？」

ゼノスは思わず首をかしげて聞き返した。
もしかして、それをＯＨＡの名前とする気なのだろうか？

「ＯＨＡの生みの親は私だろう、つまり必然的にＯＨＡは私の子供となる。　以前に子供が出来たらどのような名前を付けようと考えていた時期があってな……
昔日本の名に憧れていたこともあり、『太郎』と名付けようとずっと決めていたんだ、どうだ？　素晴らしい名前じゃないか？」

「……別に悪いとは言わないが、それだったらアンタの名でも入れたらどうだ。　少なくとも、太郎よりしっくりくると思うぞ」

「自分の名をつけろというのか、全く君はおかしなことを言うな。
何故ＯＨＡに私の名をつけなければならないんだ？」

「だが、過去には新しく発見した惑星に自分の名をつける例もあるぐらいだ、別に悪くはないだろう」

「……君がそこまで言うなら、考えておこう。　ＯＨＡ『フラム』か」

フラムは再び天上を見上げて、考え込んだ。
どうもフラムはゼノスの言うことに、あまり反発しないようだ。
ゼノスの提案を真に受けて、真剣に悩んでいる姿が目に入る。

「君、いいかね」

「なんだ？」

すると、フラムは何か思いついたのかゼノスに声をかけた。

「君は以前、ＯＨＡの設計を見た時に無茶すぎる設計だの散々言ってくれた時があったね？」

「今更だな、それがどうかしたのか？」

「正直、今の私ではＯＨＡは多少無茶な設計が入るのだよ、素人のメシア兵が乗れば下手すれば命を落とす危険性があるほどなのだ。君は、そんな死すらも恐れずに私のＯＨＡに乗ろうと、しているのだな？」

「勘違いするな、現状のウィッシュでは自分の実力が発揮できないと思っていた。
そこで、ウィッシュの限界を超えたアンタのＯＨＡに注目しただけさ……悪いが、死ぬつもりはない」

不思議そうに尋ねてきたフラムに、ゼノスは迷いなく答えた。
決して死を覚悟して乗る、といった事ではない。
単純に、新型ＨＡに興味を持った事と……人の負荷をすべて無視し、ただ性能だけを求め続けるＨＡ。
そんなコンセプトに惹かれ、そのマシンを乗りこなしてみたい、と考えただけだ。

「やはり、君がパイロットとして選ばれたというのは私の幸福なのかもしれないな。
……よかろう、ＯＨＡの名には君の名前も刻ませてもらうぞ」

「何？」

「私が求めていたのは君のような素晴らしいパイロットなのだよ、君相手であれば遠慮なく思い切った開発が行えそうだ。言っておくが、君の想像以上にＯＨＡはクセが強くなるぞ。　だが性能は保障する……君の腕次第でＯＨＡはいくらでも伸びると、断言できる」

「……それは、期待できそうだな」

「逆に言えば……このＯＨＡは私と君、どちらかが裏切ってしまえば成り立たなくなるのさ。　君がこのマシンを乗りこなせなければ、メシアの連中は即不採用とするのは目に見えている。だからこそ、一度私に協力すると言った以上……最後まで君を手放すつもりはない、途中で抜ける事は許さんぞ。これはそう言った契約の意味も含めようかね。　なぁ～に、心配はいらない、金はとらないさ、君はただ黙って乗りこなせばいい」

「そんなことしなくても、俺は降りん」

「君ならそう言うと信じてたよ。　ま、とにかく……このＯＨＡは『ゼノフラム』、と名付けさせてもらおうか。これは君と私の契約でもあるし、たった今築いた君と私の絆、とでも言っておこうか」

フラムが真剣な表情で、ゼノスにそう訴えた。何が何でもＯＨＡを完成させてみせる、という意思表示なのだろう。

「……ゼノフラム、悪くない」

「しかし……やはりゼノスラムとかゼノスフラムに変えないか？私だけ名前が思いっきり出ているのは気に入らないぞ」

「いや、いい。　このＯＨＡは、ゼノフラムで決まりだ」

「君、少しでも私の話に耳を傾けたらどうだね？　……まぁ、君が気に入っているのならよしとするか」

非公式ではあるが、この日を境に新型ＨＡは『ゼノフラム』と名付けられる。
互いの願いを叶えるための誓い、それは天才技術者と天才パイロットによる固い絆の証となった。
そして、数か月の月日が流れ……ついに『ゼノフラム』が完成した。

稼働実験当日、いつになく現場は慌しかった。
数人の整備士が念入りにゼノフラムの整備を行っている。
ゼノフラムのその巨体は、隣に並べられているウィッシュと比べると圧倒的な存在感だ。
フラムが想定した武装が全て詰め込まれており、ブーストハンマーはまるで足枷のようにチェーンで繋がれている。

「さあ、今日はただの稼働実験ではあるが、同時に上層部に対してのお披露目会としての意味も持っている。

一通り、ゼノフラムの武装を扱ってくれよ……くれぐれも、失敗だけはしないようにな」

「問題ない、アンタの設計にも……俺の腕にも不備があるはずがないさ」

「ほう、言ってくれるね……君のその言葉を、信じるよ」

その一言を聞いて安心したのか、フラムはゼノスにそう告げて立ち去って行った。

「ゼノスさん、そろそろ準備してください。　そろそろ整備も終わりますので」

「……ああ、わかった」

整備員から声をかけられると、ゼノスは用意されていた長い梯子を使ってコックピットまで登っていく。
長い距離をようやく登り終え、コックピットの中へと入り込んだ。
ウィッシュのコックピットよりも一回り大きい、当然ではあるが作り自体はウィッシュが基盤となっている。
開発中に何度も入った事もあり、流石に見慣れた光景ではあるが、今日はいつにも増して緊張感が高まっていた。

ここまで緊張するのは、初めてＨＡで実戦に出た時以来である。
知らない間に、プレッシャーを感じているのだろうか。
今日の稼働実験で、事実上ゼノフラムの評価が決められる。
ここで、高評価を得られない限り……ゼノフラムは開発中止とされ、メシアからの資金援助が望めなくなる。
ＨＡは個人の資産で開発を続けられるようなものではない。

これまでゼノスは共にゼノフラムについての開発に積極的に参加していた。
始めは、ただ単純に凄まじい性能のＨＡに興味を退かれただけだった。
だが、フラムが楽しそうに技術を語る姿、熱意が伝わり、知らぬ間にゼノスまでもが開発の意見を出していく。
そんな事を繰り返しているうちに、ゼノフラムに愛着がわいてしまったのだ。
だからこそ、失敗は許されない。
必ず成功させ、フラムの『夢』へと近づけさせる。
『ゼノフラム』の名に懸けて――

「こっちは準備ＯＫだ、リフトを上げてくれ」

『了解』

外の整備班に通信で告げると、ガタンッとコックピット内が揺れる。
巨大なＨＡが、リフト共に持ち上げられていった。
リフトの上がる音だけを耳にし、ゼノスは目を閉じて精神を集中させる。
別に敵と戦う訳でもないのに、尋常ではない緊張感が走り続ける。
全く、自分らしくない。
ゼノスは思わず自分にため息をついてしまった。

「問題ない、いくぞ……ゼノフラム」

ガタンッ！
リフトが止まると、モニターからは太陽の光が差す。

周りは野球場のように広がる観客席があった。
公開稼働実験と言えど、流石に一般人の立ち入りは許可されていない。
メシア関係者の数人が、ポツンと座っているだけだった。

『さあ、実験を始めるぞ。　まずは移動だ、なるべく全速力を叩き出せ。　多少小回りは効かないが、お前の腕ならカバーできるだろう』

「了解した」

フラムが直々にゼノスに指示を出していた。
ゼノスは早速、スロットルをゆっくりと押し込んだ。
ガタガタガタっ！
機体が発進されると同時に、コックピットが激しく揺れ始めた。
……ウィッシュに搭乗している時とは比べ物にならない、凄まじい揺れだ。

「……何だ、この振動はっ！？」

ゼノフラムは、凄まじい推進力を叩き出し突き進んでいた。
あの巨体が出せるような速さではない、この揺れの激しさと凄まじいGは流石のゼノスでもそう簡単に耐えきれるものではない。
……文字通り、パイロット負荷をまるで考えられていないＨＡだった。

『ちゃんと前を見ろ、ここで壁にぶつかったら大恥だぞ』

フラムの指示を耳にすると、ゼノスの目の前には巨大な壁が迫っていた。

「くっ！」

このままではぶつかってしまう、何とか操縦桿を持ち振り切ろうとする。

ガガガガガガッ！！

スロットルを引いて、大きく右回りをしているにも関わらず、ゼノフラムはほんの僅かにしか曲がれていなかった。

……小回りが利かないどころではない、明らかに欠陥ではないのか？　と、思わずゼノスは疑った。

ブレーキを駆使して、ゼノスは強引に壁を曲がらせてようやく停止させることに成功する。

『見たまえ、この凄まじいスピードにお偉方は度肝を抜かれているぞ。　ハッハッハッ、やったなゼノス』

「……どういう事だ、ここまで操縦性が悪いとは聞いていないぞ」

『君がカバーしてくれると言っただろう。　それとも、降りるか？』

「冗談じゃない……乗りこなして見せる」

あの女、はめやがったな、と心の中でつぶやきながらも、ゼノスは負けじとそう言い切った。

すると、突如周りにE．B．Bのバルーンが数対出現した。

ゼノスはガトリングを構えて、バルーンを撃ちぬいていく。

「……射撃の精度に問題はないな、いやむしろウィッシュを遥かに凌駕している」

『当たり前だ、なめてもらっては困る。　次もよろしく頼むぞ』

フラムの合図で、今度は上空からバルーンが数対射出された。
あの距離ならば、キャノン砲を使えという事だろう。
ゼノスは迷わず2連キャノン砲を構えて、発射させた。
見事、全発命中させてバルーンは見事散っていった。

『流石だな、順調ではないか。　次はミサイルだ』

「……了解だ」

次に現れたのは、巨大な鉄板だ。
今度はあれを破壊しろ、と言っているのだろう。
ゼノスは壁の間近くまで機体を移動させた。
相変わらず激しい揺れが伝わるが、今度はスムーズに停止することが出来た。
それと同時に、両肩に搭載されているミサイルポッドを全弾発射させる。
煙で一瞬視界が見えなくなったが、煙が晴れた頃にはきれいさっぱりに吹き飛ばされた鉄板の変わり果てた姿が映し出された。

『いいぞ、お偉方もなかなか感心しているようだ。　次はメインイベントその1……ブーストハンマーを使うんだ』

「了解」

一時はどうなるかと思っていたが、稼働実験は順調に進められている。
このまま何も問題が起きなければ、ゼノフラムの性能が認められて更なる開発に踏み込むことが出来るはずだ。

そうすれば、近いうちに量産化させるのも夢ではない……メシアの新たな主力として立ち上がってくれるだろう。
次のターゲットが出現した。
同じように、鉄の壁だ。
ゼノスは壁へと向けて、ブーストハンマーを射出させた。

「……っ！？」

すると、ブーストハンマーは凄まじい速度で鉄の壁へと向けて直進していった。
一体何を積んだというのか、これほど巨体なＨＡがいとも簡単に引っ張られてしまうほど、凄まじい推進力で突き進みだしたのだ。

「クッ……制御できんっ！」

ゼノフラムは容赦なくハンマーへと引きずられていき、あっという間に鉄の壁を粉砕していく。
だが、ハンマーはその動きを止めずに容赦なく直進を続けていた。

「一体何を積みやがったんだっ！？」

『そのハンマーは特注品でね、通常の３倍ほどの出力を誇るのだよ。大丈夫だ、もう一度引けば動きは制御できるさ』

言われるがままに、ゼノスはハンマーを強引に引っ張ると、ようやくハンマーは動きを停止させた。
……想像を絶するパワーに、流石のゼノスも冷や汗が止まらなかった。

『ハッハッハッ、凄まじい破壊力だ。　流石に君もこのモンスター

には驚かされただろう？』

「……何てＨＡだ、想像を遥かに超えている」

フラムの言葉は文字通り、人体の負荷を無視した無茶苦茶な設計であった。

ゼノスが想像していた以上に、この機体を扱うにはかなりのリスクを負う必要がある。

……だが、ゼノスは無意識のうちにニヤリと笑みを浮かべた。

これこそ、自分の求めていたモンスターマシンなのだと。

フラムという人物は、本当にバケモノじみたＨＡを作り上げて見せた。

……確かに、これを使いこなせば相当凄まじいマシンになる事は間違いない。

必ず、自分の物にして見せる――そう、誓った。

『さあ、仕上げだ……反エネルギー圧縮砲を使いたまえ……奴らに、ＨＡが繰り出す主砲の威力を見せ付けてやろうではないか』

「ああ、わかっている」

いよいよ稼働実験も締めを迎える時が来た。

やはりフラムは天才だ、かなり無茶な設計と言えど……確かにコンセプト通りの動きを見せているのは事実だ。

精密な射撃に、圧倒的な火力を誇るミサイルとハンマー……どれも、対大型Ｅ．Ｂ．Ｂに関しては有効だろう。

そして、このビーム兵器を力を見せれば……まさにメシア史上初の、対大型Ｅ．Ｂ．Ｂ専用ＨＡとして認められるはずだ。

ゼノスは会場の端へと移動した。

ようやく移動にも慣れてきた、クセがいるがコツさえ掴んでしまえば容易く操作できる。
すると、大量の数のE．B．Bのバルーンが一斉に出現した。
……一撃で全て一掃しろと、言っているのだろう。

主砲クラスというぐらいだから、その一撃は凄まじく、観客席すら破壊しかねないだろう。
それを考慮して方角は、誰も人がいないところへ向けている。
あのフラムの事だ……凄まじい威力である事は容易に想像できた。

「……いくぞ」

ゼノフラムの胸部に、一つの砲台が姿を現した。
エネルギーの圧縮が始まると、紫色の光が集中し始めて徐々に赤色へと変化していく。
……本当に、ＨＡサイズのビーム兵器を実用化まで持って行ったというのか。
自ら開発に携わっていたかと言えど、実物を目の前にすると驚きを隠せなかった。
だが、異変はその直後に起きた――

ビーーーーー！！
突如、コックピット内で警告音が鳴り響いたのだ。

「何……？」

何が起きたのかとゼノスはサブモニターを確認する。
すると、明らかに出力が異常な数値を叩き出していた。
動力部の負荷がかかりすぎている、今の状態でオーバーヒートを起こしてしまったら――

すぐに中断して冷却する必要がある、と考えたが
既にその判断は遅かった。

ズガァァァァンッ！！
その時、ゼノフラムは凄まじい爆発を引き起こした。

ゼノフラムの意味　？

ゼノフラムの起動実験から一週間経過していた。
順調に進められていたかと思いきや、最後は致命的なアクシデントが起きてしまった。
反エネルギー圧縮砲を使用する際、内部で生み出されるエネルギーが想定以上の値に達してしまい
結果、凄まじい爆発が生み出されたのだ。

当然ながらゼノフラムは半壊し、実験は中断された。
設計の都合上、ゼノフラムにはまともな脱出装置が搭載されていない。
パイロットのゼノスは、文字通り爆発に巻き込まれてしまった。

正直助かる見込みは、あるはずがない。
内部からの爆発は容赦なくコックピットを巻き込んでいるはずだ。
ある程度熱に強いと言われるパイロットスーツを装着していると言えど、所詮気休め程度でしかない。
ほぼ生身に近い状態の人間が、爆発に巻き込まれて生きていることなど、有り得ないはずだった。

……だが、ゼノスは生きた。
半壊状態のゼノフラムで、全身に大火傷を負った状態で気を失っていた。
病院に運ばれたゼノスは、集中治療を受けて一命を取り留める。
それからのゼノスは、尋常ではない回復力を見せつけた。
今では意識をはっきりと取り戻し、全身に負っていはずの火傷も…
…いつの間にかほぼ完治していたのだ。

「……驚いたよ、まさか君が生きているとは思いもしなかったからね」

病室で横たわっているゼノスに対して、フラムがそう呟く。
ゼノスは何も答えずに、黙り込んでいた。

「君の胸、見せてもらったよ。……まさか、そんな身体でパイロットをやっていたとはね」

ゼノスの胸部に巻かれた包帯を、フラムは解いていく。
すると……そこには剥き出しになったエターナルブライトが埋め込まれていた。
その周囲はまるでE．B．Bのようなおぞましい姿に変化していき、徐々に領域は広がりつつある。
……一部分だけ、明らかに人の体ではなかった。

「君の身体、E．B．Bそのものに近い状態だよ、そのコアが破壊されない限り君の身体はエターナルブライトが持つ生体情報を元に再構築される。
だが、尋常ではない再生を繰り返せば、やがて君は完全なE．B．Bへと姿を変えるぞ。……わかっているのか？」

「……それを承知の上に、パイロットをしている」

「何故、私に黙っていた？」

「アンタが知る必要はない」

「君はバカかね？　いくら死なない身体と言えど、コアが無事であ

る保証も……君が人の形を保てる確証は何もないのだぞ？」

「俺は死なない、Ｅ．Ｂ．Ｂになるつもりもない」

間髪入れずに、ゼノスは強く言い切った。

だが、現実には胸部を中心に徐々に異形へと変えている姿が目に移る。

とてもじゃないが、その言葉に説得力の欠片も感じなかった。

「……ゼノフラムの事だがね、私は開発の中止を申し入れたよ」

「爆発の事故の影響か？」

「そうではない、政府のお偉方は課題点がまだまだあるにしろゼノフラムの性能を確かに認めていたよ。

君の腕があったからこそ、ゼノフラムの持つ本来の性能を見せつけることが出来たのだよ……その点は、感謝する」

「ならば、何故だ」

「私はね、正直人の命を軽く考えすぎていたよ。　君が凄腕のパイロットと聞いて、どんな無茶な設計でも君ならばゼノフラムを乗りこなすだろうと考えていた。

だがね……君に情を抱きすぎたのだろうな、あの爆発を見た時……私は絶望したよ、優秀なパイロット……いや、親しき友人を一人失うことに恐怖してしまったのだよ。

私は、意図せずとも君の命を軽んじて……君をただの実験台としか考えていなかったのだよ、そんな自分を私は許せないんだ。

おかげで君が目を覚ますまでの数日間……私はどれだけ自分を呪ったのだろうな……どれだけゼノフラムに恐怖を感じたのだろうな」

普段見せた事のない、寂しそうな表情でフラムはそう語った。
ゼノフラムのコンセプトは対大型Ｅ．Ｂ．Ｂであり、多少無茶をしてでも大火力の武器を搭載しなければならない。
それを運用させるには、パイロットの安全性など考えていては実現できる代物ではなかった

だが、そこでゼノスという男が姿を現した。
彼は無茶な設計である事を承知で、ゼノフラムのテストパイロットを引き受けてくれた。
実績から言ってもパイロットとしての腕は確かではあり、どんな無茶なＨＡでも簡単に乗りこなすだろうと信用していたのだ。
ゼノスを危険な目に逢わせる、と言った自覚は全く感じていない。
ただ、優秀なパイロットがフラムの持つ対大型Ｅ．Ｂ．Ｂの思想を叶えるきっかけとなってくれる。
人命は二の次に考える程、何時しか開発に夢中になっていた。
だが、現実はそうではない。
あの爆発を事故を起こすまで、フラムはゼノスを失うことなんて考えていなかった。

「君が生きて入れくれたことは、喜ばしいよ。　正直私はホッとしている、自らが生み出したＨＡで死人を出さなかったことをな。
だが……それでも、君の身体を知ってしまえば尚更ゼノフラムに乗せるわけにはいかない。　君は、あの機体に乗るべきではないんだ。
……例え命を落とさないとしても、人を辞める事になるぞ」

「俺はゼノフラムに乗る、アンタの夢を叶えてみせる」

「何故だ？　君は死ぬことも、人でなくなることも恐れないというのか？

……冷静に考えたまえ。　所詮ゼノフラムは私の自己満足でしかないのだよ、大型Ｅ．Ｂ．Ｂなんてわざわざ単機で処理する必要はない。
現行のウィッシュ部隊でも、戦艦一隻でもあれば討伐はできる程我々の技術は既に進んでいるのだよ」

「だが、俺はアンタと誓った。　『ゼノフラム』の名に懸けて」

ゼノスの一言で、フラムは思わず言葉を失った。
ゼノフラムは、ゼノスとフラムの契約でもあり絆でもある。
人体の負荷を無視し、限界まで性能を求め続けるＨＡと
死を恐れずに、そのバケモノマシンを乗りこなすパイロット。
その二人がいなければ成立しない、決して途中で降りるのは許さないと誓った事を、律儀に守っているのだ。

だが、それだけではない。
ゼノスはゼノフラムを開発していた時の、まるで子供の用にはしゃいで語るフラムの姿を見てきた。
何度も交わしてきた開発に関する相談、時には度肝を抜かれるような大胆な発想を聞かされることもあった。
始めはただ、興味深い新型の発想に惹かれて乗りこなしてみたいと思っただけかもしれない。
しかし、知らない間にフラムが語る夢はゼノスの夢にもなっていた。
ゼノフラムを必ずメシアへ認めさせ、採用させる。
フラムが望んだ、次期主力機としてメシア全体への活躍を実現させる為に
例え自分の身を犠牲にしようとも、やめる気はなかった。

「君はこうしている間にも、エターナルブライトに身体を蝕まれている。　その浸食をわざわざ早めるような真似を、私はしたくない。

……今は私の夢よりも、君を失わない事の方が大事なのだよ。　何故、それを理解しない？」

「アンタこそ、そう簡単に夢を捨てるのか？」

「君を犠牲にして叶えるほどでは、ないと言っている」

「なら、誓いを破るというのか？」

「私は非道になるつもりはない、ゼノフラムの開発は中止だ」

「……俺はやめない、アンタがやめようとも俺はゼノフラムの開発を続ける」

ゼノスの決意に、迷いはなかった。
だが、フラムはそうではない。
人の命を失うことを恐れて、人を殺しかけた自分の技術を恐れた。
例えゼノスが不死身であっても、他のパイロットが全てゼノスと同じとは限らない。
命の重みを認識した途端、フラムはゼノスを実験台にしようとした自分の非道さに恐れた。
いくら夢を叶えるためとはいえ、『人の犠牲』を得てまで叶えるつもりは、これっぽちも存在しない。
……だからこそ、フラムは開発中止を決意したのだ。

「君は本当に、聞き分けのない男だな。　……勝手にするがいい、君と私の契約もここまでだ。
どうしても君が続けるのであれば、ゼノフラムの名を捨てろ」

「……捨てない」

「……勝手にしろ」

最後にフラムがそう告げて、静かに病室を後にした。
その時のフラムの表情は、はっきりと記憶に残っている。
いつも冷血な表情を見せていた彼女が、酷く悲しい表情を浮かべていた。
それからゼノスは、一度もフラムと顔を合わせる事はなかった。
メシアではＯＨＡの開発の中止が正式に決定されたが、半壊したゼノフラムはゼノスが引き取った。
例えフラムが諦めようとも、ゼノスは諦めない。
ゼノフラムで数々の大型Ｅ．Ｂ．Ｂを討伐し、フラムが再び夢を取り戻すことを願った――

あれからフラムには、一度も顔を合わせていない。
もう随分前の事なのだが、あの時の事がまるで昨日の事のように思えてくる。
ゼノフラムは、一番の問題となった反エネルギー圧縮砲を取り除いてゼノスが設計をし直した。
以前に、フラムが考案した設計よりもスペック自体は落としているがそれでも数々の戦果を上げてきた。
だが、ゼノフラムは再び、大破してしまった。
Ｇ３を破壊する為と言えど、その犠牲はかなり大きい。

また、夢から遠ざかってしまった。
……しかし、ゼノスは諦めつもりはない。
何とかして再びゼノフラムを復活させ、戦い続けると誓った。

ガチャリ
突如、ノック音もなしに病室の扉が開く音がした。
何かと思い扉へ目を向けると、そこには懐かしい姿見える。
……白衣を身に纏った、フラムの姿があった。

「まさか、君との再会がまた病室になるとはな」

「……フラムか」

「君の胸を、見せたまえ」

フラムは椅子へと腰を掛けて、ゼノスにそう告げた。
あの時と同じように胸部に巻かれた包帯を、ゼノスは解く。
……ゼノスの身体は以前よりも、遥かに浸食されていた。

「……君は後いつまで、人間のままでいられるのかね」

「さあな、少なくとも……俺は死ぬまでE・B・Bになるつもりはない」

「相変わらず無茶を続けているというのに、よくもまぁ人の形を保っていられるものだ。
しかし、驚いたぞ。まさか君が本当に、あの名を捨てずに使い続けているとはな」

「アンタとの誓いだ、当然だろう」

「君は本当に律儀な男だ、その誓いなぞ私が既に破っているだろうに」

「だが、夢は潰えていない」

「……全く変わっていないな、君は」

「アンタこそな」

5年前に、互いが相容れぬまま別れたというのに、二人はその事を気にしていない。
それどころは、ゼノスの元気そうな姿を見てフラムは笑っていた。

「ただ君、ゼノフラムを壊したそうだな。　全く、君は本当にＨＡブレイカーだな」

「Ｇ３を破壊させる為だ、やむを得ない」

「もう少し丁寧に扱ったらどうだね、君のゼノフラムでの戦いは映像データで拝見させてもらったがあまりにも無茶すぎるぞ」

「元はと言えばアンタの設計のせいだ、嫌でも無茶をせざるを得ない」

「……やれやれ、それを言われると私は反論できないではないか」

そう呟くとフラムは立ち上がった。

「さて、君の元気そうな姿が見えたし……失礼させてもらうよ」

「そうか、見舞いに感謝する」

「……それと、一応言っておくがね。　私はゼノフラムの開発を中止にした身だ、大破したゼノフラムの改修を手伝うつもりはない」

「わかっている、アンタの協力を得ずともゼノフラムは復活するさ」

「後ね、無駄だと思うが聞いておこう。　……ゼノフラムから、降りる気はないのか？」

「当然だ、俺は降りない」

「やはりそうか、なら失礼するよ」

それを告げる為に病室に訪れたのか、フラムは数分もしないうちに病室を立ち去っていく。

あの後ろ姿は、５年前に別れた時と酷似している。

ゼノスの身を、心配しているのだろう。

例え不死身に近い身体だとしても、Ｅ．Ｂ．Ｂへと変化しつつある身体で戦い続けているのだから。

「……アンタは本当に、夢を捨てたのか？」

既にいないフラムに対して、ゼノスはそう呟いた。

カツンカツン、と乾いた音を響かせながらフラムは廊下を歩んでいた。
ゼノスはあの時以来、本当にゼノフラムで戦い続けている。
開発資金も出ていなかったというのに、一体どうやってあの機体の開発を続けたのか。
……フラム自らが言い出した『契約』を、律儀に守り続けているのには正直驚かされた。
本来であれば、今更そんなものを守る必要性はない。
ゼノフラムに乗り続ける理由だってないはずなのに、ゼノスはそれでも戦い続けていた。
その姿を見る度に、フラムからはモヤモヤとした気持ちが晴れずに複雑な心境を抱く。
本当であれば、ゼノフラムからは降りてほしいし、あの機体を破棄してほしいというのが願いだ。
だが、ゼノスは本気でゼノフラムへ乗り続けている。
あの男の事だ、今更素直に降りてくれるはずもなかった。

「あーっ！！　やぁーーっと見つけましたよぉーっ！！」

すると、何処からともなく女性の声が聞こえた。
振り向くとそこには、全力で駆け出してくるナース服の姿が目に入る。

「フラム博士ですよね、おはようございまーすっ！！」

「あ、ああ……そうだが」

突如目の前に現れた少女は、フラムにとっては面識がなかった。
見た感じここの病室で働いている看護婦に見える。

「私、フリーアイゼンの医療班を務めてるシラナギ・ソノって言いますっ！
あ、パイロットの健康管理もメンタルケアも全部私がしてるんですよー、凄く大変なんですからねっ！？」

「……その医療班が、私に何の用だ？」

「よくぞ聞いてくれましたーっ！　実はフラム博士にお願いがあるんです、聞いてくれますかっ！？」

「は、話だけは聞こう」

かなり強引な形で話を進められて、流石のフラムでもシラナギ相手ではたじたじとなっていた。
しかし、医療班の者が技術者のフラムに何を願うというのだろうか。

「フラム博士はゼノフラムの開発者なんですよね？」

「ああ、そうだ」

「なら、ちゃちゃっとゼノフラム直しちゃってくださいっ！　もう、あのバカゼノスったらゼノフラム壊しちゃってるんですよー？
修理には莫大な費用が掛かっちゃう話ですし、今フリーアイゼン内でも揉めてるんです。　フラム博士の名を使えば、きっと何とかできるんじゃないかって思ったんですっ！」

シラナギの言葉を聞いて、思わず開いた口がふさがらなかった。
まさかいきなり現れてゼノフラムの修復をお願いされるとは。
おまけに費用まで当てにされている。

「……君、あのマシンは既にメシア所有のＨＡではないぞ。開発費用から修理費が下りる事はない、それに私はあの――」

「知ってます、ゼノスはいつも語っていましたよ。ゼノフラムに乗っているのはある人の願いを叶えるためだって。ゼノフラムってすごいんですよーいつもいつもフリーアイゼンのピンチを救ってくれました。あ、最近は晶くんのι・ブレードがもっと凄くて隠れがちなんですけどね、ちょっと嫉妬してるかもしれませんっ！」

「だがね、ゼノスの状態をわかっているのかね？　彼は――」

「そんなの関係ないんです、ゼノスは命懸けで乗り続けてるんですよっ！？　貴方の夢の為に、ずっと戦ってるんですっ！　なのにどうして、夢を諦めてるんですか？　叶えましょうよ、ゼノスはずっと頑張ってきているんですよ？」

「ひ、人の話を聞きたまえ……それでも私は――」

「貴方が諦めていないって、ゼノスは信じてるんですよ？　お願いです、協力してくださいっ！　あ、私凄くしつこいですよ？　貴方がうんって言うまでずっと付き纏うつもりですからっ！！」

何ともまぁ迷惑な話だと、思わずフラムはため息をついた。ゼノスも聞き分けのない男ではあるが、今目の前にいるシラナギという者はそれ以上だ。

だが、シラナギの言葉は何処かモヤモヤしたフラムの心に響く。

フラムはとうに夢を捨て、誓いを破った。

ゼノフラムに関しては、ゼノスが勝手にやっている事。
もう、自分には関係のない話だ。

そんな言葉でいつも、自分を説得していたが……何処か、違う。
時々、自分の言葉に疑問を感じる事もあった。
途端に、フラムの言葉が詰まってしまった。

「……知らん、勝手にしろ」

フラムはそう言い残すと、シラナギを無視して再び歩みだした。
だが、シラナギは追ってくる様子はない。
てっきりしつこいぐらい追い続けてくるものだと思っていたが。

「ゼノフラムの復活は、私やゼノスだけの願いじゃないんですよー？　フリーアイゼン、皆の願いなんですからねっ！　そこ、重要ですからっ！！」

シラナギは、最後にフラムにそう告げた。
願いも何も、関係ない。
……それで、ゼノスの身体が蝕まれて続けるのを許していいはずがない。
恐らく、知らないのだ。
ゼノスの事だ、あの体のを事を……隠しているのだろう。
フラムだって、爆発事故が起きる前までは全く知らなかったのだから。

フラムは自室へと戻った。
山積みとなった仕事を全て片づけなければならない。
目の前に積まれた資料の山を目にすると、思わずため息をついた。

「……私の夢……ゼノフラム、か」

今となってはその名の意味は、既にないようなもの。
それをゼノスは守り続けている。
とうに破られた誓いと絆が込められた名を、使い続けていた。
夢を、本当に諦めたのか。
その問いに答えるのであれば――

「諦めるはず、ないだろう」

5年間、合間合間に見直し続けたゼノフラムの設計書を、フラムは広げた。
決してゼノフラムの開発を、完全に諦めたわけではない。
だが、今の技術力では実現するには程遠かった。
5年前に比べれば、比較的に安定感も増して……あの悲劇を引き起こした『反エネルギー圧縮砲』だって改善されている。
しかし、それでも課題点はたくさんある。
この設計書をまだ世に出すわけにはいかない。

……あの時、もっと強くゼノスを止めるべきだった。
ゼノスは本当にゼノフラムに乗り続け、開発を続けていたのだ。
あの言葉に嘘偽りはなかった、わかっていた事ではあったが……今

更それを痛感する。

フラムは夢を捨てきれていない、だがそれ以上に……人の命を失う恐怖が勝り
更に非人道的な行為を行おうとしていた自分にも、恐怖していた。

「……本当に夢を諦めきれたら、もっと楽ができるだろうに」

フラムはため息をついた。

ガチャリ
その時、自室の扉が開く音がした。
普段こんなところに足を運ぶ人物はいないはずだ。
しかし、誰であろうと今は相手にする気分にはなれない。

「誰だ、私は今忙しい。　後にしてくれないか」

「俺だ、悪いが少しだけ時間をくれ。　すぐに済む」

「君……？」

その声を聞き、すぐにゼノスだと分かった。
何故、わざわざこんなところに？
フラムは振り返った。

「まだ絶対安静じゃなかったのかね、一体何のようだ？」

「……アンタに伝えてない事があるんでな。　こっそりと病室を抜け出してきた」

「何だね、簡潔に話したまえ」

「俺は、アンタが非道な人間だとは思っていない。　この身体が不死身だからと言ってアンタの機体に搭乗したわけではない。実験台になることを承知したわけでもない……アンタの技術力を信じた。　あの時は、結果的に大事故に繋がったが……それでも俺は、アンタの腕を信じている」

フラムは表情を、ハッとさせた。
ゼノスの一言は、まるで今の自分の心境を的確に見抜いているような言葉だ。
……今更のように、それを告げるのか、と思わずフラムは笑った。

「……それだけだ、仕事の邪魔をしたな」

それだけ告げると、ゼノスは部屋から立ち去ろうとする。

「だが、正直私は君の負荷を全く考慮していなかった。　どうして、私の技術を信じれると言い切れるんだ？」

「あの時の爆発、凄まじいエネルギーが発生していたというのに最小限に抑えられていた。
普通ならあの辺り一面が吹き飛ばされていてもおかしくなかっただろう……それだけだ」

「おかしなことを言うな、君でなければ確実に即死だったのだぞ。
わかっているのかね？」

「死人は出ていないさ」

「……やれやれ、君の屁理屈には呆れるよ」

フラムはゼノスの言葉に、思わず呆れてしまった。
何故、あれだけ危険な目に逢ったというのに、技術を信じるだの言うのか。
それだけではない、ゼノスは決してフラムを責める事はなかったのだ。
思えばあの時も、自分の身よりもゼノフラムの開発を優先していた。

「君はどうしても、ゼノフラムで戦いたい……そうなのだな？」

「そうだ、アンタが何を言おうと……アンタの夢を終わらせない」

「……仕方がない奴だ」

フラムは席を立ちあがり、目の前に広げていた紙の束を手にする。
そして、ゼノスに静かに渡した。

「正直、私は夢を捨てきれなかったのだよ。　実は、こっそりと新たな設計を進めていた。
……本当は何度も捨てようと思ったさ、だけどそう簡単に捨てられるものじゃない……夢とは、そういうものなのかもしれないな」

「……フラム、もう一度誓え。　お前が夢を諦めていないのなら、それを俺に証明しろ」

「なるほど、私の力を借りたい……と？」

「……ああ」

ゼノスは力強く頷く。
正直、フラムの中にはまだ迷いが生じている。
ゼノスが何と言おうと、あの事件はフラムの暴走が招いた結果。
技術者として、人命を無視した非人道的なＨＡ設計の結末であった。
その事実は決して変わりもしないし、フラムは背負い続けなければならない。
例え死者がでなかったとしても、大切な友人を危険な目に逢わせてしまったのだから。
だけど、それでもゼノスは乗り続けた。
ゼノフラムの名に込めた二人の契約という名の絆を、律儀に守り続けていた。

「いいだろう、私が君に『真のゼノフラム』を……提供して見せよう」

「……ああ、頼んだぞ」

ゼノスは、フラムと固い握手を交わした。
一度途切れてしまった絆が、再び固く結ばれた。
新たなゼノフラムに、変わらない願いと夢を託して
二人はまた同じ道を、共に歩んでいくことを誓った。

第11話　空への願い　？

第7支部の司令室。
普段はソルセブンの艦長を務めるイリュードが私室として使っている場所である。
そんな場所に、ゲンは訪れていた。

ここへ訪れた理由は他でもない、昔からの友人『アッシュベル・ランダー』と連絡を取る為だ。
彼の神出鬼没はメシア内でも有名であり、何時何処で何をしているのかは、本人しか知らない。
そんな彼と連絡を取る為には、司令クラスのみが使用許可が降りる特別な回線を使う必要があった。
その回線を使えば、彼個人の端末へと繋げる事が可能ではあるが、確実性はない。
彼は気まぐれであり、気が向くときしか通信に応じないのだ。
自分の気が向いた時に一方的に連絡をよこし、用件だけを的確に伝えて再びその身を闇へ隠す。
アッシュベル・ランダーとは、そんな人物なのだ。

だが、それでもゲンはアッシュベルに訪ねなければならないことがあった。
その為に、イリュードの許可を得て一人でこの場に訪れていた。
エターナルブライトを使った人体実験。
もし、人体実験が真実であり、アッシュベルが首謀者であったとしたら……友として、それを許すわけにはいかない。
ゲンは、アッシュベルへ通信を繋いだ。

『……誰かね』

アッシュベルと、繋がった。
まさか本当に繋がるとは……思わず、黙り込んでしまった。

「私だ、ゲン・マツキだ」

『ふむ、松木君か。　君から私に通信とは珍しいな。　例のフリーアイゼン襲撃と、関係あるのかね？』

「……よく聞け、アッシュベル。　私がこれから話すことは、全て確証がない事だ。
だが、この話はアヴェンジャーに捕らわれていたι・ブレードのパイロットの証言である」

『やはり、ιのパイロットは生きていたのだな。　いいだろう、その話を聞かせたまえ』

以前にアッシュベルと会話を交わした時とは、違った空気が圧し掛かる。
尋常ではない緊迫感がゲンに襲い掛かり、額からは汗が垂れだした。
正直かつての友を疑うのは心苦しく感じる、だが何処かでアッシュベルならば……やりかねない、という考えが過ぎる。
友を信じたい反面、その可能性を全く否定できない自分の中の矛盾に、苦しんだ。
しかし、その答えを確認しなければならない。
アヴェンジャーの意図を知る為にも、友の潔白を証明する為にも――

「……アヴェンジャーには、エターナルブライトによる人体実験の被害者が存在すると聞いた。

その者は右腕をE．B．Bのような異形へと変化させ、正真正銘の異形へと変化しつつあるという」

『エターナルブライトの、人体実験？　……なるほど、興味深いな』

その一言を聞いた瞬間、ゲンの背筋からゾクリと寒気が走る。
やはり、昔からよく知るアッシュベルの通りの反応だった。
この男であれば、例えエターナルブライトの人体実験が行われたとしても、我々と同じような反応をしない。
むしろ、その実験データに興味を持つだろう……と。

「他にも、病気で苦しんでいた少女の全身がE．B．Bへと変化した例もあると聞く。
……正直、私には信じがたい話だよ。　エターナルブライトがE．B．Bを生み出すことは誰でも知っている。
そんなものを人に使ってしまえば、どんな結果が導き出されるか……簡単に想像できるはずだ」

『なるほど、だが私はそう思わんよ。　人間とは何処か特別な存在であってね、最も『神』に近い存在なのだよ。
だからこそ、E．B．Bに浸食されたこの世界でも……生き残る術をすぐに生み出すし、人類は滅びる事はない……全く持って、素晴らしい生命力だと思わないかね？』

「……アッシュベル、単刀直入に尋ねる。　お前は人体実験に関与していたのか？」

今までの反応を見る限り、人体実験について知った素振りを見せてはいない。
だが、裏の見えないアッシュベルという男ならば、とぼけている可

能性も十分にある。
やはり、アッシュベルは……ゲンは、心の中で覚悟を決めなければならないと悟った。

『ふむ？　私が関与していた？　何故、そんな事を尋ねるのかね』

「……アヴェンジャーは、お前個人に復讐する為に結成された組織なのだ。
中には、人体実験の実験台にされた人物も存在するという。……恐らく、被害者が集って結成されたと推測はできる」

『なるほど、それで君はそんな事を』

正直、晶から聞かされた話はそう簡単に信じていい内容ではない。
たった一個人に復讐する為に、何故あそこまで大きな組織が必要とされるのか？
メシアの兵器を奪い続ける必要性が、何処に存在するのか？
下手すれば、こんな話をした時点でアッシュベルに笑われて聞き流される可能性も十分にあった。

『君の話……ぱっと聞く限りではあまりにも胡散臭い故に、信じ難い話ではある。
だが、その話に嘘は含まれていない……私に復讐する為の組織というのは、事実のようだな』

「どういうことだ？」

『この話は、ι・ブレードのパイロット……未乃　晶が聞いた話である事を忘れてはいけない。
恐らくアヴェンジャーはι・ブレードのパイロットを自らの戦力に

しようと考えていたはずだ。
それにはまず、自分達の考えに賛同させる必要がある。　故に、真実を語ったのだろうと考えたよ』

「……しかし、その話が晶を誘い込む為の作り話の可能性もある。
そもそも、エターナルブライトによる人体実験の話も、嘘なのかもしれん」

『嘘ならもっとマシな嘘をつきたまえ、というのが私の感想だよ。
もし、それが作り話だとしたら……それは彼の性格を何も把握していない愚か者が考えたのだろうな。
私が知る『未乃　晶』は……復讐に力を貸すような人物ではない、もっと正当な理由でなければ……納得するはずがないだろう？
仮にも、アヴェンジャーは故郷をその手で潰しているのだからな』

何時になく真剣に語るアッシュベルの言葉に、ゲンは思わず頷いた。
確かに敵もパイロットである晶を全く知らないはずはない。
それにアヴェンジャーには晶の父親だっていたはずだ。

『ならば、何故包み隠さず真実を告げたのか？　それは、彼らに未乃　晶がアヴェンジャーに従うという確証があったからだろう。
最初から騙すつもりはなかった、一度捕えてしまえばｉは自分達の物になると考えた。　だが、思い通りに行かなかった……と、私は推測している。
その理由として考えられるのが……例えば『人質』、あの者の大切な者が敵組織に捕らわれていたら嫌でも従わざるを得ないだろう。
だが、これは違う。　何故ならば、この方法を使えば自分達の考えに賛同させる必要はないからなのだよ。　恐らく彼らは、賛同してほしかったのだよ、自分達の目的に。
……もう一つの可能性としては、敵組織に信用できる人物が所属し

ていた。　例えばそれが恩師であったり、或いは友人であったりすれば……少なくとも迷いは生じるだろう』

「……その通りだ、アヴェンジャーには『未乃　健三』が存在する」

『健三、だと？』

その時、僅かにだがアッシュベルが動揺を見せた。
流石にアッシュベルでも、驚きが隠せなかったのだろう。
メシア内での有能な科学者の一人が、アヴェンジャー内で活動を続けていたことに。

『それはそうと、本題は私が関与しているかどうかの質問、だったな』

「……ああ」

いよいよ、アッシュベルの口から真実が語られようというのか。
音声のみの通信である為、アッシュベルが今どのような顔をしているのかはわからない。
だが、少なくともこの件について真剣に答えてくれているのは事実だ。
……友を、信じたい。
決して疑いたくない、という思いが強まった。

『先に言っておこう……正直なところ、私はエターナルブライトに関する人体実験には非常に興味を沸かせたよ。
エターナルブライトが発見された当初の私の言葉を……覚えているだろう。　あれは正に、人を『進化』へ導く新たな可能性なのだよ』

アッシュベルの語りに、ゲンは黙って耳を傾ける。
どのような事を語られようとも、決して動揺してはいけない。
もし、友人が本当に人の道を外れていたら、それを正すのはゲンの役目だ。
……今は、そのような真実を聞かされたくないと願うだけだった。

『信じてもらえるかわからんがね、私は……非道にはなりきれなかった。　私は一度だけ、道徳を捨て外道になる道を選んだ。
……だが、直前になって私は恐怖したのだよ。　自分の好奇心を抑えきれずに、非人道的な行為を行おうとしている自分に、な』

「……アッシュベル」

『いや、もしかすると私は既に外道なのかもしれぬな。　今まで私が行ってきた行為には、他人を不幸に陥れる結果もたくさんあった。
……切っ掛けは何にしろ、アヴェンジャーを生み出してしまったのは私なのかもしれん』

友が語るその言葉には、とても重みがあって……酷く悲しかった。
やはり、アッシュベルは非道になれる男ではない。
何故、友を疑ってしまったのか。
アッシュベルの優しさは、誰よりも理解できていたはずなのに。
どうして真実を知る事に恐怖してしまったのかと、ゲンは痛感した。

「……すまない、私は友であるお前を疑ってしまった。　何故、信じてやれなかったんだろうな」

『いや、君は正しいのだよ。　客観的に見れば私は真っ先に疑われやすい、裏で何をしているかわからないと言われているのだからな。
……私を強く恨む人物には、複数人心当たりがある。　だが、アヴ

エンジャーの目的が何も『私への復讐』だけとは……限らん』

「どういうことだ？　さっきは真実であると言っていただろう？」

『そうだ、彼らは真実を語っていると考えていい。　だが、それを結論とするには早すぎる。

……やはり、私への復讐という一言だけで片づけられる問題ではないのだよ。

恐らく、エターナルブライトの人体実験は『私以外』の者により、今でも継続的に行われているはずだ。

……もし、その人体実験にメシアが関与していたとすれば？』

「……まさか、そんなはずはない」

『可能性の一つだよ、私もそれが真実とは思っていない。　だが、それが真実であれば……私は内部から『責任』を全て押し付けられる可能性もあるわけだ。

……彼らは、その可能性も考えて『メシア』と対抗する為の戦力を集めているのではないかね？』

ゲンはアッシュベルのその言葉を聞き、思わず言葉が詰まる。

……だが、メシアから奪った兵器でメシアに勝つことは不可能だ。アヴェンジャーとメシアでは規模も戦力も違いすぎる、どう考えても勝てるはずがない。

「それが真実だとすれば、彼らは相当な力を持っていると考えなければならない。　……私には、想像もつかないがな。

それにお前らしくない見落としがある……もし、メシア内部でお前に責任を押し付けようと企む者がいれば……

それはメシア内で『アヴェンジャー』の目的を完全に知った者がい

る、ということになるぞ」

『その通りだよ、未乃　健三の例を忘れたかね。　メシア内には既に……アヴェンジャーと繋がる者が含まれているのだよ。彼らは私に強い恨みを持つ集団だ、私を消すには内部から混乱させる……有り得ない話ではない』

「今まで起こしたテロ行為について説明がつかん、例えメシア全体と戦うことを想定したとしても……お前に復讐する事が目的であれば、わざわざメシア全体と戦うよりも……継続してメシア内部を混乱させた方が遥かに安全だ」

『彼らの真意は、私にはわからぬよ。　私に言えることはただ一つ……恐らく彼らは、『メシア』すらも恨んでいる可能性がある、ということだよ』

その一言を聞き、ゲンは思わず言葉を失った。
人類を守る為の組織が、どうして同じ人間に恨まれる必要があるのか。
エターナルブライトの人体実験は……一体誰の手によって、行われた？
新たな疑問が数々生まれる中、ただ一つだけ明らかになった事がある。
……アッシュベルは、やはりゲンの知るアッシュベルだった。
彼が人体実験に関与しているはずがない、彼は潔白だった事が、証明できたはずだ。
それだけでも、今は喜ぶべきだろう……と、ゲンは胸を撫で下ろした。

シミュレーター室。
晶はゼノスに言われるがままに、明日に備えてシミュレーターで訓練をしていた。
フリーアイゼンでパイロットと採用されて以来、シミュレーターを動かす数は減っていた。
学生の時のようなスコアを競うような試験は行っていない。
シリアの訓練メニューは、特定の場面を想定したパターンを数百パターン、それに沿った対応を確実にこなしていくといった内容だ。
フリーアイゼン内のシミュレーターにはシリアがインプットしたパターンが存在していたが、ここには存在しない。
晶自身がパターンをインプットする事もできるが、やはりシリアにインプットしてもらった方が実践向けだろう、と思い留まった。

散々悩んだ挙句……久しぶりに晶は試験形式でシミュレーターを動かした。
学生のころは、必死にスコアを伸ばそうと敵を倒すことに夢中になっていた。
だが、今回は違う。　生き残る事を中心に考え、敵を落とせるときに落とす。
場面場面で冷静に、丁寧に動かす事だけを考えた。

「……嘘、だろ？」

約１０分間、シミュレーターでの試験を終えた晶は目の前にスコアに驚きを隠せなかった。

まず、いつも途中で中断されていた試験を最後まで継続できた。
そして、目の前に映し出されたスコアは……『３２０００』。
……ついに、赤点ラインを超えていたのだ。
いくら努力しても、全く届かなかったスコア。
ι・ブレードの危険察知を生かした実戦での戦いと、シリアの適切な指導のおかげ……と考えるべきなのか。
まだまだあの時のクラスメイト達には及ばないが、それでもスコアは確実に腕を上げている事の証明に繋がった。

「へぇ～、試験形式なんて今時珍しいじゃない」

「うわぁっ！？」

突如、背後から声をかけられた晶は思わず声をあげてしまった。
後ろを振り向くと、そこには金髪の女性がいた。

「キャッ……そんなに驚かなくてもいいじゃない」

「あ、貴方は？」

「私はスカイウィッシュ部隊長のラティア・レイオンよ、ラティアでいいわ。　貴方は晶くんね？」

「は、はい。　未乃　晶です」

スカイウィッシュ部隊といえば、確かソルセブンの主力部隊であるはず。
新型機でフリーアイゼンを救ったエースパイロットとは彼女の事なのだろう。

「懐かしいわねー私も昔夢中になってスコアあげてたわよ。　どう、私と勝負してみる？」

「え、遠慮しておきます……」

「あら、そう？　残念ね」

しかし、ラティアという女性を見ていると何処となく顔立ちがシリアと似ている。

思わず晶は、ジロジロとラティアの事を見ていた。

……『ラティア・レイオン』という名を頭の中で復唱すると、その疑問は早くも解かれた。

「……そんなにジロジロ見ないでくれる？　ちょっと恥ずかしいじゃない」

「え？　い、いやそんなつもりはっ！」

「もう、若い男の子ってどうしてこうなのかしらね」

「いや、そうじゃなくて……そ、それよりもラティアさんってもしかすると……シリアのお姉さんですか？」

このまま変に言い訳するよりも話題をすり替えるべきだろう、と晶は強引に尋ねた。

「あの子、元気にしてる？」

すると、ラティアは酷く悲しそうな表情を浮かべる。

シリアの足の事を、知っているのだろう。

「……すみません、俺がもっと早く辿り着いていれば」

「貴方のせいじゃないわ。　パイロットをしているんだもの、例え命を落とさなくても無傷でいられることはないんだから」

「……シリアの足、どうにかできないんでしょうか。　俺、シリアには凄く世話になったんです……なのに、どうしてシリアが……」

「悲しんでくれるのね、きっとその気持ちだけでも……シリアは凄く嬉しいと思うわ」

ラティアにそんな事を伝えても、どうにもならないのはわかっていた。

だが、どうしても……晶は現状に納得ができずにいる。

何か方法があるんじゃないかと、心の何処かで願っているが現実はそうではない、シリアはもう……パイロットに戻れない体なのだ。

「私と逢った事、シリアには黙っていてね」

「どうしてですか？」

「……私、あの子に恨まれてるの。　だから、あの子には逢えないし……ここにいたことも、知られちゃいけない」

ラティアは静かに、そう言った。

前にシリアと話した時も確か、姉が嫌いだとかそんな事を言っていた事を思い出す。

しかし、血が繋がっている実の姉妹だというのに……いつまでもこ

んな関係でいるのは寂しい事じゃないか、と晶は思う。
ラティアの悲しそうな表情を見ると、尚更その思いが強まった。

「ラティアさんは、シリアに逢いたいんですよね。……俺、協力しますよ。
事情は知らないし、根拠もないけど……シリアだって、本気でラティアさんを恨んでなんかいないと思うんだ」

「……うふふ、ありがとうね。でも、いいのよ。これはあの子と私の問題……私が、解決しなければならない問題なのよ」

ラティアは微笑みながら、そう返した。
それ以上、晶から言葉は出ない。
……事情を知らない以上、下手に口を出すことに戸惑ったのだ。

「貴方と会話できて楽しかったわ、明日は私の代わりによろしく頼むわよ」

「か、代わり？」

「あら、聞いていないの？　私は明日、新型のテストがあるから支部に残るのよ。　スカイウィッシュ部隊は貴方に任せる事になってるわ」

「ま、任せるって……ま、ままま待ってくださいっ！？」

サラッととんでもない事を任された晶は、思わず混乱してラティアを呼び止めた。
明日のE・B・B討伐に参加するとは聞いていたが、まさか部隊を任されるといった話は聞いていない。

まだ新人の身である晶にとっては、あまりにも重すぎる内容だった。

「そんなに慌てなくてもいいのよ、何も貴方が全て指揮するって事じゃないの。　ただ、ιで先陣を切って……みんなを引っ張ってほしいだけだから。
私、ちょっと貴方には期待しているのよ？」

「お、俺が引っ張るんですか？」

「今となってはフリーアイゼンのエースを象徴するιですもの。……きっと士気だって上がってくれるはずよ。　頑張ってね、晶くん」

晶がポカーンと口を開けていると、ラティアは微笑みながらシミュレーター室の外へと退室していく。
……せめて、失敗しないように念入りに訓練をしておこう。
明日の不安を膨れ上げさせながらも、晶は黙々とシミュレーターのデータインプットをしていくのであった――

第7支部の医務室にて、Ｄｒミケイルの姿があった。
フリーアイゼンが改修中、彼は第7支部でしばらく医師として活動している。
Ｅ．Ｂ．Ｂ討伐時に負傷を負った兵士の手当や診察を中心に、多忙な毎日を送り続けていた。
元々医務機関では人不足だったこともあり、最近ではパイロットが増加傾向にありつつ、Ｅ．Ｂ．Ｂとの戦いも激しさを増している。
更にアヴェンジャー等の襲撃にも対応している影響で、日々怪我人が増加傾向にあったのだ。
ようやく今日の分が全て終わり、Ｄｒミケイルは息をつく。
そんな時、バタバタと慌しい足音と共にバターンと扉が開かれた。

「あ、見つけましたよーおっさん」

「……君、何度も言うがね、いい加減私をおっさん呼ばわりするのは止めないか？」

足音だけでも想像がついたが、やはりシラナギであった。
もっと静かに入ってこれないのかと、思わずため息をついてしまう。

「おっさんはおっさんですよー、今更何を言うんです？　それと、頼まれていたものちゃーんと受け取ってきましたよー。
全く、私が直々に持ってきてあげたんですから感謝してくださいよっ！」

「君ねぇ……少しは私の助手ってことを自覚できないのかね。　大

体今日も仕事をサボッて遊んでいただろう？
前々から、姿を消してはフラフラと遊んだ挙句私の頼みごとを全てすっぽかしたりと――」

「失礼ですねー、私だってちゃんとやってますよっ！　今日だって、この小包怪しいおっさんから受け取ってきたんですから」

口をとがらせながらシラナギが言葉を返すと、Ｄｒミケイルは呆れて言葉を失った。
だが、シラナギも空気は読める。　仮にも患者の命が関わっている仕事なのだから、急患が訪れた場合などは迅速に対応してくれる事も多かった。
……いつもそうであれば非常に助かるのだが、と結局はため息をついてしまう。

「とにかく、それを渡したまえ」

「しょうがないですねー、それにしても中身が秘密ってどういうことなんです？　教えてくれてもいいじゃないですかー」

「ならん、言っておくがこの事は決して誰にも言うんじゃないぞ」

「中身教えてくれないと、皆に『先生が大人のおもちゃを大量注文してましたよー』って大声でわめき散らしますからねっ！」

「……わかったからその口を閉じてくれ。　全く、君に頼んだ私がバカだったよ」

「それで、何なんですその中身？」

何故かシラナギは目をキラキラとさせながらミケイルに尋ねる。
一体どんなものを想像しているというのか。

「現在では入手困難と言われてる薬を裏ルートから手にしてな。本当は禁じられているんだが、どうしても必要だったんだ」

「ほえー……薬ですか？　面白くないですね……残念です」

「うむ、わかったのであれば立ち去りなさい。　後、くれぐれも内密にするんだぞ。　でないと、私は君を――」

「ふふーん、私は口が固い女の子、なんですよ。　例えおっさんとの約束でも、しっかり秘密を守りまーすっ！」

「……ならいい、下がれ」

「はいはーい、それじゃ先生、頑張ってくださいねー」

シラナギはニコニコとしながら手を振って、医務室を後にする。
……最後だけ、何故かおっさんとではなく先生と呼んでくれていたが。
どーせ意味はないだろう、と深く考えなかった。

「まぁいい、監視ならつけている。　少しでも不審な動きを取れば、その時は――」

Ｄｒミケイルがニヤリと笑みを浮かべ、小包の中身を確認する。
その中には……紫色に輝く鉱石があった。
――エターナルブライトだ。

現在ではメシアにて厳重に管理されている、Ｅ．Ｂ．Ｂを生み出した元凶。
そして、ＨＡの動力源ともなる使い方次第で、その役割を変える不思議な鉱石……。
メシア所属と言えど、医療機関に属するＤｒミケイルが……手にすることができないはずの代物だ。
上層部の許可なくエターナルブライトを使用する事は、メシアでは禁じられている。
そう、だからこそＤｒミケイルは……誰にも知られるわけにはいかなかった。
ある者の目的の為に、これを使ってやらなければならないことがあるのだから――

「さて、準備を進めようか」

Ｄｒミケイルは怪しく微笑んだ。
その表情はまるで、狂気に満ちた者のように見えた――

第7支部の休憩所にて、ラティアの姿があった。
何処か寂しそうな表情を見せて、一人でポツンと座っている。
もう何年も顔を合わせていない妹……シリアについて、考えていた。
ラティアはＨＡに憧れて、親の反対を押し切って強引に出て行った。

シリアには人類を絶対に守って見せる、だとか大きなことを抜かしていた事を覚えている。
その時のシリアの目は、輝いていた。

シリアは唯一、ラティアのパイロットへの道を賛成してくれたのだ。
シリアにＨＡの事を語る時は、いつも一緒に空を見上げていた。
当時は、飛行機能を持ったＨＡは何一つ存在しない。
始めは必要性が感じられていなかったが、対大型Ｅ．Ｂ．Ｂへ向けてや、飛行型のＥ．Ｂ．Ｂが確認されてから徐々にその必要性が認められてきた。
研究段階にあった飛行型ＨＡについてシリアに語ってあげると、凄く楽しそうな顔をしてくれた。

『お姉ちゃんがパイロットになったら、このでぇーっかい空をＨＡで駆け抜けるんだよね？』

『うふふ、そうね。　もし、空を飛べるようになったら……駆け抜けてみたいわね、きっと気持ちいいわよ』

『ねぇねぇ、もしお姉ちゃんがパイロットになって、私がバケモノに襲われた時は……空から助けに来てくれる？』

『勿論よ、私の家族を狙う悪い奴は皆お姉ちゃんがやっつけてあげる』

『約束だよ、絶対に……助けに来てよ？』

『当たり前よ、何の為にパイロットやると思っているの？』

『えへへ、お姉ちゃん流石っ！』

当時の会話は、今でも鮮明に思い出せる。
その記憶がはっきりと残っているからこそ……顔を合わせるのが辛かった。

「悩んでいるようだな、ラティア」

「……わかるかしら？」

ふと、姿を現したのはイリュードだった。
イリュードとラティアは、同期であり昔から行動を共にしていたことが多い。
当時は二人とも優秀なパイロットであったが、ある日を境にイリュードはソルセブンの艦長へと就任した。
立場は思いっきり変わってしまった今でも、二人の絆に変わりはない。

「その顔は、妹の事か」

「貴方には隠し事できないわね」

「……奢りだ、受け取れ」

イリュードは片手に持っていた缶コーヒーをラティアに渡して隣へ座る。
ありがとう、とラティアは一言告げた。

「そんなに怖いのか、妹と顔を合わせるのが」

「……そう、ね。　私、怖いのかもしれない。　あの子が私を恨ん

でるのが、わかってしまったあの時から。
今逢えば、きっと拒絶される。……わかってしまっているからこそ、怖いのよ」

「だが、いつまでも目を背け続ける訳にもいかん。……一度ちゃんと、顔ぐらい合わせてやれ。実の姉を、本当に恨む事なんでできないだろう？」

「でも――」

「俺が一緒に行ってやる……だから、来い」

イリュードは静かに、手を差し伸べた。
正直、シリアと再開する事は怖い。
家を飛び出して以来、一度も顔を合わせていないのだ。
自分が留守の間に、両親を失い……両親を助けられなかった姉を恨んでいる。
拒絶される事はわかりきっているのだ。
今のラティアには、それを受け止める覚悟がなかった。

「……いつものお前らしくないな。いつもの部下相手に怒鳴り散らすラティアは何処いったんだ？」

「なっ――ななな、何言ってるのよっ！？」

「大男も蹴り一発で黙らせるお前は何処行ったんだよ？　そんなお前が、妹一人にビビってんじゃねーぞ」

「ち、ちちち違うわよっ！　そ、それとこれとでは全然違うでしょっ！？」

ラティアは顔を真っ赤にさせながら叫んだ。
普段の行動や言動こそ、シリアとは似ても似つかないラティアではあったが
どうやら軍隊での彼女は、シリアに本質が近いようだ。
やはり血が通った姉妹なのだろう。

「ほら、行くぞ。　ちょっとぐらい気が楽になっただろ」

「……え、ええ」

悩んでいても仕方がない、とにかく会ってみろ。
イリュードの伝えたい事は、ラティアにしっかりと伝わった。
勇気を振り絞って、差しのべられた手をラティアはギュッと握る。
そのまま、イリュードに連れられてラティアはシリアの待つ病室へと向かっていった。

シリアの病室。
シリアはため息をつきながら、窓の空を眺めていた。
既に日が落ちていて、夜空が広がっている。
今日は星がはっきりと見える程、綺麗な空だった。

「おい、リンゴ食うか？」

「ん……ああ、ありがとな」

病室にはライルの姿もあった。
心配になって様子を見に来たライルは、リンゴの皮を剥いていたようだが
形がゴツゴツとしていて、何故か食べる部分がほとんどない状態で渡される。

「……丸ごと渡す奴がいるかよ、しかもへったくそだな。　もっとちゃんと剥けないのかぁ？」

「なっ、文句言うなら食うんじゃねーよっ！　ったく、人が心配してきてやったってのに……」

表向きでは文句を垂れつつも、内心では気を使ってもらって申し訳ないと感じている。
普段は料理もしないライルがリンゴの皮むきをしてしまえばこうなってしまうだろう。
指を切って怪我をさせなかっただけでもマシだ、と考えた。

「なぁ、ライル。　聞いてもいいか？」

「なんだよ」

「……流れ星って、本当に願い事叶えると思うか？」

「ああっ！？　お前が流れ星に願うだぁ？　おいおい、勘弁してくれよ……」

シリアの口から似合わない単語が出てきたおかげで、ライルは思わずそんな事を口走ってしまう。

「あ、アタシは真剣に聞いてんだよ。　……アタシさ、パイロットになってからずっと空に願ってたことがあってさ。毎日空に飛びたいとか、翼がほしいとか、羽ばたかせてくれとか、願い事変えてったんだけど……どれ一つ叶わなかったなぁ」

悲しそうな目を見せながら、シリアはそう呟く。むしろ願いが叶う所か、ＨＡのパイロットすら辞めざるを得ない身体にされてしまっていた。とてもじゃないが、流石のライルでも茶化すことはできない。

「……ま、流れ星がないときに願ってもしゃーねぇさ」

「そう、だよな。　無闇に願いすぎた結果なんだな、アタシの足がこうなっちまったのは……きっと、欲張るなって伝えたかったんだろうよ」

「んなわけねーだろ、本当ネガティブなお前って何か気持ち悪いなー」

「な、なんだよ……アタシは元気だ、いつも通りだろ？」

「……あんま強がるなよ、お前は泣き崩れてもおかしくねぇ状況に追い込まれてんだからさ。だけどな……俺もお前も、諦めるつもりはないだろ。　なら、前向きに考えようぜ……この足を治す方法を、さ」

今は全く動かない足を指さして、ライルはそう言った。

励ましてくれたのだろうが、シリアは浮かない表情を見せる。
やはり、自分の足は動かない。
……姉の後を追ってパイロットになったというのに。
いつか空を駆けるＨＡで大活躍してやる、と強く願ったというのにこの結末は、あまりにも残酷すぎた。

コンコン
ふと、扉の向こうからノック音が飛び込んだ。
どうぞ、とシリアが声をかけるとガチャリと扉が開く。
そこには赤い長髪長身の男がいた。
そして、その後ろには――

「あ、姉貴――」

数年経った今でも、一瞬でシリアはラティアの事がわかった。
シリアは驚きのあまり、言葉を失う。
ラティアは気まずそうにただ、目を逸らすだけだった。

「あれ、お前確か――」

ライルがラティアに気付いた途端――

「今更、何しに来たんだよっ！？」

シリアの怒声が、響き渡った。

「……シリア、ごめんね。　私――」

「何でだよ……あの時以来、ずっと顔を見せなかったくせに……っ！！　アタシらが襲われた時だって、助けに来なかったくせにっ！

！」

「シリア？　そんな、私は――」

「黙れよ……言い訳なんて、聞きたくもないっ！　辛うじて私が救出された後も、ずっと顔を出さずに……今更のように姉貴面して出てきやがってっ！！」

込み上がる感情は、姉妹の再会を懐かしむものではなかった。
積もりに積もった姉に対する『憎しみ』……自分でも驚く程、込み上がってきたのだ。
E．B．Bの襲われたあの時も、シリアが救出された後の時も……
メシアへ正式に入隊した時も

ずっと、姉は姿を現さなかった。
顔を見せなかった。
なのに、足を失ったこのタイミングで……何故、今頃現れたのか。

「落ち着け、彼女はただ――」

「嫌だっ！　何も……何も、聞きたくない。　……全部、姉貴が家を飛び出したせいなんだ。
両親が死んだのも……アタシがパイロットになって、足がこんな事になっちまったのもっ！！　全部、アンタのせいだよっ！！」

「シリア……っ！？　お前――」

シリアが口にした言葉にハッとしたライルは、思わず立ち上がった。
同時に、ラティアは涙を見せながら病室の外へと駆け出していく。

「ラティア、待てっ！！」

イリュードはラティアの後を追い、病室を後にしていった。

「おい、シリアてめぇっ！　わかってんのかよ……仮にも姉貴だろうが……今の言い方は、酷すぎるんじゃねぇかっ！？」

「……だって、だってアタシの足はもう――」

気が付けばシリアは泣き崩れていた。

久々に姉が訪れた事に混乱し、込み上がってきた感情を思いっきりぶつけた。

……その結果、現実を再び直視してしまった。

どんなに姉を責めても、両親は返ってこない上に足だって治らない。

勿論、全て姉が直接的な原因を作ったわけではない事もわかっている。

だが、どうしようもなかった。

怒りに近い感情を抑える事も出来ずに、ただ力強くわめき散らしていたのだから。

「お前の気持ち、わからなくもねぇ。　だがよ……あいつお前の姉さんなんだろ？　お前の身を心配して、来てくれたんだろうが。それを……そんな言い方で突っ返すなんて、酷すぎやしねぇか？」

「誰も、アタシの気持ちはわからないさ」

「チッ……ああ、そうかよっ！？　なら勝手にしろ……お前らしくねぇったらありゃしねぇっ！　……もう、俺は行くぞ」

ライルは乱暴にドアを閉めて、病室を出て行った。
あんなに怒っているところは、晶がいなくなった時以来だろうか。
わかっている、姉に酷い事を言ってしまったことぐらい。

姉は何も悪くない事は、頭の中ではわかっているつもりだった。
だけど、どうしても抑えられなかった。
頭でわかっていても……誰かのせいにしたかった自分がいたのだろう。
そんな自分に悔やみ、シリアは涙を流し続けた。
何度も壁を殴り、ぶつけようのない自分に対する怒りを発散させる。
ようやく落ち着いてきたのか、深呼吸をして横になった。

「……アタシは、もうおしまいだな」

真っ白な天井をボーッと見つめて、シリアはそう呟いた――

再び、ラティアは休憩所まで走って戻ってきた。
……やはり、予想通りだ。
シリアは姉である自分を恨んでいた。
わかっていたこととはいえ、面と向かって言われてしまったラティアは……心が痛んだ。
それだけではない、今の足の状態でさえも……ラティアが起因していると言われてしまったのだから。

「……ラティア、すまない。　お前を無闇に傷つけてしまったようだな」

「いいの、わかっていた事だから……」

「だけど彼女……一つだけ勘違いしていたな。　いいのか、訂正しなくても」

「いいのよ、同じことよ……シリアにとっては。　それにね、逢ってみたのは正解だったと思ってる。これで心置きなく……シリアと顔を合わせない事を、決心できたから」

「……今日はもう休め……妹の事は、少しずつ解決していくぞ」

「……ええ、ありがとう」

既にラティアは諦めようとしていたが、イリュードはそうではない。まだ諦めるな、と言っていた。

ラティアもそれに応えようとするが……内心ではもう、どうしようもないだろうと覚悟を決めている。

それ以上、言葉をかけることなくイリュードはその場を後にした。

一人に戻った途端、ラティアは再び涙を流していた――

空への願い　？

翌日、晶とゼノスの両名はソルセブン率いるイリュードの部隊と共にE．B．B討伐へと向かった。
アヴェンジャーの大きな動きはないと言えど、アヴェンジャーの介入の可能性は捨てきれない。
不自然に大型E．B．Bが出現した場合等には、今までの傾向からしてアヴェンジャーが出現する可能性も高かった。
不安は残るものの、メシア内でもトップクラスの性能を持つレギス級の戦艦が向かうのだ、おまけにスカイウィッシュ部隊やι・ブレードも存在する。
メシアの主力が集った艦がそう簡単に落ちるはずはないだろう。
ラティアは格納庫に並ぶメシアの試作機3機を眺めながら、そんな事を考えていた。

目の前に並ぶ新型HA3機は、全て第7支部にて開発され新型HAだ。
メシア内で一番注目を浴びているのが、前回晶達の危機を救った『レビンフラックス』
HA史上初の可変機機能を実現化しており、その実力は実戦でも証明された。
そして、残りの2機が今日ラティアがテストで使用する新型2機となる。
同じ外観をしており、見た目だけでは色が違う程度の違いしかない。
実はどちらもウィッシュの後継機として開発されている『ブレイアス』という名の機体だ。
ウィッシュと比べると、全体的に小型化が進められていて、ι・ブ

レードのようなスリムな体型に変化している。
勿論、スペックの底上げがされており、その性能はフリーアイゼンで使用されていたカスタム機やレブルペインを上回る想定だ。
最大の特徴は換装モジュールにあり、ウィッシュでは戦場によって武装を使い分けていたが、ブレイアスでは換装モジュールを使い分ける事となる。
例えば射撃に特化した『スナイパー』や水中での戦いを想定した『マリン』等と、換装を用いる事で更なる汎用性を広げる事をコンセプトとしていた。
スカイウィッシュのように、ウィッシュにて換装モジュールが採用されている例もあり、それを元に更なる改良が加えられているという。
但し、換装モジュールの開発にはまだまだ時間が必要とされ、まだ一部の試作品しか仕上がっていなかった。

ブレイアスは2機同時に開発されており、どちらも根本は同じ機体ではあるが、違いが存在する。
赤いブレイアスは飛行機能を搭載しており、換装モジュールなしでの飛行での活動に特化させたＨＡの試作機として開発された。
もう一つの青いブレイアスは、通常のウィッシュと同様地上での活動に特化させている。

「あの子、大丈夫かしら……」

そんな新型を目の前にしても、ラティアはシリアの事が頭から離れる事はない。
ブレイアスの試験が開始される時刻も迫っている、いくら訓練と言えどこの調子では大きな事故に繋がり兼ねない。
だが、わかっていてもどうしようもなかった。

「……いえ、今は集中するべきだわ。　あの子の事は、今だけでも……忘れないと」

ラティアは自分に強く言い聞かせると、静かに青いブレイアスのコックピットへと向かっていった。

シリアは病室で、青い空を静かに眺めていた。
今、部屋には誰一人いない。
驚くほど静かだった。
その静けさは何処か心を不安にさせる。
一人になると、嫌な事ばかりを考えてしまう。
静かなのは、あまり好きではなかった。

「……姉貴」

無意識のうちに、シリアの口からこぼれた。
姉に酷い事を言ってしまったのは、わかっていた。
だが、現状の自分を見ると……とてもじゃないが、姉の事等気にかけている暇はない。
今は自分の事で、精一杯なのだ。
次に姉と逢ったらちゃんと謝ろう、そんな事を頭に考えるが……実際に再会したら、きっと昨日と同じ事になる。
どうして、このタイミングで姉が帰ってきたのか。

せめて、シリアの足がまだ動いている時期であれば――――

ガチャリ……

突如、病室の扉が静かに開く。

「……何だよ、ライルか？　それともリューテか、まさかヤヨイ？」

窓を眺めながら、シリアは相手を確認もせずにそんな事を呟く。

強引に入ってくるシラナギを除くと、真っ先に浮かんだ人物はその3人だった。

「私だよ、Ｄｒミケイルだ」

「ん……ああ、おっさんか」

「き、君まで私をおっさん呼ばわりするのか……やれやれ、せっかく君に朗報があるというのに」

「朗報？　何だよ、まさか姉貴の事じゃないだろうな？」

「いやいや、そんなはずないだろう……そうだな、例えばどうだ？　君の足を……治せる、と私が言ったら？」

「……っ！？」

その時、シリアの目の色が変わった。

今まで何処か魂の籠っていない瞳であったが、その言葉を耳にした途端

まるで火が灯ったかのように、シリアの目に情熱が取り戻された。

「嘘、じゃねぇだろうな？」

「ああ、本当だとも……私は君の辛い表情を見て、何か方法がないかとずっと考えてきた。君のような優秀なパイロットを失うことはメシアにとっても痛手だし……何よりも、今まで戦ってきた友だって、君の表情を見て辛い思いをしてきていた」

「アタシの足、治るのか？　もう一度……パイロットに、できるのか？」

「確実に治る保証は、残念ながらない。　しかし、方法は確かに存在する。　どうだ、私を信じてみないか？」

「ああ、信じる……頼む、アタシの足を……治してくれ。　このままだと、アタシ……どうにかなっちまいそうなんだよ」

それはシリアの切なる願いだった。
もう二度とパイロットに戻る事ができないと言われてから、その現実を受け止めきれずにただ絶望する毎日。
唯一の救いが空を眺める事にあった。
毎日空を眺めては、救いを求め続け……ひたすら祈った。
その願いが今、叶おうとしている。

「いいだろう、私を信じるがいい……君の足は、必ず治して見せるぞ」

Ｄｒミケイルが手を差し伸べると、シリアは手を握り返す。
シリアの表情には、自然と笑みが浮かんでいた。
何日ぶりの笑顔だろうか、どれくらいこの足の事を苦しんでいただ

ろうか。
何十年間も悩み続けたかのような感覚に陥っていた。
もし、足が治るのであれば……どんなに危険なリスクを負ってもシリアは受けるだろう。
シリアにとって、今より最悪な状態など存在しないのだ――

第7支部内の建物を、リューテはグルグルと見回っていた。
現状の第7支部は、E．B．Bの討伐に大半の兵士が出撃しており、警備が手薄となっている。
そんな中、新型機の稼働実験が行われる事に胸騒ぎを感じていた。
今までのアヴェンジャーの傾向からして、これを狙わないはずがない。
とはいえ、第7支部のセキュリティは厳重であり、アヴェンジャーはそう簡単に侵入はできないだろう。
……それでも、リューテは何かをしていないと落ち着かなかった。

「……ん？」

ふと、制御室の付近を歩き回っていると、何やら話し声が聞こえてくる。
警備兵の者が連絡を取り合っているのだろう、と思ったが何処か聞き覚えのあるその声に足が留まった。
そしてリューテは、扉の前に耳を傾けた。

「えー色ですかぁ？　そんなに赤がいいんじゃないんですかー？
やっぱ赤似合ってますしね、可愛いと思いますよ？
うんうん、迷わず決めちゃってくださいっ！　私がお勧めしている
んだから、自信持っちゃってくださいねっ！！」

シラナギの声だ。
その一言を聞いただけで、リューテは思わずため息をつく。
迷わずリューテは制御室の扉を開けた。

「シラナギ、また軍の回線を私用で使ったな」

「わ、わわわっ！？　リュ、リューテじゃないですかぁっ！？」

シラナギは大袈裟なリアクションを取って驚いていた、いや彼女の
場合素なのだろう。

「あまり不審な動きは見せるなよ、今日は新型の実験もあってアヴ
エンジャー介入の可能性も高いからな」

「だって、友達の事気になっちゃったんですよ。　ほら、晶くん達
が向かった先って私の友達が近くに住んでるんです。
ちょっとだけーって思ったら、服の話題ですっごく盛り上がっちゃ
ってー楽しかったですよ？」

「……一応皆には黙っておくから、次からは控えてくれよ」

どうせ何を言っても無駄だろうと、リューテはため息をつく。
シラナギは呑気にはーいと返事をして、制御室を後にした。

「妙だな……何故、制御室に誰もいない？」

普段であれば制御室には何人かの警備担当の者が存在するはずだが、今日は誰一人そこにいない。

だからこそシラナギが勝手に使ったのだろうが……明らかに、おかしい。

いくら大半の部隊が討伐へ向かっていると言えど、この部屋に人を置かないはずがないだろう。

念の為リューテは、装置を操作して第7支部全体の様子を確認していった。

「……これは？」

一部分、モニターが真っ暗になっている個所があった。

その個所は……新型が保管されている格納庫周辺。

リューテの嫌な予感が、的中した瞬間だった――

コックピットの中で、ラティアは深呼吸をした。

別に緊張をしているわけではない。

ただ妹の事ばかりを頭に過ぎらせてしまっていた。

少しでも気持ちを落ち着かせようと、気を紛らわせようとしていただけだ。

『準備はできたか？』

「ええ、問題ないわ」

通信機からはフラムの声が聞こえた。
ブレイアスの開発にはフラムが携わっており、今回の実験の責任者となっている。

『どうした、不安なのか？　お前らしくないな、ラティア』

「あら、貴方にもそう見えるかしら？　ふふ、そうね……ちょっと、嫌な事があってね」

『気を付けるんだぞ、いくら危険が少ない実験だと言っても何が起こるかわからん。
くれぐれも、怪我だけはするんじゃないぞ』

「ええ、ありがとうフラム博士」

よほど昨日の件のショックが強かったのだろう。
通信機越しからでも、この不安が伝ってしまうほどだった。
今はとにかく、稼働実験に集中しなければならない。
モニターから目の前にハッチが開かれたのを確認した。

「ブレイアス、出るわよ」

ラティアはスロットルを押し込み、ブレイアスを前進させる。
いつも見慣れている、広いドーム状の会場へと足を踏み入れた。
ブレイアスの武装はライフル1本サーベル1本バルカンと、基本的な武装しかない。
今回は換装モジュールを使った実験も行われない為、文字通り動作

確認をするだけだ。
だが、単純な事であってもこの手の作業はベテランクラスでないと依頼されない。
戦い慣れている者の動作データでなければ、まともな検証が行えないからだ。
今日は連続して新型２機と既存機ウィッシュのデータを取り続け、最終調整を行う為の試験となる。

ビーーっ！
すると、コックピット内で警告音が鳴り響いた。

「……これは、ＨＡの反応？」

レーダーを確認すると、確かに稼働中のＨＡの反応が１機あった。
明らかに、この会場へと向けて急接近してくるＨＡ……しかし、単機なのが気がかりだ。
アヴェンジャーの襲撃、を考えたが……レーダーが正常である事からレブルペインではない事がわかる。
すると、ドーム状の試験会場に空中から飛び込んでくる一機のＨＡが姿を現した。
……外見はレブルペインであるが、妙だ。
頭の部分だけ、何故かウィッシュのパーツが使用されている。
だが、レブルペインである事から……アヴェンジャーである事は間違いない。
レブルペインは、サーベルを構えて仕掛けてきた。

「そう、仕掛けてくるのね……っ！」

ブレイアスはライフルを構えて、数発撃ち込んだが全て軽々と回避

されてしまう。
グングンと距離を縮めていくレブルペインを迎え撃とうと、サーベルを構えた。
すると、突如レブルペインがモニターから姿を消したいや、消したわけではない。
死角へと回り込まれたのだろう。

「その程度でっ！」

ブレイアスの死角はある程度把握できている、基本的にウィッシュと変わりはないのだから使い心地がほとんど変わらなかった。
相手の動きからしておおよその位置はわかっている、ラティアはサーベルで先手を打とうと斬りかかろうとする。
……だが、レブルペインの姿はそこにはなかった。

「……っ！」

その瞬間、レブルペインが上空から急降下してきた。
ガキィィンッ！！　と、金属音が鳴り響く。
何とか反応できたラティアは、サーベルの一撃を受け止めた。

『へぇ、流石はエースは伊達じゃねぇってことだな。　よく受け止めやがったな』

「貴方、何者よ？」

『ケッ、そんなのテメェの頭で考えろっ！』

レブルペインに蹴りを一発入れられると、機体は大きくぐらついた。
その間にレブルペインは距離を取って、離れていく。

……パイロットの声は、まだ少年だった。
恐らく晶やシリアと大差がない年齢だろう。

『ラティア、すぐに応援をよこす。　そいつの相手を頼むぞ』

「ええ、わかっているわ……一人でノコノコと飛び込んでくるなんて、マヌケね」

『丁度いいや、ビリッケツもいねぇみたいだし……新型とやらをぶち壊すってのも楽しそうだな』

「私を甘く見ると後悔するわよっ！」

何が目的かはわからないが、敵として現れた以上は相手にするしかない。
上手くいけば、パイロットを捕えてアヴェンジャーの事を聞き出せる可能性もある。

「そこよ」

バァンッ！　バァンッ！
レブルペインの動きを誘うようにライフルを数発撃ち込んだ。
だが、レブルペインはそれを理解しているかのように誘いには乗ってこない。
むしろ、上手くライフルを交わしてあっという間に接近戦に持ち込まれてしまった。

『おいおい、なっさけねぇな……あんな子供騙しに引っかかると思ったのかぁ？』

「そうやって人を見下す態度、気に入らないわね」

ガァンッ！！

その瞬間、ライフルの弾が命中し、レブルペインの右腕が吹き飛ばされた。

『チッ……テメェ、やるじゃねぇかっ！！』

レブルペインは右腕を失ったまま、ブレイアスへと向けて突進していく。

片手を失ってもなお、戦いを継続しようとするのか。

ブレイアスはサーベルを構えた。

だが、レブルペインは速度を上昇させ続けている。

「強行突破する気……？　いえ、何か裏があるわ」

レブルペインはいくらスペックが高い機体と言えど、それを上回る性能を持つ新型に出力が叶うはずがない。

あのパイロットは、この場面で強引に押し切ってくるようなバカではないと、ラティアはわかっていた。

しかし、全く速度を落とさずにレブルペインは徐々に距離を縮めていく。

あの速度では制御も容易い事ではない……そうなると、やはり強行突破を――

「……迎え撃つしかないわっ！」

相手が何をしようが、今の状態でこちらから仕掛ける事はできない。

ラティアは集中して、レブルペインの動きを伺う。

速度を緩めず接近を続けていたレブルペインは、ついの剣の間合い

にまで接近していた。
ここでラティアは、サーベルを力いっぱい振り回す――
同時に、レブルペインはブレイアスを飛び越していった。

ラティアは思わず目を疑った。
あの速度で、そのような事をしてしまえばいくらパイロットスーツがあると言えど、尋常ではないGが襲い掛かるはずだ。
それに、下手すれば制御しきれずHA同士で衝突する危険性も、単純に押し負ける危険性だってあったというのに。
彼は、それを平然とやってのけたのだ。

「な、何て無茶をっ!?」

『壊れちまえよ新型ぁぁっ!!』

あっという間に背後を取ったレブルペインは、速度を継続させたままサーベルでブレイアスを押し出し、切り裂いた。
ガキィィンッ!!
激しく火花が散らされ、金属音が響き渡る。
勢いよく吹き飛ばされたブレイアスは、幸いどの部分も大破には至らなかった。
だが、いくら新型と言えどダメージが全くないわけではない。
機体の損傷は予想以上に大きかった。

「何なのよ、あのパイロット……?」

アヴェンジャーにはこんな無茶苦茶なパイロットが存在するのかと思うと、ラティアは思わず恐怖した。
メシア内でもそうそうあのようなパイロットは存在しないというのに。

すると、レーダーにもう1機のHAの反応が出現した。

「……この反応、まさかっ!?」

ズガァァァンッ!!

突如、格納庫方面で大きな爆発が発生する。

容赦なく広がる煙の中から、空に向けて一機のHAが飛び出す。

……『ブレイアス』だ。

今日の稼働実験対象となっていた、もう1機の赤いブレイアス。

その機体、何故か爆発の中から……空高く舞い上がっていた。

『あれぇー？　お姉さんとそっくりな香りがするぅ……ウヒヒ、何だかとっても懐かしい感じ……ひょっとして、お姉さんなのかな？』

通信機からは、今度は少女の声が聞こえてきた。

この喋り方といい、笑い方といい……思わず寒気を感じる程の気色悪さだ。

「……まさか」

『そういう事、だ。　さて、俺らも仕事なんでな……テメェの相手も飽きたし、帰らせてもらうぜ』

『ウヒヒ、お姉さんがどうしてもっていうなら……愛してあげてもいいよ？』

「冗談じゃないわ、絶対に逃がさないわよっ！」

これ以上、アヴェンジャーに新たな戦力を与えるわけにはいかない。

例え一人でも、何とかして見せる。
ラティアはそう誓った。

空への願い　？

第7支部の手術室にて、Ｄｒミケイルとシリアの姿があった。
数日前に診断を受けた時は、足については絶望的だと言われた事を今でもはっきりと覚えている。
だが、突然ミケイルがシリアの足を治すことが出来ると言った。

正直、シリアは不信感を全く抱いていないわけではない。
手術の話は突発的に飛び込んできた上に、周りにはシラナギのような助手もいなかった。
単純な人手不足、という話であれば何の問題はないのだが。
治療方法については一切聞かされていない点も気がかりではあった。

しかし、ミケイルは長年フリーアイゼンの船医を務めていた上に、優秀な医者の一人ではある。
今は、再び歩けるようになればいいと望んだ。
もう一度パイロットとして、立ち上がる為に。
病室で眺め続けていた空に、羽ばたくその日を迎える為に……ミケイルの言葉を信じた。

「治療には３０分の時間を要する、だがすぐに動けるようになるわけではない。
少なくとも2、3日は絶対安静の上、様子を見る……そして少しずつリハビリを重ねて行けば……やがて元の生活に戻れるだろう」

「……今すぐやってくれ。　アタシはこんなところで立ち止まるわけにはいかないんだ」

「わかった、始めるぞ」

ビーーーッ！　ビーーーッ！

ミケイルが頷いた途端、突如支部全体にサイレンが鳴り響いた。

「何の騒ぎだ？」

「Ｅ．Ｂ．Ｂの襲撃……いや、今は確か姉貴が――」

第7支部にて、今日は新型ＨＡの稼働実験が行われるという話を聞いていた。

アヴェンジャーがその新型を狙って襲撃をしてきた可能性は十分に考えられる。

「緊急事態だ、万が一の為に避難の準備を――」

「いや、やってくれ。　アヴェンジャーだったら、こっちまで攻め込んでくるはずがないだろ？」

「ならん、今は様子を見るべきだ」

「頼む……姉貴や他の兵だっているんだろ？　どーせ３０分だろ、すぐにやってくれっ！」

シリアは顔を俯かせながら、ミケイルに訴えた。

だが、何者かから支部が襲撃された以上……呑気に足の治療をしている場合ではない。

それにアヴェンジャーではなく、Ｅ．Ｂ．Ｂの襲撃であったら尚更の事だ。

……しかし、ミケイルとしてもできる限り治療を急がせたい理由が

あった。

「いいだろう、何があっても私を恨むなよ」

「ああ、わかっているさ」

シリアの願いを聞き入れ、ミケイルは力強く頷いた。
だが、その時に……ニヤリと不気味に微笑んだミケイルの表情に、
シリアは気づかなかった――

空高く舞い上がった赤いブレイアスは、特に動きを見せずに静止したままだった。
まるで地上の青いブレイアスを見下すかのように。
今までも地上から、空を飛ぶE．B．Bの相手をしてきたこともあったが……今回はHAだ。
その機動性はレビンフラックスに劣るものの、地上から捕えるのは難しい。
おまけに目の前に立ちはだかるレブルペインのパイロットは、只者ではない。

『ラティア、一旦レビンフラックスに乗り換えろ。　そのブレイアスではアレに追いつけん』

「そんな事をしていたらすぐに逃げられてしまうわ、このままあの

コソ泥を撃ち落す」

『君ならやれる、ということかね？』

「違うわ、やってみせるよ」

『……くれぐれも無茶だけはしないでくれ。　ブレイアスはまだ万全な調整はされていないのだからな』

「ええ、わかっているわ」

迷ってる時間はない、ラティアはスロットルを限界まで押し込んだ。
赤いブレイアスは凄まじい速度で空を駆け抜けていく。
だが、地上を走るブレイアスも速度は負けていない。
狙いを定めて、ライフルを数発発射させるが……軽々と避けられてしまう。
すると、ラティアは背後を追いかけるＨＡの反応に気づいた。

……先程のレブルペインだ。
ブレイアスの出力なら追いつかれる心配はないが、あのパイロットの事だ。
何を仕出かすかが想像できないだけに、恐ろしい。

『ねぇねぇ、お姉さんと似てるけどちょっと違うよね？　ねぇ、誰なの？　教えてよ』

「今すぐブレイアスから降りなさい、話はその後たっぷり聞いてあげるわ」

『アハハッ、私追いかけっこは大好きなの。　でも……お姉さんの

愛、ちょっと確かめようかな？』

「愛？　何を言っているの、この子……」

ブレイアスを奪ったパイロットの言葉は、何処となく不気味さを感じさせる言動だ。

すると、赤いブレイアスはピタリと急停止した。

ラティアはその隙を逃さず、ライフルを発砲させようと構えようとする。

ガァンッ！！

すると、背後から銃声が響き、右手からライフルが弾き飛ばされた。

『おいおい、あいつが遊んでやるっつってんだから付き合ってやれよ？　んなつまんねーことすんなって』

「クッ……貴方ねっ！？」

背後を振り向くと、片腕を失ったレブルペインの姿があった。

警戒していたとはいえ、一瞬の隙を狙われてしまったようだ。

『俺を気にしている暇あんのか？』

その言葉を耳にした瞬間、空から赤いブレイアスが高速で接近してきていた。

ラティアはすぐに回避へ移ったが、ブレイアスは強引に軌道を変えて突進を続ける。

迎え撃つしかないと、サーベルを構えた。

激しく火花が散り、機体は数メートルに渡って押し出される。

ようやく動きが止まったところ、ラティアは横に回り込んで回し蹴りをかました。

吹き飛ばされた敵機を目で追いかけたところ、ギュンッと上空へと舞い上がっていく。
それを追いかけるように、ラティアも空高く飛び上がった。

ガキィンッ！　と、サーベル同士が激しくぶつかり合う。
ラティアの登場するブレイアスは飛行機能がないと言えど、全く空中制御ができないわけではない。
一定の距離を飛び上がり、落下するまでの間であれば十分に空でも戦えた。

『アッハッハっ！！　凄い、凄くゾクゾクするぅぅっ！！　お姉さんと戦ってる時を思い出しちゃったぁ……ウヒヒ、流石お姉さんのそっくりさんだね』

「まさか、シリアの事を言っているの？」

『ねぇねぇ、興奮してこない？　戦いを通じてお互いの愛を確かめ合うなんて、ＨＡでしかできないことだよ？
アッハッハッハァッ！！　だからね、愛してあげる……いっぱいいっぱい、私が愛してあげるからぁっ！！』

「冗談じゃないわ……そんなの、愛でも何でもないわっ！　貴方、勘違いしてるわよ」

『抑えきれない感情をぶつけ合い……お互いの命を削るこのゾクゾク感……これって、愛に決まってるじゃない？　アッハッハッハッハァッ！！』

狂気に満ちたその笑い声を耳にすると、思わずラティアは身を震わせた。

……何が彼女をそうさせているのだろうか、何が彼女を狂わせているのか？
その瞬間、赤いブレイアスが機体を密着させ、抱きかかえるかのように動きを拘束した。

『つーかまえた……アッハッハッハッハァッ！！　ねぇねぇ、ロマンチックだよね。　こうやって見つめ合うのって』

「離れて……近寄らないでっ！」

『絶対に離さないんだからぁぁ……地獄の底まで、連れてってあげるぅぅぅっ！！』

赤いブレイアスは突如、ラティア機を拘束させたまま急降下し始める。
グングンと速度を上げていき、コックピットも凄まじいGが襲い掛かりラティアは一度気を失いかけた。
このまま突き落とされれば、無事では済まない。
どうにかして切り抜けようと、ラティアは拘束された腕を強引に動かし、相手の両肩部を掴んだ。

「地獄に行くのは……貴方だけよっ！」

落下の直前、力強く操縦桿を動かした瞬間に……グルリと、ブレイアスが半回転した。
ズガァァァンッ！！
赤いブレイアスが、凄まじい衝撃で叩き落された。

「捕えたわよ、大人しく投降してっ！」

赤いブレイアスの動きを抑え、ラティアはそう叫んだ。
その瞬間……凄まじい速度で接近してくるレブルペインの姿を捕えた。

ガァァンッ！！
宙からの飛び蹴りを受けた青いブレイアスは、激しく吹き飛ばされる。
だが、空中で機体の制御を行い倒れる事はなかった。
やはり、あのレブルペインの仕業だった。

『流石にやるじゃねぇかよ、ソルセブンのエースさんよぉ？』

「しつこい男は嫌われるわよ、いい加減にしなさい」

『いちいちうるせぇ奴だな……テメェ、そろそろ死んどくか？』

ドスをきかせたレブルペインのパイロットの声に、思わず寒気を感じた。
先程までの軽い口調ではなく、殺意そのものを感じさせたその一言に。

「……私は、負けないわ」

アヴェンジャーにこれ以上、好き放題させない為にも。
ラティアはここで倒れる訳には、いかなかった。
だが、その願いも虚しく……コックピット内に、警告音が鳴り響いた。

「制御系に異常……？　そんな――」

ブレイアスの状態はまだ万全ではなく、実戦に耐えられるような調整はまだされていなかった。
激しい戦闘行為を行い続けてきたのだ、こうなる事は想定できたはず。
その瞬間、レブルペインがサーベルを片手に最大速度で接近してくる。
ブレイアスは無抵抗で切り上げられて、吹き飛ばされていく。
コックピットから通じる強い振動に、ラティアは一度気を失いかけた。

『ん、何だ動けねぇのか？　チッ、だったら面白くねぇ……命だけは助けてやるよ、じゃあな』

「……まち、なさ――」

意識が朦朧とする中……突如頭部から、ズキンっと痛みが走る。
ヘルメットが割れていて、頭部からは血が流されていた。
幸い機体に大きな損傷は見当たらなかったが、ラティア自身はそうではない。
意識が朦朧とする中、赤いブレイアスは空高く飛び上がり高速で消え去っていった。

『ラティア、無事か？　今救援をよこした、ブレイアスはどうなっている？』

「……ごめん、なさい。　逃してしまったわ」

『その怪我は……あれほど無茶をするなと言っただろう。　逃がしたブレイアスはもういい、それより君の怪我を――』

「いえ……すぐにレビンフラックスで追いかけるわ」

『君、まだそんな無茶を――』

「駄目よ、あれを渡すわけ――には――」

ラティアはそこで、意識を失った――

ラティアは、後からやってきた2機のウィッシュにブレイアスごと回収された。

二人の兵士の手によって、気を失ったラティアがコックピット内から連れ出される。

だが、まだ僅かに意識はあるようだ。

大至急、ラティアは医務室へと連れていかれようとしたが――

「……待って、私は、まだ……戦えるわよ」

「いえ、そんな状態で貴方を向かわせるわけには」

「そうですよ、その身体ではレビンフラックスの負荷に耐えきれる

はずがありません」

「お願い、行かせて……」

ラティアは強引に二人の兵士から離れて、そう言った。
兵士は戸惑ってる間に、ラティアはレビンフラックスの元へと歩み寄っていく。
フラフラとした足取りを見ていると、今すぐにも止めるべきなのだが、あの必死な表情を見ていると中々兵士達の足は動かなかった。

「ラティア、新型の事はもういい。　もう一つのブレイアスがあれば、開発に支障はでないさ」

格納庫にはフラムの姿もあった。
心配して駆けつけたのか、息が上がっている。

「いいえ、私のミスだもの……私が償わなければ」

「君はまだ、過去を引きずっているのかね」

フラムは静かに呟くと、ラティアは黙り込んだ。

「……わかっているのなら、私を止めないで」

「断る……私のＨＡで死者を出すわけには行かない。　万全な状態ではない君を、あの機体に乗せるつもりはないさ」

「邪魔しないでよ、今ならまだ追いつけるかもしれないわ――」

「アタシが、乗る……っ！」

その時、ラティアの耳に聞き覚えのある声が飛び込んだ。
いや、その人物はこんなところにいるはずがない。
何かの間違いだろうと、ラティアは戸惑いと隠せなかった。
だが、目を向けた先には……シリアの姿があった。
両足に固定具のようなものを取り付けた状態で、立っていたのだ。

「シリア……貴方、歩けるの？」

「今はそんな事、どうでもいいだろ……アタシがあいつら、捕まえてやるから」

シリアは姉を押しのけて、レビンフラックスの元へと走っていこうとする。
だが、途中でバランスを崩したのかバタリと地面へと倒れてしまった。

「やめろシリア、今のお前は歩くのがやっとなはずだろう」

遅れて、ミケイルが姿を現しシリアにそう言った。
一体どんな治療を受けたのかわからないが、一日や二日で足が完治するとは考えにくい。
……シリアが明らかに無理をしているのは、倒れている様子から見てもわかりきっていた。

「姉貴に、任せてられっかよ……何も、何も守れなかったくせに――」

フラフラとした足取りで、シリアは立ち上がろうと力強く踏ん張る。
誰の力も借りずに、本当に自分の両足で立ち上がっていた。

「シリア、無茶をするな――」

「いや、待て。　少しでいい」

シリアを止めようとミケイルが駆け出そうとしたところ、フラムが止めた。

フラフラと向かっていくシリアの背後に、ラティアがゆっくりと迫っていたからだ。

医者からも、二度とパイロットへ戻る事が出来ないと言われたはずなのに。

シリアは再び、大地へ立つことが出来た。

その足で、自らパイロットに戻る為に……ＨＡへと向かって歩き出しているのだ。

とてもじゃないが、ラティアはその姿を見ていることが出来なかった。

ラティアは体をふらつかせながらも、シリアの後を追って……静かに後ろから、抱きしめた。

「ごめんね……私の力不足で、貴方を凄く傷つけてしまった。

私がもっとしっかりしていれば……貴方がパイロットになる事も、歩くだけでこんな辛い思いをしなくて、すんだはずなのに――」

「……何だよ、今更。　姉貴面、すんなよ……アタシの事は、もう放っといてくれよ。　今までだって、アタシをずっと避けてきたじゃないか――」

「ううん、放っておけないわ……私が、バカだったの。　ずっと、ずっとシリアと逢うのが怖かった。

だって、姉として何もしてあげられなかったし……約束も守ってあ

げれなかったし、最低な姉だとわかっていたんだもの……」

「そうだよ、姉貴はそうやってずっとアタシから逃げてたんだろっ！！　アンタなんて、大嫌いだ……お願いだから、アタシに関わらないでくれっ！！」

「いいえ、もうシリアを傷つけさせないわ。　戦いで苦しむのは私だけでいい、もう……貴方に辛い思いをさせないんだから」

ラティアの意識は段々と遠のいていく。
血を流しすぎたのか、腕の力も徐々に弱まっていった。
こんな状態でレビンフラックスで再出撃しようとしていたのか、と今更自分の愚かさに気づかされる。
どうして、今まで自分はここまで妹を避けてしまっていたのだろう。
自分の臆病な行動が結果的にシリアをパイロットにさせて、その結果足を失わせてしまった。
……しかし、シリアは諦めずに再び立ち上がっていたのだ。
フラフラになりながらも、パイロットを続けようとレビンフラックスへと向かおうとする姿に……思わず心を打たれた。
これ以上……シリアに辛いを想いをさせたくない、その思いだけでも……シリアへと伝えたかった。

「だから、何度も言っているんだアタシは……今更すぎるんだよ、勝手に家に出て行ったときは……まだ姉貴を許せていたのに。
アタシ達がＥ．Ｂ．Ｂに襲われた時、顔も一つ見せてくれなかった。
　アタシがパイロットになった時も、現場が一緒になった時も……ずっとずっと、避けていたじゃないかっ！！
もう遅すぎるんだよ……今更そんな、姉貴面すんじゃねぇよっ！！」

やはり、シリアはラティアを恨んでいた。

家を出て以来、ずっと顔を合わせてくれなかった姉に対して……段々と不信感を抱き、それが恨みへと変化した。
何を言っても、許されない事はわかっている。
だが、姉として……自分の失敗を、妹へ償わせるワケにもいかなかったのだ。

「いくら謝っても仕方がないという事は、わかっているわ。　あの時……私は、貴方しか助けられなかった」

「……アタシ、しか？」

その時、シリアは表情をハッとさせた。

「私が向かった時には……両親はもう、遅かったわ。　もう少し早ければ……助けられたのかもしれないのに。
バカよね、私……ずっと、ずっと両親を助けられなかったことを引きずっていて……私は、貴方と逢う事をずっと避けていたの」

「姉……貴？　アタシを、助けてくれた……のか？」

「でも、結果的に貴方を不幸にしてしまったわ。　……私がしっかりしていれば、貴方をパイロットにさせる事もなかったのに――」

「……バカかよっ！　どうして、どうして黙ってたんだよ。　アタシは別に、両親を助けられなかった事を責めるつもりはなかったのに……！
ただ、来てくれなかったから……顔も見せてくれなかったら、だからアタシは――」

シリアがそう告げた途端、ラティアはふらりと地面へと倒れていっ

た。

「姉、貴……？　おい、しっかりしろよっ！？」

「これ以上は危険だ、ラティアを医務室へ運ぶぞ」

ミケイルはすぐに倒れたラティアを抱える。

「……まだ息はあるが、油断はできない。　君の姉については、私に任せてくれ。
……くれぐれも、無茶をするんじゃないぞ」

そう告げると、ミケイルは静かに格納庫から立ち去ろうとした。

「姉貴っ！　私、パイロットになった事は後悔していないっ！！
だって、ずっと……ずっと空に憧れてたんだっ！
かつて姉貴と一緒に願った空に、ずっとずっと憧れを抱いていたんだっ！
だからな……夢、叶えさせてくれっ！　アタシは……レビンフラックスで、空を飛びたいんだっ！」

気を失ったラティアに、その言葉が届いているかはわからない。
確かにシリアは、姉を追いかける事をきっかけにパイロットとなる道を歩んだのかもしれなかった。
だけど、今口にした言葉も全て事実なのだ。
もし、家族がE・B・Bに襲撃されていなくても……姉がずっと、一緒にいてくれていたとしても
シリアは自ら、パイロットの道を進んでいただろう。
姉の抱えていた重み、それはシリアからは想像できない程だった。

……ラティアはずっと、シリアを不幸にしたと思い込んでいた。
だけど、そうではない。　決してシリアは、自分が不幸になったと感じていなかったのだ。

「なぁ、新型の位置って特定できんだろ？」

「……いいのかね、君の体も万全ではないのだろう？」

「姉貴よりかは遥かに元気だと思うけどな」

「逃げた方角から察するに、メシア基地の跡地が存在する。　奴らは負傷しているはずだし、そこに留まっている可能性は十分に考えられる。
恐らくラティアも、そこへ向かうつもりだったんだろうな」

「わかった、サンキュー」

フラムにお礼を告げると、シリアはレビンフラックスへと向けて再び歩みだした。
驚く事に、先程よりもバランスがとれており、安定して歩けている。

「止めないんだな、お前は」

「無駄だろうと察しただけだ、応援を連れて行け。　くれぐれも無茶だけはするんじゃないぞ、いいかね？」

「ああ、わかってるさ」

ミケイルやフラムの言う通り、足が万全な状態ではない事はシリア自身もわかっている。

かといって、このままアヴェンジャーを野放しにするわけにもいかなかった。
アヴェンジャーの戦力が再び整ってしまえば、フリーアイゼンのような被害が再び生み出されてしまう危険性も高い。
……多少無茶をしてでも、新型は奪還しなければならなかった。
シリアはレビンフラックスのコックピットへと搭乗し、深呼吸をする。
何処か懐かしい香りを感じる……ラティアの香りだろうか。

「レビンフラックス、アタシの夢を……叶えてくれよっ！」

シリアの掛け声と同時に、レビンフラックスは飛行形態へと変形し……凄まじい速度で発進していった――

第12話　暴走　？

ソルセブンのブリッジルーム。
艦長を務めるイリュードは、中心に立ちひたすら指揮を執っていた。
目の前に広がる巨大なモニターには、黒い影の群れが確認される。
レーダーには大量のE．B．B反応がある事から、あれらは全てE．B．Bと判断できるだろう。

「主砲撃て、モタモタするなっ！」

イリュードの指示一つで、ソルセブンからは主砲が発射された。
ズガァァァンッ！　と激しい爆音と共に、ブリッジルームに振動が伝わる。
すると、画面の目の前が一瞬赤い光に覆われ……E．B．Bの群れはあっという間に消滅していった。
だが、レーダーにはまだE．B．Bの反応は残されている。
主砲から逃れたE．B．Bなのだろう。
既に出撃していたスカイウィッシュ部隊による討伐活動が開始され、あっという間にE．B．Bの殲滅が完了した。

「大分片付いたようだな、後は……大本を叩くだけだ」

第7支部を発ってから、E．B．Bが大量出現しているポイントを片っ端からソルセブンで潰していった。
発見する度に主砲を放ち、逃れたE．B．BをHA部隊で討伐する。
主砲が使えないような場所では、HAのみでの討伐となるが、メシアの部隊は普段このような手順でE．B．Bの駆除を行っていた。
だが、今日は大型E．B．Bの出現を確認したため、いつもよりも

戦力は整えている。
付近のE．B．Bが片付いた事から、いよいよソルセブンは大型の討伐へと移ろうとしていた。

「なんだこりゃ、本当にE．B．Bか？」

モニターに映し出された大型E．B．Bの姿を見て、イリュードは驚きを隠せなかった。
そこには、無機質なゼリー状の塊が聳え立っていたのだ。
レーダーの反応を信じるのであれば、間違いなくE．B．Bなのだろう。
しかし、あまりにも生命体から外れたその姿は何処か異質だった。
ゼリー状の体の中心には、E．B．Bの真っ赤なコアがはっきりと見えている。
大体の大型E．B．Bはコアを見えない位置に隠したり、頑丈な装甲で守ったりするものだが……今回はそうではない。
まるで狙ってくださいとでも言わんばかりではないか。

「……全く、日々バリエーションを増やしていく奴らだな」

面倒なことにならなければいいのだが、とイリュードはため息をついた。

ソルセブン内の格納庫に、ι・ブレードは補給の為に帰還していた。

討伐に出発してからは休む暇もなくE．B．Bとの戦闘が続く。
流石になまった体では、長期に渡る戦闘は堪える。
晶は疲労の色を隠せなかった。

『大型E．B．Bが確認された、すぐに再出撃するぞ』

「あ、ああ……わかってる」

『どうした、辛いのなら休んでいてもいいぞ』

「そんな事言ってられるかよ、皆戦ってるのに……」

心配そうに通信を入れてきたゼノスに、晶はそう返す。
ラティアに言われた通り、常に先陣を切ってE．B．B討伐に励んでいたものの
次第に体力が削られていき、段々と後方へ回るようになってしまった。
とてもじゃないが、ラティアの代わりが務まるはずもない。
今までも学校で、メシアで散々訓練を積んできたというのに、我ながら情けないと感じてしまう。
だから、弱音は吐いてられない。
メシアの一員として戦う以上、最後まで戦い抜かなければならなかった。

『そうか、無茶だけはするなよ』

そう告げるとゼノスは通信を切って、レッドウィッシュが出撃した。
晶は深呼吸をして、スロットルを強く握りしめる。

「……いくぞっ！」

遅れてι・ブレードが、凄まじい速度で発進された。
勢いよく飛び出したι・ブレードは、そのまま上空へと急上昇していく。
目の前には、ゼリー状の大型E．B．Bの姿がはっきりと見えた。

「何だあれ……コアが丸見えじゃないか」

まるで狙ってくれ、とでも言わんばかりに堂々と姿を現しているコア。
しかも、今までのE．B．Bとは異なり何処か生物とはかけ離れた外見だ。
その姿はとても不気味に思える。

『主砲を発射させる、各機はソルセブンの後方へ下がれ』

イリュードからの通信を確認すると、晶は言われた通りに後方へと下がっていく。
堂々と弱点を晒しているところが、逆に晶を不安にさせる。
この一撃で終わってくれればいいと願ったが、そうはいかないだろうと感じていた。
ソルセブンの先端から赤い光が放たれ始める。
フリーアイゼンの場合は紫色であったが、ソルセブンは違う。

バシュゥゥンッ！
赤い閃光が走ると共に、主砲の発射音が飛び込んできた。
ズガァァンッ！　と、激しい爆発に大型E．B．Bは飲まれていく。
晶は息を呑んで、その様子を見守った。
煙がもくもくと晴れていくと、そこには綺麗に穴の開いた無残なE．B．Bの姿が映し出される。

まさか、今の一撃で終わったとでもいうのだろうか？
しかし、レーダーを見る限りではまだ反応が残っている。
状況を見る限りでは、確実にコアは撃ち抜かれているはず――

「あれは……？」

その時、晶は上空に舞う赤い物体に気づいた。
……大型Ｅ．Ｂ．Ｂのコアだ。
ゼリー状の物体に包まれ、何故か単体で宙へと浮いている。
何故こんなところに、コアが？
その瞬間、コアは尋常ではない速度でｉ・ブレードへ向けて突進し始めた。

「コアが単体で動いた？　ど、どうなってんだよ……？」

理由なんて考えている場合ではない、今は目の前の『Ｅ．Ｂ．Ｂ』を何とかする事だけを考えるしかない。
晶はブラックホークを構えた。

「当たれぇっ！！」

バババァンッ！　と、二丁のブラックホークを同時に発砲させる。
だが、コアはまるで意思でも持っているかのように俊敏な動きで回避をした。

ズキンッ――
突如、晶の頭の中から激しい頭痛が襲い掛かる。
……危険察知の前触れではない、ｉ・システムを起動する時の感覚と何処か似ていた。
何故今のタイミングで、この痛みが？

その瞬間、ι・ブレードの目の前にE．B．Bのコアが辿り着く。

ガァァンッ！！

激しい音と共に、コックピット内が激しく揺れる。

その瞬間、晶は頭痛に解放された。

一体何が起きたのか……危険察知も発動しなかったというのに。

気が付くと目の前のE．B．Bコアは消え去っていた。

「ど、何処へ行ったんだ？」

レーダーで位置を確認しようとすると――突如、コックピットが青く灯り、警告音が鳴り響いた。

『システムエラー発生、システムエラー発生。　ιシステム、シャットダウンします』

「システムエラーだって？　な、何が起きたんだよ？」

『信号遮断されました、制御不能……制御不能――』

「ど、どういうことだ？　まさか、壊れちまって――」

その時、晶はレーダーのE．B．Bの位置を確認して……ようやく自分の身に何が起きたのか理解した。

ι・ブレードの位置と、大型E．B．Bの反応が合致していたのだ。

先程、コアが接近してきたときの頭痛……コックピットの衝撃があった後から、突如消え去った頭痛。

無関係とは思えない……少なくとも、ここから導き出される答えは一つ。

「まさか、乗っ取ったのか？　ι・ブレードを――」

操縦桿はいくら動かしても固定されており、スロットルも同じように固定されてしまっている。

ドクンッ……晶の心臓が高鳴った。

ι・ブレードがE．B．Bのコアに乗っ取られて、制御が不能になった今……とてつもない胸騒ぎがした。

もし、自分の考えが正しければ……事態は只事では済まない。

『晶、応答しろ。　どうした？』

「ゼ、ゼノス……？」

どうやら通信はまだ生きているようだ。

晶は急いでゼノスに状況を伝えようとした。

「ι・ブレードの制御がきかなくなったんだ、突然頭痛が起きたかと思ったらぱったりと止んで……

さっきコアが向かってきて、それからっ！！」

『落ち着け晶、コアについては俺も確認した。　……今、ι・ブレードの胸部に張り付いている』

「落ち着けるかよ……よく聞いてくれゼノス、もしかしたらι・ブレードはこのまま――」

ガコンッ――

その時、コックピット内が揺れた。

勿論、晶自身は何もしていない。

……ι・ブレードが、勝手に動き出していたのだ。

ギュンッ！　と、ι・ブレードが急加速をすると目の前には数機のスカイウィッシュの姿があった。
ι・ブレードはムラクモを静かに構える。

「おい、冗談だろ……やめろ、やめろよっ！！」

バシュンッ――
目にも留まらぬ速さで、ι・ブレードはスカイウィッシュ3機を一瞬で切り裂いた。
3機は力なく、地へと向けて墜落していく――

「う、ウソだろ……？　や、やりやがった……お、俺が……やっちまった、のか……？」

晶は両手で頭を抱えて、そう呟く。
自分の手ではないと言えど、今……ι・ブレードの手によって、共に戦う仲間が斬られてしまった。
あまりに突然の事で、晶は頭の中が真っ白になった。
こんな事は、有り得てはいけない――

『晶っ！　お前は内部からιを止める方法を探せ、俺達が何とかして食い止めて見せるっ！』

「……クソッ！　何で、何で言う事聞いてくれねぇんだよっ！！」

晶は強く操縦桿を叩き付け、叫んだ。
パイロットの意思とは関係なく、ι・ブレードは勝手に動き出し周りのスカイウィッシュ部隊に次々と手をかけていく。
次々と撃ち落されては、切り裂かれ……時には抵抗しようとムラクモを受け止めるものの、抵抗は虚しくιは容赦なく味方を襲い続け

た。

「何してんだよ……何でこんな事してんだよっ!!　応えろよぃっ!!」

力強く叫んでも、コックピットはいつものように赤く灯る事はなかった。

……完全に、制御系が乗っ取られてしまっているのだろうか。

しかし、何故E．B．Bにそんな事ができる？

すると晶は、遠くにもう一つの大型E．B．Bの反応を確認した。

「また大型の反応……？　クソッ、こんなタイミングで――」

ギュンッ!!

突如、ぃ・ブレードが急激に速度を上げると晶は強いGに襲われる。

どういう訳か、ソルセブンの部隊から離れて大型E．B．Bのところへ向かっているようだ。

「何だ……何でそこに向かおうとしてんだ？」

不思議そうにレーダーを確認すると、コックピットが僅かに赤く灯った。

先程まではいくら騒ごうが反応がなかったというのに。

「ぃに反応が……？　ひょっとして、誘導してくれたのか？」

晶が声をかけると、ぃ・ブレードは再度僅かに赤く灯らせる。

やはり、ぃ・ブレードはE．B．Bに乗っ取られてしまった事を確信した。

「どうすればいい……クソッ！」

コックピットの中にいながら、ι・ブレードの制御をできない自分に苛立ちを隠せなかった。

あの時ちゃんと、コアを撃ち落せていれば……こんな事態にはならなかったというのに。

一体、何人が犠牲になってしまったんだろうか。

共に世界平和の為に戦っていたメシアの一員だというのに。

……無実の人間を、手にかけてしまったというのか――

「クソッ……ι・ブレードだって、何とかしようと動いてくれてんだ……俺だって、何か……何かできるはずだろっ！」

晶は必死で方法がないかを考え続けていた――

「各位、被害状況を伝えろっ！」

「スカイウィッシュ部隊、およそ１５機が撃墜されました。ι・ブレードは旧メシア基地へと向かっています」

「現在、救護活動を行っていますっ！　手の空いている者は救援活動へ回ってくださいっ！！」

ソルセブンのブリッジルームは、パニック状態に陥っていた。
まさか味方機であるι・ブレードが、スカイウィッシュ部隊に斬りかかるとは想像もしていない。
少なくとも晶がそのような事をするパイロットではない……ι・ブレードに、何かが起きたとしか考えられなかった。

『イリュード艦長、頼みがある』

「……何だ、手短に話せ」

突然、ゼノスから通信を確認するとイリュードはそう返した。

『スカイウィッシュを一つ貸してくれ』

「何をする気だ？　まさか、ι・ブレードを止めるというのか？」

『そうだ』

「だが晶が乗っているんだぞ……それにスカイウィッシュではιには――」

『このままでは被害が広がる一方だ……ι・ブレードが民間区域に足を踏み入れて見ろ……取り返しのつかない事態に陥るぞ』

イリュードはゼノスのその言葉を聞いて、息を飲んだ。
晶の意思であろうがなかろうが、ι・ブレードが迷いもなくスカイウィッシュに攻撃を仕掛けたのは事実だ。

……民間人に手を出さない保証もない。
仮にι・ブレードが民間人に手をかけてしまえば、民間からのメシアへの不信感が一気に広がってしまうだろう。
メシアは人々の希望でなければいけない……そんな事態が起きてしまえば、再び人々は絶望に陥る――

「残念だが、スカイウィッシュは余っていない……代わりに換装パーツをレッドウィッシュに使え」

『了解した』

「ιの件はお前に任せる、第7支部からも新型で応戦するように連絡を入れておくぞ」

『ああ、任せてくれ』

ゼノスはそう告げると、通信が途切れた。
今頼れる者は、あのゼノフラムを乗りこなす凄腕のゼノスだけだ。
……あの暴走したι・ブレードでも、ゼノスなら相手にできるかもしれない。

「……頼んだぞ、ゼノス」

ι・ブレードを相手にするには、ソルセブンのような巨大戦艦は向いていない。
今はただ、ゼノスがιを止めてくれると信じるしかなかった――

暴走？

第7支部にて、警報が鳴ってから数時間が経過した。
メシア兵が使用する宿舎の空き部屋で、木葉は心配そうに窓から外の様子を眺める。

「……大丈夫、なのかな」

あれから特に大きな騒ぎが起きているようには見受けられない。
不安は残るが、木葉はベッドに横になってため息をつく。
フリーアイゼンが襲撃を受けた騒動後、木葉は第7支部にて保護されていた。
元々は避難区域へ引き渡される予定だったのが、今はフリーアイゼンが身動きを取れない状態である。
未だに自分が今後どうなるのかが見えずに、不安が隠しきれない状況だ。

晶が死んだと聞かされてからの木葉は、精神的に相当追い込まれていたのは言うまでもない。
帰る家もなく、家族や友達は全てE・B・Bの襲撃で失い、晶までも失ってしまえば……追い込まれない、という方が無理な話であろう。
晶は、自分が死にかけたというのに……今でも、世界の人々の為にE・B・Bの討伐をする為、アヴェンジャーと戦う為に再びι・ブレードに乗っている。
本当はもう戦ってほしくない、パイロットを辞めてほしいと思っていた時もあった。

だけどそれは、木葉は晶を失うのが怖いから、もう危ない目に逢ってほしくないから、といった思いだ。
実際、晶は自らパイロットになる事を選んだ上に、パイロットとして戦うことにもはや恐怖心を抱いていない。
学生時代の時から、晶のパイロットに対する情熱も知っていたし、一生懸命頑張ってきた姿をずっと見守ってきた。
せっかく叶った晶の夢を、壊したくはない。
だから木葉は、そんな晶をずっと支え続けたい、そばにいてあげたい、力になってあげたい。
それをどうにかして叶える方法がないかを、ずっと悩んでいた。

「やっぱり、これ……なのかな」

布団の近くには山積みになった教材の数々。
シラナギからの提案にもあった、フリーアイゼンの正式なクルーとなる事。
フリーアイゼンは人員不足で、現在まともなオペレーターがヤヨイ一人しかいない。
ヤヨイの負荷が相当大きいと、シラナギが以前に話してくれたこともあった。
戦況オペレーターとして働くことが出来れば、晶と離れ離れになる事もなく……共に戦うことが出来る。
だが、自分にそんなものが務まるのだろうかと、木葉は悩んだ。
やはり避難地区で大人しくしているのが、一番なのかもしれないと、再びため息をついた。

「……晶くん、まだ帰ってこないのかな」

ここのところ、晶と会話をする機会が減ってしまった。
立て続けに色々な事が起こりすぎて、晶は随分と悩んでいるように

見えた。
そんな状態で、自分の悩みを打ち解けるのは晶に申し訳ないと思う。
だが、一人で悩んで答えが出ないのであれば、直接晶に相談するのが一番だろう。
勿論、シラナギに相談するのも一つの手ではあるが、彼女は強引な上にオペレーターを目指すために木葉に尽くしてくれるだろう。
しかし、そういった強引な方法で自分を納得させたいとは思えない。
ちゃんと考えて、自分の納得いく答えがほしい、と考えた。

シラナギのやり方や性格が悪い、とは言わない。
ただ、木葉は後押しがほしいのではなく……もっとじっくり考えてみたい、というだけだった。

「晶くんも頑張ってるんだから、私も何かしないと……」

木葉は胸に仕舞い込んでいたナイフのケースを握りしめた。
……護身用として持っていたナイフだが、今となっては身に着けているのが少し怖い。
二度も、このナイフで自殺を図ろうとしてしまったのだから。
だけど、身に着けていないと何処か落ち着かない。
結局木葉は、首飾りの代わりにナイフをぶら下げ続けるのであった。

旧メシア基地のポイントに、シリアは到着した。

「こ、ここか？」

全速力で飛ばしてきたこともあり、身体の負担は相当大きい。
最初は初めての空に感動を覚えていたが、段々とそんな余裕はなくなっていた。
相変わらず足に力が入らない上に、時々激しい痛みが足全体に走る時がある。
ミケイルが少し言っていたが、治療後は定期的に足の神経全体に痛覚が走る事が多々あると聞いた。
慣れないうちに足を使い続けると、その痛覚が悪化して、最終的には気絶するほどの激痛へと達すると脅された事も覚えている。
その程度で降りるわけには行かない、ラティアの代わりに新型を取り返しに来たのだから――

レビンフラックスは人型へと変形し、地上へと着陸する。
レーダーには確かにＨＡの反応がある……フラムの予想は正しかった。
だが、油断はできない。
アヴェンジャーの奴らが、逆にこのように堂々と自分の場所を晒しているのは何か理由があるはずだ。
罠の可能性も十分に考えられる……かと言って、このまま突っ立っていても時間の無駄ではあった。

「しゃーない、炙り出してやるか」

レビンフラックスは、二丁のライフルを構えた。
ＨＡの反応がするポイントに目掛けて、発砲する。
ガガァンッ！　と、瓦礫が崩壊するが……特に相手側の動きはない。
今度はグレネードを投げようと、シリアは準備をしようとしたところ――

バシュンッ！
突如、一機のＨＡが上空へと目掛けて飛び上がった。
あの赤い機体、見たことない形だ。
となると、新型のブレイアスはあのＨＡである事は間違いない。
同時に、レビンフラックスへと映像通信が入り込んだ。

「げ……まさか」

シリアは嫌な予感を感じさせながらも、映像を受信した。

『アッハッハッハッハァッ！！　生きてた、生きてた生きてた生きてたぁぁぁっ！！！』

「やっぱり、テメェかよ……っ！？」

サブモニターには、目が血走らせて発狂している『フィミア』の姿があった。
復活早々厄介な相手に当たってしまったと、シリアはため息をつく。

『ねぇねぇ、どうやって足を治したの？　やっぱり愛の力？　そうだよね、私達やっぱり運命の赤い糸で結ばれてるんだよ。
ウヒヒ、ずっと、ずっと一緒だよお姉さん……もう、絶対に逃がさないから……ウヒ、ウヒヒヒヒィィッ！！』

「な、何でアタシの足の事を……？」

『ねぇ来てよお姉さん……その新しい玩具、試したいんでしょ？
ウヒヒ、ゾクゾクしてくるね……私も新しい玩具で、お姉さんを試してあげるぅぅっ！！』

その瞬間、有無も言わさずブレイアスは高速で接近してくる。
シリアはすぐに上空へと舞い上がり、飛行形態へと変形させた。

「冗談じゃねぇよ、ＨＡは玩具なんかじぇねぇっ！！」

『アッハッハッハァッ！！　すごーい、はやぁぁいっ！！　私じゃ、追いつけないよぉぉぉっ！！！』

スロットルを限界まで押し込んでいるものの、ブレイアスは負けじとレビンフラックスの背後を追い続ける。
バンッ！　バンッ！　と、ライフルが発砲され続け、シリアは辛うじて避け続けた。

「いちいちうるっさいんだよっ！　これでも食らってろっ！！」

シリアは機体をぐるりと旋回させると同時に、ミサイルを放った。
バシュンバシュンッ、と飛ばされていく２本のミサイルはブレイアスへと向けて飛ばされていく。
だが、ブレイアスは迫りくるミサイルから距離を取りながらライフルであっという間にミサイルを撃ち落していった。

『ウヒヒ、こんなものじゃ私を愛せないよ？　アハハ、アッハッハッハッハァッ！』

「チッ、相変わらず気持ち悪い奴だな」

ギュンッとシリアは機体を旋回させ続け、ブレイアスの背後を取った。
それと同時に機体を人型へ変形させ、２本のソードを構える。

「さっさとくたばっちまえよ、この変態っ！！」

シリアは最大まで機体を加速させ、一機にソードでブレイアスを切り裂く。

轟音と共に、凄まじい速度でレビンフラックスは直進していった。

バキィィンッ！　鈍い音が響く。

ブレイアスからは煙が吹き出し、徐々に地へと墜落していった。

『アハハハ、アッハッハッハッハァッ！！　お姉さん、お姉さんっ！！　いいよ、今のすっごく良いっ！！

お姉さんがそこまで愛してくれるなら、私はもっともっと、いっぱい愛してあげるねっ！　アッハッハッハッハァッ！！』

「テメェは二度とアタシの前に現れんな――」

その時、シリアは別方向から紫色の光を見えた。

「あれは――」

咄嗟にシリアは飛行形態へと変形させ、スロットルを最大まで押し込んだ。

凄まじい速度で前進していった後、紫色に光がバシュンッと飛ばされていく。

地上を確認すると、一機のレブルペインがロングレンジキャノンを構えていた。

「ロングレンジキャノンだって？　何でそんなことに……」

シリアが地上を確認していると、バンッ！　と銃声が鳴り響く。

コックピットが激しく揺れ、機体がバランスを崩し始めた。

「まずい……っ！」

何とか持ちなおそうとシリアは操縦桿を握りしめ、機体を上昇させる。

サブモニターには被弾を告げるメッセージが表示されていた。

装甲面は問題ないにしろ、飛行形態の場合は機動性を確保するために、精密な設計がされている。

その代償か、ちょっとした振動でもすぐにバランスを失ってしまうのだ。

「嘘だろ……この速度でアタシに当てたのか？」

変形している最中はシリアは決してスピードを緩めていない。

全速力で飛ばしていたところを、一撃で狙われたようだ。

『よう、新型を傷つけられた気分はどうだ？』

「気にすることないさ、アタシが倍以上にして返してやるっ！」

地上にはレブルペインの姿があった。

何故か頭と腕のパーツにウィッシュのものが使われているようだが。

シリアは地上へ向けて機体を降ろそうとした瞬間――

ズガァァンッ！

突如、地中から赤い鉱石のようなものが飛び出した。

「な、なんだっ！？」

『……これが噂のオートコアか、本当に出てきやがったな』

「オートコアだって？　アンタ、詳しく聞かせてもらうよ」

『嫌なこった、少しは自分で調べてみるんだな』

コアと言われると、何処となくE．B．Bのコアと形は似ている。
いや、そのものだろうか……。
しかし、そうだとしても独りでに地中から飛び出してくるのは妙だ。
E．B．Bのコアは生物がエターナルブライトによってE．B．Bにさせられた際に出来上がる物のはず。
あれが、ただのE．B．Bのコアだとは思えなかった。

すると、オートコアは一人で自在に動き回り始める。
レーダーの反応から見ると、大型E．B．Bの反応と全く同じだ。
見た目や形から判断しても、とてもじゃないがE．B．Bとはかけ離れた外観だというのに。
どちらかというと、エターナルブライトの形に近いと言える。

「どっちにしろ、E．B．Bである事に変わりはない……始末させてもらうよっ！」

シリアは照準を合わせて発砲をするが、オートコアは俊敏な動きで回避をする。
ならば接近戦で捕えようと、シリアは変形をしてソードを構えた。
速度を上げ、距離を徐々に縮めていくが小刻みかつ不規則な動きに振り回され、中々捕えることが出来ない。

「クソッ、めんどくせぇったらありゃしねぇぞ……どうすりゃいいんだっ！？」

シリアは機体を停止させて考え込む。
せめて動きの法則性でもわかれば、マシになるのだが――
その瞬間、地上から凄まじい速度でブレイアスがサーベル片手に迫っている姿を捕えた。

『お姉ぇさぁぁぁんっ！！！　アハハ、アッハッハッハッハァッ！！』

「しつけぇな、クソっ！！」

サーベルとソードがぶつかり合い、火花が飛び散る。
狂ったかのように猛攻してくるブレイアスのサーベルを、シリアは強引にソードで抑え込んだ。
その時、ガァンッ！　と激しくコックピットが揺れた。
地上からレブルペインが射撃をしてきたのだ。
その隙にブレイアスはギュンッと猛スピードで離れて行った。

「新型と言えど、流石に2機相手は厳しいか……いや、アタシがなまっただけか――」

煙を噴き出しているものの、ブレイアスはまだまだ動ける状態にあるようだ。
あの状態ではオーバーロードを引き起こす可能性も考えられるが、あのフィミアはそんな事お構いなしに突っ込んでくるだろう。
その時、レーダー上にもう1機のＨＡの反応を確認した。

「な、誰だ？」

シリアは方角を確認すると、そこには見慣れたＨＡ……ι・ブレー

ドの姿があった。
ムラクモを片手に、こちらへと向けて接近をしてきている。

「晶……？　来てくれたのかっ！　アタシだよ、シリアだっ！」

『え、シリア……？』

ι・ブレードへと通信を入れると、間違いなく晶の声で返事が来た。
新型が盗まれたと聞いて、援護に来てくれたのだろうか。
ι・ブレードがいれば、今の不利な状況を簡単にひっくり返せるはずだ。
例の『オートコア』というのを仕留める為にも、仲間の協力は不可欠と言えるだろう。

「話は後だ、今はアタシと共にこいつらをやっちまうぞっ！　協力してくれるか？」

『だ、ダメだっ！』

「ダメだ？　何がだよ？」

『逃げてくれ、今のι・ブレードは――』

ι・ブレードは凄まじい速度を落とすことなく、シリア機へと向かって突進をしてくる。

「お、おい……奪われた新型はあっちだぞっ！？」

『新型とかそんな事よりも、早く逃げてくれっ！』

ガキィィンッ！

ι・ブレードが速度を緩める事なく、ムラクモをレビンフラックスへと向けて振るう。

シリアは間一髪でサーベルでムラクモの一撃を受け止めた。

だが、サーベルで受け止めただけでブレイアスの時とは比較的にならない程の強い振動が伝う。

更にι・ブレードが加速を止めることなく、レビンフラックスは勢いのまま押され続けていた。

「どういうことだ晶っ！　まさか、アンタ――」

『違う……俺じゃないんだっ！　ι・ブレードがE．B．Bのコアに乗っ取られちまってるんだよっ！』

「E．B．Bの、コアだって？」

シリアはふと、先程のオートコアの存在を思い出す。

良く見れば、ι・ブレードの胸部にはそれと似たようなものが取り付けられていた。

……晶がこの場で嘘をつくはずもない、ι・ブレードが乗っ取られたというのは本当の事だろう。

「クッ……事情は知らないけど、ちょっとだけ我慢しろよっ！！」

シリアも負けじとスロットルを限界まで押し込むと、少しだけι・ブレードの力が弱まる。

その隙を狙って、ι・ブレードを蹴飛ばして強引に突き放す。

更に飛行形態へと変形して、シリアはできる限り遠くへと離れて行った。

『……ラティア、手伝えっ！』

「ゼノスか？　アタシはシリアだよっ！」

『シリアだと？　足は治ったのか？』

「説明は後だろ、それよりもι・ブレードが乗っ取られたって本当か？」

『ああ……このまま民間区域に入れば、ι・ブレードは無差別に人を殺し続ける。　どうにかして、ここで食い止めるぞ』

「ど、どういう事なんだよ……何でそんな事態に？」

シリアの頭の中はこんがらがるばかりだ。
だがそれはゼノスや晶も同じだろう。
どういう訳かシリアが戦場に出てきているのだから。

『アッハッハァァッ！！　お姉さん、お姉さんっ！！』

そして再び、聞くのも嫌になってくるほどの声がコックピット内に響き渡る。
うんざりとしながらシリアは迎え撃とうとソードを構えた。
だが、ブレイアスはレビンフラックスを素通りしていく。
何かと思いきや……その先には俊敏に動き回るオートコアの姿があった。
ブレイアスは両手でオートコアを捕え、宙へと高く飛び上がっていく。

『アッハッハッハッハァァッ！！　とったぁ、とったよぉぉっ！！

お姉さん、今度はもっともっと私を愛してねっ！！　私も、いっぱいいっぱい愛し合う準備してくるからぁぁっ！！』

「オートコアを捕えた？　一体何に使う気なんだ？」

ブレイアスはそのまま、戦域を離れて速度を上昇させていく。
ここで逃がしてしまえば、新型の追跡は難しくなるだろう。

『シリア、あいつは放っておけっ！！　今はι・ブレードを止める事が先決だっ！』

「……チッ、わかったよっ！！」

やむを得ないか、とシリアはι・ブレードへ注目する。
その後、スカイパーツを身に着けたレッドウィッシュが姿を現した。

『すぐに止めるぞ、奴らを見失う前にな』

「言われなくとも、そうするさっ！」

E．B．Bに乗っ取られたι・ブレードを止めるべく、ライフルを構えた。
理由はわからないが、HAをただの殺戮兵器とするわけには行かない。
こんな形で晶と戦う羽目になるとは思わなかったが、戦うしかない。
ι・ブレードの性能は、十分に理解している。
恐らく新型であるレビンフラックスでも苦戦を強いられるのは必至だ。
必ず止めて見せる、シリアはそう誓った。

暴走？

ソルセブンのブリッジルーム。
E．B．Bに乗っ取られたιの追跡をゼノスに任せ、ソルセブンは遅れて大型E．B．Bの反応があったポイントへと舵を向けていた。

「住民の避難を急がせろっ！　モタモタすんじゃねぇっ！！」

イリュードは手の空いている者に、大型E．B．Bが出現したポイント付近の避難を急がせていた。
ただでさえι・ブレードが乗っ取られた事だけでも手がいっぱいだというのに、新たな大型E．B．Bの反応が確認された以上、最悪なケースを想定せざるを得ない。
住民の避難が間に合うとは思えないが、何もしないよりも遥かにマシだ。

突如出現した大型E．B．Bの反応は事前には確認されておらず、不可思議な点が多い。
この不自然な動きはアヴェンジャーの関与を疑うべきだろう、とイリュードは判断した。

「艦長、第7支部より新型機が奪取されたと通達がありました。現在味方機が単独で追跡をしているようですが、援護をよこせないかとの事です」

「やはりアヴェンジャーの仕業か、ならばこの大型E．B．Bも奴らが仕向けたと考えていいな……いや、もしかすると」

オペレーターの報告を確認すると、イリュードはふと仮説を思いつく。

あのE．B．Bはコア単体で動いていた事から、何処か普通のE．B．Bとは異なっていた。

E．B．Bが新たな力を手にしたと考えるのが自然だが、そこに更なる裏が潜んでいたとすれば？

アヴェンジャーは今までに大型E．B．Bを誘導してきたことも数多い。

もしも、アヴェンジャーが完全にE．B．Bを操る術を手にしているとしたら――

「大型E．B．Bが高速で移動を開始……？　は、反応がロストしましたっ！」

「なんだと？　……クッ、すぐに本部へ通達しろ。　E．B．Bの追跡を急げっ！」

つい先ほどまで全く動きを見せていなかった大型E．B．Bが、突如反応を消した。

前に報告されたレーダーから反応を消すE．B．Bの存在を思い出すが、今回はそうではないようだ。

レーダー上で確認した限りでは、大型E．B．Bが高速で移動を行い、レーダーの範囲外まで逃げたようにしか見えない。

だが、イリュードはそうではないと考えた。

今現在反応を消したE．B．Bが、先程目撃したE．B．Bと同一である事が十分に考えられる。

「我々が知らないところで何かが起きている……？」

胸騒ぎを感じたイリュードは、一人そう呟いた。

今は余計な事を考えず、E．B．Bの殲滅を優先するべきだ。
HAを操るような危険なE．B．Bを見逃すわけには行かない。
メシア本部の力を借りてでも、止める必要があった。

モニターの先には、ムラクモを構えたまま静止をしているι・ブレードの姿がある。
胸部には不気味に輝く赤いE．B．Bのコア……状況から見て、それが原因でι・ブレードは制御不能となっているのだろう。
ι・ブレードの性能は、共に戦ってきたゼノスやシリアは十分に理解している。
ブラックホークの驚異的な破壊力に、ムラクモはHAをいとも簡単に切り裂くほどの切れ味を持つ。
一瞬でも気を抜けば、致命傷になりかねなかった。

『で、どうすりゃいい？　まさか、落とすのか？』

「……胸部のコアを狙う。　それでιが止まらなかったら別の方法を考えるぞ」

『なら、アタシが引き付ける。　ゼノスはコアを狙う事だけを考えてくれ』

「了解、任せるぞ」

ただ闇雲に二人で狙っても、ι・ブレードに傷一つ負わせることが出来ないだろう。
シリアはそれを理解したうえで、ゼノスにそう言った。
だが、先に動き出したのはレビンフラックスではなくι・ブレードだった。
ムラクモを構え、凄まじい速度でレッドウィッシュへと向かっていく。

バシュンッ！　その瞬間、目の前に銃弾が横切った。
レビンフラックスが瞬時に放ったのだが、ι・ブレードはくるりと回転して弾を避けていく。
2発、3発とライフルを撃ち続けるが、ι・ブレードは全弾避けて見せた。
まるで弾の動きをわかっているかのような避け方から、あの状態でも『危険察知』が働いていると考えていい。

「……シリア、仕掛けるタイミングを合わせるぞ」

『ああ、わかっているさっ！』

ゼノスは機体をι・ブレードを潜り抜けるように、降下させていく。
ライフルを構えた瞬間に、僅かにι・ブレードが照準をずらすかのように動き始めた。

「いくぞ」

『あいよっ！』

バシュンッ！　レッドウィッシュはιの軌道を読み、ライフルを放

つ。
すると ι・ブレードはギュンッを加速を行い、弾を避けきった。
その隙を逃すまいとレビンフラックスがライフルを2発放った。
確実に ι・ブレードの軌道を読み切ったのだが、そこで予想外の事が起きる。
急遽 ι・ブレードはほぼ直角に近い形で上昇をしていったのだ。

「何……？」

『なっ、今のが見えたのかよっ！？』

ι・ブレードの危険察知には制約があるはずだ、今の攻撃はそれこそ戦いなれたシリアやゼノスですらも反応する事が難しいタイミングだった。
パイロットを通じていない為、 ι システムの制約が存在しない……という事も十分に考えられる。
だが、あのような直角な動きはパイロットへの負荷も大きいはず……晶の身が持つのか、不安が過ぎった。

「晶、応答しろ。　無事か？」

『お、俺の事は気にしないでくれ……それよりも、早く ι を――』

晶の反応はあったが、その声を聞く限りではとてもじゃないが無事とは思えない。
ゼノスのような身体でない限り、その負荷を長期に渡って耐えられるはずがなかった。

『ボサッとするな、来るぞっ！！』

ι・ブレードは両手にブラックホークを構え、2方向へと向けて発砲する。
レッドウィッシュが辛うじて弾を避けた瞬間、僅かにコックピットに揺れた。
通り過ぎていくだけでここまで衝撃が来るとは、ゼノスはブラックホークの破壊力を思い知らされた。
すかさず、レッドウィッシュはライフルを発砲させると、再びι・ブレードはレッドウィッシュへと向かいながら、二丁のブラックホークを放つ。
弾速が予想以上に早く、全てギリギリのタイミングで交わしているものの、一瞬でも気を抜けば直撃してしまう。
その時、レビンフラックスが人型に変形してι・ブレードへと向かって斬りかかった。
ι・ブレードはその一撃を避けて、あっという間にレビンフラックスの背後を捕える。

「させんっ！」

ムラクモを使わせまいと、レッドウィッシュはι・ブレードの手を狙って発砲するが、軽々と避けられてしまった。
ι・ブレードに攻撃の隙を与えてはならない、かつてない程の強敵にゼノスは思わず、息を呑んだ。
こうしている間にも、ι・ブレードを動きだしレビンフラックスへ向かって接近していた。

「シリアっ！」

『わかってるっ！！』

咄嗟にレビンフラックスはミサイルを放ち、飛行形態へと変形して

上昇していく。
ブラックホークでミサイルを瞬時に撃ち落し、ι・ブレードは凄まじい速度でレビンフラックスを追いかけていった。
怯まずにゼノスはライフルを発砲し続け、徐々にι・ブレードとの距離を縮めていく。
空高く舞い上がっていったレビンフラックスは、一定の高さまで上昇すると機体を人型へと変形させ2本のソードを取り出し、1本の巨大な剣へと合体させる。
ι・ブレードがムラクモを構え接近する中、レビンフラックスはそのまま突撃していった。
背後に回り込むように機体を大きく旋回させ、ι・ブレードの背後を捕えた。
だが、瞬時にι・ブレードはムラクモでレビンフラックスの重い一撃を受け止める。

『い、今だゼノスっ！』

一瞬だけ動きの止まったι・ブレードのコアを捕え、ゼノスはライフルを放とうとした。
対して、ι・ブレードは片手でブラックホークを取り出し瞬時に発砲する。

ガァァンッ！　コックピット内が、激しく揺れた。
レッドウィッシュの右足が、撃ちぬかれ破壊されたのだ。
機体がバランスを失い、制御を戻している間に……再び金属音の鈍い音が響き渡る。
レビンフラックスがι・ブレードに押し出され、吹き飛ばされていた。

「くっ……シリアっ！！」

『ク……ソッ――』

レビンフラックスは何とか無傷で済んだようだが、様子がおかしい。
何故か立ち止まったまま、微動だにしなかった。

「おい、どうした？　返事をしろ」

『クソッ、これぐらいの激痛――』

「……まさか」

シリアは昨日まで、足が動かすことが出来ない体だったはずだ。
どんな治療をしたかはわからないが、治療が不可能とまで言われた足が一日二日で完治するようなものではない。
あのような体の負荷が強い機体に乗っていては尚更だ……長く持つはずがなかった。

『二人とも、逃げてくれ……っ！　このままじゃ、やられちまうっ！！』

晶の悲痛な叫びが聞こえてくる、だがこのまま退けばι・ブレードが民間地区へと向かってしまう。
それだけは何としてでも、避けなければならなかった。
だが、その願いも虚しく……ι・ブレードは追撃を仕掛けずに、高速で飛び立ってしまった。

「……俺はι・ブレードを追いかける、お前は一度退け」

『嫌だね……このまま手ぶらで帰っちまったら、姉貴が黙っちゃい

ないさ……』

「退け、その身体ではもう戦う事はできないはずだ」

『嫌だ、っつってんだろうがぁっ！！』

レビンフラックスは飛行形態へと変形し、全速力でι・ブレードを追っていった。

「シリア……っ！」

これ以上シリアに無茶をさせるわけにはいかない。

何が何でも、ι・ブレードを止めなければならない――

ゼノスは、スロットルを限界まで押し込み、ι・ブレードを追いかけて行った。

「クソッ……仲間まで、傷つけちまった……どうすりゃいいんだよ……」

晶はι・ブレードのコックピットの中で、必死で機体を止める方法を探していた。

だが、どの命令もコックピットからでは全く受け付けられず、内部からの制御をすることが出来ずにいる。
脱出も試みたが、命令が通ずることなく晶は完全にコックピット内に閉じ込められていた。

「止まってくれ、止まってくれよ……どうしたってんだよ――」

晶は力なく、ι・ブレードに語りかけるが反応を全く示さない。
やはり、E．B．Bがιシステム自体を乗っ取ってしまっているのだろうか。
しかし、ι・ブレードは一体何処へ向かおうとしているのか。
先程のように大型E．B．Bを追いかけているのかと思いきやそうではない。
反応はロストしており、そのポイントへ向かっているようにも見えなかった。

すると、ι・ブレードは突如その動きを停止させる。
一瞬、願いが通じて止まってくれたのか……と思いきや、晶はモニターの光景を目にして青ざめた。
設備された道路と建物の数々に、避難を行っている人々の車の列。
数多くの避難用の輸送艦が飛び交うこの光景――間違いなく、民間区域であった。

「……やめろ、やめてくれっ！！」

ガチャガチャと激しい音を立てながら、晶は必死で操縦桿を動かす。
だが、ι・ブレードの制御は戻っていない。
晶の願いは虚しく、ι・ブレードはブラックホークを二丁構えた。

「やめろ、ι……お前はそんな事をする為に作られたんじゃない…

…撃つな、撃つなっ！！」

晶の言葉は、ι・ブレードに届くことはなかった。
ゆっくりとトリガーが引かれ、ブラックホークが発砲される。
バァンッ！　と、銃声が響き渡った。
渋滞している車に目掛けて、弾が容赦なく直進していく。
ズガァァァンッ！！　複数の車が爆発し、道路が一瞬で破壊された。
何十台もの車が横転し、吹き飛ばされ、爆発していく。
その光景を目にして、晶は言葉を失った。

「……嘘、だろ。　本当に、やっちまったのか……？」

人類の希望となるべくＨＡが、ι・ブレードが……民間人をこの手で撃ってしまった。
それだけではない、ι・ブレードは仲間すらも傷つけてしまっている。
何も知らずに一撃で撃ち落されたスカイウィッシュ部隊の兵……恐らく、犠牲となってしまった兵もいるだろう。
そんなι・ブレードを必死に止めようと来てくれたゼノスとシリア――

晶は両手で頭を抱えて、小刻みに体を震わす。
……例え自分の手でないとしても、無差別に人を殺してしまった。
彼らはアヴェンジャーとは違う。
メシアの兵は共に戦う仲間であり、民間人はメシアが守るべき対象だ。
それなのに、ι・ブレードは……取り返しのつかない事をやってしまった。
バァンッ！　バァンッ！　と、容赦なくブラックホークは放たれ続ける。

いくつもの建物が崩壊し、民間区域は一瞬にして地獄と化した。

「俺が、あのコアを……仕留められなかったから、こんな事に――」

もっともっと自分が強ければ、こんな事態は引き起こされなかったはずだ。

例え当初に比べて腕が上がっていようと、まだまだメシアの軍人レベルには達していない。

全てはι・ブレードの性能や仲間の力を借りて、これまで戦い抜いてきた。

「俺の、せい……だ――」

全てに絶望した晶は、力なくそう呟く。

その時、ι・ブレードはムラクモを構える。

そして、サブモニターに出力された文字に……晶は我を取り戻した。

「ムラクモ……解放……？」

コックピットから赤い光が放たれ、ムラクモの光が徐々に強まっていく――

あの大型E．B．Bすら一撃で両断する一撃が、放たれようとしている――

「……やめてくれ、これ以上は……やめろよ……っ！！」

あんな強力すぎる一撃が放たれてしまえば、それこそ本当に取り返しのつかない事態に陥る。

一瞬でこの街は、廃墟と化してしまうだろう――

ムラクモは徐々に赤い光を強めていった。

ι・ブレードは両手でムラクモを構える。

「やめろ、やめろぉぉぉおっ！！！」

晶が力強く叫んだ瞬間――突如、ι・ブレードは急降下し始めた。
ガキィィンッ！！　激しい金属音が鳴り響いたかと思うと、そこには飛行形態のまま突進してきたレビンフラックスの姿があった。
ソードが取り付けられている翼の部分を、ι・ブレードがムラクモで押さえつけているが、ι・ブレードが押され続けている。
ガガガッと音を立てながら、激しく火花を散らしていた。

『晶……ごめん、間に合わなかったな――』

「シ、シリアさ――」

バァンッ！！　ι・ブレードからブラックホークが放たれ、レビンフラックスの翼が撃ち落された。
バランスを失い、地へと墜落していくレビンフラックスに向けて、ι・ブレードは再びムラクモを構えなおした。

「……もう、これ以上はやめろっ！！　ι・ブレードは、こんなことする為に開発されたわけじゃねぇだろうがっ！！
親父だって、こんな事……望んでねぇだろうがぁぁっ！！！」

何故そこで父親の事を口走ったのかわからない。
だが、晶は無意識のうちに……何処かで父親を信じていたのだろう。
ι・ブレードに向けて、力強くそう叫んでいた。
……その瞬間、コックピットが赤く灯り、僅かに動きが停止された。

「い、ι……？」

晶の言葉が、通じたのか。
その矢先、高速で移動してくるレッドウィッシュの姿を確認した。
速度を緩めることなく、レッドウィッシュはサーベルを構えて、ι・ブレードへと向かって突進してくる。

ガキィィンッ！！　見事、ι・ブレードの胸部を突き刺し……コアが砕け散った。
その瞬間、晶に激しい頭痛が襲い掛かる。
……この頭痛は、ι・システムを起動する時と同じ痛みだった。

だが、晶は操縦桿を握りしめたまま……その場を動くことはなかった。
ムラクモの解放を避けられたものの、既に民間区域の被害は壊滅的な状況だ。
モニターに映る火の海に、落とされた避難用輸送艦の数々――
かつて、E．B．Bに襲われて変わり果てたシェルターの姿と、重なった。

しかし、これはE．B．Bによるものではない。
ι・ブレードによって引き起こされた、惨事だった。
言葉を失った晶は、ただ変わり果てた街の姿を呆然と眺める事しかできずにいた――

第１３話　迷う少年　？

ι・ブレードの暴走から、１週間が経過した。
ι・ブレードが民間人に襲い掛かった事件は、既にメシア中に広まった。
ＨＡがＥ．Ｂ．Ｂに操られるという異常事態……それは、アヴェンジャーにＨＡを奪われた当初よりも衝撃的であった。
その元凶とも言われている『オートコア』についても謎が多く含まれており
他のＨＡも同様に制御が乗っ取られてしまう事があるのか、といった検討事項が次々とあげられていく。

それ以外にも再度新型ＨＡが奪われた事により、アヴェンジャーが何らかのアクションを起こす可能性も考えられる。
また、オートコアとアヴェンジャーの関連性も強く疑われており、メシアは様々な対応に追われる事となった。
数多く現れた問題の対応を話し合う為に、第７支部では緊急会議が開かれていた。
今回集められたのはフリーアイゼンとソルセブンの艦長２名、そしてゼノスとフラムの４名だった。

「諸君、我々は現在数多くの問題を抱えている。　特にアヴェンジャーが口にしていた『オートコア』といい、彼らは我々の知らない技術を所有している可能性が高い。
……奴らは何を仕出かすかわからん。　このまま後手に回り続けると、取り返しのつかない事態が引き起こされてしまうかもしれん」
ゲン・マツキは、深刻な表情で訴えた。

E．B．Bを操るアヴェンジャー、突如現れたオートコア、延々と繰り返されていくHA奪取行為……。
今までは小規模であった事とメシア以外に大きな被害が出ていなかった事から、本部では本格的な対策に乗り出すことはなかった。
だが、その行為は徐々に過激さを増し、シェルターが襲撃されたり、各地のE．B．B討伐の妨害行為、トドメはフリーアイゼンの襲撃と、もはや無視できる存在ではない。
もしも今回のι・ブレードの暴走もアヴェンジャーの仕業だとすれば、それはかつてないほどメシアに大きな衝撃を与える事となる。

「だが、アヴェンジャーの一人はオートコアを奪って逃走したのだろう？　奴らが生み出したにしては妙な行為に見える。
俺ならこう考えるね、オートコアは自然発生した。　アヴェンジャーはそれを知り、回収していっただけにすぎない、と」

「どういう事だね、イリュード艦長」

「例えば、アヴェンジャーがオートコアを生産する力を持ち、それを量産する事ができ……全てのHAをそれだけで操れるというのであれば、だ。
奴らがもうHAを奪う意味はない、わざわざ危険を冒して、支部に侵入して新型HAを奪う事なんてないだろ？」

「……確信はできん。　オートコアの件はともかくとしても、奴らはE．B．Bを利用する術を持っている。
その技術を解明する為にも、奴らの拠点を暴く必要があるだろう」

しかし、現実にはアヴェンジャーの拠点は未だに判明されていないという。
一度破棄された拠点からでも、証拠は一切残されていなかった。

「アヴェンジャーは確かにE．B．Bのコアをどうにかできる技術を持っているよ、ついこの前レブルペインの残骸からE．B．Bコアが発見された。
おかげであのレーダー無効化の謎も解けそうだ、近いうちに対策が可能になるぞ」

フラムが告げるように、レブルペインには確かにE．B．Bのコアのようなものが含まれていたという。
恐らくアヴェンジャーは何らかの技術を使って、E．B．Bのコアをｈａ技術に採用しているのだろう。

「それと、私もオートコアは自然発生したと思うぞ。　最近のE．B．Bに関する報告では、以前と比べて力を増したかのような報告例も受けている。
例えば、動きが素早くなったりとか、コアが頑丈になったりとか、レーダーから姿を消す……ビーム兵器のようなものを使いだした、等があるぞ。
E．B．Bの連中は、私達のｈａに対抗しようと……『進化』しているのだよ」

「進化……奴らめ、そこまでして人類を――」

フラムは、淡々と資料を読み上げるようにそう告げた。
もし、フラムの話が事実であれば……近いうちにｈａが通じなくなる日が訪れてしまうという事になる。
今までシェルターで身を守ってきた街も、破られてしまう危険性も高かった。

「……新型の件で気になる事がある」

突如、ゼノスはそう口にした。

「今回の新型ＨＡ……ブレイアスが奪われた時に、施設のセキュリティ機能の一部が停止されていたようだ。
これは外部から操作するのは、よほど凄腕のハッカーでもいない限り不可能と言えるだろう。
それに監視室に配置されていた警備員も、その時間帯だけ誰もいなかった」

「……ゼノス、まさか――」

「前々から気になってはいたが、今回の件で確信した。……恐らくアヴェンジャーへ通じるものが第７支部に存在する。
……いや、正確にはフリーアイゼン内に、だ」

ゼノスから告げられた一言は、あまりにも衝撃的だった。
メシア内でアヴェンジャーと通ずる者が存在するのは、うすうすと感づいてきた者も何人かいる。
だが、ゼノスはその内通者が『フリーアイゼン内』に存在すると告げたのだ。
それは即ち、フリーアイゼンのクルーに『裏切り者』がいると告発しているのと同じだった。

「……本気で言っているのか？」

「過去にアヴェンジャーは、まるでフリーアイゼンの位置が特定できているかのように……襲撃を仕掛けてきたことが多々あった。
特にフリーアイゼンが落とされかけた時は、完全に待ち伏せをされていただろう」

「しかし、フリーアイゼンの中に内通者がいたとしたら妙な話だ。
クルーの人間は誰一人逃げ出さずに船に残ったのだぞ。
……あの時点でフリーアイゼンを落とすつもりであれば、間違いなく脱出を計るはずだ」

「アヴェンジャーの事だ、使い捨てにするつもりだった事も考えられる。　或いは……絶対に死なない理由があったか、フリーアイゼンは落とされる予定がなかった、か」

「……我が艦にそのような者がいないと信じたいが、可能性としては否定しきれんな」

ゲンはクルーの事を信頼しており、本音を言えば疑うような真似をしたくはない。
だが、ゼノスの言う通りメシア内に内通者がいる可能性が強く、今までの件も内通者が存在したと考えれば辻褄が合う。

「この件については外部に漏らすなよ、逆にそいつの尻尾を掴んじまえばアヴェンジャーに関する情報を吐き出させる事もできるかもしれねぇ。
……もし事実であれば、ゲン艦長にとっては辛い事かもしれませんがね」

「構わん、そのような事で私情に振り回されるわけにもいかん。
相手もそれだけの覚悟を持って、我が艦に潜入をしているはずだ。
例えかつての仲間だったとしても……容赦はせん」

辛い表情を見せながら、ゲンはそう呟いた。

「それともう一つ……シリアの足の件も気になる。　一生歩けないとまで言われた足が、たった1日で治るのはあまりにも不自然すぎる」

「君……」

フラムはゼノスが何を言いたいのかすぐに理解できた。

「……エターナルブライトが、使われている可能性が高い」

「何だと……？」

ゲンは思わず言葉を失った。
ゼノスから告げられた一言は、内通者の件を告げられたことよりも遥かに衝撃的であった。

「まだ確証はない、だが……短期間であれほどの回復速度を考えると、それしか有り得ない」

「治療は確かＤｒ．ミケイルが担当したと聞く。　まさか、彼が？」

「アヴェンジャーの連中が言っていた、人体実験を行ったというのか？　こんな堂々と……っ！」

ガンッ！　と、イリュードは卓を強く叩いてそう叫んだ。
晶の報告にもあった通り、エターナルブライトを埋め込まれた人間はＥ．Ｂ．Ｂへと変化してしまう。
そんな非人道的な事が、許されていいはずがない。

「今すぐミケイルを呼び出せ……奴を問い詰めるぞっ！」

「落ち着くのだ、イリュード艦長。　まだ確証があるわけではない」

「だが、それが事実だとしたら……未乃　晶の報告が、真実だった事の証明になる。
つまり……アッシュベル・ランダーが、人体実験を行っている可能性が高いという事だっ！」

「……アッシュベル、彼は――」

無実だ、と告げようとしたが……ゲンは戸惑った。
かつての友を私情で無実だと告げていいものか。
しっかりとした証拠があるわけではない、ゲンが告げたからと言って彼の無実が証明されるわけでもない。
このような場では、あくまでも公平的に物事を見なければならないのだ。

「確かに、イリュード艦長の言う通りだ。　一度、ミケイルから話を聞こう」

ゲンは辛い思いをしながらも、その意見を肯定するしかなかった。

「だが、こうして４人で問い詰めても正直に話すとは限らないね、君一人で行ったらどうだ？　少なくとも、この中では彼と一番接触しているのだろう？」

「わかった、俺が行こう」

フラムがそう問いかけると、ゼノスは頷いた。

「まずはミケイルからシリアの件について尋問を行おう。　それと、ゼノスは内通者の件も調査してくれ。
お前に任せてばかりですまないが……頼んだぞ」

「……了解」

ゼノスはゲンからそう告げられると、静かに立ち上がり会議室を退室していく。

「私は本部への報告資料をまとめる、フラム博士は引き続きアヴェンジャーの技術の解析を頼む」

「俺もオートコアについては調べたいことはあるんだがな、本業のE．B．B退治をサボるわけにはいかない。　裏の件については、ゲン艦長達に任せますよ」

「ふむ、了解した。　では、失礼するぞ」

フラムも同じように、会議室を退室していく。

「アヴェンジャーが影で動きを見せている中、内部でこうも問題が起きているとは。　急がねばならない……取り返しがつかない事態に陥る前に」

ゲンは静かに、そう呟いた。

第7支部の長く続く廊下を、シラナギはトボトボと歩いていた。
一週間前の戦闘後から、晶は部屋に閉じこもったまま出てくることがない。
あれだけの大惨事が起きてしまえば、晶がそうなってしまうのも無理はなかった。
更にシリアは治療した足の激痛が収まらずに、再度入院する事となった。
三日ほどは動けなかったようだが、今では症状も落ち着き徐々にリハビリを重ねて歩けるまで回復したという。
それは喜ばしい事なのだが、シラナギは何処か浮かない表情を見せる。

「……あ」

ふと、シラナギが足を止める。
目線の先には、フラフラと俯いたまま歩いている晶の姿があった。
しかし、部屋に引き籠っていたはずの晶がどうしてこんなところを歩いているのか。
シラナギは晶に声をかけて近づこうと考えたが、そこで立ち止まる。

「んー……放っておきましょう」

普段のシラナギであれば、空気を読まずに晶に突っ込んでいくのだが、今日は違った。
流石に生気の抜けた晶の姿を見てしまうと、シラナギであっても遠慮をしてしまうのだろう。

「ちょっと、こっちのお仕事頑張りすぎましたね……流石に胸が痛

みますよ、あの姿を見てしまえば」

ふぅ、と息をつきながら、シラナギはそう呟いた。

「おっさんのところ、行きますかぁ」

ミケイルから呼び出しをくらっていたシラナギは、憂鬱な気分になりながらもミケイルの元へと向かった――

迷う少年　？

シリアの病室にて、ヤヨイとリューテの姿があった。
足の治療が終わった直後に、ＨＡで無茶な戦いを重ねたせいで再度入院を強いられたシリアであったが幸い、１，２週間体を安静にしていれば問題はないとミケイルに告げられている。
今では体を慣らすために、少しずつリハビリを重ね続けていた。

「よかったわ、貴方の足が治ってくれて。　Ｄｒ．ミケイルには感謝しないといけないわね」

「私も驚きが隠せないよ、一体どんな治療を行ったんだろうね」

「アタシもよくわかんねーんだけどさ。おかげでパイロットに戻れたどころか……ついに念願の空に飛べたからな、あの人には本当感謝してるよ」

少し前まで絶望に陥っていたシリアは、今ではすっかりと笑顔を取り戻せていた。
足の治療だけではない、今まで距離を置いていた姉とも、少しだけ分かち合えた事に喜びを抱いている。

姉は何もしなかった、メシアに入っても助けに来てくれなかった、ずっと顔を見せてくれなかった。
そんな想いを重ねた結果、姉であるラティアを恨むようになってしまったシリアであったが、今は違う。
ラティアの気持ちを理解し、今までどんな気持ちで過ごしてきたのかを理解できた。

両親を失ったのはシリアだけではない、ラティアもまた被害者なのだ。
家族を助けに駆けつけてくれたラティアは、目の前で両親を助けることが出来なかった。
その時のラティアの事を考えると、自分が今まで姉を恨んできたことを恥ずかしく感じる。

「あ、姉貴の事何か聞いてないか？」

「あら、スカイウィッシュ部隊の隊長さんのことかしら？」

「彼女なら別室で入院中さ、命に別状はないらしいから安心するんだ。　全く姉妹揃って何をしているんだか」

「そ、そうか……」

ラティアが無事である事を聞いて、シリアはホッと胸を撫で下ろした。

「あ、晶はどうだ？　あいつ、大丈夫か？」

晶は突然制御不能となったι・ブレードに乗っていたはずだ。
ゼノスとシリアの二人掛かりで、何とか機体の動きを止める事は出来たが事態は最悪な結果を招いてしまった。
例え、晶自身に非がなかったとしても……責任を感じないはずがない。

「部屋に籠ったっきり出てこないみたいだ、ご飯もろくに食べてないらしい」

「無理もないわ……あんな事件を引き起こしてしまったんですから」

「……そう、だよな。　クソッ、なんでι・ブレードがあんな事に――」

「今メシアでは大問題になっているさ、私達は晶の人間性は理解しているし……あれがι・ブレードの暴走である事は理解できる。しかし、他の者はそうではない。　一般市民からしてみれば、メシアのＨＡが無差別攻撃をしてきたのと同じだしね……アヴェンジャーでも、ＨＡ単機であんな事をしたことはなかった。それにメシア内でも晶自身がやった事を疑う声は強い……だからこそ、私達はオートコアの解析を急いでいるんだけどね」

「それは今話すべきことではないわ、何とかしてあの子を立ち直らせてあげないと……今頃、きっと自分の事を責め続けてるはずだわ」

ヤヨイは悲しそうな表情でそう呟いた。

どんな理由であれど、晶はＨＡで民間区域を襲撃してしまったのは事実。

晶が自分を責め続けて、自らを追い詰めて行くんじゃないかと心配していた。

「なら、アタシが行くよ。　晶には足が動かなくなった時に世話になったからな。

アタシの元気な姿を見れば、ちょっとだけ励みになるかもしれねぇしさ」

「それは構わないが、歩けるのか？」

「平気平気、逆に寝たきりの方が回復が遅くなるって」

「でも休んでた方が……」

「大丈夫さ、ＨＡに乗るわけでもないしさっ！」

二人が止めるのを無視して、シリアはゆっくりと両足でベッドから立ち上がろうとする。

ぎこちない足取りで、松葉杖を持たずに一歩ずつ歩んでいった。

「へへッ、松葉杖なしでここまで歩けりゃ上等だろ。　んじゃ、いってくる――」

シリアは笑いながら、ドアノブを握りしめた瞬間――

バタンッ！　突如、扉が開かれシリアは顔面を強打した。

「い、いってぇぇっ！？　な、なんだよっ！？」

真っ赤になった鼻を両手で押さえながら、扉の先を確認するとそこにはライルの姿があった。

「おい、大変だっ！！」

「お前、いきなりアタシにぶつかっといて一言もなしかっ！？」

「お、おおシリアか、悪いな。　でも、それどこじゃねぇんだっ！」

「どうしたんだ、ライル」

ライルの緊迫した様子を見る限りでは、何かよからぬ事が起きてしまったと推測はできる。

うすうすと嫌な予感はしていたが、リューテは尋ねた。

「シラナギの代わりに晶に食事運んでやったらよ、あいつ……部屋にいねぇんだよっ！」

「なっ――――」

ライルから告げられた一言を聞いて、シリアは思わず言葉を失った。

第7支部から離れた個所に存在する民間区域。

支部の近くという事もあって、シェルターの実装はまだされていない個所だ。

商店街にはたくさんの人が賑わい、まるで世界の状況を忘れているかのように楽しんでいる姿が目に入った。

「……こんなとこ、来るんじゃなかったな」

充てもなく、フラフラと商店街を歩いていた晶はそう呟いた。

部屋に閉じこもっていた晶は、あの時……ι・ブレードで破壊してしまった民間区域の事ばかりをグルグルと思い返していた。

別の事を考えようとしていても、あの映像がはっきりと映し出され

る。
寝ようとするときも、時には夢に出てきて被害者達が晶を責め続けていた。

かつて、アヴェンジャーに襲われた第４シェルター地区と、今回の事件が晶の中で重なっていく。
あの行為を平然とやってのけたアヴェンジャー達を、許せなかった。
だから晶は、Ｅ．Ｂ．Ｂとも戦い……アヴェンジャーとも戦い続けた。
だが、今度は自らの手でそんな事態を引き起こしてしまったのだ。
本来守らなければならなかった人々を、無差別に殺す残虐な行為。
Ｅ．Ｂ．Ｂに乗っ取られていたから仕方ない、そんな言い訳が通用しないのはわかっている。
だからこそ苦しみ、悩み、絶望していた。

晶が何をしようが殺された人々が生き返るわけでもない、街が元に戻るはずもない。
たくさんの人々の命を奪ってしまった事に、晶は恐怖心を抱いていた。
ι・ブレードは、例のＥ．Ｂ．Ｂコアによって制御を奪われた。
あの時晶が、しっかりとコアを撃ち落せていれば……こんな事態に陥る事はなかったのだ。
もっと自分に腕があれば――と、自分を強く恨んだ。

元々成績最下位の晶が戦えていたのは全てι・ブレードの性能と、危険察知という能力のおかげであり晶自身の功績ではない。
かつてゼノスはそうではないと言ってくれたが……今思うとそんなものは慰めでしかないと痛感した。
結果的に、自分はメシアの足を引っ張ってしまった……メシアは人類の希望として、今まで人々を不安にさせないように最善の努力を

尽くしていたというのに
それを全て、無駄にしてしまったのだ。
こんな自分が、ι・ブレードに乗ってE．B．Bやアヴェンジャーと戦い続けていいのか。
晶はこのままパイロットしてやっていく事に、疑問を抱き始めていた。

気が付いたら第7支部を勝手に離れて、フラフラとこんな街へと足を運んでいたが……ここへ訪れた事に今頃後悔し始める。
こんな平和な街の姿を見てしまえば、晶は嫌でも惨劇を思い出してしまう。
この平和な情景を壊してしまった事を、痛感してしまうのだ。

「キャーッ！」

「バケモノだぁぁぁっ！」

突如、晶は人々の悲鳴を耳にした。
一体何の騒ぎかと思いきや、晶は思わず目を疑った。
そこには、紫色のボディの、一つ目をした不気味な姿の生物の姿がある。
……急遽、商店街に複数のE．B．Bが出現していたのだ。

「何で……E．B．Bが？」

この付近のE．B．B討伐は常に第7支部が行っているはずだ。
なのに何故――
グシャリ……E．B．Bから赤い槍のようなものが突き出されると、民間人の一人が串刺しにされていた。

ドクンッ――
心音が高まり、体中から汗が噴き出した。
晶は、かつてクラスメイトが殺されていった光景を思い出す。
ガジェロスの手により、次々と生徒が串刺しにされていき、ゴミのように放り投げ捨てられていったあの光景を――
その時、凄まじい嘔吐感が襲い掛かり、思わずしゃがみこんで晶は吐き出した。
何で、何でまたこんな場面に――

「おい君、大丈夫か？　早く逃げなさい」

近くにいた若いスーツ姿の男が、晶に声をかけた。
だが、晶は何も反応を示さない。
目の前で起きたことが信じられなくて、口を両手で押さえて、ただ目を見開いたまま動かなかった。

バンッ！　バンッ！！
民間人の何人かが、一斉にE．B．Bに向けて銃を発砲する。
E．B．Bは悲鳴を上げて、逃走をし始めたが、更に何人かの住民が発砲する事により、ようやくE．B．Bは動きを停止させた。

「……終わったようだな。　君、立てるか？」

「……は、はい」

この時晶は、今この場で何が起きたのかを理解できていなかった。
ようやく我を取り戻した晶は、サラリーマンの男の力を借りて立ち上がる。

「これで今日は3回目だな……全く、メシアの奴らは何をしている

んだろうな」

「3回目……？　そんなにE．B．Bが出現しているんですか？」

「何だ、君はシェルター出身か？　シェルターのない街ではこんなの日常茶判事さ。
いくらメシアがE．B．Bを討伐したところで、こういった小型サイズまでには手が回っていないんだろうね。
……おかげで、シェルターがない街の人は、自分で身を守る為に銃を持ち歩いているのさ」

サラリーマンの男は、晶に銃を見せつけながらそう言った。
晶は言葉を失った。
自分達が住んでいた区域では、こんな事態は一度も起きていなかったというのに。

「君もここに長居するつもりなら武器を所持しておくといい。　後、E．B．Bについて勉強をしておくことだな。　奴らはコアを撃たない限り死ぬことはないしね」

「……あ、は、はい」

サラリーマンの男はそう告げると、そのまま立ち去ってしまった。
晶は先程殺されてしまった人に目線を向ける。
そんなに多くの人だかりはできておらず、住民の一人が携帯で連絡を取り、後は素通りする人々が大半だ。
……あのサラリーマンの男のいう事は、間違いなかった。
出なければ、人々が死体を見て何もリアクションを起こさないはずがない。

「嫌ねぇ、また被害者が出てるじゃない……」

「メシアはどうしてシェルターを実装してくれないのかしら？　そうすればこんなE．B．Bに怯える毎日もなくなるのに……」

「大体HAばかり生産してもE．B．Bを全滅させるなんて不可能だろうに……メシアってE．B．Bの事ちゃんとわかってないんじゃないか？」

「メシアになんて頼るのが間違っているのよ、最近ではアヴェンジャーってのにHAを次々と奪われ続けてるのよ、もううんざりしちゃうわ。
そんなとこが人類守ろうだなんて偉そうな事を言っているんだから」

「そうそう、先週なんてHAが民間区域を襲撃って言う前代未聞の事件があったそうじゃないか。
あんなのアヴェンジャーでもやらないよ、何考えてるんだろうねメシアは」

「ここの近くで起きたのよね……また襲ったりしてこないかしら、私引っ越そうかな」

呆然と立ち尽くしていると、晶は次々と一般市民の会話を耳にした。
思わず、耳を塞ぎたくなった。
それは晶が思い描いていたメシアとは、かけ離れていた話だったのだから。
メシアは人類の希望であり、人々に信頼を得る為に最善を尽くしてきたという。

だが、現実はどうだろうか。

少なくともこの場にいた人間は、誰一人メシアを信頼している様子がなかったのだ。
それどころかメシアに批判的な意見を述べ、不満を持つ人々が大半を占めている。
……一体、どうして？
メシアは人類を守る為に戦っているはずなのに、人々は守られてないと……思っているのだろうか――

「……クソッ！！」

晶は夢中になって駆け出した。
ＨＡで無差別に人を殺してしまった事だけで、頭がいっぱいだったというのに。
更に人々のメシアに対する声まで聞いてしまった。
知らない方がよかった、知るべきではなかった。
メシアは人類の希望、Ｅ．Ｂ．Ｂの脅威から世界を守る為に存在している。
それなのに人々は――
晶は悩み、苦しみ、絶望した。

迷う少年　？

人気の少ない街の裏通りで、晶は座り込んだ。
ここであれば人々の声は聞こえない。
あんな光景を、再び見る事はない。
晶の体は小刻みに震えていた。

今までたくさんのE．B．Bを見てきたが、あの光景は晶にとって衝撃的過ぎた。
目の前で簡単に人が殺されていくのを目にし、初めてE．B．Bと遭遇した時の恐怖を思い出す。
メシアに守られているはずの民間区域に、E．B．Bが出現する現実。
それに対する人々の声、メシアの実態。
ι・ブレードの襲撃により、更に高まるメシアへの不満。
晶を絶望させるには、十分すぎた。

「よう、ビリッケツ」

ふと、聞き覚えのある声が耳に飛び込んだ。
この嫌味たらしい声……いや、そんなはずはないと思い晶は顔を上げた。
だが、間違いなくそこにはニヤニヤとした白柳　俊の姿があった。

「いいねいいねぇ……お前も大胆な行為に出たじゃねぇか。　いやぁおもしれぇ、お前最高すぎるぜっ！」

「……俺は、やっていないっ！」

晶は俊を強く睨み返し、はっきりと言い返した。
だが、俊はただ大笑いするだけだった。

「やっていない、お前がやっていない？　いいじゃねぇかよ、どっちでも。
どうだ、大量虐殺ってのは楽しいもんだろ？　どんな気分だ、聞かせろよ？」

「俺じゃない……俺はやっていないっ！！」

俊の言葉に耐えきれず、晶は拳を振るって殴りかかろうとする。
だが、俊に軽々と拳を受け止められてしまった。

「お？　どんな言い訳するんだよ、聞いてやるから言ってみ？
ま、何を言ってもテメェ自身がやっちまったことだ、事情を説明したところで何人が納得すんだろうねぇ？」

「……っ！」

晶は静かに拳を降ろす。
相変わらず俊はニヤニヤと憎たらしい表情を見せるが、自然と怒りが収まっていった。
俊は間違った事を言っていない。
現実を認めざるを得なかった。

「大勢の人を……メシアが守るべき人々を、ＨＡで殺しちまった。
殺しちまったんだよ……俺がこの手で――」

「気に入らねぇな、今更テメェは命を奪う事にびびってんのか？

おいおい、冗談はよせよ。
今まで俺達の仲間、散々ＨＡで殺してきたじゃねぇかよ？」

「……違う、アヴェンジャーは――」

「アヴェンジャーはメシアや民間人を襲うので人間じゃありません、だから殺してもいいんです。　ってかぁ？　わっかりやすい奴だな、お前は。
正当な理由があれば、殺しが許されると思ってるのか？　おめでてぇ奴だな……いいか、よく聞けよ。
殺しに正当もクソもねぇんだよ、勝手に美化してんじゃねぇ……テメェのそういうところが、俺は気に入らねぇな」

「――何も知らない、お前がっ！！」

再び頭に血が上った晶は、俊に殴り掛かった。

ガァンッ！
その瞬間、晶の頬に衝撃が走り視点が反転する。
気が付いたら、地べたに倒れこんでいた。

「都合が悪くなったら暴力で解決かい？　わっかりやすいガキだな、ったくよ……」

「……お前に、何がわかるんだよ。　人の痛みを知らない、お前に――」

「よく言うぜ、何も知らねぇのはテメェの方だろうが。　ほら、立てよ……俺を殴りてぇんだろ？
俺の事が気に入らねぇなら、気の済むまで俺の事をボコして放置し

てけよ？　ま、俺は抵抗させてもらうがな」

ギロリ、と俊が睨み付ける中……晶は立ち上がることが出来なかった。

殴られた痛みに恐怖をしているわけではない。

どうやっても俊に敵わない、といった理由でもなかった。

晶の中で、自分が持つ正しさが、少しだけ揺れていた。

「お前さ、本気でＨＡがＥ．Ｂ．Ｂだけを討伐する目的で開発されたと思ったのか？　いいか、あれはどんな理由をつけても『兵器』なんだぜ？

今までは純粋にＥ．Ｂ．Ｂを殺すための兵器だったけどよぉ……今のように、俺達のような組織が出てきちまったら、遠慮なくＨＡ同士で潰し合ってんじゃねぇか。

はっきり言えば、ＨＡで戦争することだって出来るんだよ」

「そ、それは……お前達のような組織が現れるからっ！」

「だからテメェはおめでてぇ奴なんだよ、クソが。　お前はＨＡに乗って本気で人を殺す必要がない、命を奪う必要がないと考えてんのか？

違うね、あんな兵器に乗っている限り……いつかは人と戦うんだよ、テメェみたいな甘い考えがいつまでも通用すると思うなよ？

それと、極論かもしれねぇがＥ．Ｂ．Ｂだって元々はただの生物なんだぜ？　そいつらを無差別に殺していくについては、何も感じねぇのか？」

「……Ｅ．Ｂ．Ｂは、人を――」

「E．B．Bは人類の敵、だから殺す。　ほら見ろ、結局殺してんじゃねぇか。
ムカつくんだよ……今更のように、命を奪ったっつーくだらねぇ理由で悲壮感に浸ってる奴がよ。
今すぐ頭吹き飛ばしてやろうか、かつてテメェが俺のＨＡ吹き飛ばした時のように」

俊は銃を手にして、晶の額へと突きつける。
晶は何も言わずに、ただ黙り込むだけだった。

「自分だけ綺麗でいれると思うなよ……俺達とテメェらは、何一つかわらねぇんだよ。
わかったらさっさとιから降りやがれ、テメェみたいなパイロットが戦場にいるだけで……虫唾が走るんだよ」

晶は俊の言葉に、何一つ言い返すことが出来なかった。
学生の時から、俊の事を気に入らなかった晶であったが
今回ばかりは、彼の言葉を正しく感じた。
E．B．Bと戦うときは、何も感じずに必死で戦っていた。
アヴェンジャーと戦うときは、少しだけ迷った事もある。
だが、最終的には命を奪う事を決意した。
俊に言う通り、自分の事を正当化して。
今回のι・ブレードの事件、どうやっても晶は自分を正当化できなかった。
だから、散々悩んで苦しんでいる。

俊は命の重みを理解していない、わかろうとしていない。
しかし、命の在り方は知っている。
晶よりも遥かに、ＨＡというもの、戦場で戦う意志を強く持っていた。

だけど、アヴェンジャーの行為は正しいはずがない。
E．B．Bも、放っておいていい存在ではないのだ。
俊の考え方は、確かに正しい。
命は皆平等で、どんな理由をつけても『殺した』という事実は変わらない。
だが、そんな考えでは、気づけない間違いもあるはずだ――

「俺は、お前達と違うっ！！」

晶は立ち上がり、強く叫んだ。
フラフラと立ち去ろうとしていた俊が、その足を止めた。

「確かにお前の言う通り、E．B．Bだってアヴェンジャーや民間人、メシアの人々は同じ命だよっ！
だけど、無抵抗で戦う事も何も知らない民間人を無意味に殺す事と、無差別に人を殺しにくるE．B．Bを討伐する事、アヴェンジャーのような強い目的……戦場に出る覚悟を持った者の命を奪う事は、意味が異なるだろうがっ！！」

「……いちいちムカつく野郎だな、まだ自分を正当化する気か？」

「俺は戦う、お前達が民間人を巻き込み続ける限り……メシアへ危害を加え続ける限り、戦い続けるっ！
HAは……力なき人々を守る為に存在する。　だから俺は、戦って罪を償う……っ！！」

「いい加減にしろクズがっ！　HAは命を奪う兵器何だよ、勝手な理由で美化すんじゃねぇよっ！！」

ガァンッ！

再び晶は強く頬を殴られた。
だが、土を強く踏みつけて、その場に踏みとどまる。
頬に激しい痛みが走るが、晶はその痛みに堪えて俊を睨み返した。

「ＨＡの意味を変えたのは俺達じゃない、お前達だっ！！」

晶は拳を強く振るった。
今までのように、怒りに身を任せた一撃ではない。
自分の意志を握りしめた、強い拳だった。
ガァンッ！
俊の頬に、晶の拳が綺麗に決まった。

「やりやがったな、テメェっ！！」

ドスンッ！
晶の腹部に強い衝撃が走る。
俊の蹴りが晶を地べたへと叩き付けた。

「民間人の声聞いただろ？　誰もメシアに期待しちゃいねぇ、ＨＡに期待しちゃいねぇんだよ。
さっさと現実を認めて楽になっちまえよ？　じゃねぇと、人生楽しめねぇぜ？」

「……メシアは、俺は何一つ……間違っていない。　俺達は守るべき命を、守ってきたんだ」

晶は体をふらつかせながらも、必死に立ち上がろうとする。
俊は見下すかのように、その様子を見守っていた。

「よく言うぜ、その辺のＥ．Ｂ．Ｂはどう説明するんだ？」

「俺達の力が足りなかっただけだ……俺がこの事実を告げて、対策を……急がせる事も――」

ガァンッ！！

再び、晶の頬に衝撃が走り倒れこんだ。

「話にならねぇな……テメェがここまでゴミクズだったとはなぁ。
こりゃビリッケツでも仕方ねぇな。
次からゴミクズくんに昇格か？　いや、降格というべきか？　ま、どっちにしろもう喋んなよ……ウゼェから」

俊が立ち去ろうとする中、晶は必死で立ち上がった。

「ＨＡは力なき人類を守る為……人類を脅かす脅威から守る為に存在する。
俺はＨＡを信じて、自分の正義を貫き通す……必ず、お前達を止めて見せるっ！！」

「……そこまで言うんなら、守って見せろよ。　俺がテメェの理想と共に……徹底的にぶっ潰してやるからよ」

そう言い残すと、今度こそ俊は立ち去って行った。
晶は体をふらつかせながら、壁に背を預けて座り込んだ。
ふぅ、とため息をつくが……晶の目には闘志が宿っていた。

「俺はもう……迷わない。　亡くなっていった人達の為にも……守る為に、戦うんだ――」

晶の中で揺らいでいた迷いが、消え去った。

メシアを信じ、ＨＡの可能性を信じて、晶は戦う道を選んだ。

第7支部の医療室。

Ｄｒミケイルは机に座って、とあるリストを目に通していた。

それは晶がι・ブレードで襲撃をしてしまった民間区域の負傷者リストだ。

「……まさか、現実になるとは。　恐ろしいものだな」

ミケイルはリストに目を通して、そう呟いた。

そこに挙げられたリストはほとんど手足を不自由にした者ばかりである。

「さて、次は――」

「はぁーい、おっさーんっ！　ただいま白衣の天使が参りましたよぉーっ！！」

バタンッ、と軽快に扉を開けてシラナギが飛び込んできた。

慌ててミケイルはリストを隠す。

「お、おおシラナギくんか。　どうしたんだ？」

「どうしたって、おっさんが呼び出したんじゃないですかーやだなぁーもう」

確かにミケイルはシラナギにすぐに来るように連絡をしていた。
しかしそれは1，2時間ほど前の事であり、あまりにも遅すぎる。
どうせ言っても無駄だろうと、Ｄｒミケイルはため息をついた。

「ところで何かしてたんですか？　隠してたの見ちゃいましたよー」

「い、いやこれは――」

あのリストの事が外部の者に漏れると面倒なことになる。
ただの治療者リストだと言い訳する事もできるが、何時何処でエターナルブライトの事がバレるかわからない。
少しでも証拠に繋がるようなものを、流出させないようにミケイルは神経質になっていた。

「まさか、エッチな本ですかーっ！？」

「そ、そそそうだっ！　わ、悪いかっ！　私だって男だぞっ！」

「……軽蔑しますよ、おっさーん。　これだからおっさんなんですよ―全くもう」

シラナギに細い目で見られてしまったが、何とか誤魔化すことはできたようだ。
少しだけ心は痛むが、背に腹は代えられない。

それよりもシラナギには雑用を頼もうとしていた。
例のエターナルブライトを再度受け取ってもらおうとしていたのだ。

「それよりだね、君に頼みたいことが――」

「あら、私も聞きたいことといっぱいあるんですっ！」

「な、なんだね……」

どうせくだらない事だろう、と思いつつもシラナギの性格を考えると聞いてしまったほうが手っ取り早い。
またしてもＤｒミケイルはため息をついた。
すると、突如Ｄｒミケイルの額に銃口が突き付けられた。
……シラナギが微笑みながら、右手に銃を握りしめていたのだ。

「……何隠したか教えてください、正直に言ったほうが身の為ですよー？」

一瞬何が起きたのか理解できなかった。
シラナギはいつも通りの口調で話してはいるが、行動が一つだけおかしい。
……この銃、悪戯であればいいのだがとＤｒミケイルは願った。

「あれ、どうしちゃいました？　冷や汗かいてますよ？　あ、言っておきますけどこれ……本物ですからね。
弾もしっかり入ってます、嘘だと思うならトリガー引いちゃいますけど？」

「ま、待て……何の真似だ、君っ！　こんな事をしてただで済む――」

「おっさん、ついにやっちゃいましたよね？　シリアに、使っちゃいましたよね？」

「……っ！？」

何故、シラナギがそれを知っているのか。

まさかあの時、中身を見られた……という可能性もあるがだからと言ってそれがシリアの治療に結びつくとは思えない。

「誰の命令ですかー上司はいるんですよねー？　やっぱりアッシュベルですかー？　ほらほら、答えたほうが身の為ですよー」

「……クッ！」

Ｄｒミケイルは懐に隠していた銃を、シラナギへと向けた。

「私を撃てば、君も撃たれる事になるぞ。　その程度で脅した気になるとは、マヌケだな」

「あらー、違いますよー。　何をするか見たかったんです、私こそ拍子抜けしてガッカリしちゃいましたよ」

「私は本気だ……っ！！」

バァンッ！！

Ｄｒミケイルがトリガーを引こうとした途端、発砲音と共に銃が吹き飛ばされた。

いつの間にかシラナギの銃が、ミケイルの手元へと向けられていた。

「んーやっぱり脅しは無駄ですね、どうせ喋らないなら殺しちゃいましょうか？」

ゾクリ、とミケイルの背筋に寒気が走る。
一瞬だけシラナギの本当の姿を見てしまい、顔が青ざめた。

「人質でもとられて脅されてるんですか？　それとも単純に、お金ですかー？」

「……ち、違う、私は――」

バァンッ！！
ミケイルの足に激痛が走る。

「ぐあああぁぁっ！？」

「静かにしてくださいよー、ただでさえ2回発砲しちゃってるんですから。　これで気づかれたら全部おっさんのせいにしますからね？」

「……ただで済むと思うなよ、貴様っ！」

「えーっと……わわ、こんなにいっぱい貰ってるんですね。　そりゃ私でもお手伝いしたくなっちゃうかもですねー」

ふと、シラナギは紙切れを目に通してわざとらしくそう言った。
シラナギがその紙切れの金額を見せつけると、Ｄｒミケイルの顔が真っ青になった。

「お金目的なんて、最低ですね。　おっさんのことは信じてたんで

すけど……ちょっとガッカリです」

「待て……全て話すっ！　だから私の事は黙っておいてくれっ！
この治療にはワケがあるっ！
上手くいけば……人類はどんな病気にも立ち直れる身体となるんだっ！！」

「あれーおかしいですねー、貴方ほどの人がまさか『Ｅ．Ｂ．Ｂ化』を知らないと嘘をつき通す気ですかー？」

「……それを食い止める為の――」

「嘘です、貴方騙されています。　もしくは私を騙そうとしていますね、だってこんなにお金貰ってるんですから」

「それは――」

ガシャァァンッ！
ふと、ガラスが突き破られる音が響いた。
するとミケイルは、フラリとその場で倒れこんだ。
シラナギは窓の外をちらりと伺い、Ｄｒミケイルの状態を確認した。
……頭を撃ち抜かれていた。

「あらら、死んじゃいましたかぁ……むー邪魔されちゃいましたね。
きっと私の事もバレちゃいましたよね、これ」

うーん、とその場でシラナギは考え込んだ。

「仕方ないです、ジエンスさんには謝っておきましょうー」

シラナギはミケイルの死体を放置しながら、医務室を立ち去った――

第１４話　メシアに潜む闇　？

第7支部内で、銃声が響き渡った。
艦長からＤｒミケイルの件、内通者の件について任されていたゼノスだが、その足でＤｒミケイルの元へ向かおうとしていた。
だが、その途中で銃声を何度か耳にした。
方角からして、Ｄｒミケイルがいるはずの医療室方面だ。
アヴェンジャーが再び侵入してきた可能性も否定できない、胸騒ぎがしたゼノスは急いで現場へと向かっていく。

そこでゼノスは、ふと足を止めた。
長く続く廊下の端に座るシラナギの姿が目に留まる。
顔を俯かせたまま上げようとしない、よく見ると体を小刻みに震わせていた。

「……何があった？」

シラナギの様子は尋常ではない、先程の銃声といい、決していい予感はしない。
顔をゆっくりと上げたシラナギは、目を真っ赤にさせ、泣いていた。

「ゼ、ゼノス……ですかっ！？」

「何故こんなところで泣いている？」

「大変、大変なんです……っ！　おっさん――いえ、先生がっ！！」

「先生だと？　Ｄｒ．ミケイルの事か？」

ゼノスがその名を出すと、シラナギは大げさに頷いた。
出来れば当たっていてほしくなかったが、ゼノスの悪い予感は的中してしまったようだ。
無言でゼノスは立ち上がり、その先へ進もうとする。
だが、シラナギが腕を強く掴んだ。

「だ、駄目ですよっ！　逃げてください、この施設の何処かに悪い人がいますっ！！」

「悪い人、だと？」

まさか内通者がついに動き出したというのか、ゼノスは額に汗を流し生唾を飲み込んだ。
やはり、メシア内の誰かがＤｒミケイルを――

「そう、です……撃たれたんです、先生……が」

「……っ！」

シラナギの一言で、ゼノスの予測は革新へと変わる。
Ｄｒ．ミケイルが殺された。
誰が、何の為に、どうして？
アヴェンジャー、内通者、それとも別の存在か。
いずれにせよ、この事態を黙って見過ごすわけには行かない。

「ここで待っていろ……」

「ゼノス、待ってくださいっ！」

シラナギは引き止めようとするが、ゼノスは強引に腕を振り払う。
どんな理由であれ、メシアの施設で堂々と殺しをするような人間を放ってはおけない。
今ならまだ証拠を掴めるはずだと信じ、ゼノスは走り出した。
その姿を見送ったシラナギは、ため息をついた。

「相変わらずのお人よしさんですね、ちっとも私の事を疑わないんですから。　ま、信用してもらえてるのはとっても嬉しい事ですけど」

シラナギは立ち上がり、周りの様子を警戒する。
先程、Ｄｒミケイルの狙った狙撃主がまだどこかに潜んでいるはず。
あの時点でシラナギが狙われる事はなかったが、油断はできない。
少なくとも見えない敵には、シラナギの正体は筒抜けと考えても良い。
ならば、早いうちに第7支部を脱出してしまうべきだろう、とシラナギは考えた。

「最後にもう一仕事としてから、さっさと逃げちゃいましょうー」

シラナギは大きく伸びをしてリラックスしていた。
ゼノスの事だ、あの現場を調べるだけでシラナギを疑う可能性も否定できない。
今は騙せたとしても、状況的証拠が揃えばあのゼノスは誰であろうが疑う、昔からそういう男だった。

「こっちには長くいすぎましたねー、ちょっぴり寂しい気もしますよ。　でも、お別れです」

現場へと向かったゼノスへ向けて、シラナギは微笑んだ。

そして、静かに廊下を歩み始めた。

ガタンッと乱暴な音を立て、ゼノスは扉を開く。
その先には、頭からドクドクと血を流し倒れているＤｒ．ミケイルの姿があった。
……シラナギの言う通り、本当に殺されてしまったというのか。
窓ガラスが割れている、この位置からは相当腕がなければミケイルを狙撃する事はできないはず。
殺された理由は……口封じと考えるのが自然だ。
もし、エターナルブライトの人体実験に関係する情報を握っていたとすれば……その裏に潜むのは、アヴェンジャーではない。
彼らの目的を考えれば、Ｄｒ．ミケイルの行いに気づいてもすぐ殺すような真似はしないはずだ。
ならば、該当する人物は一人しかいない。
アッシュベル・ランダー、ゼノスは真っ先にその人物を頭に浮かべた。

ふと、ゼノスはミケイルの足の傷に気づいた。
明らかに銃弾で撃ちぬかれた足……だが、狙撃主の仕業ではない。
何故ならば、彼は頭を一撃で撃ちぬかれているはずだ。
窓の位置からでは、足をピンポイントに狙い撃つことはできない。
銃声は一回ではない、複数回聞こえたはずだ。
ならばもう一人、この現場に居合わせた人物が？

「……」

銃声が響いてから、医療室を後にした人物がいるはず。
少し考えると、ゼノスの頭には真っ先に該当者が浮かんだ。
シラナギ・ソノ。
彼女は廊下でショックを受けている様子をこの目で見た。
良く考えると、それは妙な事なのだ。

シラナギが現場に居合わせていたのなら、第3者にシラナギだけ殺されない状況はおかしい。
その点は、犯人と遭遇せずに後からDr．ミケイルの死体を見てしまった、と考えられる。
だが、彼女が死体を見てショックを受けたのなら、何故医療室の目の前ではなかったのだろうか。
勿論、思わず逃げ出してしまってあの場で座り込んだのであれば、筋は通るかもしれない。
しかし、普通に考えれば扉を開けて死体を見てしまい、腰を抜かしてしまった状況の方がよほど自然だ。
仮に第3者が存在したとして、シラナギと遭遇しなかったと考える事はできるだろうか？
かなり限定的な状況ならあり得るかもしれないが……だからといってシラナギが白とは言い切れない。
それにシラナギはゼノスの中で、最も内通者候補に近い人物なのだ。

フリーアイゼン内での彼女の行動は、一つだけ不審な点があった。
彼女は全く無縁であるはずの、ゼノスの作業部屋にこっそりと訪れている事が多かったのだ。
思えば、あの部屋の端末から何かをしていた可能性は十分にあり得る。

だが、決定的な証拠はない。
それに彼女の事を考えれば、とてもじゃないが内通者だとは思えなかった。

騒がしく空気が読めない事も多々あるが、シラナギは艦に欠かせない存在である。
誰とでも仲良く笑顔で接し、喜びや苦しみを共に分かち合ってきた仲間なのだ。
……だから今の今まで、彼女は違うと自分に言い聞かせていた。

「……お前、なのか。　シラナギ」

寂しい表情を見せ、ゼノスはそう呟いた。

晶が第7支部から姿を消したという知らせを受け、木葉は何処か落ち着かない様子だった。
何度も窓の様子を確認したり、指でくるくると髪を巻いたりと、何かをしていないと落ち着かない。
晶はι・ブレードで大惨事を引き起こして以来、ずっと部屋に閉じこもりきりだったと聞く。

本当は慰めに行こうと何度も足を運んだ、だけど……かけてあげら

れる言葉が見つからずに、いつも踏みとどまって帰って来てしまっていた。
毎度毎度助けてもらってばかりいるのに、こういうときだけでも役に立ちたい、晶の支えになりたい。
そんな気持ちはあったのに、結局行動に移すことが出来なかった。

一時的でも、晶に拒絶されてしまう事を恐れてしまっていた。
例え晶にそんな気がなくとも、つい感情的になって酷い事を言われてしまうかもしれない。
そうなってしまったら、きっと笑顔でなんていられない、その場で泣き崩れてしまう。
その結果、晶に余計な心配をさせてしまい、ますます負担をかけてしまうんじゃないか。
そんな事ばかりを考えていたら、晶が姿を消してしまった。
かつて、G3に晶が殺されたと聞かされた時に比べれば、ショックはそれ程大きくはない。
しかし、もし木葉自身が臆病にならずに……少しでも晶の痛みを和らげようと努力すれば、晶がいなくなってしまうなんてことは起きなかったんじゃないだろうか。
晶は救いを求めていたはず、ずっと自分を責め続けて……ぶつけようのない悲しみを、心にずっと潜ませ、苦しんでいた。
そんな晶に何もしなかった木葉は、後悔していた。
もし、このまま、ずっと帰って来なかったら――
考えるだけでも恐ろしい、もうあんな絶望感は味わいたくない。
もう晶を失いたくない、と願ったはずなのに。
何故、こんなにも自分自身が臆病になってしまったのだろう。
晶が帰ってきてから、木葉は傷つくことを恐れるようになってしまっていたのだ。

「はぁーい、木葉ちゃん、おはようございまーすっ！」

バタンッと乱暴な音共に、シラナギが突如部屋に訪れた。
毎度の如く、突拍子のない登場の仕方は、流石に木葉も慣れてしまったのか苦笑いをしていた。

「ど、どうしたんですかシラナギさん」

「うーん、ちょっとお仕事をしにきたんです」

「お仕事？」

首をかしげながら木葉は尋ねると、シラナギはいつも以上にニコニコとしながらゆっくりと迫ってくる。
普段と何処か様子がおかしい、と思いつつも木葉はただ呆然としていた。
すると、顎にひんやりとした感触が走る。

「木葉ちゃん、大人しくしてくださいね。　貴方にとっては、あんまり脅しになってないかもしれませんけれど」

「え、ど、どういうこと、ですか……？」

シラナギは微笑んでいるが、その声は何処か低く、冷たかった。
顎に何かを突きつけられている……木葉はちらりとその正体を確認すると、背筋にゾクリと寒気が走る。
……それは、銃だった。

「その前に、ちょっとだけ質問していいです？」

「え、え？」

「木葉ちゃん……、何回自殺をはかったか覚えてますか？」

「じ、自殺……？」

突如銃を突き付けられたかと思えば、今度はわけのわからない質問をされた。

今にも殺されそうな状況だというのに、何故自殺をはかったかという事を？

確かに一時的には無意識のうちにはかったことはあるかもしれない、だが今はそんなことしていない。

木葉はただ、シラナギの言葉に戸惑うだけだった。

「……今、自分が何をしていたか、覚えてますよね？」

シラナギは乱暴に木葉の右腕を掴むと、木葉の目の位置まで強引に持ち上げた。

すると、木葉は言葉を失った。

……自分の右手首を中心に、血がダラダラと流されていたのだ。

「あれ、私……私……？」

シラナギはそっと銃をおろし、ハンカチで手首の傷をふき取る。

そこには、傷一つない木葉の真っ白な手首が見えていた。

どうして、そんなはずはない。　こんな血、こんな傷、身に覚えはない。

また、無意識のうちに自分を傷つけてしまっていたのだろうか、あのナイフで。

……その痛みにすら、気づいていなかったというのか。

「私と共に来てください……貴方をこんな体にした、アッシュベル・ランダーを倒す為に」

シラナギは両手で、ギュッと木葉の手を握りしめて呟く。

だが、木葉は自分の体の異変に気付かずに、シラナギの行動の真意を理解できずに、ただ混乱していた。

「むぅー……困りましたね」

制御室にて、シラナギは端末の操作を行っていた。
見張りの者は全員気を失って倒れている、シラナギの仕業だ。

第7支部を脱出する為のＨＡを確保しようとし、前回アヴェンジャーの手によって奪われなかった2機のＨＡに注目をしていたが、流石に2回目は上手くいかないようだ。
新型ＨＡ2機に特殊なロックがかけられており、そのロックを解除しない限り発進できないような仕組みが施されていた。

「流石にこの前の時みたいに上手くいきませんねー……これじゃあ私でも解除は難しいです。
あ、こっちのウィッシュは全くかかってないみたいですね。　うーん、ならこっちを頂いちゃいましょうか」

ふぅ、と息をつくとシラナギは何も言わずについてきた木葉の腕をギュッと掴んだ。
木葉は俯いたまま何も語ろうとしない。

「抵抗、しないんです？　私の事、怖いとか思いませんか？」

「……わからないの。　私、どうしたらいいのか」

「そうですよね、でもよく私に従ってくれました。　じゃないと、木葉ちゃんに酷い事しなければなりませんでしたから」

シラナギは表情を曇らせながら、そう呟いた。
本来であれば木葉を巻き込むつもりはなかった。
だが、木葉の体の状態を知ってしまえば……もはや無関係とは言えない。
彼女もまた、被害者の一人だったのだから――

「大人しく、ついてきてくださいね」

「……はい」

木葉が頷くのを確認すると、シラナギは木葉を連れて制御室を後にした。

延々と続く廊下を、ゼノスは一人走り続けていた。
もし、本当にシラナギが関わっていたとすれば何らかのアクションを起こすはず。
彼女が白だろうが黒だろうが、一刻も早く捕まえなければならない。

「ゼノスっ！！」

突如、廊下の奥から聞き覚えのある声が響き渡る。
松葉杖を片手に、シリアが歩み寄ってきた。

「……シリアか。　何をしている、ちゃんと部屋で休んでいろ」
「お前こそ何してんだ……晶が施設から消えちまったってのにっ！！」
「何？」
まさかアヴェンジャーの仕業……と考えたが、恐らく違う。
ι・ブレードが施設内にある以上、晶だけが拉致されるとは考えにくい。
晶の事だ、自分を追い詰めるだけ追い詰めて、何をしていいかわからずに施設を飛び出したのかもしれない。
……これも他の事に気を取られていたゼノスは、晶を支えてやれなかった事に責任を感じた。
「今ライルとエイトが車出して町を探してくれている。　アタシはまだ施設内にいないか探ってたところだよ」
「ならば、シラナギを見なかったか？」
「シラナギ？　いや、見てねぇけど……どうかしたのか？」
「……Ｄｒ．ミケイルが殺された」
「なっ――――」
シリアは目を丸くして驚いた。
Ｄｒ．ミケイルは自分の足を治療してくれた命の恩人だ。
その恩人が、まさか殺されてしまうなんて、思ってもいなかった。

「嘘だろ……どうしてだよっ！？」

「わからん、だがシラナギがミケイルの死に関わっている可能性が高い」

「シラナギが？　何言ってんだよ……シラナギがそんな事を――」

「わかっている……だからこそ、シラナギを問い詰めなければならないっ！！」

ゼノスが感情的になり、声を荒げた。

いつも冷静を装っているゼノスが、ここまで感情をむき出しにするのは珍しい。

……ゼノス自身も自分が導き出した結論を否定したいのだろう。

だが、その推測を否定するにはもはや、本人に直接訪ねるのが手っ取り早かったのだ。

「……シラナギを見かけたらアンタに連絡するよ。　その代わり、晶を見つけたら頼んだぞ」

「ああ、わかっている」

ゼノスがその場を後にしようと立ち去ろうとした途端――

施設内に、突如サイレンが鳴り響き始めた。

「何だ、まさかアヴェンジャーっ！？」

「いや、違う……」

直感で、ゼノスはアヴェンジャーの襲撃ではないと判断した。

この状況で導き出される答えは一つ――
ゼノスは格納庫へと向けて、走り出していく。

「お、おいっ！　待て、ゼノスっ！！」

後ろで呼ぶシリアの声を無視し、ゼノスは走り続けた――

格納庫まで辿り着くと、やはりウィッシュが一機出撃されている形跡が残されていた。
シラナギか……それとも別の人物か。
いずれにせよ、誰かが施設からウィッシュを勝手に出撃させたのは間違いない。
今ならまだ追いつくはずだ、ゼノスは急いでレッドウィッシュに搭乗した。

起動を行い、スロットルを押し込むと機体はギュンッと加速をして施設の外へと飛び出す。
レーダーを確認すると、すぐ近くにＨＡの反応を確認した。
反応からして、第7支部のウィッシュである事は間違いない。
その方角へと向けて、ゼノスは機体を最大加速させる。
すると、モニターから肉眼でウィッシュの後ろ姿を捕えた。

「止まれ、そこのウィッシュ」

通信を繋ぎ、ゼノスは正体不明のパイロットに告げる。

『あら、やっぱり来たんですね……ゼノス』

「その声は――」

ゼノスの推測は、やはり正しかった。

通信からは、間違いなく『シラナギ』の声が返ってきた。

『はい、そうです。　白衣の天使ちゃん、シラナギですよー』

「……」

ゼノスは迷わず、トリガーを引きライフルを発砲した。

バァンッ！　と、銃声が鳴り響くとウィッシュは軽々と弾を避ける。

『わわっ、いきなりなんて酷いですっ！　相変わらずデリカシーがないですね、ゼノスは』

「何故裏切った……シラナギっ！」

バァンッ！　バァンッ！　ゼノスは容赦なく、ライフルを発砲し続ける。

だが、相手のウィッシュはゼノスの射撃を全て交わしていた。

『あらあら、そんなムキになるなんてゼノスらしくないですよ？　以前貴方だって、仲間を裏切ったんじゃないんですか？』

「貴様……っ！」

ゼノスはサーベルを片手に装備させて、徐々に相手との距離を縮めていく。
カスタマイズされたレッドウィッシュであれば、ウィッシュの追いつく事は容易い事だ。
次の瞬間……突如ウィッシュが振り返りライフルを連発し始める。
操縦桿を思い切り右へと倒し、レッドウィッシュは相手に回り込むように大きく地に弧を描く。
背後を捕えた瞬間、ゼノスはスロットルを押し込み機体を前進させる。
だが、ウィッシュは後ろ姿のままグレネードを数発投げ込んだ。
まずい――爆発に巻き込まれる前に、ゼノスは強引に軌道を変えて機体をユーターンさせようとした。
ズガァァァンッ！！　グレネードによる凄まじい爆発が発生した。
砂埃が舞い視界が奪われる中、ゼノスは機体のバランスを失わないように何とか制御させようとする。
その瞬間――突如目の前に、猛スピードでウィッシュが飛び込んできた。
金属音が響き合い、ウィッシュとは思えない推進力でレッドウィッシュが押され続ける。
同時に、レッドウィッシュのヘッド部にライフルが一丁構えられた。
バァンッ！！　銃声と共に、レッドウィッシュの頭部が砕けた。
モニターは一瞬にして砂嵐に変化し、コックピットが激しく揺れる。
レーダーとサブモニターはまだ生きている、ゼノスは急いでモニターの切り替えを行おうとした。
モニターが映し出された瞬間、そこには追い打ちをかけようとサーベルを片手にウィッシュが突っ込んできていた。
モニターの視野は狭いが、辛うじて動きを捕えたゼノスはサーベルで追い打ちだけは防ぎきって見せた。

『言い忘れてましたけど……私、凄く強いですよ？』

シラナギとの付き合いは長いが、一度もＨＡに登場した姿は見たことがない。

この動きはとてもじゃないが素人の動きとは思えない。

グレネードの爆風を利用した猛攻といい……この戦い方、何処かで見覚えがある。

シラナギ・ソノ……シラナギ――

「……ミケイルを殺したのはお前か？」

『いえいえ、私じゃありませんよ。　こう見えてもあのおっさんの事、別に嫌いではなかったんです。

正直今でもショックを受けてますよ？』

「ミケイルが死ぬ直前、お前は現場にいたな？　何をしていた……答えろ」

『ゼノスの事だから、もう気づいているんじゃないんですか？　おっさんがしたこと、わかってますよね？』

「エターナルブライトによる人体実験――」

Ｄｒ．ミケイルがエターナルブライトの人体実験に関わっていた、この事実は確定であろう。

シラナギが殺していないというのも、恐らく信じてもいい。

……ならば、殺したのは一体――

『メシア内に、おっさんを操った悪い人がいます。　あえて誰とは言いません、ゼノスもどうせすぐ気づくでしょうから』

「何処まで知っている、シラナギ。　答えろ」

『何を勘違いしてんですか？　私はもうゼノスの仲間じゃありません、はっきりと言います。
私はアヴェンジャーのスパイです、今までずっとずっと貴方達を騙して、フリーアイゼンとι・ブレードの動向をずっと知らせていました。
貴方もよく知っている……『ジエンス・イェスタン』にですよ』

「……貴様」

ゼノスはライフルをウィッシュへと向ける。

『あ、気づいていないようなので教えておきますね。　私の隣に、木葉ちゃんがいます。
私を倒すのは構いませんけれど……それは木葉ちゃんを巻き込む、という事を覚えておいてくださいね』

「何……？」

まさか――そんなはずはない。
頭の中でゼノスはシラナギの言葉を否定した。
だが、シラナギから映像が送信されたのを確認するとゼノスは受信する。
……そこにはいつもの笑顔で微笑むシラナギの姿と、シラナギにくっついたまま怯えている木葉の姿が映し出された。

『そういう事です、それじゃ……お別れですね。　今まで楽しかったですよ、ゼノス』

「シラナギ……っ！！」

ゼノスが力強く叫ぶが、ウィッシュは土煙を上げながらその場を立ち去っていく。

ライフルの照準を合わせるが、トリガーを引くことはできなかった。

だが、仮に木葉が乗っていない状態としても……とてもじゃないが、今のレッドウィッシュの状態でシラナギと渡り合う事は難しいだろう。

あの無謀ともいえる無茶苦茶な操縦……それに『シラナギ』という名。

やはり、引っかかる……あの戦い方を、ゼノスは知っている。

「――やむを得ないか」

これ以上の追跡は難しいだろう。

ゼノスはライフルを静かに降ろした。

「……すまない、晶」

木葉を取り戻すことが出来なかったゼノスは、コックピットの中で力なく呟いた。

第7支部付近の街。
晶はまだ支部へと戻らずに、ふらふらと歩いていた。
俊の前では、迷わずに戦う事を決めてはいたものの、完全に吹っ切れてはいなかった。
背負わなければならない、自分が奪っていった人々の命を。

だが、本当に背負ったまま、戦うことが出来るのか。
街が破壊されていく時の恐怖は、今でも脳裏に焼き付いている。
あれだけの犠牲者を出しておきながら、もう一度戦う事が……できるのか。
結局メシアを信じて戦うと決めた事は、自分自身を納得させる為の理由でしか過ぎない。
そんな理由で、本当に戦っていいのか。
晶は、悩んでいた。

ふと、猛スピードで車道を走ってくる車を見かけた。
いくら車も人通りも少ないとは言え、スピードの出しすぎだ。
他人事のように晶は車を眺めていたら、突如キィィィッ！！　と、耳が痛くなるような音を立てて車が急停止する。
思わず耳を塞いで、迷惑そうに晶は車を睨み付けた。
バンッ！　と、乱暴の扉が開かれるとそこから出てきた人物はライルだった。

「チッ、こんなとこほっつき歩いてやがったか……バカがっ！！」

ライルは晶を睨み付けながらそう言った。

勝手に支部を抜け出したことに怒っているのだろう。
どうせすぐに捕まるだろう、という覚悟はできていたので晶は素直にライルに従おうとした。
パシンッ！　問答無用に、ライルは晶の頬に平手打ちした。

「気は済んだか？　ったく、ヤバイ事が起きてるってのに勝手な事しやがって……」

「すみません……俺――」

「言い訳は後にしろ、それよりもヤバイ事態が起きてやがる。　さっさとついて来い」

「ど、どうしたんですか？」

てっきり怒られるのかと思いきや、ライルは晶をすぐに車へ連れ込もうとする。
ライルからは緊迫した様子がヒシヒシと伝わってきた。
……一体何が起きたというのだろうか。

「……Ｄｒミケイルが殺された」

「なっ――ど、どうしてですかっ！？」

「詳しい事はわからねぇ……俺もついさっき聞いたばかりだ。　それと……シラナギが第７支部を抜け出したらしい」

「抜け出した？」

「お前のとは意味が違う……あいつ、アヴェンジャーのスパイだっ

たらしい。　しかもお前の大事な木葉まで連れて行きやがったんだ」

「シ、シラナギさんがスパイっ！？　そんな、嘘だろっ！？」

晶は思わずライルの胸倉をつかんで、そう叫んだ。

「嘘じゃねぇっ！　お前がどっかほっつき歩いている間に、木葉がシラナギに攫われちまったんだっ！！
奴はアヴェンジャーの一味だ……そいつが木葉を連れて行ったんだ。
　これが何をするか、お前にはわかるか？」

晶は目を丸くして、言葉を失っていた。
まさか、あのシラナギがアヴェンジャーの人間だったなんて、信じられない。

「……すぐに第7支部へ連れて行ってください。　俺が、あの人を捕まえますっ！」

「……どうやら本当に気が済んだらしいな。　頼りにしてるぞ、エースさんよ」

戦う事に迷っている暇はない。
シラナギがどういうつもりで木葉を連れて行ったのかどうかは考えなくて良い。
今はただ、連れ去れてた木葉を取り戻す事だけを考えるだけだ。
晶とライルは車へ乗り込み、猛スピードで第7支部へと向けて走り去っていった。

第7支部の格納庫に、晶とライルは辿り着いた。
最初に見えたのは損傷を負ったレッドウィッシュの姿……。
シラナギが、やったのだろうか。

「晶……大丈夫なのか？」

「ゼノス……さん」

格納庫には傷を負って体をふらつかせているゼノスの姿があった。
……ついこの間まで仲間だったというのに、容赦しないというのか。

「すまない、木葉を助けられなかった」

「……俺が、シラナギさんを追います。　必ず、木葉を助ける」

「戦えるのか？」

「俺は迷わない、戦う……っ！！」

晶は無心になってｉ・ブレードのコックピットへと向けて走り出す。
長い階段を上りきり、コックピットへ飛び込むとｉ・ブレードはすぐにコックピットを赤く灯した。

「ｉ……俺はもうお前にあんな勝手なことはさせない。　だから力

を貸してくれ、木葉を助ける為にっ！」

晶がそう声をかけるとコックピットは赤く灯り、ι・ブレードが起動段階に入った。

レッドウィッシュから位置情報のデータを受信する。

シラナギと交戦をした個所からの、移動ポイント予測地点が数か所出現した。

「行くぞ、ι・ブレードっ！！」

ι・ブレードは轟音と共に、格納庫から凄まじい速度で飛び出していった。

最大速度で移動し続けるι・ブレードのパイロット負荷は流石に大きい。

苦しい思いをしながらも、晶はスピードを緩める事はしなかった。

ポイント付近へたどり着くと、レーダー上に1機のＨＡ反応が現れる。

晶は急いでそのポイントへ向かった。

減速を行い、上空から地上を注意深く確認していくと……肉眼でウィッシュの姿を捕える。

「……見つけたっ！」

迷わず晶はスロットルを押し込み、ι・ブレードを地上へと急降下させた。

ウィッシュの前に立ちはだかり、ブラックホーク二丁を構える。

ウィッシュはピタリと、進行を止めた。

『あは、やっぱり来ちゃいましたねー晶くん』

「シラナギ……さん、本当にシラナギさんなのかっ！？」

『はい、そうですよ。　私の声がわかりませんかー？』

通信機から聞こえてくる声は、間違いなくシラナギ本人の声だった。

だが、晶は未だに事態を信じられずにいる。

初めてフリーアイゼンで艦長と対面した時、シラナギは晶の事を支えてくれた。

仲間を失った事を、悲しそうに語る事もあった。

それだけじゃない、木葉がどうするべきなのかを、まるで自分の事のように一緒に考えてくれた。

それなのに――

「騙してたのかよ……今までずっと、俺達の事をっ！！」

『ええ、騙してました。　晶くんだけじゃありません、艦長やゼノスのことだって、みんなみーんな騙してましたよ』

「……嘘なのか。　俺の事を励ましてくれた事や、木葉の事を支えてくれた事……っ！！」

晶はトリガーを引こうと、手を強く握りしめる。
だが、トリガーを引くことが出来なかった。

『私の事、恨んでますか？　憎いと思いますか、殺したいと思いましたか？　少しでも思ったのなら……今のうちに、私を撃った方がいいですよ』

「木葉……いるんですよね、こっちに渡してください」

『嫌です、晶くんに木葉ちゃんは任せられません』

「……何を言っているんですか？」

『木葉ちゃんの事は私が責任を持って守ります』

晶は思わず、顔をキョトンとさせた。
一体シラナギは何を言っているのか、わからない。

『晶くん……っ！』

「木葉……木葉なのかっ！？　今、今助けるからな……待ってろっ！」

言葉ではそう言うが、下手にウィッシュに仕掛けてしまえば木葉へ危害を加えてしまう。
ならば接近して無理やりウィッシュを拘束するか、その足を封じてしまうしか手はないだろう。

『晶くん、貴方は木葉ちゃんの異変に気づいていましたか？』

「木葉の異変……？」

『木葉ちゃん……ずっとずっと、死にたがってるんです』

「――っ！？」

木葉が、死にたがっている？
そんなはず、ない……あるはずがない――
晶は動揺を隠しきれずに、自分にそう言い聞かせた。

『ずっと不安定な状態だったんですよ。　今までは晶くんという存在が唯一木葉ちゃんを支えてくれてました。
でも、晶くんが第7支部から姿を消した時……木葉ちゃん、自分の手首を切っていたんです』

「手首を――」

何故、木葉がそんな事を？
ずっと、ずっと守っていたはずなのに。
アヴェンジャー施設から脱出してきたときも、互いに喜びを分かち合ったはずなのに。

『その回が初めてではありません、過去私は2度ぐらい未然にその行為を防いだことがあります。　ですが……恐らく、何度も何度も手首を切っています。
そして、そのどれもが『致死量』に達するぐらいの出血をしているんです……なのに、木葉ちゃんは生きているんです』

「……どういう、ことですか？」

『この際生きている不思議についてはおいといてください……どうして、そんな不安定な状態にあった木葉ちゃんに気づいてあげられなかったんですか？
木葉ちゃん、ずっとナイフを持ち歩いていました。　カッターだとかそんなかわいいものじゃありません、本物のナイフですよ？』

「そんな……そんなことって――」

何も、知らなかった。
木葉がそこまで追い詰められていることに。
どうして、一言も晶に言ってくれなかったのか。
木葉がそんな状態だったというのに、自分は一体何をしていたのか
――

『だから、私は私なりに木葉ちゃんを保護します。　このままだと、きっと晶くんを木葉ちゃんを不幸にしますから……』

「……シラナギ……さん」

晶は思わず、言葉を失った。
あれだけはっきりと、皆を裏切ったと宣言したはずなのにシラナギは晶よりも先に木葉の異常に気づき、木葉の事をはるかに考えてくれていた。
だが、シラナギはアヴェンジャーの一味だ。
アヴェンジャーのスパイである事を、自ら証明した。
……そんな組織に木葉を連れられていくのを、このまま見過ごしてもいいのか。

しかし、晶は戸惑った。

このまま木葉を取り返しても、返って不幸にさせるのではないか。
突如、不安に陥ってしまったのだ。

『私の事はいくらでも恨んでくれて構いません……ですが、これだけは言わせてください。
私は今でも、貴方と木葉ちゃんの味方ではいたいんです。　一度しか言いません、良く聞いて……良く考えて答えてください。
……私と共に来てください。　アヴェンジャーとして戦ってください。　そうすれば、本当に討つべき『悪』が誰なのか、絶対にわかるはずです』

「アヴェンジャー……に？」

シラナギの言葉は、本気だった。
かつて父親が晶に対して言ったように、晶を迎えようと訴えていた。
晶の心は揺らいでいた。
前、父親を否定してまで施設を抜け出した時。
あの時は、メシアを信じて……木葉を守る為に、フリーアイゼンへと戻った。

だが、今回は状況が少し異なっている。
人々に対するメシアの不満。
シラナギが語った木葉の状況、何よりもその木葉がシラナギと一緒にいる事。
このままメシアを、フリーアイゼンを……シラナギと共に、木葉と共に抜け出す。
少しだけ、悪くはないと揺らいでしまった。

――「……俺の分まで、木葉の事を頼んだぞ。　約束だぞ、晶――」
――

「っ！！」

突如、晶の頭の中にあの時の記憶が蘇る。
初めてι・ブレードで飛び出した時、変わり果てた街の姿に絶望していた時
親友から告げられた、遺言――
あんな悲劇を起こしたのは、アヴェンジャーだ。
……許されるはずがない、あの悲劇を起こしたアヴェンジャーが。
そして何よりも、晶は親友から……任されたのだ。
――『木葉』の事を。

「木葉は……俺が、守るんだ。　それが……あいつの、願いだから……っ！」

『なら、一緒に来るんですね？』

「違うっ！！」

即座に、晶はシラナギを否定した。

「……俺は、メシアの……フリーアイゼンの一員だっ！！」

晶は力強く、叫んだ。

「シラナギさん、例え貴方の言っている事が全て正しいとしても……貴方の行動は、全て間違っていますっ！！
長年共に戦った仲間を平然と裏切り……木葉という人質を盾にして俺をアヴェンジャーへ引き込もうとする……こんな人、どうやって信用しろって言うんですかっ！！」

『本当にいいんですか？　……後悔、しませんね？』

「俺はアンタを否定する、全力でっ！　だから……木葉を、返せぇえぇっ！！！」

バババァンッ！！　二丁のブラックホークが、ウィッシュの脚部へと向けて放たれる。
その瞬間、ウィッシュは空高く舞い上がった。
晶は怯まずに、宙へと舞うウィッシュを撃ち続けた。

ズキンッ――
突如、晶に頭痛が走る。
ウィッシュが上空から、グレネードを数発投下させる映像だ。
晶の射撃に合わせて、爆撃させようとしている。
映像が終わった途端、すぐに晶は機体を後退させてウィッシュから距離を取った。
その瞬間、凄まじい爆発と共に辺り一面が砂埃に覆われる。

『うふふ、晶くんならきっとそう言うと思ってましたよ』

危険察知が発動し、上空から急降下してくるウィッシュの姿を捕えた。
晶はムラクモを構えて、上空へ高く舞い上がろうとする。
すると、コックピットが青く灯った。
バァンッ！　銃声と共に、ライフルが放たれた。
被弾したι・ブレードは、一瞬だけ体勢を崩してしまう。
更に追い打ちをかけるように、ウィッシュはサーベルでι・ブレードへと斬りかかった。
ガキィンッ！　晶はムラクモで、サーベルを防ぎきって見せた。

『ただのウィッシュと侮ってはいけませんよ、晶くんの戦い方なら散々見て来ていますからね？』

「……うるさいっ！」

晶はサーベルを弾き飛ばそうとするが、感づかれたのかウィッシュは即座に砂埃の中へと姿を消してしまう。
レーダーを頼りに位置を特定しようとするが、ウィッシュとは思えない移動速度で晶の肉眼では位置を把握することが出来なかった。
すると、晶に頭痛が走る。
相手が何処から仕掛けてくるのかを確認し、その瞬間を逃すまいと、晶はブラックホークを放って見せた。
だが、またしてもコックピットは青く灯る。
ガキィィンッ！！　鈍い音共に、コックピットが激しく揺れた。

『私から木葉ちゃんを奪えないようでは、守れるはずもありませんよ。　だから近くにいても気づかないんです、平然と木葉ちゃんを傷つけちゃうんです』

「だからと言って……アヴェンジャーの手に渡すことが正しいはずもないだろうがっ！
俺はもう、木葉を傷つけない……ずっと傍にいて、支えてやるんだ。
それが、殺された親友の願いだからっ！」

『その願いを守られてないなんて、亡くなった親友さんが可哀想です』

「アンタに何がわかる……裏切られた人達の痛みを、わかってんのかよっ！？」

『わかってます、私はそれを背負ってでも自分の道を信じてますから』

砂埃が晴れた途端、気が付けばウィッシュは大分離れた位置にいた。

「逃げるのかよっ！？」

『はい、お迎えが来ましたので』

晶はレーダーを確認すると、凄まじい速度で接近する一機のＨＡの反応があった。

空から赤いＨＡが姿を現したのだ。

……恐らく、奪われた新型機『ブレイアス』だろう。

ここで逃がすわけには行かない、晶は追いかけようとスロットルを押し込んだ。

ズキンッ――

その途端、晶に頭痛が襲い掛かる。

赤いＨＡから、数発のライフルが発砲された。

晶は弾を避けつつ進むと、突如コックピットが青く灯る。

ガァァンッ！　凄まじい衝撃が、コックピットへと走った。

「くっ……木葉、木葉ぁぁっ！！」

『晶、くんっ！！』

最後に木葉が晶を呼ぶ声が聞こえた。

だが次の瞬間、ウィッシュを捕えた赤いＨＡは凄まじい速度で戦域を離脱していく。

……既に、レーダーに反応はなかった。
あの速度……明らかに異常だ、ι・ブレードとは非にならない程の速度を叩き出している。
新型のブレイアスとは、そこまで凄まじい性能なのかと恐れをなした。
すぐに追いかけようと、晶はスロットルを押し込もうとしたが、突如その手を止めた。
……シラナギに言われた言葉を今更のように思い返し、追うのを戸惑ってしまったのだ。
シラナギが全て正しいとは思わない、しかし……木葉に対しての想いだけは本物である。
晶なんかよりも、シラナギの方がよほど木葉の事をわかっていた。
その事を悔しく思う反面、情けなく感じてしまったのだ。

「……木葉」

晶は力なく項垂れて、木葉の名を呟いた。

第１５話　計画始動の時　？

第7支部付近の街外れに、とあるジャンクパーツショップが存在した。
店は小さく客の出入りは少なく、一部の常連客だけで何とか経営を行えている個人商店である。
外見は古臭いというよりかは、既にガタついてきており、建物自体の劣化が素人目でも分かる程だ。
青く塗った屋根は色が剥げてしまっていたり、あちこちにサビが目立つ。
店中に張られていたと思われるもう何十年も前の広告のポスターも、その形をほとんどなくしていた。

そんな店に、一人の少年……白柳　俊が足を踏み入れた。
サビついたドアノブを握りしめ、ギギギギと嫌な音を立てながら俊は扉を開いて店の中へと入り込む。
中には本当にガラクタとしか思えない代物ばかりが置かれていた。
ボロボロの電化製品にＰＣのケースやパーツの類、更には使用用途すらよくわからない部品の数々。
店の商品はほとんど埃がかぶっており、とてもじゃないが売り物とは思えない程手入れがされていない。
唯一埃がかぶっていなかったのは、店長と思われる人物が偉そうに座っているレジだけだった。
髭面にサングラスに無駄に高い鼻の中年親父が、大欠伸をしながら新聞を読んでいる。

「ケッ、まるで大昔にタイムスリップしたみたいだな」

「おう兄ちゃん、お客かい？　そりゃ俺っちにとっては褒め言葉よ」
皮肉のつもりだったが、どうやら通用するような相手じゃないらしい。
俊はため息をつきながらも、店長の元へと歩み寄っていく。
「こんなガラクタだらけの店に客なんて来んのか？　さっさと引退しろよ、じーさんよ」
「若造が調子をこくんじゃねぇぞ？　俺っちが若かったら今頃お前アレよ、アレ。　ほら、なんだ、病院送りだ、な？」
「あーわかったわかった、悪かったよじーさん。　テメェの強さはわかったから、さっさと本題入らせてもらうぞ」
「言わずともわかっとるわい、おめぇさんアヴェンジャーの一員だろう？」
店長がそう言うと、俊の表情は一瞬だけ強張った。
何故、このような中年男に一瞬にして自分の正体がバレてしまったのか。
「そう怖い顔しなさんなって、ここは滅多に客がこねぇんだよ。だからおめぇさんが正体隠そうが、こっちは大体わかっちまうって事よ」
「チッ、調子が狂う奴だな……なら、俺がここに来た理由もわかってんだろうな？」
「勿論さ、俺っちはおめぇさんの顔を見た途端に思わずキュンと来

ちまったぜ……」

「ああ、そうかよ？　そりゃおめでてーこったな」

「おめぇさんのＨＡ、何処においてあるんでい？」

「ここからちょっと離れた岩陰に隠している。　騙し騙しに使ってきたけどそろそろ限界が近くてな、いい加減新しいもんでもよこしてもらおうとしたんだがよ……
そしたら何故か、こんなボロ臭くて胡散臭ぇショップで直してもらえってな。　全く、ひでぇ話だと思わねぇか？」

俊はため息をつきながら店長に愚痴をこぼした。
だが、そもそも俊は新型ＨＡ支給の話を何度も受けていたが、自らそれを全て断って来ていたのだ。
毎度口癖のように『そんなもんに頼らなくても、ｉ・ブレードぐらい落としてやるよ』と突き返し、今のレブルペインをずっと使い続けていた。

「いやいやおめぇさん、ツイてるよ。何せ俺っちに改修を依頼するんだからな」

「おいおい、まさかこんなボロくせえジャンクパーツでも使おうってのか？」

「バカ言うんじゃねぇよ……ＨＡ用パーツは別に存在するさ。　どうだいおめぇさん……腕には自信があるんだろ？
おめぇさんのＨＡ……とんでもねぇバケモンに仕上げてやるよ、乗り心地は保障しねぇ代わりに格安で引き受けてやるぜ？」

「へいへい、そいつぁ期待できそーなこった」

どうせ中年親父の戯言だろうと、俊は軽く聞き流していた。
アヴェンジャーからの情報によれば、そこそこ腕のあるメカニックマンと聞いている。
だが、俊にとっては精々レブルペインを元に戻してくれれば上出来としか思っていなかった。

「……おめぇさん、違法パーツって知っているかい？」

「違法パーツだぁ？」

突如、店長はニヤリと怪しく微笑みながら俊にそう問いかける。
俊はその単語に少しだけ興味を示した。

「メシアのD支部でのみ開発されていた極秘のHAがいくつか存在するって話を聞いたことがあるだろう。　おめぇさんなら『G3』が一番馴染んでいるだろうな。
G3はサマールプラントによる熱源探知機能で、メシア兵を皆殺しにしちまったまさにメシアの負の象徴……負の遺産、と呼ばれる代物さ。
勿論、D支部で開発されていたのはG3だけじゃねぇのさ。　こっそり、開発中のとんでもねぇHAの数々も、それを機に開発中止となった……」

「……へぇ、楽しそうな話だなおい」

「おめぇさんなら乗ってくれると思ってくれたぜ、やはり俺っちの目に狂いはなかった。
D支部で使われていた新型HAの技術は、どれもメシアの手によっ

て意図的に禁じられた技術ばかりだ。
理由は何故か？　それは、とてもじゃないが常人が扱えるようなＨＡじゃなかった、ということなんだ」

「常人が使えるＨＡではない……つまり、常識はずれの性能を持っていたという事か？」

「例えるなら……ι・ブレードがそうだろう。　あれは、メシアが禁じた違法パーツと性能が酷似している。
実際は別物っぽいらしいけどよ、俺っちから見てみりゃ違いなんてありゃしねーよ」

「ι・ブレード……ビリッケツが乗るＨＡが、常識を超えたＨＡだぁ？」

言われてみれば確かにι・ブレードは常識を覆すほどの機動性を誇っている。
更には危険察知と呼ばれる代物も備えており、俊ですらも相当集中しなければι・ブレードを相手にできない程だ。
だが、問題はそこではない。
そんな代物を、平然と扱っている晶に驚きを隠せなかった。

「今の俺っちならば、おめぇさんのＨＡをι・ブレード以上のバケモンに変貌させてやるよ。
どうだい、俺っちに任せてみる気になったか？」

「……おもしれぇ、やってみろよ。　常識を覆す究極のＨＡ、テメェの手で作ってみやがれ。
そしてこの俺が……徹底的にι・ブレードをぶっ潰してやるよ」

「よっしゃっ！　ならばすぐに作業に取り掛かろう。　俺っちに任せれば、三日もあれば十分さ」

「……じーさん、楽しみにしてるぜ」

俊はそれだけ告げると、ニヤリと笑みを浮かべた。
自分が晶に劣っているはずがない、あの晶がバケモノを扱えるのであれば……自分に扱えないはずがない。

「個人的にメシアの事が気に入らねぇんでな。　アヴェンジャーにはもうちーっと頑張ってもらいてぇのよ。
トップが無能なメシアなんて一度滅んじまえばいい、俺っちはそんな風に考えているのさ」

「テメェが手を貸す理由なんざに興味はねぇ。　俺はただ、あのビリッケツを徹底的にぶっ潰してやるだけだ。
甘っちょろい考えと半端な覚悟で戦場に出てくる奴には、圧倒的な力で屈辱の敗北を味合わせてやる……」

俊は拳を強く握りしめ、そう呟く。
ι・ブレードを、圧倒的な力で葬り去る場面を頭に浮かべながら……。

第7支部の遥か北を進んだところに、旧メシア基地が存在した。
E．B．Bの襲撃により破棄された基地は、アヴェンジャーの手によって再利用されている。
そこに、奪われたブレイアスとレブルペイン、そしてシラナギが奪ったウィッシュの3機が存在していた。
施設内の一室にて、4人の人物が集っていた。
第7支部から脱走してきたシラナギと木葉。
ご機嫌そうに鼻歌を交えているフィミア。
そして……ガジェロスの姿があった。

「予定より早かったな、シラナギ」

「あら、サングラス変えたんですか？　前見た時と形が違いますよ？」

「そこに触れるな、思い出しただけでも腹立たしい」

シラナギは不思議そうに頭に？マークを浮かべる。
ガジェロスはこれ以上語るつもりもなく、目を逸らした。

「他の2機は奪えなかったのか？」

「うーん、セキュリティが強化されちゃってましたので。　ちょっと手間かかりそうだったので諦めました。
勿論、強引にシステム全体落とすといった手もありましたけど時間があんまりなかったですし」

「……まぁ、あのブレイアスがあれば十分だろう」

「アハハ、違うよ。　あれは、ブレイアスじゃないよ」
満面の笑みを浮かべていたフィミアは、突如ガジェロスにそう伝える。
「どういう事だ？　別の新型だという事か？」
「ううん、あれはね、私がお願いしたの。　お姉さんを追い回せるような圧倒的なスピードが欲しいって。
そしたらね、ジエンスちゃんが健三ちゃんにお願いしてくれたの。
　そしたらすぐに生まれ変わっちゃった」
「……改造した、ということか」
「だからね、あれはブレイアスなんかじゃないよ。　ちゃんと私が名前つけたの、ウヒヒ。
皆親しみを込めて呼んでね、あれは『トリッドエール』って言うの」
「うんうん、よかったです。　私がお勧めした赤はフィミアちゃんにぴったりなＨＡだったってことですねーっ！
それじゃあ、トリッドエール生誕を祝ってぱーっと騒ぎましょうーっ！！」
「アハハ、私お祭り大好きだよ。　一緒に騒ごうね」
二人で勝手に盛り上がってるのを無視して、ガジェロスはため息をつく。
こんな奴らがアヴェンジャーの一員である事が未だに信じられない。
しかし、フィミアもシラナギも凄腕のパイロットの一人ではある。
特にシラナギは、５年間のブランクを感じさせない程の凄まじい腕

前だ。
あの天才的な俊と同等……いや、もはやそれを超えているのかもしれないと感じた。

「……ん」

ふと、ガジェロスは視線を感じた。
ぱっと振り向くと、端っこでガジェロスの事をぼーっと見つめている木葉の姿があった。
こちらに気づくと表情をハッとさせて、目線を逸らした。
木葉の事は覚えている、ι・ブレードを求めて学校を襲撃している際に……晶の近くにいた少女だ。
自分の姿を見るなり子猫のように体を小刻みに震わせ、バケモノを見るかのような目は今でも印象に残っている。
だが、今の木葉の目はそうではない。
何処か遠くを見ており、ガジェロス自身を見ても恐怖心を抱いているようには見えなかった。

「小娘、俺の顔に何かついているか？」

「……ううん、何も」

目を逸らしながら、木葉は返事をする。
声は震えていない、怖がっていないというのか？

「お前、以前とは雰囲気が変わったな」

「え……？」

「俺を見て何とも感じないのか、この右腕を目にしても」

ガジェロスは包帯を解き、E．B．B化が進んでいる右腕を晒す。
だが、木葉は恐怖心も抱かずにじーっとその変わり果てた右腕を眺めるだけだった。

「……声が聞こえるの。　助けを呼ぶ、悲しい声が」

「声……だと？」

「だれかきて、たすけて、くるしい、いたいよ……こんな事ばかり言ってた。　きっと、貴方が奪った私の友達の声だよ」

ガジェロスは木葉の言葉に戸惑った。
そんな声、聞こえるはずがない。
いくらこの右腕でたくさんの人を殺したからと言えど、そんな事はあり得ないはずだ。

「でもね、私……貴方を恨めない。　だって……凄く悲しそうな顔してる、この右腕から聞こえてくる声は、貴方の声自身でもあると思ったの」

「……何を言っているんだお前は？」

「貴方、とても可哀想……」

木葉は、異形と化した右腕をそっと両手で抱きしめながら、涙を流した。
思わず、ガジェロスの背筋に寒気が走った。

「やめろ……っ！！」

右腕を大きく振るうと、木葉はバタンと地べたへと倒れた。
木葉はそのまま動かずに、可哀想可哀想……と呟き続けている。

「ガジェロス、やめてくださいっ！」

シラナギがすぐに木葉を抱きかかえて、ガジェロスに怒鳴りつけた。

「どうしたんだその女……明らかに、異常だぞ」

「この子も、アッシュベルの被害者なんです。　だから、私が連れてきました。
少しだけ調べてみましたが、木葉ちゃんは過去に大きな病気を抱えていましたが、手術を受けた際に完治しているんです」

「……それとこれが、どう結び付く？」

「フィミアちゃんを見ればわかると思います……エターナルブライトは、時には人の心も壊してしまうみたいなんです」

「何……？」

ガジェロスは思わず耳を疑った。
これまでエターナルブライトの症状を確認したことがあったが、精神面についてはエターナルブライトの影響はないと思っていたからだ。

「勿論、全てがエターナルブライトに原因があるとは言いません。
詳しい事はわかりませんが、人の心を増長させ、壊しやすくする……といった事だと思います」

「信じられんな」

「木葉ちゃんはずっと不安定な状況に陥っていました。　私達の襲撃で家族も友達も全てを失い、唯一の支えが晶くんだったのです。そしていつしか晶くんに依存をしていました。　晶くんが行方不明になった時……何度も自分の体を傷つけて、自殺を計っていました」

「そんな事が……」

思わず、言葉を失ってしまった。
ガジェロスは多少の犠牲は仕方ないと割り切り、アヴェンジャーとして時には非道な行いを平然とやってのけた。
だが、今の目の前に非道な行動による犠牲者が現れてしまったのだ。

「……俺達が、彼女を不幸にした」

ガジェロスがそう呟くと、シラナギは曇った表情を浮かべる。
どんな理由であれど、アヴェンジャーの手によって晶と木葉は故郷を失ってしまったのだ。

「……その通りですね。　どんな形であれど、私達は木葉ちゃんの心を壊すきっかけとなってしまいました」

「勘違いするな、シラナギ」

ギロリ、と強く睨み付けてガジェロスは言った。

「人の心は壊れやすい、それはエターナルブライトの力でも何でもねぇ。　俺達があの少女を追い込んだんだ。

……その罪だけは、認めろ。　だが、どの道こいつが被害者なのは変わりがねぇ……いずれE・B・B化が進み……取り返しのつかない事となる。
これ以上、俺達のような人間を増やさない為にも……多少の犠牲は仕方ない。　だが、責任を全てアッシュベルに押し付けるのは気に入らねぇな」

「貴方の言う通り、ですね。　人の心を壊す件は撤回しましょう、ただ……罪は償います。　そして、木葉ちゃんを連れてきた責任も取ります。
貴方も協力してくれますよね、ガジェロス」

「その子は任せる。　俺はそいつの全てを奪った張本人だ、何をしてもその子を傷つけてしまうだろうよ」

「……はい、わかりました。　ところで言っていいですか？」

「何だ？」

「やっぱりゼノスとガジェロスって、似てるとこありますよね？」

「勝手に言ってろ」

くだらない、と思いつつガジェロスは施設の外へと出て行く。
ι・ブレードの速度なら、あのブレイアス……もといトリッドエールにも追いつけたはずだが、追ってくる様子はない。
とは言えど、メシアへこの位置を特定するのは時間の問題だ。
一刻も早く本拠地へと移動する必要があった。

「早瀬　木葉、か。　俺達が不幸にしちまった一人の少女……か」

目的の為に手段を選ばずに、アヴェンジャーは活動を続けている。
その行動の中で、多くの犠牲者を生み出してしまった事は多々あった。
だが、生半可な戦い方をしていては……いつまでも『メシアの闇』に辿り着くことはできない。
一秒でも早く、メシアの闇を中心に広がっていく『エターナルブライト』の人体実験を、阻止しなければならなかった。
その中心人物である『アッシュベル・ランダー』を叩く事、それがアヴェンジャーの最終目的となる。
間もなく、ジエンスを中心に進められていたアヴェンジャーの計画も……始動が近い。

「ゼノス、メシアへ行ったお前は……今でも俺達を『敵』とみなすのか？　真に討つべき敵は、お前でもわかっているはずだろうに」

ガジェロスは空を眺めながら、力なく呟いた。

計画始動の時　？

アヴェンジャーの拠点。
前の拠点が第Ｓ級汚染区域に作られていたように、新たな拠点も同様の場所が選ばれた。
世界的にＥ．Ｂ．Ｂの討伐を行っているメシアですら、手を付けにくい場所であり、アヴェンジャーが身を隠すには汚染区域に身を隠すのが都合がよかった。
元々Ｄ支部として使われていた施設を、アヴェンジャーが新たな拠点として活用していた。
恐らくＥ．Ｂ．Ｂの侵攻の激しさにより、メシアが破棄したのだろう。

しかし、メシアと言えどいつまでも汚染区域を放っておくはずがない。
今現在もアヴェンジャーの拠点を捜索する活動が続けられており、第Ｓ級汚染区域に目をつけられるのも時間の問題だ。
だが、アヴェンジャーの首謀者であるジエンスは、その事に焦りを全く見せていない。
何故ならば、今のメシアにそんな事をしている余裕がなくなったからだ。
フリーアイゼンに忍ばせておいたシラナギが動き出した事、そして……アッシュベルが裏で操っていたとされるＤｒ．ミケイルの殺害。
その二つの事件が重なったことにより、メシアは大混乱に陥っていたのだ。
施設の地下に眠る格納庫に、二人の人影があった。
ジエンスと、健三の姿だ。

「ホホホ、シラナギさんはよくやってくれましたよ。　これで全て

が整いましたよ」

「……これで、メシアに潜むアッシュベルを炙り出せるはずです」

健三は目の前に並ぶ2機のＨＡを前にして、そう言った。

ブラックベリタス。

晶達の住んでいたシェルター地区に、密かに開発されていたι・ブレードを真似て開発されたＨＡ。

開発が中断されていたその機体は、健三の手によって改修されていたが……ようやく完成した。

ιシステムこそ搭載されてはいないが、性能だけでいえばオリジナルのι・ブレードを遥かに凌いでいる。

外観はι・ブレードと同様に通常のＨＡより一回り小さく、酷似した点は多い。

違いと言えば、全身が真っ黒なボディである事と……背中に装着されている黒い四本の剣だ。

もう一つのＨＡは、その圧倒的な大きさに驚かされる。

通常のＨＡとは比べ物にもならない程の大きさであり、見上げてもその全体像を確認する事は出来なかった。

その一部分だけ見える外観は、とても妙な形をしていた。

その本体は、鳥の羽のような形をした装甲に、まるでその身を隠すかのように包まれていたのだ。

異様な外観からか、その名は『フェザークイーン』と名付けられた。

「これこそ、私が求めていた絶対的な力ですよ。　未乃　健三、貴方はよくやってくれました。　感謝しておりますよ」

「……圧倒的な力を見せつければ、メシアも降伏せざるを得ないでしょう。　我々の要求通り、アッシュベルを差し出すしか選択肢が

なくなるはずです」

だが、その性能を見せつけるという事はたくさんの命を奪うことに繋がる。

これ以上、アッシュベルによる被害者を生み出さない為と言えど、今更ながら健三は自分が生み出してしまった兵器に恐怖心を抱いた。

これまでにアヴェンジャーは、メシアに嫌がらせのように必要以上に兵器を奪い続け、徐々に戦力を高めた挙句、自らＨＡを開発する力を手にした。

時にはＥ．Ｂ．Ｂすらも利用し、無関係な人間をたくさん巻き込んでしまう事もあった。

しかし、もはやあの男を止めるには手段を選ぶ余裕すらないのだ。

アッシュベルは、必ず本性を現す。

いつか、自らの野望を果たす為に……世界中の人間を巻き込んでいくだろう。

かつて天才科学者と呼ばれていた男は、腐っても天才なのだ。

止めなければならない、アッシュベルという男を。

例え自らの手を汚そうと、世界から非難されようとも――

それが、息子を裏切ってまでアヴェンジャーについた……未乃　健三の決意なのだ。

「降伏？　アッシュベルを差し出す？　はて、何の事ですかな」

ギロリ、と鋭い目線が健三に突き刺さる。

思わず、ゾクッと背筋に寒気が走った。

ジエンスから、かつてない程の強大なプレッシャーを感じた。

「やるのであれば……徹底的に、ですよ。　我々なら不可能ではないはずですよ、未乃　健三……」

「……まさか、貴様――」

直感的に、悟ってしまった。

この男が何を狙い、何をしようとしているのか。

……なんてことだ、健三は自らの手で取り返しのつかない事態を引き起こしてしまった。

見切れなかったワケではない、この男の『野心』を。

だが、それでもアッシュベルを止める事を最優先に活動を続けてきた。

その結果、目の前に存在する『アッシュベル』より危険な男に……

『絶対的な力』を与えてしまったのだ。

「メシア本部を襲撃しましょう……我々の力を示し、世界に『メシアの壊滅』を告げるのです。

そして……この私が、絶対的な力を持つ私が……新たな世界の指導者として立ち上がりましょう……異論はありますかな？」

「そんな事をすれば世界は大混乱に陥るっ！　ようやくメシアの手によって、世界は安定してきているんだ……そんな勝手なことは許さんぞ」

「ほう、では我々が今まで行ってきた行いは『世界を乱す行為』ではない、と？」

「……っ！」

健三は、否定できなかった。

アヴェンジャーが今まで行ってきたことは全て、メシアに危害を加えるものばかりだ。

その結果多くの命が失われたのも事実であり、ジエンスが言う通り

『世界を乱す行為』そのものだった。
だが――

「そもそもおかしいですね、何か勘違いをしておりませんか？　貴方の目的はアッシュベル・ランダーを殺してでも止める事。即ちそれは、エターナルブライトの人体実験をこれ以上広めない為に……という事では？」

「だからと言って、メシアを壊滅させる必要はないはずだ」

「いいえ、それでも広まっていったエターナルブライトの人体実験は続くでしょうね。　例え、アッシュベル・ランダーを捕えたとしても……その命を奪ったとしても人体実験は続きます。アッシュベルの後を継ぐ者が……必ずメシアの中から現れるでしょう。
今の腐りきったメシアは一度、滅んだ方が世界の為です。　ですから、私がメシアの代わりに世界を守ってあげましょう、という事なんですよ？」

「世界の支配者となる……それが貴様の本心か、ジエンス・イェスタン」

「そうです、今のメシアには有能な指導者がおりません……どいつもこいつも無能ばかりで役立たずなのですよ。
ですから、私が世界の絶対的な指導者に……なると言っているのです」

健三は咄嗟に、隠し持っていた銃を両手で構え、ジエンスの額に押し付ける。

「貴様に、指導者となるほどの器はない」

ギロリ、と強くジエンスを睨みそう言った。
だが、ジエンスは表情を何一つ変えずに、むしろ気味が悪い笑みを浮かべたままだ。
何がおかしいというのだ、銃を突きつけられているというのに。

「私に逆らう、という事ですね？」

「……っ！？」

突如、腹部に衝撃が走る。
抵抗する暇もなく、健三は猛スピードで壁まで突き飛ばされてしまった。

「グッ……ゲホッゲホッ――」

ガァンッ！　と激しく体を叩き付けられ、呼吸困難に陥る中……目の前には異形の姿があった。
異形を繋ぎとめている蔦のようなものを辿っていくと、それはジエンスの体へ繋がっている。
……あれは、ジエンスの体を突き破り姿を現した『E．B．B』の姿だった。

「私もE．B．B化が進んでおりましたね……ですが、慣れてしまうと案外快適なんですよ。　体内を巣食うE．B．Bを、こうやって自在に操る事もできますから」

「人を……捨てたというのか」

「いえいえ、私は私なりに『人の形』を長年保てるような工夫をしたまでですよ。
こうやって体内にE．B．Bを繋ぎとめていれば、エターナルブライトを破壊されない限り私は死にませんし、活動できます。
私のE．B．B化した体の内部は、全て先程のE．B．Bがエサとして食い尽くしてくれます……それ故、外見には変化がありませんし、脳にまで異常が達しません。
きっとアッシュベルですら、このような暴挙を思いつくはずがなかったでしょうね」

この男、危険すぎる。
何故、今までこの男を野放しにしていたのか……平然とこの男の下についていたのか。
健三はジエンスに恐怖を感じた。
ここで殺さなければ、世界に未来はない。
アッシュベルどころの騒ぎではない……世界はもっと危険に晒されてしまう。
この男が支配する世界に、明るい未来があるはずがない――

「……好きには、させんぞっ！」

バァンッ！！　健三は迷わず、引き金を引いた。
銃弾はジエンスの額を貫いた。

「っ――」

ジエンスは静かに、バタリと倒れる。
……E．B．B化は脳にまで達していない。
ジエンスは確かにそう言っていた。
ならば、もう起き上がるはずはない。

しかし――

「野蛮ですね、そんなところを狙われてしまいますと……脳のE．B．B化が進んでしまうではありませんか」

「なっ――」

生きていた。

ジエンスは再び立ち上がり、微笑んでいた。

E．B．Bと同じなのだ、エターナルブライトを体内に埋められた人間は。

その『コア』となったエターナルブライトを破壊されない限り、再生し続ける。

再生が繰り返される事により、人の体は『E．B．B』へと変化を遂げていく。

その事を、健三は当然ながら知っていた。

だが、今更それに気づいたところで……遅い。

ジエンスのE．B．Bが再び飛び出し、無数の触手が飛び出される。

逃げようにも体の自由が利かずに、グルグルと無数の触手が絡みつく。

健三はあっという間にその身を拘束されてしまった。

「殺しはしませんよ、貴方にはまだまだ利用価値がありますからね。ホホホ、次は私が世界の指導者となった時に……お会いしましょう――」

「……晶、すまない――」

自分が、間違っていた。

そう気づいた時には、全てが遅かった。
晶の言う通り、やり方を誤っていたのかもしれない。
だが、それを悔やんでももう遅い。
ジエンスが止まる事はない、このままメシア本部への侵攻を続行するだろう。
アヴェンジャーの者達は、何も考えずにジエンスに従い、復讐という強い意志だけで戦う。
戦いは止められない、メシアの崩壊の日が近い。
健三の技術が、メシアを追い込んでしまうというのか。

「明菜、息子を頼む――」

今は亡き、妻の名を呟き……健三は意識を失った――

健三は監獄へと閉じ込められた。
一人となったジエンスは、静かに司令室へと足を運ぶ。
健三は何処かジエンスに反感を抱くことが多かった。
だが、彼も自分の目的に手段を選ばない男……それ故、利用する事は容易かった。
おかげでジエンスの計画は予想以上に早く遂行することが出来る。
もはや、ＨＡの技術力だけでいえば敵はいない。

ι・ブレードを開発した未乃　健三の技術力があれば、ι・ブレードそのものは必要なかった。
それどころか、今の未乃　健三はあのＨＡ以上のバケモノを作り上げてくれたのだ。

しかし、ジエンスにはどうしても腑に落ちない点がある。
どうして健三は、ι・ブレードを必要以上に欲したのだろうか。
単純に息子が乗ったＨＡだったから、というわけではない。
少なくとも、今の健三でも生み出せない『ιシステム』を持っている点が重要と思われる。
ジエンスはその事に、非常に興味を抱いていた。
Ｄ支部の支部長が座っていたと思われる席へ、ゆっくりと腰を掛ける。
そこには司令クラス専用の通信機が一つ……。

「さて……彼らは果たしての判断はいかに」

不気味な笑みを浮かべ、ジエンスは通信を繋いだ。
――フリーアイゼンの艦長『ゲン・マツキ』に。

計画始動の時　？

第7支部の会議室に、フリーアイゼンのクルー達が集められた。
フリーアイゼンの医療班に属していたシラナギ・ソノが、アヴェンジャーと繋がっていた事により、イリュードが緊急招集をかけたようだ。
晶がこの場へ訪れたのは2回目。
しかし、今回は前回とは事態が大きく違っている。
重苦しい空気が圧し掛かってくるのを、晶は強く感じていた。

「……悪いが、お前達の身柄は拘束させてもらうぞ」

浮かない表情をしながら、イリュードは静かにそう告げる。
晶は表情をハッとさせた瞬間――バンッ！　と、卓を強く叩く音が響く。
隣に座っていたシリアが、不満そうな表情で立ち上がっていた。

「どういう事だ、説明しやがれっ！」

「やめろ、シリア。　俺達の中からアヴェンジャーに繋がる者が出てきたのも事実だ」

「冗談じゃねぇよ……こっちだって、あのバカに裏切られてショック受けてんだっつーのに――」

ゼノスに宥められると、シリアは力なく項垂れて、そのまま椅子へと座った。
シリアの言う通り、フリーアイゼンのクルー達はシラナギがスパイ

だったことにショックを受けているはずだ。
それだというのに、味方であるメシアから疑われてしまえば、シリアのように取り乱すのは無理もない。

「お前達を疑うのは心苦しいがね、事態が事態なだけに形式だけでもそうさせてもらうぞ。
……Ｄｒ．ミケイルが殺害された件についても、アヴェンジャーの仕業であると考えられている。　故にお前達が疑われているのだよ」

「バカ言うんじゃねぇよ、アタシ達は散々世界の為に戦ってきてんだぞ、それにアヴェンジャーとだって何度も交戦してんだぞっ！？」

「しかし、それ自体が我々の目を晦ませる策の一つとも言える。
ただでさえメシアは今、大混乱に陥っているのだ。
少なくとも、事態が収まるまでは身柄を拘束させてもらうぞ……それでいいか、ゲン艦長……」

「……」

晶はちらりと、ゲン艦長の表情を伺った。
無言のまま、何も語ろうとせずに、目を閉じている。
フリーアイゼンの艦長として、クルー達の無実を証明しなければならない。
だが、今はそれを証明する手段がないのだろう……晶はその事を思うと悔しく感じた。
イリュードの言う通りメシアは大混乱に陥っている。
メシアからスパイが発覚した事と一般人である木葉が攫われた件にＤｒ．ミケイルが殺害……そして先週から続くオートコアによるｉ・ブレードの暴走により
メシア内部は対応に追われて、統率が全く取れない状況に至ってい

るといた。

この短期間で、色々な事が続けて起こりすぎていた。
少しずつ、何かが動き出している。
これから、今までにない程のかつてない大事件が待ち構えている気がする、晶は一人そんな事を感じていた。
すると突如、会議室に存在する通信機器が鳴り響き始めた。
……ただの通信ではない、これでは司令官クラスの者からの通信だ。
メシア本部からの通達だろうか、イリュードは通信を受信した。

「こちら第7支部ソルセブン艦長のイリュードだ」

その瞬間、会議室に存在した巨大なスクリーンに映像が出力され始めた。
映し出されたのは、一人の老人だった。

『初めまして、フリーアイゼンの諸君。丁度、招集をかけられているタイミングだと思っておりましたよ』

「……何者だ、何故ここにフリーアイゼンのクルーが集められた事を?」

『ホホホ、少し考えればわかる事ですよ。貴方も現に疑っているではありませんか、他にスパイが存在しないかどうかを。
簡単な話ですよ……スパイはシラナギ・ソノだけでは、ございませんから』

「まさか、アヴェンジャーっ!?」

イリュードがそう叫んだ途端、モニターに映された老人は不気味に

ほほ笑んだ。

『そうです、私がアヴェンジャーを統括する責任者、とでも言いますか』

「……ジエンス・イェスタン」

ボソリ、とゼノスがその名を呟く。

あの反応を見る限り……ゼノスは、その人物を知っているように見えた。

『ほう、ゼノス・ブレイズですか。　いい加減貴方もこちらに戻っては如何でしょう？』

「――っ！？」

ドクン……晶の心音が一気に高まる。

ゼノスが、アヴェンジャーのスパイ？

シラナギに続き……ゼノスまでもが、そうだというのか？

……そんな事、ない。

ありえない、と思いたかった。

だが、否定はできなかった。

あの信頼できるシラナギが、晶の為に、木葉の為に尽くしてくれた人物が……アヴェンジャーの一員だったのだから。

「俺は戻らない。　貴様のやり方は世界を乱し、誰も救われない。

俺は俺のやり方で、アッシュベルを捕えて見せる」

ゼノスはモニターの老人から目を逸らさずに、そう告げる。

……その言葉を、信じていいのだろうか。

嘘を言っているようには、決して見えない。
しかしそれは同時に、ゼノスが『アヴェンジャー』と繋がりを持つことを自白した事と同じだった。

『人を平然と裏切り、自分の目的に手段を択ばない男……そんな貴方が、果たしてフリーアイゼンで仲間と共に戦えるのでしょうか？』

「俺は仲間を信じてきた、だからこいつらも……俺を信じてくれている」

『ほほう、素晴らしい決意ですね。　ですが、その決意も残念ながら無駄に終わってしまいますね……』

「どういうことだ？」

『……フリーアイゼン艦長　ゲン・マツキ殿、貴方にお願いがございます』

ジエンスは不気味に微笑みながら、改まってゲンに告げた。

『私と共に、戦いましょう……真の悪を討つ為に』

思わず、晶は耳を疑った。
いや、会議室にいる全員が同じ事を考えただろう。
ゲンも流石に、驚きを隠しきれていなかった。
……アヴェンジャーの首謀者であるジエンスが、どういう訳かフリーアイゼンに協力を求めてきたのだ。

「我々に共に戦えと？」

『ええ、そうです。　我々の目的は貴方もご存じの通り……アッシュベルに復讐を果たす事です。
我々はほとんどの者が、彼の編み出した人体実験の被害者なのですよ』

「……アッシュベルを討つ事に、協力しろというのか？」

『いえいえ、そんな小さな目標ではありませんよ……我々の目的はただ一つ、メシアの破壊です』

「何っ！？」

メシアの、破壊？
一体何を言い出すのだろう、と誰もが思っただろう。
それは即ち、現状世界の中心となっているメシアという組織を潰す事を意味している。
同時にそれは、世界をE．B．Bから守る手段を失くす、と言っているのと同じだった。
そんな事が、許されるはずがない――
父親は、こんな事を行う為に……アヴェンジャーへと身を潜めているというのか。

『ええ、我々の望みは世界の変革です。　今の世はメシアによって腐りきっています……
それはアッシュベルを始めとし、メシアが内部から腐り始めているからなのございますよ。
もはや、手遅れなのです……メシアは一度崩壊しなければ、立ち直る事はできないでしょう』

「崩壊の先には絶望しかない、それにアッシュベルがまだ『人体実

験』に携わっている証拠は何一つ見つかっていない。
貴様の申し出に答える訳にはいかん」

『ホホホ、未だにアッシュベルの肩を持ちますか。　流石に友を裏切る行為はできないですかな？』

「友の無実は私が証明するっ！　貴様にアッシュベルの何がわかるというのだっ！？」

『いえいえ、わかっていないのは貴方ですよ。　自分が騙されている事にも気づかずに、アッシュベルの言動に惑わされているだけでございます。
かつて我々が、騙され……体を好き放題改造させられたように、ですね』

「友を侮辱するか、貴様……っ！！」

ゲンは強く拳を握りしめ、力の限り怒鳴った。
確かにアッシュベルは奇人ではある。
だが、そのような非人道的な行いをするような人間ではないのだ。
例え誰が何と言おうと、ゲンは艦長としてではなく……友として、アッシュベルの事を信じていた。

『……どうやら、時間の無駄でしたね。　失望しましたよ、貴方ほどの人物が私情に捕らわれ判断を誤ってしまうとは……。
貴方達が生き残る、唯一の道を自ら閉ざしてしまったのですから』

「どういう意味だ……貴様」

『やはり、貴方には何も価値がありませんでした。　正直あの時、

皆殺しにしておくべきでしたよ。
これで貴方は私と共に生きる選択肢を失いました……非常に、残念ですがね』

ジエンスは何処か悲しげな表情を見せながら、そう呟く。
だが、その表情はとてもじゃないが心の底から悲しんでいるようには見えない。
むしろ、心の何処かではこちらを嘲笑っているかのように感じた。

「貴様に何ができるというのだ」

『……ほう、私は本気ですよ。　もう少しで、貴方にもそれがわかるはずです』

ガタンッ！　突如、会議室の扉が開かれた。
一人のメシア兵士が、慌しくイリュードの元へと駆けつけてくる。

「大変ですっ！　メシアの支部各地で、アヴェンジャーの襲撃が確認されましたっ！！」

「何……？　どういうことだ、奴らにそれ程の戦力が……？」

「メシアの中に……何人かのアヴェンジャー兵が紛れておりました。その者達が次々と襲撃を――」

「っ！？」

ニヤリ、とジエンスは笑みを浮かべた。

『ホホホ……どうです、今から貴方が土下座でもすれば……考え直

してあげてもいいのですよ？』

「……」

ゲンは深く考え込んだ。

このタイミングで、メシア支部各地にアヴェンジャーの襲撃が確認された。

恐らく、ずっと前からアヴェンジャーが忍ばせておいたのだろう……シラナギのような内通者を。

それはアヴェンジャーが、本気でメシアの崩壊を狙っていることの証明だった。

だが、いくら内部を乱したと言えどメシアがその程度で崩壊するはずがない。

例えメシアの頭である本部へ襲撃をかけるにしても、本部の護りはそう簡単に崩せるものとは考えられなかった。

……だとすれば、この男はメシアを超える程の戦力を手にしていると考えられる。

それをわからずに、アヴェンジャーを敵に回すのは……あまりにもリスクが高すぎた。

――迷っている暇はない。

「貴様の思い通りになると思うな、その程度の脅しで……我々を止めようとは愚かだな」

『……最後のチャンスでしたが、仕方ありませんな。　これより我々は、メシア本部へ襲撃を掛けます。

そこで……メシアの終わりを見届けるといいでしょう。　ま、貴方がこちらへ来ようが何をしようが……我々を止める事は、不可能ですよ。

愚かなのは自分だったという事を、嫌でも理解させてあげましょう』

それは、事実上メシアに対する『宣戦布告』だった。
……ついに、人類同士での……メシアとアヴェンジャーの『戦争』が始まろうとしていたのだ。

「我々を見縊るなよ……アヴェンジャーッ！」

プツンッ、ゲンは一方的に通信を遮断した。
……このままアヴェンジャーの行為を見逃すつもりはない。
ゲンは、立ち上がった。

「イリュード艦長、奴の言葉は本気だ。　今は我々同士で争っている場合ではない……一刻も早く、アヴェンジャーを止める事が先決だっ！」

「……その通りだ。　フリーアイゼンの改修は完了している……勿論、我々も同行させて頂くぞ」

「……諸君、よく聞いてくれたまえ。　これより先は、E．B．Bとの戦いとは違うっ！　今回我々は、『アヴェンジャー』の討伐を行うっ！！
今の世の中で、本来であれば人類同士で争っている場合ではないのかもしれない……だが、その考えがあの男の暴挙を許してしまったのだ。
奴らの野望は、必ず我々の手で阻止する……ここで、アヴェンジャーとの戦いを終わらせるのだ。
人と戦う事に怖気づいた者は、この場に残れっ！！　本気で戦う意志がある者、迷わずに戦える者のみ……私の後に続けっ！！」

ゲン艦長は力強くそう告げると、静かに会議室を後にしていく。

……晶は、一番初めにE．B．Bに襲撃された時の事を思い返した。
あの時は、突然E．B．Bの襲撃を受け……素人であるパイロット候補生達が、戦場へと駆り出されようとしていた。
怖気づいた者は教室に残れ、教師がそう言ったが……竜彦を始めとして、全員が覚悟を決めて戦場へと旅立っていった。
そして、そのまま帰らぬ人となってしまったのだ。
……同時に、晶はその時心に大きなトラウマを背負ってしまった。
教師に、パイロットとして認めてもらえなかった事を、思い出してしまったのだ。

今の自分を考えると、正直ちゃんと戦えるのか不安で仕方がなかった。
ι・ブレードの暴走でたくさんの命を奪ってしまった時、あれほど戦うのが嫌だと思った事があっただろうか。
……俊の前では確かに、守り抜く事、戦い抜く事を決意した。
だが、相手が同じ人だとしても……戦えるのか。
今まで何機ものアヴェンジャーのHAを落としてきたが、今回の戦いは……状況が異なっている。
こんな事を考えてしまう時点で、晶は戦場に出ない方がいいのかもしれない……と考えた。

「……晶」

ゼノスが、静かに声をかけてきた。

……ジエンスという男は言っていた。
アヴェンジャーに戻って来いと。
それは、ゼノスがアヴェンジャーのスパイという事を証明したことになる。
そして、ゼノス自身もそれを肯定していたのも事実だ。

……また、シラナギのように裏切られてしまうのだろうか。
そんな事を、晶は頭の中にグルグルとめぐらせていた。

「戦うぞ、奴らの手には木葉が渡っている。　このまま戦いが激化したら、木葉が無事でいられるとは限らない」

「この、は……？」

ドクンッ――
晶の心臓音が、再度高まる。
……シラナギは言っていた。
晶に木葉は任せられない、だからシラナギが守ると。
木葉は、どう思ったのだろうか。
同じことを、考えていたのだろうか――

「……晶っ！」

パシンッ――
突如、右頬に激痛が走った。

「考えるな、戦え。　迷ったら俺を頼れ、お前の道を俺が示してやる……だから、ついて来い」

ゼノスは厳しい表情で、晶にそう語りかけていた。
……やっぱり、ゼノスはゼノスだった。
ジエンスの言う裏切り者なんかではない、ゼノスは味方だ。
晶の強い、味方なのだと再認識した。

「ありがとう、ゼノス」

晶は戦う事を、決意した。
木葉を助け出すためは勿論、他にもやる事はたくさんある。
……裏切ったシラナギを、説得する事。
そして、間違った父親を……自らの手で正す事。
戦う理由に、迷う必要はなかった。
難しく考える事はない、自分には強い意志があるのだから。
……かつてない戦いを前にして、晶は戦い抜く事を誓った。

計画始動の時　？

第7支部からアヴェンジャーの通信が入った事は、瞬く間に広まった。
事実上、アヴェンジャーの宣戦布告とも取れる宣言に、誰もが驚かされていた。
世界がE．B．Bの対策に追われている中に、本気で戦争を仕掛けようとしている事もそうだが
それ以上に、メシア全体を敵に回そうという行為に驚きを隠せなかった。

いくら混乱状態に陥っているとは言えど腐ってもメシア本拠地だ。
アヴェンジャーがどれ程の戦力を蓄えているかは不明確だが、少なくとも今までメシアから兵器を奪う行為を繰り返している以上、そこまで大規模な組織ではない事はわかっている。
少なくとも、数では圧倒的にメシアが勝っているのだ。
だが……今までも、メシアはアヴェンジャーによって多大な被害を受けていた。
もし、あのジエンスの言葉を信じるのであれば……彼らはとてつもない数の戦力を蓄えていたのか、或いは秘密兵器を保持しているか。
彼らがどんな手段を使おうとも、メシアは勝たなければならない。
今、メシアが倒れてしまえば世界は再び地獄へと突き落とされるだろう。
今日まで少しずつ、人類の日常を取り戻してきたメシアの行為が、たった一つの組織の手によって壊されてしまう。
それは、決して許されていい事ではないのだ。
第7支部内では、対アヴェンジャーに向けての準備が着々と進められていた。

のんびりしている暇はない、こうしている間にもアヴェンジャーが本部へと向けて進路を進めている可能性もある。
未だに彼らの行方が掴めない以上、一刻も早く本部へたどり着いて待ち構えるしかないのだ。

そんな中、ラティアは休憩所で一人座っていた。
無事に退院を果たし戦線へ復帰を遂げたが、その直後にこの短期間で起きた事件を全てイリュードから聞いた。
Ｄｒ．ミケイルの殺害、Ｄｒ．ミケイルがエターナルブライトによる人体実験を行っていた事。
彼はシリアの足を治療した、治すのは絶望的だと言われたあの足を。
実際、シリアはＨＡに乗れるほど回復しており、足の状態はほぼ完治していると思っていい。
彼女は知っているのだろうか。
自分の治療に、エターナルブライトが使われていた事を。
いや、まだ決めつけるのは早いのかもしれない。
もしかしたら、Ｄｒ．ミケイルは本当にエターナルブライトを使わずに足を治療した可能性だって――

「ここにいたか、ラティア」

「……イリュード」

「随分やつれているな、せっかくの美人が台無しだぞ」

「全く、心にもない事を……」

相変わらずのイリュードに呆れて、ラティアはため息をついた。

「病み上がりってのもあるだろうが、こりゃ妹の件だろうな」

「……貴方には本当、隠し事できないわね」

「どうした、あれから顔を合わせていないのか？」

あの時……ラティアはシリアにレビンフラックスを託して以来、ろくに顔を合わせていない。

勿論、ラティア自身がしばらく意識を失っていた事も原因ではあるが、それでも会わなかった言い訳にはならない。

シリアの元気に歩き回る姿を見れるのは、とても幸せなことなはずだった。

だが、今はそうではない。

一体どうやって足が治ったのか、副作用はないのか、またすぐに歩けなくなるんじゃないか。

そんな不安ばかりが生まれてしまい、とてもじゃないが直視できなかった。

「私はバカよね……今までだって自分から妹を避けて、凄く傷つけてしまっていたのに。

また、同じことを繰り返そうとしている……でも、怖いの。今のあの子と逢うのが……凄く、怖い」

「……フリーアイゼンは、最終調整がまだ済んでいない。明日の明朝には出ると聞いている。

我々の部隊も、同時期に出発とする。まさか、戦えないとは言えないだろうな」

ラティアが悲しそうにそう語ると、突如イリュードは改まってそう告げた。

……戦いを前にして、迷うな。

迷いを持つ者が戦場に出れば、待つのは死あるのみ。
そこまで言わずとも、イリュードが告げたいことが何となくラティアには理解できた。

「それと、お前に特命を下す」

「特命？」

「お前には、ブレイアスでフリーアイゼンと行動を共にして欲しい」

「フリーアイゼンに？」

「彼らの疑いは完全に晴れたわけではない、もしかすると戦場の中……突然、俺達を裏切る可能性もある。
だから、お前には彼らの監視役を務めてほしい。　これは、最も信頼できるお前にしか頼めない事だ」

「私に、彼らを疑えというの？　そんなの、できないわ。　それに、スカイウィッシュ部隊はどうするつもりなの？」

そんな事、できるはずがない。
それは、自らの妹を疑えと言っている事と、同じなのだから。
フリーアイゼンは、アヴェンジャーに寝返るような人達ではないと……イリュードもわかっているはずだ。
だが、艦長として……メシアの第７支部の司令として、彼らに疑いがある限りは……監視をつけなければならないのだろう。

「スカイウィッシュ部隊は俺が指揮すればいいだろう。　今、フリーアイゼンを野放しにしていくと上層部が黙っちゃいないから。
すまないな、嫌な役かもしれないが頼まれてくれないか？」

「……わかったわ、仕方ないわよね」

イリュードとは同期と言えど、自分の上官である事には変わりはない。

再度ため息をつきながらも、ラティアは頷いた。

ふと、イリュードが顔を近づけてきた。

思わずラティアは目を見開いて驚き、頬を少しだけ赤らめた。

「しっかり、妹を支えてやれよ」

イリュードは耳元でそう告げると、静かに立ち去っていく。

ラティアは呆然と、立ち尽くした。

「……素直じゃないわね、最初からそう言ってくれればいいのに」

またしてもため息をついて、ラティアはそう言った。

「でも、ありがとう」

まだ見えるイリュードの背中に向けて、ラティアは微笑んだ。

第7支部に、ある特別な格納庫が存在する。
フラムが私的に使う、技術開発も為に設けられたフラム専用の開発室だ。
白衣を身に纏ったフラムと、ゼノスが二人で並んで見上げていた。
そこに聳え立つ、何処か懐かしさを感じる真っ赤なＨＡ……ゼノフラムを。
圧倒的な存在感は、今でも健在のようだ。

「以前にも増して、クセが強いマシンへと更なる進化を遂げているぞ。　数多の大型Ｅ．Ｂ．Ｂと渡り合う為に、火力を重視した結果……多少無茶な設計となったが、君なら乗りこなしてくれるだろう」

「問題ない、むしろそうではなくてはお前のマシンとは言えん」

「ふ、嬉しい事を言ってくれるじゃないか。　だが、気を付けてくれたまえよ……反エネルギー圧縮砲は強力過ぎる故に、そう乱発できるものではない。
下手に扱いを誤れば、すぐにオーバーロードを引き起こして大爆発だ……君なら、そんなヘマをしないと信じているがね」

「今更だろう、ゼノフラムに乗る時点でリスクは承知している」

「……君は、そこまでして私の夢に拘るかね」

「そうだ、アンタの夢は俺の夢だ。　だから見ていろ、アンタが諦めなかった夢を、『真のゼノフラム』の戦いを」

ゼノスはフラムの目をしっかりと捕えて、そう告げた。

「ふふ、君がそう言わなくともそのつもりだったさ。　私も、フリ

ーアイゼンに同行させてもらうぞ」

「……正気か？」

「ゼノフラムをメンテナンスできるのは、事実上君と私だけだ。他のメカニックが使い物にならないのでは話にならん……不服かね？」

「……」

ゼノスは、戸惑った。

フラムは決して前線に出て戦うような人物ではない、科学者なのだ。恐らく、今メシアの中で未乃　健三と渡り合える程の技術を持つのは彼女だけ。

そんな彼女が、アヴェンジャーの猛攻が予想される戦場へ連れて行ってもいいのだろうか。

おまけにアヴェンジャーは非道な組織であり、どんな手段を使ってメシア本部に攻め込むか見当がつかない。

ダメだ、とゼノスは告げようとした。

「私を拒絶するかね、それもいいだろう。　私はこれでも自重している方だと思うぞ？　最初から君と一緒にコックピットに乗ろうと考えたぐらいだ。

ま、もちろん君がダメだというのなら私にも考えはあるがね……例えばこっそり、コックピットにブーブークッションを仕掛けるぞ。ブリッジルームに繋がっていたら気まずさ全開だ、もちろん一人でもそれはそれでダメージはあるがね。

次はそうだな、ゼノフラムの両手をロケットパンチに改造したり……ま、今から実装するのであれば４、５メートルぐらい飛ばせるのしか用意できんがな。

……後は目からオイルでも噴き出して火をつけよう、名付けてオイルファイヤー！　どうがね、楽しそうではないか？」

「……わかった、連れて行こう」

後半、段々と生き生きと語りだしたフラムが本気でやりかねない、と察したのかゼノスはフラムの同行を了承した。

「ふむ、そうか。　君ならもっと反対すると思ったがね。　ま、私の必要性を考えれば君の判断は正しいぞ、流石は私の親友といったところか」

半脅しだったというのに、よく言う。　と、ゼノスは思わず微笑んだ。

しかし、実際フラムがいれば機体のメンテナンスも効率的になる為、メリットがないわけではない。

フリーアイゼンの事なら自分達が守ればいい、フラムもいるのであれば……尚更だ。

「頼りにしているぞ」

「うむ、是非期待したまえ。　では、私は最終調整を今から行う」

フラムの表情は、やつれているように見えた。

……恐らく、今日までろくに睡眠や食事も摂らずに作業を続けていたのだろう。

今日もずっと、作業を続けるつもりなのだろうか。

それだけ無茶をしておきながら、よく元気そうに喋っていられたものだとゼノスは感心していた。

「あまり無茶はするなよ、今日ぐらいは休んでおけ」

「君が私の事を心配するかね。　だが、私にはスーパー栄養ドリンクZがあるのだよ。　徹夜の時には必需品って奴だな、うむ」

ゼノスがそう声をかけたが、フラムは何故かニヤニヤとしながら栄養ドリンクを見せつける。

自慢しているのだろうか、もしかして自ら開発したのかもしれない……あのフラムなら有り得るだろう。

しかし、あの様子だと心配するだけ無駄だな、とゼノスは悟った。

晶とシリアは、久しぶりに二人で訓練を行っていた。

シミュレーター室では、シリアが付きっきりで晶の指導を行っている。

「よし、今日はここまでにするぞ」

「いえ、まだやれますっ！」

「バカ野郎っ！　今ここで無理してどうすんだっつーの。　明日に備えて体力温存しとけって、はい今日は終わりっ！」

シリアは強引に晶をシミュレーター装置から引っ張り出す。
まだ不安げな表情を見せながらも、晶はしぶしぶ了解した。

「しっかし晶も随分腕をあげたなー、学校で成績最下位ってのが嘘みたいだ」

「ι・ブレードのおかげさ、多分危険察知だとかでコツを掴んだんだと思う」

「どうだろうなー、教官の教え方が悪かったんじゃないかぁ？　センスはあったけど開花しなかったとか」

「そ、そんなことはないと思うけどな……」

シリアの言う通り、晶は実戦で戦いを重ねる度に段々と腕を上げているのを実感していた。
学生時代の時は、あんなに必死で練習しても全く伸びなかったというのに。
……きっかけはどうであれ、晶はι・ブレードと出会ったおかげでこうして念願のパイロットになることが出来た。
だけど、失ったものはあまりにも多すぎる。
クラスメイト、親友、故郷……大切な物を全て失った代わりに得たのは、ι・ブレードとパイロットとなる夢を叶えた事だ。
フリーアイゼンで戦いを繰り返していく中……晶は遂に、世界の命運をかけた戦いにまで巻き込まれてしまっていた。

いや、巻き込まれたわけではない。
晶は強い目的を持って、アヴェンジャーと戦う事を選んだ。
力なき人々を守るのは勿論の事……攫われた木葉を取り戻すという、強い目的を持っていた。

そして……世界を敵に回してまで、こんな計画に力を貸していた父親と、ケリをつける。
自分の正しさを信じて、父親に間違いを示し、証明する。
……もしかしたら、父親をこの手で殺してしまう結果を生み出してしまうかもしれない。
それは、嫌だった。
晶はただ、父親が間違いに気づけば……わかってくれるはずだ、と信じているだけだ。
決して、父親と根から対立しようとは考えていない。

「シラナギはさ、あんな男の元に行っちまったんだよな」

「え？」

突如、シリアはそんな事を呟いた。
あの男……ジエンス・イェスタンの事だろう。

「アタシさ、未だに納得できないんだよ。　どうしてシラナギのような優しい奴がさ、あんな非道な連中の一味だったんだろうって」

「俺も、信じられないよ。　シラナギさん、俺にも木葉にも優しくしてくれて……ずっと、支えてくれてたのに」

「……なぁ、木葉を取り戻すんだろ？　ならさ、シラナギも説得してみようぜ」

「せ、説得？」

「そうだ、もしかしたらアタシ達の言葉を聞いて……考えを改めてくれるかもしれないだろ？　あんなやり方、正しいはずがないって

わかってくれるはずさっ！」

「……」

晶は、そうとは思えなかった。
シラナギは、揺らぎない強い意志を持っているように感じる。
そもそも自分達の言葉で揺らぐぐらいなら、あの時裏切っているはずはないのだから。

「……どうしたんだよ、難しい顔して」

「あ、いや……」

せっかくシリアが気を使ってくれたんだ、そんな事を口に出せるはずがない。
シラナギが敵として現れたら……戦わなければならない。
シラナギは強い、生半可な覚悟で戦えるような相手ではないだろう。
そんな甘い考えが通じるような相手とは、とても思えなかった。

「ま、色々不安になるよな。　アタシもちょっと不安でさ、足の事も……また急に動かなくなったりしないか、とか考えちゃったり。
姉貴の事が気がかりだったり……Ｄｒ．ミケイルが殺された事を考えたりしてるとさ」

「……そう、だな」

Ｄｒ．ミケイル。
エターナルブライトの人体実験を行い、シラナギがそれを暴こうとした。
その結果、彼が何者かに殺されてしまった……というのが事件の真

相だという。
シリアはその事を、知らないだろう。
……自らの体に、エターナルブライトが埋め込まれた事も。
告げる、べきなのか。
今真実を話せば、シリアを再び……絶望の淵に突き落としてしまうのではないかと不安だった。

「お、あれゼノスじゃないか？」

「え？」

二人はシミュレーター室を出た瞬間、廊下の向こう側からゆっくりと歩んでくるゼノスの姿を捕えた。
ゼノスはその場で立ち止まった。

「……シリア、晶。　ちょうど二人を探していた」

「な、なんだ？　何か用事か？」

「すぐに終わる、だがこの場では話し難い。　晶の部屋を貸してくれ」

「あ、ああ……」

……何かを、伝えようとしているのか。
シリアと晶は思わず息を呑んだ。
緊張感が高まる中、二人は黙ってゼノスの後をついていく事とした。

計画始動の時　？

フリーアイゼンの中では、クルー達が慌しく駆け巡っていた。
物資の補給や、内部の整理、フリーアイゼンの最終調整等第7支部のメシア兵を巻き込んでの大掛かりな作業の数々。
明日の出発に備えて、着実に準備が進められている。

ブリッジルームには、久々にメンバーが集っていた。
戦況オペレーターのヤヨイ、操船担当のリューテ、武器管制のライル……そして艦長を務めるゲン。
思えばこんな少人数で、フリーアイゼンはよく戦ってこれたものだと感じていた。
第7支部によって、フリーアイゼンの改修が進められていく中に武装がいくつか追加されている。
出力を抑えた副砲を二門に、更なる強力な一撃を手にした主砲に大量のミサイル。
それに伴い、フリーアイゼンの制御面も改良が加えられていた。
事前に動作確認を行う為に、艦長はここにブリッジメンバーを招集させたのだ。

「首尾はどうだ？」

「問題ありません、以前と使い勝手も変わっておりませんので」

「フィールド調整が若干以前のと違っているようですが、それ程大きな問題とはなりません」

「こっちも大丈夫そうだ。　以前よりも使い勝手は上昇している、

こりゃフリーアイゼンの大活躍が期待できそうだぜ」

「では各自、明日の明朝まで自由にするといい。　後は他の者が準備を済ませてくれるだろう」

艦長はそれだけ告げると、ブリッジルームをそのまま出て行こうとする。

するとヤヨイが立ち去ろうとする艦長を呼び止めた。

「艦長、少しだけいいですか」

「なんだ」

「正直、私はこのように人類同士で戦う事は喜ばしくない事だと感じています。

……勿論、戦う覚悟はありますが……本当に、これでよろしいのでしょうか？」

「迷っているのか、ヤヨイ」

「……はい」

ヤヨイは不安げな表情で、そう告げた。

アヴェンジャーが行おうとしている恐ろしい計画は、ヤヨイ自身も知っている。

だが、ただでさえ人類にはE．B．Bという共通の敵が存在するのに、どうして争わなければならないのか。

何とかして、戦いが起きない方法がないのかと、ヤヨイは考えていたのだ。

艦長は、戦う覚悟がある者だけついて来いと確かに告げた。

その時点では、迷いはなかったはずだ。
なのに、直前になってヤヨイが怖くなってしまったのだろう。

「確かに、人類同士で戦うのは本来ならばあってはならない事だ。……だが、我々が動かなければ誰がアヴェンジャーを止めることが出来る？
彼らは本気でメシアを潰そうと企んでいる……アヴェンジャーの自由を許してしまえば、世界を混乱に陥れる事になってしまう」

「……そう、ですよね。　ごめんなさい……艦長」

「ヤヨイさん、貴方の気持ちは私にもわかります。　私も出来る限り、戦いを避けられればいいと考えていましたが」

「だけどよ、艦長の言う通りだろ。　戦わなければもう、あいつらは止めんねぇんだよ……だったら、戦うしかないだろうが」

「その通りだ、私がもっと優秀であれば……戦わずにして事態を解決する方法を見つけられたかもしれん。
だが、今我々に残されているのは……戦う事しかないのだ。　他の方法を考える暇も……ないのだよ」

艦長は悲しそうな表情を見せて、そう呟いた。
誰もが、人類同士で戦う事を望んではいない。
しかし、もはや戦いは避けられない。
残された道はただ一つ、戦い抜いて……アヴェンジャーの計画を阻止する事だけだった。

「わかりました、ならばもう問いません。　私も……人類の未来の為に、戦うまでです」

「……辛い思いをさせて、すまないな。　この戦いに勝利すれば、我々はE．B．B討伐に専念することが出来るはずだ。
……もう二度と、アヴェンジャーのような組織を生み出さないためにも、我々は解決しなければならない問題を抱えすぎている。
だからこそ、我々は生き抜くぞ。　人類の未来の為に……勝利を掴むのだ」

「わかってますよ、必ずアヴェンジャーの野望を阻止しましょう」

「当然だ、俺達がいる限り奴らの好きにはさせねぇっ！！」

ヤヨイの迷いが断ち切れたのを確認すると、艦長は静かに背中を向ける。
ジエンスは言っていた、アッシュベルは人体実験を行っていると。
友の事は信じたい、アッシュベルは何一つ嘘をついていない。
誰かがアッシュベルが疑わるように仕向けている、アッシュベルは確かにそう告げていた。
……その言葉を、信じるしかない。
例え誰もアッシュベルの言葉を信じてくれなかったとしても、艦長がその事実を証明すればいい。
だからこそ、艦長は止めなければならない、アヴェンジャーを。
友の無実を信じて――

晶はシリアとゼノスを連れて、自室へと訪れた。
フリーアイゼンが改修中であった為、施設内の空き室を使わせてもらっていた。
部屋はそこそこ広くて、一人では十分すぎる程だ。
ゼノスは周りを注意深く見渡すと、部屋のカギをかけた。

「……お前達にだけでも、話しておきたいことがある」

「何だぁ？　もしかしてあの爺が言ってたことか？」

「ああ、そうだ」

ゼノスは間髪入れずに、そう答える。
ジエンスは、ゼノスに向けて確かに『戻って来い』と告げていた。
それを意味する言葉は、ゼノスは少なくともジエンスとつながりがある事を示しているのだ。

「今から5，6年ほど前、俺はアヴェンジャーの一員として活動していた。
俺が下された命令は、メシアの一員に成りすましてアヴェンジャーに情報を提供する事だった」

「……本当、だったのか」

晶は力なく、そう呟いた。
ゼノスがあの非道な組織の一員だったとは信じ難い、だが本人がそう語るのであれば間違いないだろう。
……だからといって、晶はゼノスに偏見を持つような真似はしない。

どんな過去を持とうと、信頼できる人物である事は確かなのだから。

「アヴェンジャーはジエンス・イェスタンの手により、アッシュベルに復讐心を抱く者が集った組織だ。
文字通り奴が、一人一人勧誘して言ったと聞く。　俺達の最終目標は、メシアを隠れ家としているアッシュベルを炙り出す事だったんだ」

「ちょっと待てよ、何でアタシらに今更そんな話をするんだ？　別にアタシはゼノスを疑っちゃいないさ、無理に過去を話す必要性も――」

「お前達は、アヴェンジャーと戦う前に……アヴェンジャーを知っておく必要がある。
そして、アヴェンジャーを生み出す元凶となった『エターナルブライト』や『アッシュベル・ランダー』についても」

ゼノスがそう言った途端、突如前触れもなく上着を脱ぎ始めた。

「バッ、な、なな何してんだよっ！？」

シリアは顔を真っ赤にさせながらも、慌ててゼノスを取り押さえようとするが……ゼノスの胸部を目の当たりにして、顔を青ざめさせた。
そこには、とてもじゃないが人間の体とは程遠い、異形がべったりと張り付いていた。
いや、そうではない。　よく見ると剥き出しになっているE・B・Bのコアのようなものが見えている。
そこで晶は気づいた……ゼノスもまた、『被害者』の一人であったことに。

エターナルブライトを体に埋め込まれた結果、胸部を中心にE．B．B化が進んでしまっているのだろう。
……ゼノスが不死身だと言われている理由が、ようやくわかった。

「これが、体内にエターナルブライトを埋め込まれた人間の末路だ。
エターナルブライトを埋め込まれた生物は、異形へと変貌を遂げる。
それがE．B．Bの始まりであったが、その生物に『人間』が含まれないはずがない」

「う、嘘だろ、ゼノス……今までずっと、その身体でアタシ達と戦って――」

「……体のE．B．B化が進むと共に、人間は異形の力を得ることが出来る。
例えば、E．B．Bのような有り得ない再生力を持ち、強靭な肉体を手にすることが出来る。
また、人によるおまけ要素だが……ちょっとした特殊能力が身につく例もある。
例えば俺なら」

パチン、とゼノスが指を鳴らした途端――バァンッ！　と、爆竹が爆発したかのような音が響き渡った。
晶はその爆発を見て、とある不思議な現象を思い出した。
ι・ブレードに搭乗する時、ゼノスは襲い掛かるガジェロスから晶の身を守ってくれていた。
……その時に、ゼノスがガジェロスに攻撃を仕掛けた時だ。
謎の爆発が、発生していた。
あの時はι・ブレードに乗る事に必死で、その後もあの爆発については全く疑問を抱いてはいなかったが……ようやく、そのカラクリが解けた。

「俺は意図的に、爆発を引き起こせる体質となっている……エターナルブライトによってな」

「な、なんじゃそりゃ……エターナルブライトってそんなとんでもねぇ効果も持っていたんだな」

「だけど、考えてみればE．B．Bだって同じようなものだよな。俺達が相手にしてきた奴ら、ビームみたいのを射出する奴もいたし……」

エターナルブライトに秘められた謎の力、今まではHAの動力源やE．B．B発生源としての認識しかなかったが、それは大きな間違いだ。

本当は、もっととてつもない力を持っている。

HAのような兵器を生み出す以上の、とんでもない力を持っていると、ゼノスは伝えたかったのだろう。

「シリア、お前の足を見せろ」

「ア、アタシの足ぃ？　……ま、いいけど」

シリアは固定具で固められている両足を、ゼノスに見せた。

「……固定具を外す。　悪いが、確かめさせてもらうぞ」

「な、何をだよ？」

ゼノスはその問いに答えずに、黙々と固定具を外し始めた。

その下には丁寧に包帯が巻きつけられている。

……もし、Dr．ミケイルが本当にエターナルブライトに関わって

いたとしたら。
シリアの足には、エターナルブライトが埋め込まれている事となるはずだ。

「……え――」

「……やはり、か」

二人は同時に、声を漏らした。
包帯を解いていった下に見えてきたのは、黒ずんだ足だ。
その変化具合を見ると、E．B．B化が進みだした状態と酷似している。
……ゼノスのように剥き出しにはなってないと言えど、エターナルブライトが使われている事を証明するには十分すぎる証拠だった。
Dr．ミケイルは、やはり人体実験を行っていた。仲間であるはずのシリアを使って――

「ア、アタシの足に……エターナルブライトが？」

「……これが事実だ、お前は確かに再び大地を歩ける体に戻った、もう一度パイロットをやれる体となった。
だが、その結果……お前は俺達と同じように、E．B．Bになる運命を抱えてしまったんだ」

悲しい表情を見せ、ゼノスはそう呟いた。

「……いや、いいさ。　むしろアタシは、こうやってパイロットをもう一度やれる事が嬉しいと思う。
どうせあのまま生きていても、退屈な人生が待っていたはずさ。
……何も、悪い事ばかりではないさ」

シリアは口ではそう言っているものの、体を小刻みに震わせている。
……ゼノスのあの胸部を見てしまえば、いつか自分の足もそうなってしまうと想像してしまうだろう。
平気なはずがない、怖くないはずがなかった。

「アッシュベルのターゲットは、シリアのように体に障害を持った人間……もしくは、重い病気を抱えた人間をターゲットにしていた。絶望に陥れられた人々に偽りの希望を見せつけて、病人達の夢を叶える……そんな非道な事を、平然を続けていたんだ」

「……でも、何でアッシュベルだってわかるんだ？　少なくともメシア内では、今の今までアッシュベルが人体実験を行っているどころか……
エターナルブライトによる人体実験すら知られてなかったんだろ？」

「Ｄｒ．ミケイルの例を考えればわかるだろう。　奴は直接動いちゃいない、いくつかのルートを通して医療機関に属する人間を好きなように操っていたんだろう。
……それを知っていたのはジエンスだけだ。　俺が奴から勧誘された際は、まるで全てを見透かされているかのように……この体に至るまでの経緯を言い当てられた。
奴の情報源が本物であると信じるには、十分すぎる証拠だからな。
　勿論、確実な証拠はないと言えど……俺は今でもアッシュベルを疑っているのは事実だ」

「なら、ゼノスはアヴェンジャーから離れても……アッシュベルに復讐を果たすのが目的なのか？」

晶はゼノスに向けて、そう尋ねた。

冷たく重い空気が張り詰める中、晶は思わず生唾をゴクリと飲み込んだ。

「違う、復讐を果たしたところで俺の体はどうにもならない。　アヴェンジャーのやり方を間近で見てきた俺は、嫌気がさして抜け出した。
そのやり方は言わずとも、わかっているだろうが……。　だから俺は、俺のやり方で『アッシュベル』の悪事を暴くつもりだった」

ゼノスの言葉を聞いた途端、晶はふと父親の言葉を思い返した。
父親は、アッシュベルを止める為にアヴェンジャーに身を置いたのだ。
どんな手段を使ってでもアッシュベルの悪事を阻止しようと、必死で立ち向かおうとしていた。
……ゼノスはそれを、メシア内部から実施しようとしていたのだろう。
だが、それでもアヴェンジャーの行為を見逃すわけには行かない。
今のメシアが破壊されてしまえば、全てが滅茶苦茶になってしまう。
かつて晶の故郷が襲われたどころの騒ぎで、済むはずがないのだ。

「……アヴェンジャーと俺は、やり方が大きく異なるが……共に同じ目的を持つのも事実だ。
だが、俺は奴らの行いが正しいとは思わない。　破壊から生み出されるのは絶望しかない、世界はＥ．Ｂ．Ｂによって再び地獄を見る事になる。
……そんな未来を、俺は望んでいない。　だからこそ、俺を信じて……共に戦ってくれないか？」

相変わらず表情を変えないものの、その言葉には強い意志が込められているのを二人は感じた。

ゼノスの言葉に偽りはない、アヴェンジャーと戦う事に何一つ迷いを生じていないという事だ。

「何いってんだよ、だからアタシはゼノスを疑ってないっつーのっ！」

「ゼノスには何度も助けられているんだ、疑うだなんてとんでもないだろ」

晶はシリアに続いて、ゼノスにそう告げた。

「……すまない、二人とも。　ありがとう」

「気にするな、アタシ達は仲間さっ！　おい晶、ちょっと円陣組むぞっ！」

「う、うわっ！？」

シリアはゼノスと晶を強引に引っ張ると、3人だけの小さい円陣を組み始めた。

何だか気恥ずかしかったが、シリアは勿論の事、ゼノスすらも少しだけ微笑んでいた。

「んじゃ、未来のエースがドーンっと決めちゃってっ！　頼むぞ、晶っ！」

「お、俺っ！？」

あまりにも唐突過ぎるキラーパスに、思わず晶は度肝を抜かれた。

手っきり言い出しっぺのシリアがやる者だと思っていたが、そんな

事を口に出すわけにもいかずに晶は必死で思考をグルグルと回転させる。
……難しく考える必要はない。
純粋な今の願いを、言葉に込めればいいだけだ。
晶は深く、深呼吸をした。

「……じゃ、じゃあ行くぞ」

二人が無言で頷くのを確認すると、晶は強く叫んだ。

「生き残るぞ……必ず俺達は生き残って勝利を掴んで見せるぞっ！！」

「「オーッ！！！」」

3人の誓いの叫びが、第7支部中に響き渡った。

第１６話　開戦　？

世界各地に展開するアヴェンジャーの一員が、本拠点に集った。
長年計画されてきた打倒アッシュベルが、今始動されようとしている。
メシア本部の所有するＨＡは数千を超えるに対して、アヴェンジャーは奪った兵器も含めて５００機程の数。
数では圧倒的に劣っているが、メシア内部は現状混乱に陥っており、指揮がまともに機能していない状態だ。
全ては、ジエンスの計画通りに事が進められていた。

格納庫に聳え立つ、巨大な紫色のＨＡが一つ。
装甲が何十枚にも重ねられ、重武装を備えたその姿は……メシアが生み出した悪夢の兵器『Ｇ３』の姿を連想させた。
だが、いくつか異なる点も存在した。
両手の指は砲身のように穴があけられており、恐らくライフルか何かを埋め込まれているのだろう。
他には頭の額に値する部分に、赤い鉱石……いや、Ｅ．Ｂ．Ｂのコアが剥き出しになるように埋め込まれていた。

「Ｇ３のデータから再現した新たなＧ３……か、まさかこいつを復元する事ができるとはな」

「健三さんの成果なんでしょうね。　でも、こんなものまで復元するなんて……」

「それだけ本気という事だ、ジエンス様はよ」

ガジェロスとシラナギの二人は、紫色のＨＡを前にして二人で話していた。
間もなく作戦が始まる直前に、ガジェロスに新型の支給について聞かされていた。
まさかそれが、Ｇ３を再現したＨＡだという事は想像もしていなかっただろう。

「アハハ、お互い新しいＨＡだね。　やっぱり新品っていいよね、凄くウキウキしちゃう」

「あらー、フィミアちゃんどうしたんですかその恰好？」

突如現れたフィミアは、作戦直前だというのに何故か真っ赤なドレスを身に纏っている。
とてもじゃないが、戦闘に出る様な服装……とは思えない。
だが、ガジェロスはまたか……と深くため息をつくのであった。

「ウヒヒ……殺したはずのお姉さんが、生きていたんだもの。　やっぱり私達の愛は、通じ合っていたの。
だからね、もう一度確かめるんだ。　お姉さんと私の愛を……トリッドエールで」

「……うふふ、そうですね。　恋が実ると、いいですね」

シラナギは顔を引きつかせながら、無理やり笑顔を作った。
フィミアも同じように笑顔を返すと、トトトと小走りでその場を去っていく。
……彼女もまたＥ．Ｂ．Ｂによって、精神を壊された被害者の一人。
ガジェロスが言うように、Ｅ．Ｂ．Ｂ自体には精神を汚染するような効果はないのかもしれない。

だが、少なくともそれが引き金となって……彼女は何処か精神が狂ってしまった事は間違いなかった。
シラナギは、そんな可哀想な彼女を直視することが出来なかった。

「そんな顔するな。　この計画を成功させれば俺達のような、あのガキのような被害者は二度と増えなくなる」

「ええ、わかっていますよ。　私は平気ですから」

この戦いに敗北してしまえば、フィミアのような被害者が増え続けてしまう。
いずれは世界全土がエターナルブライトによって、汚染されてしまう未来が待っている――
そんな世界を作り出すわけには行かない、どんな手段を使おうとも……アッシュベルを止めなければ未来はないのだ。

「へぇ、こいつが噂の新型かぁ？」

フィミアと入れ違いで今度は茶髪の少年、俊が姿を現した。

「遅かったな、今まで何処で油を売っていたんだ」

「わりぃわりぃ、まさかこんなに急になるとは思ってなかったしな。
クソ爺に頼んで、徹夜で作業してもらってたんだ。
……ついに手に入れたぜ、究極のマシンをよ」

「究極のマシンだと？　お前のレブルペインは一体どうしたんだ？」

ガジェロスは俊の言葉を耳にして驚きを隠せなかった。
今まで新型の支給を頑なに拒否し続けて、レブルペインでι・ブレ

ードを戦う事に拘っていた男がこのタイミングで新たなＨＡを手にしたとでも言うのか。

「ま、お前に紹介してもらったクソ爺とちょっとした取引をな、おかげで俺のレブルペインがパワーアップってわけさ。いやいや、流石に俺も参っちまうとこだったぜ……ここに来るまでの間何度気絶しかけたか……ありゃマジでバケモンだぜ」

「あらー、初めましてですね。　貴方が噂の天才くんですかー？」

「あ？　誰だこの女――」

嬉しそうな顔でＨＡを語る俊に対して、シラナギは水を差すかのように笑顔で挨拶をした。
嫌な顔を一瞬見せた俊だが、シラナギの表情を目にして何故か固まっている。

「どうしました？　私の顔に何かついてます？」

「……なぁ、お前何処かで俺と逢った事ないか？」

少し考え込むと、俊はシラナギに対してそう告げた。
シラナギと俊は当然ながら初対面であるはずだが、そうとは思えない。
昔からこの人物を、知っているような気がする感覚に陥っていた。

「ダメですよー？　いくら私が可愛いからって、そんな古典的な手段でナンパだなんて。　若くて勢いがあるってのは良い事ですけど、ちょっと困っちゃいます」

「はぁ？　誰がテメェなんかナンパするかよっ！　それに俺は女に興味なんかねぇんだよ、クソが」

「ええーっ！？　そうなんですかぁ？　てっきり男の子は女の子が大好きだと思っていましたけれど……もしかして、あっち方面の方ですかー？」

「ケッ、おめでてぇ頭だな。　そういうアホ思考しかできねぇ奴に興味はねぇ、さっさと失せるんだな」

俊の頭に強く刺激したシラナギの姿であったが、やはり気のせいだったのだろう。
こんな人物と知り合いのはずもなく、俊はこの手のタイプが大嫌いな人間だ。
ただ、この引っかかった記憶自体は嘘ではない。
……多分、似ていただけなのだろうと自身を納得させていた。

「そろそろ時間だぞ、さっさと出撃準備をしろ」

「へいへい、わかってるっつーの。　俺はいつでもいけるぜ？」

「じゃあ、私はここに残りますので」

「ん？　何だお前、パイロットじゃねぇのか？」

「いえいえ、貴方以上の腕を持つとーっても強いパイロットですよ？」

「へぇ、そりゃ凄そうなパイロットさんだな。　んじゃな」

これ以上この場に留まる必要はないと、俊は手をヒラヒラと振って立ち去ろうとする。
だが、突如背後からギュッと手を掴まれて引き止められた。

「そうですそうです、ちょっとだけ時間いいですか？」

「んだよ、リーダーさんがご立腹だぜ？　用事あんならさっさと告げろ」

ガジェロスがサングラス越しから睨み付けているのを感じた俊は、嫌そうな顔でシラナギにそう告げる。
シラナギは俊の両肩を掴んで、無理やり正面へと向けさせた。

「いいですか、これから何があっても命だけは大切にしてくださいね。　危険な事をしては、絶対いけませんよ？」

「……いちいち気に障るな、テメェはよ。　俺は――」

「お姉さんとの約束ですよ、絶対に守ってくださいね？」

「……」

シラナギがにっこりと微笑むと、思わず俊は言葉を失ってしまった。
……やはり、知っている。
俊はシラナギを、知っているのだ。

「それでは……また、逢いましょうね」

それだけ告げると、シラナギは駆け足で格納庫を去っていく。
俊は呆然とその場に立ち尽くすだけだった。

「……アイツ」

「どうした、惚れたか？」

「テメェまでおめでたい頭してんな、クソが……俺ぁ行くぜ」

そんなものではない、もっと大事な何かが頭を刺激している。
この正体には……いや、もう俊自身も気づいているのかもしれない。
ただ、その事実を受け入れる事に時間がかかっている……だけなのだろう。

「……行くぞ、『Ｇ４』」

ガジェロスは紫色の大型ＨＡ……新たに生まれ変わったＧ３を、その名で呼んだ。

フリーアイゼンは、メシア本部へと向かっていた。
アヴェンジャーは明確な時間を指定していないが、必ず攻めてくる。
事前に本部にも通達はしてあるが、あの混乱の中では正確に伝わっているかどうかわからない。
最悪まともに動ける部隊は自分達だけかもしれない、と腹を括った。

「レーダーの様子はどうだ？」

「今のところ正常です、まだアヴェンジャーはこの付近に近づいてはいないようですね」

「……このまま何もなければ、それが一番なのだがな」

しかし、ジエンスの言葉は嘘を語っているような様子はない。

間違いなく、このタイミングで仕掛けてくるだろう。

あの男は今回の作戦を成功させる絶対的な策を持っているはずなのだから。

「こ、これは？　……レーダー機器に異常が発生しました」

「やはり動き出していたか、アヴェンジャー……っ！」

今までの傾向から考えれば、このレーダー危機の異常は間違いなくアヴェンジャーが保有するレブルペインの仕業だろう。

彼らの目的を考えれば、その先はメシア本部である事に間違いはない。

だが、フリーアイゼンのスピードではメシア本部の到達まではまだまだ時間がかかってしまう。

どうにかポイントを割り出せればいいのだが……。

すると、ヤヨイの横に興味深そうにディスプレイを眺めるフラムの姿があった。

彼女はほぼ強引に船へと乗り込み、ブリッジルームへと上がりこんでしまっていたのだ。

その後、ゼノスの説得があって艦長はやむを得ず了解をしたが……

あの優秀な科学者が、最前線へ向かおうとしている艦に乗っていて

も良いのだろうか。

「ふむ、なるほど。　この距離でレーダー障害が発生したとなると、奴らのおおよその位置ぐらいは計算できるのではないかね？」

「え、ええ……出来るかと思います。　今私の方で算出を――」

「必要ない、このぐらいであれば機械なぞいらんだろう。　このデータを各機ＨＡに送ってくれ」

「え？　は、はいっ！」

流石のヤヨイもフラムの天才っぷりには驚かされていた。
フラムに言われるがままに予測される座標ポイントをパイロット各位へと転送する。

「さて、艦長殿。　貴方の勘が頼りだ、このポイントを見て奴らの居場所を特定できるかな？」

艦長はモニターに映された辺りの全体図を睨み付ける。
アヴェンジャーが拠点からこちらに向かってきているとしたら、まずはその拠点が何処へあったのかを推測しなければならない。
……だが、メシアが見つける事が出来なかった拠点だ。
そう簡単に特定できるはずはない。
しかし、艦長はこの図を見て何かに気が付いた。
予測されるポイントが全部で４カ所。
そのうちの２か所は住宅街付近だ。
今までのアヴェンジャーの傾向を考えれば、無意味に住宅街を襲うような真似はしていない。
勿論、今このタイミングで街を襲撃すると言った真似はしないだろ

う。
彼らの目的はあくまでもメシア本部にあるのだから。
そうなると残りは二つ、片方は足場が悪くE．B．Bが大量発生する事から人はあまり近寄らない。
もう一方は、それを更に上回った第S級に指定される汚染区域付近だ。
彼らの部隊はほとんど陸地を歩くはずだ……そうなれば、汚染区域付近が一番怪しいだろう。
しかし、今フリーアイゼンが全力でそこへ向かったとしても時間が足りない。
ここはHAだけを先行させるのが一番であろう、と判断した。

「ι・ブレード、レビンフラックスの2機をポイントDへ向かわせろ、残りは本部へと向かい防衛へ専念するぞ」

「いいのですか？　たったの2機を単体で向かわせるなんて」

「ιとレビンフラックスの機動性があれば問題はない、いざとなれば容易く退くこともできるはずだ」

「……了解しました。　ι・ブレード、レビンフラックスの2機は直ちに出撃してください」

『了解……っ！　ι・ブレード……出ますっ！』

『あいよっ！　アタシに任せとけっ！　かっ飛ばすよっ！！』

パイロット達の音声を確認すると、モニターからは2機のHAが凄まじい動きで出撃していった姿が見えた。

見送る暇もなく、あっという間に2機のHAは姿を消していく――

「リューテ、多少無理をしてでも本部へ急いでくれ。　本部の部隊がどうなっているかもわからんからな」

「多少荒くなりますが、何とかしますよ」

「おいおい、艦を落とすんじゃねぇぞ？」

「そんなヘマはしない、行くぞ」

リューテがそう言った途端、フリーアイゼンの揺れが一気に激しくなった。
ガタガタガタと、伝わる振動が今まさに猛スピードで空を突き進んでいるのが身に染みて伝わってくる。
だが、戦いが起きればこんな揺れ程度では済まない。
……最悪、あの時のような集中砲火も覚悟していた。

「ついに始まる……のだな、アヴェンジャーとの最終決戦が」

艦長は目を閉じて、静かに戦いの始まりを告げた。

開戦　？

フリーアイゼンから送られた指定座標を元に、晶とシリアは全速力で向かっていた。
モニター越しから見える大空は、何処か奇妙な静けさがあり晶を不安にさせていく。
ここで不安になっていてはいけない、と晶は自分に言い聞かせた。
この先には、アヴェンジャーの部隊が潜んでいる。
恐らく、俊もこの戦いに姿を現すはずだ。

『そこまで言うんなら、守って見せろよ。　俺がテメェの理想と共に……徹底的にぶっ潰してやるからよ』

あの時俊は、確かにこう言っていた。
事前にアヴェンジャーの計画が動き出す事を、わかっていたのだろう。
だが、俊は他のアヴェンジャーの兵とは違う。
何も考えずにただ、戦いという行為そのものを楽しむ為にアヴェンジャーの一員として戦っているのだ。
彼に思想も信念も、何一つない。
しかし、戦いに勝利するという執念だけは誰にも負けない。
そんな男に……果たして勝てるのだろうか。
いや、勝たなければならない。
全てはメシアを守る為、人類の未来を守る為に――

『おい晶、見ろよ』

ふと、シリアの通信が入ってきて晶はハッとさせる。
モニターから見える光景を目にして、晶は息を呑んだ。

機体を減速させて、じっくりとその様子を確認する。
……間違いなく、アヴェンジャーの部隊だ。
レブルペインを中心に組まれた部隊の中には、いくつかの奪われたウィッシュが混じっていた。
数は１００機を超えている……が、恐らく全戦力ではない。
メシア本部を攻め込むというのだから、もっと戦力を保有していると考えても不思議ではなかった。

『晶、いけるか？』

「あ、当たり前だっ！」

『いい返事だな、やっとお前も男らしくなってきたよ。……それじゃ、行くぞっ！！』

シリアの掛け声と同時に、晶の目の前を飛行形態のレビンフラックスが凄まじい速度で通り過ぎていく。
地上へ降り立った途端、人型へと一瞬に変形して周囲の敵をサーベルで切り裂いていった。

始まった。
ついに、アヴェンジャーとの最後の戦いが、始まってしまった。
今更退く事も出来ない、覚悟ならとうにできている。
後は、踏み出すだけだ。

「……行くぞ、ぃっ！」

コックピットが赤く灯るのを確認して、晶は一気にスロットルを押し込み機体を急降下させる。
２機のレブルペインに気づかれ、ι・ブレードはライフルで集中狙

いされるが、危険察知を持つ晶にとっては回避は容易い。
回避の最中に強いGを体中に受けながらも、晶は何とか堪えきり、地上へ着地した。
同時に、ムラクモを抜刀するとバギィィィッ！　と、金属が砕けるような音が響き渡る。
一機のレブルペインの右腕が、綺麗に切断されていた。

「お前達の……好きにさせるかぁぁぁっ！！」

晶は容赦なく、ムラクモを強く振るうとあっという間にレブルペインの胴体が真っ二つに分かれた。
ズガァァンッ！　と爆発が起きると同時に、3機のウィッシュと2機のレブルペインがι・ブレードを囲むように集ってくる。

「ここから先へは行かせない……俺がメシアを……世界を、守るんだっ！」

両手でブラックホークを構え、力の限り撃ち続けた。
バンバァンッ！　と、銃声と共に次々と敵機の頭が吹き飛ばされていく。
その途端、晶が頭痛を感知して……背後からウィッシュ2機が襲い掛かってくる映像を目にした。

「そこだ――」

晶が振り返ろうとした途端、突如コックピットが青色に灯った。

「……っ！？」

背後以外からも攻撃が来たというのか？

この数であれば、俊のように狙わずとも危険察知が追い付かない事は多発する。
何とか凌がなければ――

『あぶねぇぞっ！！』

ダァンッ！！　激しい銃声と共に、上空から一機のレブルペインが吹き飛ばされていく。
その先には敵機に囲まれながらも、ライフルをこちらに向けているレビンフラックスの姿があった。
まさか、あの状態で助けてくれたというのか？
するとレビンフラックスは飛行形態へと姿を変え、銃弾を回避しながら大空へと飛び立っていった。

『クッソ、鬱陶しい奴らだな……無事か、晶っ！？』

「ああ……シリアのおかげだ」

『礼なら後だ、ボサッとしてんじゃねぇぞっ！』

シリアがそう叫んだと同時に、晶に危険察知が発動する。
背後から仕掛けてくるウィッシュの姿を確認し、晶はブラックホークを即座に撃ち込んだ。
だが、またしてもコックピットが青く灯っていた。

「クッ……！」

何処から攻撃が来るかわからない以上、晶はスロットルを最大まで押し込み空高く飛び上がっていく。
その瞬間、凄まじい銃弾の嵐がι・ブレードへと襲い掛かった。

回避は間に合わない、ならば――

「……フィールド展開っ！！」

ガキィィンッ！！　晶が強く念じた瞬間、ι・ブレードの周囲に赤い光が展開され、全ての銃弾を弾き飛ばした。
晶はフィールドを保ったまま、銃撃をなんとか凌いでいった。

「や、やっぱり数が多すぎる……たった2機でこいつらを相手にするなんて――」

『弱音吐いてんじゃねぇぞ、耐えろっ！　フリーアイゼンが本部につくまでの辛抱だっ！』

想像以上の敵機の数に、晶は圧倒されていたがシリアの言う通り、弱音を吐いている場合ではない。
この状態にE．B．Bが存在しないだけでもマシだ、と晶は自分に言い聞かせた。
その時、アヴェンジャー部隊の上空から高速で近づいてくる2機のHAを目にする。

「あれは――」

『奪われたブレイアス……っ！？　それに、もう一機はレブルペインか？』

高速で接近してくる2機のHAは、綺麗に二手に分かれて行く。

「……あいつだっ！」

凄まじい速度で接近してくるレブルペインを目にして、晶は一瞬にして誰が乗っているかがわかった。
ただの推測にしか過ぎないが、晶の直感が脳に直接告げている。
あれに乗っているのは『白柳　俊』だと――

『ククク……いいねいいねぇ、やっぱり来てやがったなぁ……ビリッケツぅっ！！』

間違いない、通信機から届いてきたのは俊の声だった。
まさかこんな早いタイミングで俊と戦う事になるとは――
晶はブラックホークで迎え撃とうとするが、レブルペインは華麗に銃弾をギリギリに距離で避けていく。
あっという間に背後を取られたι・ブレードは、危険察知を元にレブルペインのサーベルを受け止めようとした。
だが、その瞬間にコックピットが青く灯った。

「クッ、どこだ――」

ガァァンッ！！　コックピットに激しい揺れが伝わり、晶は思わずバランスを崩しかけたが何とか体制を整えようとする。
だが、レブルペインの攻撃はそれだけに留まらずに、正面へ回り込んだかと思うと自らの拳で殴り掛かってきた。

『オラオラオラァッ！　死ねよ、死ねよビリッケツぅぅっ！！』

ガン、ガァンッ！　と、何度も機体を揺さぶられながらも、晶はレブルペインを蹴飛ばしてムラクモを抜刀する。
その瞬間に危険察知が働き、晶は背後を警戒した。
相手が仕掛けるのをギリギリまで待ち、ここぞというタイミングでムラクモを振り放った。

だが、レブルペインの姿はそこになかった。
すると、コックピットが青く灯り始めた。

「ど、何処だ……？」

ガァァンッ！！　ι・ブレードは、レブルペインのサーベルで強く叩きつけられ、地上へと突き落とされていく。

「うわあああぁっ！？」

今まで戦ってきたレブルペインとは、違う――
相手は危険察知をわざと誘発させて仕掛けてきているのは、今までもやってきた通りでわかりきっている。
だが、それでも晶は危険察知を頼りに辛うじて戦えるレベルだったはずだ。
今は違う……まるで敵の姿を捕える事も出来ずに、相手が常に一手先の行動に移っていたのだ。

『いい加減テメェの相手は疲れてきちまってよぉ……そろそろ、おしまいにしてぇと思ってたところだ。
悪いなビリッケツ……この俺と強化されたレブルペインの圧倒的な力で最高の絶望を味合わせてやるよ』

「……やらせるかよっ！！」

晶はスロットルを全力で押し込み、レブルペインへと向けて突っ込んでいった。
ブラックホークを片手に何度も発射させながら、徐々に距離を縮めて行こうとするが
レブルペインは目にも留まらぬ速さで弾を回避し、あっという間に

背後を取られてしまう。

「速いっ！？」

『速いのはテメェだけだと思うなよっ！！』

またしてもコックピットから危険を告げる青い光が灯った。

このままではι・ブレードと言えど持たない――

「……させるかぁっ！」

レブルペインがサーベルを振るった途端、ι・ブレードは赤い輝きに包まれた。

ガキィィンッ！　と、金属音が響き、レブルペインは弾き飛ばされた。

『うおっ！？』

「今だっ！」

ようやく訪れたチャンスを逃がすまいと、晶は全力でムラクモを構え振るおうとするが――

その瞬間、晶の危険察知が発動する。

「これは――」

『――なんちって、なっ！！』

同時に、レブルペインから数発のミサイルが発射されていく。

「ミサイル……っ！！」

晶は急遽進路を強引へ変えて、ミサイルを振り切ろうとする。
だが、高速で追尾してくるミサイルからそう簡単に逃れる事は出来ない。

「お、落とせるか？」

即座に振り返り、晶はブラックホークを構えた。
追尾してくるミサイルに向けて発射させようとした途端、カチッと嫌な音が響き渡る――

「た、弾切れ……？」

更に晶の身に危険察知が発動した。
ミサイルの襲撃に合わせて、レブルペインが襲い掛かってくる映像だ。

『どうした、もっと俺を楽しませてみろよ……ビリッケツよぉっ！！』

「クッ――」

ι・フィールドは連続して使えるものではない、仮に防ぎ切ったとしても同じような追撃をされてしまえば成す術はない。
どうすれば、一体どうすればいいのか。
晶はただ、迫り来るレブルペインとミサイルを待ち構える事しかできなかった――

数多くのレブルペインとウィッシュの集中砲火を受けながらも、シリアは機動性を生かし何とか被弾をせずに回避し続ける事ができていた。
着実にＨＡの数を減らす事は出来ている、だがこの圧倒的な数を前にして長期間戦い続けるのは危険だ。
何処かタイミングを見て、退かざるを得ないだろう――
その途端、目の前に凄まじい速度で接近してくる赤い機体が迫ってきた。
奪われた新型、ブレイアス……しかし、以前遭遇した時はあのような速度は出せていなかったはず。
だが、それよりもシリアはまたしてもうんざりした。
例の如く、コックピットに映像通信が届く。
本当なら無視したい気持ちが多いが、以前強制的に通信を繋げられたことを考えると背筋に寒気が走った。
仕方なく、シリアは映像を受信した。

『アッハッハッハァッ！！　ねぇねぇ見て、私を見てぇぇっ！！
お姉さんが大好きな真っ赤なドレス姿だよぉぉっ！！！』

「――やっぱり、テメェかよっ！」

サブモニターには以前のも見た真っ赤なドレス姿のフィミアが映っている。
何でこんな奴のターゲットにされてしまったんだろうと、思わずシ

リアはため息をついた。

『この子ね、お姉さんの為に生まれ変わったんだよぉ……トリッドエールで、お姉さんと私の愛を確かめてあげるっ！　アハハ、アッハッハッハァッ！！』

「トリッドエールだぁ？　ふざけた名前をっ！！」

構っている暇はない、シリアは迷わずミサイルをぶっ放して飛行形態へと変形させる。

スロットルを全力で押し込み、限界まで速度を上げた。

『アハハ、ねぇねぇ追いかけっこしたいの？　じゃあ、私が鬼ねっ！　ウヒヒ、待っててね……お姉さぁぁんっ！！』

飛行形態であればιに匹敵するほどの速度を誇るレビンフラックスであれば、流石にあのＨＡに追いつかれる事はないだろう。

気にすることはないと、シリアは引き続きレブルペインの部隊に仕掛けようとした。

バァンッ！　バァンッ！　と、突如背後から銃声が響き渡る。

「この速度でここまで正確に……？　スナイパーでもいるのかっ！？」

『ウヒヒ、私だよ……お姉さん、これからいっぱいいっぱい……愛してあげるからね？』

「なんだって……？」

信じられない事に、あのトリッドエールは飛行形態のレビンフラックスの後にしっかりを追いついていたのだ。
有り得ない……この速度についてくれるという事は、それはι・ブレードに匹敵する事に等しい。
アヴェンジャーには既に、それほどの技術を手にしているというのか？
ただでさえ体の負担が以上に掛かるというのに、あのフィミアという少女はニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべたままだった。

「チッ、仕方ねぇっ！！」

振り切る事が出来ないと判断した以上、一度戦うしかない。
腹を括ったシリアは機体を大きく旋回させてトリッドエールの背後を取る。
ミサイルを発射させると同時に、機体を人型へと変形させた。
バンバァンッ　と、銃声が響くとライフル二丁を手にしたトリッドエールが華麗な手捌きでミサイルを撃ち落として見せた。
その隙を生じてシリアはサーベルを2本構えて、一気にトリッドエールとの距離を縮めていく。

「いい加減しつこいんだよ、アンタはっ！！」

『ウヒヒ、お姉さん……駄目だよ、照れ隠しは。　私達は通じ合っているの、お互い愛し合っているんだからぁぁっ！！』

トリッドエールから、一つの大型サーベルが取り出された。
紫色の光を帯びた、何処かE．B．Bのような禍々しさが漂う大剣……。
構うものか、とシリアは二丁のサーベルでトリッドエールに斬りかかろうとした。

その瞬間、トリッドエールの持つ大剣からキュィィィンッと、耳が痛くなるような音が響き渡る。

『ウヒヒ、お姉さん……私の愛を、受け止めてね』

「誰がテメェの腐った愛なんて――」

ガキィンッ！　剣と剣が交じり合い、金属音が響き渡る。

だが、その直後にガガガガガと、何かが削れる嫌な音が響き渡っていた。

『アハハ、そんなのじゃ私の愛なんて……受け取れるわけないよ』

バキィンッ!!　金属が砕ける音共に、レビンフラックスのサーベルが真っ二つに砕け散った。

「な、なんだあの剣……っ!?」

『ウヒヒ……健三ちゃんがトリッドエールの為に用意してくれた究極の剣、だよ』

「健三……まさか、晶の――」

以前晶から聞いた、アヴェンジャーには未乃　健三が潜んでいる、と。

そうとなれば、あのトリッドエール……もとい、ブレイアスがしを凌ぐ性能を手にしていても何も不思議はない。

……いや、それどころではない。

アヴェンジャーには他にも、未乃　健三が開発に携わった『新型』

が存在するはずだ。

「……退くしか、ないっ！」

敵の未知なる力を目の当たりにした以上、一度体制を立て直すべきだとシリアは判断した。

シリアはレビンフラックスを飛行形態へと変形させ、加速させ始める。

「晶、どこだっ！？　一旦退くぞっ！！」

晶に通信を呼びかけるが、反応がない。

飛行形態のまま必死で探し回るが、ι・ブレードの姿が一向に見つからなかった。

『ウハハ、お姉さんまた鬼ごっこ？　いいよぉ、お姉さんの気が済むまで追い回してあげるからぁぁっ！！』

「しつけぇんだよ、今はテメェの相手なんかしてる暇ねぇんだっ！！」

『アッハッハッハ、私今すっごく幸せだよぉぉ……お姉さんとこうやって、愛し合う事ができてるんだからぁぁっ！！』

あのトリッドエールの速さは想像を超える力だった。

飛行形態で全速力を出していないとあっという間に距離を縮められてしまう。

こんな状態を長期間続けていればシリアの体が持たない。

何とかしなければ――と、考えたいたところ……シリアはようやくι・ブレードの姿を捕えた。

複数のミサイルとレブルペインの攻撃を、今にも直撃してしまう瞬間であった。
あの様子では危険察知で凌ぐことが出来なかったんだろう、シリアは迷わずにミサイルと同時にライフルを撃ちこんだ。

「間に合ってくれよっ！！」

バァァンッ！　と、爆発音と共に敵のミサイルが消滅した。
速度を落とさずに、シリアはレブルペインへと向かって突っ込んでいく。
激しく体当たりをすると、レブルペインはその衝撃で吹き飛ばされていった。

「グッ……無事か、晶っ！？　ったく、通信にぐらい応えろっ！」

『あ、ああ悪い……』

「一旦退くぞ、こいつら以前よりも機体の性能が桁違いだ。　晶の父親が開発に携わったらしいぞ」

『お、親父が――』

『おねえさぁぁぁんっ！！』

「げっ――」

シリアが晶と話している間に、あっという間にトリッドエールが背後へと迫って来ていた。
あの巨大なサーベルはとてもじゃないが、通常のサーベルでは受け止める事は出来ない。

『……させるかぁぁっ！！』

その瞬間、ι・ブレードがムラクモでトリッドエールに斬りかかっていく。

だが、レビンフラックスの特殊なサーベルですら撃ち砕いた大剣だ。いくらムラクモと言えど、あの一撃を受け止める事はできるはずがない。

その瞬間――ガキィィンッと激しく火花が散り、トリッド―エールは僅かに怯んだ。

……信じられない事に、ムラクモがあの巨大な剣に打ち勝ったのだ。

「今だっ！　アタシについてこいよ、晶っ！！」

『あ、ああっ！』

シリアは飛行形態で全速力で飛び立って行くと、ι・ブレードも後を追うようにスピードを上げて戦域を去っていった。

開戦？

メシア本部は、大混乱に陥っていた。
各国の代表達が部隊の指揮を取ろうとするが、それでも事態は悪化する一方だった。
本部周辺に突如、E．B．Bが大量に出現し始めたのだ。
大型E．B．Bの存在も確認されており、大至急迎撃へ向かわせようとするものの、レギス級の戦艦が何者かによりシステムに異常をきたし全艦出航できないという非常事態が発生。
幸いHA部隊は出撃させることが出来ていたが、本部に潜んでいた内通者により、部隊内での交戦が多発。
結果、敵味方が判断できない状態で争いが発生するという最悪な状況に陥ってしまったのだ。
元々メシアは全世界がE．B．Bに対抗する為に作られた組織であり、今回のように人の手によって侵攻されるケースは、はっきり言えばまるで想定されていない。
むしろ混乱に陥った世界で、メシアに危害を加える者が出るはずがないとまで言われていた。

「このE．B．Bの出現は、アヴェンジャーの仕業と考えるべきかね？」

「少なくとも、自然現象であればもっと早くに我々は気づけたはずだ。　人為的に起こされたと考えるのが正しいだろう」

「現在各支部から援軍を要請しているが、どこもかしこも似たような状態だ。　まともに艦を出せたのは第7支部ぐらいだと聞くぞ」

「そもそもアヴェンジャーの奴らは何を考えている？　このままメシアに危害を加えて何をしようというのだ？」

「奴らの要求はアッシュベルのはずだ、奴を差し出せっ！　今メシアが落とされしまえば、世界は再び混乱に陥るのだぞっ！」

「だが、アッシュベルの居場所を正確に把握している者は誰一人いない。　おまけに例の回線を使っても奴との連絡は取れない状態だ」

「奴め……アヴェンジャーの襲撃を察して逃げ出しおったな……すぐにアッシュベルを探し出せっ！　この戦いを止めるには奴を差し出すしかないっ！！」

各国の代表は、まとまりがなく個人個人で好き放題意見を述べ続けていた。

上層部がこの状態では、指揮もまともに機能するはずがないだろう。

彼らも自覚があるのか、このままアヴェンジャーと戦う事を危険視する者が多かった。

アヴェンジャーの要求が、アッシュベル・ランダーであると伝えられてからは、アッシュベルを血眼になって探す動きも目立ってきた。

メシアの存続と一人の犠牲を天秤に掲げてしまえば、当然ながら彼らは一人の犠牲を選択する。

メシアの滅亡は世界の滅亡。

たった一人の犠牲で防げるのであれば、例え非人道的だと言われようともメシアの存続を優先するに決まっていた。

しかし、肝心のアッシュベルは一向に姿を現す様子がなかったのだ。

情報収集に長ける彼の事だ、この事態を察して身を隠しているという事も考えられる。

このままでは、メシア本部が落とされるのも時間の問題だった――

「間もなく、メシア本部周辺です」

ヤヨイのアナスンスと共に、ブリッジルームの巨大なモニターからは真っ白な大きい建物が目に入った。
あれが、全世界のメシアを統括する『メシア本部』だ。

「……どうやら、間に合ったようだが――」

アヴェンジャーの襲撃はないようだが、本部周辺には明らかに異変が起きていた。
何処からともなく湧き出している大量のE．B．B……そして、味方同士で争うウィッシュ部隊の数々。

「多数のE．B．Bを確認しました……あ、あのウィッシュはアヴェンジャーの部隊なのでしょうか？」

「奴らの部隊にしては数が少ない、それに奴らが所有しているはずのレブルペインの姿が一機も見当たらないが……」

となると、考え付く結論はただ一つ。
シラナギのような、アヴェンジャーの内通者の仕業と考えるべきだろう。
メシア本部は、まんまとアヴェンジャーの策略にはまってしまっていたのだ。

事態は一刻の猶予も許されない、とにかく場に出現しているＥ．Ｂ．Ｂだけでも討伐するべきだろう、と艦長は判断した。

「ゼノフラムを出撃させろ、ブレイアスはゼノフラムのサポートを頼む。　本艦はここで待機だ」

「了解しました。　パイロット各位、出撃してください」

『こちらゼノス、状況は把握した。　大型Ｅ．Ｂ．Ｂは俺に任せろ』

『こちらラティア、了解したわ』

「ったく、アヴェンジャーの奴らも本気だな……一体どんな手を使ってこんなにＥ．Ｂ．Ｂを集めやがったんだ」

「オートコアの件もありますからね、彼らは我々の知らない技術を手にしていると考えられますが……」

ライルはモニターに映る大量のＥ．Ｂ．Ｂを見て、うんざりとした。今回はアヴェンジャーとの戦いが中心になると言えど、やはり彼らとＥ．Ｂ．Ｂは切っても切り離せない関係なのだろう。
結局はいつも通り、Ｅ．Ｂ．Ｂの討伐をすることになってしまったのだ。

「……頼んだぞ、二人共」

出撃していく2機のＨＡを見送り、艦長は一言そう告げた。

コックピットからフリーアイゼンのハッチが開かれた事を確認すると、ゼノスは機体を前進させて艦から飛び出す。
空中へと投げ出されたゼノフラムは、ホバリング機能を使ってゆっくりと地上へと降り立っていく。
ズシィィンッ！　と、ゼノフラムが地上へ降り立った途端に地鳴りが起きる程の衝撃が走る。
遅れて後ろから、青い新型機……ブレイアスがパラシュートを使って降り立ってきた。

だが、以前見た時とは外見が異なる。
緑色を中心とした換装パーツが取り付けられていたのだ。
背中には長銃と、小型のミサイルポッド、と多彩な武器が詰め込まれている。
フラムが開発したブレイアスの換装モジュール試作型だ。
射撃武器を中心に組み込まれた構成は、見た目通りに射撃に特化した造りをしており
近距離でも射撃で戦えるようにι・ブレードのブラックホークを元に開発した二丁銃も搭載されている。
但し、性能はブラックホークとは異なり凄まじい破壊力を誇るわけではない。
威力を落とした分、連射性能に優れている短銃タイプの武装となっている。
また、メイン武装の一つであるライフルは高威力を誇るレールガンと精密射撃を可能とするスナイパーライフルの2種類の形がある。
通常はレール上から強力な磁場を発生させ、エターナルブライトの動力を交える事により凄まじい火力を誇るレールガンタイプである

が換装パーツを使用し先端へと取り付ける事によって、高威力を保ったまま精密射撃を行う事が可能となる仕組みとなっている。
しかし、ブレイアスは以前に制御系に異常をきたしていたはずだ。
そんな不備を抱えたまま、いきなり実戦で試作型を投入しても問題ないのだろうかとゼノスは疑問に思った。

「新型の調子はどうだ、この前の戦闘では不備を起こしたと聞くぞ」

『あら、貴方のお友達が自信満々に『今回の調整は完璧だ、この私が言うのだから間違いない』と言っていたけれど？』

フラムが誇らしげに語る様子を頭に浮かべて、ゼノスは呆れてしまった。
彼女らしいと言えば彼女らしいだろう。
新型の調整が完璧というのであれば、信用してもいいだろう。

「それよりもいいのか、スカイウィッシュ部隊の隊長が俺達と最前線で戦っていても」

『私の不在でうろたえるようなバカ共に育て上げたつもりはないわよ。　それにイリュードが上手くやってくれるわ。
……っと、呑気に話している場合じゃないわね』

モニターには目視で確認できるほど、ウジャウジャと蠢いているE．B．B達の姿が確認できた。
既に何機か破壊されたウィッシュの残骸もあり、恐らく中はE．B．Bによって食い散らかされているだろう。
……あれらがメシア本部内に侵入してしまえば更なる惨事を招く事となる。

「俺が先行する、合図があるまで後ろで待機していろ」

『了解したわ』

ゼノスはラティアに告げると、機体を一気に前進させた。
もうすぐE．B．Bの群れへ突入する寸前に、機体を急停止させてその場に強く踏み留まる。

「……ゼノフラム、お前の真の力を……あいつの夢を、見せ付けてやれ」

ゼノフラムの胸部から、一つの砲台が姿を現す。
5年前に大事故を起こした『ビーム兵器』が、再び姿を現した。
エネルギーの圧縮が始まると同時に、銃身が紫色の光に包まれていく。
出力は順調に上がっていき、機体も安定したままだ。
……いける。
出力メーターは一定値を保った途端、銃身の紫色の光は赤色へと変色していた。
エネルギーの圧縮が完了した合図だ。

「反エネルギー圧縮砲、発射するっ！」

ゼノスは力強く叫ぶと、トリガーを強く引いた。
ズガァァァンッ！！　爆発音に近い音共に、ゼノフラムから凄まじい赤色の光が一直線に発射されていく。
一瞬にして一直線に地面が抉られ、建物の破片等が宙へと舞いあがる。
光に巻き込まれたE．B．B達は、次々と宙へと舞っていき、消し炭へと化していく。

コックピット内は激しく揺れるが、５年前のようにオーバーロードを引き起こす事態にまでは達していない。
だが、コックピット内の温度は想像以上に上昇しパイロットスーツ越しからでも凄まじい熱気がゼノスへと襲い掛かっていた。
圧縮砲の発射を終えると、ゼノスは息を荒げて胸を強く抑える。
……Ｅ．Ｂ．Ｂ化が進んでいるのだろうか、一瞬だけ胸に激しい痛みが襲い掛かってきたのだ。
モニターを確認すると、ウジャウジャと存在したはずのＥ．Ｂ．Ｂはその半数以上が姿を消していた。
抉られた地面の後は、まるで戦艦の主砲が発射された痕跡にそっくりであった。

『驚いたわ……本当に、ＨＡクラスでビーム兵器を』

「油断するな、まだ雑魚を掃除したにすぎない。　何処かに大型Ｅ．Ｂ．Ｂが潜んでいるはずだ」

『そうね、撃ち漏らした奴は私に任せて。　貴方は大型Ｅ．Ｂ．Ｂを優先的に相手してくれればいいわ』

「なら、ここは任せるぞ」

ラティアにそう告げると、ゼノスは更に奥地へ進もうとスロットルを握りしめる。
だが……突如、地面がグラグラと揺れるのを感じて思わず動きを止める。
ゼノフラムの振動ではない……何かが、下から来ている？

「ラティア、下がれっ！」

『ええ、わかってるわっ！』

ゼノフラムとブレイアスは、ほぼ同時にその場を後退していった。
すると、地面から出現したのは巨大なワームの姿をしたE．B．Bであった。
全身緑色の巨体の先端部には剥き出しになった禍々しいE．B．Bコアと、クモのような三つの目。
E．B．Bが突如大量出現した理由は、恐らくこの大型E．B．Bが地下へと潜んでいたからであろう。
頭部がむき出しになっているのであれば、討伐は容易い。
ゼノフラムはガトリング砲をE．B．Bの巨体へ向けようとした。
だが、その瞬間……再び地響きが発生した。
信じられない事に、別の箇所から同じような外見をしたE．B．Bが、2体同時に姿を現した。

「大型E．B．Bが3体……しかも、同じタイプだと？」

『あら、コアがむき出しになっているのなら何匹でも一緒よ』

「……その通り、だなっ！」

ゼノスは即座にガトリングを、大型E．B．Bの頭部へ向けて発射させる。
ガァンッ！！　1匹目のE．B．Bのコアが弾き飛ばされると、奇声を大きく上げて倒れこんだ。
早くも1匹目を仕留めたゼノスは、残りの2匹を片づけようと2匹目へと接近していく。
しかし、2匹目は1匹目と違いコアを守るように素早く動き回り、中々狙いを定めることが出来なかった。

「ならば――」

ゼノスはブーストハンマーで動きを鈍らせようと構えた途端――バシュゥウンッ！！　と、銃声のような音が背後から響き渡る。
バァァンッ！　と、爆発音に近い音共に2匹目の大型E．B．Bのコアが破壊された。
背後を振り返ると、そこにはスナイパーライフルを構えたブレイアスの姿があった。
銃身からはバチバチッと電流が走っている。
まさかあの動きを捕えて、一瞬にしてコアを仕留めたとでもいうのだろうか。
……ブレイアスの性能だけではない、ゼノスはむしろラティアの射撃センスに驚かされた。

『ほら、残り1匹よ？』

「……仕留める」

奇声を大きくあげ、最後の大型E．B．Bがゼノフラムへと向けて突進してきた。
ゼノスは構えていたブーストハンマーを射出させ、大型E．B．Bの頭部を凄まじい勢いで弾き飛ばす。
その勢いのまま機体は引っ張られ、宙へと舞い上がるとゼノスはガトリングを乱射させた。
あっという間に、最後の1匹のコアを破壊させると、ゼノフラムは着地をした。

……だが、やけに手応えを感じない。
今までの大型E．B．Bは、戦うにつれてコアが厳重に守られてきたはずだ。

今回のE．B．Bは、それと反して目に見える位置に剥き出しにされていたのだ。
ゼノスはそれを不自然に感じて、倒れて行った3体の大型E．B．Bを確認する。
3匹の同種……ではあるが、本体は全て地上へと姿を見せたわけではない。
全て地面へ埋まったまま、動きを停止させていた。
……深く考えすぎたか、とゼノスは残りの小型E．B．Bの討伐へ向かおうとする。

「ここはもういいだろう、残りを片づけるぞ」

『待って……様子がおかしいわ』

ラティアがそう言った途端、倒れていた3体のE．B．Bはピクピクと再び動き始める。
すると、3体のE．B．Bが同時に目を覚まし、キシャァァと奇声をあげ立ち上がった。

「……何？」

『コアを見てっ！』

ラティアに言われるがままに、ゼノスは1体のコアを確認すると……驚いたことに破壊したはずのコアが元の形に戻っていたのだ。
同時に、地面がグラグラと激しく揺れ始め3体のE．B．Bが慌しく蠢き始めた。

「やはり、そうか」

考えすぎであってほしい、と考えたが……どうやらゼノスの悪い予感は当たってしまったようだ。
3体のそっくりな姿と、3体とも地面から出現している事から……ゼノスは気づいてしまった。
大型E．B．Bは、『3体』ではない事に――

ガァァァンッ！！　地面を突き破るように、新たな大型E．B．Bが姿を見せた。
緑色の4本足……まるで恐竜のような形をしたE．B．Bが、地面を突き破って出現したのだ。
……だが、妙な事にその巨大なE．B．Bの頭は三つ存在した。
長く続く三つの首を辿っていくと……その先には、先程のE．B．B3体の姿が続いていたのだ。

『何よ、このE．B．B……今までこんなタイプ見たことないわよっ！？』

「原因はわからないが、どうやら複数のE．B．Bが合体した姿なんだろう……恐らく、こいつの中心となっているコアが何処かにあるはずだ」

ゼノスは全身を晒した大型E．B．Bの胴体を確認すると、一カ所だけ奇妙な点を見つけた。
緑色を中心とした巨体に、一部だけ黒ずんでいる箇所があったのだ。
剥き出しにはされていないが、あの変色だけを見れば……恐らくコアが隠されているのだろうと推測できる。
弱点がわかれば話が早い、例え三つ首のバケモノであろうがなんだろうが、E．B．Bはコアを破壊されたら行動を停止する。

「行くぞ、ラティア。　奴を仕留める」

『……ええ、わかったわ』

ゼノフラムとブレイアスは、迫りくる巨大なE．B．Bへと立ち向かっていった。

開戦？

本部付近の防衛に専念していたフリーアイゼンは、E．B．Bを殲滅させるべく艦を進めていた。
先行させていたゼノス達の成果もあってか、E．B．Bはその数を減らしている。
晶とシリアがアヴェンジャーの部隊を足止めしてはいるが、アヴェンジャーが戦力を惜しむ理由はない。
いくら機動力に優れる2機であっても、長期に渡る交戦は難しいだろう。
本部への防衛に専念できるよう、まずはE．B．Bの数を減らす事を優先させていた。

「パイロット各位の状況はどうだ？」

「ゼノス機、シリア機が大型E．B．Bと交戦中です。　現在データの解析中ですが……奇妙な点があります」

「奇妙な点だと？」

「コアが単体ではなく、複数の反応が確認されています……こんなE．B．B、初めてのケースですよ」

ヤヨイの言う通り、今までメシアがE．B．Bの討伐を行ってきた中で、複数のコアを持つようなタイプは存在しなかった。
どんなに巨体だろうとコアは単体であり、コアサイズにこそ差があっても数だけは単体だったはずだ。

「……奴らも我々と同じように『進化』をしているという事か」

最近になって出現した『オートコア』といい、Ｅ．Ｂ．Ｂは突如『新たな力』を手にしていることに思わず恐怖を覚えた。

倒しても倒してもその数を増やし続け、日々新たな力を手にし人類へと立ちはだかる。

こんなにも凶悪すぎる人類の敵が存在するはずなのに、どうして人同士で争わなければならないのか――

「シリア機との通信を確認しました」

「戻ったか、すぐに繋いでくれ」

艦長はその知らせを受けて内心ホッとしていた。

いくら機動性に優れていると言っても、大群が予想される部隊に２機のＨＡのみに向かわせたのはあまりにもリスクが高い。

下手すれば撃墜される危険性もあったが、どうやら無事戻ってきてくれたようだ。

しかし、少しでもアヴェンジャーの戦力を把握し、彼らの侵攻を阻止しなければとてもじゃないが守りきれる状況ではない。

せめて本部の混乱状況を持ちなおすまでは……と考えていたが、現実にはＥ．Ｂ．Ｂの出現により更に場が混乱していた。

「状況を知らせろ」

『アヴェンジャーの部隊はざっと１００前後ぐらいだっ！　だが、奴らの事だ……恐らくこれで終わりじゃねぇ。

それと奴らにとんでもねぇ機動力のＨＡがいやがった、アタシ達だけじゃどうにもならねぇっ！』

艦長はシリアの報告を聞いて驚きを隠せなかった。
いつでも強気な姿勢を保つシリアが「どうにもならない」と口にするほどのＨＡが、アヴェンジャーに存在する。
やはり予想通り、アヴェンジャーはメシアを圧倒できるほどの『力』を手にしている。

「ふむ、確か彼らにはι・ブレードの開発者が裏にいると聞いたな。彼がいれば、ι・ブレードと匹敵かそれ以上の性能を持つＨＡを開発する事ができるかもしれん……」

「おいおいなんだそりゃ……ι・ブレードってとんでもねぇ性能を誇ってんだろ？
そんな奴がもし2機もいやがったら、一体どうすりゃいいんだってんだっ！」

フラムの言葉を耳にし、クルー達は思わず表情を曇らせた。
ι・ブレードはフリーアイゼンのエースであり、今までの数々の危機を切り抜けて来ていた。
その圧倒的な性能は誰もが理解しているが故に、それと同等な技術を持つＨＡがどれ程凶悪であるかは嫌でも理解できる。
本当に彼らを止める事ができるのだろうかと、徐々に不安が高まって来ていた。

「それがどうしたというのだ？」

だが、艦長だけは動揺を見せずにフラムを睨めつけるようにそう告げた。

「奴らは常に我々の先を行くのは確かだ。　しかし、だからと言って何もせずに諦めるつもりはない。

その程度で我々を止める事ができると彼らが思っているのであれば、それは大きな間違いだ……我々には、例え人類同士であろうと戦い抜く覚悟はできている。
……どんなに圧倒的な力を持とうとも、我々に敗北は許されん。
彼らに、我々の底力を見せつけてやろうではないか」

「ふ、やはり君は噂通りの人物だな。　安心したまえ、私も彼らの戦力に絶望しているわけではあるまい……私の技術力も、甘く見ないでほしいものだな」

まるで予想通りと言わんばかりに、フラムはニヤリと笑みを浮かべた。

「シリア機と晶機は一度帰投して補給を済ませろ。　その後はすぐにE．B．Bの迎撃へ向かってくれ、厄介な大型E．B．Bもいるそうだ」

『了解っ！　補給が完了次第すぐに向かうっ！』

「我々はゼノス機シリア機の援護へ回るぞ、あの大型E．B．B……一筋縄でいく相手とは思えん」

「ならば、急ぎますよ……っ！」

リューテはフリーアイゼンを全速力で前進させていった。

大型E．B．Bの周辺から、小型のE．B．Bが虫のようにウジャウジャと湧き出てくる。
巨大は三つ首は見た目以上に素早く動き周り、ゼノフラムとブレイアスに向かい突進を繰り返していた。
ゼノフラムの機動性では、少しでも反応が遅れれば直撃は免れない。
隙を見つけては三つ首のコアを破壊しているが、数分後にはすぐに蘇ってしまいキリがなかった。
真の狙いは頭部のコアではなく、胴体部の黒ずんでいる箇所だ。

E．B．Bがコアを破壊されても活動を再開できるという事は、有り得ない現象と考えていい。
ならば、大本となるコアが別に存在すると考えるのが自然だ。
今はその可能性を信じて、隠されているコアを破壊するしかない。
大型E．B．Bの猛攻をかいくぐり、何度もブーストハンマーをぶつけるが……まるで手ごたえがなかった。
ブレイアスの一点集中させたライフルの一撃でも、傷つくことがない表面は想像以上の固さを誇っている。
まさにコアが隠されている事を物語っている、ゼノスは自分の推測を確信していた。
圧縮砲であれば、貫く事をできるかもしれない……が、発射までに時間がかかりすぎる為、この状況ではとてもじゃないが隙が作る事は出来ないだろう。
ならば、多少無理をしてでも隙を作り出すしかない――

『状況は厳しいわね、一度退いた方がいいかしら？』

「ゼノフラムは対大型E．B．Bを想定した機体だ。この程度の敵に、後れを取るわけにはいかない」

『頼みの圧縮砲も使えないじゃない、どうするというの？』

「2体でいい、もう一度あの首のコアを破壊してくれ」

『冗談言わないで、私なら一人で3体やってあげるわよ』

「……姉妹揃って、逞しい奴らだな」

ラティアの言葉をシリアとかぶさって、思わずゼノスは笑みを浮かべる。

「行くぞ」

ゼノスは思いっきりスロットルを押し込み、ゼノフラムを前進させた。

迫りくる小型E．B．Bは、猛スピードの突進で蹴散らしていき徐々に大型E．B．Bの本体へと近づいていく。

「耐えろよ、ゼノフラム……」

出力メーターを気にしながら、ゼノスは圧縮砲のチャージを開始させた。

ただでさえ全速で突進している中、オーバーヒート寸前の状態まで追い込まれているというのに

ここで圧縮砲のチャージまで開始させてしまえば、はっきり言えば今すぐにでも大爆発を起こしても不思議ではない。

冷却装置が作動していると言えど、ゼノフラムの設計を考えればあ

っという間に出力は限界にまで達してしまうのだ。
だが、ゼノスはチャージを開始にスロットルを強く引き機体を静止させようとした。
ギギギギィィッ、とブレーキを作動させる音が響き渡るが出力が下がるどころか更に上昇していく。

バァンッ！　その瞬間、ゼノフラムが爆発を引き起こした。
だが、それほど大きな爆発ではない。
幸い圧縮砲のチャージに影響する事はないが、ゼノフラムからは黒い煙が空へ向けて昇っていく。
更に追い打ちをかけるように、大型E．B．Bの三つ首が一斉にゼノフラムへ向けて襲い掛かってきた。
咄嗟にガトリングを構えるものの、三方向からの攻撃を避けきる事は出来ない。
おまけにオーバーヒート寸前の状態であり、強引に加速をしてしまえば爆発を引き起こす危険性もあり……
チャージ中に衝撃を受けてしまえば、同様に大爆発がしてしまう。
絶体絶命の状況に追い込まれているはずのゼノスであったが、何故かニヤリと笑った。

バシュンバシュンっ！
背後から、2回の銃声が響いた途端……一瞬にして2体の首のコアが砕け散っていく。
ブレイアスが、二つのレールガンを構えていた。
残り一体が怯まずに突進を仕掛けてくると、ブレイアスはレールガンを投げ捨て即座に二丁銃を構える。
数発の銃声が響き渡り、残り一体のコアもあっという間に破壊されていった。
あっという間に三つ首は断末魔を残し、ドスンッと倒れた。
……流石は隊長を務めるだけはある、本当にラティアは一人で3体

の三つ首を仕留めて見せた。
レールガンは凄まじい火力と目で捕えきれない程の弾速が特徴ではあるが、連射性能に優れてはいない。
ラティアは咄嗟の判断で連射性能に優れる二丁銃を構えて、発砲させた。
射撃精度を誇るブレイアスのスナイパーフレームと、ラティアの射撃センスがあったころ成せた業と言えるだろう。

『それじゃ、後は任せるわよ』

「……了解」

ようやくゼノフラムは完全停止し、大型E．B．Bの目の前へと立ちはだかった。
徐々に銃口には赤い輝きが集っていく。
だが、無茶をしすぎたせいでゼノフラムからは次々と小規模な爆発が引き起こされていた。
倒れていたはずの三つ首も、破壊されたコアが再生されていき、体をビクビクと動かしている。
想像以上に早い再生に焦りを見せながらも、圧縮砲は無事にチャージを完了させた。

「押し切れ……っ！！」

ゼノスは迷わずトリガーを引き、圧縮砲を放った。
ズガァァアンッ！
凄まじい衝撃と共に、赤い光が大型E．B．Bの胴体へ向けて一直線に向かっていく。
ガガガガガガ、と金属を削るような音が響き渡り、徐々に赤い光は表面を焼き尽くしていった。

その間にも三つ首の再生が完了し、再び甲高い鳴き声を響き渡らせる。

「クッ……まだ、足りないか」

手応えはあったものの、圧縮砲の出力があってもコアに辿り着く事はできなかった。

だが、表面は見事に削られておりそこには赤色の禍々しいE．B．Bのコアがむき出しにされている。

やはり、ゼノスの予想通りそこにはE．B．Bのコアが存在していた。

『下がってっ！』

ラティアの声を確認すると、ゼノスはすぐに機体を後退させる。

すると、バシュンッ！　と銃声が響き渡った。

目にも留まらぬ速さで、一直線に閃光が走る。

剥き出しになったコアの中心部が、一瞬にして貫かれていった。

三つ首が悲鳴を上げると同時に、巨大な本体はジタバタともがき始め……ズシーンっ！　と、地面を大きく揺らし倒れた。

三つ首の反応も途絶え、コアを残したままバタンッと地面へと倒れた。

「……終わったか？」

『コアは撃ちぬいたわ……あれがまた『再生』とかしない限り大丈夫なはずよ』

嫌な事を口にする……だが、有り得ない話ではない。

ゼノスは倒れた三つ首の大型E．B．Bの様子を注意深く伺った。

すると、甲高い悲鳴と共にまたしても三つ首が立ち上がる。
そして、本体から首を切り離し空高く飛び上がっていった。

「ラティアっ！」

『ええ、わかっているわっ！』

ブレイアスは空へ向けてライフルを構えた。
だが、三つ首が大きく口を開けると紫色の光が徐々に集っていく。

「まさか……逃げろ、ラティアっ！」

ゼノスが叫んだ瞬間、三つ首の口から一斉に紫色の光がラティアへ向けて発射された。
ズガァァァンッ！　と激しく地面が揺れ、視界は一瞬にして紫色に光に包まれて行く。
……あの光、まさに戦艦クラスの主砲そのものだった。
以前にもE．B．Bがビーム兵器を使ってきた例があると言えど、これほどまでに強力な一撃は見たことがない。
幸いゼノフラムは直撃を免れたが――

「ラティア、応答しろ」

光が晴れた先には、まるで隕石が落下したかのような巨大なクレーターが一つ出来上がっている。
しかし、そこにラティアの姿はない。

「反応が、ない……？」

まさか、やられてしまったというのか――

抉られた地面は見事に焦がされており、どれ程強力な一撃が襲い掛かったかは一目瞭然だ。
機体と共に、焼き尽くされてしまったというのか……？
次の瞬間、ズシィィンッ！　と、３体の三つ首が空から叩き付けられるように落ちてきた。
……何故か、３匹ともコアを見事に撃ちぬかれている。
同時に、ガシャンッ！　と二つのレールガンが落とされた。

『心配してくれたのかしら？』

「無事だったか、どこにいる」

ラティアの反応を確認すると、ブレイアスは空からふわふわと地面へと着地をした。
どうやら咄嗟に、空へと逃げ込んでいたようだ。

『やっぱり私も、空の方が似合ってるのかしら？』

「スカイウィッシュ部隊長の名は伊達ではないようだな」

『今は違うわよ、私はフリーアイゼンの一員として戦っているのだから』

「そうだったな」

シリアの腕も相当ではあるが、やはり姉であるラティアの方が上手である事を実感する。
まだ使い慣れていない新型機でここまで戦えるのは、やはり才能としか言えないだろう。

「どうやら、片付いたようだな」

『そうね……後は残ったE．B．Bと、本部の方を何とかしないと――なっ――』

「……っ！」

ゼノスとラティアは同時に、信じられない光景を目の当たりにする。

コアを撃ちぬいたはずの大型E．B．Bが、突如形を崩して変形をし始めたのだ。

破壊されたはずのコアを包むように、液状へと変化した物体が徐々に纏わりつき始めたのだ。

まさか、まだコアを破壊しきれなかったというのか。

ラティアは咄嗟にレールガンを放つものの、周りを包む液状の物体に衝撃を殺されてしまいコアまで届く事がなかった。

再び圧縮砲で押し切ろうとするが、流石にゼノフラムには無茶をさせすぎている。

次の一発を無事撃てるかどうか――

だが、迷っている時間はない。

『何て生命力なの……あんなE．B．B、見たことないわ』

「だが、やるしかあるまい」

まだ戦えるはず……と信じて、ゼノスは再び圧縮砲を発射させようとした。

すると――背後から突如、真っ白な光が槍のように一直線へ大型E．B．Bへと向かっていく。

ズガァァァンッ！　と激しい音を立て、地面を抉っていった一撃は一瞬にして大型E．B．Bのコアを貫いていった。

「なっ……何だ、今の一撃は？」

『後ろを見てっ！』

ゼノスは後ろを振り向くと、そこには主砲を構えたフリーアイゼンの姿があった。
かつての主砲とは異なる一撃……以前は紫色の光だったはずだが、今みた光は明らかに異なっている。
ソルセブンやゼノフラムのような『赤色』のビーム兵器が存在するのは知っていたが……それとはまた別の一撃のように見えた。

『ゼノス、ラティア……無事か？　お前達には無理をさせてしまったようだな』

「少々手間取ったが問題ない、援護に感謝する」

艦長の通信を確認すると、ゼノスは通信を返した。
フリーアイゼンから放たれた一撃は、見事にあのコアを木端微塵に撃ち砕いていた。
ようやく大型Ｅ．Ｂ．Ｂとの戦いを終えたが……まだ、本当の戦いは始まってすらいない。

『一度帰還しろ、残りのＥ．Ｂ．Ｂ掃討は晶とシリアに任せる』

「了解した、戻るぞラティア」

『ええ、わかったわ』

ゼノフラムとブレイアスの２機は、フリーアイゼンが着陸したのを

確認すると艦へと帰還していった。

「大型E．B．Bの状態は？」

「はい、目標は完全に沈黙しています。恐らく、再生する事もないかと」

モニターに映る液状へ変化した大型E．B．Bは、主砲を放ってから動く事がなかった。

「うむ、主砲クラスの一撃……それも、新技術を採用した『白紫輝砲』の火力は通常の主砲を遥かに上回っている。ま、難点としては発射までの時間がかかりすぎる点かね」

フリーアイゼンの改修に関わっていたフラムは、新たに搭載されたフリーアイゼンの主砲についてそう語った。

『白紫輝砲』と呼ばれる主砲は、ι・ブレードの装甲に使われる『白紫輝合金』の技術を応用した新たなエネルギー圧縮砲を採用している。

それによりより強力な一撃を誇っているが、フラムの言うようにエネルギーの圧縮には通常よりも手間がかかりどうしても２０分近くの時間がかかってしまう。

だが、それを補うほどの強力な一撃はまさに頼れる一撃と言えるだろう。

「……しかし、強力すぎるが故にあまり多用はできんな。　我々には過ぎた力かもしれん」

「だが、E．B．Bと戦う為にはどうしても力が必要なのだよ……悲しい現実だとは思うがね」

全ての人類がE．B．Bと戦う為に力を使うのは構わない。
しかし、現実はそうではないのだ。
現に、アヴェンジャーのような組織が現れ……その技術力を誤った形で利用している。
その事を頭に過ぎらせると、艦長は複雑な心境に陥ってしまっていた。

「なっ……お、大型E．B．Bを確認しました……こ、これは？」

「どうした、ヤヨイ」

ヤヨイはデータの解析を行おうとすると、突如表情を一変させて言葉を失っていた。
艦長はモニターへと視線を向けると、そこには信じられない光景が広がっていた――

「なっ――」

メシア本部の周辺に、大型E．B．Bが次々と押し寄せて来ていたのだ。
数にして10体を超える規模だ……かつて大型E．B．Bがこれほど集った例は聞かない。
これも、アヴェンジャーの仕業だというのだろうか。
……あまりにも衝撃的な光景に、艦長は思わず言葉を失ってしまっ

ていた。

「……クッ、このままでは本部が――」

『我々に任せたまえっ！』

突如、何処からともなくフリーアイゼンに通信が入った。
この声は……ソルセブンの館長を務めるイリュードの声だ。
ソルセブンとスカイウィッシュ部隊は一斉に大型Ｅ．Ｂ．Ｂへと向かって突撃していく。
気が付くと本部付近のウィッシュ部隊も基地内から次々と出撃していた。

『すまない、本部の状況を何とかさせる為に手間取っていた。　ここは我々が引き受けよう。　スカイウィッシュ部隊と共に、君達はアヴェンジャーの足止めを頼むっ！』

「しかし、このＥ．Ｂ．Ｂの数だぞ。　我々も加勢を――」

『心配ない、各支部の者が本部を守ろうと力を貸してくれている。
この程度でくたばる私ではないっ！
それに君達はメシアで優秀な遊撃部隊と聞く……アヴェンジャー部隊の足止めぐらい、容易く引き受けてくれんと困るのだよっ！』

イリュードは力強く、ゲン艦長に向けて告げた。
その言葉を耳にし、ゲン艦長は思わず笑みを浮かべた。

「各位っ！　アヴェンジャーの部隊を迎え撃つぞ……奴らに一泡吹かせてやれ、我々の底力……今こそ見せつけてやる時だっ！！」

「久々に熱くなってますね、艦長」

「だが、こういうのは別に嫌いじゃねぇ……とことん、やってやろうじゃねぇか」

「私も当に覚悟はできていますよ……いつでもご命令を」

「うむ、私も全力で君達をサポートしようではないか」

指揮は高まった、同じ人類同士での戦いではあるが……全員の覚悟は当にできている。

これ以上、アヴェンジャーの好きにさせていては世界が再びE．B．Bの脅威へと陥ってしまうのだ。

それを避けるためにも……人類の未来の為、彼らは戦う。

自分の正義を信じ、世界の……人類の平和の為に――

「行け、人類の未来の為にっ！！」

艦長の力強い掛け声と同時に、フリーアイゼンは大型E．B．Bの元へと猛スピードで前進していった。

第17話　歪んだ感情　？

アヴェンジャーの拠点。
薄暗い部屋の中で、木葉は一人蹲っていた。
シラナギの言葉が、頭の中をグルグルとかき回すように繰り返される。

『何回自殺をしたか覚えてますか？』

『自分が何をしていたか、覚えてますよね？』

『私と共に来てください……貴方をこんな体にした、アッシュベル・ランダーを倒す為に』

何故、こんな事を突然言われたのかわからない。
木葉はアッシュベルと面識はないが、世界的に有名な天才科学者である事は知っている。
そのアッシュベルと、自分の今の体の状態が……一体、何の繋がりがあるというのか。
何も知らない、わからない。

気が付けば木葉は、アヴェンジャーの施設へと連れて来られてしまっていた。
晶がι・ブレードで助けに来てくれた事も、覚えている。
しかし、何も言えなかった。
シラナギに言われて、今の自分が『異常』である事に……初めて気づいてしまった。
そんな異常な自分を、晶に見せたくない。

だけど、本当は逢いたい。　戻りたい。
自分の気持ちがよくわからずに、何をどうすればいいか木葉にはわからなかった。

死にたい。
本気でそう願ったのは、故郷がE・B・Bによって襲撃されたあの日……。
友達が目の前で殺され、それでも晶と必死で逃げ延びた先に待っていたのは絶望だった。
両親は既にE・B・Bに殺されて、亡くなってしまっていた。
体が弱いのに毎日家事で忙しそうにしている母親。
木葉が手伝ってあげると、『いつもありがとう』と微笑んでくれた。
気難しい父親は、普段はあまり話しかけて来ない。
新聞を読んで表情をムスッとさせているときに、よく背後から不意打ちのように肩を揉んであげた。
その時の驚いた顔を見るのが楽しみで、最後にはいつも笑ってくれる。
そんな小学生みたいなことを高校生になってまでやっていたのは、流石に他人には恥ずかしくて言えなかったが、木葉は本当に両親が大好きでいつも親孝行をしようと一生懸命だったのだ。

家族だけではない、いつも仲良くしてた友達も……まるで兄のように優しかった『竜彦』も、死んでしまった。
しかし、唯一晶だけが生き残ってくれた。
それは救いではあったし、心の支えでもあったのだ。
だけど、木葉が心に受けた傷は深すぎた。
その傷は癒えることなく、徐々に木葉の心を蝕んでいき……挙句、自殺未遂という形で現れてしまったのだ。
それだけではない、いよいよ自分の頭がおかしくなったんじゃないかという自覚症状も出てきている。

たまに、頭の中に『人の声』が聞こえてくるのだ。
何処からともなく、自分が知るはずのない声が、木葉に呼びかけてくることがある。
その度に木葉は、自分自身に恐怖した。

「私、どうしちゃったのかな……病気、なの？　おかしく、なっちゃったのかな」

誰かが応えてくれるんじゃないかと期待して、木葉は一人でそう呟く。
しかし、誰一人疑問に応えてはくれない。
アヴェンジャーの施設には、もう誰も残っていないのだろうか。

「……助けて、晶くん――」

目に涙を浮かべながら、木葉は掠れた声でそう呟いた。
その時、ギギギギと思い扉が開かれる。

「晶、くん？」

もしかして、助けに来てくれたのかもしれない。
そんな期待を抱いて顔をあげたが、その先に待ち構えていた人物は……期待通りではなかった。

「ホホホ、お嬢さん……こんな施設で一人では危ないですよ。　外には危険なE．B．Bがたくさんいるのですから」

「だ、誰？」

「おっとそうでしたな、これはこれは大変失礼致しました。　私は

『ジエンス・イェスタン』、アヴェンジャーのリーダーとでも言えばわかりやすいですかな？」

「ア、アヴェンジャーの……？」

「それよりもここは危険です、私が貴方を安全なところまで送り届けてあげましょう」

ジエンスがゆっくりと歩み寄ってくると――

ズキンッ！　突如、強烈な頭痛が木葉に襲い掛かった。

「あ、ああ――な、何これ……」

頭の中に、声が聞こえてくる。

今までに聞いた、ただの声とは違う。

ジエンスとは違う、とても低い男性の声。

狂気に満ちた、薄気味の悪い感覚が木葉に襲い掛かる。

思わず背筋をゾッとさせた。

聞こえてきたのは、何処か悪意や憎悪に満ちた……不気味で、気色の悪い声。

木葉は耐えきれなくなって、バッと両耳を塞いだ。

「どうしました、お嬢さん？　怖がらなくていいのですよ、私は何もしませんから」

「貴方の中に、誰が……いるの？」

「ほう？　なるほど、やはり私の思った通りでしたか」

「いや、来ないで……近寄らないでっ！」

ジエンスが近づけば近づくほど、狂気に満ちた声が木葉に襲い掛かっていく。
耳を塞ごうが何をしようが、木葉は声をかき消すことが出来なかった。
逃げ出そうと部屋の奥へ駆け出しても、この部屋には窓一つすら存在しない。
唯一の出入り口には、あのジエンスという男が不気味に微笑んだまま立ち尽くしていた。

「私と共に、世界を手にしましょう。　それには、貴方の協力が必要なのですよ」

「せ、世界……？」

「貴方は何も考えなくて良いのですよ、ただ……じっとしていればいいんです」

ジエンスが更に歩み寄ってくると、木葉は思わず腰を抜かして地べたへと座り込んだ。
この男から発せられる禍々しい気配、その気持ち悪いさが何なのかは理解できない。
ただ、一つだけわかるのは……ジエンスは、決して優しい老人なんかではない事。
木葉の本能が、『この男は危険すぎる』と訴えていた。
こうしている間にも、ジエンスは一歩ずつ一歩ずつ木葉へ歩み寄ってくる。
どうにかして、この男から逃げないと――
だけど、腰が抜けて身動きが取れない。
木葉はただ迫り来るジエンスを、小刻みに体を震わせながら待ち構

える事しかできなかった。

「さあ、お嬢ちゃん……私と共に、行きましょう」

ジエンスは木葉の腕をがっちりと鷲掴みにし、にっこりと微笑んだ。

「……い、や……嫌っ！！」

恐怖に耐えきれなくなった木葉は、本能的に危険を察した。
ようやく体の自由を取り戻し、咄嗟に走り出そうとするがジエンスがそれを許さない。
そのまま強引に体を引かれて、口に真っ白な布を当てられた。
その瞬間、木葉の意識はパタリと途絶えた。
薬を嗅がされたと気づく暇もなく――

「ホホホ、シラナギさんは本当にいい仕事をしてくれましたよ。まさか、このタイミングで素晴らしい人材に出会えるとは思っておりませんでしたから」

既に意識を失った木葉を両手で優しく抱きかかえると、ジエンスは静かに部屋の外へと立ち去ろうとする。

「女王の座は、貴方に譲りましょう……貴方ならきっと、立派に務まりますよ」

ジエンスは、不気味な笑みを浮かべると、静かに薄暗い部屋を後にした――

シラナギは格納庫に残された巨大なＨＡを一人で眺めていた。
ジエンスに呼び出されて施設内に待機していたものの、肝心のジエンスの姿がない。
その間に施設内にいるはずの健三と木葉の2名を探し出そうとしたが、2名とも行方が掴めなかった。
健三ならば、いつもジエンスの近くにいるから深く考えなくてもいい。
だが、木葉は違う。　少なくともこれから起こる激しい戦いに連れて行くわけにもいかないし、施設内も外には狂暴なＥ．Ｂ．Ｂが多く潜んでいるはずだ。
誰もいない施設内で一人で残すのはもっと危険が伴うだろう。
だからシラナギはせめて自分の目が届くところで一緒にいてあげたい、と考えていたのだが――

「困りましたねー、このまま木葉ちゃんの身に何かがあったら……」

やはりメシアから木葉を連れ出したのは、間違っていたのだろうか。
しかし、Ｅ．Ｂ．Ｂ化が進んでいる木葉を放っておくわけには行かない。
今の晶は色々なものを抱えすぎて、自分の事で精一杯だ。
そんな晶に、今の状態の木葉を任せられない……木葉を一人にしておくことはできなかった。
アヴェンジャーにはかつてエターナルブライトの研究に関わっていた健三だっている。
今の木葉の容態を見てもらう事もできるし、もしかすると症状を抑

える方法を何か知っているかもしれない。
そして……何よりも木葉を守りたいという気持ちは、晶には負けていないのだ。

「あんな偉そうな事言っといて、私自身が木葉ちゃんを一人にしちゃうだなんて……最低です」

シラナギはため息をついて、そう呟く。
自分はなんて無力なのだろうと、痛感した。

「おや、シラナギさんではないですか」

ふと背後から聞きなれた声が聞こえてくる。
振り向くとそこには、ジエンスの姿があった。

「ジエンスさん、ですか……探しましたよ」

「これはこれは申し訳ない、私も色々と忙しい身でして。間もなく出航の時間ですよ、貴方には私の艦を守ってもらわなければなりませんから」

「艦ですか？　私には荷が重そうですねー」

「ホホホ、ご冗談を。まぁご安心なさってください、流石に貴方一人に押し付けるつもりはありませんので」

ホホホ、と甲高く笑うジエンスにつられてシラナギも笑って見せた。
だが、やはり木葉の事が気になってしまい、苦笑いになってしまっている。
一体何処へ行ってしまったというのだろうか……。

「ジエンスさん、木葉ちゃん見かけませんでしたか？　施設に連れて来てから目を離しちゃって……」

「木葉ちゃん……おお、あの可愛らしいお嬢さんのことですかな？　彼女ならとっくに避難させておりますよ」

「避難ですか？　うーん、困りましたね……今すぐにでも健三さんに診てもらおうと思っていたんですけれど

「彼女についてなら健三殿も気にしてはいましたよ。　ですが、危険な戦いに一般人の彼女を巻き込むわけにもいきませんからね。ですから監視をつけるという条件で、近くの街に避難させたという事ですよ」

「そうですか……なら健三さんに見てもらうのは無事戦いが終わってからにしましょうか……」

ジエンスの言う通り、確かに木葉を戦いに巻き込む必要はない。アヴェンジャーの目標はあくまでもメシアであり、決して一般人に危害を加える事ではないのだ。

「ホホホ、それは我々の勝利で終わると確信しているのですかな？」

「当然じゃないですか、貴方も私もいるんですし……それに私達が勝たなければ、アッシュベルの暴走を許す事になります。　それは、絶対にあってはならない事ですから」

「頼もしいですな、では……行きましょう。　アッシュベルとの、決着をつける為に」

「はいー、頑張っちゃいますよー」

そう呟くと、ジエンスは格納庫を後にした。
その後ろ姿を見守りながら、シラナギは胸に手を当てて深呼吸をする。

「……木葉ちゃん、待っててくださいね。　私が絶対に、救ってみせますから」

今一度、戦う決意を固めたシラナギは、ジエンスの後を追うようにその場から姿を消した。

フリーアイゼンの格納庫。
大型E・B・Bと激しい戦いを繰り広げたゼノフラムは、急ピッチで改修作業が進められていた。
時間にあまり余裕がなく、完全に修理が終わる事はない。
だが、これから先はアヴェンジャーとの戦いだ。
無茶をさせすぎた機体の調子を、少しでも整えておかなければ戦い抜く事は出来ない。

「すまないな、エイト」

「ったくよー、初っ端からこんなに派手に壊しやがって。　お前絶

対後先考えてねーだろ？」

忙しそうに手を動かしながら、エイトは愚痴を漏らした。
フラムの的確の指示と共に数十人の作業員が慌しくゼノフラムの改修作業を進めている。
ゼノスも手伝おうとしたが、フラムから私だけで十分だと追い返されてしまっていた。
だが、改修作業が終わるまではこの場を離れるつもりはない。
じっと睨み付けるように、ゼノフラムを見つめ続けていた。

「随分、激しい戦いだったんだな」

突如背後から声が聞こえたかと思うと、そこには晶の姿があった。

「お前達もよく無事だったな、おかげで俺達はE．B．Bの討伐に集中することが出来た」

「でも、俺……全然あいつに敵わなかった。　以前よりも無茶苦茶な動きをしてきやがるし、どうしたらいいか……」

晶は驚異的な機動力で迫るレブルペインを相手に、ほとんど何もすることが出来なかった。
危険察知があっても反応が追い付かずに、危ないところを何度もシリアに助けられる場面も多かった。

「……だが、俺達は奴らを上回らなければならない。　自分の力をもっと信じろ、気持ちから負けていては勝てる相手にも勝てないぞ」

「だ、だけどさ――」

「お前にはお前の戦い方がある。　ι・ブレードとお前でしか引き出せない、他の誰にも劣らない強さを……持っているんだ。だからこそ、今までお前は戦い抜き……生きてきた。　何故、それを信じようとしない？」

「俺と、ι・ブレードでしか引き出せない力……？」

ゼノスの言葉を聞き、晶は表情をハッとさせた。
危険察知にι・フィールドといった機能面は勿論な事……晶は、ι・ブレードと通じ合っているのだ。
声を掛ければコックピットを灯して応えてくれるし、危険察知が作動しなかったら青い光で教えてくれる。
ただ、パイロットが機械を操るのとは少し違う。
まるで生きているかのように思えるι・ブレードは、他のＨＡとは違う特別なＨＡなのだ。
……他のパイロットにはない、自分だけの強み。
それは、晶とι・ブレードの固い絆なのかもしれない。

「……わかった、信じるよ。　俺とι・ブレードの力を」

「そうだ、それでいい」

『パイロット各位に通達します。　アヴェンジャーの部隊を確認しました、数にしておよそ１００。　至急、迎撃に向かってください』

艦内からヤヨイの通信が響き渡ると、作業員は一斉に道具を片づけてゼノフラムから離れていく。
それを確認すると、ゼノスはコックピットへと向かって歩んでいった。

「行くぞ、晶」

「ああ、任せてくれっ！」

自分にも強く言い聞かせるように、晶は返事をした。
晶はι・ブレードの元へ、駆け足で向かっていった。

格納庫の近くにある控え室で、シリアは一人座りこんでいた。
両足がズキズキと痛む……固定具を取り外し、シリアは足の状態を確認した。
……足が変色している。
まるでE．B．Bのような紫を帯びた気色悪い色。
本当に、自分の中にエターナルブライトが入れられてしまったのか。
ゼノスから初めて聞かされた時は、必死で強がって見せた。
だけど、強がりがそうそう長続きするはずはない。
自分の足を見れば見るほど、シリアは不安に陥っていた。
……しかし、あのまま一生歩けないままと、例えE．B．B化が進もうと歩くことが出来る体。
どちらかよかったのだろう、と考えると……複雑だった。

あのまま歩けなかったら、自分はどうしていただろう。
下手すれば今以上に辛い毎日が待っていた可能性もある。
HAに乗れない、それどころか歩く事も出来ない生活なんて……嫌だった。

「ねぇ、シリア」

「あ、姉貴？　い、いつからいたんだよっ！？」

ふと気が付いたら、隣にラティアが腰を掛けていた。
思わずシリアは声を荒げて驚いてしまった。

「あら、ちゃんと入る前に声をかけたわよ。　でも、何だか悩んでるみたいだったから」

「あ……」

ラティアの目線の先には、Ｅ．Ｂ．Ｂ化が進んだシリアの足があった。
しまった、と思い咄嗟にシリアは足を隠そうとする。

「いいのよ、シリアの足の事は私も知らされたわ」

「……し、心配すんなよ。　アタシなら平気さ、むしろこれに感謝してるぐらいでさっ！」

「貴方がこんなに苦しんでいるのに、私は何もしてあげられない……ごめんね、何も力になれなくて」

悲しげな表情で、ラティアはシリアの足を優しく撫でた。
その様子は昔シリアを慰めるときに、頭を撫でてくれた動作とそっくりだ。
姉は昔から、何一つ変わっていない。
最初からずっと、優しい姉だったのだ。

なのにシリアは、一時的に姉を恨んでしまい、強く当たってしまった。
せめて、償いの為にも……これ以上、姉に余計な心配をさせたくはない。

「姉貴、アタシはもう……昔ほど弱くはない。　強くなったんだ、だからＨＡに乗って戦えるし……ずっと生き抜いてきた。
アヴェンジャーの奴らにだって、負けるつもりはない。　だから、アタシの事は心配しないでくれよ」

「……そう、ね。　でも約束よ、絶対に無茶だけはしないで……危なくなったら、私に頼っていいのよ」

「姉貴、ごめん。　そんな約束はできない、世界の命運がかかってるんだ……多少の無茶はやっちまうかもしれないよ。
でもさ、絶対に……生き残るから。　それだけは、約束するよ」

「あら、いつの間にか頼もしくなったじゃない。　いいわ、なら思う存分……戦い抜くわよ」

『パイロット各位に通達します――』

ラティアがそう言い終えた途端、控え室からヤヨイのアナウンスが響き渡る。
いよいよ、アヴェンジャーの部隊と接触した。

「さて、アタシはさっきの借りを奴らに返してやらねぇとっ！」

シリアはパパッと固定具を付け直すと、ダダダダッと音を立てて控え室を飛び出していく。

すっかり足が元通りになったシリアの足を見て、ラティアは安心していたが……その反面、彼女が待つ未来を考えると胸が痛む。

「今は、考えてる場合ではないわね。　大事な妹を守る為にも……私は負けない」

ラティアもシリアの後に続き、駆け足で控え室を出て行った。

歪んだ感情　？

フリーアイゼンから、４機のＨＡが一斉に出撃した。
空を駆け抜けていくι・ブレードとレビンフラックスに、地上へと着陸するゼノフラムとブレイアス。
フリーアイゼンの後方には、イリュードによって託されたスカイウィッシュ部隊。
指揮権は今、ゲン・マツキに移されていた。

目の前に待ち構えているのはアヴェンジャーの大軍……レブルペインやウィッシュと数多くのＨＡが迫って来ていた。
晶が先行した時よりも、その数は増えている。
敵の目標はメシア本部……フリーアイゼンは、ここで戦線を維持してアヴェンジャーの侵攻を食い止めなければならない。
本部は今、大量のＥ．Ｂ．Ｂに襲われており非常に危険な状態だ。
ここにアヴェンジャーまでもが紛れ込んでしまえば更なる混乱を引き起こす。
世界をアヴェンジャーの好きにはさせない。
必ず、食い止めて見せると晶は誓った。

「アタシ達が先行する、行くぞ晶っ！」

「ああ、わかったっ！」

晶はグッと力強く、スロットルを握りしめた。
ι・ブレードとの強い絆、それが自分の最大の武器。
その絆の強さを、奴らに見せつけてやろうと晶は意気込んだ。

「……やるぞ、ι・ブレード」

コックピットが赤く灯ると同時に、晶は一気にスロットルを押し込んだ。
ギュゥゥンッ！　と、全身に強烈なGが襲い掛かる。
そのまま地上へと急降下をし、勢いを殺さずにムラクモを抜刀した。

バシュンッ！　たった一振りで、2機のレブルペインが真っ二つに切断された。
だがそれと同時に、周りのレブルペインが一斉にι・ブレードに飛び掛かる。
危険察知でその動きが見えていた晶は、即座に空高く舞い上がりブラックホークを4発放った。
空高くからアヴェンジャー部隊の向こう側を目にすると、何やら高台で身構えている4機のHAを目撃する。

「あれは……ロングレンジキャノンかっ！？」

かつてアヴェンジャーはフリーアイゼンを落とす為に、惜しむことなくかなりの数を投入したはずだ。
まだ、あの兵器を所有していたというのだろうか、やはりアヴェンジャーは想像以上に戦力を保有していると思える。

「やらせるかよ……っ！」

空を高速でι・ブレードが駆け抜けていく。
地上からライフルが次々と発砲されるが、ι・ブレードの機動力で命中させられる者は早々いない。
あっという間に高台へと辿り着いた晶は、ロングレンジキャノンに向かってブラックホークを構える。

次の瞬間――ズキンッと晶に頭痛が襲い掛かった。

『やっぱり来やがったなぁ、ビリッケツよぉっ』

「あいつ……っ！」

ロングレンジキャノンの陰から、凄まじい速度で一機のレブルペインが飛び込んできた。

晶は即座に機体を後退させ、襲い掛かるレブルペインに向けて何発もブラックホークを放った。

だが、まるで空でパフォーマンスでも披露しているかのような動きでレブルペインは弾を避けて距離を縮める。

『ケッ、尻尾巻いて逃げたと思ったら今度はお仲間連れか？　ま、テメェにはそうやって馴れあってる方がお似合いだろうがなっ！』

「……俺は、絶対に負けない。　必ず、お前を仕留めて見せるっ！！」

『言うねぇ、ビリッケツぅ……今までのマグレがいつまでも通用すると、思うんじゃねぇぞっ！』

懐へと飛び込んでくるレブルペインを危険察知で捕えるが、またしてもコックピットが青く灯り危険が告げられる。

ガァンッ！　強い衝撃が襲い掛かり、コックピットが激しく揺れた。

だが、晶は怯まずにムラクモを振るう。

その瞬間、レブルペインは急降下してι・ブレードの下方へと回り込んだ。

バァンッ！　同時に晶は、片手で構えたままのブラックホークを放った。

しかし、レブルペインはギュンッとブーストを吹かせてあっという間にι・ブレードの背後を捕える。

『なぁ、もっと冷静に考えてみろよ』

淡々とした口調で俊が告げると、またしてもι・ブレードは一撃を受けてしまう。

晶は攻撃の手を休めずに、俊の動きを捕えようと必死だった。

『お前は学校で常にビリだった落ちこぼれだ、それもぶっちぎりのだぜ？　笑っちまうよな、普通は3年もやってりゃ赤点ぐらい余裕で超えるってのによ。

ここまで才能がない奴ってのもある意味希少種かもしれねぇぜ？』

「……クッ！」

俊の言葉に、惑わされるな。

確かに晶は成績が最下位だった、いくら頑張ってもシミュレーターで好成績を収めることが出来なかったのは事実だ。

『あの時テメェ、俺が不正したとか騒いでやがったよなぁ？　ったく、みっともねぇったらありゃしねぇ……

いい加減、現実を見ろよ？　お前が今まで生きてこれたのは、たまたまι・ブレードの性能にカバーされただけであって、テメェの実力でも何でもねぇんだよ』

だけど、それでもι・ブレードで今まで戦い抜いてきた。

ι・ブレードと共に上げた戦果は決してまぐれではなく、晶自身の実力だ。

もう、昔の自分とは違うんだと強く言い聞かせた。

『誰も口にしねぇからよ、ハッキリと言ってやるよ。　テメェは足手まといだ、ゴミクズだ。
テメェみたいな雑魚は、メシアであろうがアヴェンジャーであろうが、必要とされてねぇんだよ。
だから、俺がテメェの戦意を喪失させるまで徹底的にボコッてやるよ……テメェの為だけじゃなく、テメェの仲間の為にもなぁっ！！』

再び、猛スピードでサーベルを構えたまま……レブルペインが襲い掛かってくる。
危険察知でも見えていたが、ι・ブレードはその場に留まったまま……動かない。
晶は顔を俯かせたまま、スロットルを強く握りしめている。
既に間合いに踏み込んだレブルペインは、腕を大きく振り上げて斬りかかる動作にまで達していた。
ビリッケツ・落ちこぼれ・雑魚・足手まとい・ゴミクズ。
その言葉は心を抉るかのように、学校時代での自分を思い出させた。
必死になって練習をしても、クラスメイトに追いつけなかった。
次第にはやる気までも失くしては木葉や竜彦に支えられてきた日々。
それらは全て、『過去』だ。

「うおおおぉぉぉぉっ！！！」

晶は顔をガバッと起き上がらせて、スロットルを最大まで押し込んだ。
ギュオオオンッ！　と、急加速を遂げたι・ブレードは、レブルペインを強く押し出した。

「違う……俺はもう、ビリッケツでも落ちこぼれでもないっ！！」

両手でガッシリとレブルペインを捕えた晶は、力強く叫んだ。

『さっさと認めろよ、クソがっ！！』

「お前こそ、認めろよっ！」

晶は力任せに、レブルペインを地上へと向けて蹴り飛ばした。
すぐにブラックホークで追い打ちをかけるが、あっという間に体制を取り戻しレブルペインはライフルを撃ち返す。
危険察知で軽々と交わすと、お互いは一時的に停止した。

「落ちこぼれの俺は、もう何処にも存在しない。　お前の目の前にいる『俺』は、フリーアイゼンのエースなんだぁぁぁっ！！」

『テメェがエースだと？　笑わせるぜ、これだからビリッケツはよぉ……どうかしてるぜっ！！』

ι・ブレードはムラクモを構えると、勢いのまま斬りかかろうとする。
だが、レブルペインは真正面から向かって来ずに、ι・ブレードの下方へと回り込みライフルを撃ち続けた。
交互に撃たれる二丁のライフルを交わしながら、晶は徐々にレブルペインとの距離を縮める。
その瞬間、危険察知が発動した。

『学習能力の、ねぇ奴だなぁぁっ！！』

レブルペインは、一斉にミサイルが発射される。
晶は即座に下がってブラックホークを二丁構えた。

「クッ……！！」

バンバンッ！　とミサイルを何とか撃ち落したが、同時に弾切れが訪れた。

その瞬間、レブルペインはι・ブレードの真正面へと回り込んだ。

『そら、もう一発いくぜぇぇっ！！』

「やらせるかよっ！」

晶は力任せにムラクモを振るうが、瞬時にレブルペインはモニターから姿を消した。

コックピットは青く灯された、また死角へ回り込まれたのかと背後を警戒するがレブルペインの姿はない。

『そろそろ、死んどけよ？』

ゾクリ、と晶の背筋に寒気が走る。

まるで本当に背後にでも迫られたかのような感覚だ。

レブルペインは、ほぼ密着に近い状態でι・ブレードの背後を捕えていた。

こんな至近距離から撃たれてしまえば流石のι・ブレードでも装甲が持つとは思えない。

だが、それはあのレブルペインにも言えるだろう。

……脅しなはずがない、あの男は必ず無謀な事をやってのける。

それを察したからこそ、晶は自身の危険を察したのだろう。

『下がれ、晶っ！！』

突如、通信機からゼノスの声が飛び込んだ。

言われるがままに、晶は全速力で空へと向けてスロットルを限界まで押し込む。

『逃がさねぇよっ！！』

同時に、レブルペインから無数のミサイルが発射された。
その瞬間――グォォォッ！　と、鉄球が猛スピードでレブルペインの前を通り過ぎて行く。
バババババッ、とガトリングの音が響くと同時にミサイルは全弾撃ち落された。
……そこには、ブーストハンマーで無理やり空へ飛んできたゼノフラムの姿があった。

『チッ、デカブツが邪魔に入ったかっ！』

『悪いが、地上に降りてもらう』

ゼノフラムは2連キャノンをレブルペインに向け、至近距離で発射させる。
だが、レブルペインの動きを捕えきれることが出来ずにあっという間に背後を取られてしまった。

『そんな重い機体で、俺を捕えきれると思ったか？　おめでてぇ奴だなぁっ！』

速度を落とさないまま、レブルペインは全力でゼノフラムに斬りかかろうと飛び込んだ。
その瞬間、ゼノフラムがくるりと宙を回転し、肩からミサイルを全弾発射させる。

『チッ……ざけんなっ！！』

至近距離で一斉に放たれたミサイルは数が多すぎてとてもじゃないが捌い潜る事は出来ない。

レブルペインは一度後退し、ミサイルから逃れようと高く飛び上がった。

『やれ、晶っ！！』

「ああ、行くぞぃ・ブレードっ！」

晶の声に反応し、ぃ・ブレードのコックピットが赤く灯る。

ゼノスが用意してくれた、たった一度だけのチャンス。

そのチャンスを、逃すわけには行かない。

ミサイルから逃れてきたレブルペインを挟むように、ぃ・ブレードは立ちはだかった。

「お前を、倒すっ！」

『面白れぇ、やってみろよぉっ！！』

レブルペインは凄まじい機動力を見せつけ、一気にぃ・ブレードとの距離を詰めていく。

近くにある邪魔なミサイルは次々とライフルで破壊していく姿は、まさに鬼神の如き。

だが、晶は怯まずにレブルペインの動きを捉えようと精神を集中させる。

危険察知が発動し、レブルペインが仕掛けてくる映像が目に入った。

自分でも驚くほど冷静さを保っている晶は、いつも以上に危険察知時の映像の情報が頭に入ってきた。

相手はゼノフラムの位置も完全に把握し、丁度ゼノフラムから見て死角になる位置でι・ブレードに斬りかかろうとしている。
その背後には、破壊されていないミサイルが一つ。
相手がミサイルを当てるのを目的だと考えれば、逃げる方向は上しか有り得ない。
下にはゼノフラムが待ち構えている以上、あの男が警戒しないはずがないのだ。
相手のレブルペインは、確かに早すぎて動きを捉える事は出来ない。
だが、相手の動きを予測すれば……そこに速さなど意味は持たないはずだ。
危険察知の映像が終わった途端、晶は迷わず上空へと舞い上がる。

「うおおおおぉぉぉっ！！！」

ムラクモを抜刀しようとした瞬間、凄まじい速度で上昇してきたレブルペインを捉えた。

『なっ――テメェっ！！』

ι・ブレードはムラクモを抜刀するが、辛うじてレブルペインはムラクモを避けて、下降していく。
後ろには再びミサイルの嵐が襲い掛かり、レブルペインは休む暇もなく、再度空高く舞い上がった。

『ビリッケツ如きに……読まれた、だと？』

「……もう一度、もう一度仕掛ければっ！」

『自惚れんな、まぐれが当たりそうになったぐらいでいい気になってんじゃねぇぞっ！』

「お前こそ、何時までも俺がただのビリッケツだと思うなぁぁっ！！」

晶はムラクモを構えたまま、レブルペインとの距離を詰めようと迫り行く。
その瞬間、危険察知が発動し……目の前にグレネードが投げ込まれた。

「まずい――」

ズガァァァンッ！！
すぐに後退し、全力で下がり何とか爆発に巻き込まれるのだけは避けた。
だが、その瞬間コックピットが青く灯り危険を告げる。
黒い煙に包まれた、視界が完全に奪われた。
いつ、どこから襲い掛かってきても不思議ではない。

「ι・ブレード、頼むっ！」

晶が叫んだ瞬間、ι・ブレードの周辺に赤い光が集いフィールドが展開された。
これで凌げるはず……だったが、不思議な事にレブルペインが仕掛けてくる様子はない。
数秒ほど時間が経つと、展開されたフィールドは消えてしまっていた。
同時に――危険察知が発動する。
煙の中、動力源を串刺しにしようとブレードを突き立てて突進してくるレブルペインの姿が映し出された。
いくら装甲が優れているι・ブレードでも、あの凄まじい速度から

叩き出される突きを防ぎきれるはずはない。
煙のせいで位置が明確に掴めない以上、危険察知の情報はあまり役立たない。

なら、どうすればいい――相手も視界が奪われているはずだが、映像を見る限り相手はι・ブレードの位置を把握できている。
ギリギリまで待ち構えるしかない……晶は神経を研ぎ澄まし、レブルペインが仕掛けてくるのを待った。
煙の中、怪しく輝く二つの赤い光が目に入った。
あれは、レブルペインの頭部――

「落とせぇぇぇぇっ！！」

バァァンッ！　ブラックホークから、一発の弾丸が赤い光へと向けて突き進んで行く。
徐々に姿をはっきりさせてきたレブルペインは、映像に出た通りの姿だった。
銃声に気づいたのか、レブルペインは僅かに横にずれて弾を回避する。
晶もそれに気づき、レブルペインの背後を取ろうと大きく横へ回り込んだ。

『テメェ如きが、俺の動きを捉えきれると思うなよっ！！』

「うるさい、俺はお前に……絶対に負けねぇっ！！」

そのまま、ι・ブレードは力任せにムラクモを振るう。
だが、いとも簡単に攻撃は交わされて背後を取られては危険察知で交わす……そんなギリギリなやり取りを繰り広げていた。
段々と煙が晴れて、レブルペインの姿がはっきりと見えてくる。

それを機に晶はスロットルを押し込み、レブルペインへと向けて突進した。
レブルペインは凄まじい動きで旋回し、あっという間にｉ・ブレードをサーベルで弾き飛ばす。
激しくコックピットが揺れる中、晶は怯まずにモニターを睨み付けた。

『ビリッケツよぉ……お前にしてはよくここまで俺を楽しませてくれたもんだぜ。
だがよ、もう終わりだ。　テメェとの遊びは、ここまでだ』

「戦いが遊びなはずがないだろうが……まだ、そんな事を言ってんのかよっ！？」

『俺にとっては楽しい事は、全部遊びなんだよ。　命を削り合う感覚……いいねぇ、ゾクゾクしてこねぇか？』

「命の奪い合いが……楽しいはずがないだろうがっ！！」

『なら、さっさとくばたっちまえよっ！！』

レブルペインから一斉にミサイルが発射された。
晶はミサイルを撃ち落とそうとするが、またしてもブラックホークの弾が切れてしまっていた。
必死で逃げようとするが、目の前にはサーベルを構え、凄まじい速度でレブルペインが迫る。
回避は間に合わない――その瞬間、バァンッ！　という銃声と共に、レブルペインに銃弾が直撃した。

『なっ――』

「い、今のは？」

晶は地上を確認すると、そこには2連キャノン砲を構えたゼノフラムの姿が目に入った。

『今度こそ、仕留めろ』

「……ああっ！！」

僅かに怯んだレブルペインに向かい、晶は全力でムラクモを振るった。

直撃をくらったものの、敵機はまだ身動きが取れるようでギリギリのところで回避をされしまう。

『あの程度で俺を仕留めた気か？　なめてんじゃねぇぞっ！！』

だが、晶は……それを見越していた。

ムラクモからは眩しいくらい強い光が放たれている。

……ι・ブレードの切り札、『ムラクモ解放』が晶には残されていたのだ。

「俺の、勝ちだっ！」

晶は力強くムラクモを振るうと、縦一直線に赤き閃光が走る。

バシュゥンッ！　目にも留まらぬ速度で、放たれた赤き光の刃はレブルペインを容赦なく切り裂いて行く。

レブルペインの左腕と左足は、綺麗に切断され……地上へと落下していった。

『やりやがった、やりやがったな……クソがっ！！　テメェ……タダで済むと思うなよ、そこを動くんじゃねぇっ！　殺す……絶対に、殺すっ！！』

まだ動く……俊は、機体が半壊しようが関係なしに戦いを続ける。

今回もまた、『同じ』かと思った……だが――レブルペインは、動かないまま徐々に地上へと墜落していった。

『おい、クソッ……動けポンコツ……っ！　ざけんなっ！！』

「……負けを、認めろよ」

『負けた、俺が？　笑わせるな……まだテメェとの勝負は終わっちゃいねぇんだよ……っ！！』

「認めろよ……お前は、俺に負けたんだよっ！！」

晶は力強く、俊に向かって叫んだ。

もうあのレブルペインは動けない、晶は確信していた。

『負けた……俺が？　天才であるはずの俺が、ビリッケツ如きに……？　あり得ねぇ……例え、まぐれだとしても俺の負けが……有り得る訳が――』

煙を吹かしながら、レブルペインは徐々にバランスを崩し落下を加速させる。

……ι・ブレードは、ムラクモを鞘に納めた。

俊との決着は、ついたのだ。

『認めねぇ……認めねぇ認めねぇ認めねぇっ！　畜生畜生畜生畜生

畜生ぉぉっ！！！　俺が、俺が負けるなんて……ありえねぇぇだろうがぁぁぁっ！！！』

「……もう、終わりだ」

晶は強引に、俊との通信を切った。

かつて何度も立ちはだかり、ι・ブレードを苦しめ続けた俊を……ついに打ち破った。

だが、レブルペインが落ちていく姿と俊の言葉を耳にすると、何処か心が痛んだ。

『晶、戻れ。　残りの奴らを片づけるぞ』

「……わかった」

コックピットの中ではまだ、叫び続けているのだろうか。

落ちていく俊の姿を哀れみながら、晶は深く深呼吸をして気持ちを切り替えた。

「せめて、生きてくれよ……」

あの状態ではもう戦えないはずだ。

晶は俊にトドメをささずに、その場を静かに立ち去って行った。

歪んだ感情　？

ある日、少女は不思議な老人と出会った。
少女はとある施設に引き取られ、施設内に閉じ込められて生活を送っていた。
そこはメシアが秘密裏に作り上げた隔離施設、エターナルブライトによる治療を受けた子供達が集う施設だった。
エターナルブライトによる人体実験はこの施設を中心に進められ、子供達はまるでモルモットのように実験材料として消費され続ける。
E．B．Bへ化してしまう子供、或いは体の一部がE．B．B化してしまった子供、コアを失い死んでしまった子供……たくさんの被害者が日々生み出され続けた。

施設内に友達はいない、他の子供は一緒に遊ぶことが多いが、少女は一人で不気味に笑い続けるだけだ。
研究員は彼女の事を忌み嫌う、いつも不気味に笑い何を考えているかわからず、時には不思議な言動で相手を惑わせる不気味な少女。
突然発狂したかのように叫んだかと思えば、今度は赤ん坊のように泣き喚き暴れまわり、施設内を荒らしまわった事もある問題児。
施設内の子供からも怖がられ、誰一人近づくことはない。
サンプルとしてデータの採集は十分に行われた、もうあの子に用はない。　殺してしまえ。
研究者の出した結論は、残酷な一言だった。
彼女を必要とする者は、誰もいない。
両親に捨てられた少女が殺されても、誰も悲しむ者はいないのだ。

そんな残酷な未来が待っている事も知らず、少女は一人でニヤニヤと笑みを浮かべ、施設内をブラブラと歩き回っていた。

少女はふと、足を止めた。
施設内では見たことがない背の高い男を目にした。
白髭に覆われた顔に目が見えない程深くかぶった真っ黒な帽子、少し長めの杖を片手にゆっくりと歩み寄る。
気品のある動作から、何処か執事を連想させる老人は、帽子を脱いで丁寧に頭を下げた。
何処からどう見ても普通の老人ではあるが、少女は感じていた。
この老人は何処か普通ではない、とても不思議な力を持っていると。

「おや、私の顔に何かついておりますかな？」

「うん、真っ白なお髭。　手入れが大変だよね、私が一本残らず毟り取ってあげるよ」

「ホホホ、それはなりませんな。　これは私のいわばトレードマークのようなものでして。　これがなければ、私の友人が私に気づかなくなるかもしれませんぞ？」

「いい、気づかれなくていい。　皆から無視されちゃえ。　誰にも気づかれずに、必死に声を荒げて存在をアピールするの。
私は、ここにいるよ。　気づいて、気づいて。　ねぇ、気づかないの？　ねぇねぇ、気づいてる？
ううん、気づかないよ。　だって私はここにいないんだもの、だから皆、気づかないの。　アハハ、アッハッハッハッハッハッ！！」

少女から発せられてるとは思えない、奇声のような笑い声が施設中に響き渡った。
通り過ぎていく施設の人間は、誰一人振り返らない。
むしろ、また始まったのかとうんざりとした表情を見せる者さえいる。

「……貴方はご両親に捨てられました。　だから、この施設に閉じ込められているのです。
このまま閉じこもっていては、ご両親は貴方の声に一生気付く事はございませんよ？」

「ママ？　ママが来ているの？　ママ、ママッ！　ねぇねぇ、ママがいるの？　ねぇっ！」

老人が『両親』という単語を口にした途端、少女は血眼になって老人へとしがみ付き叫んだ。
だけど、老人が口に出す前にすぐに気づいてしまった。
母親はここにはいない、決して迎えに来てくれないだろうと。

「貴方はまだ幼い、故にご両親を求め続けている。　それは子供としては当然であり、貴方が持つ当たり前の願いなのです。
何故、貴方が捨てられたのか？　それはもう、貴方はただの『人』ではなくなったからなのですよ」

「ううん、違う。　私は私だよ、貴方の言うように『人』でなくても……私は変わっていない。　ママは、それに気づいていないだけ」

「これはこれは……中々面白い。　是非、私も貴方を見習わなくてはなりませんな」

「ねぇねぇ、どうすればママは気づいてくれると思う？　私、ママに気づいてもらいたいの」

「うーむ、難しい質問ですね。　答えになるかはわかりません、ですが貴方に道を用意する事はできます……どうです、私の元で働き

ませんか？」

「はたらく……働くって、何？　ねぇ、どうすればいいの？」

老人をゆっさゆっさと揺らしながら、少女は必死で訴える。

大好きな母親の顔を浮かべながら、ニヤニヤと不気味な笑顔を浮かべて。

「そうですね、簡単に言えば悪い人をやっつける仕事ですよ。　いいですか、例えばこの施設にいる研究員……この方々は貴方のような不幸な子供を生み出した元凶です。

彼らは放っておけば、ますます貴方のような不幸な人間が増えてしまう……ならば、悪い事をする前に始末してしまえばいいのです」

「始末？　具体的には、何をすればいいの？」

「貴方はＨＡに乗って……私と共にメシア……いえ、アッシュベル・ランダーと戦ってほしいのです。

子供である貴方にこのような事を依頼するのは、とてもおかしなことではございますが……今の私に、それ程余裕は残されていないのですよ」

「戦う？　それって、いっぱいいっぱい悪い人と戦って、強くなればいいってこと？」

「その通りです。　賢い子でとても助かりますよ」

老人がニッコリと微笑むと、少女も同じように笑う。

抑えきれなくなった少女は、再度発狂したかのように奇声を上げて笑い始めた。

「私ね、ママにずっと愛され続けてきたの。　なのにママは、私は私なのに、私に気づくかなくなって……私を愛さなくなった。今度きっと、私がママを愛する番なの。　だから私、ママを愛してあげたい。　ねぇ、ママを愛してあげるには、どうすればいい？」

「愛ですか？　老人の私めには、厳しい質問ではございますな……相手が気づかないのであれば、一方的に感情をぶつけるのも手の一つとも言えるでしょう。
例えばお互い意識をしない男女がいたとして、男性が女性に好きだという感情をぶつけた時……ひょっとすると、女性の感情が揺れ動くかもしれませんぞ」

「戦って戦い続けて強くなれば、ママは愛してくれるの？」

「ホホホ、きっと笑ってくれますとも。　さあ、私と共に……世界を変えるのです。　悪しきメシアを滅ぼし、世界に真の平和を取り戻すのですよ」

「強い、強い人、ママが好き。　ママ、愛する強い人。　強い人……好き、好き。　ウヒヒ……ママ、愛してあげる。
私、強い人といっぱい戦って、いっぱいいーっぱい愛してあげるからぁぁぁっ！　アハハ、アッハッハッハッハッハッハァッ！！」

少女……『フィミア・アミネス』が戦闘狂へと変貌した瞬間だった。
ただひたすら『愛』に飢え『愛』を求め戦い続ける。
いつしかフィミアは母親の事を忘れ、強い人間と戦いを交える事に固執していた。

アヴェンジャーの大群が押し寄せる中、上空を凄まじい速度で駆け抜けて行く一機のＨＡの姿があった。
飛行形態へ変形したレビンフラックスは、空から敵を惑わすように攻撃を仕掛け続ける。
ライフルの嵐を浴びながらも、華麗に回避をし続けて被弾を免れていた。

「なんちゅー数だよ……さっきよりも増えてんじゃねぇかっ！」

凄まじいＧが体に襲い掛かるが、シリアは速度を落とすことなく回避へ専念する。
やはり上空と言えど単機での突撃は無謀すぎた、一度立て直そうとシリアは下がろうとした。
その瞬間……ゾクリと背筋に寒気が走る。
映像通信を告げる音が、コックピット内へと響き渡った。

「あいつ……いい加減にしろよなぁぁっ！！」

ガンッとボタンを叩き付けるかのように、シリアは映像を受信する。
やっぱりか、と言わんばかりに赤いドレスを身に纏ったフィミアの姿が目に入った。

『アッハッハッハッハァッ！！　よかった、ちゃんと戻ってきてくれたぁっ！！

そうだよね、お姉さんと私は運命の赤い糸で固く結ばれているんだもの……ウヒヒ、たっぷりたっぷり……愛してあげるからぁぁっ！！』

「悪いけどな、お前に逢いに戻ってきたワケじゃねぇんだっ！　いい加減テメェも痛い目に逢わないとわかんねぇらしいからな……アンタを、叩き潰すっ！！」

飛行形態を維持したまま加速を続けると、背後にはトリッドエールが凄まじい速度で近づいてくる。
例の巨大なサーベルを片手に追いかけてくる様子は、まさに恐怖そのものとしか言えない。
だが、シリアはいつまでも逃げ続けるつもりはなかった。

「これでも食らいやがれぇぇっ！」

シリアは機体を宙返りさせると同時に、無数のミサイルを放った。
同時に人型へと変形させ、新しく補充したサーベル2本を合体させて一つの大剣へと変化させる。
バンバンバンッ！　と、あっという間にミサイルが撃ち落されると、トリッドエールは巨大なサーベルを片手に猛スピードで突進を仕掛けてきた。

『ねぇねぇ、私の愛を受け止めて見せてよ……ウヒヒィィッ！！』

「さっきみたいに剣は折らせねぇぞっ！」

トリッドエールがサーベルを振るうと同時に、レビンフラックスはサーベルを力強く振るう。
ガキィィンッ！　金属音が響き渡り、火花が散る。

トリッドエールの速度とサーベルの凄まじい回転刃に、レビンフラックスはサーベルごと吹き飛ばされた。

『ウヒヒ、お姉さん好き……大好き大好きぃぃぃぃっ！！』

無防備となったレビンフラックスにライフルが向けられる。
シリアは何とか凌いで見せようとスロットルを限界まで押し込む。
その間に、ライフルから無数の弾が乱射された。
辛うじて回避の間に合ったレビンフラックスは飛行形態へと変形し、トリッドエールの背後へと回り込んだ。

「恋愛したいんなら、アタシじゃなくてもっとマシな相手選べってのっ！」

『ウヒヒ……こんなの凄く、久しぶり。　私の愛がここまで抑えきれないなんて……やっぱりお姉さんは、運命の人なんだねっ！』

ブォンッ！　巨大なサーベルが振り回されると、シリアは即座に下へと回り込んだ。
サーベルが弾き飛ばされる以上、下手に飛び込んでしまえば返り討ちに逢うのは目に見えている。
だからといって遠距離であの速度に狙いを定めるのは至難の業。
だが、今は攻めるしかないとシリアはトリガーを引いた。
バァンッ！　バァンッ！　2発の銃声が響き渡ると、トリッドエールはくるりと宙で踊るかのように弾を回避する。
同時に、銃声が響き渡り容赦なくライフルも弾が襲い掛かる。

少しでも気を抜けば落とされかれない……あのパイロットは言動こそ不可解であるが、腕は確かに本物だ。
しかし、機体の性能は決してレビンフラックスは劣っていない……

文字通り、純粋にパイロットとしての腕が問われる事となるだろう。
銃声が響き続け、徐々に距離を縮められサーベルの間合いを詰められていく。
シリアは機体を人型へと変形させ、再び合体させたサーベルを構えた。

「来いよ……アンタの愛とやら、へし折ってやるっ！」

『ウヒヒ、照れなくていいのに……いいよ、お姉さん。　私と一緒に、いこうよっ！！！』

迫りくるトリッドエールが、更に速度を上昇させて突撃してくる。
正直これ以上スピードは上がらないと思っていたが、あのＨＡはまだまだ限界には達していないようだ。
このままバカ正直に受け止めてもはじかれるだけなのはわかっている。
だが、あの速度であれば小回りが効くはずがあるまい。
まんまとシリアの罠にはまったフィミアは、そんな事をお構いなしにサーベルを片手に流星の如く突進してきた。
その瞬間、シリアは横へとバーニアを吹かせてトリッドエールの背後を捕えようとする。
このまま無防備となったトリッドエールを、サーベルで地上へと叩き落してやろうと振り下ろす。

「落ちろぉぉぉぉっ！！」

シリアが力強く叫んだ途端……突如、トリッドエールの背後から爆発のような音が響き渡る。
ズゴォォォンッ！　バーニアから紫色の光を噴き出したかと思うと、トリッドエールは爆発的な速度を叩き出し、視界から姿を消し

た。

「な、何だ今の加速は？　あんなもん……ＨＡが出せる速度じゃねぇぞ……パイロットだって無事なはずが――」

『アッハッハッハッハッハッハァッ！！！』

しかし、シリアの予想とは裏腹にフィミアの奇声が通信機越しに響き渡る。

「ど、何処だ？　何処にいやがる……？」

レーダーを確認しようとするが、レブルペインのせいで今は使い物にならない。

かといってモニターからではトリッドエールの姿が見えない。

いつにも増して神経を集中させ、トリッドエールが仕掛けてくるタイミングを見計らおうとした。

『愛してる、愛してるよお姉さぁぁぁぁぁぁんっ！！』

通信機からフィミアの声が入り込むと同時に、ふと影のようなものを目にする。

「上かっ！？」

シリアはサーベルを構えて、上空を警戒した。

紫色の光を放ちながら、凄まじい爆音を巻き散らかしトリッドエールが迫りくる。

あの異常な速度、もはや飛行形態ですら逃げ切る事は出来ない。

ならば、とシリアはサーベルを両手でしっかりと構えた。

「何が愛してるだ、クソ……っ！！」

こんなもの、愛でも何でもない。

ただの一方的な暴力の、何処に愛情があるというのか。

『アーッハッハッハッハッハッハァッ！！』

ガキィィィンッ！！　凄まじい金属音と共に、レビンフラックスはグググッと地上へ向けて押し出された。

巨大なサーベルがキュルルルルと刃を高速回転させ、激しく火花を散らす。

ミシミシと音を立てながらも、シリアはサーベルを手から離そうとしない。

「持ってくれ……頼むっ！」

シリアの願いも虚しく、サーベルにミシミシとヒビが入っていく。

速度で押し出そうとスロットルを限界まで押し込んでも、トリッドエールの凄まじい出力には敵わない。

やがて、レビンフラックスのサーベルはバキンッ！　とへし折れ、宙へと舞い上がった。

「クッ……っ！！」

衝撃が走ると同時に、僅かにだがトリッドエールも衝撃で弾き飛ばされる。

だが、そのわずかな隙が生じてもシリアはトリッドエールから逃れる事は出来なかった。

再度巨大なサーベルを片手に、凄まじい速度で迫りくる。

『アハハ、最高……最高に幸せだよ私いいいっ！　だって、お姉さんとこんなにも愛し合えてるんだからぁぁぁっ！！』

「クソッ……こんなところで、終われねぇんだよ……っ！！」

僅かな望みをかけて、シリアはライフルを構える。
迫りくるトリッドエールを退けさせようと放つが、宙でパフォーマンスでも披露するかのような動きについていく事ができない。
あまりにも凄まじい速度を叩き出してるせいか、トリッドエールの装甲は剥され続けていた。
何度もライフルを放つが……カチッと、背筋がゾッとするような音が聞こえてきた。

「弾切れっ！？」

その瞬間、目の前に巨大なサーベルを大振りしたトリッドエールの姿が飛び込んだ。
ここまで、なのか――
シリアは目を強く閉じ、咄嗟に顔を伏せた。
バァァンッ！　その時、地上からトリッドエールを一発の弾丸が槍のように貫いていった。

『ウヒヒ……ヒ？　あれ、あれ……？』

「な、なんだ？」

目を開けると、目の前でトリッドエールから煙が噴き出し徐々にバランスを崩し地上へと落ちていた。
何が起こったのか理解できずに、シリアはただ呆然としていた。

『私の妹に、手を出そうとするからよ』

「姉貴、姉貴なのかっ！？」

シリアは地上を確認すると、そこにはスナイパーライフルを構えたブレイアスの姿があった。

「アタシを……守って、くれたのか？」

『今まで、ずっとこうしてあげることが出来なくて……悔しかった。だからね、今度は絶対に貴方を守るって決めていたの。……だからね、もっと私を頼りにしていいのよ？』

「姉貴……悪い、助かった。　あ、ありがとな……」

今頃ラティアの援護がなければ、シリアのレビンフラックスは無事では済まなかっただろう。
下手をすれば、命を落としていた危険性も十分にあり得た。

『……アハハ、アッハッハッハッハッ！　お姉さん、お姉さん……ねぇ、どうして……どうして、私を愛してくれないの？』

「そんなもん、自分で考えてみろよ。　好きでもねぇ奴に殺意全開で愛を語られても、それはただの恐怖でしかねぇだろうがっ！」

『いらない、私いらない。　私を愛してくれない人、嫌い……私以外に愛されてるお姉さんなんて、大嫌い……』

ブォンッ！　トリッドエールから再び、紫色の光が噴き出す。

ライフルの一撃を受けながらも、まだ戦えるというのか。

『シリア、使ってっ！！』

ブレイアスが空高く舞い上がったかと思うと、接近用に所持されていた小型近接武装であるスラッシュナイフを渡された。
あくまでも臨時用であり心許無い武装ではあるが、何も持たないよりかは遥かにマシだ。
モニターに映されたフィミアは、先程のように笑っていない。
目を力強く開き、口元だけを少しだけ釣り上げ、戯言のように何かを呟いていた。

『こんなに、こんなにいっぱい愛してあげてるのに、どうして愛してくれないの？　ねぇ、私の事好きだよね？
お姉さん……好きだよね、好きと言ってよ。　ねぇ、ねぇねぇ……
お姉さん、お姉さん……』

先程までとは違い、フィミアは何処か冷静さを取り戻していた。
それは今まで愛がどうこうと叫んでいたフィミアとは違う。
通信機から見えるその瞳は、何処か悲しさに包まれており……寂しいと訴えていた。
だが、シリアはフィミアを好きになる事は出来ない。
受け入れる事が、できるはずがなかった。

「……アンタなんか、大嫌いだっ！」

その時、フィミアの口が気持ち悪いぐらいニヤリと釣り上った。
フィミアは何故、『愛』という感情に拘り続けるのだろうか。
彼女の行動は何処か矛盾している。
戦う事で愛を求めるが、当然ながらそんな行為で成立する愛がある

はずがない。
ならば、彼女が口にする『愛』とは――

『アハハ、アッハッハッハッハッハァッ！　アーーッハッハッハッハッハッハァッ！！
やっぱり、やっぱり誰も私を愛してくれなぁぁいっ！！　私は誰にも気づかれずに、誰にも愛されなぁぁぁいっ！！
でもいいの、それでいいのぉぉっ！！　私を見てくれないのなら、愛してくれないのならぁぁぁ……無理にでも、私に気づかせて……愛してあげるだけなんだからぁぁぁぁっ！！』

トリッドエールは再び空へと舞い上がった。
先程よりスピードは落ちているものの、それでも驚異の速度を保っているのは事実だ。
トリッドエールは、死ぬまでシリアを追い続けるだろう。
どちらかが破壊されない限り、戦いが終わる事はない。

「姉貴っ！！」

『ええ、わかっているわっ！』

ブレイアスは空中で留まり、スナイパーライフルをレールガンへと換装させる。
シリアに迫りくるトリッドエールに対して、一発だけ放って見せた。
バチィンッ！　電撃が走ると共に、弾丸がトリッドエールの右腕を弾き飛ばす。
巨大なサーベルを握りしめたまま、右腕は地上へと向けて落下していく。
だが、トリッドエールは自ら腕を拾い上げて強引に巨大なサーベルを回収する。

『離れなさいっ！！』

もう一発レールガンを放つと、今度は右腕を盾代わりにされ直撃を免れた。
二丁銃を構え撃ち続けるものの、ブレイアスは空中に留まる事が出来ずに徐々に地上へと落下していく。

『シリア、逃げてっ！！』

まだトリッドエールが動ける、いくらナイフを渡したからと言えどとてもじゃないが今のレビンフラックスでどうにかなる相手ではない。
ラティアの悲痛の叫びが、コックピット内に飛び込んできた。

「……姉貴、アタシはこいつを止めなきゃならねぇ。　よくわかんねぇけどさ、アイツ……本当は寂しいんだと思うんだ」

『何を言っているのよ？　貴方は命を狙われているのよ、早く逃げてっ！』

「ちょっとだけ、似てると思ってさ。　アイツが語る『愛』と、アタシが『姉』を恨んでいた時、がさ」

フィミアは叫んでいた。
誰にも愛されない、誰も気づいてくれない、と。
それはかつてシリアが、姉が助けに来なかった事を恨んでいた時と重なった。
どうして助けに来てくれなかったのか。
絶対に助けてくれると約束していたのに。

しかし、実際姉は自分をちゃんと助けてくれていたのだ。
なのにシリアは一方的に姉の事を嫌い、徐々にその感情は恨みに変化していった。
その感情の変化と、フィミアの語る『愛』が……何となくだが、重なってしまったのだ。

トリッドエールは凄まじい速度で近づいてくる。
巨大なサーベルを片手に、狂った笑みを浮かべながら。

『ウヒヒ、お姉さんお姉さんお姉さん……愛して愛して愛して愛して愛して愛してぇぇぇっ！！！　私の事を、愛してよぉぉぉっ！！！』

「アタシはアンタの事、嫌いだけどさ。　同情だけはしてやる……だから、さ」

レビンフラックスは片手に持っていたナイフを、強く握りしめた。

「ちょっとだけ、痛みを受け止めてやる。　その代わり、アンタも――」

トリッドエールがサーベルを大振りにした瞬間、レビンフラックスもナイフを構える。
その場から一歩も動かずに、ただじっとしたまま――

「痛みを知れぇぇぇぇっ！！！」

バシュゥゥンッ！！　金属音が砕ける音が、響き渡る。
レビンフラックスの左腕が、綺麗に切断されていた。
だが、同時にトリッドエールの頭部にレビンフラックスのナイフが刺さる。

頭部からは火花が散り、ギギギと鈍い音が響き渡った。

『アアアアアアアっ！！！　見えない、見えないよぉぉぉっ！！！　どこ、何処なの……何処なのお姉さぁぁぁぁんっ！！！』

「チッ、相変わらず耳が痛くなる声だしやがって……こっちだっていてぇんだよっ！」

シリアはトリッドエールを拘束しようと、後ろから押さえつけようとする。
その時、下からスナイパーライフルを構えるブレイアスの姿が見えた。

「撃つな、姉貴っ！　アタシに任せてくれっ！」

『どうするつもりなのっ！？』

「ちょっと、目ぇ覚まさせてやるだけさ」

シリアはナイフでトリッドエールが持つ大型サーベルを強引に突き放す。
すると無理やり正面を向かせて、トリッドエールとレビンフラックスは対面した。
その時、レビンフラックスの胸部からハッチが開かれた。

『な、何してるのシリアっ！？』

「いいんだ、アタシの好きにさせてくれっ！」

『ダメよ、危ないわ。　ここは戦場のど真ん中なのよ、そんな無茶

は――』

プツンッ――

姉との通信を強引に絶ち、シリアは大きく深呼吸をした。

「悪い、姉貴……」

一言だけ姉に謝ると、シリアはコックピットから身を乗り出した。

「出てこいよ……アンタの根性、叩きなおしてやるからっ！！」

シリアはトリッドエールへ向けて、力強くそう叫んだ。

歪んだ感情　？

少女は、生まれた時から心臓に重い病気を抱えていた。
どんなに長生きしても、１０年が限界。
医者から告げられた少女の寿命だった。

今の医学ではどうする事も出来ず、彼女を救う術はない。
自分はたった１０年しか生きれない体。
その事実を知ったのは９歳の時だ。
既に、いつ死んでもおかしくない年齢に達している。
少女は、明日を迎える事ができないかもしれないし、もしかすると
医者が告げた以上に長生きが出来るかもしれない。

いつ死んでもおかしくはない、明日生きているかどうかもわからない体。
毎日毎日、死ぬかもしれないという恐怖に襲われる日々は幼き少女にはあまりにも過酷すぎた。
父親はそれを直視できないせいか、娘と顔を合わせなくなってしまっていた。
だけど母親は違う、毎日毎日微笑んでくれて、少しでも長く一緒にいてくれた。

「ママ、どうしてパパは私の事を避けるの？」

「何言ってるのよフィミア、パパは貴方を避けていないわ。　パパは仕事が忙しくて、逢いたくても貴方に顔を合わせることが出来ないのよ」

「ウソツキ、パパなんてキライだから。　私にはママがいればいい、ママ、ママ。　ママ、大好きだからっ！」

「ダメよ、今度そんな事言ったら愛してあげないわよ？」

「イヤ、それはイヤっ！　愛して、ねぇ愛してよ？」

「良い子ね、フィミア。　私の愛しい愛しいフィミア……ああ、フィミア――」

母親の弱々しい腕は、フィミアを優しく抱きかかえる。
とても暖かくて心地がいい……だけど、寂しさも感じた。
母親は笑っていない、涙を流していたから。
どんなに手を尽くしても『死』という運命は簡単に覆せない。
フィミアや母親がいくら愛を確かめ合おうと、時間は残酷にも過ぎていく。
何時までこうしていることが出来るのか、何時まで母親の愛を感じてられるのか。

そんなある日、突然父親が慌しく部屋へと飛び込んできた。
病院の中を全力で走りきったのだろう、呼吸が荒々しく、汗もびっしょりかいている。
いつもビシッと決めているスーツもよれよれで、メガネもだらしなくずらしながら父親は笑っていた。

「喜べフィミアっ！　お前の病気は治るぞっ！！」

「フィミアが治る……？　貴方、それは本当なの？」

治る、病気が……治る？

フィミアは突然の父親の言葉に驚きを隠せなかったが、それ以上に母親の方が驚いていた。

「ああ、私に任せてくれっ！　医者にも話は通してあるんだ、すぐにでも手術を受けてくれっ！」

「でも、そんな治療受けられるほどお金はないのでしょう？」

「私の研究費用があれば何とかなるだろう……これで、フィミアは助かるはずだ」

「貴方――」

父親はＥ．Ｂ．Ｂに対抗する為のＨＡを開発する機関の研究員だった。

研究に追われる毎日で、家族に会えなかったというのは嘘ではない。だが、僅かな空き時間を利用して娘が助かる方法をずっと探してきていたのだろう。

「私、普通の女の子になれるの？」

「ああ、なれるともっ！　もうお前は苦しまなくていいんだ……学校にだって通えるようになるぞ、友達もたくさんできるぞっ！」

「本当に？　パパ、大好きっ！！」

病室を一度も出たことがないフィミアは、学校というものに憧れていた。

毎日友達と一緒に勉強をしたり遊んだり、時には喧嘩したり、辛い事があったら励まし合ったり――

しかし、フィミアにはそれが叶う事がない。
いつも心の隅に留めておいて、今は生きる事だけを考える。
あんな辛い毎日が……なくなるというのだ。
そんな夢のような治療を、受けない理由がない。
フィミアは勿論の事、母親も自分の事のように喜んでくれた。

手術はその日のうちに始められ、無事に成功した。
後は数日様子を見て問題がないとされれば、無事退院することが出来る。
そのはずだったの、だが――

「何故だ……何故、娘がそんな目に逢わなければならないんだっ！！」

「貴方、落ち着いてっ！」

「私はフィミアの、フィミアの為に……クソッ！　どうしてだ、どうしてだぁぁぁっ！！」

手術が終わった数日後、そこには両親が笑っている姿はなかった。
その日を境に父親と母親は毎日のようにケンカをし続ける。
何故だろう、フィミアの病気は完治した。
完治したのに、何故ケンカをしているのか理解できなかった。

「やっぱり、パパはキライ。　ママのことをいじめる」

「ダメよ、パパをそんな風に言わないで。　パパは疲れているのよ、どうかわかってあげて」

「じゃあどうしてママに酷い事を言うの？　この前だって、ママは

パパに殴られていた。　ねぇ、どうしてなの――」

ドクンッ

突如、フィミアの鼓動が高まった。

胸がざわつくような、奇妙な感覚が走る。

傷口が痛むのかと思えば、不思議と痛みを感じない。

フィミアは無意識のうちに、自ら胸に巻かれていた包帯を解いていく。

「やめなさい、やめなさいフィミアっ！」

母親は突如、鬼のような形相でフィミアの手首を握りしめた。

「イタイ、ママ……痛いっ！」

「いきなりどうしたというの？　もし傷口が開いちゃったら大変なのよ？」

「ママ、ひどい……どうして、ひどいことするの？」

「……ごめんね、フィミア。　そんな乱暴するつもりはなかったの」

母親は困惑の表情を浮かべてそう告げる。

ウソだ、今まであんな怖い表情……見せたことがなかった。

ドクンッ――

再び、フィミアにあの奇妙な感覚が襲い掛かる。

自分の鼓動が、徐々に高まっていくのを感じていく。

「ウヒヒ……イヒヒヒ――」

「フィミア？」

「アハハハ……アッハッハッハッハッハッハッハッハァッ！！」

「フィミア、どうしたのっ！？」

突然フィミアは、狂ったかのように甲高い声で笑い始めた。
母親の表情は、真っ青だった。

「ママ、ねぇママッ！　いつもみたいに、笑おうよ。笑えば、嫌な事もいっぱいいーっぱい、忘れられるんだよ？
アハハ、アッハッハッハッハッハッハッハッハッハァッ！！！」

「だ、誰か……誰かぁぁぁっ！！！」

母親の悲痛の叫びが、病院中に響き渡った。
だけど、フィミアは笑うことを止めない。
看護師や医者が駆けつけようと、母親がショックで倒れようとも、そんな事お構いなしに笑い続ける。
フィミアの心は、壊れてしまった。
それからも彼女は意味もなく笑い、時には奇声をあげては薬で眠らされる毎日が続き……いつしか母親は、病室から姿を消した。

「アハハ、だぁれもいない。　ママ、どうして私から逃げるの？
前みたいに、私を愛してよ……ねぇ、ママ」

真っ暗な病室で、フィミアは一人呟いた。
胸がざわつく、また鼓動が高鳴っている。
今度は邪魔者はいないと、フィミアは一人で包帯を解いた。

包帯の下を確認すると、そこには思わず目を背けたくなるような光景が広がっている。
傷口を中心に、体の一部が異形へと変化していた。
紫色を帯びた奇妙な肌色と、爬虫類のようにツルツルとした人間ではない肌触り。
フィミアは気づいた、母親が自分の前から姿を消した理由に。

「そっか、ママは気づいていないんだ。　私が私である事に……だから、私から……逃げたんだ」

自らの両手を見つめながら、フィミアは呟く。
そして、ニヤリと口元を釣り上げた。

「ウヒヒ……イヒヒヒィ……アハハ、アッハッハッハァッ！　アーッハッハッハッハッハッハァッ！！！」

孤独、悲しみ、恐怖。
それすらを超越した彼女の笑いは、病院に痛みを告げるかのように響き続けた。

コックピットに身を乗り出し、シリアは力強く叫んだ。
だが、トリッドエールのコックピットは開かない。

シリアは銃を構えて、トリッドエールへと飛び移った。
一歩でも間違えれば命はなかったが、不思議と恐怖は感じていない。
バァンッ！　コックピットのハッチに向けて、シリアは数発銃を撃ち込んだ。

「こんの……っ！！」

ギギギ、と力強くハッチを引くと徐々にハッチが開かれていく。

「ママ、ママァッ！！　何処なの、何処にいるのぉぉぉっ！？」

ハッチを開けた途端、思わず耳を防ぎたくなるほどの奇声が飛び込んだ。

「おい、テメェ……アタシが見えねぇのかっ！？」

「……ママ、ママなの？」

「誰がテメェのママだ？　あんまりふざけてると撃つぞっ！」

シリアに気づくと、急にピタリと奇声が止んだ。
フィミアの目は赤く充血しており、ポロポロと涙が流されている。
見るんじゃなかった……と、シリアは少しだけ後悔した。

「お姉さん、お姉さん？」

「お姉さんじゃねぇ、アタシにはシリアって名前があんだよ」

「シリ、ア？　シリアは、ママなの？」

「だからちげえっつってんのに……ま、いいや。　アンタさ、寂しいんじゃないか？」

「寂しい？　私が、寂しい？」

フィミアは目をキョトンとさせて、戯言のように呟く。
シリアのナイフを込めたパンチが効いたのか、驚くほどフィミアは冷静だ。

「アンタの『愛』は間違ってんだよ……あんなもの、ただの暴力でしかない。
寂しいならちゃんと寂しいと言う、友達になりたいなら友達になりたいとちゃんと言う、そんな事もできねぇガキなのかよアンタは」

「ウヒヒ、お姉さん……私の事を愛してくれない、嫌いなんだね。
だから、私にヒドイ事をするんだ」

「ヒドイことだと？　テメェは散々、無意味に人の命を奪ってきた……その事を、何も感じねぇのかっ！？」

シリアはフィミアの胸倉を掴み、怒鳴った。

「他人に愛されたいのなら、まずは痛みを知れっ！　アンタの愛で一体何人もの人間が犠牲になったんだ？　一体どれだけの人が、アンタにヒドイことされたと思ってんだよっ！！」

「痛み？　痛み、痛み痛み痛み……ウヒヒ――」

フィミアの口元が、再び釣り上った途端――ガバッとシリアの手が口を押えた。

「笑うところじゃねぇだろうが……何がおかしいんだ、言ってみろ？　場合によっては、アンタを撃ち殺してやるっ！」

口をモゴモゴとさせ何かを必死で訴えているが、シリアは決して手を放そうとしない。

手足をジタバタとさせ、爪でガリガリと腕を引っかかれたシリアは、痛みでつい手を放してしまった。

「イヒヒ、お姉さんにはわからない。　私の痛み、私の悲しみ、私の想いなんてっ！　だから、愛してくれない……ひどいことばかり、するぅぅっ！！」

「だから、わかってやるっつってんだよっ！！」

シリアが叫んだ途端、フィミアは表情をハッとさせた。

「お前の痛み、知ってやるからアタシに話せ。　そしたら、好きになってやる。　アンタの愛を受け止めてやる。

その代わり、アンタはアヴェンジャーから抜けろ。　もう二度とこんな悪さ、すんじゃねぇぞ」

「……好き？　お姉さん、私を愛してくれるの？」

「ああそうだ、アンタを愛してやるよっ！　だからアタシと共に来い……戦いが全部終わったら、ちゃんと痛みを受け止めてやるからさ」

好きになってくれる。

愛してくれる。

今までどんな人にも、フィミアの愛は拒絶され続けてきたというのに。
シリアはそれを、受け止めて見せた。

「おねえ、さん……お姉さんお姉さん……シリア、シリアシリア……ママ？」

「……おい、どうした」

突如、フィミアは目を見開いたまま黙り込んだ。

「ママ、じゃない。　ママじゃないと、イヤ――」

「何――――」

バァンッ！！　シリアの右肩を、一発の弾丸が突き抜ける。
血が飛び散り、シリアは咄嗟に傷口を抑えた。

「ウヒヒ……死んじゃえ、皆死んじゃえぇぇぇっ！！！」

「クソッ、ダメだったかっ！」

あと少し……あと少しだと思ったのに。
シリアはやむを得ずトリッドエールのコックピットから抜け出し、レビンフラックスへと飛び移った。

『アッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！』

コックピットに戻ると同時に、フィミアの奇声が耳へと飛び込んでくる。

ガァンッ！　と、コックピットが激しく揺れると、強引に拘束を解いたトリッドエールが巨大なサーベルを片手に迫って来ていた。

「もう、やめろっ！！　こんな戦い続けても、テメェの心は癒えないだろうがぁぁっ！！」

バシュゥンッ！！　その時、地上からトリッドエールに向けて弾丸が槍のように突き抜けて行った。
トリッドエールの左腕が破壊され、サーベルと共に落下していった。

「姉貴かっ！？」

『何て無茶をするのよ……っ！』

「待ってくれ……もう少し、もう少しなんだっ！」

『……どうなの、あの子は？』

ラティアはシリアをそれ以上問い詰めるような真似はしなかった。
通信機から会話が聞こえていたのだろう、本来ならトリッドエールを仕留める事ができたはずだ。
それをわざわざ急所を外し、腕だけを撃ちぬいたのだから。

『ウヒヒヒ……アハハハ、アッハッハッハッハッハッハッハァッ！！
ママはもう、私を愛してくれない。　最初から壊れていた私は、いらない子……欠陥のある子供は、いらなかったの。
私のせいで、パパとママは不幸になった。　私は、私はもう――アッハッハッハッハッハッハッハッハァッ！！』

「クッ……あの状態を落ち着かせるにはどうすりゃ――」

バリッ！　突如、何かが破ける音がした。
何かと思いモニターに目を向けると、そこには真っ赤なドレスを自ら破いたフィミアの姿があった。
服の下から露出されたのは、人の肌ではない。
胸の部分はE．B．B化が進行しており、もはや人間の面影はほとんど残っていない。

『お姉さん……シリ、ア……見える？』

「……何をする気だ？」

『よかった、見える……よね。　私を……私を、見て』

急に大人しくなったフィミアは、突如俯いたままボソボソと呟く。
右手にはナイフが握られていた。
その右手をゆっくりと胸に突き当てて、フィミアは笑う。

「おい、やめろ……おいっ！」

右手に力が込められると、ブシュッとナイフが力強く押し込まれた。
紫色の血がドクドクと流れながら、フィミアはナイフにさらに力を込めて、自らの胸を切り開いていく。
両手で傷口をグググと開くと、そこには真っ赤な鉱石のようなものが露出した。
……コアだ。　あれはE．B．Bのコアと全く同じものだ。

『アハハ、お姉さん……よぉーく見ててね……私の最後を、見届けてね。　私の事、絶対に……忘れさせない、から』

「……ふざけんなよ、逃げるのかっ！？　テメェはまだまだ子供じゃねぇか、アタシと大差ねぇんだろっ！？　なのに、なのにテメェはっ！！」

ブシュッ――　コアにナイフが、突き刺さった。
真っ赤な鮮血が噴き出す、彼女がまだ人間であったことを証明するかのように。

『アハハハハ、アッハッハッハッハッハァッ！　アーーッハッハッハッハッハッハッハッハァッ！！！』

フィミアは何度も突き刺す、生命線であるコアを。
自ら壊れてしまった心を、その手で破壊するかのように。
真っ赤なドレスは血に染められていく。
淡い綺麗な赤色は、黒のような茶色じみた色へと変化する。
目を背けたかった、今すぐにでも目と耳を塞いでこの場から逃げ出したかった。

だけど、シリアは見届けた。
フィミアの最後を、無力な自分を恨みながら。
やがて、フィミアの笑いと動作が同時に止んだ。
フィミアはぐったりと血を流したまま、息を荒くガタンッと倒れ行く。

『おねえ、さん……シリア……愛してくれて、ありがとう』

「……バカヤロウが」

だったら、どうしてこんな事をするんだ。
感謝しているなら、生きて恩を返せ。

あの時、何故一緒に来てくれなかったのだ。

『最後に愛されて、嬉しかった。　だから、お姉さんは……ちゃんといい人みつけて、いっぱいいっぱい恋愛をして……幸せになってね』

「……悪いね、アタシはそんな柄じゃねーさ」

『ウヒヒ……じゃあね、お姉さん――』

プツンッ――

そこで、フィミアとの通信は途絶えた。

ズガァァァンッ！！　トリッドエールが、突如大きな爆発を引き起こした。

コックピットから激しい揺れが伝わるが、シリアはピクリとも動かない。

「ったく、後味悪いったらありゃしないよ……アンタの痛み、もっと早く気づいてあげるべきだった」

今は亡きフィミアに対して、シリアは静かに呟く。

「……確かにアヴェンジャーの奴らが、アンタみたいな不幸な人間ばかりだと思うと同情するよ。

でもさ……それでもアタシは、アンタ達が正しいとは思わない。

悪いけど……アタシは、アンタ達を必ず止めてみせるよ」

シリアは両手を合わせて、空に祈った。

フリーアイゼンのブリッジルーム。
艦長は深刻そうな表情でモニターを睨んでいた。

「状況は？」

「敵部隊のおよそ半数は撃墜しました。　ですが、我が部隊も負傷者が多数です。　このまま増援が来てしまえば押されてしまう可能性も――」

「おい、敵が来たぞっ！」

ヤヨイが戦況を報告している中、ライルが叫んだ。
敵部隊がフリーアイゼンの下方から攻撃を仕掛けて来ていた。

「艦を旋回させろ、対空砲で撃ち落せっ！」

「了解ですっ！」

ブリッジルームが激しく揺れながらも、リューテとライルの活躍により敵ＨＡの襲撃からは何とか免れた。

「何としてでも戦線を維持させろ、ここでアヴェンジャーを通してしまえば本部は終わりだと思えっ！！」

「待ってください……前方に、敵増援を確認……これは……戦艦？」

「戦艦、だと？」

艦長は思わずモニターを凝視した。

すると、その先には更に数を増したレブルペインの数々と、空に浮かぶ巨大な真っ黒な戦艦が姿を現していた。

フリーアイゼンよりも遥かに大きいサイズだ、恐らくソルセブンに匹敵するだろう。

「いよいよ本部隊の登場だということか……各機に通達しろ、狙いはあの戦艦だっ！」

「了解しました。　パイロット各位へ通達、敵本部隊の到達を確認しました。　狙いは黒い艦です、戦える者は至急迎撃へ向かってください。

補給が必要な者は速やかに艦にまで戻ってください。　繰り返します――」

「我々はあの艦を迎え撃つぞ、主砲の準備急げっ！」

迫りくる巨大な黒艦を指さし、艦長は力強く叫んだ。

「増援部隊の中に新型ＨＡを確認……これは、Ｇ３……？」

「Ｇ３、だと？　バカな、破壊したはずだっ！」

「いえ、ですがこれは――」

「……クッ、奴らの事だ……残ったデータを元に再現したのかもし

れん。　何としてでも、奴を食い止めなければ――」

ブリッジルーム内に緊張感が走る。
突如現れたアヴェンジャーの戦艦。
かつてι・ブレードを敗北まで追い込んだ機体の存在。
やはり、艦長の予想通り……次々とアヴェンジャーは未知なる戦力を披露していった。
戦いはまだ終わらない。
アヴェンジャー本隊の到達により、その戦火は更に激化していくのだった――

第18話　『G』の再来　？

アヴェンジャーの拠点はもぬけの殻だった。
メシア本部を攻め落とす為、全戦力を惜しむことなく費やした。
拠点を守る必要はない、本部を奪い取ればそこが新たな拠点となるのだから。
事実上、破棄されたこの拠点には誰一人アヴェンジャーの人間は残っていない。
たった一人を、除いて。

拠点の地下深くにある監獄、アヴェンジャーの人間でもこの部屋の存在を知る者は少ない。
光もなく闇に支配された部屋は、僅かなランプで灯されているだけ。
食料も水もそこにはない、そんな場所に閉じ込められてから何時間程経過したのだろうか。
健三は、ジエンスの手によってこの監獄へと閉じ込められた。
今までジエンスに利用されていたことは承知の上だった。
しかし、あの男は健三の想像以上だったのだ。
ジエンスは本気で世界の指導者として立ち上がる為に、絶対的な力を手にした。
アッシュベルと対抗する為に用意した強力な兵器の数々は、当然ながら対メシアを想定しており……そう簡単に突破されるような代物ではない。
急いであの男を止めなければならない……だが、体は縄で拘束されており監獄も外から鍵で閉ざされている。
仮にこの監獄から脱出できたとしても、健三にはジエンスを止める術など存在しなかった。

ギギギギギギギ
突如、監獄の重い扉が開かれる。
作戦は当に始まっているはず……今更誰がこの監獄に？

「ジエンス……か？」

視界がぼやけて、侵入してきた人物の顔がはっきりと見えない。
だが、白衣を纏った姿を目にすると……健三は途端に目を強く見開いた。

「ククク……ついに、見つけたぞ……健三君」

「貴様っ！」

監獄に突如姿を現した男。
それは、かの有名な天才科学者……『アッシュベル・ランダー』だった。

「君の後を追うのは中々大変だったよ、よくもまぁ私をここまで退けてきたものだ。
メシアにいながら、あのようなくだらない組織に身を売り……愉快な玩具まで用意したそうじゃないか」

「アッシュベル……貴様さえ、貴様さえいなければ明菜は――」

健三は、妻の名を呟きながらアッシュベルを睨み付けた。
あの男のせいで、未乃　明菜は――

「おっと、誤解しないでくれたまえ。　私は君を助けに来てあげたのだよ、いわば君は私の命の恩人だ。

何、あのような男の考えそうなことだ。　いずれ、こうなるとは分かりきっていた事だろう？　君もわかっていたのではないかね？」

「黙れ、貴様のせいでアヴェンジャーのような組織が生まれ、このような暴動にまで発展したんだっ！
貴様は何を企む……エターナルブライトで、何を成し遂げようと言うのだっ！？」

「ククク、誤解しないでもらいたいものだな……健三君」

アッシュベルはニヤリと笑みを浮かべ、健三に告げた。

「メシアの連中は、どうしても私を悪者に仕立て上げたいらしい。
奴らのおかげで、私は身に覚えのない事で人から恨まれるようになってしまったのだよ」

「何が言いたい……？」

「うむ、つまり人体実験を進んで行っていたのはメシアの連中の方だという事だ。　奴らはエターナルブライトの未知なる力を研究すべく、人をベースにした実験を繰り返し続けた。
彼らの目的は実にシンプルだ、エターナルブライトによって『究極の人類』を作り出そうと計画していたのだよ」

「究極の人類だと？」

「どんな病気にも打ち勝ち、どんな怪我も一瞬で治す。鋼の肉体を手にし、賢者のような英知を手にする。
というのがコンセプトだが……ま、簡単に言えば不老不死になりたかったのだろうな。

勿論、メシア全体がそんな愚か者ばかりではない。　あくまでも一部の阿呆が人体実験を繰り返しているだけだ」

アッシュベルの話は、思わず耳を疑いたくなるような事実ばかりだった。

だが、あの男の話は信用できない。

全てが真実だとは限らないのだ。

少なくとも、アッシュベルが『人体実験』を行っていたのは『事実』なのだから。

「上層部の奴らは何も知らないワケではない、その事実を知りながらも奴らは見て見ぬフリをしていたのだよ。　ま、中には本当何も知らない無能も混ざっているがね。

ジエンスという男もその事実を知っていたのだろう……メシアがいかにくだらない連中の集まりかというのをね」

「バカな……本当にメシアが率先して人体実験を……？」

「くだらんよ、何度やっても結果は同じだというのに懲りずに何度も何度も人をE．B．Bへと変化させる……余程、人類を進化へと導きたいようだな。

ま、そもそもな話……彼らは私の行ってきたことをサルのように真似てきたまでだ。　そういう意味でいうと、私が『キッカケ』になったという君の言い分は……正しいだろうがね」

「……その事実を私に話してどうする。　貴様は『悪』ではない、そう主張するというのか？」

「悪？　ククク、君は昔から本当に面白い子だよ。　物事を全て善と悪で考える……ふむ、実に君らしいと言えば君らしいだろう。

だが、私には善も悪も存在しない。　私は私なのだよ、例え世間から恨まれようが大犯罪者として扱われようが、メシアの連中が私を陥れようと企んだとしても……どうでもいい、の一言に尽きる」

アッシュベルは、いつものような淡々とした口調でそう告げた。

「それはそうと、どうやらフリーアイゼンが君達の部隊と交戦中らしい」

「何だと……まさか、息子が――」

「今頃メシアでは、君の作った玩具で息子が必死でメシアを守っているだろう。　あのような、くだらない連中の為に……命を懸けて戦うか。
実に愚かしいな、親子揃って……君の言う『悪』の手助けをしてしまっているのだからな」

「……息子を侮辱するなっ！　あの子は自分の信じる『正義』に従い、その信念を貫こうとしているだけだ。　それの何が悪いっ！？」

「敵の身でありながら息子を信じるか、やはり君達は実に面白い親子だよ。　おっと、こうしてのんびりしている時間はないな……」

健三の額に、銃が突き付けられた。
縄で拘束された状態では、この男から逃れる事は出来ない。
抵抗もせずに、健三はただアッシュベルを睨み付けていた。

「長年私から逃れ続けてきたようだが、それも今日で終わりだ……来てもらうぞ、未乃　健三」

やむを得ないか。
健三は抵抗せずに、大人しくアッシュベルの指示に従った。

アヴェンジャーの部隊は、その勢いが衰えることなく次々とその数を増やしていく。
フリーアイゼンとスカイウィッシュ部隊で、何とか戦線を維持させていたものの、徐々に数で押されていった。
最前線でι・ブレードが必死でアヴェンジャーのＨＡを切り裂いていく。
敵部隊が所持するロングレンジキャノンは、ι・ブレードの活躍もあってすぐに破壊された。
だが、それでも劣勢である事には変わりはない。

「クソッ……何て数なんだよ、あいつらどれだけの戦力を抱えていたんだ？」

『増援が欲しいところだが、今の本部の状況では厳しいだろうな』

「俺達で何とかするしかないのか……」

ゼノスと通信を交えている間にも、敵機の弾丸の嵐はι・ブレードへと襲い掛かる。
敵の激しい猛攻が続き、危険察知が間に合わない程の凄まじさだっ

た。

『晶、あれを見ろ』

「あれは……戦艦っ！？」

モニターに映りこんだのは、ソルセブン程の大きさを誇る真っ黒な戦艦だった。

恐らくメシアの物ではない……アヴェンジャーが保有する戦艦だろう。

戦艦からは次々とレブルペインやウィッシュといったＨＡが出撃していく。

晶はその光景を目の当たりにして、顔が青ざめていた。

『……Ｇ３』

「Ｇ３？　何言ってるんだよ？」

『晶、圧縮砲を使う。　援護を頼むぞ』

「あ、ああ……」

晶はゼノフラムの姿を確認すると、頷いた。

ゼノスは確かに言っていた、『Ｇ３』と。

当時に記憶はうろ覚えではあるが、『Ｇ３』はゼノスが破壊したはずだ。

モニターに映るアヴェンジャーのＨＡ軍に交えて、一つだけ目立つ巨体なＨＡが聳え立っていた。

晶が確認しようとした途端――

『圧縮砲、撃つぞっ！』

ズガァァァァンッ！！　ゼノスの掛け声と同時に、ゼノフラムから真っ赤な光が地面を抉り一直線に突き進んでいく。
あっという間に多くのＨＡが圧縮砲によって吹き飛ばされ、辺り一面が砂煙で包まれていく。
煙が徐々に晴れていく中、圧縮砲の射程上に……無傷で立ちはだかるＨＡの姿があった。
いつか見た何十枚にも重ねられた分厚い装甲……どこかで見た覚えがある。

「……Ｇ３、なのか？」

しかし、細部は若干異なっている。
緑色から紫色に塗り替えられた配色に頭部に埋め込まれている赤い鉱石……まるでＥ．Ｂ．Ｂのコアのようにも見えた。
突如、巨大なＨＡの額が赤く輝き始めた。
光は徐々に強まっていき、額のコアは眩しい程輝き出す――

『あれは、圧縮砲っ！？』

「なっ――」

ズガァァァァンッ！！
ゼノスが叫んだ途端、巨大なＨＡから真っ赤な光が槍の如く、突き進んでいく。
地面を抉り草木を焼き尽くし、敵味方機もろとも容赦なく吹き飛ばされていった。

「な、なんだ……どういう事だよ？」

晶は思わず呆然としてしまった。
ゼノフラムがやっとの思いで積み込んだ『圧縮砲』
それをいとも簡単に、敵のＨＡが放って見せたのだ。
あの技術はフラム博士が何年も時間をかけて完成させたはずなのに。

「ゼノス、ゼノスっ！？　ど、何処だよ……何処行ったんだっ！？」

気が付いたら、ゼノフラムの姿がどこにも見当たらなかった。
あの光に巻き込まれた後……突如姿を消してしまったというのか。

『ゼノフラム、テメェはもう時代遅れの古い機体だ。　悪いがテメェらに、この『Ｇ４』を打ち破る事はできねぇ』

「お前は――」

忘れるはずがない。
ι・ブレードのコックピットから聞こえてきた声は、あの『ガジェロス』の声だった。
やはり、あれは『Ｇ３』……いや、彼は『Ｇ４』と言っていた。
どちらにせよ、あの機体が『Ｇ３』の復元である事は間違いなかった。

『ι・ブレード……今日はテメェを生け捕りにする気はねぇ。　悪いがその機体もろとも、死んでもらうぞ……クソガキ』

「……誰が、誰がお前なんかにっ！」

晶はムラクモを抜刀し、Ｇ４へと向けた。

『下がれ、晶っ！』

同時に、ゼノスの声が飛び込むと――ガァァンッ！！　と、激しく金属音が鳴り響く。
上空からブーストハンマーと共に、ゼノフラムが突進してきたのだ。
だが、Ｇ４は平然とブーストハンマーの一撃を受け止めて見せた。
そして、背中から無数のサマールプラントが飛び出す。
触手のような気味の悪い兵器は、相変わらず健在のようだ。
無数のサマールプラントは以前よりもスピードが増している。
周りの味方機を容赦なく破壊し、ゼノフラムやｉ・ブレードにもサマールプラントは襲い掛かってきた。

「クッ……また、こんなものをっ！！」

危険察知を駆使し、晶はムラクモでサマールプラントを切り裂く。
だが、サマールプラントは次から次へと襲い掛かってきた。
晶は振り切ろうと全力で空を駆け廻り、サマールプラントを凌いだ。
そこで地上のゼノフラムがサマールプラントに捕えられている姿が目に飛び込んだ。

「ゼノス……今、助けるっ！！」

ムラクモを構え、晶はｉ・ブレードを急降下させる。
ググッ、と強いＧに襲われながらも必死で耐え抜いた。

「うおおおぉぉっ！！」

ガキィィンッ！！
ゼノフラムを拘束していたサマールプラント共に、晶はＧ４を切り裂いた。

だが、Ｇ４は表面上が軽く傷ついただけだ。

『目障りだ、消えろっ！』

Ｇ４は巨大な右手をι・ブレードへと向けた。
指が５本砲台のように開かれている。
晶が身構えようとすると、危険察知が発動した。
その映像には、あの指の砲台から真っ赤な槍のようなものがまとめて突き出される映像が打ち出された。
サマールプラント……のように見えるが、先程のよりも遥かに太く鋭い槍のように見えた。
ブラックホークを構え、晶は襲い掛かってくるサマールプラントを撃ち落そうとする。

バァンッ！！　ブラックホークの弾丸が、サーマルプラントの先端をグニャリと曲がらせた。
だが、サマールプラントの勢いは止まることなく晶はやむを得ず再び空へと逃げる。
残りのサマールプラントに囲まれると晶は思い切りムラクモを振り回した。
ガガガァンッ！　と金属音が響いたが、サマールプラントが壊れる事はない。

「何だよこれ……どうすりゃいいんだっ！？」

ガァァンッ！！　すると、晶の目の前にブーストハンマーが通り過ぎた。
５本のサマールプラントがグニャリと変形させられると、蛇のように後ずさりをしてＧ４の元へと戻っていく。

『Ｇ３は以前にも増して武装が強化されているようだ』

「アイツを止めるにはどうすりゃいい？」

『動力部を狙う、攻撃を一点に集中させる。　行くぞ、晶』

「ああ、わかった！」

晶が力強く返事をした途端、ゼノフラムはガトリングを放ちながらＧ４の元へと急降下していく。
続いて晶はブラックホークを構えて、Ｇ４の動力部を狙おうとした。
その途端――危険察知が作動する。

突如、群青色のＨＡがι・ブレードに襲い掛かってきたのだ。
形状はレブルペイン……だが、ところどころカスタマイズされているように見える。
ガキィィィンッ！！　晶は咄嗟にムラクモで、レブルペインの一撃を受け止めた。
レブルペインはブーストを噴かせ、容赦なくι・ブレードを押し出そうとする。

「クッ……邪魔を、するなっ！！」

晶はグッとスロットルを押し込むと、ι・ブレードはその場に強く留まり、何とかレブルペインを弾き飛ばして見せた。
同時に――コックピットから青い光が発せられる。
次の瞬間レブルペインからグレネードが投げ込まれた。

「なっ――」

ズガァァァンッ！！　ι・ブレードは爆発に巻き込まれ、地上へと突き落とされた。
幸い上手く着地できたおかげで、機体の損傷は避けられた。
ズキンッ……またしても頭痛が襲い掛かり、レブルペインがサーベルで仕掛けてくる。
晶は後退し、ブラックホークをレブルペインに向けて数発放つ。
だが、レブルペインは軽々とブラックホークの弾を避けて距離を詰めていった。

『……少しは出来るようになったんですね』

「その、声は――」

ガキィィンッ！！　晶はムラクモで、レブルペインの一撃を受け止めた。

「シラナギさんっ！！」

『また逢っちゃいましたねー、元気にしてますかー？』

「木葉を返せよ……何で、攫ったんだっ！！」

『言ったはずですよ、貴方に木葉ちゃんを任せる事はできませんと』

「ふざけるなよ……守りたい気持ちは同じだろうがっ！！」

『違います、晶くんはただ……ひたすら木葉ちゃんを、傷つけているだけですっ！』

レブルペインはι・ブレードを弾き飛ばし、背後へと回り込んだ。

危険察知で先を読んだ晶は必死で一撃を受け止めようとするが、呆気なくレブルペインから一撃をもらってしまう。
ガァァンッ！　強い衝撃がコックピット内へと襲い掛かった。

「シラナギさん……クソ、俺は……俺はぁぁっ！！」

自分の知るシラナギは、もうそこにはいない。
今目の前にいるのは、メシアの敵……メシアを裏切った『シラナギ』なのだ。
晶は自分に強く言い聞かせ、戦う事を覚悟した――

『G』の再来　？

戦場では、フィミアの死を悲しむ暇すらない。
トリッドエールが自爆した後も、アヴェンジャーの侵攻が収まる事はなかった。
数は増していき、アヴェンジャーの部隊から巨大な戦艦までも姿を現し、とてもじゃないがフリーアイゼンだけではここを守りきることが難しい状況だ。
更に絶望的な知らせを受けたのは、かつてメシア中を恐怖に陥れた『G3』の再来。
ラティアは直接G3と戦闘を行った事はないが、その脅威は十分に知っている。

「……シリア、貴方は戻るのよ」

『何言ってんだよ姉貴、アタシはまだ戦えるっ！』

「ダメよ、今のレビンフラックスでは戦闘継続は難しいわ。片腕を失い、変形が出来ない状態で何をしようというの？」

『変形なんてなくても大丈夫さ、片腕を失った程度で引き下がってられないだろ？』

「G3のサマールプラントの餌食になるだけよ、お願いだから――」

『嫌だねっ！』

ラティアは必死で艦に戻るようシリアを説得した。

このまま無茶な事を続ければ、またあの時のような悲劇が起こる可能性だってある。
混乱した戦場で、更にG3という脅威のHAまで姿を現した以上、シリアを向かわせるわけには行かない。
だが、シリアは頑なにラティアの言う事を聞かなかった。

「シリア、貴方もわかっているでしょう？　E．B．Bと常に命を懸けて戦ってきた貴方が――」

『わかってる……命の重みはわかってるよ、姉貴。　……悔しいんだ、あのパイロットを救えなかったのがっ！』

「シリア……？」

シリアは悔しかった。
仮にもフィミアに命を狙われ続けていたが、最後の最後に分かり合えた。
なのに、フィミアの取った選択はあまりにもむごくて残酷な結末だったのだ。

『アイツが歪んだのは、アヴェンジャーのせいだっ！　アイツにHAを与えなければ、もっとまともな人生送ってたかもしれないだろっ！？』

「……シリア、悔しい気持ちはわかるわ。　だからこそ、冷静になって……貴方は機体を万全な状態に戻して、また戦場に出てくればいいだけのはずよ。
ここで感情に身を任せて無謀な行為を重ねて、貴方が命を落としたら誰が悲しむと思っているの？」

『っ！？　そ、それは……』

「戻るのよ、シリア。　その代わり、ちゃんと整備が終わったら私を助けて頂戴。　それで、いいわね？」

『……わ、わかったよ、姉貴』

ようやくシリアが思い留まってくれて、ラティアは胸を撫で下ろした。

これ以上、敵にも味方にも犠牲者を出すわけには行かない。

一刻も早くこの戦闘を終わらせる、その為にも敵の主力である『G3』を止める必要があった。

「いくわよ、ブレイアス……っ！」

ラティアはG3の元へと向けて、ブレイアスを全速力で前進させていった。

シリアはフリーアイゼンへ一度帰還しようと、一度戦線を離脱しようとした。

頭の中では、何度も何度もフィミアが自らのコアを突き刺す光景が繰り返し流れ続ける。

だが、不思議と恐怖といった感情は抱かない。

悲しかった、悔しかった。

救えると思ったのに、逆に追い込んでしまったこと。

もっと早く気づいて上げられれば、救えたかもしれないという後悔。
同時に、怒りという感情も込み上がって来ていた。
アヴェンジャーは、あんなに追い込まれている少女すらも兵力として扱う非情な組織だ。
他にもあのようなパイロットがいるかと思うと、思わずシリアは怒りを覚えていた。
許せない、絶対にアヴェンジャーを……ここで叩き潰す。
それが、死んでいったフィミアの為になると信じて。

「あれは……？」

上空を飛び続けていると、ふと地上から見えた巨大な武器に目が留まった。
……トリッドエールが持っていた、『ブライトソード』だ。
恐らくあの爆発で、遠くまで飛ばされてきたのだろう。
しかし、大剣自体は無傷でまだまだ使えそうには見える。
シリアはあの大剣に苦しまされ続け、レビンフラックスのサーベルが2度にも渡り折られ、更には左腕まで切り落としたほどの凄まじい剣だ。
ブライトサーベルならば、G3の凄まじい装甲にも……対抗できるのではないか？

「……姉貴、ごめん」

シリアは地上へと降り立ち、ブライトソードの前に立つ。
レビンフラックスが退いた先に、まるで待ち構えていたかのように刺さっていた大剣。
ただの偶然だとは思うが、シリアはそうは感じない。
晶やゼノス、そして実の姉がG3と戦おうとしているのに……自分だけ戦線を離脱しようとしている。

本当にそれでいいのか、退く事が正しくないとは言わない。
だが、その間に仲間がやられてしまったら――
気が付いたらシリアは、ブライトソードを手にしていた。

「やっぱりアタシ、退けねぇや……アイツの形見、使わせてもらうぞ」

レビンフラックスは、片手にブライトソードを握りしめながら……
前線へと向けて飛び立った――

Ｇ４の猛攻は続いた。
無数に出現する2種類のサマールプラントによって数多くのＨＡが犠牲になっていく。
巨体でありながらも、ゼノフラムはガトリングを駆使して何とかサマールプラントから逃れる事は出来ているが、状況は芳しくない。
ι・ブレードがいればサマールプラントを引き付けてもらう事も出来たが、謎のレブルペインの襲撃により一時的に戦線を離脱してしまっていた。

『ゼノス、貴様らに勝ち目はない。　俺達は貴様の想像を超える力を手にしている、数多くの兵を抱えているメシアでも……もはや俺達は止める事は敵わないぞ』

「たかがアイゼン級の戦艦一つも落とせずによく言う……その程度

の力で、俺達に勝ったつもりか？」

『減らず口をっ！！』

Ｇ４から無数のサマールプラントが、再び出現した。
ゼノスは振り切ろうとブーストハンマーを空に向けて撃ち上げる。
ゼノフラムを取り囲むように集ってきたサマールプラントを、ガトリングで撃ち落しながらＧ４本体へと徐々に距離を縮めて行った。

「メシアの崩壊は世界の崩壊を招く、お前達にメシアの代わりは務まらん」

『ほう、腐ったメシアを目の当たりにしたとは思えない言葉だな。
貴様はこの５年間、一体何を見てきたというのだっ！！』

バァンッ！！　Ｇ４から２連キャノン砲が発射されると、ゼノフラムに直撃した。
強い衝撃がコックピットまでに伝わり、機体は一気にバランスを崩し地へと叩き落される。
ズガァァァンッ！　と地響きを起こしながらも、ゼノフラムは何とか無傷で地上へと降り立った。

「メシアは、Ｅ．Ｂ．Ｂの脅威から人類を守ってきた。　世界の為に、自らの命を懸けて戦い続けている」

『だが、アッシュベルのようなクズ野郎がいるのも事実だっ！　奴がいる限り、メシアは腐り続ける……だから、俺達が腐る前に全てをぶち壊してやると言っているんだっ！！』

Ｇ４の手の砲台から、鋭いサマールプラントが飛び出した。

やむを得ずゼノフラムは腕で防ごうとすると、ガガガガッ！　と、ドリルで削られていくかのような音が響き渡る。
ゼノフラムの左腕が徐々にサマールプラントにより抉られていった。

「復讐心に身を任せ、世界を破壊したところが何が残る？　お前は、救われるのか？」

『救いだと？　くだらねぇ……そんな幻想、とうに求めてねぇんだよっ！！
俺達に残ったのはアッシュベル……メシア……世界への復讐心だけなんだよぉぉっ！！』

ガジェロスの叫びと共に、無数のサマールプラントが一斉にゼノフラムへと向かって襲い掛かった。

『下がって、ゼノスっ！』

「……っ！」

ゼノスは通信を確認すると、ゼノフラムを全力で後退させた。
その背後から、ブレイアスがゼノフラムを飛び越え、空高く舞い上がっていく。
両手に握りしめた二丁銃を構え、目にも留まらぬ早撃ちで全てのサマールプラントを撃ち落して見せた。
更に今度は二つのレールガンを手にし、Ｇ４へと向けて構える。

『貴方、邪魔よ』

バシュゥゥンッ！！　ほぼ同時に、二つのレールガンが一斉に発射された。

ガァァンッ！　激しい衝突音が響き渡るが、Ｇ４は両肩から煙を噴き出すだけで傷を何一つ負っていない。
ゼノスはその隙を狙い、スロットルを全力で押し込んだ。
土煙を上げながら、地上に留まるＧ４の元へと向けて走り続ける。

「ラティア、奴のサマールプラントを引き付けてくれ」

『あら、相変わらず人使い荒いのね』

Ｇ４から再びサマールプラントが発射されると、ブレイアスが空高く飛び上がり、上手くサマールプラントを引き寄せた。
その隙を狙い、ゼノスはブーストハンマーを射出させようと構える。

『鬱陶しいハエが……調子に乗んじゃねぇぞっ！！』

その瞬間、Ｇ４の左腕が凄まじい速度でブレイアスへと向けて発射された。

「なっ――」

どうやら腕自身にもサマールプラントがついていたようだ。
細い管のようなものが本体と腕の間に繋がれている。
左腕からは一斉にサマールプラントが飛び出し、あっという間にブレイアスは拘束されてしまった。
やむを得ずゼノスはガトリングを、Ｇ４の伸びた腕へと向け、発射させた。
だが、凄まじい速度で腕は引き戻されていき、ガトリングは虚しくも空へと向かっていく。
気が付いたら、ブレイアスを捕えたＧ４の姿が目の前にあった。

『……捕まってしまったようね、私に構わないでいいわ。　貴方は、Ｇ４を破壊する事だけを考えて』

「……」

ラティアが通信でそう告げたが、ゼノスは何も答えなかった。

『ククク……ゼノス、流石に仲間を撃つ事はできねぇよなぁ？　テメェが抵抗しないで大人しく殺されてくれるんなら、仲間には手を出さない事を約束する……さあ、どうする？』

「……ガジェロス、貴様は何処まで落ちれば気が済む？」

『落ちているのは貴様も同じだろうがっ！　仲間を裏切り、メシアに染まった貴様は何が変わった？　ただの、メシアの犬に成り下がっただけにすぎねぇだろうがっ！』

「メシアは、世界の明るい未来の為に戦い続けている。　最初から自分の未来に絶望している貴様とは、違う」

ゼノスはガトリングをＧ４へと向けて、そう告げた。

『仲間を、見捨てるという事でいいな？』

「俺は、誰も見捨てない」

『何……？』

その時、上空から凄まじい速度で降り立つ機体が横切った。

巨大な剣を片手に、Ｇ４の元へと全速力で駆け出していく。

そこに現れたのは、片腕を失ったレビンフラックスだった。

『姉貴を、放せぇぇぇぇっ！！！』

キュィィィンッ！　刃を超振動させたブライトソードが、容赦なくＧ４の腕へと襲い掛かる。

ガガガガッ！　と削れる音が響き渡った。

『だぁぁぁぁぁっ！！』

片腕でありながらも、レビンフラックスは全力で剣を抑えつけ出力を限界まで引き上げた。

バシュゥゥンッ！　激しい金属音と共に、Ｇ４の左腕が綺麗に斬り落とされた。

その瞬間を狙い、ゼノスはブレイアスを拘束しているサマールプラントへと向けてガトリングを放つと、ブレイアスは無事解放された。

『シリア？　どうして貴方がっ！？』

『ごめん姉貴……やっぱりアタシ――』

「よそ見をするな、来るぞっ！」

Ｇ４は無数のサマールプラントが飛び出すと同時に、巨大な槍を片手にレビンフラックスへと向けて迫って来ていた。

それに気づいたシリアは上空へと逃げ出そうとするが、先程の戦闘の影響か機体のバランスが思うように取れない。

『テメェ……よくもＧ４の腕をっ！！』

襲い掛かってくるサマールプラントをブライトソードで切り裂いていく。
その隙を狙い、Ｇ４が狙いを定めて槍をぶん投げた。
凄まじい速度で飛ばされた槍は、真っ直ぐとレビンフラックスへと向けて突き進んでいく。
バァァンッ！！　上空から、青き閃光が走った。
ブレイアスが槍へと向かって、レールガンを放っていた。
強引に軌道を変えられた槍は、虚しくも地上へと向かい深く突き刺さっていく。

『姉貴……悪い、助かったっ！』

『……もう、本当に無茶ばかりするんだから』

『貴様らぁぁっ！！』

ガジェロスの怒りに満ちた叫びが響き渡った。
同時に。Ｇ４の額から赤い光が徐々に集っていく。

「ラティア、今だっ！　額を狙えっ！」

『額？　あれぐらい楽勝よ』

Ｇ４の額から発射された赤い光、あれは明らかに圧縮砲そのものだろう。
恐らくフラムの技術がそのまま使われているはずだ。
ゼノスは知っている、あの兵器を実装する機体のリスクを。
ただでさえ不安定な圧縮砲のエネルギー源が、剥き出しになっている状況はどれ程危険であるかを。
ラティアはレールガンをスナイパーライフルへと切り替え、照準を

合わせた。
狙いはＧ４の額に輝く鉱石――
だが、Ｇ４の二連キャノン砲がブレイアスへと向けられ……発射された。

「ラティアっ！！」

『クッ……っ！』

やむを得ず、ラティアは後退して砲撃を避ける。
それと同時に、Ｇ４の圧縮砲のエネルギーチャージが完了してしまった。

『テメェらまとめて、吹き飛ばしてやる……地獄へ落ちろぉぉぉっ！！』

ズガァァァァンッ！！　激しい爆音と共に、赤い閃光が地上を走っていく。
地は次々と抉られ、草木や建物が空へと舞い粉々になっていった。
圧縮砲の発射が終えた後は、Ｇ４の目の前からは３機のＨＡの姿が消えていた。

『そこに隠れているのはわかっているぞ、ゼノスっ！！』

Ｇ４の背後には、ブーストハンマーで圧縮砲から逃れたゼノフラムの姿があった。
右腕が凄まじい速度で発射され、無数のサマールプラントがグルグルとゼノフラムを拘束していく。
巨体であるにも関わらず、Ｇ４はゼノフラムを軽々と引き寄せてみてた。

『捕えたぞ、ゼノフラム』

「……」

ゼノスは強引にブーストハンマーを発射させ、Ｇ４から離れようと試みる。

だが、Ｇ４のサマールプラントによりブーストハンマーの鎖が引き裂かれ、ブーストハンマーは独りでに宙へと舞い上がってしまった。

『この距離ならば、貴様に成す術はあるまい。　悪いが、消えてもらうぞ』

Ｇ４の額から、再び光が集っていった。

この距離で圧縮砲を発射して、ゼノフラムを確実にしとめようと考えているのだろう。

ゼノフラムの圧縮砲は間に合わない、ミサイルは既に弾数が尽きている。

頼りのブーストハンマーも鎖を切られてしまい、ガトリングもＧ４相手ではあまり効果を示さない。

直接格闘戦を挑もうにも、拘束されている状態では身動きを取ることが出来なかった。

ならば――と、ラティア機の位置を確認すると、ブレイアスはスナイパーライフルを構え狙いを定めていた。

しかし――突如、襲い掛かったサマールプラントにより、ブレイアスはまたしても後退を余儀なくされる。

同様に近づこうとしているレビンフラックスも、サマールプラントの防衛網を突破できずにいた。

『頼りの仲間も、テメェを助ける事ができねぇみたいだぜ？　さあ

どうすんだ、ゼノス……命乞いでも、してみるか？』

「……」

こうしている間にもＧ４から光は集っていき、圧縮砲のエネルギー充電は確実に進んでいた。

いくらゼノフラムが頑丈と言えど、あの一撃を受けてしまえば無事であるはずがない。

ゼノスは無言のまま、ただコックピット越しからＧ４の姿を睨み付けるだけだった。

『G』の再来　？

アヴェンジャーの戦艦内。
ブリッジルームには数名のクルーが存在していた。
同じ服を身に纏い、表情一つ変えずに黙々と作業を進めている光景は何処か不気味さが漂う。
モニターには戦況が映し出されていた。
各地における激しい戦い、分布図、被害状況等……全てジエンスが監視をし、的確な指示を送り続けている。

「メシアの限界が、そろそろ見えてきたようですね」

徐々に優勢になっていくのを確認すると、ジエンスはそう呟いた。

「これ以上奴らが抵抗しないよう……圧倒的な力の差を、見せてあげましょう」

「システム稼働……パイロット共に異常はありません、いつでも出すことが出来ます」

クルーの一人がジエンスに応えるよう、そう告げるとジエンスは無言で頷いた。

「艦はそのまま進めてください……このままメシア本部へと、先行しましょう」

「了解です」

「ついにメシアが滅ぶ時が来ました。　この期に及んでもアッシュベルは姿を現さないとは、余程自分の身が大事なのでしょうね……。ですが、奴が身を隠せるのも時間の問題……いずれ私が頂点に立った時、貴方は私の前に引きずり出されることでしょう」

ジエンスは不気味に微笑んだ。
その笑顔にはいつものような、老人の優しい笑みはない。
本性を映し出すかのように、本心に満ちた笑いが浮かんでいた――

突如出現した巨大な戦艦とアヴェンジャーの兵器の数々。
更なる進化を遂げた『Ｇ４』の出現により、メシアの戦況は一気に悪化した。
フリーアイゼンとスカイウィッシュ部隊では戦線の維持が困難となる中、『Ｇ４』の侵攻を食い止めていたが
晶は群青色のレブルペインの襲撃により、『Ｇ４』から強引に遠ざけられてしまった。
Ｇ４の性能は以前よりも遥かに増しており、一筋縄でいく相手ではない。
メシアが生み出した悪夢は、再びこの手で封印しなければならないのだ。

目の前に立ちはだかるレブルペインは、サーベルを抜刀し両手に構えていた。
ι・ブレードの機動力と危険察知があれば、レブルペインから逃れる事は簡単にできるはずだ。
無理に戦う必要はない……晶は自分に強く言い聞かせていた。

『さてさて、ここならばガジェロスの邪魔にもなりませんし……思う存分戦えますよ』

「シラナギさん、Ｇ３……いや、Ｇ４の事を知らないはずないですよね？　貴方だって、あのＨＡがどれ程危険な存在かわかっているはずです……
それでも、アヴェンジャーを正しいというんですかっ！？」

『その悪夢の兵器は何処から生み出された物ですか？　根源は全てメシアにあります、だからこそメシアは……危険なんですよ』

「そんなの屁理屈ですよ、自分が都合のいいように解釈しているだけですっ！」

『そうかもしれませんね……ですがそれは、晶くんにだって言える事ですよ？』

「――っ！？」

自分が都合のいいように解釈――
咄嗟に口にした言葉ではあるが、シラナギの言う通りであった。
晶は、今までずっとそのようにして戦い続けてきたのだから。
無理やり自分を納得させて、自分の正しさを貫こうとι・ブレードと共に戦っていく。

晶の中の『正義』が、揺らいだ瞬間だった。
だが、同時に頭の中からふと、ゼノスの言葉が過ぎった。

考えるな、戦え。
迷ったら俺を頼れ。
お前の道を俺が示してやる。
だから、ついてこい。

ゼノスは道を示してくれた、迷っている晶の背中を押してくれた。
晶の中に、迷いはもうないはずだ。
自分の意志を貫くだけの強さを、もう手にしている。
昔の自分とは、もう違うはずだ――

「……うおおおぉぉっ！！」

ι・ブレードが凄まじい速度で突進すると同時に、ムラクモを抜刀した。
ガキィィィンッ！！　レブルペインのサーベルが、ι・ブレードの重い一撃を受け止めた。
ムラクモが弾かれると同時に、危険察知でレブルペインが一瞬にして間合いを詰めてくる映像が映し出される。
ι・ブレードは即座にブラックホークを二丁構えて、2発だけ放ち空高く飛び上がっていく。

『ようやく、その気になってくれましたか？』

だが、シラナギは予測をしていたのか待ち構えるかのようにレブルペインは上空に立ちはだかった。

「どけよっ！！」

同じようにι・ブレードは、ムラクモを抜刀した。
またしても金属音を響かせ、一撃が受け止められる。
ググッと晶は強引にムラクモでレブルペインを押し出そうと、スロットルを限界まで押し込んだ。

『ここは通しませんよ、どうしても通りたければ……貴方の強さを、私に示してください』

「俺の、強さ？」

『簡単な話ですよ、私と全力で戦って……勝てばいいんです』

ガァンッ！　その瞬間、レブルペインは一瞬にしてι・ブレードを突き放した。
グラリと視界が揺れ、晶は機体のバランスを取り戻した瞬間に危険察知が発動する。
ι・ブレードへと向けてグレネードが投げ込まれた。
晶は咄嗟にブラックホークで撃ち落そうとすると、コックピットが青く灯る。
レブルペインが上空から急降下をし、飛び蹴りを放った。
ガァンッ！！　コックピットに激しい衝撃が走る。
レブルペインの勢いが弱まることなく、そのまま加速を続け……ι・ブレードは地へと叩き付けられた。

「クッ……シラナギ、さん――」

『もう限界が来ちゃいましたか？　その程度の力で、木葉ちゃんを守れるはずありませんよー？』

「力、力ばかり言って……何なんだよ、力がどうしたってんだよっ！！」

晶はムラクモを力強く振るうも、レブルペインに軽々と避けられてしまう。

だが、晶は怯まずにブラックホークを二丁構えて数発レブルペインに向けて発砲した。

「シラナギさんに勝てば木葉を、メシアを守れる力があるっていうのか？　そうじゃないだろっ！？」

『そんな難しく考えないでくださいよ、私の望みはただ一つ……貴方との、決闘ですよ』

「け、決闘？」

『はい、フリーアイゼンの数々の危機を救ってきたエースの力、それを私に示してくださいって言うだけですよ』

「……シラナギ、さん？」

『うふふ、やっぱり血には逆らえないですね。　戦場で戦う貴方の姿を見てると、私の力がどれ程『ι・ブレード』に通用するか、試したくなるんですよ。

……どんなに綺麗事を並べても、私は戦う事が大好きなんですよ。

だから早く……貴方の本気を、見せてくださいよ。　そして本気になった貴方を、私が徹底的に潰してあげますから』

ゾクリ、と背筋に寒気が走った。

シラナギの言動や強さに恐怖を感じたわけではない。

同じような感覚を、つい先程感じ取った。
それは晶を圧倒的な力で落とそうと攻めてきた、あのレブルペイン……俊と戦うときと同じ感覚だ。
シラナギから放たれるプレッシャーと、俊と戦うときに感じたプレッシャーが見事に一致してしまった事に恐怖を感じた。
今目の前にいるシラナギは、もう晶の知るシラナギではない。

その時、コックピットが赤く灯った。
一回だけではない、晶から湧き上がる感情を察知したのか……或いは晶に語りかけているのか。
3，4度赤い光が、点滅するかのように光った。

「世界が再び混乱に陥るかもしれないって言うのに……何で、何でシラナギさん……アンタまでっ！！」

バギィンッ！！　その時、晶のブラックホークがレブルペインのサーベルを打ち砕いた。
晶の中から怒りという感情が、湧き上がっていた。
だが、不思議と冷静さを保っていられている。
コックピットの光から温もりを感じた。
まるでι・ブレードが、晶の怒りを宥めてくれているかとさえ錯覚してしまう。
いや、もしかすると事実なのだろう。

「アンタもアイツと同じなのかよ……人を見下し、自分の欲を満たす為に他人を平然と見捨て傷つけるっ！」

『うふふ、相変わらず純粋な子ですね。　そういうところ、大好きですよ？』

レブルペインは砕けたサーベルを捨てて、もう一本のサーベルを両手で構える。
バァンッ！　バァンッ！　晶はブラックホークをひたすら放ち続けた。
下手に接近をしてしまうと死角へ飛び込まれてしまう。
危険察知があると言えど、その特性を理解した者から見れば危険察知に攻撃を読ませる事さえ仕出かしてくる。
アヴェンジャーで今まで戦ってきたパイロット達は、そのような奴らばかりだ。
シラナギも例外ではない、性能面では劣っているはずのレブルペインでι・ブレードと渡り合えるほどの腕だ。
無闇に突っ込んで勝てるような相手ではない。

ブラックホークを放ち続ける中、カチッ……と、嫌な音が耳に飛び込んできた。
またしてもブラックホークの弾が切れてしまった。
その瞬間、レブルペインは一気に間合いを詰めて斬りかかってきた。
危険察知で見えてはいたが、決して映像の通りにはいかない。
晶は神経を尖らせ、レブルペインだけに集中した。
ガキィィンッ！　コックピットが青く灯ったのを察して、晶は何とかレブルペインの一撃を受け止めた。
同時に、ゾクリと背筋が凍りつくような感覚に襲われた。

「な、なんだ？」

思わず晶は手を止めて、周りを見渡す。
……それは、シラナギも同じだった。
戦場ではＨＡ同士による激しい戦いが繰り広げられている。
その上空を、一つの黒き巨大な戦艦が通り過ぎていく。
だが、注目すべきはそこではない。

巨大な戦艦から、何やら塔のような建物が戦場へと降ろされたのだ。
建物にしては妙だ、巨大ではあるが羽のような物に纏われおり、まるでその身を隠しているようにも見える。
ι・ブレードのコックピットが青く灯っていた。
何かを知らせようとしている。
晶が感じた寒気の正体は、あの巨大な塔みたいなものから感じられたのだろう。

『……あれは？　一体誰が――』

シラナギが言葉を漏らした途端、ふと巨大な建物の羽がその身を明かすかのようにゆっくりと開かれていった。
その羽は、まるで鳥が持つ翼のように美しく広げられた瞬間――晶は、ようやくそれが建物ではない事に気づいた。

「ＨＡ……なのか？　あれ、が？」

翼に隠されていたのは巨大な胴体に巨大な腕と明らかに人型をしたロボット。
何十門と設置されている砲台の数々、王冠をイメージさせるようなヘッド部の装飾にレブルペインのような赤き瞳。
突如戦場の降り立った建物の正体は、紛れもなくＨＡだった――

Ｇ４に捕らわれたゼノスは、窮地に立たされていた。

逃げる術を失ったゼノフラムの前には、今も尚エネルギーを充電し続けるＧ４の姿。
至近距離で圧縮砲を受けてしまえば、とてもじゃないで無事では済まされない。
戦艦の主砲と同等クラス、いや下手したらそれを上回る火力を目の当たりにしたゼノスには、少しずつ焦りが見え始めていた。
頼りのラティアもサマールプラントに捕まってしまい、文字通り自分しか頼れる者はいない。
まさに絶体絶命の状況に至っていた。

『ゼノス……貴様の悪運もここまでだ。　いくらテメェの体内にＥ．Ｂ．Ｂがあろうが、ゼノフラムの大爆発の中を何度生き残ったとしても……圧縮砲から逃れることはできねぇ。
ゼノフラムもろとも、テメェを焼き尽くしてやるよ』

「……」

『どうした、テメェでも恐怖を感じる事があるのか？　いつもみたいに言い返してみろよ……『俺は、諦めない』とかよぉっ！』

「その圧縮砲、フラムの技術をそのまま流用しているだろう。　アイツも鼻が高いだろうな、早速自分の技術が流用されたと今頃大喜びしているだろう」

『未乃　健三が言っていた、彼女はメシアが誇れる『天才』であるとな……だが残念だったな、メシア自らが生み出した新技術に……テメェは殺されてちまうんだからな』

「やはり未乃　健三が設計したか……しかし、圧縮砲の特性を知りながらも……何故そのような設計としたのか、考えていた」

『……何を言ってやがる？』

こうして話している間にも、圧縮砲のチャージは進められ続けている。

だが、ゼノスの表情からは不思議と焦りが消えていた。

「サマールプラントは複雑な設計な上に、胴体部では圧縮砲を実装する事が不可能だったのだろう……だからこそ、無理やり頭部にむき出しの状態で設置をした。

貴様の敗因は、その剥き出しにされた圧縮砲のエターナルブライトにある」

『敗因、だと？　笑わせるな……今更テメェに何ができるっていうんだ？』

「あるさ」

ニヤリと笑みを浮かべたゼノスは、コックピット内からバズーカを取り出し、コックピットのハッチを開いた。

その瞬間、ゼノスは俊敏な動きでバズーカを担ぎ外へと飛び出す。

圧縮砲の圧縮により凄まじい熱気と風が吹き荒れているが、パイロットスーツのおかげで何とか熱には耐えることが出来た。

あまり時間に余裕はない、ゼノスはコックピットからゼノフラムをよじ登っていき、Ｇ４のヘッド部を狙える位置へと移動する。

コックピットまでの退路を確保し、エネルギーの充電がされているヘッド部の圧縮砲へと向けた。

「フラムの技術を強引に取り付けたのが、仇となったな」

ゼノスはスコープ越しから狙いを定め、トリガーを引いた。
バシュゥンッ！　バズーカから発射された弾が、真っ直ぐと圧縮砲へと向けて飛ばされていく。
それを確認すると、ゼノスは俊敏な動きでコックピットへと向けて戻った。
カッ――
一瞬だけフラッシュのように白い光で視界が覆われた。
間に合ってくれ、ゼノスはそう願いながらコックピットへと飛び込んだ。

椅子へと飛び込み、ハッチを閉めた瞬間――ズガォァァァァァンッ！！　と、コックピットが激しく揺れる程の凄まじい爆発が引き起こされた。
圧縮砲は、エネルギーを充電している最中は荒ましいエネルギーが生み出される故に、外部から少しでも衝撃を受けてしまうとオーバーヒートを引き起こす危険性が高い武装だ。
フラムは長年に渡ってエネルギーを蓄積する方法を改良に改良を重ねて、ようやく実現されたのはゼノフラムの圧縮砲だ。
過去に起きた過ちを二度と起こさぬように、ゼノフラムに取り付けられた圧縮砲はある程度衝撃の対策がされている設計となっている。
故にコアとなるエターナルブライトを剥き出しにせずに、Ｅ・Ｂ・Ｂのようにまるでコアを隠すかのように内部へと取り込んでいた。
幸いＧ４の圧縮砲は急造だったせいか、そのような点が一切考慮されていない。
ＨＡのコックピットには故障等のあらゆる可能性を考慮し、対Ｅ・Ｂ・Ｂ用の兵器と非常食等といったものを用意する事が義務付けられていた。
ゼノフラムも例外ではない、対Ｅ・Ｂ・Ｂ用のバズーカやライフル、グレネードといった武装がコックピット内に用意されていた。
小型専用のバズーカと言えどエネルギー充電中に、外部から衝撃を

与えるには十分すぎた。
その結果、あの頑丈なＧ４は自ら取り付けた兵器により大爆発を引き起こした。

爆発に巻き込まれ、ゼノフラムのメインカメラが破損したのか、モニターの映像が途切れていた。
すぐにサブカメラに切り替えようとゼノスは操作を行う。
爆発によってゼノフラムを拘束していたサマールプラントは焼き尽くされていたが、ゼノフラム自身も無傷とはいかなかった。
何処が損傷しているかを把握すべく、チェックを始めるが……Ｇ４を前にしてそのような余裕はない。

『ゼノス……貴様ぁぁぁっ！！』

通信機からガジェロスの怒声が飛び込んできた。
再度モニターから映し出された映像は、既に半壊したＧ４の姿が映し出される。
だが、あの凄まじい耐久力を誇るＧ４の事だ。　まだ動くことはできるだろう。

「Ｇ４を捨てて投降しろ、命まで奪うつもりはない」

『テメェ……ふざけた真似をしやがって！！　またしても生身で、貴様はぁぁぁっ！！』

「コックピットに武装を常備させるのは常識だろう、それを知らないというのなら学生からやり直せ」

Ｇ４から無数のサマールプラントが飛び出し、ゼノスは回避しようと操縦桿を動かすが操作が効かなかった。

どうやら爆発によって制御系に異常をきたしたようだ。
ブーストハンマーも使えない中、強引な移動手段は行えない。
身動きが取れない状態のまま、ゼノスはガトリングでサマールプラントを撃ち落し続けた。
半壊したＧ４は土煙を起こし、巨大な槍を片手にゼノフラムの元へと突進を仕掛けてきた。

『貴様だけは落とすぞ、ゼノフラムっ！！』

ガトリングで応戦をしようとしたが、カチッと嫌な音が響く。
ついにガトリングの弾まで切れてしまった。
二連キャノン砲で捕えようとしたが、土煙のせいで上手く照準を捕えることが出来ずに徐々に距離を縮められていく。

「まだそこまで、動けるとはな」

もはや打つ手はないか、とゼノスは身構えた。
バシュゥンッ！！　その瞬間、目の前に青き閃光が走る。
突如Ｇ４から爆発が引き起こされ、動きが停止した。
ゼノフラムの背後には、レールガンを構えたブレイアスの姿があった。

『うおおおぉぉぉっ！！』

上空からレビンフラックスが舞い降り、ブライトソードでＧ４の片腕を切り落とす
だが、同時に無数のサマールプラントが飛び出しレビンフラックスを拘束した。

『鬱陶しいハエが余計な事をしやがって……っ！！』

『私の妹に、触れるなっ！！』

バシュンバシュンッ！　二丁のレールガンがサマールプラントを撃ちぬいたが、またしても無数のサマールプラントが飛び出しシリアは身動きが取れずにいた。

『サマールプラントがある限り……俺はまだ戦えるぞ、ゼノス』

「……クッ」

人質を取られた以上下手に手出しをすることもできない。
おまけに武装のほとんどを失ったゼノフラムに戦う術はほとんど残されていなかった。

『ゼノス、貴方大丈夫なの？』

「……すまん、もう動く事はできん」

『圧縮砲も、使えないの？』

ゼノスは出力を確認すると、ゼノフラムの負荷は極めて限界が近い。だが、上手く出力を制御すれば後一発は辛うじて放てるだろう。

「使える」

それだけ確認すると、ゼノスは簡潔に告げた。

『わかったわ……なら、私があの子を救い出す。　そしたら、貴方がＧ４にとどめを刺して』

「……了解」

今はラティアを信じよう、ゼノスはＧ４の動きに注意しつつ圧縮砲のエネルギーチャージを開始させようとする。
その瞬間、突如辺りが黒い影に覆われた。
ふと、ゼノスは寒気のようなものを感じ取った。
上空を確認すると、先程見た黒き巨大な戦艦が通り過ぎている。
戦艦からは、真っ白な巨塔のようなものが降ろされた。

『あれは……？　まさか、あのＨＡ――』

「ＨＡ、だと？」

ガジェロスが、確かに言った。
あの羽に覆われた巨大な塔のような建物を、ＨＡと。
しかしＨＡにしてはサイズが大きすぎる。
ゼノフラムよりも遥かに巨大なＨＡは、まさに異様な存在感を放っていた。
Ｇ４が現れた時とは比較できない程のプレッシャーを感じ取った。
あれが……アヴェンジャーの切り札なのだろうか。
巨大なＨＡは着地をした途端、その身に纏っていた翼を開き始める。
美しい鳥のように広げられた翼の下からは、まさにＨＡだという事を証明するかのような人型兵器を姿を現した。

『ゼノス、テメェらにもう勝ち目はねぇ。　女王が降臨した以上、メシアは確実に滅ぶぞ』

「女王……あのＨＡの事か？」

『Ｇ４とは比較にならねぇ……最強にして最悪の兵器を、ついに奴は解放しやがったな』

「……」

ゼノスは、目の前に聳え立つ巨大なＨＡを見上げた。
ヘッド部に潜むレブルペインのような赤い瞳を目にして、思わず背筋に寒気が走る。

「最強にして、最悪の兵器……これがアヴェンジャーの、切り札……？」

巨大なＨＡの登場により、戦場が一時的に静粛に支配される。
翼を持つ女王の降臨に、誰もが驚きを隠せなかった。

第１９話　翼を持つ女王　？

アヴェンジャー施設の地下に、地下通路が存在した。
全体的に広い作りになっており、ＨＡ１機ぐらいなら自由に行き来がする事が出来る程の広さだ。
薄汚れてはいるが、造りを見る限り近年の技術が使われていることがわかる。
通路には延々とライトに照らされており、人の手によって整備はされているようだ。
所々に扉のようなものが見受けられ、恐らくアヴェンジャー地下施設のように別の施設へ繋がっている可能性は高い。
そんな巨大な通路を、アッシュベルは車を使って移動をしていた。

「そんなに気になるかね、この地下通路の存在が」

「……」

助手席で静かにしている健三に対して、アッシュベルが尋ねた。
健三は特に体を拘束されてはおらず、逃げようと思えばいつでも逃げれる状態だ。
しかし、健三はアッシュベルに黙って従っていた。
何故ならこの男から逃れる事は不可能だと、十分に思い知らされているのだから。

「この通路はメシアの各施設に繋がっているのだよ、私の優秀な協力者がすぐに用意をしてくれた。
勿論、メシアもアヴェンジャーもこの通路の存在には気づいてはいないようだがね……君もそうなのだろう？」

アッシュベルが語りかけるが、健三は何も答えなかった。

「ふむ、この話は君にとっては面白くない者だったようだね。　では、君が気になる話題を提供しようではないか」

アッシュベルは車のボタンを一つ押すと、設置されていたモニターから映像が出力された。

健三がモニターの映像を目にした途端、急遽表情を一変させる。

……そこには、メシアとアヴェンジャーの凄まじい戦いが映し出されていた。

自らが開発した兵器の数々、メシアやアヴェンジャーが独自で開発したＨＡ、そして……そこにはｉ・ブレードの姿もあった。

「戦場の中継だよ、これを見て君はどう思うかね？」

「これは――」

健三は衝撃にあまりに思わず言葉を漏らしてしまった。

メシアとアヴェンジャーの激しい争いが行われている中、突如巨大なＨＡが姿を現したのだ。

まさか、こんなにも早い段階で『女王』が使われる事になろうとは――

「愚かしいと思わんかね、人々はＥ．Ｂ．Ｂという人類の脅威を前にしても……己の正義の為に例え人同士でも争いを行う。

互いが自分の正義を貫き、強大な力で相手を圧倒しようと戦い続け、大勢の人がその命を散らしていく……奴らは歴史から学習しない、愚かなバカ共だよ」

「……これが、私のしようとしたことなのか？」

健三は嘆き、苦しんだ。

打倒アッシュベルを目指し、ι・ブレードを始めとした対アッシュベルに関する兵器開発。

開発段階でも自分がどれ程恐ろしい物を開発しようとしていたかは理解していた。

だが、これ程の圧倒的な力がなければメシア本部に立ち向かう事は不可能だったのだ。

多少の犠牲はやむを得ない、そうやって健三は自分自身を説得し続けていた。

息子である晶と再会するまでは――

「ほう、君は過ちに気づいたかね。　だが、もう遅い……君は力を持ちすぎたのだよ、世界を揺るがすほどの大きな力をね。

くだらない、実にくだらない。　人類同士で争い、強大な力をぶつけ合って手にした世界が、本当に正しいのかね？

人類は争いを繰り返しながら成長していくと、彼らはそんな風に考えているのかね？　だとしたら愚か、愚かだよ。

実に愚かしい、ああ……忌々しい奴らだ、彼らはそんなに戦争をしたいのかね？　やはり人類は私の想像以上に腐っていたよ。

もはや滅びを迎えるのは必然なのだよ……君にはわかるかね、健三君」

「……メシアもアヴェンジャーも、確かに貴様の言う通りに戦争行為を行っているだけだ。

だが、晶は違う。　あの子は純粋に、今の世界を信じて戦っている。

メシアが正義と信じ、Ｅ．Ｂ．Ｂという脅威から世界を守る為に立ち上がったっ！」

「君はもう少し賢いと思っていたのだがね……やはり愚かな人類の一人ということなのだな」

「争いの火種を生み出した貴様に、人類を愚かしいという資格はない……だが、これでハッキリした。滅ぶべきはメシアではない、我々アヴェンジャーだっ！」

「ほう？　君はそうも簡単に組織を裏切るというのかね？」

健三は隠し持っていた銃を素早く取り出し、カチャリとアッシュベルの蟀谷に銃を突きつけた。

「貴様をこの手で葬れば、アヴェンジャーが戦う必要もなくなる……メシアも滅ばず、世界も変わらずに済むという事だ」

「……なるほど、君の考えは理解したよ。　だが、君は一つだけ見落としている事がある」

「見落としだと？」

キィィィィッ！！　アッシュベルがそう呟いた途端、突如車はブレーキ音を響かせて止まった。

ガクンッと車内が揺れて体が吹き飛ばされそうになるがシートベルトで抑えられた。

「私は自分の目標を果たすまでは、死ぬことが出来ない体なのだよ。残念ながら、君達の願いとやらは一生叶わずに終わる――」

バァンッ！　次の瞬間、健三は引き金を引いた。

だが、銃口はアッシュベルの頭を貫く事がなかった。

メキメキ、と音を立てながら腕が強引に持ち上げられている。
恐らく健三の腕は何本か折れてしまっているだろう。
アッシュベルは片手で健三の腕を捻り上げながら、高らかに笑った。

「……なぁに、命までは取らんよ。　君には喋ってもらわなければ行けない事もあるのだからな」

「――クッ、アッシュベル……っ！！」

まさか、この男までもがジエンスと同じだというのか。
今の力は明らかに人の力を超えている。
健三は自分の無力さを嘆いた。
アヴェンジャーに強大な力を与えてしまい、ジエンスの野望を阻止できなかった。
そして、アヴェンジャーの目的であるアッシュベルを前にしても何もできない自分をひたすら恨んだ。
モニターには虚しくも、メシアとアヴェンジャーによる激しい戦闘が流れ続けていた。

「さて、君は一体……『未乃　明菜』を、何処に隠したのかね？」

「――っ！？」

その言葉を耳にした瞬間、健三にまるで雷にでも当たったかのような衝撃が走った。

「その反応……やはり、私の予想は正しかったようだな」

「……アッシュベル、貴様まさか――」

「丁度戦場には君の玩具も全て揃っているようだからな……どれかに『当たり』が混じっているのは間違いないだろう。
ククク、この通路はメシア本部にまで繋がっているのだよ。　そこには君に見せたいものがたくさん隠されている、メシアのバカ共は何も知らないがね。
いいだろう、貴様が望むようにメシアを勝利へと導いてあげようではないか。　但し、それが元のメシアとは限らんがね」

不気味に微笑むアッシュベルからは、何処かジエンスと同じような恐怖を感じ取った。
彼が何を企んでいるかはわからない。
だが、健三の直感が告げていた。
何が何でも、アッシュベルを止めろと。
今の健三には、アッシュベルを止める術が何一つない。
こうしている間にもメシアとアヴェンジャーの戦いが繰り広げられ、世界はまさに混沌に陥ろうとしている。

こんな世界を、望んではずではない。
全ては、この男を止める為に動いてきた。
だが、何もできない。
生み出した兵器は悪用され、ジエンスの私利私欲の為に利用されアッシュベルを前にして、何もできずにただひれ伏すのみ。
自分は一体、何をしていたのだろうか。
何の為に、生きていたのだろうか。

「……晶――」

唯一、自らを裏切りιブレードを持ち去り、メシアにその身を置き戦い続けた息子の名を、呟いた。
もはや唯一の希望は、晶だけ。

息子に全てを託す時が、来たのだろう――

「ま、これ以上痛い目に逢いたくなければ大人しくしている事だ。
これでも加減はしているつもりだがね」

アッシュベルはようやく健三の手を解放した。
健三は力なく助手席に座ると、車は何事もなく発進していった。

ふと木葉は目を覚ますと、そこは薄暗く狭い場所だった。
どうやら何処かで眠らされて、今は椅子に座っているようだがこの暗さでは自分がどこにいるのかわからない。
木葉は意識をぼんやりとさせたまま、立ち上がろうとするが体が何かで固定されており席から立ち上がる事が出来なかった。
手探りで辺りを確認してみると、レバーのようなものやスイッチの数々といった物が近くにあるのはわかる。
木葉はますます自分が今何処にいるのかが理解できなかった。
その瞬間、突如ピピピという機械音と共に目の前から赤い光が灯る。
コックピットが明かりで照らされ、機械音が鳴り続ける中で駆動音が耳に飛び込んでくる。

「な、何？　何の音……？」

わけもわからず、木葉は辺りをキョロキョロさせると目の前に巨大なスクリーンがある事に気づいた。

そしてそこには見覚えのある操縦桿にスロットルレバー……まさかと思い振り返ると自分が座っている箇所は明らかにパイロット用シート。

「え、どうして……？　どうして私が？」

そんな事、有り得ない――ただの勘違いであってほしいと思っていた。

だが、それが事実だと思い知らされるのにはそこまで時間がかからなかった。

巨大なスクリーンに映像が映し出されると、そこには数多くのＨＡが激しい戦闘を行っている光景を目の当たりにした。

「な、何これ……皆、戦っているの……？」

ズキンッ――

突如、木葉は激しい頭痛に襲われた。

「痛い、あ、頭が――痛い、痛いっ――」

尋常ではない程の頭痛に襲われ、木葉は頭を両手で抑えながら苦しんでいた。

苦しみながら木葉はサブモニターに映し出された文字を目にする。

コアリンクシステム、作動中――と書かれていたが、木葉には何のことが理解できなかった。

『貴方の痛みは私の痛み』

「え……？」

頭痛に襲われている中、突如何処からともなく声が聞こえだす。
聞き覚えのない女性の声だ。

『君の苦しみは僕たちの苦しみさ』

『マスター、私と貴方は一心同体。　貴方が危険に晒されれば、私共が全力で貴方をお守りします』

『君は座って命令するだけでいい、動くのは君の分身である僕達だけでいいのさ』

「な、何……？　どうなっているの……さっきから私の中に、声が――」

今度は少年の声、少女の声と次々と色々な声が木葉の中に聞こえ始めてきた。

『マスター、ご命令を』

『早く早く、僕達を呼んでよ』

『皆貴方の為に働きたいと思っているのですよ』

「いや……やめて、やめてよ――」

頭痛と共に、声はひたすら木葉に向けて語りかけてくる。
マスターとは何のことなのか、それに声の主が何なのかもわからない。
木葉は何一つ理解できないまま、叫んだ。

「助けて……誰か、助けてよぉっ！！」

『――了解しました、貴方を助けます』

『マスターを守るぞ、僕たちの出番だ』

その時、コックピット内から赤い光が強く放たれた――

突如戦場に現れた巨大の翼を持つＨＡ。

しかし、ＨＡにしてはあまりにもサイズが大きすぎる。

通常の7，8倍からそれ以上の大きさを誇るＨＡの存在感は圧倒的だった。

ズキンッ――

突如、晶の頭が激しい頭痛に襲われる。

危険察知ではない……段々と頭痛が激しくなり始め、晶は思わず両手を頭で抱えて叫んだ。

だが、叫んだところで痛みが治まる事はない。

コックピットからは青い光が何度も灯っていた。

晶に危険を告げているのか、或いは何かを訴えているのか――

すると、突如青い光が赤い光に変化した。

同時に晶の頭痛が治まり、晶は両手を頭から離した。

『――――てよ――』

「……な、んだ？」

『――――けて――』

「声……通信、じゃない……これは――」

以前にも、同じような事を体験したことがある。
コックピット内から、誰かの声が聞こえた事があった。
明らかに通信機から聞こえる声とは違い、頭の中から直接響いてくるような不思議な声。
……以前と声の主が違うようだが、確かに晶に聞こえていた。

『助けて――』

「……この、は？」

今、晶の中にはっきりと届いた。
それは明らかに木葉の声だ。
助けを呼んでいる……だが、一体何処にいるのか？
ふと、晶はあの巨大なＨＡに目を向ける。
その瞬間、コックピットから赤い光が灯った。

「あの中に、いるのか？」

晶がそう呟くと、その問いに答えるかのようにコックピットから赤い光が灯された。

「……木葉――」

半信半疑ではあるが、晶は確かに木葉の声を感じ取った。
しかし、何故木葉があのような巨大ＨＡに乗っているというのか？
考えている時間はない、どちらにせよあのＨＡとは戦わなければならない。
もし本当に木葉が捕らわれているのならば――
この手で、救い出すしかない。

晶はスロットルレバーを握りしめた途端、危険察知が発動した。
シラナギのレベルペインが背後から斬りかかった瞬間だ。
即座に避けてι・ブレードはムラクモを構える。

『あらーダメですよ？　まだ戦いは終わってませんからね？』

「……シラナギさん、聞こえなかったのか？」

『聞こえた？』

「木葉の声が聞こえたんだ……今、確かに助けてって……」

『何を言っているんですか？　木葉ちゃんはここにはいませんよ』

「アンタには聞こえなかったのかよ……木葉の助けを呼ぶ声がっ！！」

『木葉ちゃんの声……？　まさか――』

そこでシラナギのレベルペインの動きが止まった。

何か心当たりがあるのか、或いは事態を受け入れられずに戸惑っているのか。
だが、シラナギが理解すればもう戦う必要がない。
少なくとも、今は互いに木葉を助けたいという思いは一緒なはずなのだから――

「俺は、シラナギさんが何と言おうと木葉を助けます。　だから、そこを通してくださいっ！」

『……駄目ですよ』

「なっ――」

晶はシラナギの返答に思わず言葉を失った。

『例え本当に木葉ちゃんがあの中にいたとしても、晶くんを向かわせたりはしません』

「何を言っているんだよ……確かに根拠はないかもしれないけど、あの中には木葉がいるんだっ！
シラナギさん、貴方は何か知っているんじゃないのかっ！？」

『……木葉ちゃんが持つ力とコアリンクシステムを考えれば、パイロットとして採用されてもおかしくありません。
だから、私は晶くんの推測が正しいと思います。　ですが……私の答えは変わりません』

「何だよそれ……わかっているのに、俺の邪魔をするのか？　意味わかんねぇよ……木葉があんなＨＡに乗っているんだぞ、何とも思わないのか？」

『思います、木葉ちゃんはきっと苦しんでいます……あの子は自らの意思でＨＡで戦うような子ではありません……手遅れになる前に、私も救いたいです。
ですが、やっぱり貴方を助けに向かわせたくはないんですよ。　だから……私が貴方を倒して、私が木葉ちゃんを救って見せます……だから、大人しくやられてください』

「ふざけんなよっ！！」

ガンッと、晶は強く操縦桿を叩いた。

「誰が救うだとか、そんなの関係ねぇだろうがっ！！　木葉が助けを求めているんだぞ……何でそれを邪魔しようとすんだよっ！？　アンタが助けに行ったっていいだろうが……一緒に助けに行ったって、いいんじゃねぇのかよっ！？」

『……言ったはずですよ、今の晶くんでは木葉ちゃんを傷つけるだけだと。　どうしても救いたいのであれば、私を倒してみてくださいよ』

『……そうか、わかったよ。　アンタ、戦いたいだけなんだろっ！？　木葉を守るだとかそんな事を建前にして、俺との戦いに決着をつけたいだけなんだろっ！？
ふざけんなよ……アンタまでアイツと同じ道を歩むってのか……俺は認めない、俺が知っているシラナギさんは……そんな人じゃないはずだぁぁぁっ！！！』

晶はスロットルを限界まで押し込んだ。
凄まじい勢いで突進していったι・ブレードは、ムラクモを抜刀し

てレブルペインを切り裂こうとする。
だが、間一髪のところでレブルペインのサーベルがムラクモの一撃を受け止めた。
ι・ブレードの勢いは収まらずに、徐々に推進力を上げてレブルペインを押し続ける。

「ι・ブレード……力を貸せっ！　俺はシラナギさんに勝たなければならない……あの人の間違いを正さなければならないんだっ！」

晶に声に応えるかのように、コックピットは赤く灯った。

『うふふ、それでいいんですよ晶くん……ただ、私も負ける気はありませんけどね』

「うおおおおおおおおっ！！」

バキィィンッ！　金属音と共に、レブルペインのサーベルが砕け散った。
だがその瞬間、レブルペインは瞬時に空へと逃げ込んだ。
晶はその隙を逃がすまいと猛スピードで空高く舞い上がる。
だが、そこで危険察知が発動した。
レブルペインがι・ブレードに向かいグレネードを投げ込んでくる瞬間だ。
すぐにブラックホークでグレネードを撃ち込んだが、爆発によって煙で視界が奪われてしまう。
その瞬間、コックピットが青く灯った。

「そこだぁぁぁっ！！」

晶はシラナギが来るだろうと、予測した時点に目掛けて……ムラク

モを開放した。
巨大な光の刃がシラナギのレブルペインに目掛けて襲い掛かったが、間一髪のところでレブルペインは晶の一撃を避けてしまう。

『私の勝ちですね、晶くんっ！』

一瞬にしてι・ブレードへの懐に回り込んだレブルペインは、サーベルを突き立てたまま突進を仕掛ける。
バシュンッ！！　次の瞬間、レブルペインのサーベルが一瞬にして真っ二つに切断された。

『なっ――』

バシュンバシュンッ――休む間もなく、ι・ブレードはムラクモでレブルペインの両足を切断。

「そこで、寝ていろぉぉぉっ！！！」

動きが止まったレブルペインに対して、綺麗に飛び蹴りを決めて地面へと叩き付けた。

「木葉は俺が救って見せる……あんな巨大なＨＡ、ムラクモでぶった斬ってやるよっ！！
だからシラナギさん……貴方はそこで俺の戦いを見ていてくださいっ！！」

レブルペインは既に、動く様子はなかった。
力が抜けたかのように両腕をだらんとさせて、地べたへと寝ころんだまま動かずにいる。
もう、戦えないだろうと晶は振り返りあの巨大なＨＡへと向かって

いった。

「……相変わらずの、甘い子ですねぇ。　私にとどめを刺さずに行っちゃうなんて」

コックピットからバチバチッと火花が散っている。
ヘルメットを破損しシラナギは大怪我を負っていたが、まだレブルペインは動けないわけではない。
シラナギは銃を構えて去っていくｲ・ブレードに向けた……が、トリガーを引かなかった。

「戦場で死にかけの兵を放置してても、他の敵兵にトドメをさされちゃうだけなんですよ？　全くもう、あの子の中途半端な優しさはホントダメですね」

少しだけ笑みを見せながら、一人で呟いた。

「でも、そういった優しいところだけは本当大好きなんですよ？木葉ちゃんだって晶くんのそういうところが大好きなんですからね？……しかし、私が負けちゃいましたか。　おかしいですね、本気で相手したはずだったんですけど」

ヘルメットを取り、シラナギはため息をつく。

「今の晶くんになら、何となく木葉ちゃんを任せられるかもしれませんね……私を倒したからには、しっかりと救ってくださいよ？」

シラナギは天に向かって、微笑んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8372v/

エターナルブライト

2012年1月5日01時51分発行